茨城県教育財団文化財調査報告第113集

牛久東下根特定土地区画整理事業
地内埋蔵文化財調査報告書

中下根遺跡
西ノ原遺跡
隼人山遺跡

平成8年6月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第113集

牛久東下根特定土地区画整理事業
地内埋蔵文化財調査報告書

中下根遺跡（なかしもね）
西ノ原遺跡（にしのはら）
隼人山遺跡（はやとやま）

平成8年6月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財団法人　茨城県教育財団

遺跡遠景（右から西ノ原遺跡，隼人山遺跡）

中下根・西ノ原・隼人山遺跡の出土遺物

序

茨城県南部の牛久市周辺地域には，国の首都圏整備計画による「つくば・土浦・牛久業務核都市構想」，茨城県による「グレーターつくば構想」等が計画されております。

住宅・都市整備公団では，県南地域における牛久市のもつ地理的条件を勘案し，JR常磐線新駅の設置や首都圏中央連絡道の建設等の広域交通拠点性を生かした整備を行い，新駅を中心とする，より広域的重要拠点としての業務機能並びに都市機能を備えた新都心の形成と，良好な居住環境を有する住宅の供給を行うための土地区画整理事業を進めております。

財団法人茨城県教育財団は，住宅・都市整備公団から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け，平成5年4月から平成7年9月にかけて発掘調査を実施してまいりました。

本書は，平成5年度から平成7年度に調査を実施した中下根遺跡，西ノ原遺跡及び隼人山遺跡の調査成果を収録したものであり，本書が学術的な資料としてはもとより，教育・文化の向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，委託者である住宅・都市整備公団よりいただいた多大な御協力に対し厚くお礼申し上げます。

また，茨城県教育委員会，牛久市教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導，御協力を賜りましたことに対し，衷心より感謝の意を表します。

平成8年6月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　橋　本　　昌

例　　言

1　本書は，住宅・都市整備公団の委託により，財団法人茨城県教育財団が，平成５年４月から平成７年９月まで発掘調査を実施した，茨城県牛久市に所在する中下根遺跡，西ノ原遺跡及び隼人山遺跡の発掘調査報告書である。

なお，３遺跡の所在地は次のとおりである。

中下根遺跡　　牛久市下根町字中下根1,557番地ほか

西ノ原遺跡　　牛久市下根町字西原1,504番地の29ほか

隼人山遺跡　　牛久市下根町字隼人山432番地の20ほか

2　中下根遺跡，西ノ原遺跡，隼人山遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		礒田　勇	昭和63年４月～平成７年３月
		橋本　昌	平成７年４月～
副理事長		角田芳夫	平成３年７月～平成６年３月
		小林秀文	平成６年４月～平成８年３月
		中島弘光	平成７年４月～
		齋藤佳郎	平成８年４月～
専務理事		中島弘光	平成５年４月～平成７年３月
常務理事		一木邦彦	平成７年４月～平成８年３月
		梅澤秀夫	平成８年４月～
事務局長		藤枝宣一	平成４年４月～平成７年３月
		齋藤紀彦	平成７年４月～平成８年３月
		小林隆郎	平成８年４月～
埋蔵文化財部長		安藏幸重	平成５年４月～平成８年３月
		沼田文夫	平成８年４月～
埋蔵文化財部長代理		河野佑司	平成６年４月～
企画管理課	課長	水飼敏夫	平成４年４月～平成８年３月
		小幡弘明	平成８年４月～
	課長代理	根本達夫	平成７年４月～(平成６年４月～平成７年３月係長)
	係長	清水　薫	平成８年４月～
	主任調査員	川井正一	平成５年４月～平成６年３月
	主任調査員	海老澤　稔	平成６年４月～平成８年３月
	主任調査員	小高五十二	平成８年４月～
	主事	杉山秀一	平成４年４月～平成６年３月
経理課	課長	小幡弘明	平成５年４月～平成８年３月
		河崎孝典	平成８年４月～
	主査	鈴木三郎	平成７年４月～平成８年３月(平成５年４月～平成７年３月課長代理)
		田所多佳男	平成８年４月～
	課長代理	大高春夫	平成７年４月～(平成６年４月～平成７年３月係長)
	主任	飯島康司	平成４年４月～平成６年３月
	主任	小池　孝	平成７年４月～
	主事	軍司浩作	平成５年４月～平成８年３月
		柳澤松雄	平成８年４月～
調査課	課長（部長兼務）	安藏幸重	平成５年４月～平成８年３月
		沼田文夫	平成８年４月～
	調査第二班長	小泉光正	平成５年４月～平成７年３月
	調査第一班長	川井正一	平成７年４月～平成７年９月
	主任調査員	緑川正實	平成５年４月～平成６年３月調査
	主任調査員	深谷憲二	平成５年４月～平成７年３月調査
	主任調査員	松浦　敏	平成６年４月～平成６年９月調査
	主任調査員	柴田博行	平成６年４月～平成７年９月調査
	主任調査員	渡辺幸雄	平成７年４月～平成７年９月調査
整理課	課長	山本静男	平成７年４月～
	主任調査員	深谷憲二	平成７年４月～平成８年３月整理・執筆・編集
	主任調査員	柴田博行	平成８年４月～平成８年６月整理・編集

3　本書に使用した記号等については，凡例を参照されたい。

4　本書の作成にあたり，須恵器について奈良教育委員会文化財保存課の木下亘氏から，石器について千葉県立中央博物館の橋本勝雄氏に御指導をいただいた。

5　西ノ原遺跡の土壌自然科学分析及び隼人山遺跡の炭化材樹種同定については，パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。分析結果は付章として報告する。

6　発掘調査及び整理に際して，御指導，御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

7　遺跡の概略

ふりがな	うしくひがししもねとくていとちくかくせいりじぎょうちないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	牛久東下根特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書
副書名	中下根遺跡・西ノ原遺跡・隼人山遺跡
巻次	
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第113集
編著者名	深谷　憲二　柴田　博行
編集機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310　茨城県水戸市見和１丁目356番地の２　　TEL 029(225)6587
発行年月日	1996(平成８)年６月30日

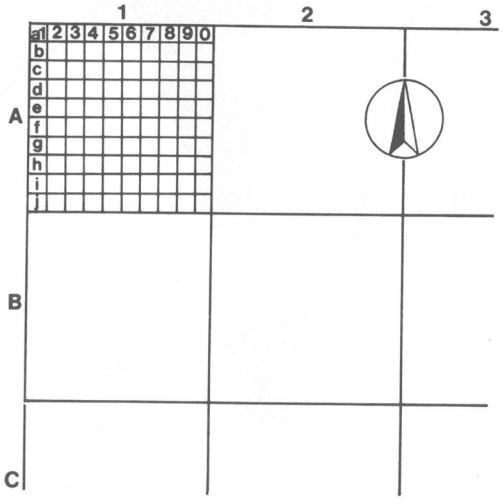
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
なかしもねいせき 中下根遺跡	いばらきけんうしくし 茨城県牛久市 しもねちょうあざなかしもね 下根町字中下根 1,557番地ほか	08219 -0149	36度 00分 08秒	140度 10分 05秒	19930401～ 19950930	23,369m²	牛久東下根特定土地区画整理事業に伴う調査
にしのはらいせき 西ノ原遺跡	いばらきけんうしくし 茨城県牛久市 しもねちょうあざにしはら 下根町字西原 1,504番地の29ほか	08219 -0150	36度 00分 23秒	140度 10分 16秒		13,227m²	
はやとやまいせき 隼人山遺跡	いばらきけんうしくし 茨城県牛久市 しもねちょうあざはやとやま 下根町字隼人山 432番地の20ほか	08219 -0151	36度 00分 38秒	140度 10分 02秒		16,481m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中下根遺跡	集落跡	縄文時代	陥し穴　9基		標高24m 隣接するヤツノ上遺跡，中久喜遺跡とともに古墳時代の大集落を形成する。
		古墳時代	竪穴住居跡　25軒 竪穴遺構　6基 土坑　1基	土師器，須恵器，土製品，石製品，ガラス玉 土師器 土師器	
		平安時代	竪穴住居跡　2軒 土坑　1基	土師器，須恵器 土師器	
		時期不明	土坑　156基 溝　1条	 土師器	
西ノ原遺跡	集落跡	旧石器時代	石器集中地点５か所	ナイフ形石器，ピエス・エスキーユ，剝片	標高24m 石器集中地点が確認され，石器が出土している。
		縄文時代	陥し穴　4基		
		古墳時代	竪穴住居跡　21軒 竪穴遺構　1基 土坑　4基	土師器 土師器 土師器，石製模造品	
		時期不明	土坑　37基 溝　1条	土師器，剝片	
隼人山遺跡	集落跡	縄文時代	陥し穴　8基		標高24m 線刻された紡錘車や臼玉が多量に出土している。
		古墳時代	竪穴住居跡　31軒 竪穴遺構　3基 土坑　2基	土師器，須恵器，土製品，石製品，鉄製品 土師器 土師器	
		平安時代	竪穴住居跡　1軒	須恵器	
		時期不明	土坑　91基 溝　1条	 土師器片	

凡　　例

1　中下根遺跡・西ノ原遺跡・隼人山遺跡の発掘調査を実施するにあたり，遺跡及び遺構の位置を明確にするために調査区を設定した。調査区は日本平面直角座標第IX系座標を用いて区画し，X軸(南北)920m，Y軸　(東西)30,000mの交点を基準点($A1_{a1}$)とした。

大調査区は，この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西，南北に各々十等分し，4m四方の小調査区を設定した。大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C…，西から東へ1，2，3…とし，その組み合わせで「A1区」，「B2区」のように呼称した。さらに，小調査区も同様に北から南へa，b，c…j，西から東へ1，2，3と小文字を付し，名称は，大調査区の名称を冠し，「$A1_{a1}$区」，「$B2_{b2}$区」のように呼称した。



第1図　調査区呼称方法概念図

2　遺構，遺物，土層に使用した記号は，次のとおりである。

遺構　　住居跡－ＳＩ　竪穴遺構－ＳＸ　土坑－ＳＫ　溝－ＳＤ

遺物　　土器－Ｐ　　土製品－ＤＰ　　石器・石製品－Ｑ　　古銭・金属製品－Ｍ　拓本土器－ＴＰ

土層　　撹乱－Ｋ

3　遺構及び遺物の実測図中の表示

＝炉　＝粘土　＝赤彩土器　＝黒色処理　＝焼土

●＝土器　　□＝石器・石製品　　△＝金属製品　　○＝土製品

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

5　遺構・遺物実測図の作成方法と掲載方法については，以下のとおりである。

(1)　各遺構の実測図は，60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2)　遺物は，原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり，それらについては個々にＳ＝1／6等と表示した。

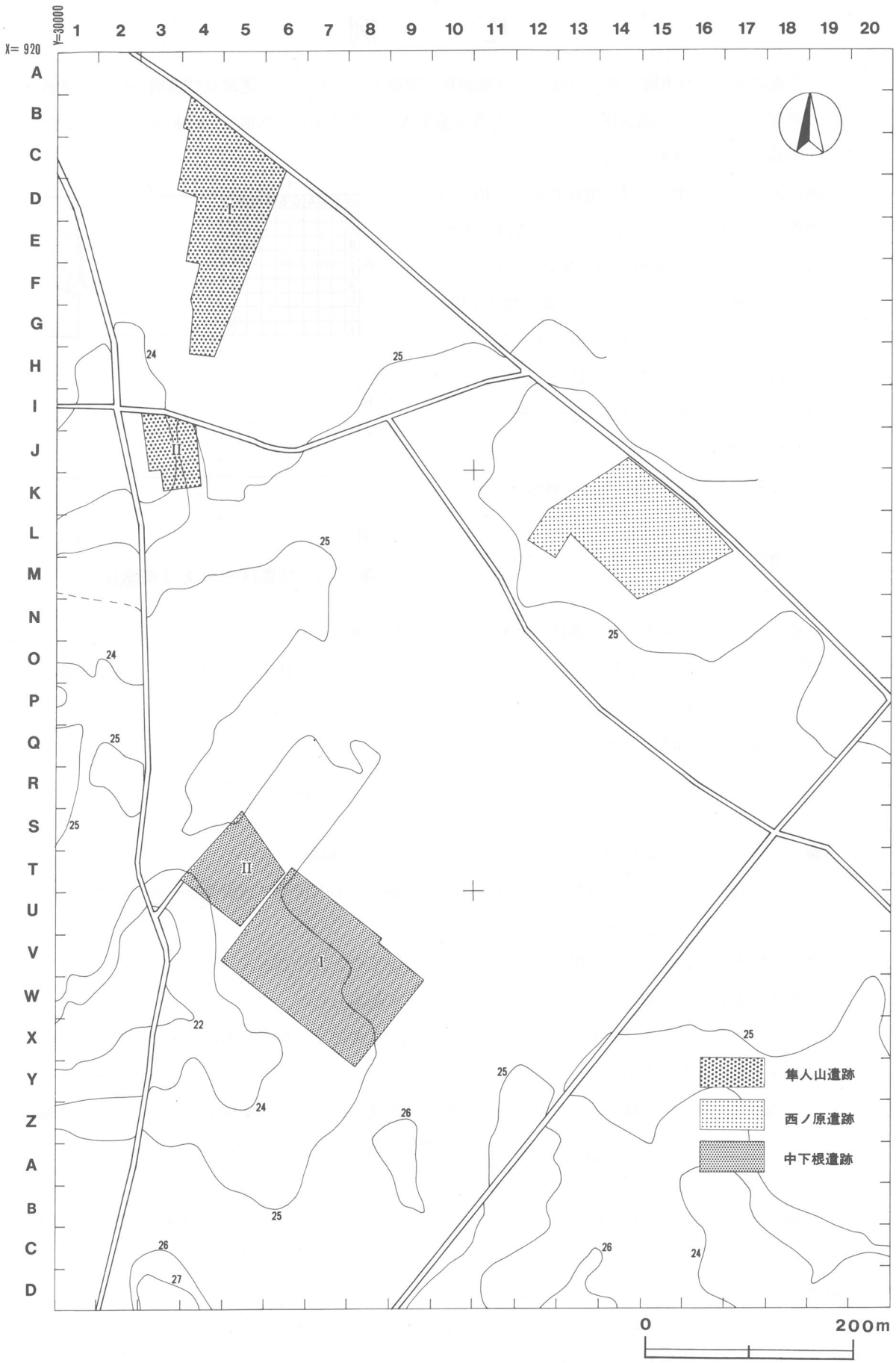
(3)　「主軸方向」は，炉・竈を通る軸線を主軸あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とし，その主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。(例　N－10°－E　N－10°－W)

なお，[　　] を付したものは推定である。

(4)　計測値は，A－口径　B－器高　C－底径　D－高台径　　E－高台高　F－体部径とし，単位はcmである。なお，現存値は（　）で，推定値は［　　］を付して示した。

6　遺構番号

遺構番号については，調査の過程において遺構の種別ごと・調査順に付したが，整理の段階で遺構でないと判断したものは欠番とした。



第２図　中下根・西ノ原・隼人山遺跡地区設定図

目　　次

序
例言
凡例
第１章　調査経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 4
第３章　中下根遺跡 …… 9
　第１節　遺跡の概要 …… 9
　第２節　基本層序 …… 9
　第３節　遺構と遺物 …… 10
　　1　縄文時代の遺構と遺物 …… 10
　　(1)陥し穴 …… 10
　　2　古墳時代の遺構と遺物 …… 15
　　(1)竪穴住居跡 …… 15
　　(2)竪穴遺構 …… 100
　　(3)土坑 …… 108
　　3　平安時代の遺構と遺物 …… 109
　　(1)竪穴住居跡 …… 109
　　(2)土坑 …… 113
　　4　その他の遺構と遺物 …… 114
　　(1)土坑 …… 114
　　(2)溝 …… 118
　　5　遺構外出土遺物 …… 119
　第４節　まとめ …… 127
第４章　西ノ原遺跡 …… 129
　第１節　遺跡の概要 …… 129
　第２節　基本層序 …… 129
　第３節　遺構と遺物 …… 130
　　1　旧石器時代の遺構と遺物 …… 131
　　(1)石器集中地点 …… 131
　　2　縄文時代の遺構と遺物 …… 150
　　(1)陥し穴 …… 150

3　古墳時代の遺構と遺物 ……153
(1)竪穴住居跡 ……153
(2)竪穴遺構 ……214
(3)土坑 ……215
4　その他の遺構と遺物 ……218
(1)土坑 ……218
(2)溝 ……220
5　遺構外出土遺物 ……221
第4節　まとめ ……226
第5章　隼人山遺跡 ……228
第1節　遺跡の概要 ……228
第2節　基本層序 ……228
第3節　遺構と遺物 ……229
1　縄文時代の遺構と遺物 ……229
(1)陥し穴 ……229
2　古墳時代の遺構と遺物 ……233
(1)竪穴住居跡 ……233
(2)竪穴遺構 ……316
(3)土坑 ……320
3　平安時代の遺構と遺物 ……322
(1)竪穴住居跡 ……322
4　その他の遺構と遺物 ……325
(1)土坑 ……325
(2)溝 ……331
5　遺構外出土遺物 ……331
第4節　まとめ ……335
付章　西ノ原遺跡・隼人山遺跡自然科学分析報告
パリノ・サーヴェイ株式会社 ……337

挿 図 目 次

第 1 図　調査区呼称方法概念図
第 2 図　中下根・西ノ原・隼人山遺跡地区設定図
第 3 図　周辺遺跡分布図 …… 8
第 4 図　中下根遺跡基本土層図 …… 9
第 5 図　第1•2•3•4•5•6号陥し穴実測図 ……11
第 6 図　第7•8•9号陥し穴実測図 ……14
第 7 図　第 1 号住居跡実測図 ……16
第 8 図　第 1 号住居跡出土遺物実測図 ……18
第 9 図　第 3 号住居跡実測図 ……19
第 10 図　第 3 号住居跡出土遺物実測図(1) ……21
第 11 図　第 3 号住居跡出土遺物実測図(2) ……22
第 12 図　第 5 号住居跡実測図 ……24
第 13 図　第 5 号住居跡出土遺物実測図 ……25
第 14 図　第 6 号住居跡実測図 ……26
第 15 図　第 6 号住居跡出土遺物実測図 ……27
第 16 図　第 7 号住居跡実測図 ……30
第 17 図　第 7 号住居跡出土遺物実測図(1) ……31
第 18 図　第 7 号住居跡出土遺物実測図(2) ……32
第 19 図　第 8 号住居跡実測図 ……35
第 20 図　第 8 号住居跡出土遺物実測図 ……36
第 21 図　第 9 号住居跡実測図 ……38
第 22 図　第 9 号住居跡出土遺物実測図 ……39
第 23 図　第10号住居跡実測図 ……40
第 24 図　第10号住居跡出土遺物実測図 ……41
第 25 図　第11号住居跡実測図 ……44
第 26 図　第11号住居跡出土遺物実測図 ……45
第 27 図　第12号住居跡実測図 ……47
第 28 図　第12号住居跡出土遺物実測図 ……48
第 29 図　第13号住居跡実測図 ……51
第 30 図　第13号住居跡出土遺物実測図 ……52
第 31 図　第15号住居跡実測図 ……55
第 32 図　第15号住居跡出土遺物実測図 ……55
第 33 図　第16号住居跡実測図 ……57
第 34 図　第16号住居跡出土遺物実測図 ……58
第 35 図　第20号住居跡実測図 ……60
第 36 図　第20号住居跡出土遺物実測図 ……61
第 37 図　第21号住居跡実測図 ……63
第 38 図　第21号住居跡出土遺物実測図(1) ……64
第 39 図　第21号住居跡出土遺物実測図(2) ……65
第 40 図　第21号住居跡出土遺物実測図(3) ……66
第 41 図　第21号住居跡出土遺物実測図(4) ……67
第 42 図　第21号住居跡出土遺物実測図(5) ……68
第 43 図　第23号住居跡実測図 ……73
第 44 図　第23号住居跡出土遺物実測図 ……73
第 45 図　第27号住居跡実測図 ……75
第 46 図　第27号住居跡出土遺物実測図(1) ……76
第 47 図　第27号住居跡出土遺物実測図(2) ……77
第 48 図　第28号住居跡実測図 ……79
第 49 図　第28号住居跡出土遺物実測図 ……79
第 50 図　第29号住居跡実測図 ……81
第 51 図　第29号住居跡出土遺物実測図 ……81
第 52 図　第30号住居跡実測図 ……83
第 53 図　第30号住居跡出土遺物実測図(1) ……84
第 54 図　第30号住居跡出土遺物実測図(2) ……85
第 55 図　第31号住居跡実測図 ……88
第 56 図　第31号住居跡出土遺物実測図 ……89
第 57 図　第32号住居跡実測図 ……90
第 58 図　第32号住居跡出土遺物実測図 ……91
第 59 図　第33号住居跡実測図 ……93
第 60 図　第33号住居跡出土遺物実測図 ……94
第 61 図　第34号住居跡実測図 ……96
第 62 図　第34号住居跡出土遺物実測図 ……97
第 63 図　第35号住居跡実測図 ……99
第 64 図　第35号住居跡出土遺物実測図 ……100
第 65 図　第 1 号竪穴遺構実測図 ……101
第 66 図　第 1 号竪穴遺構出土遺物実測図 ……101
第 67 図　第 2 号竪穴遺構実測図 ……102
第 68 図　第 3 号竪穴遺構実測図 ……103
第 69 図　第 4 号竪穴遺構実測図 ……104
第 70 図　第 4 号竪穴遺構出土遺物実測図 ……105

第 71 図　第 5 号竪穴遺構実測図 ……105
第 72 図　第 5 号竪穴遺構出土遺物実測図 ……106
第 73 図　第 6 号竪穴遺構実測図 ……107
第 74 図　第 6 号竪穴遺構出土遺物実測図 ……108
第 75 図　第220号土坑実測図 ……108
第 76 図　第220号土坑出土遺物実測図 ……109
第 77 図　第 2 号住居跡実測図 ……110
第 78 図　第 2 号住居跡出土遺物実測図 ……110
第 79 図　第25号住居跡実測図 ……112
第 80 図　第25号住居跡出土遺物実測図 ……113
第 81 図　第67号土坑実測図 ……114
第 82 図　第67号土坑出土遺物実測図 ……114
第 83 図　第 1 号溝断面図 ……119
第 84 図　第 1 号溝出土遺物実測図 ……119
第 85 図　遺構外出土遺物拓影図 ……120
第 86 図　遺構外出土遺物実測図(1) ……121
第 87 図　遺構外出土遺物実測図(2) ……122
第 88 図　遺構外出土遺物実測図(3) ……123
第 89 図　遺構外出土遺物実測図(4) ……124
第 90 図　西ノ原遺跡基本土層図 ……129
第 91 図　西ノ原遺跡旧石器集中地点配置図 …130
第 92 図　第 1 号石器集中地点遺物出土状況図…132
第 93 図　第 1 号石器集中地点出土遺物実測図(1) ……133
第 94 図　第 1 号石器集中地点出土遺物実測図(2) ……134
第 95 図　第 2 号石器集中地点遺物出土状況図…136
第 96 図　第 2 号石器集中地点出土遺物実測図…137
第 97 図　第 3 号石器集中地点遺物出土状況図…139
第 98 図　第 3 号石器集中地点出土遺物実測図(1) ……140
第 99 図　第 3 号石器集中地点出土遺物実測図(2) ……141
第100図　第 4 号石器集中地点遺物出土状況図…143
第101図　第 4 号石器集中地点出土遺物実測図…144
第102図　第 5 号石器集中地点遺物出土状況図…146
第103図　第 5 号石器集中地点出土遺物実測図(1) ……147
第104図　第 5 号石器集中地点出土遺物実測図(2) ……148
第105図　第1・2・3・4号陥し穴実測図 ……151
第106図　第 1 号住居跡実測図 ……154
第107図　第 1 号住居跡出土遺物実測図 ……154
第108図　第 2 号住居跡実測図(1) ……156
第109図　第 2 号住居跡竈実測図(2) ……157
第110図　第 2 号住居跡出土遺物実測図 ……157
第111図　第 3 号住居跡実測図 ……159
第112図　第 3 号住居跡出土遺物実測図 ……160
第113図　第 4 号住居跡実測図 ……163
第114図　第 4 号住居跡出土遺物実測図 ……164
第115図　第 5 号住居跡実測図 ……165
第116図　第 5 号住居跡出土遺物実測図 ……166
第117図　第 6 号住居跡実測図(1) ……169
第118図　第 6 号住居跡竈実測図(2) ……170
第119図　第 6 号住居跡出土遺物実測図 ……171
第120図　第 7 号住居跡実測図 ……173
第121図　第 7 号住居跡出土遺物実測図 ……174
第122図　第 8 号住居跡実測図 ……177
第123図　第 8 号住居跡出土遺物実測図 ……178
第124図　第 9 号住居跡実測図 ……180
第125図　第 9 号住居跡出土遺物実測図(1) ……181
第126図　第 9 号住居跡出土遺物実測図(2) ……182
第127図　第10号住居跡実測図 ……185
第128図　第10号住居跡出土遺物実測図 ……185
第129図　第11号住居跡実測図 ……187
第130図　第11号住居跡出土遺物実測図 ……187
第131図　第12号住居跡実測図 ……188
第132図　第12号住居跡出土遺物実測図 ……189
第133図　第13号住居跡実測図 ……190
第134図　第13号住居跡出土遺物実測図 ……191
第135図　第14号住居跡実測図 ……193
第136図　第14号住居跡出土遺物実測図 ……194
第137図　第15号住居跡実測図 ……195
第138図　第15号住居跡出土遺物実測図 ……196
第139図　第16号住居跡実測図 ……198
第140図　第16号住居跡出土遺物実測図 ……199

第141図　第17号住居跡実測図 ……202
第142図　第17号住居跡出土遺物実測図 ……203
第143図　第18号住居跡実測図 ……204
第144図　第18号住居跡出土遺物実測図 ……205
第145図　第19号住居跡実測図 ……207
第146図　第19号住居跡出土遺物実測図 ……208
第147図　第20号住居跡実測図 ……209
第148図　第20号住居跡出土遺物実測図 ……210
第149図　第21号住居跡実測図 ……211
第150図　第21号住居跡出土遺物実測図 ……212
第151図　第１号竪穴遺構実測図 ……214
第152図　第68・77・93・98号土坑実測図 ……216
第153図　第68・77・93・98号土坑出土遺物実測図 217
第154図　第１号溝断面図 ……220
第155図　第１号溝出土遺物実測図 ……220
第156図　遺構外出土遺物拓影図 ……221
第157図　遺構外出土遺物実測図(1) ……223
第158図　遺構外出土遺物実測図(2) ……224
第159図　隼人山遺跡基本土層図 ……228
第160図　第1・2・3・4・5・6号陥し穴実測図 ……230
第161図　第7・8号陥し穴実測図 ……233
第162図　第１号住居跡実測図 ……234
第163図　第１号住居跡出土遺物実測図 ……235
第164図　第２号住居跡実測図 ……236
第165図　第２号住居跡出土遺物実測図(1) ……238
第166図　第２号住居跡出土遺物実測図(2) ……239
第167図　第３号住居跡実測図 ……240
第168図　第３号住居跡出土遺物実測図 ……241
第169図　第４号住居跡実測図 ……242
第170図　第４号住居跡出土遺物実測図 ……244
第171図　第５号住居跡実測図 ……245
第172図　第５号住居跡出土遺物実測図 ……246
第173図　第６号住居跡実測図 ……247
第174図　第６号住居跡出土遺物実測図 ……249
第175図　第７号住居跡実測図 ……250
第176図　第７号住居跡出土遺物実測図 ……252
第177図　第８号住居跡実測図 ……253
第178図　第８号住居跡出土遺物実測図 ……254
第179図　第９号住居跡実測図 ……255
第180図　第９号住居跡出土遺物実測図 ……256
第181図　第10号住居跡実測図 ……258
第182図　第10号住居跡出土遺物実測図 ……258
第183図　第11号住居跡実測図 ……259
第184図　第11号住居跡出土遺物実測図 ……260
第185図　第12号住居跡実測図 ……261
第186図　第12号住居跡出土遺物実測図(1) ……263
第187図　第12号住居跡出土遺物実測図(2) ……264
第188図　第13号住居跡実測図 ……268
第189図　第13号住居跡出土遺物実測図 ……269
第190図　第14号住居跡実測図 ……271
第191図　第14号住居跡出土遺物実測図 ……272
第192図　第15号住居跡実測図 ……274
第193図　第15号住居跡出土遺物実測図 ……275
第194図　第16号住居跡実測図 ……278
第195図　第16号住居跡出土遺物実測図 ……279
第196図　第17号住居跡実測図 ……281
第197図　第17号住居跡出土遺物実測図 ……281
第198図　第18号住居跡実測図 ……284
第199図　第18号住居跡出土遺物実測図 ……285
第200図　第19号住居跡実測図 ……287
第201図　第19号住居跡出土遺物実測図 ……287
第202図　第20号住居跡実測図 ……289
第203図　第20号住居跡出土遺物実測図 ……290
第204図　第21号住居跡実測図 ……291
第205図　第21号住居跡出土遺物実測図 ……292
第206図　第24号住居跡実測図 ……293
第207図　第25号住居跡実測図 ……294
第208図　第25号住居跡出土遺物実測図 ……295
第209図　第26号住居跡実測図 ……296
第210図　第26号住居跡出土遺物実測図 ……296
第211図　第27号住居跡実測図 ……298
第212図　第27号住居跡出土遺物実測図(1) ……299
第213図　第27号住居跡出土遺物実測図(2) ……300
第214図　第28号住居跡実測図 ……302
第215図　第28号住居跡出土遺物実測図 ……303
第216図　第31号住居跡実測図 ……306

第217図　第31号住居跡出土遺物実測図 ……307
第218図　第33号住居跡実測図 ……309
第219図　第33号住居跡出土遺物実測図 ……309
第220図　第34号住居跡実測図 ……311
第221図　第36号住居跡実測図 ……313
第222図　第36号住居跡出土遺物実測図 ……314
第223図　第43号住居跡実測図 ……315
第224図　第43号住居跡出土遺物実測図 ……316
第225図　第１号竪穴遺構実測図 ……317
第226図　第２号竪穴遺構実測図 ……318
第227図　第２号竪穴遺構出土遺物実測図 ……318
第228図　第３号竪穴遺構実測図 ……319
第229図　第37・81号土坑実測図 ……321
第230図　第37・81号土坑出土遺物実測図 ……321
第231図　第35号住居跡実測図 ……323
第232図　第35号住居跡出土遺物実測図 ……324
第233図　第35・40・80・82・83号土坑実測図 ……326
第234図　第１号溝断面図 ……331
第235図　遺構外出土遺物拓影図 ……332
第236図　遺構外出土遺物実測図 ……333

付　　図

中下根遺跡遺構配置図
西ノ原遺跡遺構配置図
隼人山遺跡遺構配置図

表　目　次

表１　中下根遺跡・西ノ原遺跡・隼人山遺跡
周辺遺跡一覧表 ……6
表２　中下根遺跡土坑一覧表 ……115
表３　中下根遺跡住居跡一覧表 ……126
表４　第１号石器集中地点
出土遺物観察表 ……134
表５　第１号石器集中地点
石器組成表 ……135
表６　第１号石器集中地点
接合資料一覧表 ……135
表７　第２号石器集中地点
出土遺物観察表 ……138
表８　第２号石器集中地点
石器組成表 ……138
表９　第３号石器集中地点
出土遺物観察表 ……141
表10　第３号石器集中地点
石器組成表 ……141
表11　第３号石器集中地点
接合資料一覧表 ……142
表12　第４号石器集中地点
出土遺物観察表 ……145
表13　第４号石器集中地点
石器組成表 ……145
表14　第４号石器集中地点
接合資料一覧表 ……145
表15　第５号石器集中地点
出土遺物観察表 ……149
表16　第５号石器集中地点
石器組成表 ……149
表17　第５号石器集中地点
接合資料一覧表 ……149
表18　その他の出土遺物観察表 ……150
表19　その他の出土遺物組成表 ……150
表20　西ノ原遺跡土坑一覧表 ……219
表21　西ノ原遺跡住居跡一覧表 ……225
表22　隼人山遺跡土坑一覧表 ……328
表23　隼人山遺跡住居跡一覧表 ……334

写真図版目次

ＰＬ１　中下根遺跡全景，西ノ原遺跡全景

ＰＬ２　隼人山遺跡全景，第１号石器集中地点遺物出土状況，第２号石器集中地点遺物出土状況，第3･4号石器集中地点遺物出土状況，第５号石器集中地点遺物出土状況

中下根遺跡

ＰＬ３　遺構確認状況，調査終了全景，第６号陥し穴完掘

ＰＬ４　第1･3･5号住居跡完掘

ＰＬ５　第6･7号住居跡遺物出土状況，第９号住居跡完掘

ＰＬ６　第10号住居跡完掘・遺物出土状況，第11号住居跡完掘

ＰＬ７　第13号住居跡遺物出土状況，第20･21号住居跡完掘

ＰＬ８　第21号住居跡遺物出土状況，第23号住居跡完掘

ＰＬ９　第27号住居跡完掘，第28･29号住居跡遺物出土状況

ＰＬ10　第2･30･32号住居跡完掘

ＰＬ11　第1･3･5･6･7号住居跡出土遺物

ＰＬ12　第7･8･9･10号住居跡出土遺物

ＰＬ13　第10･11･12･13号住居跡出土遺物

ＰＬ14　第15･16･20･21号住居跡出土遺物

ＰＬ15　第21号住居跡出土遺物

ＰＬ16　第21･23･27･28号住居跡出土遺物

ＰＬ17　第29･30号住居跡出土遺物

ＰＬ18　第2･25･30･32･33･34･35号住居跡･第67号土坑出土遺物

ＰＬ19　遺構外出土遺物，各遺構出土遺物（石器・石製品・石製模造品・鉄製品）

西ノ原遺跡

ＰＬ20　調査終了全景，第１号陥し穴完掘，第２号住居跡完掘

ＰＬ21　第4･5号住居跡完掘，第５号住居跡遺物出土状況

ＰＬ22　第６号住居跡完掘・竈遺物出土状況，第７号住居跡完掘

ＰＬ23　第７号住居跡遺物出土状況，第８号住居跡完掘・遺物出土状況

ＰＬ24　第９号住居跡竈完掘，第10号住居跡完掘，第14号住居跡貯蔵穴遺物出土状況

ＰＬ25　第15･16号住居跡完掘，第17号住居跡遺物出土状況

ＰＬ26　第18･19号住居跡完掘，第19号住居跡貯蔵穴遺物出土状況

ＰＬ27　第20･21号住居跡完掘，第21号住居跡遺物出土状況

ＰＬ28　第１号竪穴遺構完掘，第77号土坑遺物出土状況，第１号溝完掘

ＰＬ29　第1･2･3･4･5号石器集中地点･第２号住居跡出土遺物

ＰＬ30　第1･3･4･5･6号住居跡出土遺物

ＰＬ31　第7･8･9号住居跡出土遺物

ＰＬ32　第9･16･17･20･21号住居跡出土遺物

ＰＬ33　第21号住居跡・第67･68号土坑出土遺物

ＰＬ34　第77号土坑・第１号溝出土遺物，各遺構出土遺物（土製品・石器・石製品・石製模造品・鉄製品）

隼人山遺跡

ＰＬ35　調査終了全景，第１号陥し穴完掘，第２号住居跡完掘

ＰＬ36　第２号住居跡遺物出土状況，第３号住居跡完掘

ＰＬ37　第３号住居跡遺物出土状況，第４号住居跡完掘・遺物出土状況

ＰＬ38　第５号住居跡遺物出土状況，第6･7号住居跡完掘

ＰＬ39　第8･9号住居跡完掘，第９号住居跡遺物出土状況

ＰＬ40　第10・11号住居跡遺物出土状況，第12号住居跡完掘
ＰＬ41　第13・14号住居跡完掘，第14号住居跡遺物出土状況
ＰＬ42　第14号住居跡貯蔵穴遺物出土状況，第15号住居跡完掘・遺物出土状況
ＰＬ43　第16号住居跡完掘・遺物出土状況，第17号住居跡完掘
ＰＬ44　第18・19・20号住居跡完掘
ＰＬ45　第21・26・27号住居跡完掘
ＰＬ46　第27・33号住居跡遺物出土状況，第28号住居跡完掘
ＰＬ47　第36号住居跡完掘，第81号土坑遺物出土状況，第35号住居跡完掘
ＰＬ48　第35号住居跡竈完掘，第41号土坑完掘，第１号溝完掘
ＰＬ49　第1・2・3・4号住居跡出土遺物
ＰＬ50　第4・5・7・9・12号住居跡出土遺物
ＰＬ51　第9・11・12・14号住居跡出土遺物
ＰＬ52　第14・15・16・18・27号住居跡出土遺物
ＰＬ53　第27・31・33号住居跡出土遺物
ＰＬ54　第28・35・36・37号住居跡・遺構外出土遺物
ＰＬ55　各遺構出土遺物（土製品・石器・石製品・鉄製品）

第１章　調査経緯

第１節　調査に至る経過

茨城県が進めている「グレーターつくば構想」は，牛久市，土浦市，つくば市の三市を業務核都市として100万田園都市圏の一翼を担うことが期待されており，牛久市の北部地区に隣接して，東下根地区に「竜ヶ崎･牛久都市計画事業牛久東下根特定土地区画整理事業」が計画された。この事業は，業務機能と都市的機能を備えた良好な居住環境を有した市街地の形成を目指すものである。

これにより，平成４年３月25日，住宅・都市整備公団つくば開発局は，茨城県教育委員会に対し，この事業計画地である牛久市東下根地区内における埋蔵文化財の有無等についての照会をした。これを受け，茨城県教育委員会は，牛久市教育委員会と埋蔵文化財の有無の確認とその取り扱いについての協議を行い，平成４年11月16日から19日にかけて，表面観察及び試掘調査を実施した。その結果，地区内に西ノ原遺跡ほか中下根遺跡，隼人山遺跡が所在することを確認し，住宅・都市整備公団あてに回答した。平成５年１月28日から，住宅・都市整備公団と茨城県教育委員会は，埋蔵文化財の取り扱いについて，文化財保護の立場から慎重な協議を重ねた結果，記録保存の措置を講ずることとし，平成５年２月４日，茨城県教育委員会は，住宅･都市整備公団に，埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県教育財団は，住宅・都市整備公団から遺跡発掘調査の依頼を受け，平成５年４月１日，住宅・都市整備公団と委託契約を結び，同年４月から中下根遺跡の発掘調査を，平成６年４月１日から西ノ原遺跡，隼人山遺跡Ⅰ区，さらに平成７年４月１日から中下根遺跡Ⅱ区，隼人山遺跡Ⅱ区部分の発掘調査を実施することとなった。

第２節　　調査経過

中下根遺跡，西ノ原遺跡及び隼人山遺跡の発掘調査は，平成５年４月１日から平成７年９月30日までの２年６か月にわたり実施した。中下根遺跡（17,878m²）については，平成５年４月１日から平成６年３月31日まで実施し，平成６年４月１日から平成７年３月31日まで西ノ原遺跡（13,227m²），隼人山遺跡Ⅰ区(14,908m²)の調査について実施した。更に平成７年４月１日から平成７年９月30日まで中下根遺跡Ⅱ区(5,491m²)，隼人山遺跡Ⅱ区(3,242m²)の調査を実施した。以下，調査経過の概要について月ごとに記述する。

中下根遺跡Ⅰ区

平成５年度

４　月　８日に現地踏査を行い，発掘調査をするための事前準備を行った。続いて発掘器材の搬入など発掘調査の諸準備を行い，14日から中下根遺跡への進入路整地，遺跡清掃を実施，20日には関係者列席のもと，発掘調査の円滑な推進と作業の安全を願って鍬入れ式を挙行した。26日からは，調査区の手掘りによる試掘調査を開始した。

５　月　前月に引き続き試掘調査を実施。遺構の存在を確認し，26日からグリッド試掘を全面積の８分の１まで拡大した。

６　月　11日から，重機による表土除去及び遺構確認作業を，調査区の南東部より開始した。

7　月　引き続き，重機による表土除去及び遺構確認作業を実施した。表土除去は12日に終え，遺構確認作業も22日には終了し，竪穴住居跡，土坑，溝等の遺構を確認した。遺構確認の全景写真を撮影し，23日からは遺構の掘り込みに着手した。

8　月　遺構調査を継続，12日から方眼杭打ち測量（茨城県建設技術公社に委託）を開始した。

9　月　竪穴住居跡の調査と並行して，溝の掘り込み調査を開始した。

10　月　10日までに，竪穴住居跡16軒，竪穴遺構６基の調査を終えた。

11　月　竪穴住居跡の調査を終え，溝と併せて，土坑の掘り込み調査を開始した。また，今後の調査の進め方について，委託者である住宅・都市整備公団と協議し，平成６年１月から３月まで，西ノ原遺跡の山林部伐開と遺構確認を行う事とした。

12　月　15日までに，土坑，溝の調査を含め，遺跡全体の調査をほぼ終え，16日に遺跡の航空写真を撮影した。19日には現地説明会を開催し，遺構・遺物を一般に公開した。22日から補足調査と併せて，西ノ原遺跡への現場倉庫移設等物品移送を行った。

1　月　５日から中下根遺跡の補足調査と並行して，西ノ原遺跡の休憩所の設置及び遺跡内の清掃を実施した。12日から地権者による立ち木伐採後の雑木焼却作業を行いつつ，25日には，試掘調査を開始した。

2　月　前月に引き続き西ノ原遺跡の試掘調査を行い，17日から重機による表土除去と遺構確認作業を開始した。

3　月　７日には表土除去を終え，遺構確認作業を進めた結果，竪穴住居跡，土坑，溝等を確認した。17日に遺構確認の全景の写真を撮影して，平成5年度の調査を終えた。

西ノ原遺跡・隼人山遺跡Ｉ区

平成６年度

4　月　隼人山遺跡について８日に現地踏査を行い，発掘調査をするための諸準備を行った。14日・15日には西ノ原遺跡の前年度の残りの部分の伐開を終え，試掘調査に着手した。27日には試掘調査を終えた。

5　月　西ノ原遺跡の重機による表土除去を待つ間に，隼人山遺跡の山林部分を除いた畑地で，試掘調査を開始した。17日から西ノ原遺跡の表土除去がはじまり，23日には隼人山遺跡の試掘を終え，24日からは西ノ原遺跡の表土除去の進捗に併せて遺構確認作業を開始した。

6　月　２日には表土除去及び遺構確認作業を終え，竪穴住居跡，土坑を確認した。３日には前年度分と合わせて遺構確認の全景写真を撮影し，遺構調査を開始した。６日から10日にかけて方眼杭打ち測量(茨城県建設技術公社に委託)を行った。17日から隼人山遺跡の業者委託による立ち木の伐開，焼却作業を開始した。

7　月　前月に引き続き，西ノ原遺跡の遺構調査を進めた。並行して12日から隼人山遺跡の試掘調査を開始した。

8　月　１日から隼人山遺跡の重機による表土除去と併せて，西ノ原遺跡の遺構調査を進め，竪穴住居跡，土坑の調査を終えた。この間，酷暑による水不足と土埃対策に苦慮する日が続いた。31日には隼人山遺跡の遺構確認作業を開始した。

9　月　隼人山遺跡では竪穴住居跡，土坑等を確認し，遺構確認の全景写真を撮影した。７日からは遺構調査を始めた。12日には西ノ原遺跡の遺構調査をほぼ終え，16日に隼人山遺跡の方眼杭打ち測量(茨城県建設技術公社に委託)を実施した。20日には西ノ原遺跡の航空写真撮影を実施した。10月隼人山遺跡の遺構調査と並行して，６日から西ノ原遺跡の補足調査と旧石器(石器集中地点)調査を開始し，12日に

は補足調査を終えた。

11　月　引き続き，隼人山遺跡の遺構調査及び西ノ原遺跡の旧石器調査を実施した。隼人山遺跡の調査は，30日までに竪穴住居跡18軒，井戸状の土坑２基の調査を終えた。

12　月　隼人山遺跡のその他の遺構調査を行いながら，８日から調査区北部の黒色土の広がる部分でトレンチ試掘を実施したが，遺構などは確認されなかった。今月までの作業の進捗状況及び今後の調査の進め方について委託者と協議し，２月から中下根遺跡の平成７年度調査区の遺構確認作業を行うことになった。

1　月　隼人山遺跡の調査をほぼ終えたのにともない，28日には西ノ原遺跡，隼人山遺跡の現地説明会を開催した。31日には遺跡内清掃をして航空写真撮影及び遺跡全景写真撮影を行った。併せて進めていた西ノ原遺跡の旧石器調査では，ナイフ形石器，ピエス・エスキーユを伴う石器集中地点が確認された。

2　月　西ノ原遺跡の旧石器調査と並行して，中下根遺跡の試掘調査を開始した。９日には現場倉庫を移転し，物品移送を行った。14日から重機による表土除去を開始し，22日には終えた。

3　月　７日から，中下根遺跡の遺構確認作業を始め，９日には終え，遺構確認状況の写真撮影を行った。西ノ原遺跡の旧石器調査は，黒曜石を中心とする石器集中地点を５か所確認し調査を終了した。13日から事務所にて，図面，写真等の整理を行い，17日に今年度の現場作業を終えた。

中下根遺跡II区・隼人山遺跡II区

平成７年度

4　月　７日に現地踏査を行い，発掘調査をするための諸準備を行った。13日には中下根遺跡でタワーの組立，隼人山遺跡で清掃を実施した。17日には中下根遺跡内に残る倉庫跡部分の表土除去を人力で開始し，24日からは住居跡の掘り込みと併せて，隼人山遺跡の立木の伐開作業に着手した。

5　月　８日から隼人山遺跡の試掘を行い，土坑及び溝を確認した。26日までに中下根遺跡の住居跡の調査をほぼ終了し，30日から土坑の掘り込みに着手した。

6　月　中下根遺跡の掘り込みと併せて，隼人山遺跡では，５日から始まった業者による伐開作業が８日に終了し，12日からは業者による表土除去を開始した。16日までに中下根遺跡の土坑の調査もほぼ終了し，20日からは隼人山遺跡の遺構確認作業を開始した。22日に業者による表土除去が終了した。29日には中下根遺跡内の清掃を行い，30日に完掘全景写真撮影を実施した。

7　月　14日～28日まで中下根遺跡の補足調査を実施し，隼人山遺跡の遺構確認作業と併せて現場倉庫の移転を行った。

8　月　隼人山遺跡では，２日に遺構確認作業を終了したので遺構確認全景写真撮影を行い，３日から土坑の掘り込みを開始し，８日には溝の掘り込みも始めた。23日からは中下根遺跡の一部埋め戻し作業に着手，25日までに隼人山遺跡の掘り込みもほぼ終了し，30日からは遺跡内清掃を行った。

9　月　１日に隼人山遺跡の遺構完掘全景写真撮影を行い，６日には中下根遺跡及び隼人山遺跡の航空写真を撮影した。13日には中下根遺跡の埋め戻し作業が終了し，撤収作業の準備を開始した。26日までにはほぼ事務所及び倉庫の物品整理が終了し，28日に現場事務所を解体した。

第２章　　位置と環境

第１節　　地理的環境

中下根遺跡他２遺跡は，茨城県牛久市下根町に所在し，牛久市役所の北北東約４㎞のところに位置している。

遺跡のある牛久市は，茨城県南部の中ほどに位置し，東は江戸崎，西は茎崎町，南は竜ヶ崎市，北は阿見町，土浦市，つくば市と境を接している。市域は，東西約15㎞，南北約10㎞，面積約59㎢を擁している。市の西側には，国道６号線とJR常磐線が平行してほぼ南北に通じ，中央部には国道408号線が東西に走っている。

牛久市の地形は，標高25～28mの洪積台地である稲敷台地と，小野川，乙戸川及び桂川水系の沖積低地とからなっている。稲敷台地には，小野川，乙戸川及び桂川とその支流が入り込み，台地は複雑な地形となっている。小野川はつくば市を水源とし，市のほぼ中央部を北西から南東に流れている。乙戸川は土浦市の乙戸沼を水源とし，土浦市荒川沖町から阿見町荒川本郷地内に入り，町の南部を南東に流れて福田地先で牛久市に入り，井の岡で桂川と合流し，市の南東端で小野川に合流する。小野川は大きく北東に湾曲し，霞ケ浦に流入している。また，市の西端には牛久沼が形成されている。

稲敷台地は，土浦市，竜ヶ崎市，江戸崎町を結ぶ三角地帯の中にその大部分が入り，台地の東端は東村阿波崎付近にある。台地の地層は，第四紀洪積世古東京湾時代に堆積した成田層が基盤層となり，下部から上部にかけて，成田層下部，成田層上部，竜ヶ崎砂礫層，常総粘土層，関東ローム層の順で堆積している。堆積状況は，水平で単調，褶曲や断層はみられない。

中下根遺跡他２遺跡は，牛久市の北東部にあり，南西部の小野川と北東部の乙戸川に挟まれた幅約２㎞の舌状台地に立地している。小野川，乙戸川沿岸の谷津は概して浅く長いものが多く，中下根遺跡はその小野川の谷津頭に面する平坦地に位置している。西ノ原遺跡，隼人山遺跡は，乙戸川の谷津頭に向かう緩やかな傾斜面に位置している。

中下根遺跡他２遺跡の標高は19～24mで，遺跡のある台地と小野川，乙戸川の河岸に開ける水田面との比高は１～６ｍで，調査前の現況は，中下根遺跡が畑地，西ノ原遺跡，隼人山遺跡が畑地・山林である。

参考文献

阿見町　『阿見町史』1983年3月

茨城県農地部農地課　　『土地分類基本調査　土浦』　1983年12月

茨城県農地部農地計画課　　『土地分類基本調査　竜ヶ崎』　1987年12月

茨城県農地部農地計画課　　『土地分類基本調査　佐原』　1988年12月

蜂須紀夫　『茨城県　地学のガイド』　1986年11月

第２節　　歴史的環境

中下根（なかしもね）遺跡〈１〉，西ノ原（にしのはら）遺跡〈２〉及び隼人山（はやとやま）遺跡〈３〉，の所在する地域は，河川，低地，台地と変化に富んだ自然環境をもち，台地上には数多くの遺跡が残っている。特に，牛久沼周辺や小野川，乙戸川水系によって形成された台地上には，旧石器時代から中世までの遺跡が分布している。ここでは，当地域の主な遺跡

について時代をおって述べることにする。

旧石器時代の遺跡は，平成5年度に報告された中久喜遺跡[16]〈4〉，今回報告する西ノ原遺跡があり，いずれもナイフ形石器や尖頭器等が出土している。

縄文時代の遺跡は，牛久市の守子橋遺跡〈5〉，平成4年度に報告されたヤツノ上遺跡〈6〉，東山遺跡〈7〉，馬場遺跡〈8〉，茎崎町の下大井遺跡〈9〉，大井遺跡〈10〉，土浦市の沖新田道祖神前遺跡〈11〉，塚下遺跡〈12〉等がある。守子橋遺跡，下大井遺跡，大井遺跡は，小野川沿いの右岸台地縁辺部に，ヤツノ上遺跡，馬場遺跡は，小野川左岸から入り込む小支谷の東側の台地上に位置している。ヤツノ上遺跡からは，縄文時代晩期の土器片とともに，同時期の土偶が出土[15]し，東山遺跡からは，縄文時代早期から中期の土器片が出土している[21]。馬場遺跡からは，縄文時代早期の土器片と前期の深鉢が出土している[20]。阿見町の於山遺跡〈13〉からは，縄文時代早期から後期にかけての土器片，磨製石斧が出土している[19]。沖新田道祖神前遺跡は乙戸川右岸台地縁辺部，塚下遺跡は左岸台地縁辺部にあり対峙している。牛久市奥原町の小野川と乙戸川とが合流する左岸台地縁辺部には，縄文時代中期から後期にかけての集落跡である奥原遺跡（出戸地区）があり，牛久市桂町の乙戸川左岸台地縁辺部には赤塚遺跡がある[8]。牛久沼から入り込む小支谷を臨む台地上には，早期から後期の中の台C遺跡が，また，同台地上には，後期中葉から後葉にかけての主淡貝塚を形成する城中貝塚がある。

弥生時代の遺跡は，縄文式土器片とともに弥生式土器片の散布がみられる小野川右岸台地縁辺部に位置する坂本遺跡〈14〉があり，奥原町の天王峯遺跡では，弥生時代後期の集落跡が確認されている[9]。

古墳時代の遺跡は，今回報告する中下根遺跡，西ノ原遺跡，隼人山遺跡のほかに，牛久市の中久喜遺跡，ヤツノ上遺跡，馬場遺跡，行人田遺跡〈15〉，東山遺跡，大久保遺跡〈16〉，奥原遺跡，すかき台遺跡，源怠遺跡，天王峯遺跡，土浦市の向原遺跡，烏山遺跡，竜ヶ崎市の平台遺跡，長峰遺跡，西ノ原遺跡，阿見町の中根遺跡〈17〉，宮脇遺跡，阿見東遺跡等がある。

これらの遺跡を時期別にみると，古墳時代前期の遺跡は，すかき台遺跡，奥原遺跡，源怠遺跡，向原遺跡，烏山遺跡等があり，小野川と乙戸川の合流する左岸台地縁辺部に位置する奥原町のすかき台遺跡では，竪穴住居跡9軒[10]，同じく奥原遺跡（姥神地区）では，竪穴住居跡3軒，方形周溝墓3基が確認されている[7]。乙戸川左岸台地上に位置する久野町の源怠遺跡からは，6基の方形周溝墓と円形周溝墓が確認されている[5]。花室川の南側にあり，北東から南西に延びる台地上に位置する向原遺跡からは，竪穴住居跡61軒が確認されている[11]。また，烏山遺跡からは，同時期の竪穴住居跡16軒が確認され，そのうち11軒の住居跡内から勾玉，管玉の未製品が大量に出土していることから，玉造工房跡と考えられている[4][13]。

古墳時代中期の遺跡は，牛久市中根町付近の小野川と，阿見町本郷付近を流れる乙戸川水系の小支谷によって開析された台地上に，中下根遺跡，西ノ原遺跡，隼人山遺跡，ヤツノ上遺跡，中久喜遺跡があり，広範囲にわたって古墳時代中期の集落跡が確認されている。これらの遺跡は，古墳時代中期中葉から後期初頭のものとして，主に小支谷をのぞむ台地の中央部から緩斜面上にかけて集落を形成しているのが特徴である。阿見町北西部の清明川によって開析された台地上に位置する宮脇遺跡（第II期）からは，同時期の竪穴住居跡23軒が確認されている[6]。また，宮脇遺跡の東側に位置する阿見東遺跡からは，石製模造品が多数出土しており，石製品工房跡と考えられている[12]。竜ヶ崎市の長峰遺跡[17]，平台遺跡[18]からは，古墳時代中期前半の集落跡が確認されている。

古墳時代後期の遺跡は，西ノ原遺跡のほか，馬場遺跡，天王峯遺跡，奥原遺跡等がある。馬場遺跡では，竪穴住居跡2軒[20]，天王峯遺跡でも竪穴住居跡2軒[9]，奥原遺跡では竪穴住居跡が20軒[7]ちかく確認されている。

古墳は，集落に付随するようにあり，茎崎町の下大井古墳群[1]〈18〉，阿見町の内記古墳群〈19〉，実穀古墳群〈20〉，だめき古墳〈21〉，牛久市猪子町の道山古墳群〈22〉がある。なかでも9基からなる道山古墳群は小野川に流れる一支流に面した標高20mの台地上にあり，その中の第3，4，5号墳からは直刀が出土している[2]。その他，この付近には宮坂古墳〈23〉，愛宕脇古墳〈24〉，琴塚古墳〈25〉，水落下古墳〈26〉，梨の木古墳〈27〉がある。これらの古墳は，いずれも6世紀後半から7世紀前半のものである。

奈良・平安時代の遺跡は，中下根遺跡，隼人山遺跡のほか，ヤツノ上遺跡，中久喜遺跡，奥原遺跡，行人田遺跡等がある。このうち，ヤツノ上遺跡では平安時代の竪穴住居跡8軒，掘立柱建物跡2棟が確認され，土師器の高台付坏，及び高台付皿，須恵器の甕，高坏，坏，及び坏蓋などが出土している[15]。奥原遺跡（姥神地区）からは，奈良時代の竪穴住居跡16軒，平安時代の住居跡58軒及び掘立柱建物跡4棟が確認され，須恵器の宝珠形陶硯や墨書土器が出土している[7]。

中世の遺跡は，岡見城跡〈28〉，小坂城跡[14]，上小池城跡〈29〉等がある。岡見城跡は，牛久市岡見町に所在し，室町時代初期ごろから勢力を拡大していった岡見氏発祥の城跡であり，同市小坂町の小坂城跡は戦国期に岡見氏によって築造されたものと考えられている[2]。また，阿見町小池に所在する上小池城跡についても，戦国時代末期に土岐氏によって構築されたものと考えられている[3]。

江戸時代の遺跡としては，土浦市の荒川沖一里塚〈30〉，牛久市の東猫穴一里塚〈31〉等がある。東猫穴一里塚は，国道6号線の両側に直径10m前後の円形の塚が2基現存している。

＊文中の〈　〉内の番号は，表1，第3図中の該当番号と同じである。

表1　中下根遺跡・西ノ原遺跡・隼人山遺跡周辺遺跡一覧表

図中番号	遺跡名	県遺跡番号	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世以降	図中番号	遺跡名	県遺跡番号	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世以降
1	中下根遺跡					○	○			17	中根遺跡	5703				○			
2	西ノ原遺跡		○			○				18	下大井古墳群	5730				○			
3	隼人山遺跡					○	○			19	内記古墳群	5702				○			
4	中久喜遺跡		○			○	○			20	実穀古墳群	5697				○			
5	守子橋遺跡	2794		○						21	だめき古墳	5698				○			
6	ヤツノ上遺跡			○		○	○			22	道山古墳群	1706				○			
7	東山遺跡			○		○	○			23	宮坂古墳	3368				○			
8	馬場遺跡	3364		○		○	○			24	愛宕脇古墳	3372				○			
9	下大井遺跡	2811		○						25	琴塚古墳	3377				○			
10	大井遺跡	2808		○						26	水落下古墳	3378				○			
11	沖新田道祖神前遺跡	5241		○		○				27	梨の木古墳	3373				○			
										28	岡見城跡	1708					○		
12	塚下遺跡	5240		○		○				29	上小池城跡	3982					○		
13	於山遺跡	5701		○		○				30	荒川沖一里塚	1794							○
14	坂本遺跡	3366		○	○					31	東猫穴一里塚	3991							○
15	行人田遺跡	3365				○	○			32	根柄遺跡	3371				○			
16	大久保遺跡	3363				○				33	中宿遺跡	3369				○			

註・参考文献

（1）茎崎村教育委員会　『茎崎村史』　1973年3月

（2）牛久市教育委員会　『牛久町史史料編（一）』　1979年1月

（3）阿見町史編さん委員会　『阿見町史』　1983年3月

（4）土浦市教育委員会　『土浦の遺跡　埋蔵文化財包蔵地』　1984年3月

（5）牛久市教育委員会　『常陸源怠遺跡』　1989年10月

（6）阿見町教育委員会　『宮脇遺跡（第II期）』1990年3月

（7）奥原遺跡発掘調査会　『奥原遺跡』　1989年12月

（8）赤塚遺跡発掘調査会　『赤塚遺跡』　1984年4月

（9）牛久市天王峯発掘調査会　『天王峯遺跡報告書第二次調査』1988年4月

(10) 牛久市すかき台遺跡発掘調査会　『すかき台遺跡』　1991年8月

(11) 土浦市向原遺跡発掘調査会　『向原遺跡』　1987年3月

(12) 阿見町阿見東遺跡調査会　『阿見東遺跡』　1992年5月

(13) 国士館大学文学部考古学研究室　『烏山遺跡』　1988年3月

(14) 小坂城跡発掘調査会　『小坂城跡』　1979年12月

(15) 茨城県教育財団　「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（I）ヤツノ上遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第81集』1993年3月

(16) 茨城県教育財団　「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（II）中久喜遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第86集』1993年9月

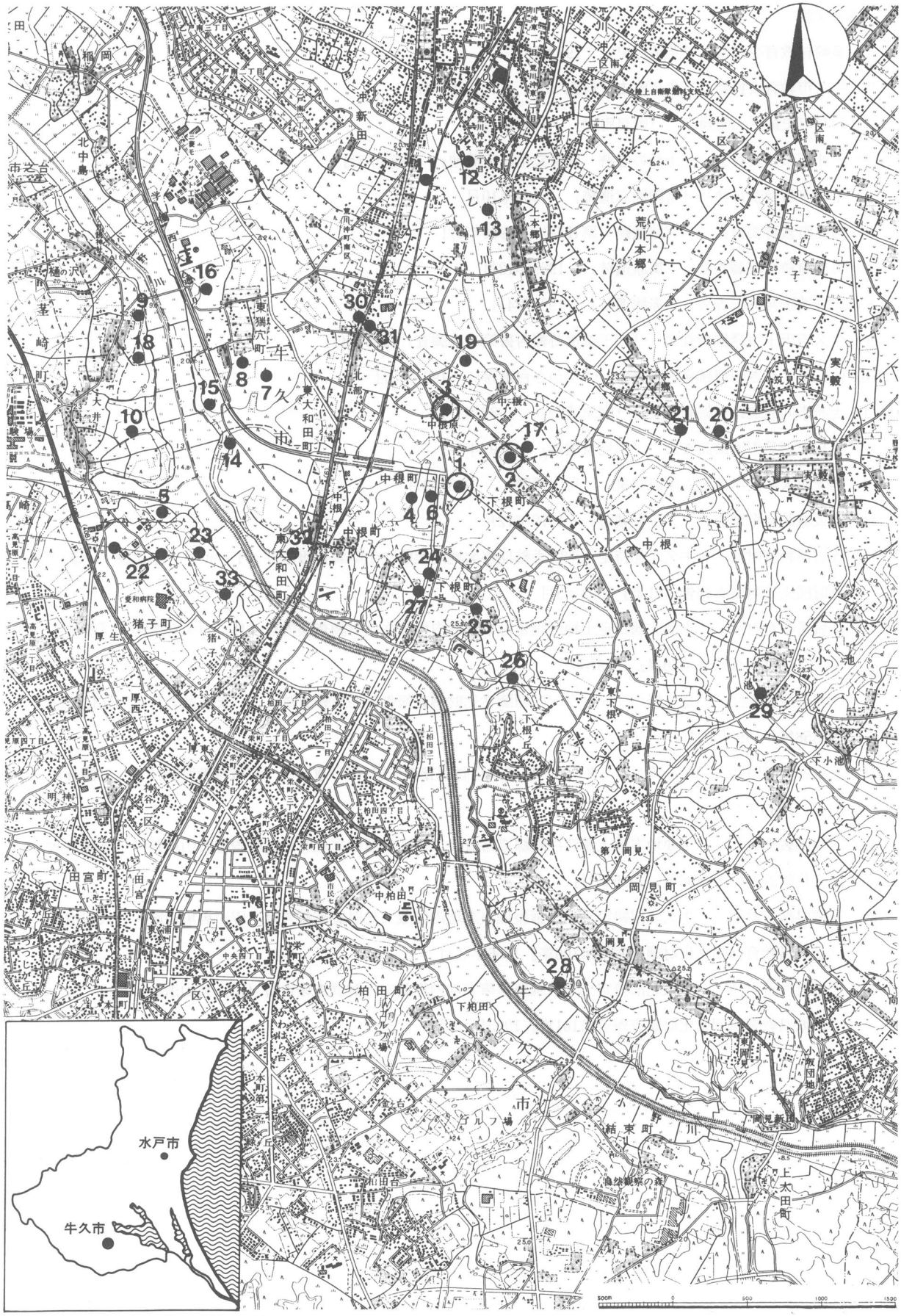
(17) 茨城県教育財団　「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19長峰遺跡」　『茨城県教育財団文化財調査報告第58集』1990年3月

(18) 茨城県教育財団　「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書8平台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第19集』1983年3月

(19) 茨城県教育財団　「主要地方道土浦江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書於山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第96集』1995年3月

(20) 茨城県教育財団　「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（IV）馬場遺跡・行人田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第106集』1996年３月

(21) 茨城県教育財団　「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（III）東山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第101集』1995年９月



第3図　周辺遺跡分布図

第３章　中下根遺跡

第１節　遺跡の概要

中下根遺跡は，牛久市の北北東部，小野川の左岸から南東に湾曲して入り込む谷津頭に面し，標高約24～25mの洪積台地である稲敷台地上に立地する，縄文時代から平安時代にわたる複合遺跡である。調査前の現況は，畑地で，調査区域は東西に約216m，南北に約108m，面積23,369m²である。

今回の調査によって確認した遺構は，縄文時代の陥し穴９基，古墳時代の竪穴住居跡25軒，平安時代の竪穴住居跡２軒，その他に，竪穴遺構６基，土坑158基，溝１条である。

旧石器時代の遺構は確認できなかったが，表採及び遺構確認面で遺物が出土している。石材は黒曜石，頁岩がほとんどで，他にメノウも少量使用されている。

縄文時代の遺構としては，９基の陥し穴を確認した。

古墳時代の遺構は，調査区中央部付近を中心に確認され，特に南側の谷津頭付近に多く見られた。確認した竪穴住居跡25軒は，いずれも古墳時代中期のものと考えられ，形状は方形や長方形のものが多く，間仕切り溝を伴う住居跡も確認し，既に報告済みのヤツノ上遺跡，中久喜遺跡等の同時期の住居跡と規模，形態はほぼ同様である。特に，当遺跡の大型住居跡である第３号住居跡及び第７号住居跡では，遺物の出土状態から祭祀行為が行われていたと考えられる。また，第21号住居跡からは多量の遺物が投棄された状態で出土している。

平安時代の遺構は，竪穴住居跡２軒を確認した。第２号住居跡は北東壁に竈が付設され，出土遺物から時期は８世紀後半と考えられる。第25号住居跡は，この時期では類例が少ない南コーナーに竈を付設し，その焚き口に土師器の甕が逆位に伏せた状態で出土していることから，祭祀行為が行われていたとも考えられる。

遺物は遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に50箱ほど出土している。旧石器時代の遺物としては，尖頭器，石刃，剝片が出土している。縄文時代の遺物としては，早期，中期の縄文土器片の他に，石鏃などが遺構確認面や覆土中から出土している。弥生時代の土器片も数点出土している。古墳時代の遺物としては，坏，高坏，坩,甕等の土師器や，坏，坏蓋等の須恵器の他に，土錘等の土製品，穂摘具などの石器，勾玉，臼玉，紡錘車，砥石などの石製品，剣，有孔円板などの石製模造品，ガラス玉が出土している。その他，第27号住居跡出土の坩の体部内土中より炭化米が出土している。

第２節　基本層序

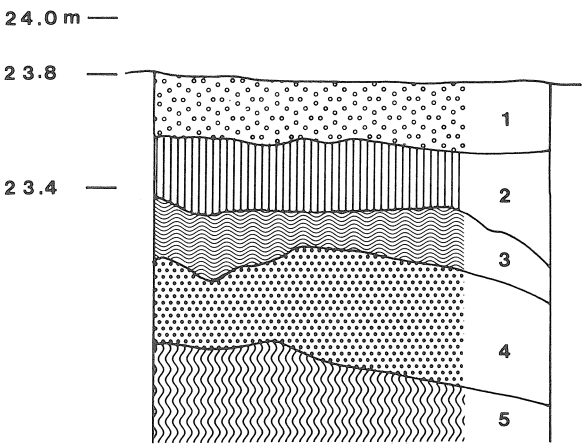
中下根遺跡においては，調査区南西部V4$_{i7}$区にテストピットを設定し，第４図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第１層は，褐色の耕作土で，厚さは20～28cmである。

第２層は,褐色のソフトローム層への漸移層で,厚さは10～25cmである。

第３層は,明褐色のソフトローム層で,ローム粒子が中量混入しており,厚さは10～22cmである。

第４層は，褐色の黒色バンドで、厚さは24～42cmであ



第４図　中下根遺跡基本土層図

る。

第５層は，黄褐色のハードローム層で，粘性及び締まりとも強く，厚さは80～120cmである。

中下根遺跡の遺構は，表土下30～50cmほどの第３層上面で，明確に確認されている。

第３節　遺構と遺物

１　縄文時代の遺構と遺物

（１）陥し穴

当遺跡で確認した167基の土坑の内，形状や規模から陥し穴と考えられる９基の遺構について記載する。

第１号陥し穴（第５図）

位置　調査区の西部，T6h8区。

規模と平面形　長径2.87m，短径1.29mの長楕円形で，深さは1.19mである。

長径方向　N－58°－W

壁面　外傾して立ち上がり，中位で段を成している。

底面　皿状である。

覆土　７層から成る。自然堆積である。

土層解説

1　暗褐色　ローム粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
3　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
4　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム粒子微量
5　褐　色　ローム粒子中量
6　暗褐色　ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量
7　褐　色　ローム中ブロック中量，ローム粒子微量

遺物　出土していない。

所見　本跡は，遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物が出土していないので詳細な時期は不明であるが，縄文時代の構築と考えられる。

第２号陥し穴（第５図）

位置　調査区の西部，U6e9区。

規模と平面形　長径1.80m，短径0.77mの不整長楕円形で，深さは0.94mである。

長径方向　N－37°－E

壁面　ほぼ垂直に立ち上がり，西壁中位に段を成している。

底面　やや凹凸がある。

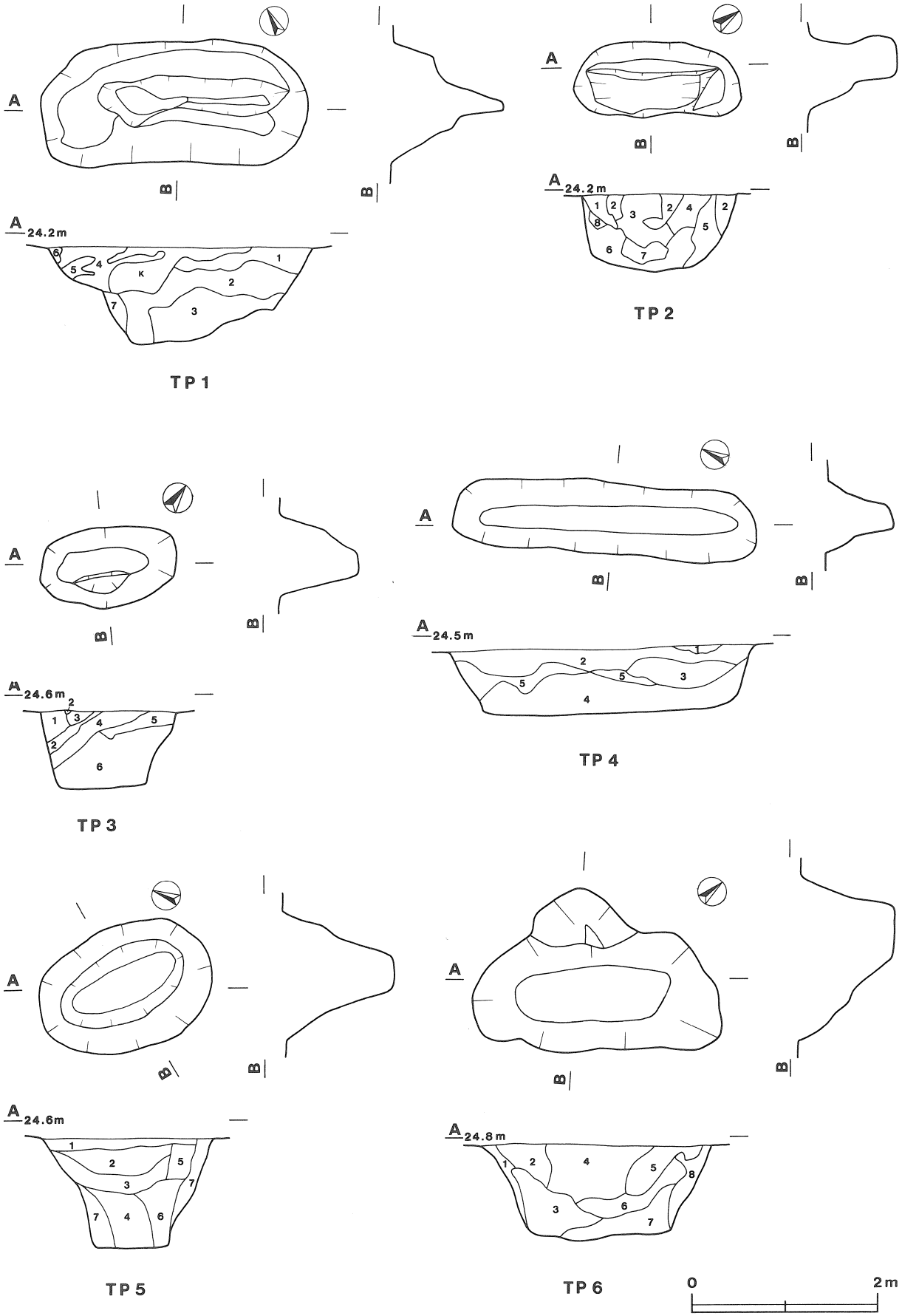
覆土　８層から成る。人為堆積と考えられる。

土層解説

1　暗褐色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極微量
3　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子極微量
4　褐　色　ローム粒子少量，ローム中ブロック微量，炭化粒子極微量
5　褐　色　ローム粒子中量
6　褐　色　ローム粒子微量
7　褐　色　ローム粒子極微量
8　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物　出土していない。

所見　本跡は，遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物が出土していないので詳細な時期は不明であるが，縄文時代の構築と考えられる。



第５図　第1・2・3・4・5・6号陥し穴実測図

第3号陥し穴（第5図）

位置　調査区の西部，$V5_{a8}$区。

規模と平面形　長径1.48m，短径0.85mの楕円形で，深さは0.83mである。

長径方向　N－52°－E

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　6層から成る。自然堆積と考えられる。

土層解説

1　暗 褐 色　ローム粒子極微量
2　暗 褐 色　ローム粒子少量
3　褐　　色　ローム粒子少量
4　黒褐色　ローム粒子少量
5　暗褐色　ローム粒子少量
6　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物　出土していない。

所見　本跡は，遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物が出土していないので詳細な時期は不明であるが，縄文時代の構築と考えられる。

第4号陥し穴（第5図）

位置　調査区の中央部，$V8_{f1}$区。

規模と平面形　長径3.25m，短径0.77mの隅丸長方形で，深さは0.70mである。

長径方向　N－23°－W

壁面　ほぼ垂直に立ち上がり，中位で外傾する。

底面　平坦である。

覆土　5層から成る。自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒褐色　ローム粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子極微量
3　暗褐色　ローム粒子微量，焼土粒子極微量
4　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
5　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，焼土粒子極微量

遺物　出土していない。

所見　本跡は，遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物が出土していないので詳細な時期は不明であるが，縄文時代の構築と考えられる。

第5号陥し穴（第5図）

位置　調査区の中央部，$W6_{j0}$区。

規模と平面形　長径1.89m，短径1.34mの楕円形で，深さ1.17mである。

長径方向　N－17°－E

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　7層から成る。自然堆積と考えられる。

土層解説

1　暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子極微量
2　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
3　暗褐色　ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量
4　褐　色　ローム中ブロック少量，ローム粒子微量
5　褐　色　ローム粒子極微量
6　褐　色　ローム中ブロック微量
7　褐　色　ローム小ブロック微量

遺物　出土していない。

所見　本跡は，遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物が出土していないので詳細な時期は不明であるが，縄文時代の構築と考えられる。

第6号陥し穴（第5図）

位置　調査区の東部，W8$_{a5}$区。

規模と平面形　長径2.63m，短径1.73mの不整形で，深さ1.15mである。

長径方向　N－39°－E

壁面　北西壁は緩やかに立ち上がり，南東壁は中位に膨らみを持ちながら外反する。

底面　平坦である。

覆土　8層から成る。自然堆積と考えられる。

土層解説

1　褐　　色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
2　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　黒 褐 色　ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量
4　暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量
5　黒 褐 色　ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量
6　黒 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量
7　暗 褐 色　ローム中ブロック・ローム粒子微量
8　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量

遺物　出土していない。

所見　本跡は，遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物が出土していないので詳細な時期は不明であるが，縄文時代の構築と考えられる。

第7号陥し穴（第6図）

位置　調査区の北西部，U5$_{d8}$区。

規模と平面形　長径2.50m，短径1.78mの不整楕円形で，深さは［2.64］mである。

長径方向　N－35°－W

壁面　北東壁は外傾して立ち上がり，南西壁は中位に段を呈する。

底面　底部に向かってV字状に深く落ち込み確認できなかった。

覆土　4層から成る。自然堆積と考えられる。

土層解説

1　暗褐色　ローム粒子少量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
3　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量；粘性強
4　明褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック少量，粘性強

遺物　出土していない。

所見　本跡は，遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物が出土していないので詳細な時期は不明であるが，縄文時代の構築と考えられる。

第8号陥し穴（第6図）

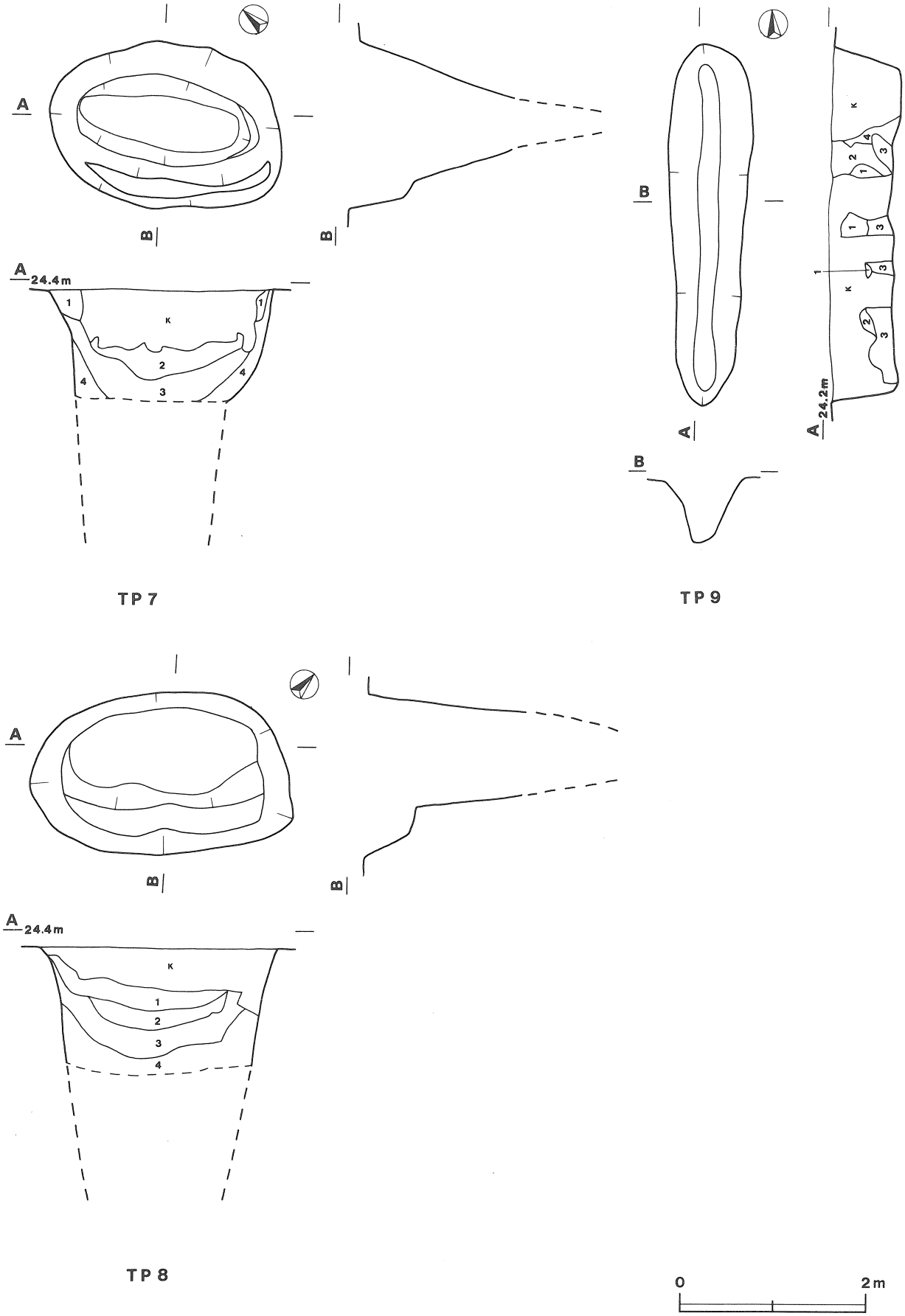
位置　調査区の北西部，U5$_{d7}$区。

規模と平面形　長径2.80m，短径1.74mの不整楕円形で，深さは［2.70］mである。

長径方向　N－44°－E

壁面　北西壁はほぼ垂直に立ち上がり，南東壁には凹凸がみられ，外傾して立ち上がる。

底面　底部に向かって深く落ち込み形状は確認できなかった。



第 6 図　第7・8・9号陥し穴実測図

覆土　4層から成る。レンズ状の堆積状況がみられる。自然堆積である。

土層解説
1　暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2　褐　　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック微量
3　褐　　色　ローム粒子多量，ローム大ブロック微量，粘性強
4　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック微量，粘性強

遺物　出土していない。

所見　本跡は，遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物が出土していないので詳細な時期は不明であるが，縄文時代の構築と考えられる。

第9号陥し穴（第6図）

位置　調査区の北西部，T5d2区。

規模と平面形　長径3.85m，短径0.8mの長楕円形で，深さは0.66mである。

長径方向　N－7°－W

壁面　外傾して立ち上がり，断面形はU字形を呈する。

底面　皿状を呈する。

覆土　4層から成る。人為堆積の様相を呈する。

土層解説
1　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
2　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
3　褐　　色　ローム粒子多量，粘性強
4　暗 褐 色　ローム粒子中量，締まり強

遺物　出土していない。

所見　本跡は，遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物が出土していないので詳細な時期は不明であるが，縄文時代の構築と考えられる。

2　古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では，古墳時代の竪穴住居跡25軒，竪穴遺構6基を確認した。以下，確認した遺構と遺物について記載する。

（1）　竪穴住居跡

確認した竪穴住居跡は25軒（ＳＩ－１～35のうち，４，14，17，18，19，22，24，26は欠番）あるが，調査区外へ延びる第28号，第29号，第31号住居跡は一部未調査である。

第1号住居跡（第7図）

位置　調査区の西部，V5b6区。

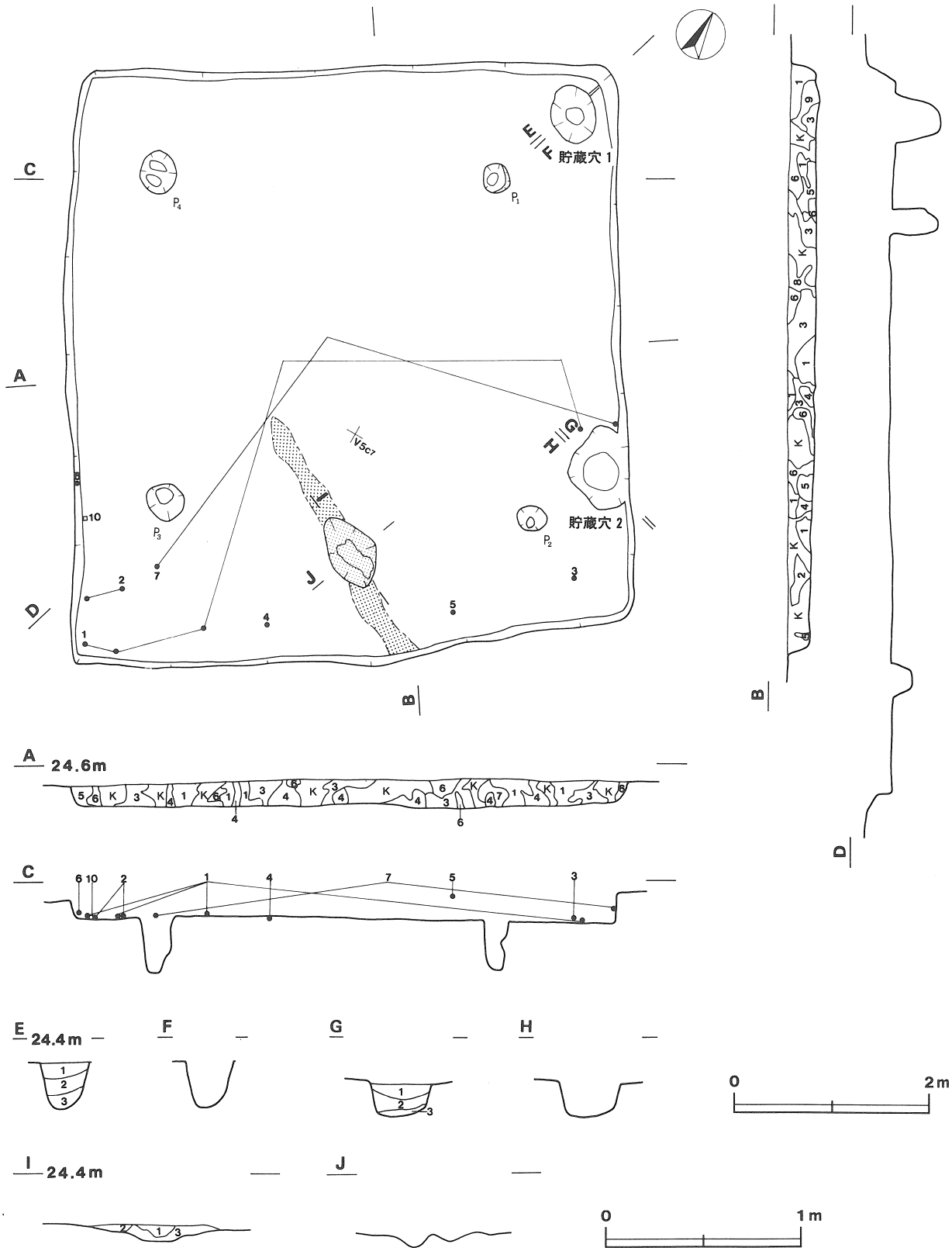
規模と平面形　長軸6.13m，短軸5.73mの方形。

主軸方向　N－31°－W

壁　壁高は18～30cmで，ほぼ外傾して立ち上がる。

床　平坦で，中央部は硬く締まっている。床面上には耕作による撹乱と思われる帯状に伸びる焼土が，南東壁中央部から西コーナーに向かって長く伸びている。

ピット　4か所（P_1～P_4）。P_1～P_4は長径30～44cm，短径24～38cmの楕円形または不整楕円形で，深さ



第７図　第１号住居跡実測図

22～58cmである。規模や配列から主柱穴と考えられる。

炉　中央付近からやや南東寄りに付設され，平面形は長径80cm，短径50cmの楕円形で，床面を9cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土は焼土ブロックと焼土粒子を大量に含む赤褐色土が堆積したものである。炉床の中央部は撹乱を受け残存しないが，残存する部分は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説
1　赤褐色　焼土小ブロック多量，ローム粒子微量
2　赤褐色　焼土小ブロック少量
3　赤褐色　焼土粒子微量

貯蔵穴　2か所。貯蔵穴1の平面形は，長径86cm，短径63cmの楕円形である。深さは29cmで，底面には凹凸があり，断面はU字形である。貯蔵穴2は，長径60cm，短径46cmの楕円形で，北東壁中央付近に付設され，壁の一部を北東壁と共有するように掘り込まれている。深さ47cmで，断面はU字状である。

貯蔵穴1土層解説
1　褐　色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量，粘性強
2　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
3　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子微量

貯蔵穴2土層解説
1　赤褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，焼土粒子極微量，粘性強
2　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子微量，粘性強
3　褐　色　ローム中ブロック少量，ローム粒子微量

覆土　9層から成る。耕作による撹乱を広く受けている。床面上からは焼土の広がりがみられ，覆土下層から上層にかけ炭化粒子を含む褐色土が複雑に堆積している。南東壁際下層から中層にかけ焼土ブロック，焼土粒子が帯状に堆積する状況がみられるが，焼土の広がり方と層位から耕作によるものと思われる。人為的に埋め戻されたものと考えられる。

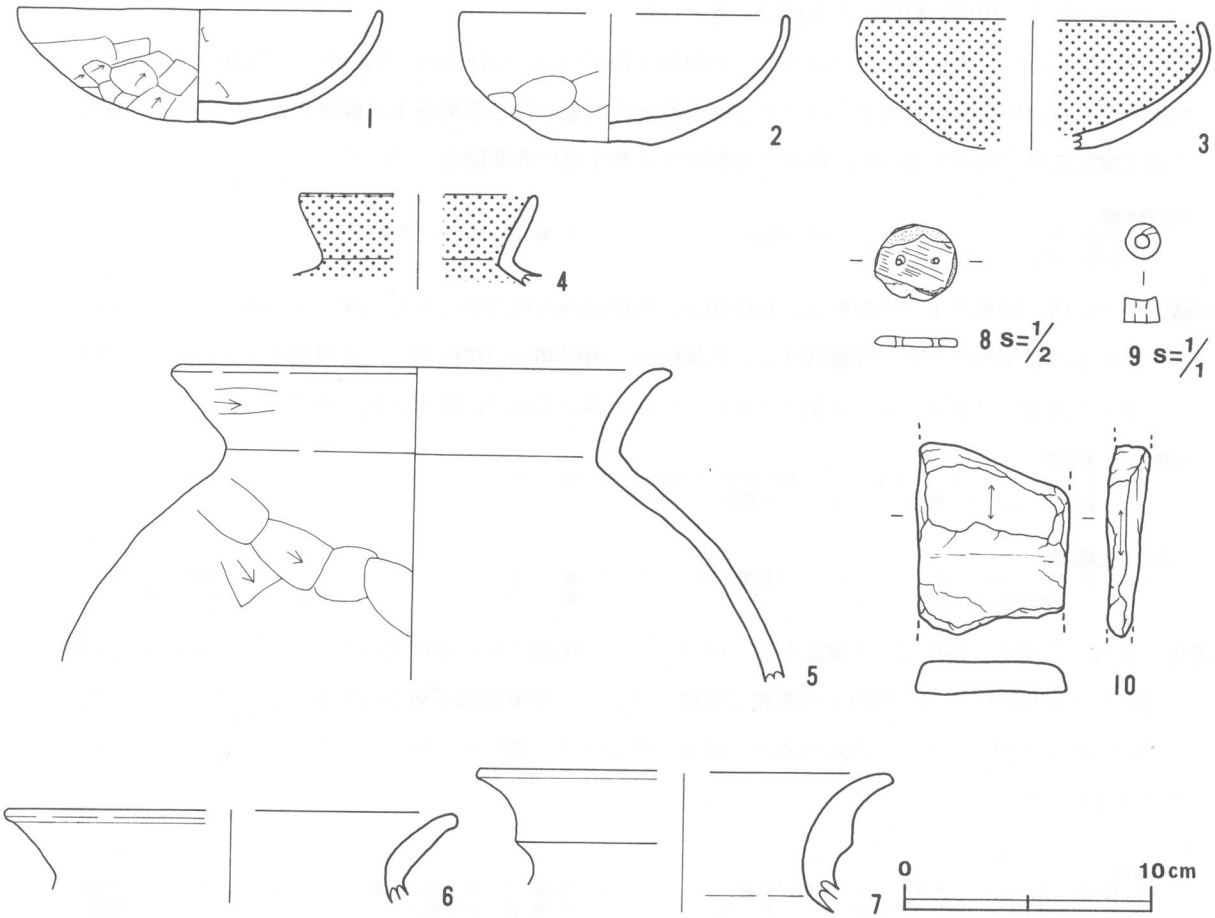
土層解説
1　黒褐色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
2　暗褐色　焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子微量
3　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック微量
4　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子微量
5　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子微量，炭化粒子極微量
6　黒褐色　焼土粒子少量，ローム小ブロック・ローム粒子微量
7　黒褐色　炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
8　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
9　暗褐色　炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量

遺物　南コーナー付近の覆土中層から床面直上にかけ土師器片が中量出土している。第8図1～3の坏は，いずれも床面直上から出土しているものである。1は南東寄りの広範囲から点在している土師器片が接合し，2は南コーナー付近の床面直上から斜位の状態で出土した坏と土師器片が接合し，3は東コーナー付近から出土している。4の甕は南東寄りの床面直上から横位の状態で出土している。5～7の甕は，5が南東寄りの覆土中層から，6が南西壁際の覆土下層から出土し，7の甕は南寄りの床面直上から出土している口縁部片と北東寄りの覆土中層から出土している土師器片が接合したものである。その他，8と9の双孔円板と臼玉が覆土中から，10の砥石が北西壁際の床面直上から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第8図 1	坏 土師器	A　14.7 B　4.6 C　4.2	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい橙色　普通	P1　90% PL11 南東寄り床面直上
2	坏 土師器	A［13.3］ B　5.3 C　4.2	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面ヘラナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・パミス にぶい赤褐色 普通	P2　50% 南コーナー付近 床面直上
3	坏 土師器	A［13.8］ B（6.6）	体部から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 雲母　橙色 普通	P3　10% 東コーナー床面 直上



第8図　第1号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第8図 4	甕 土師器	A［9.6］ B（3.2）	口縁部の破片。口縁部は僅かに外傾する。口縁部内面に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P4　10% 南東寄り床面直上
5	甕 土師器	A　20.1 B（12.5）	体部から口縁部の破片。体部は球形状を呈する。頸部は「く」の字状に屈曲し，口縁部は外反する。	口縁部外面ヘラ削り後横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石 褐色 普通	P5　20% 南東寄り覆土中層
6	甕 土師器	A［18.2］ B（3.3）	口縁部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P6　5% 南西壁際覆土下層
7	甕 土師器	A［16.8］ B　4.7	口縁部の破片。頸部との境に稜をもち，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ後ヘラ磨き。頸部内・外面ヘラナデ後ヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P7　5% 南寄り床面直上 体部外面煤付着

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第8図8	双孔円板	2.2	2.0	0.3	0.2	(2.1)	85	片岩	覆土中	Q1　PL19
9	臼　玉	0.5	0.5	0.4	0.2	0.1	100	片岩	覆土中	Q2
10	砥　石	(7.7)	6.2	(1.4)	—	(100.2)	40	片岩	北西壁際床面直上	Q3

第3号住居跡（第9図）

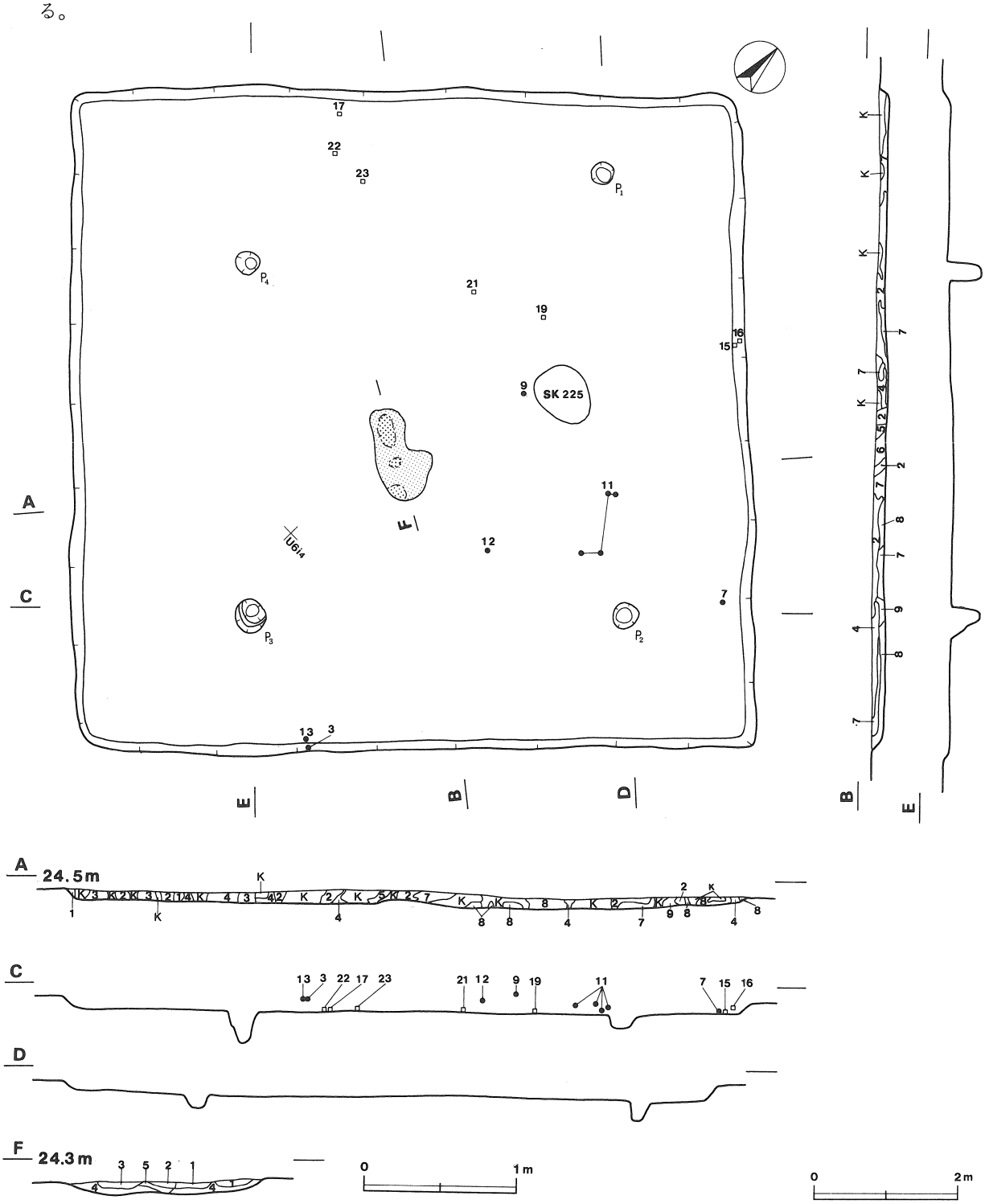
位置　調査区の西側中央部，U6h4区。

重複関係　本跡は，中央部から東よりの部分を，第225号土坑に掘り込まれている。本跡のほうが古い。

規模と平面形　長軸8.94m，短軸8.66mの方形。

主軸方向　N－39°－W

壁　壁高は9～18cmで，ほぼ外傾して立ち上がる。掘り込みが比較的浅く，耕作による撹乱を全面に受けている。



第9図　第3号住居跡実測図

床　ほぼ平坦であるが，踏み締まりは弱い。耕作用トレンチャーによる撹乱を受けている。

ピット　4か所（P_1～P_4）。P_1～P_4は長径30～48cm，短径29～42cmの楕円形または不整楕円形で，深さは16～45cmである。各コーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。

炉　中央付近に付設され，平面形は長径130cm，短径45cmの長楕円形で，床面を9cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土は焼土ブロック，焼土粒子を含む暗褐色土が堆積したものである。炉床は耕作による撹乱を受けているが，残存部分は赤変硬化している。

炉土層解説

1　暗褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子多量
2　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，ローム小ブロック少量
3　暗褐色　焼土粒子・ローム中ブロック多量，焼土小ブロック少量
4　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・ローム小ブロック少量
5　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子微量

覆土　9層から成る。耕作による撹乱を受けて，全体の堆積状況の把握はできないが，覆土下層から上層にかけ焼土粒子を含む黒褐色土と暗褐色土が複雑に堆積している。

土層解説

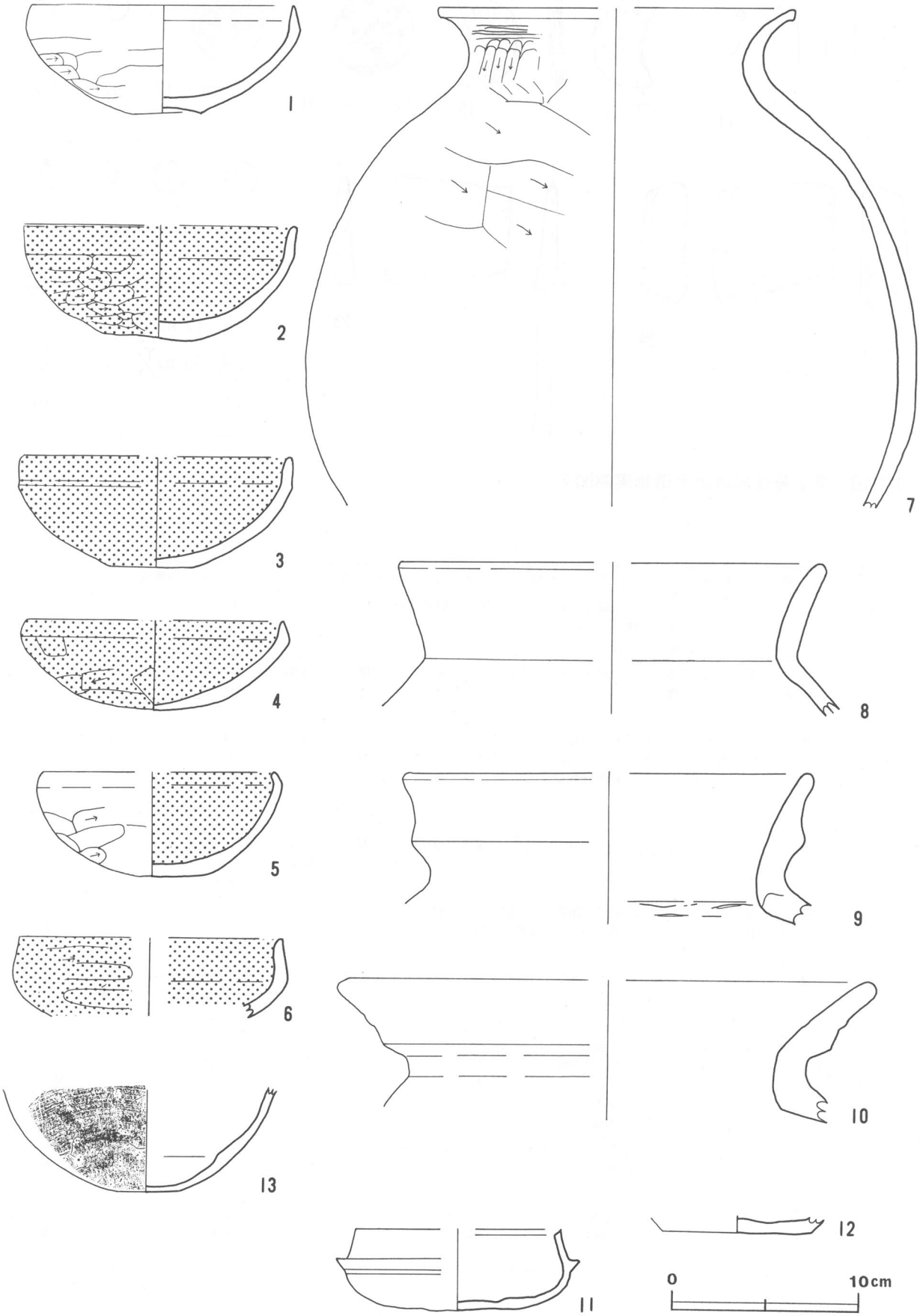
1　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2　黒褐色　ローム粒子少量，炭化物極微量
3　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，焼土粒子極微量
4　暗褐色　炭化粒子・ローム粒子微量
5　暗褐色　焼土粒子中量，ローム粒子微量
6　黒褐色　焼土粒子少量，ローム粒子微量
7　褐　色　焼土粒子・ローム粒子少量，締り強
8　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
9　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

遺物　覆土上層から床面直上にかけて，坏，甕の土師器片が中量出土し，須恵器の坏，坏身が少量出土している。第10・11図1～6の坏の内，3は南東壁際の覆土上層から，7～10の甕の内，7は北東壁際の床面直上から横位の状態で，9は中央寄りの覆土上層から出土している。11～13は須恵器片で，11が東寄りの覆土下層から出土している　坏片が接合したもので，12，13の坏と甑は中央寄りと南東壁際の覆土中層から出土している。15，16の勾玉と双孔円板は北東壁際の覆土下層と履土中から出土し，17の双孔円板は北西壁際の履土下層から出土している。18～22の臼玉は，19，21，22が履土下層から，その他は覆土中から出土している。23のガラス玉は北西寄りの履土下層から，24，25の砥石は共に覆土中から出土している。その他の出土遺物では，14の勾玉が試掘で出土している。

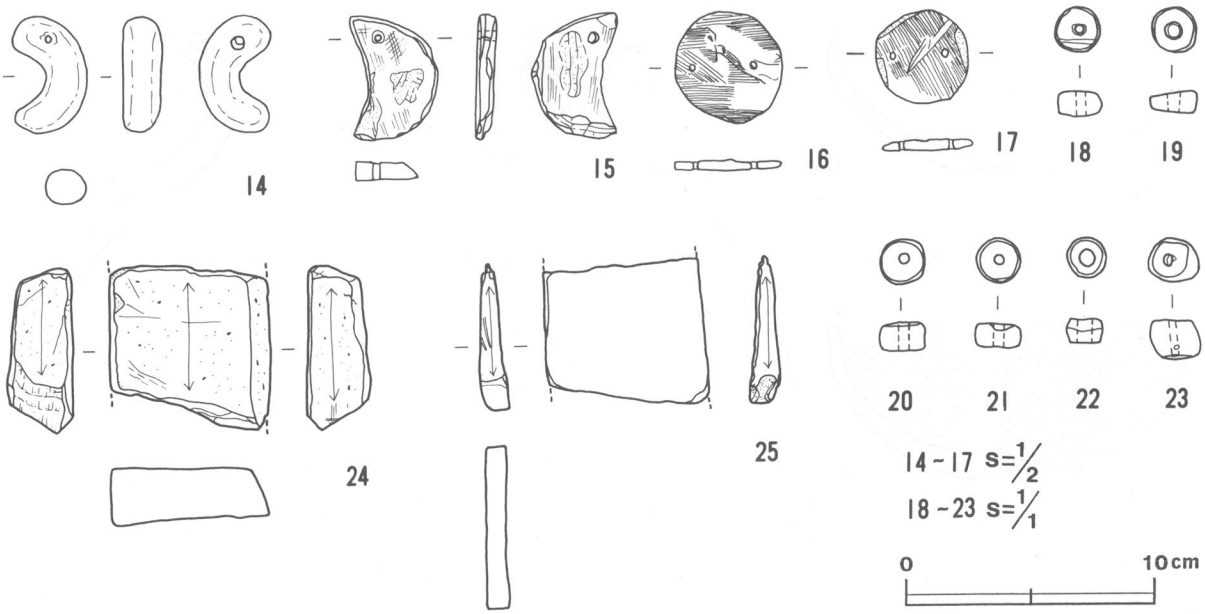
所見　本跡は，当遺跡最大の住居跡である。出土遺物から当遺跡内の住居跡でも特殊な遺構と考えられ，特に祭祀行為等との関係が推測される。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第10図 1	坏 土師器	A　14.0 B　4.6 C　3.7	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラ削り後ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい橙色 普通	P14　60% PL11 覆土中 内面煤付着
2	坏 土師器	A［14.6］ B　6.2 C　4.7	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラ削り後ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P15　50% PL11 覆土中
3	坏 土師器	A［13.8］ B　5.9 C　4.5	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に稜を持ち，口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・雲母 赤褐色 普通	P16　50% PL11 南東壁際覆土上層
4	坏 土師器	A［13.6］ B（4.8）	底部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P17　25% 覆土中 二次焼成



第10図　第３号住居跡出土遺物実測図(1)



第11図　第3号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第10図 5	坏 土師器	A [12.1] B　5.6	底部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部外面ヘラ削り後ナデ。内面赤彩。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P18　30% PL11　覆土中 内面摩耗
6	坏 土師器	A [14.0] B (4.3)	体部から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P19　5% 覆土中 二次焼成
7	甕 土師器	A [19.0] B (26.7)	体部中位から口縁部の破片。体部は球形状を呈し，最大径を中位にもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラ削り。体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面ヘラナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P10　30% PL11 北東壁際床面直上 外面煤付着
8	甕 土師器	A [23.0] B (7.8)	体部上位から口縁部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラ削り後ヘラナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P11　5% 覆土中
9	甕 土師器	A [22.0] B (7.1)	口縁部の破片。頸部と口縁部との堺に弱い稜を持つ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P12　5% 中央寄り覆土上層
10	甕 土師器	A [29.0] B (6.7)	口縁部の破片。頸部と口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P13　5% 覆土中
11	坏身 須恵器	A [11.0] B　4.4 C (3.0)	底部から口縁部の破片。平底気味の丸底。体部は内彎しながら立ち上がり受部に至る。受部は外上方に伸び，端部はシャープである。口縁部は内傾して立ち上がる。	巻き上げ，横ナデ整形。体部下位ヘラ削り。	砂粒・長石・石英 灰白色 良好	P20　30% PL11 東寄り覆土下層
12	坏 須恵器	A [7.0] B (7.8)	底部の破片。平底。底部から体部にかけ内彎しながら立ち上がる。	巻き上げ，底部ヘラ削り。	砂粒・長石・石英 褐灰色 良好	P21　5% 中央寄り覆土中層
13	甑 須恵器	B　5.6 C　3.0	底部から体部下位の破片。丸底で，内面に窪みを持つ。体部は内彎しながら立ち上がる。	巻き上げ，横ナデ整形。底部内・外面ヘラナデ。	砂粒 黒褐色 良好	P22　10% 南東壁際覆土中層

図版番号	種　別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第11図14	勾　玉	3.1	1.9	0.9	0.4	7.2	100	メノウ	覆土中	Q4　PL19
15	勾　玉	3.4	2.2	0.5	0.2	6.1	100	片岩	北東壁付近覆土下層	Q5　PL19
16	双孔円板	3.0	2.5	0.3	0.15	4.6	100	片岩	覆土中	Q6　PL19
17	双孔円板	2.5	2.5	0.3	0.15	(3.6)	90	片岩	北西壁付近覆土下層	Q7　PL19
18	臼　玉	0.6	0.6	0.3	0.11	0.2	100	片岩	覆土中	Q8
19	臼　玉	0.6	0.6	0.3	0.2	0.1	100	片岩	中央部覆土下層	Q9
20	臼　玉	0.6	0.6	0.4	0.2	0.3	100	片岩	覆土中	Q11
21	臼　玉	0.6	0.6	0.3	0.1	0.1	100	片岩	中央部覆土下層	Q12
22	臼　玉	0.5	0.5	0.5	0.2	0.2	100	片岩	北西壁付近覆土下層	Q13
23	ガラス玉	0.7	0.6	0.5	0.1	0.3	100	—	北西壁付近覆土下層	Q10　PL19
24	砥　石	(6.6)	6.4	(2.5)	—	(171.3)	40	頁岩	覆土中	Q14
25	砥　石	(6.6)	5.8	(1.2)	—	(66.0)	40	頁岩	覆土中	Q15

第5号住居跡（第12図）

位置　調査区の西部やや南，W5a9区。

規模と平面形　長軸5.90m，短軸5.70mの方形。

主軸方向　N－55°－E

壁　壁高は30～40cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。耕作による撹乱が進み，南東壁の立ち上がりは取り分け不鮮明である。

床　耕作による撹乱を受け，一部が残存する。床面は凹凸があり，踏み締まりは弱い。

ピット　4か所（P_1～P_4）。P_1～P_4は長径27～37cm，短径25～31cmの楕円形または不整楕円形で，深さは26～68cmである。規模や配列から主柱穴と考えられる。

炉　中央から西壁寄りに付設され，平面形は長径92cm，短径52cmの楕円形で，床面を20cm掘り窪めた地床炉である。炉床は，中央部が火熱を受け赤変硬化している。

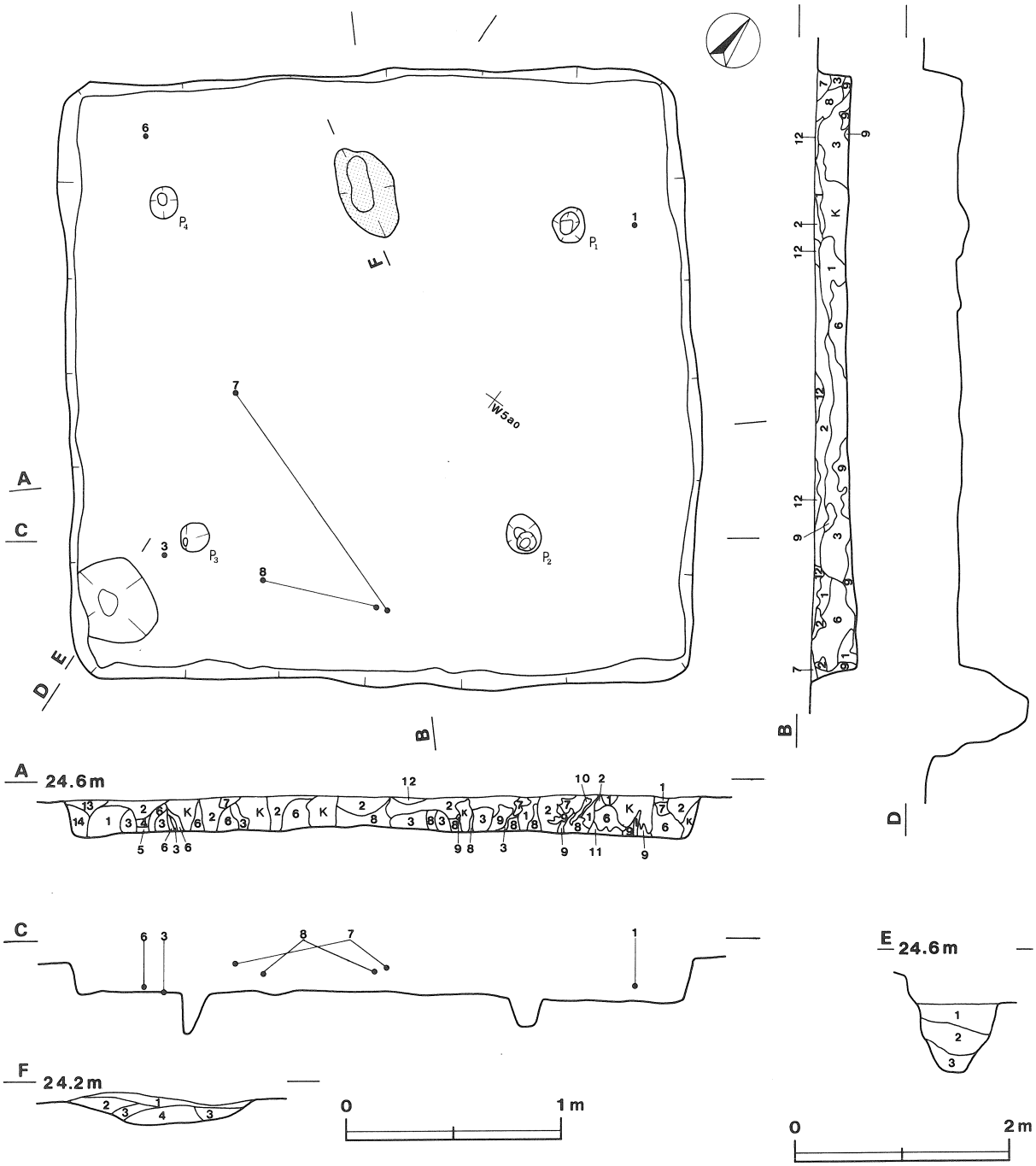
炉土層解説
1　褐　色　焼土小ブロック・ローム粒子少量
2　暗褐色　焼土小ブロック・炭化物粒子・ローム小ブロック少量
3　褐　色　焼土小ブロック・炭化物粒子・ローム小ブロック少量
4　赤褐色　焼土小ブロック多量，炭化物粒子・ローム粒子少量

貯蔵穴　南コーナ付近に付設され，平面形は長径81cm，短径60cmの楕円形で，深さは66cmである。断面はU字形で，底面は平坦である。

貯蔵穴土層解説
1　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量
3　褐　色　ローム小ブロック少量，ローム粒子・焼土粒子極微量

覆土　14層から成る。壁際下層部には流れ込みと思われる暗褐色土が堆積している。北東壁東側と南東壁南側の床面上には炭化材混じりの焼土が堆積し，覆土下層から中層にはローム ブロックを含む褐色土が厚く堆積している。中層から上層にかけて焼土粒子，炭化粒子を含む黒褐色土が細かく入り組みながら複雑に堆積している。人為堆積と考えられる。

土層解説
1　黒褐色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子極微量
2　暗褐色　焼土粒子・炭化粒子極微量，ローム粒子少量
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子微量
4　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子微量
5　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，締まり強
6　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック微量
7　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
8　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子極微量
9　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量



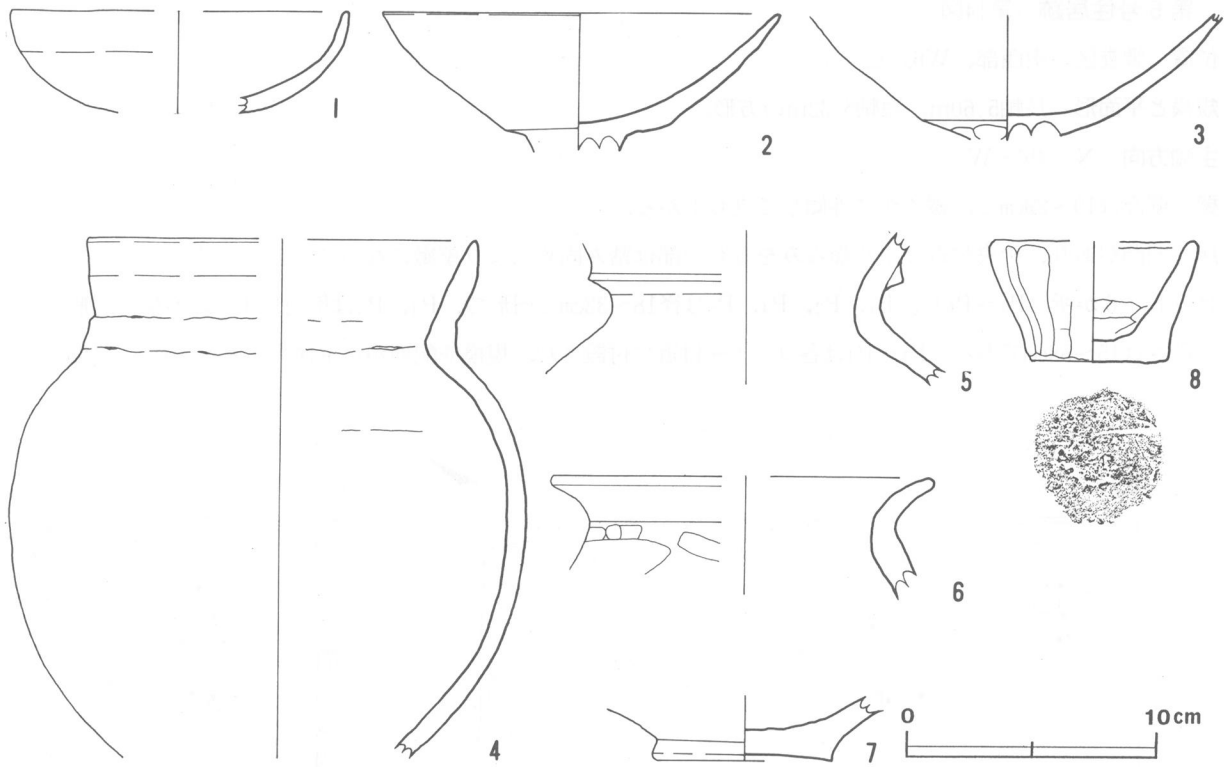
第12図　第５号住居跡実測図

土層解説

10　暗 褐 色　炭化粒子中量，ローム粒子微量
11　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量
12　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，締まり強，粘性強
13　褐　　色　ローム中ブロック中量，ローム粒子極微量
14　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，粘性強

遺物　覆土上層から床面直上にかけ土師器片が中量出土している。第13図１の坏は北寄りの覆土下層から斜位の状態で，３の高坏は南コーナー付近の床面直上から出土している。６，７の甕は，６が西寄りの覆土下層から，７が南寄りの覆土上層から出土している。８の手捏土器は東寄りの覆土中層から出土している。土師器片が接合したものである。２，４，５は覆土中から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から５世紀後半と考えられる。



第13図　第５号住居跡出土遺物実測図

第５号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第13図 1	坏 土師器	A [13.6] B (4.0)	体部から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石 浅黄橙色 普通	P28　20% 北寄り覆土下層
2	高　坏 土師器	A　15.9 B (5.5)	坏部の破片。脚部との境に弱い稜を持ち，外傾してラッパ状に開いて立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P29　40% PL11 覆土中
3	高　坏 土師器	B (4.8)	坏部の破片。脚部との境に弱い稜を持ち，外傾して開く。	坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。	砂粒・長石 浅黄橙色 普通	P30　20% 南コーナー付近 床面直上 内・外面煤付着
4	甕 土師器	A [15.6] B (20.7)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に段を持ち，やや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラ削り後ナデ。頸部に輪積み痕。	砂粒・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P24　30% PL11　覆土中 二次焼成
5	甕 土師器	B (5.3)	体部上位から口縁部の破片。頸部と口縁部との境に強い稜を持ち，端部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・スコリア にぶい黄橙色 普通	P25　5% 覆土中 内・外面剝離
6	甕 土師器	A [15.4] B (3.8)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ磨き，内面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P26　5% 西寄り覆土下層 外面煤付着
7	甕 土師器	B [2.0] C　7.0	底部から体部下位の破片。突出した平底。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。底部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P27　5% 南寄り覆土上層
8	手捏土器 土師器	A [8.4] B　4.9 C　5.4	底部から口縁部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。底部及び体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	P31　50% 東寄り覆土中層 体部外面指頭痕 外面煤付着

第６号住居跡（第14図）

位置　調査区の南西部，W6$_{d2}$区。

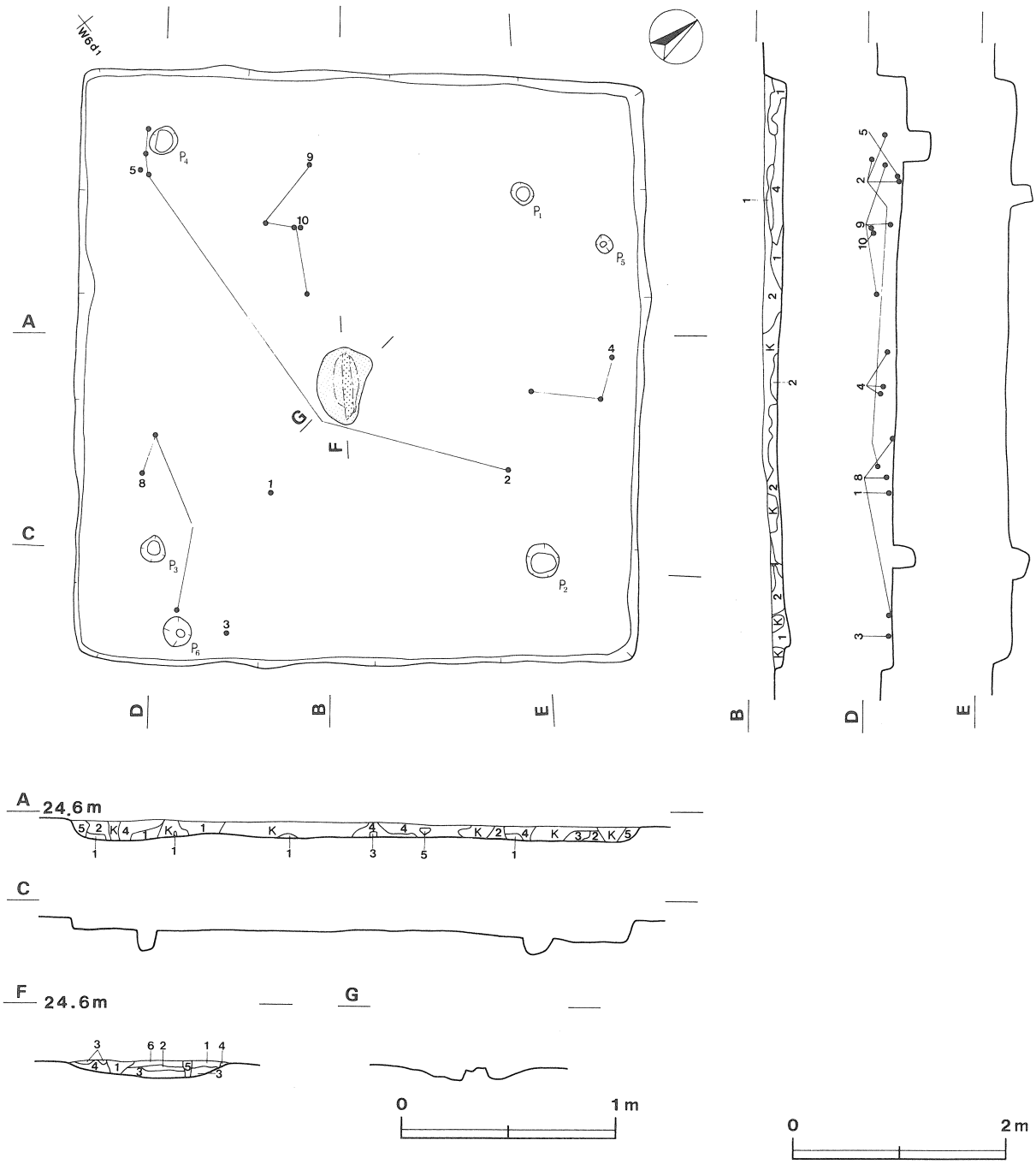
規模と平面形　長軸5.60m，短軸5.32mの方形。

主軸方向　N－49°－W

壁　壁高は10～29cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

床　凹凸があり，中央付近にやや膨らみをもち一部は踏み固めにより堅緻になっている。

ピット　６か所（P_1～P_6）。P_1，P_2，P_4，P_6は径18～33cmの円形で，P_3，P_5は楕円形または不整楕円形で，深さは15～58cmである。P_1～P_4は各コーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5はP_1



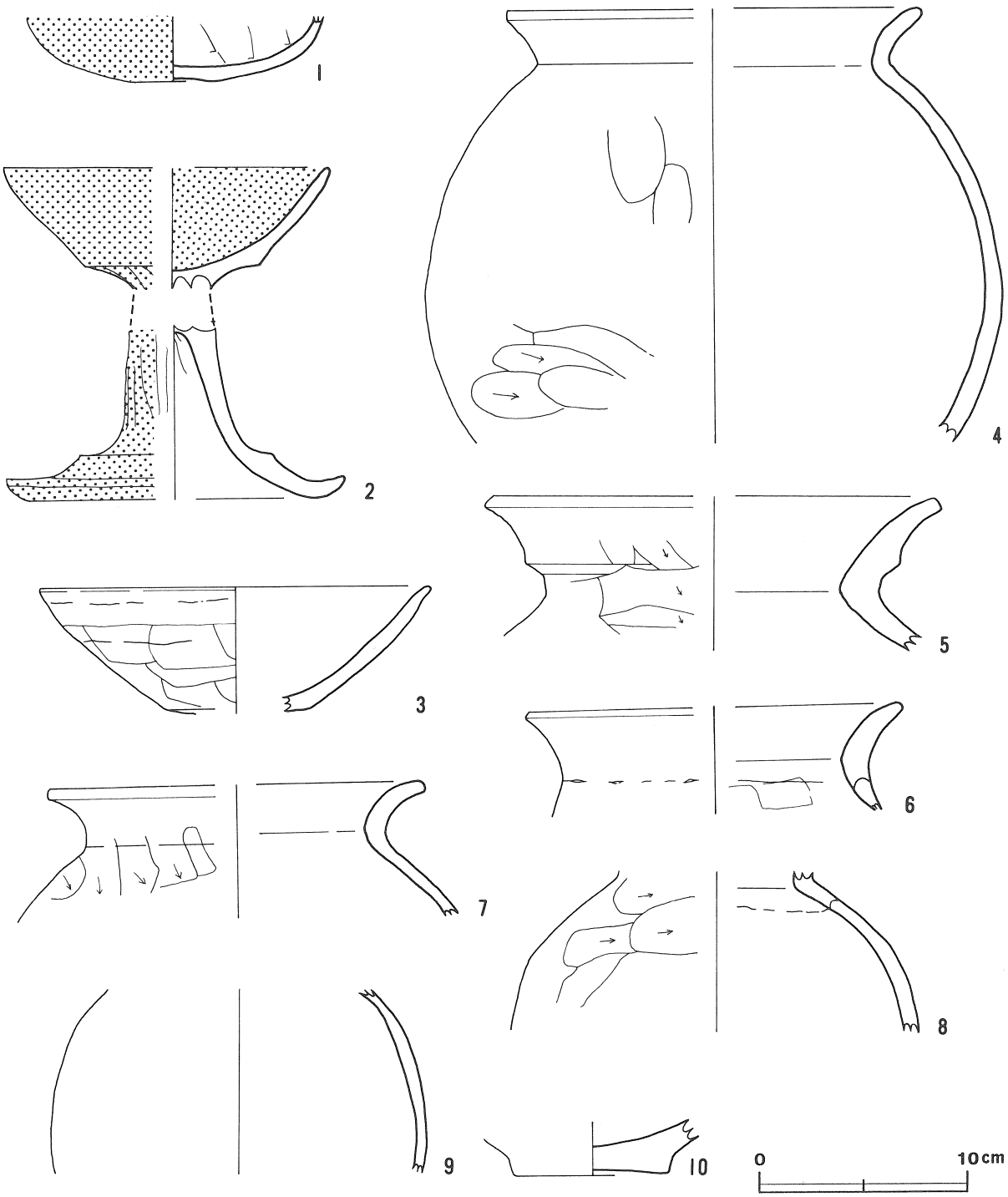
第14図　第６号住居跡実測図

から北東壁寄りに，P_6はP_3から南東壁寄りに付設されている。位置や配置から補助柱穴と思われる。

炉　中央寄りに付設され，平面形は長径75cm，短径23cmの長楕円形で，床面を8cm掘り窪めた地床炉である。炉床は一部火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

1　褐　　色　焼土粒子少量，ローム粒子極微量
2　明赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子微量
3　明赤褐色　焼土小ブロック少量，焼土粒子極微量
4　赤 褐 色　焼土小ブロック少量，炭化粒子微量
5　暗 褐 色　焼土粒子少量，ローム粒子微量
6　褐　　色　焼土粒子少量，炭化粒子微量



第15図　第6号住居跡出土遺物実測図

覆土　5層から成る。壁際にはロームブロックを含む明褐色土が堆積し，床面上から覆土中層まで褐色土が堆積している。南東壁寄りでは暗褐色土が褐色土と複雑に堆積し，中央部では暗褐色土と褐色土の層位を明瞭に分けることができる。人為堆積と考えられる。

土層解説
1　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子小量
2　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
3　暗褐色　ローム中ブロック・ローム粒子少量
4　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子微量
5　明褐色　ローム小ブロック・ローム粒子微量

遺物　北西寄りの覆土上層から床面直上にかけて土師器片が中量出土している。第15図1の坏は床面直上から，2の高坏は西コーナー寄りの覆土上層から床面直上にかけて出土している坏部と，東寄りの覆土中層から出土している脚部が接合したもので，3の高坏は南寄りの床面直上から出土している。4～10の甕は，4が北東壁寄りの覆土上層から，5が西コーナー寄りの覆土下層から正位の状態で，6，7は覆土中から，8は南寄りの覆土下層から床面直上に横位の状態で，9，10は北西寄りの覆土上層から覆土下層に逆位の状態と正位の状態で出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第15図 1	坏 土師器	B（3.2） C　3.6	底部から体部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部及び体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。外面赤彩。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P39　20% 床面直上 外面煤付着
2	高　坏 土師器	A［15.7］ B［15.8］ D［8.2］ E［15.1］	脚部及び坏部一部欠損。脚部は円筒状で，裾部は段を有し，穏やかに広がり末端は外傾する。坏部は外傾して開く。	脚部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。裾部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・スコリア にぶい黄橙色 普通	P40　60% PL11 西コーナーより覆土上層から床面直上 内・外面煤付着
3	高　坏 土師器	A［18.8］ B（6.0）	坏部の破片。脚部との境に稜を持ち，外傾して開く。口縁部に極めて弱い稜を持つ。	坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P41　20% PL11 南寄り床面直上 外面煤付着
4	甕 土師器	A［20.0］ B（20.8）	体部中位から口縁部の破片。体部は球形状を呈し，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 浅黄橙色 普通	P32　25% 北東壁寄り覆土上層　二次焼成
5	甕 土師器	A［22.0］ B（6.7）	体部上位から口縁部の破片。頸部は「く」の字状を呈し，口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部は外反する。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P33　15% 西コーナーより覆土下層
6	甕 土師器	A［18.2］ B（5.1）	口縁部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面輪積み痕。	砂粒・雲母 にぶい橙色　普通	P34　10% 覆土中
7	甕 土師器	A［17.8］ C（6.4）	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P35　10% 覆土中
8	甕 土師器	B（7.8）	体部中位から頸部の破片。体部は球形状を呈し，頸部に至る。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ヘラ磨き。	砂粒・石英・スコリア 明赤褐色 普通	P36　15% 南寄り覆土下層 内面煤付着
9	甕 土師器	B（9.0）	体部上位の破片。体部は球形状を呈する。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・スコリア にぶい黄色 普通	P37　10% 北西寄り覆土上層　外面煤付着
10	甕 土師器	B（1.8） C　7.4	底部の破片。平底。体部は内彎しながら立つ上がる。	底部及び体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色　普通	P38　10% 北西寄り覆土下層

第７号住居跡（第16図）

位置　調査区の西部中央寄り，V6f1区。

規模と平面形　長軸8.22m，短軸8.02mの方形。

主軸方向　N－43°－W

壁　壁上部は耕作による撹乱を受けているが，底部から中間部にかけてほぼ残存している。壁高は28～42cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

壁溝　壁下を全周している。上幅５～15cm，深さ７～10cmで，断面形はＵ字形である。

間仕切り溝　幅12～26cm，深さ5～10cmで，北東壁から２条，南東壁から１条，南西壁から２条，北西壁から１条，それぞれ中央に向かって伸びている。北東壁北側の間仕切り溝は，北西壁へ逆Ｌ字状に回っている。

床　ほぼ平坦で，よく踏み固められている。南東壁東コーナー付近から中央付近に沿って焼土の広がりがみられる。

ピット　４か所（P_1～P_4）。P_1，P_2，P_4は長径25～30cm，短径23～26cmの楕円形で，P_3は径26cmの円形である。各コーナー付近に付設され，深さは70～75cmである。規模や配列から主柱穴と考えられる。

炉　２か所。炉１は中央部から北東寄りに付設されており，平面形は長径109cm，短径67cmの長楕円形で，床面を５cm掘り窪めた地床炉である。炉２は南西壁西側の間仕切り溝に寄ったところに付設されており，平面形は長径110～短径60cmの隅丸長方形で，床面を５cm掘り窪めた地床炉である。炉１・２の覆土には焼土ブロック，焼土ブロック塊が堆積し，炉床は赤変硬化している。

炉１土層解説
1　褐　　色　焼土粒子・ローム粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
3　暗 褐 色　焼土小ブロック・焼土粒子少量
4　褐　　色　焼土粒子・ローム粒子少量
5　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

炉２土層解説
1　暗褐色　焼土粒子・炭化粒子少量
2　赤褐色　ローム小ブロック中量，焼土粒子・ローム粒子少量
3　褐　色　ローム小ブロック中量，ローム粒子少量

貯蔵穴　南東壁中央部から南コーナーに向かって壁沿いに付設され，平面形は長径110cm，短径73cmの楕円形で，深さ53cmの円筒状に掘り込まれている。底面はやや内側に緩く傾斜している。

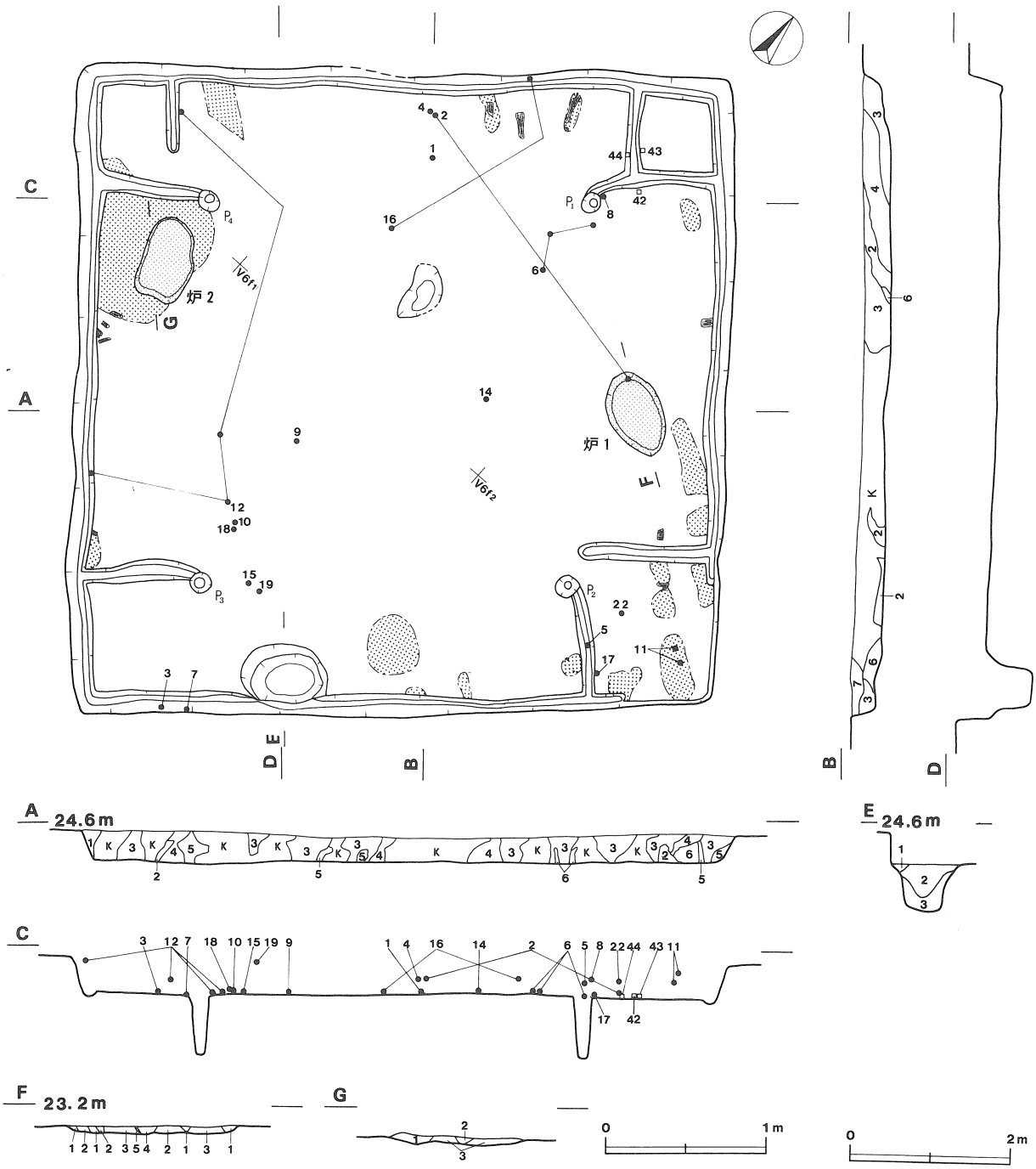
貯蔵穴土層解説
1　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　暗 褐 色　ローム中ブロック微量，ローム粒子・焼土粒子極微量
3　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子極微量

覆土　７層から成る。壁際には流れ込みと思われる褐色土が堆積している。床面上南東壁沿い中央付近に焼土の広がりがみられる。覆土下層から上層にかけて黒褐色土が帯状に厚く堆積している状況が見られる。自然堆積と考えられる。

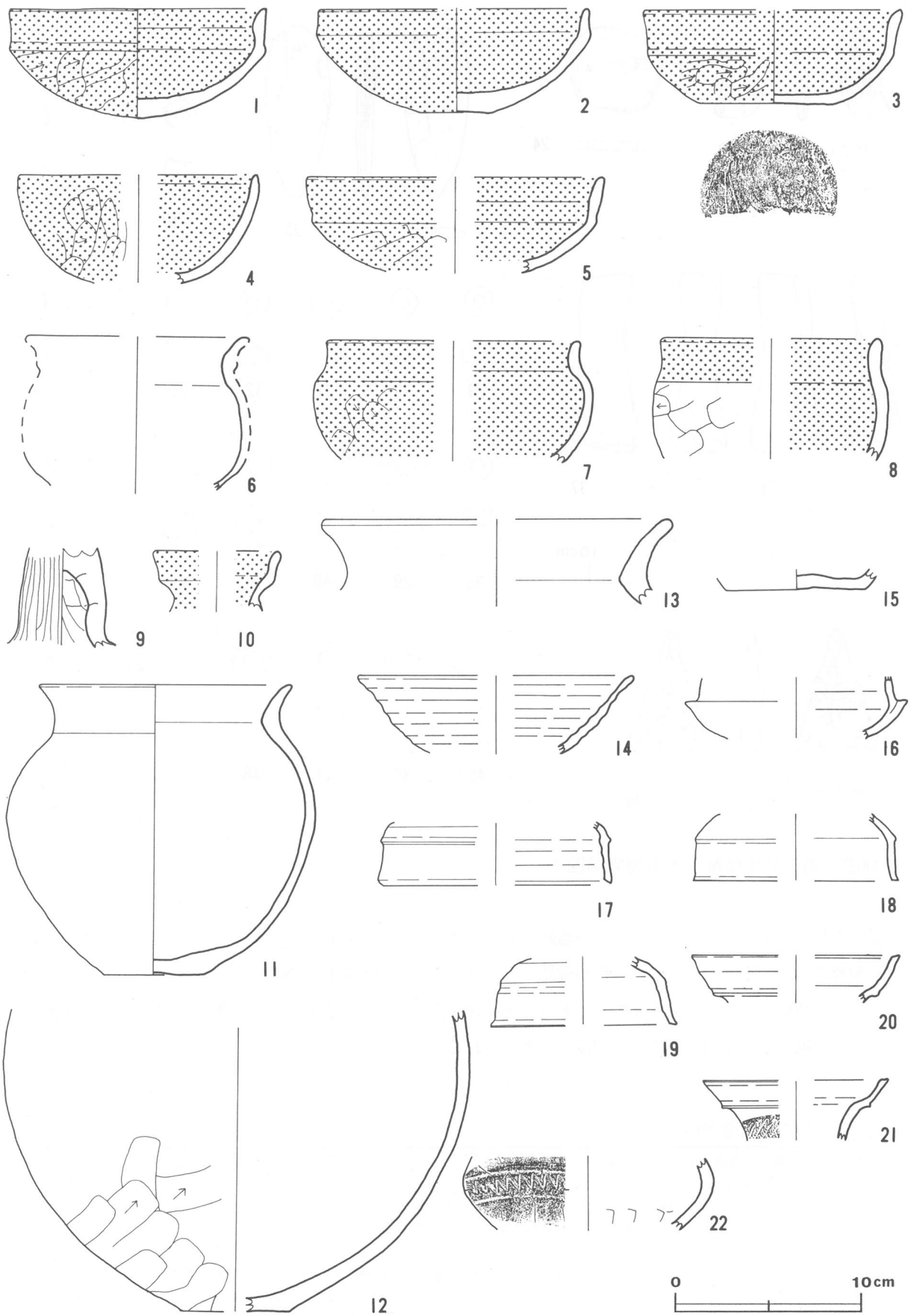
土層解説
1　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極微量
3　黒 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
4　黒 褐 色　ローム小ブロック微量，ローム粒子極微量
5　明 褐 色　ローム小ブロック多量，ローム粒子少量
6　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極微量
7　黒 褐 色　ローム小ブロック多量，ローム粒子極微量

遺物　各コーナー付近の覆土上層から床面直上にかけて遺物が多量に出土している。第17・18図１～５の坏は，１が北西寄りの床面直上から逆位に伏せた状態で，２は北寄りの覆土下層から，３は南東壁際の床面直上から，４は北西寄りの覆土中層から，５は東寄りの覆土下層から出土している。６～８の椀は，６が北東寄りの床面直上から出土している土師器片が接合したもので，７は覆土中から，８は北寄りの覆土中層から出土している。９の高坏は中央付近の床面直上から，10の壺は南寄りの床面直上から横位の状態で出土している。11～13の甕は，11が東コーナー付近の覆土中層から，12が西寄りの覆土中層から覆土下層にかけ出土してい

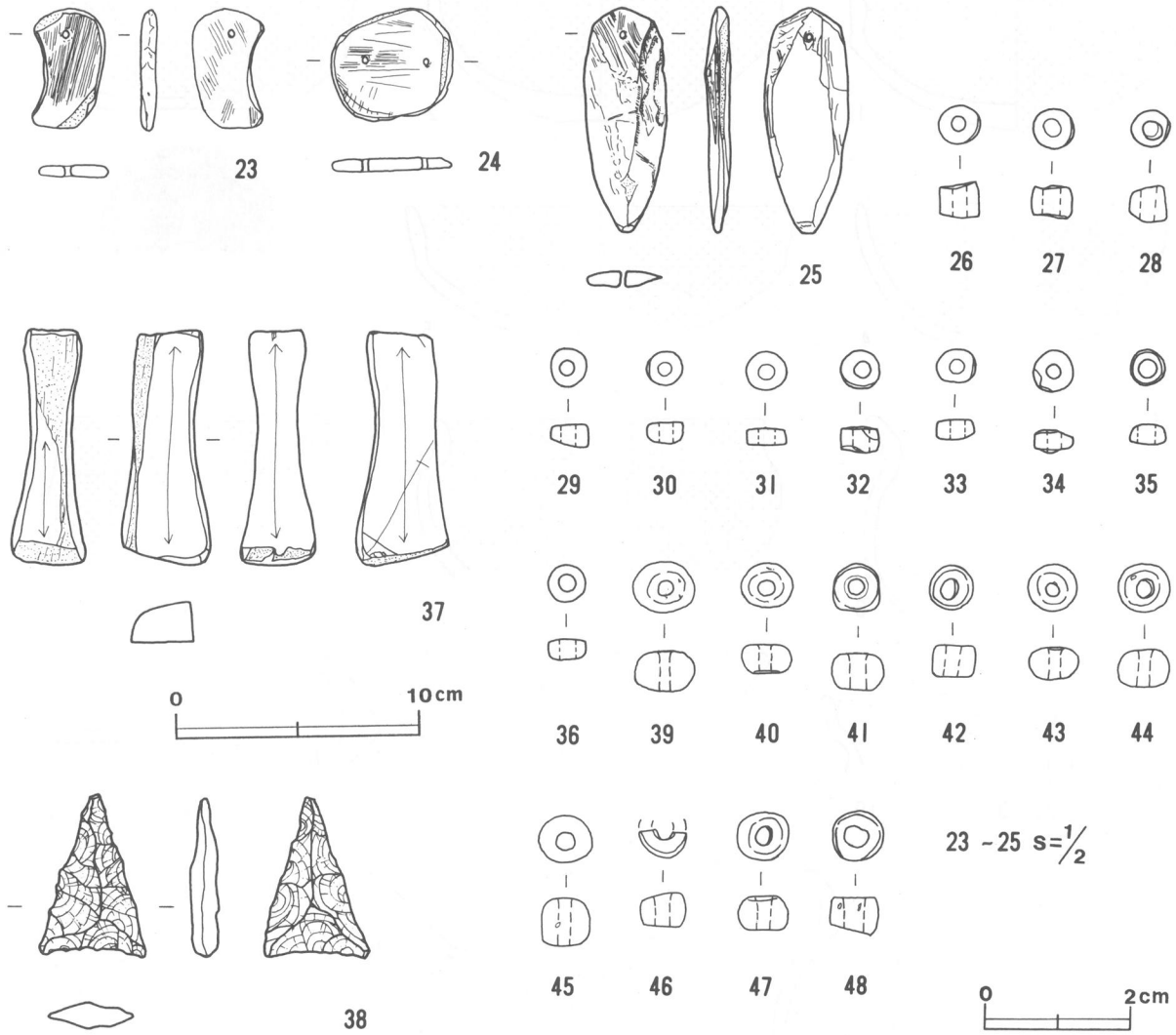
る土師器片が接合し，13は覆土中から出土している。14～22が須恵器で，14，15の坏は中央付近の床面直上と南寄りの床面直上から出土している。16の坏身は，北寄りの覆土中層と床面直上から出土している須恵器片が接合したもので，17の坏蓋は東コーナー付近の床面直上から，18の坏蓋は南寄りの床面直上から，19の坏蓋は南寄りの覆土上層から出土している。20，21の甕は覆土中から，22の甕は覆土中層から横位の状態で出土したものである。その他，23～48の勾玉，双孔円板，剣形石製模造品，臼玉，砥石，ガラス玉が覆土中から出土しているが，このうち42，43，44は北寄りの床面直上から出土している。38の石鏃は混入したものと思われる。



第16図　第7号住居跡実測図



第17図　第７号住居跡出土遺物実測図(1)



第18図　第７号住居跡出土遺物実測図(2)

所見　本跡は，炉を２か所持つ大型の住居跡である。出土している遺物の中に赤彩される土師器が多く，剣形石製模造品，勾玉，臼玉，双孔円板が確認され，ガラス玉の特殊遺物が多量に出土していることから，集落の中での特殊な地位を占める建物跡であった可能性が高く，また，祭祀行為との関係も考えられる住居跡である。時期は，出土遺物から５世紀後半と考えられる。

第７号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第17図 1	坏 土師器	A　11.8 B　5.9	口縁部一部欠損。丸部。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に稜を持つ。口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面ナデ。底部及び体部外面ヘラ削り後ナデ，内面雑なヘラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P46　95% PL11 北西寄り床面直上　内面摩耗
2	坏 土師器	A［15.7］ B　5.6 C　3.9	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。底部及び体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤褐色 普通	P47　40% PL11 北寄り覆土下層 内面摩耗

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第17図 3	坏 土師器	A [13.8] B 5.0 C 7.2	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり,口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。底部及び体部外面ヘラ削り後ナデ,内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P48 40% PL11 南東際壁床面直上 二次焼成
4	坏 土師器	A [12.8] B (5.9)	体部及び口縁部の破片。丸底。体部から口縁部にかけて内彎して立ち上がる。口縁部内面に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ,内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英・雲母 赤褐色 普通	P50 25% 北西寄り覆土中層
5	坏 土師器	A [16.0] B (5.2)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり,口縁部との境に稜を持つ。口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ,内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤褐色 普通	P52 20% 東寄り覆土下層
6	椀 土師器	A [12.0] B (8.2)	体部から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり,口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ,内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P49 25% 北東寄り床面直上 内・外面剝離
7	椀 土師器	A [13.6] B (6.5)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり,口縁部との境に稜を持つ。口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ,内面ヘラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P51 20% 覆土中
8	椀 土師器	A [12.0] B (6.6)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり,口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き,内面ヘラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤褐色 普通	P53 10% 北寄り覆土中層
9	高　坏 土師器	B (5.2)	脚部の破片。円筒状を呈する。	外面ヘラ削り後ナデ,内面ヘラナデ。	砂粒・パミス 灰褐色 普通	P54 10% 中央付近床面直上
10	壺 土師器	A [6.8] B (3.2)	口縁部の破片。外傾して立ち上がり,中位に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P42 10% 南寄り床面直上
11	甕 土師器	A 13.6 B 15.7 C 5.5	体部及び口縁部一部欠損。平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。頸部はくびれ,口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ,内面ヘラナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	P43 95% PL12 東コーナー付近覆土中層 二次焼成
12	甕 土師器	B (16.2) C [5.6]	底部から体部上位の破片。平底。体部は球形状を呈する。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ,内面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石にぶい 橙色 普通	P44 15% 西寄りの覆土中層から下層 二次焼成
13	甕 土師器	A [19.0] B (3.8)	口縁部破片。「く」の字状に開き外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・パミス にぶい橙色 普通	P45 10% 覆土中
14	坏 須恵器	A [14.8] B (4.2)	体部下位から口縁部の破片。体部は外傾して立ち上がり,口縁部は外傾し,端部に段を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部下位手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母 褐灰色 普通	P55 10% PL12 中央付近床面直上
15	坏 須恵器	B (7.0) C [7.4]	底部の破片。平底。底部から体部にかけ外傾する。	底部外面ヘラ削り,内面横ナデ。	砂粒・石英・長石 褐灰色 良好	P61 5% PL12 南寄り床面直上
16	坏　身 須恵器	B (3.2)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり,受部に至る。受部は長く外方に伸び,端部は丸味を帯びている。	巻き上げ,横ナデ整形。体部下位ヘラ削り。	砂粒・長石・石英 黄灰色 良好	P60 10% PL12 北寄りの覆土中層から床面直上
17	坏　蓋 須恵器	A [12.6] B (3.3)	天井部から口縁部の破片。天井部は内彎しながら口縁部に至り,口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は外傾し,端部に段を持つ。	巻き上げ,横ナデ整形。天井部外面回転ヘラ削り。天井部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 褐灰色 良好	P56 5% 東コーナー付近床面直上
18	坏　蓋 須恵器	A [11.0] B (3.6)	天井部から口縁部の破片。天井部は内彎しながら口縁部に至り,口縁部との境に弱い稜を持つ。端部は内傾する平面を成す。	巻き上げ,横ナデ整形。天井部外面回転ヘラ削り。天井部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 黄灰色 良好	P57 5% 南寄り床面直上
19	坏　蓋 須恵器	A [10.0] B 3.6	天井部から口縁部の破片。天井部は内彎しながら口縁部に至り,口縁部との境に弱い稜を持つ。端部は外反する。	巻き上げ,横ナデ整形。天井部外面回転ヘラ削り。天井部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 褐灰色 良好	P58 5% 南寄り覆土上層

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第17図 20	𤮈 須恵器	A［11.2］ B（2.5）	頸部から口縁部の破片。頸部は外傾して立ち上がり，口縁部との境に稜を持つ。端部は水平で僅かに凹面を成す。	巻き上げ，横ナデ整形。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 赤灰色 良好	P59　5% 覆土中
21	𤮈 須恵器	A［10.0］ B（3.3）	頸部から口縁部の破片。頸部は外反気味に立ち上がり，口縁部との境に強い稜を持ち，内彎して外上方に開き，稜の下に8条の櫛描波状文を施す。端部は水平で僅かに凹面を成す。	巻き上げ，横ナデ整形。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰褐色 良好	P62　5% PL12 覆土中
22	𤮈 須恵器	B（3.8）	体部中位の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，中央位に6条の櫛描波状紋を施す。	内・外面横ナデ。	砂粒・長石 褐灰色 良好	P63　10% PL12 覆土中層

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第18図23	勾　玉	3.3	1.8	0.4	0.2	4.9	100	片岩	覆土中	Q17　PL19
24	双孔円板	3.3	3.1	0.4	0.15	7.3	100	片岩	覆土中	Q18　PL19
25	剣形石製模造品	6.2	2.0	0.4	0.2	11.8	100	片岩	覆土中	Q19　PL19
26	臼　玉	0.5	0.5	0.5	0.2	0.3	100	片岩	覆土中	Q20
27	臼　玉	0.6	0.6	0.4	0.25	0.3	100	片岩	覆土中	Q21
28	臼　玉	0.5	0.5	0.5	0.2	0.2	100	片岩	覆土中	Q22
29	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	覆土中	Q23
30	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	覆土中	Q24
31	臼　玉	0.5	0.5	0.2	0.2	0.2	100	片岩	覆土中	Q25
32	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	覆土中	Q26
33	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	覆土中	Q27
34	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	覆土中	Q28
35	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	覆土中	Q29
36	臼　玉	0.5	0.5	0.2	0.2	0.4	100	片岩	覆土中	Q30
37	砥　石	(9.7)	3.7	1.6	—	(127.1)	95	頁岩	覆土中	Q31　PL19
38	石　鏃	2.2	1.5	0.3	—	0.6	100	チャート	覆土中	Q32　PL19
39	ガラス玉	0.7	0.8	0.5	0.2	0.4	100	—	覆土中	Q33　PL19
40	ガラス玉	0.6	0.6	0.4	0.2	0.4	100	—	覆土中	Q34　PL19
41	ガラス玉	0.7	0.7	0.5	0.3	0.3	100	—	覆土中	Q35　PL19
42	ガラス玉	0.6	0.6	0.4	0.2	0.2	100	—	北寄り床面直上	Q36　PL19
43	ガラス玉	0.7	0.7	0.4	0.2	0.2	100	—	北寄り床面直上	Q37　PL19
44	ガラス玉	0.7	0.7	0.5	0.2	0.3	100	—	北寄り床面直上	Q38　PL19
45	ガラス玉	0.7	0.7	0.7	0.2	0.3	100	—	覆土中	Q39　PL19
46	ガラス玉	0.6	(0.6)	0.5	(0.2)	(0.1)	50	—	覆土中	Q40　PL19
47	ガラス玉	0.7	0.7	0.5	0.2	0.4	100	—	覆土中	Q41　PL19
48	ガラス玉	0.7	0.7	0.5	0.3	0.3	100	—	覆土中	Q42　PL19

第8号住居跡（第19図）

位置　調査区の西部，V6e3区。

規模と平面形　長軸6.32m，短軸5.09mの長方形。

主軸方向　N－44°－E

壁　壁高は4～10cmで，緩やかに外傾している。掘り込みが浅いため南東壁の一部は殆ど残存せず，北西壁の一部分に壁を確認するのみである。

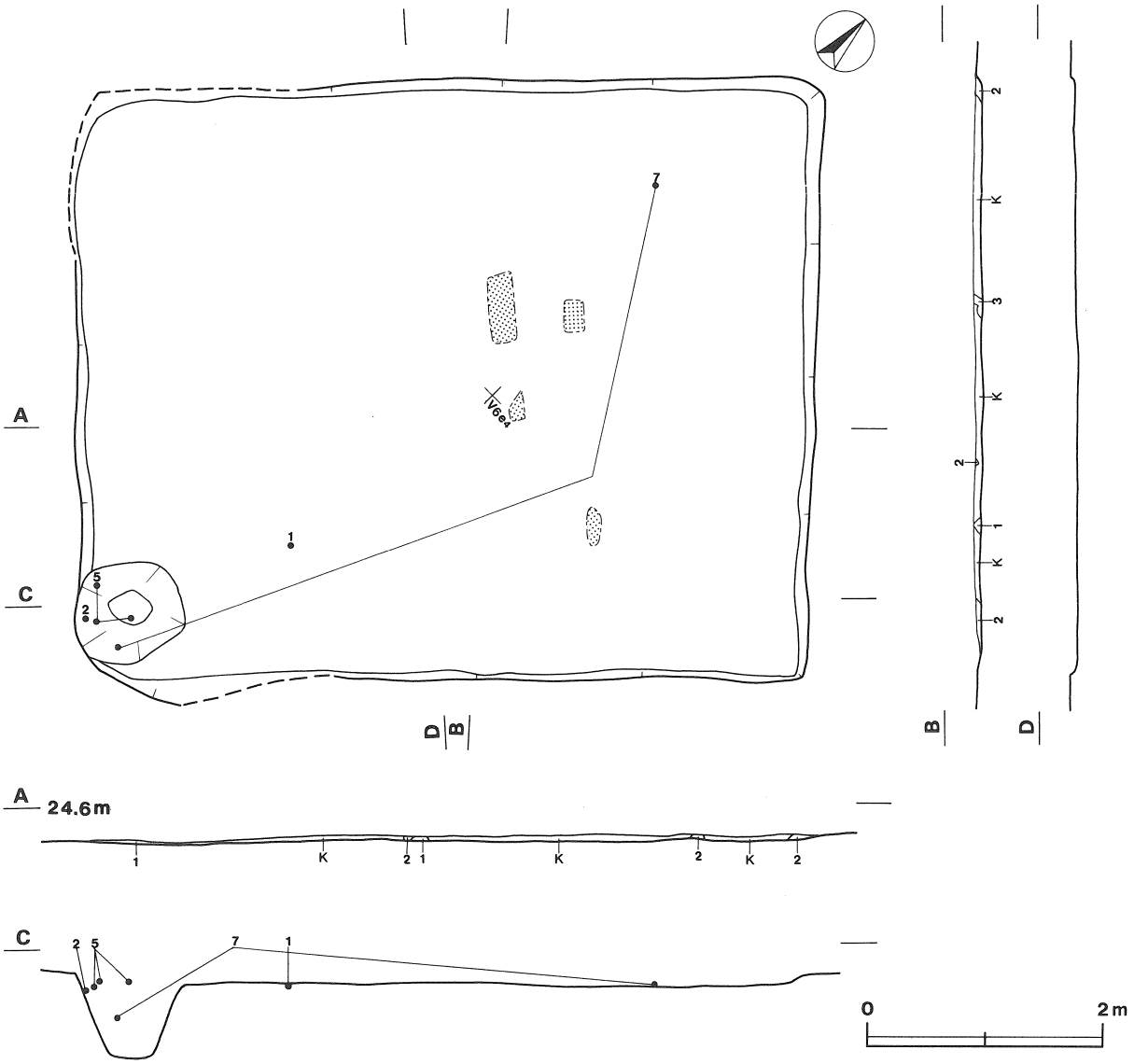
床　全体に耕作による撹乱を受け，褐色土中に床面と思われる硬質面の一部が確認できたが踏み締まりは弱い。

貯蔵穴　南コーナーに付設され，平面形は長径95cm，短径85cmの楕円形である。深さは60cmで，底面は平坦であり，断面はU字形に近い。

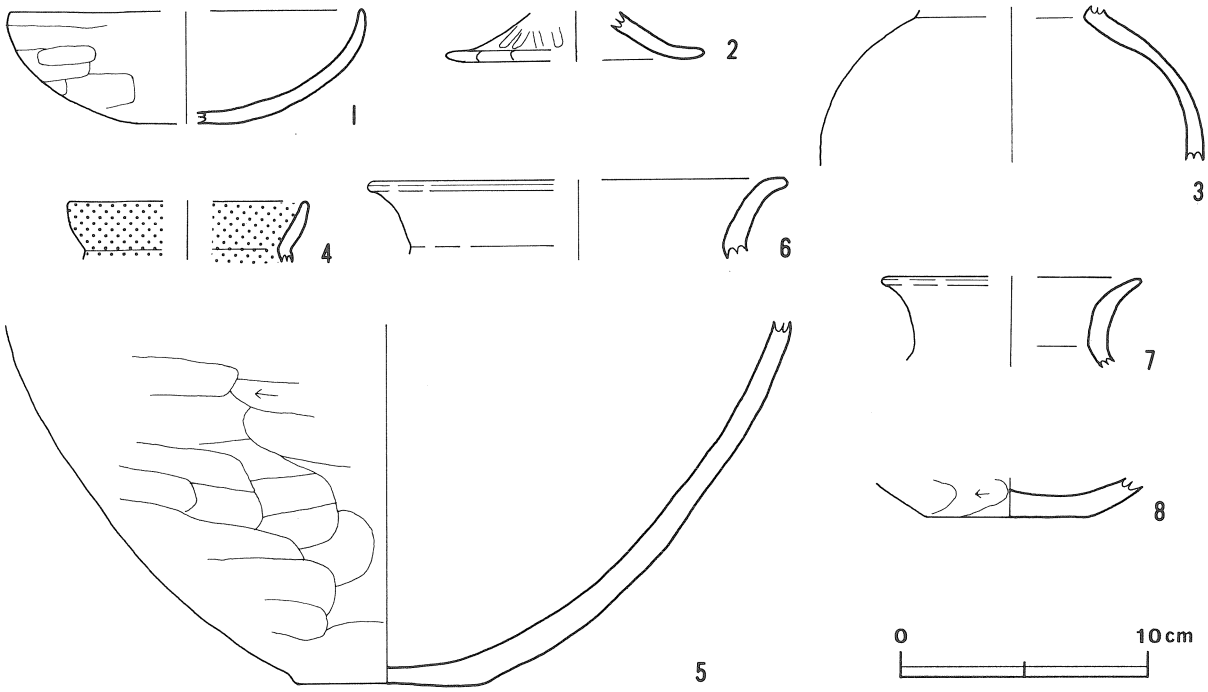
覆土　3層から成る。耕作による撹乱のため，遺存している部分は中央部に厚さ6cm程残っている覆土の一部だけである。

土層解説
1　黒 褐 色　ローム粒子少量，炭化粒子極微量
2　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　極暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

遺物　床面直上と炉内覆土中層から土師器片が少量出土している。第20図1の坏は南寄りの床面直上から，2の高坏は貯蔵穴内覆土上面から出土し，3の坩と4の小形壺は覆土中から出土している。5の甕は貯蔵穴内覆土上面から出土している土師器片が接合し，7の甕は北寄りの床面直上から出土している土師器片と貯蔵穴内覆土中層から出土している土師器片が接合したものである。



第19図　第8号住居跡実測図



第20図　第８号住居跡出土遺物実測図

所見　本跡からは，炉，ピットが確認できなかったが，遺構の形態及び規模から住居跡とした。時期は，出土遺物から５世紀後半と考えられる。

第８号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第20図 1	坏 土師器	A [14.2] B (4.5) C [4.0]	底部から口縁部の破片。底部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ヘラ磨き。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・パミス 灰白色　普通	P69　40% 南寄り床面直上
2	高　坏 土師器	D [10.4] E (2.0)	脚部片。下位で大きく開く。	脚部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・パミス にぶい褐色 普通	P71　5% 貯蔵穴内覆土上面
3	坩 土師器	B (6.3)	体部中位から頸部までの破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・スコリア 浅黄橙色 普通	P72　10% 覆土中 外面煤付着
4	小形壺 土師器	A [9.8] B (2.5)	頸部から口縁部の破片。頸部は括れ，口縁部は内彎する。	口縁部内・外面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤褐色　普通	P70　5% 覆土中
5	甕 土師器	B (14.5) C　7.4	底部から体部中位の破片。平底でやや突出する。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ヘラ磨き。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・パミス にぶい橙色 普通	P65　25% PL12 貯蔵穴内覆土上面
6	甕 土師器	A [16.8] B (2.9)	口縁部の破片。頸部は「く」の字状に屈曲し，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 明黄褐色 普通	P66　5% 覆土中 外面煤付着
7	甕 土師器	A [10.4] B (3.3)	口縁部の破片。頸部は「く」の字状に屈曲し，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色　普通	P67　5% 北寄り床面直上
8	甕 土師器	B (1.3) C　6.9	底部から体部下位の破片。平底。体部は内彎しながらたちあがる。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部雑なヘラ削り。	砂粒・パミス 明赤褐色　普通	P68　5% 覆土中

第９号住居跡（第21図）

位置　調査区の西部，V6j3区。

規模と平面形　長軸6.90m，短軸6.60mの方形。

主軸方向　N－50°－E

壁　上部は耕作による撹乱を受けているが，下部の残存状態は良好である。壁高は43～57cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床　ほぼ平坦であるが，踏み固められた部分は確認されない。各コーナー付近に焼土の広がりがみられる。

ピット　４か所（P_1～P_4）。P_1～P_4は長径29～46cm，短径23～40cmの楕円形で，深さ54～77cmである。各コーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。

貯蔵穴　２か所。貯蔵穴１は北西壁沿いに付設され，平面形は長径86cm，短径70cmの不定形で，深さ25cmである。断面は擂鉢状の緩い傾斜をもち，底部には凹凸がある。貯蔵穴２は南東壁の南コーナー寄りに付設され，長径75cm，短径70cmの楕円形で，深さ70cmである。断面はＵ字形である。

貯蔵穴１土層解説

1　暗褐色　ローム粒子多量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

貯蔵穴２土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
3　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量
4　暗褐色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量

覆土　14層から成る。壁際にはロームブロックを多量に含む褐色土が堆積し，覆土下層から上層にかけローム粒子を含む褐色土が複雑に堆積している。層位の大部分が広く撹乱を受けているため明確には把握できないが，人為堆積の様相を呈する。

土層解説

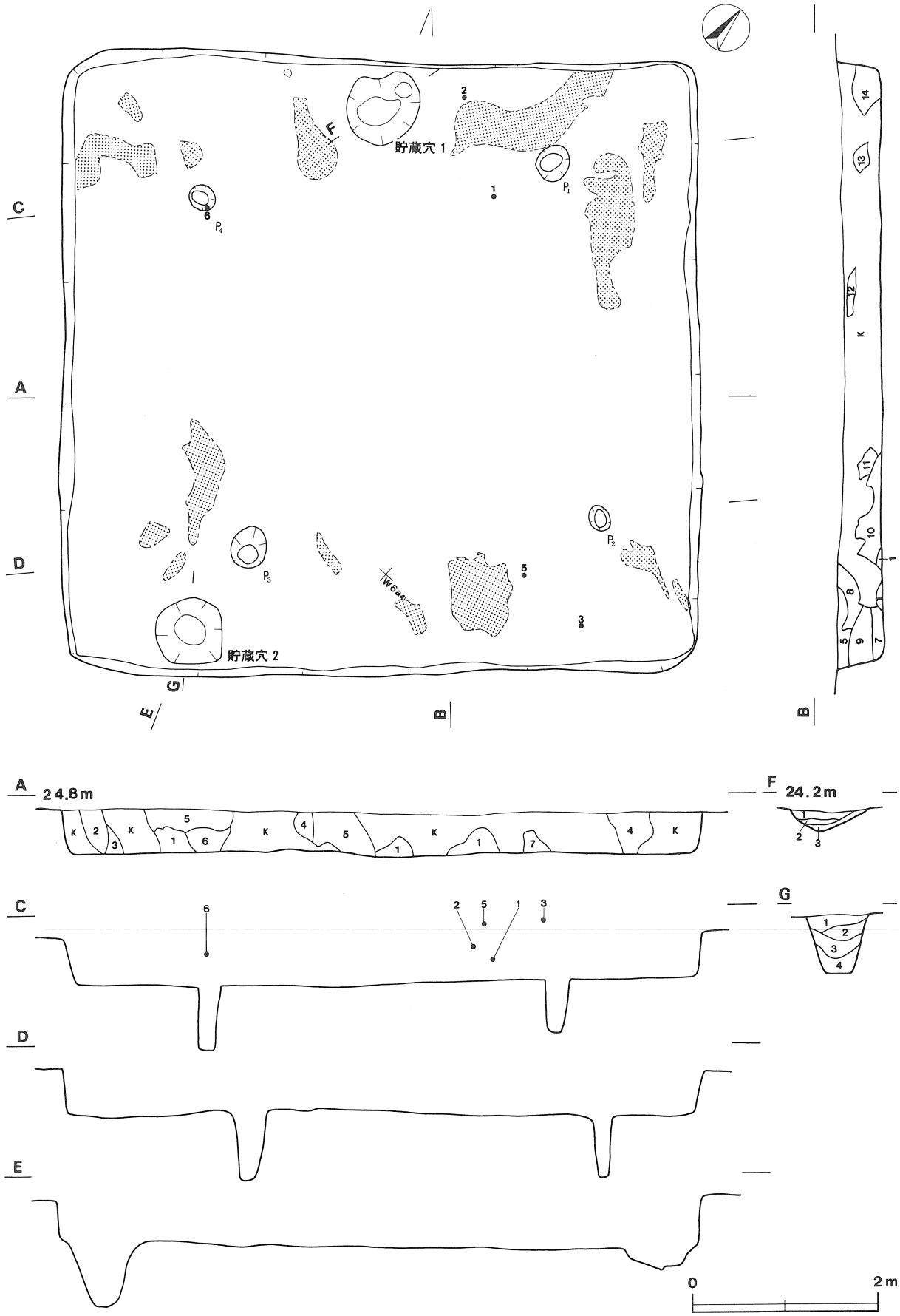
1　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
2　暗褐色　ローム小ブロック微量，炭化粒子極微量
3　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
4　暗褐色　ローム小ブロック微量，ローム粒子極微量
5　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
6　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，焼土粒子極微量
7　黒褐色　炭化粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック少量
8　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム粒子極微量
9　褐　色　ローム小ブロック多量，ローム粒子中量
10　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック微量
11　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
12　暗褐色　ローム中ブロック・ローム粒子少量
13　暗褐色　炭化粒子中量，ローム粒子少量
14　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子極微量

遺物　覆土上面から覆土中層にかけて土師器片が少量出土している。第22図１～３の坏は，１が北寄りの覆土中層から，２は北寄りの覆土上層から，３は東寄りの覆土上面から出土している。４～７の甕は，４，７が覆土中から出土し，５，６は東寄りの覆土上面と西寄りの覆土上層から出土している。その他，８の剣形石製模造品，９～13の臼玉が覆土中から出土している。14の石鏃は混入したものと思われる。

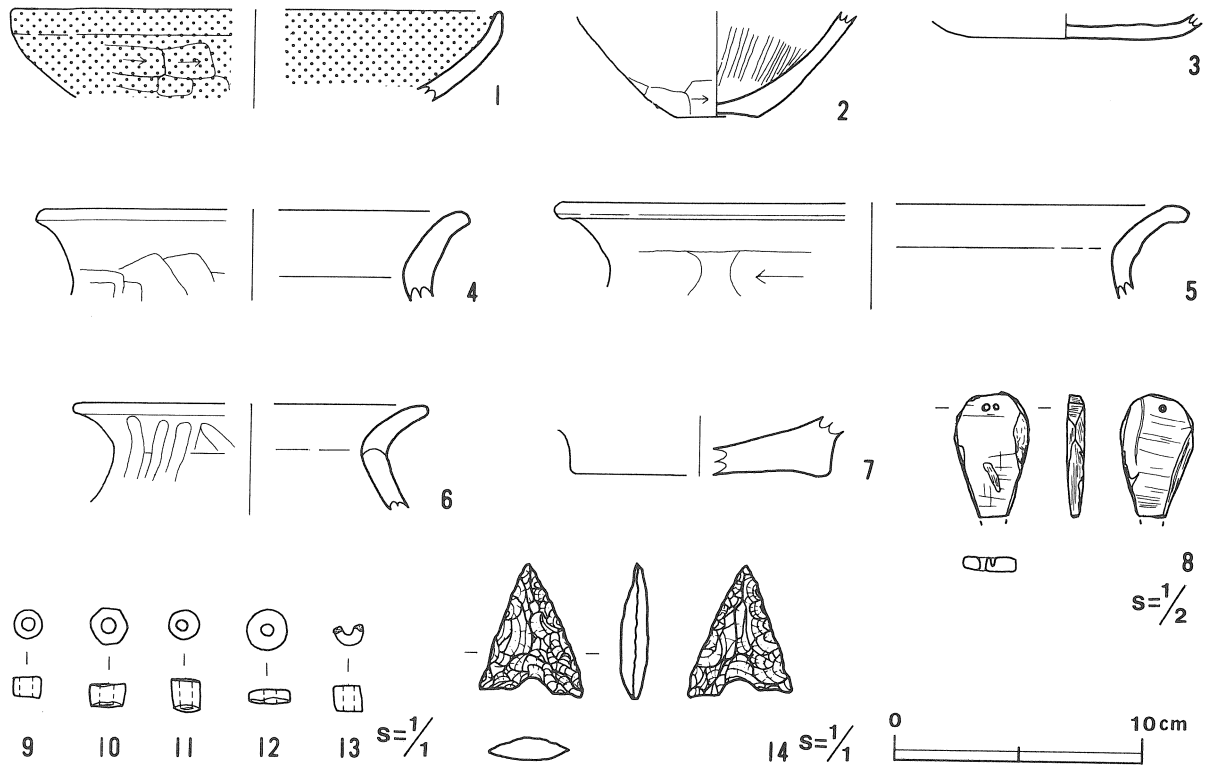
所見　本跡は，出土遺物から祭祀行為との関係が考えられる建物跡である。時期は，５世紀後半と考えられる。

第９号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第22図 1	坏 土師器	A［19.4］ B（3.6）	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・パミス 黄褐色 普通	P77　10% 北寄り覆土中層



第21図　第 9 号住居跡実測図



第22図　第9号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第22図 2	坏 土師器	B (4.0) C　3.4	底部から体部下位の破片。上げ底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ナデ,内面ヘラ磨き。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P78　10% 北寄り覆土上層
3	坏 土師器	B (0.7) C　9.4	底部の破片。平底。体部は僅かに外反する。	底部内・外面は不定方向の手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 暗灰黄色 普通	P79　5% PL12 東寄り覆土上面
4	甕 土師器	A [14.7] B (3.5)	口縁部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色　普通	P73　5% 覆土中
5	甕 土師器	A [25.5] B (3.3)	口縁部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・パミス にぶい橙色 普通	P74　5% 東寄り覆土上面
6	甕 土師器	A [14.2] B (4.1)	口縁部の破片。頸部は「く」の字状に屈曲し，口縁部は外反する。	口縁部外面ヘラ削り後ナデ,内面ヘラナデ。	砂粒・パミス にぶい褐色　普通	P75　5% 西寄り覆土上層
7	甕 土師器	B (1.8) C [10.4]	底部の破片。突出した平底。	底部ヘラ削り。体部内面ヘラナデ。	砂粒・パミス にぶい黄橙色 普通	P76　5% 覆土中

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第22図8	剣形石製模造品	(3.3)	1.9	0.4	0.15	(4.6)	80	片岩	覆土中	Q43　PL19
9	臼　玉	0.4	0.4	0.3	0.2	0.1	100	片岩	覆土中	Q44
10	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	覆土中	Q45
11	臼　玉	0.4	0.4	0.4	0.2	0.1	100	片岩	覆土中	Q46
12	臼　玉	0.5	0.5	0.2	0.15	0.1	100	片岩	覆土中	Q47
13	臼　玉	0.4	(0.4)	0.3	0.2	(0.05)	50	片岩	覆土中	Q48
14	石　鏃	1.8	1.4	0.3	—	0.6	100	チャート	覆土中	Q49　PL19

第10号住居跡（第23図）

位置　調査区の南西部，W6c4区。

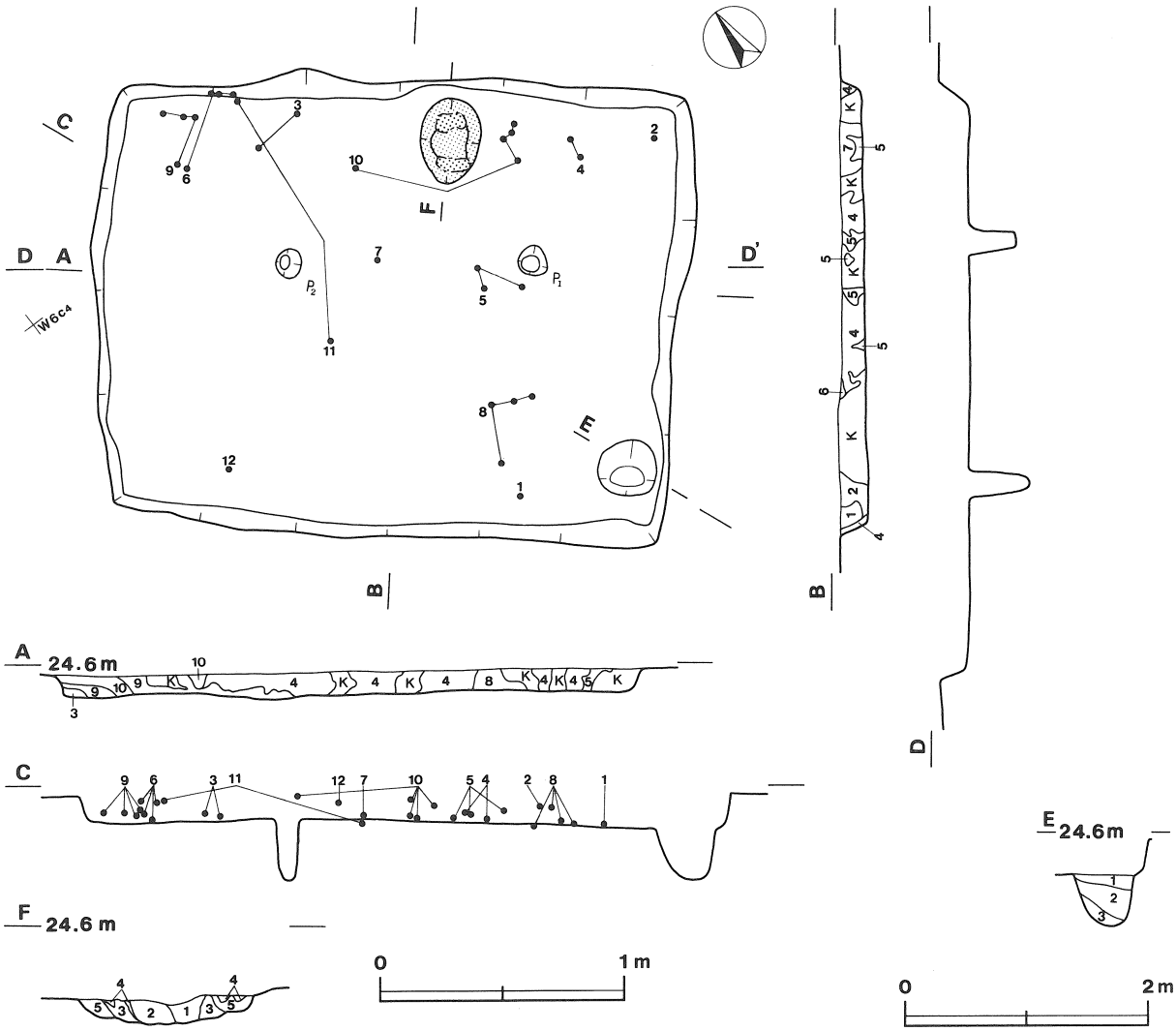
規模と平面形　長軸4.94m，短軸3.72mの長方形。

主軸方向　N－52°－W

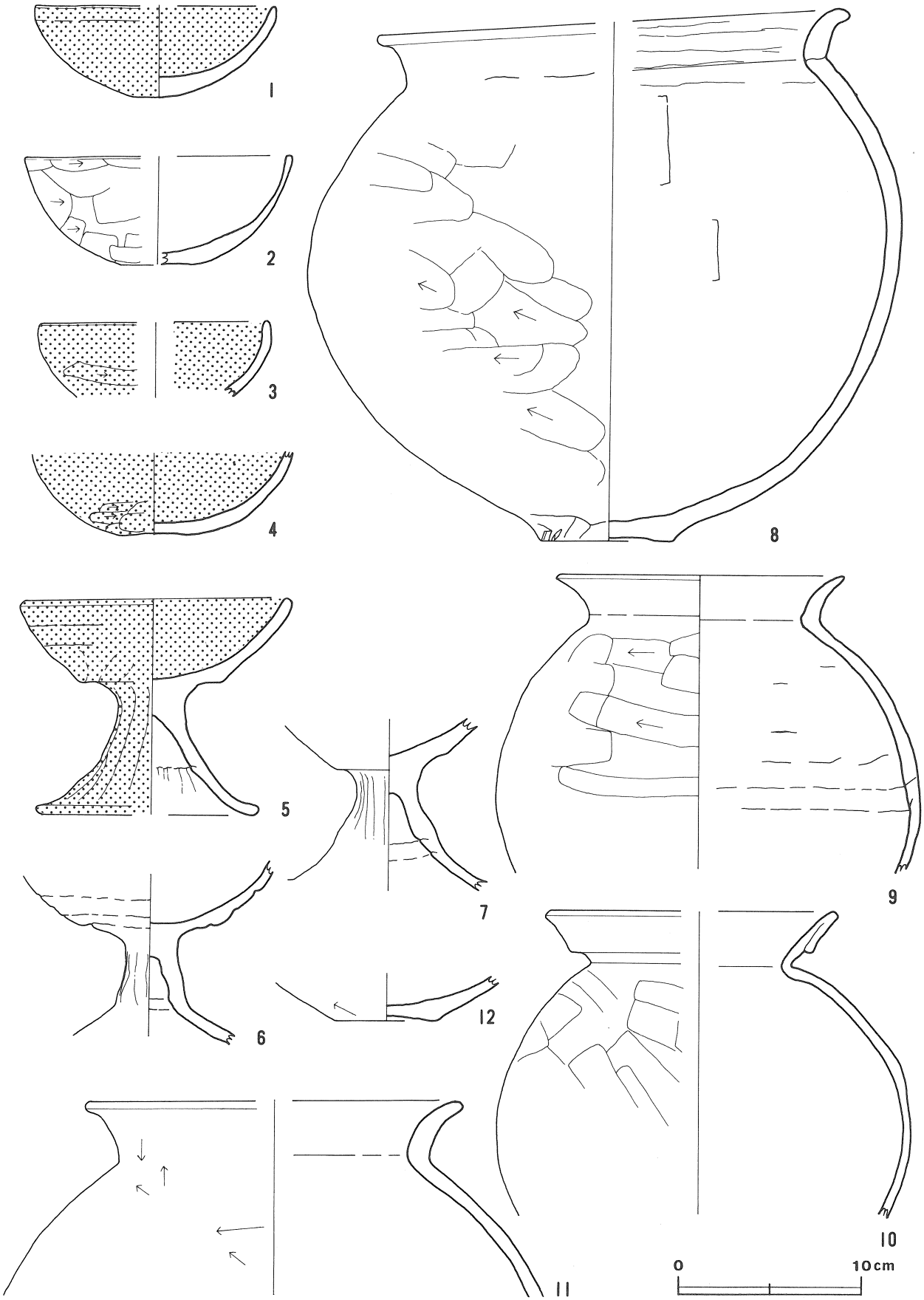
壁　耕作による撹乱を受け，北西壁の一部で僅かに残存部分が確認できるだけである。壁高は14～25cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

床　撹乱を受け，残存するのは一部である。平坦で，よく踏み固められ堅緻であるが，床面上の一部には滲み状の黒色土の広がりがみられる。

ピット　2か所（P_1・P_2）。径20～25cmの円形で，深さは47～50cmである。中央部分を挟んで両側に直線上に並ぶ配列から主柱穴と考えられる。



第23図　第10号住居跡実測図



第24図　第10号住居跡出土遺物実測図

炉　中央から北東寄りに付設され，長径70cm，短径50cmで，床面を10cm掘り窪めた隅丸長方形の地床炉である。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説
1　黒 褐 色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
2　暗 褐 色　焼土粒子・ローム粒子微量，炭化粒子極微量
3　赤 褐 色　焼土小ブロック中量，焼土粒子少量
4　暗 褐 色　焼土小ブロック少量，焼土粒子微量
5　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は径50cmの円形で，深さは40cmである。断面はU字形である。

貯蔵穴土層解説
1　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　暗 褐 色　ローム小ブロック少量，焼土粒子・ローム粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量

覆土　10層から成る。壁際には褐色土が堆積し，下層から上層にかけて広く撹乱を受けている。

土層解説
1　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，焼土粒子極微量
2　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，焼土粒子極微量
3　暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，焼土粒子極微量
4　暗 褐 色　ローム粒子微量，焼土粒子・炭化粒子極微量
5　褐　　色　焼土粒子少量
6　褐　　色　焼土粒子少量，ローム粒子微量
7　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
8　暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
9　暗 褐 色　炭化粒子・ローム小ブロック微量
10　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物　中央から東寄りの覆土上層から床面直上にかけ，土師器片が中量出土している。第24図1～4の坏は，1が南寄りの床面直上から正位の状態で，2が東コーナー寄りの覆土中層から，3が北寄りの覆土下層から，4が東寄りの床面直上及び覆土下層から出土している。5～7の高坏は，5が中央よりの覆土下層から，6が北東壁際の覆土上層から逆位で出土している高坏に，床面直上から出土している土師器片が接合し，7が中央付近の床面直上から出土している。8～12の甕は，8が南寄りの床面直上から覆土中層にかけ横位の状態で，9が北寄りの覆土下層から逆位で，10が北東寄りの覆土上層及び覆土中層から，11が北東壁際の覆土上層から出土している口縁部片と中央寄りの床面直上から出土している体部片が接合したもので，12は西寄りの覆土中層から出土している。

所見　本跡は，当遺跡で確認した建物跡では，ただ一軒，2本柱を持つ住居跡として確認した。住居跡の形状及び柱穴の配列から，切り妻的な上屋構造物が推測される。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第24図 1	坏 土師器	A [13.1] B 5.0	体部上位及び口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤褐色 普通	P85　60% PL12 南寄り床面直上
2	坏 土師器	A [14.5] B (5.9) C (4.0)	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部雑なヘラ削り。	砂粒・長石・パミス にぶい赤橙色 普通	P86　40% PL12 東コーナーより覆土中層 二次焼成
3	坏 土師器	A [12.2] B (4.0)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はやや内彎する。	口縁部横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P87　5% 北寄り覆土下層 二次焼成
4	坏 土師器	B (4.3) C 3.5	底部から体部上位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面ヘラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤灰褐色 普通	P88　40% PL12 東寄り床面直上及び覆土下層
5	高　坏 土師器	A 14.8 B 11.8 D [12.1] E 7.0	脚部及び坏部一部欠損。脚部は短い柱状を呈し，下位で大きく開く。坏部は脚部との境に強い稜を持ち，内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。脚部下位内・外面ナデ，中位以上ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	P89　60% PL12 中央寄り覆土下層

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第24図 6	高　坏 土師器	B（9.0）	底部及び口縁部一部欠損。脚部は中位まで柱状を呈し，下位で開く。坏部は脚部との境に弱い稜を持ち，内彎しながら立ち上がる。	坏部外面輪積み後雑なナデ，内面ナデ。脚部外面ヘラ削り後ナデ，下位ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P90　60% 北東壁際覆土上層 坏部内面煤付着
7	高　坏 土師器	B（8.4）	脚部から坏部下位の破片。脚部はラッパ状に開く。坏部は脚部との境に弱い稜を持ち，外傾して開く。	坏部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ヘラ磨き。脚部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P91　30% 中央付近床面直上
8	甕 土師器	A［25.9］ B　29.1 C　7.2	底部から口縁部の破片。やや突出した平底。体部は球形状を呈する。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。底部及び体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P80　60% PL12 南寄り床面直上から覆土中層
9	甕 土師器	A　15.7 B（15.9）	体部中位から口縁部の破片。体部は球形状を呈する。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後雑なヘラ磨き，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・パミス にぶい黄橙色 普通	P81　40% 北東寄り覆土下層
10	甕 土師器	A［16.0］ B（16.7）	体部中位から口縁部の破片。複合口縁。口縁部は稜を持ち外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面横ナデ。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P82　30% PL13 北寄り覆土中層から上層
11	甕 土師器	A［20.6］ B（10.6）	体部上位から口縁部の破片。体部背は内彎しながら立ち上がる。口縁部は頸部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P83　15% 北東壁際覆土上層
12	甕 土師器	B（2.6） C　5.4	底部から体部下位の破片。上げ底。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部及び体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。	砂粒・長石 橙色 普通	P84　5% 西寄り覆土中層 内面煤付着

第11号住居跡（第25図）

位置　調査区の中央部やや西側，V6i8区。

規模と平面形　長軸7.04m，短軸5.52mの長方形。

主軸方向　N—53°—E

壁　耕作による撹乱を格子目状に受け，壁の残存部分はほとんどなく，南東壁の一部に僅か確認できるだけである。壁高は16～28cmで，緩やかに外傾する。

床　撹乱を受けているため，帯状に残る残存部分には凹凸がみられ，ローム塊を含んだように硬く踏み固められている。

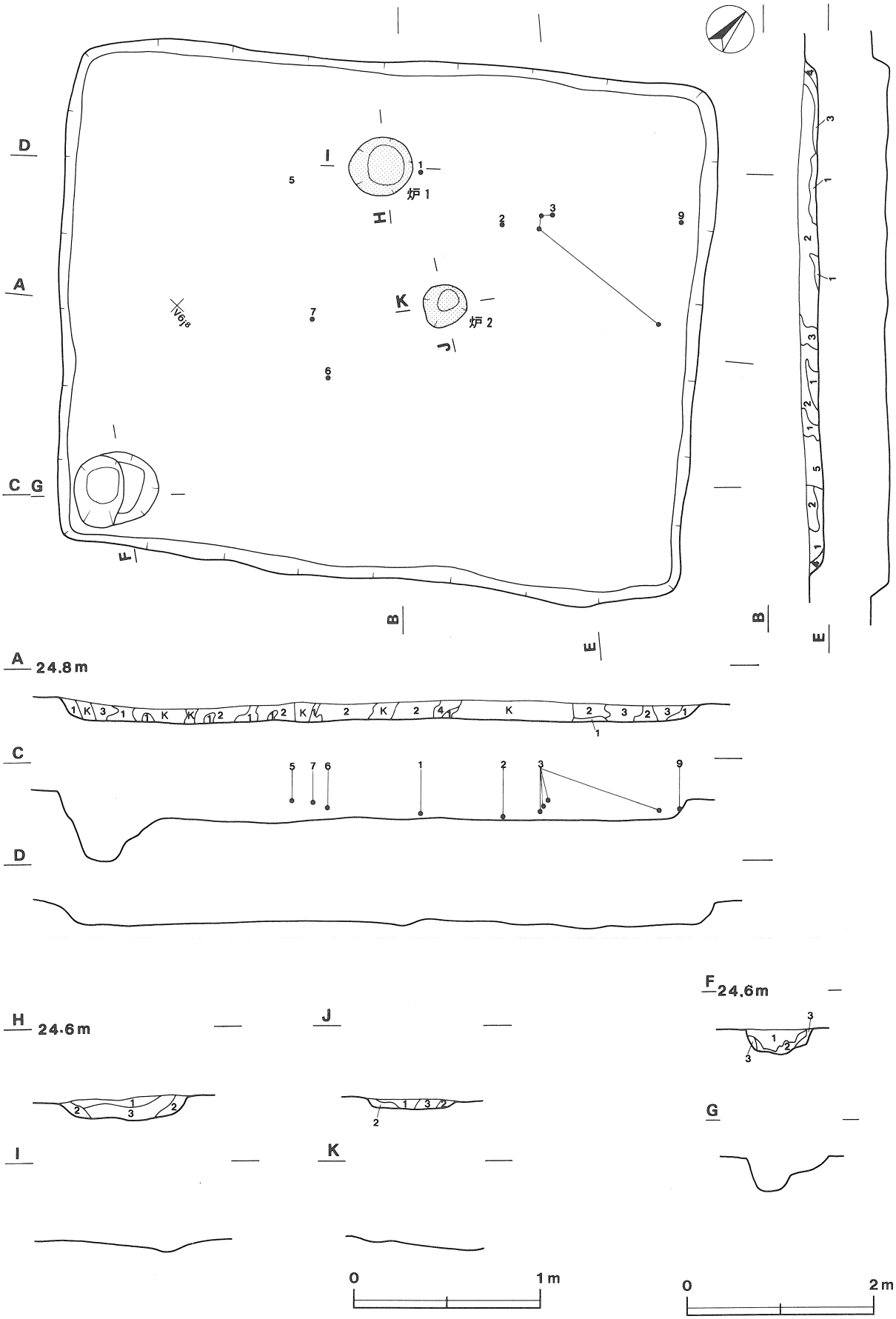
炉　2か所。炉1は中央から北西寄りに付設されている。長径68cm，短径63cmで，床面を10cm掘り窪めた方形の地床炉である。炉床の中央部分には赤変硬化している部分が見られる。炉2は中央から北東壁寄りに付設されている。長径52cm，短径43cmの楕円形で，床面を5cm掘り窪めた地床炉である。炉床はよく焼け赤変硬化している。

炉1土層解説
1　黒褐色　焼土小ブロック・焼土粒子少量，ローム粒子微量
2　明褐色　ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
3　赤褐色　焼土ブロック多量，焼土粒子中量，ローム粒子少量

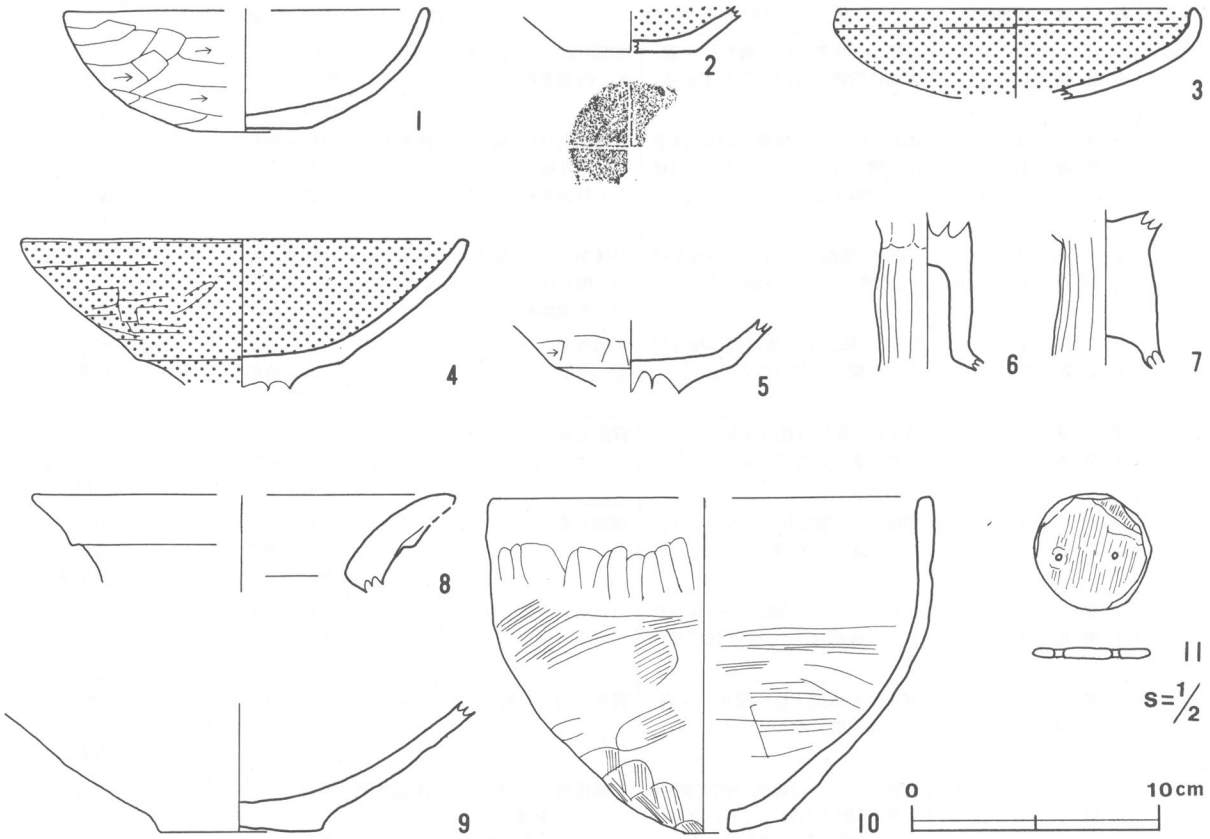
炉2土層解説
1　黒褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量
2　明褐色　ローム小ブロック少量，焼土粒子・ローム粒子微量
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子微量，焼土粒子極微量

貯蔵穴　南東壁の南コーナー付近に付設され，長径95cm，短径75cmの楕円形で，深さ45cmである。断面はU字形で，深さ20cm位の部分で内側に10cm突き出る段を有し，底部は中央に向かい緩やかに傾斜している。

貯蔵穴土層解説
1　黒褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック少量
2　明褐色　ローム小ブロック少量，焼土粒子・ローム粒子微量
3　暗褐色　ローム粒子微量，ロームブロック極微量



第25図　第11号住居跡実測図



第26図　第11号住居跡出土遺物実測図

覆土　4層から成る。壁際にはロームブロック，ローム粒子を含む黒褐色土が堆積し，下層から上層にかけ広く撹乱を受けている。人為堆積と思われる。

土層解説

1　黒 褐 色　ローム小ブロック多量，ローム粒子少量，締まり強，粘性強
2　黒 褐 色　ローム小ブロック微量，ローム粒子極微量，粘性強
3　暗 褐 色　ローム中ブロック少量，ローム粒子極微量，締まり強
4　黒 褐 色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量，締まり強，粘性強

遺物　覆土上層から床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第26図1～3の坏は，1が北西寄りの覆土下層から正位の状態で，2が北寄りの床面直上から，3が北寄りの覆土上層及び覆土中層から出土している土師器片が接合したものである。4～7の高坏は，4が北東寄りの覆土下層から正位の状態で，5が北西寄りの覆土上層から，6，7が中央寄りの覆土上層及び覆土下層から出土している。8，9の甕と10の甑は，8と10が覆土中から，9が北東壁寄りの覆土中層から出土している。その他，11の双孔円板が覆土中から出土している。

所見　本跡からは，ピットが確認できなかったが，遺構の形態及び規模と，炉，貯蔵穴も確認されていることから住居跡として考える。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第26図 1	坏 土師器	A [14.8] B 4.8 C 4.4	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。底部及び体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P94　75% PL13 北西寄り覆土下層 内面煤付着

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第26図 2	坏 土師器	B（1.4） C［5.2］	底部から体部下位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。内面赤彩。	砂粒・長石 橙色 普通	P95　5％ 北寄り床面直上 底部「＋」の刻痕
3	坏 土師器	A　14.4 B（3.6） C［5.6］	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P96　50％ PL13 北寄り覆土上層から覆土中層
4	高　坏 土師器	A　18.0 B（6.0）	坏部片。脚部との境に弱い稜を持ち，内彎しながら外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P97　50％ PL13 北東寄り覆土下層
5	高　坏 土師器	B（2.7）	坏部片。脚部との境に弱い稜を持ち，内彎しながら立ち上がる。	坏部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ヘラ磨き。	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	P98　10％ 北西寄り覆土上層
6	高　坏 土師器	B（5.7）	脚部片。脚部は柱状を呈し，中位にやや膨らみを持つ。	脚部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P99　10％ 中央寄り覆土上層 脚部内面指頭痕
7	高　坏 土師器	B（5.5）	脚部片。脚部は柱状を呈し，中位にやや膨らみを持つ。	脚部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P100　10％ 中央寄り覆土下層 脚部内面指頭痕
8	甕 土師器	A［17.0］ B（3.5）	口縁部の破片。頸部に弱い稜を持ち，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 浅黄橙色 普通	P92　5％ 覆土中
9	甕 土師器	B（4.8） C［6.4］	底部から体部下位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	P93　5％ 北東壁寄り覆土中層 内・外面剝離
10	甑 土師器	A［18.0］ B　13.5 C　2.2	体部上位及び口縁部一部欠損。単孔式。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部でほぼ垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後雑なヘラナデ，内面ナデ。口縁部外面輪積痕。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P101　70％ PL13 覆土中 底部外面煤付着

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第26図11	双孔円板	3.2	3.1	0.3	0.15	6.2	100	凝灰岩	覆土中	Q50　PL19

第12号住居跡（第27図）

位置　調査区の中央部，$V7_{c4}$区。

規模と平面形　長軸8.68m，短軸8.48mの方形。

主軸方向　N－47°－E

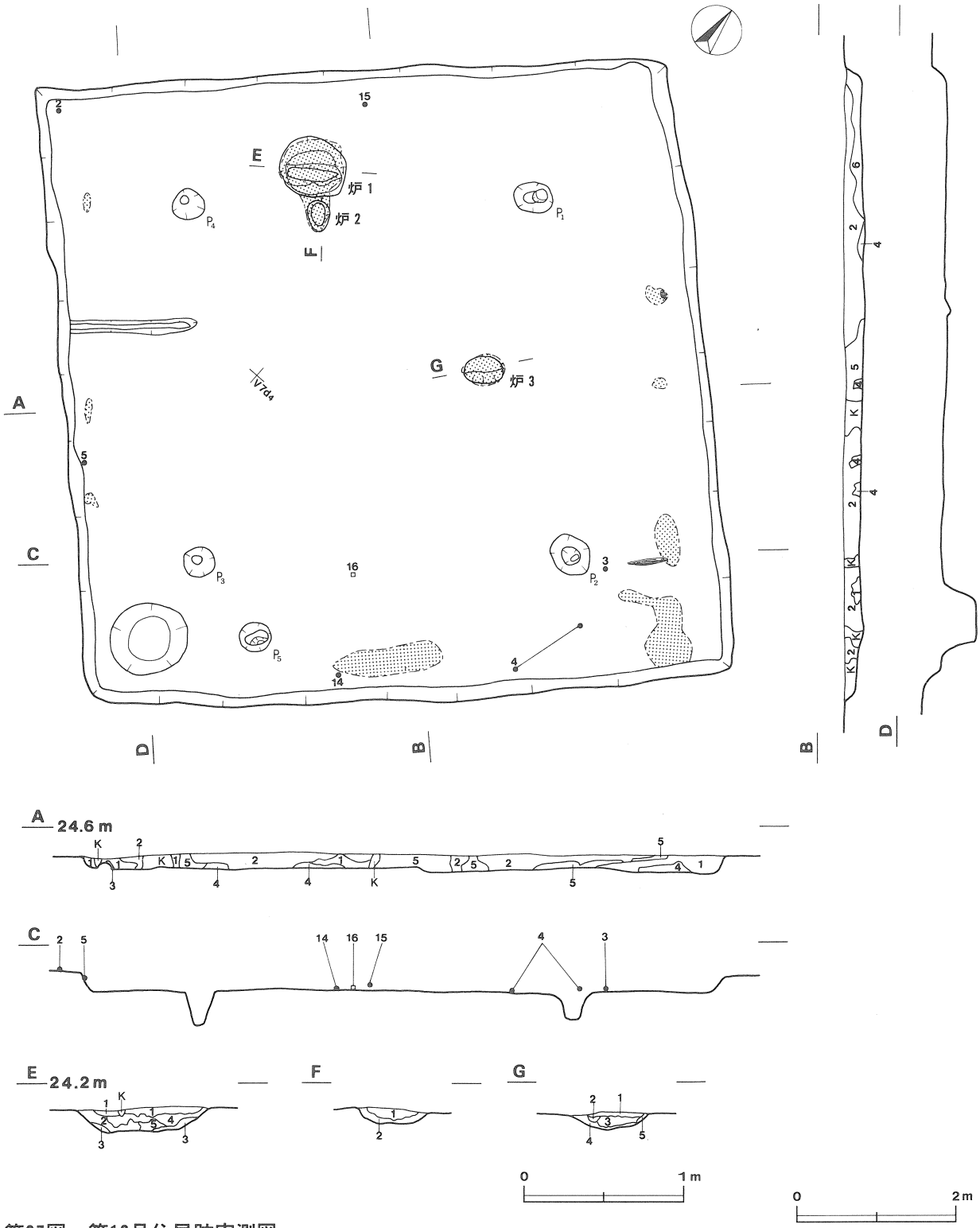
壁　壁高は14～25cmで，緩やかに外傾している。北西壁は格子目状に入る耕作による撹乱を受けほとんど残存しない。

床　ほぼ平坦で，中央から南側にやや傾斜している。中央部は踏み固められ堅緻である。

間仕切り溝　上幅15～17cm，深さ5～7cmで，南西壁から中央に向かって1条見られる。断面形はU字形である。

ピット　5か所（P_1～P_5）。P_1～P_5は長径48～60cm，短径35～40cmの楕円形または不整楕円形ピットで，深さは33～48cmである。P_1～P_4は各コーナー付近に付設され，規模や位置から主柱穴と考えられる。P_5はP_3の東側に付設され，やや中央向きに傾斜して掘り込まれており，性格は不明である。

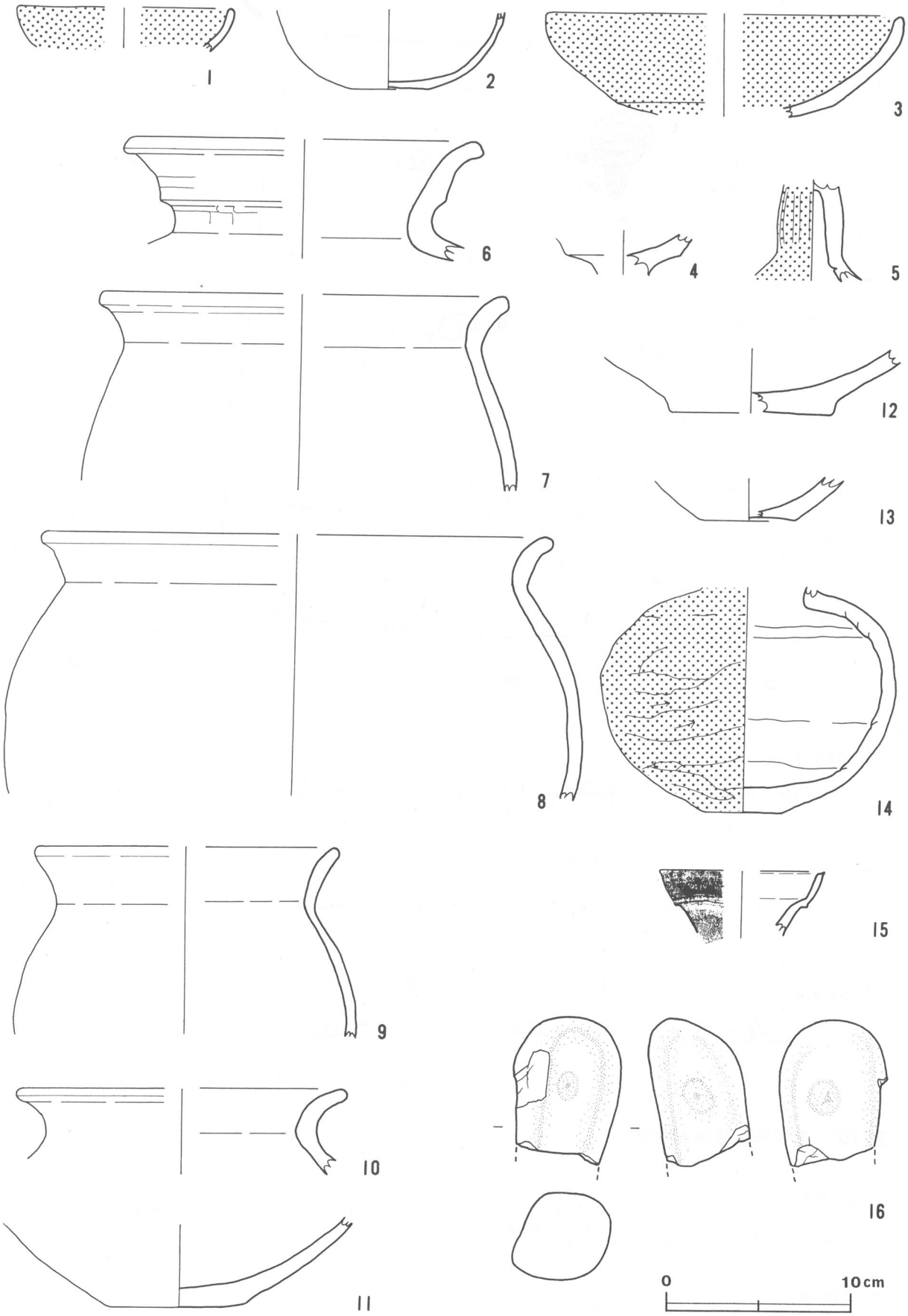
炉　2か所。炉1は北東壁の中央東寄りに付設されている。長径90cm，短径70cmで，床面を10cm掘り窪めた隅丸長方形の地床炉である。炉床は火熱を受け焼土ブロックが厚く堆積し，赤変硬化している。炉2は中央からやや北東方面に付設され，長径50cm，短径35cmの楕円形で，床面を10cm掘り窪めた地床炉である。炉床の西側半分は撹乱により残存しないが，残存する東側は火熱を受け赤変硬化している。



第27図　第12号住居跡実測図

炉1土層解説
1　黒 褐 色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
2　暗 褐 色　焼土粒子・ローム粒子微量，炭化粒子極微量
3　赤 褐 色　焼土小ブロック中量，焼土粒子少量
4　暗 褐 色　焼土小ブロック少量，焼土粒子微量
5　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

炉2土層解説
1　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　暗赤褐色　焼土小ブロック・ローム粒子・砂少量



第28図　第12号住居跡出土遺物実測図

覆土　6層から成る。壁際にはロームブロック，ローム粒子を含む暗褐色土が堆積し，下層から上層にかけて広く撹乱を受けている。

土層解説
1　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，焼土粒子極微量
3　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，焼土粒子極微量
4　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，焼土粒子極微量
5　暗褐色　ローム粒子微量，焼土粒子・炭化粒子極微量
6　褐　色　焼土粒子少量，ローム粒子微量

遺物　覆土上層から床面直上にかけて土師器片が中量出土している。第28図1の坏は覆土中から，2の坏は西コーナー付近の覆土上層から出土している。3～5の高坏は，3，4が東寄りの床面直上から，5が南西壁際の覆土中層から出土している。6～13の甕は，6が南東壁寄りの覆土下層から斜位の状態で出土している以外は全て覆土中から出土している。14の坩は南東壁際の床面直上から正位の状態で，15の須恵器は北西寄りの覆土下層から出土している。その他，16の凹石は南東寄りの床面直上から出土したものである。

所見　本跡の時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第28図 1	坏 土師器	A [11.6] B (2.3)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤褐色 普通	P111　5％ 覆土中
2	坏 土師器	B (4.2) C　4.5	底部から体部下位までの破片。上げ底。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部及び体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。	砂粒・長石 橙色 普通	P112　25％ 西コーナー付近 覆土上層 内・外面剝離
3	高坏 土師器	A [19.5] B (5.5)	坏部の破片。脚部との境に弱い稜を持ち，内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P113　10％ 東寄り床面直上
4	高坏 土師器	B (2.1)	坏部の破片。脚部との境に強い稜を持つ。	坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色　普通	P114　5％ 東寄り床面直上
5	高坏 土師器	B (5.0)	脚部の破片。脚部は柱状を呈し，中央位に膨らみを持ち，下位で開く。	脚部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。内面輪積み痕。外面赤彩。	砂粒・石英 赤褐色 普通	P115　5％ 南西壁際覆土中層
6	甕 土師器	A [14.5] B (5.8)	口縁部の破片。頸部と口縁部との境に強い稜を持ち，口縁部は外反する。	口縁部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P103　15％ PL13 南東壁寄り覆土下層 内面剝離 内・外面煤付着
7	甕 土師器	A [21.6] B (10.4)	体部中位から口縁部の破片。体部は球形状を呈し，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面ヘラナデ。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	P104　5％ 覆土中 二次焼成
8	甕 土師器	A [27.6] B (14.1)	体部中位から口縁部の破片。体部は球形状を呈し，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P105　5％ 覆土中 口縁部内・外面煤付着
9	甕 土師器	A [16.0] B (10.3)	口縁部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P106　5％ 覆土中 外面煤付着
10	甕 土師器	A [17.8] B (3.9)	口縁部の破片。頸部は「く」の字状に屈曲し，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P107　5％ 覆土中 外面煤付着
11	甕 土師器	B (4.6) C　7.3	底部から体部下位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。底部雑なヘラ削り。	砂粒・長石・パミス にぶい褐色 普通	P108　20％ 覆土中 内面下位剝離 底部内面煤付着

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第28図 12	甕 土師器	B (2.9) C [8.8]	底部から体部下位の破片。やや突出した平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 褐灰色 普通	P109　5％ 覆土中 底部外面煤付着
13	甕 土師器	B (2.1) C [5.0]	底部から体部下位の破片。やや上げ底気味。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。底部外面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P110　5％ 覆土中
14	坩 土師器	B (12.0) C　4.2	口縁部欠損。平底。体部は球形状を呈する。	底部及び大部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。内面輪積み痕。外面赤彩。	砂粒・雲母 赤褐色 普通	P116　80％ PL13 南東壁際床面直上
15	𤮊 須恵器	A [9.0] B (3.4)	口縁部の破片。頸部と口縁部の境に強い稜を持ち，稜の下に12条の櫛描波状文を施す。口縁部は僅かに内彎しながら，外傾する。	巻き上げ，横ナデ成形。	砂粒 褐灰色 良好	P117　5％ PL13 北西寄り覆土下層 内面自然釉

図版番号	種　別	計測値 (cm)			重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚					
第28図16	凹　石	(8.0)	5.9	4.8	(341.7)	50	安山岩	南東寄り床面直上	Q51

第13号住居跡（第29図）

位置　調査区の中央部，W7c5区。

規模と平面形　長軸7.80m，短軸7.60mの方形。

主軸方向　N－50°－W

壁　壁高は31～44cmで，外傾して立ち上がる。壁の中層位から上層位にかけては，耕作による撹乱を受けているため一部しか残存していない。

壁溝　壁下を全周しており，上幅14～18cm，深さ４～８cmで，断面形はU字形である。

床　平坦で，中央から南コーナー付近にかけて踏み固められ堅緻である。各コーナー付近の床面は，火熱をうけ赤変硬化している。

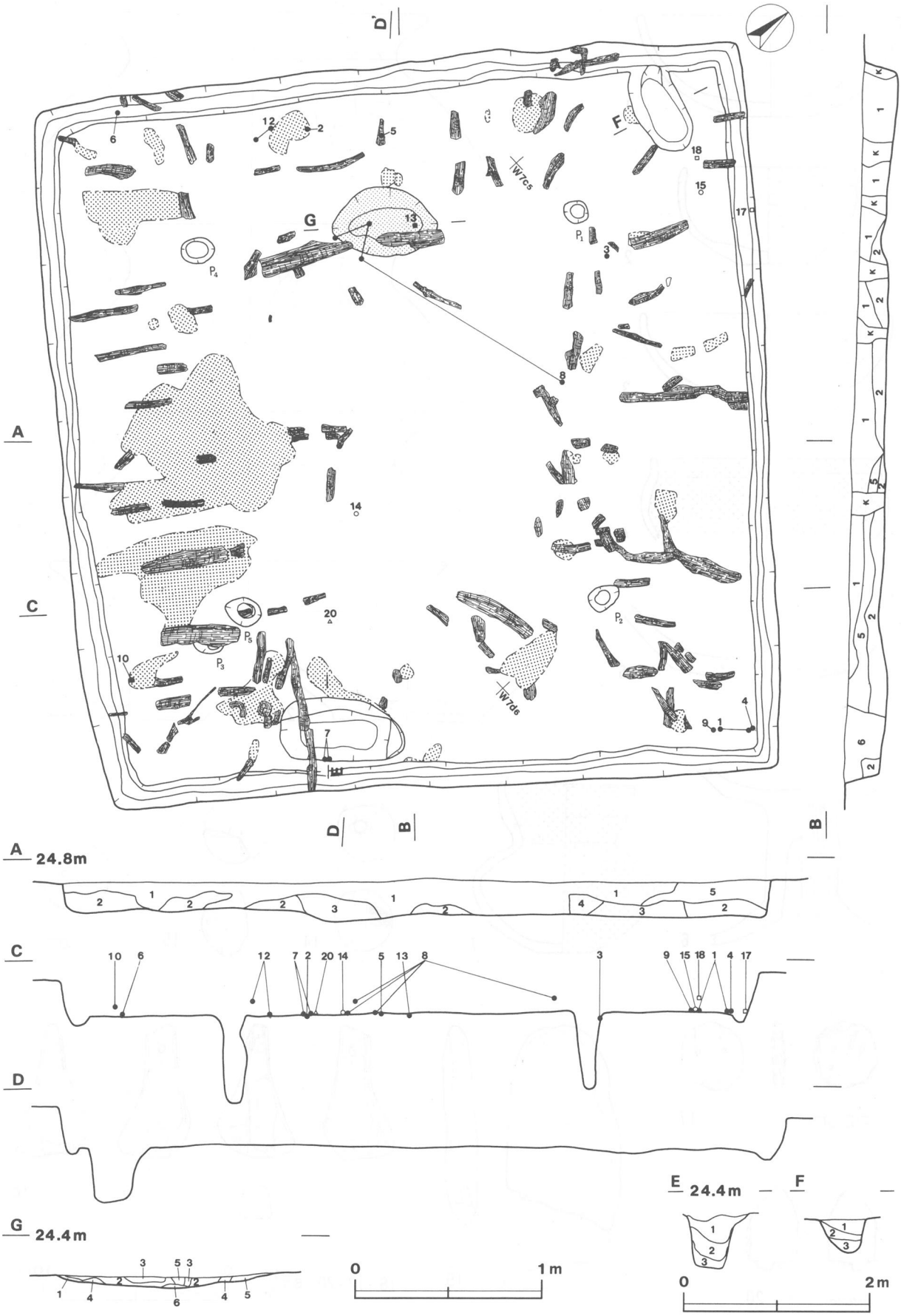
ピット　５か所（P_1～P_5）。P_1～P_5は長径28～35cm，短径22～28cmの楕円形で，深さは46～95cmである。各コーナー付近に付設されている。P_3，P_5は南コーナー付近に並んで付設されているが，P_5は南西壁方向にやや傾斜して掘り込まれている。規模や配列・位置等からP_1～P_4が主柱穴，P_5が補助柱穴と考えられる。

炉　中央から北西壁寄りに付設されている。長径116cm，短径72cmの楕円形で，床面を10cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱をうけ赤変硬化している。

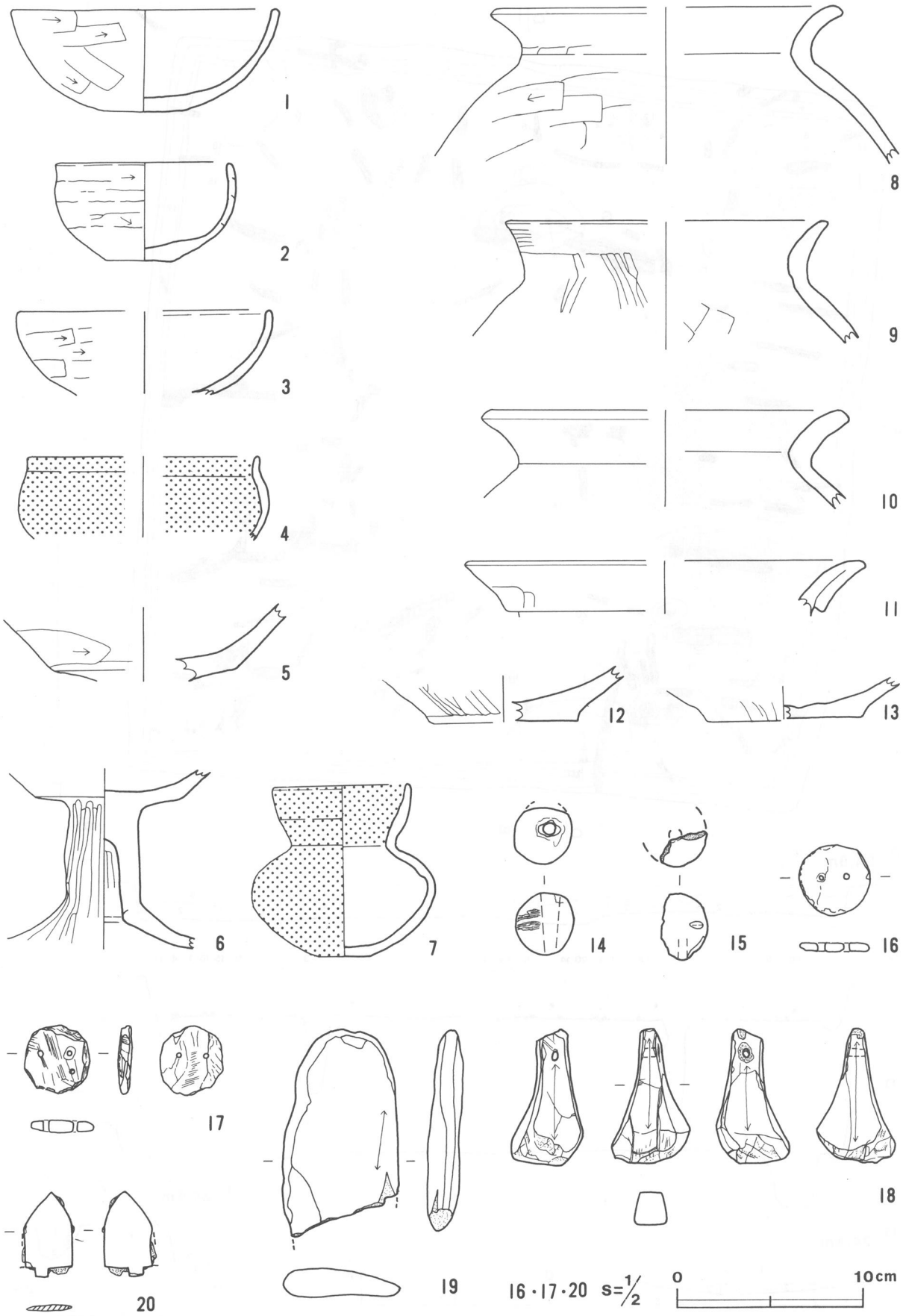
炉土層解説
1　黒褐色　焼土粒子・ローム粒子微量
2　極暗褐色　焼土粒子微量，ローム粒子極微量
3　暗褐色　焼土粒子・炭化物微量
4　暗赤褐色　焼土小ブロック少量，焼土粒子微量
5　赤褐色　焼土粒子・ローム粒子微量
6　暗褐色　焼土粒子多量，炭化物微量

貯蔵穴　２か所。貯蔵穴１は中央から南コーナー寄りに付設されている。平面形は長径135cm，短径77cmの隅丸長方形で，深さは55cmあり，円筒状に掘り込まれ，底部は皿状である。貯蔵穴２は北西壁の北コーナー寄りに付設され，平面形は長径96cm，短径53cmの不整楕円形で，深さ57cmである。壁の一部を北西壁と共有するよう円筒状に掘り込まれ，底部は皿状である。

貯蔵穴１土層解説
1　暗褐色　焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗褐色　焼土粒子・ローム粒子少量
3　褐　色　ローム粒子微量，焼土粒子極微量



第29図　第13号住居跡実測図



第30図　第13号住居跡出土遺物実測図

貯蔵穴２土層解説

1　黒褐色　焼土大ブロック・焼土粒子・炭化材・炭化粒子・ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2　暗褐色　ローム粒子微量，焼土粒子極微量，締まり強
3　暗褐色　ローム粒子・粘土粒子微量，粘性強

覆土　６層から成る。南西壁付近の床面一帯から焼土の広がりがみられ，南東壁寄り中央部からは５～６cmの粘土塊が出土している。人為堆積と考えられる。

土層解説

1　暗褐色　焼土粒子・ローム粒子少量
2　暗褐色　焼土粒子微量，炭化粒子極微量，ローム中ブロック・ローム粒子少量，締まり強
3　黒褐色　焼土粒子極微量，炭化粒子中量，ロームブロック極微量，ローム粒子微量，締まり強
4　黒褐色　炭化材多量，炭化粒子中量，ローム粒子極微量，締まり強
5　褐　色　炭化粒子極微量，ローム粒子中量，締まり強
6　灰褐色　炭化粒子・ローム小ブロック微量，ローム粒子少量，粘土粒子中量，粘性強

遺物　床面全体に広がる炭化材の下位から土師器片が中量出土している。第30図１～４の坏は，１が東コーナー付近の床面直上から，２が北西壁際の床面直上から横位の状態で出土し，３は北東寄りの床面直上から，４は東コーナー付近の床面直上から出土している。５，６の高坏は北西寄りの床面直上と西コーナーの床面直上から出土している。７の坩は南東寄りの床面直上から正位の状態で出土したものである。８～13の甕は，８が中央付近の覆土下層から床面直上にかけ出土し，９は東コーナー付近の床面直上から正位の状態で，10は南コーナー寄りの覆土下層から，11が覆土中から，12が北西壁寄りの覆土下層及び床面直上から，13が炉内覆土下層から出土している。その他，16の双孔円板が覆土中から，17の双孔円板が北コーナーの覆土下層から，18の砥石が北寄りの覆土下層から，19の砥石が覆土中から出土している。また，14，15の土玉が中央寄りと北寄りの床面直上から出土し，20の鉄鏃も南寄りの床面直上から出土している。

所見　本跡は，覆土の堆積状況をみると床面上に焼土塊，炭化材がみられ，住居が廃棄された後に焼失し，その後埋め戻されたものと思われる。出土遺物等から，特殊な建物跡と考えられる部分もあり，また，祭祀行為とも関連づけて考えられる住居跡でもある。時期は，出土遺物から５世紀後半と考えられる。

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第30図 1	坏 土師器	A 14.4 B 5.8 C 4.3	体部中位及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。底部及び体部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P124 90% PL13 東コーナー付近 床面直上 体部内面剝離
2	坏 土師器	A 19.5 B 5.4 C 3.6	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内削ぎ状に直立する。	口縁部内・外面横ナデ。底部及び体部外面雑なヘラ削り後ナデ，内面ナデ。体部外面輪積み痕。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P125 95% PL13 北西壁際床面直上 内面下位剝離
3	坏 土師器	A [13.8] B (4.5)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面ナデ。	砂粒・長石 灰黄褐色 普通	P126 10% 北東寄り床面直上 口縁部外面剝離
4	坏 土師器	A [12.7] B (4.5)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内面に稜を持ち内削ぎ状で，直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石 赤褐色 普通	P127 10% 東コーナー付近 床面直上
5	高坏 土師器	B (3.8)	坏部の破片。坏部は頸部との境に稜を持ち外反する。	坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P128 20% 北西寄り床面直上
6	高坏 土師器	B (9.5) E (7.3)	脚部から坏部下位の破片。脚部は柱状を呈し，下位で開く。坏部は脚部との境に弱い稜を持ち，外傾して立ち上がる。	坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。脚部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	P129 30% 西コーナー床面直上

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第30図 7	坩 土師器	A　7.5 B　9.2 C　2.8	体部中位一部欠損。体部は偏平な球形を呈し，頸部は「く」の字状に屈曲し，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。体部外面及び口縁部内面赤彩。	砂粒・長石 赤褐色 普通	P130　80% PL13 南東寄り床面直上
8	甕 土師器	A［19.0］ B（8.0）	体部上位から口縁部の破片。体部は球形状を呈し，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P118　15% 中央付近覆土下層
9	甕 土師器	A［17.4］ B（6.3）	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P119　5% 東コーナー付近 床面直上
10	甕 土師器	A［19.9］ B（4.8）	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。頸部は「く」の字状に屈曲し，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P120　5% 南コーナー寄り 覆土下層 外面煤付着
11	甕 土師器	A［21.7］ B（2.9）	口縁部の破片。口縁部は皿状に開き，口縁端部で折り返し複合口縁となる。	口縁部外面ヘラ削り後ナデ，内面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P121　5% 覆土中
12	甕 土師器	B（2.3） C［8.0］	底部から体部下位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部及び体部外面雑なヘラ削り，内面ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P122　5% 北西壁寄り覆土下層
13	甕 土師器	B（1.8） C［8.4］	底部から体部下位の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面ヘラナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・石英 灰白色　普通	P123　5% 炉内覆土下層

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径				
第30図14	土　玉	3.4	3.1	—	0.7	26.2	100	中央寄り床面直上	DP3
15	土　玉	(3.5)	(2.4)	—	(0.6)	(11.4)	30	北寄り床面直上	DP6

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第30図16	双孔円板	2.5	2.5	0.3	0.2	3.1	100	滑石	覆土中	Q52　PL19
17	双孔円板	2.4	2.3	0.4	0.15	4.2	100	片岩	北コーナー覆土下層	Q53　PL19
18	砥　石	(7.3)	3.9	1.8	0.35	(71.8)	50	頁岩	北寄り覆土下層	Q54　PL19
19	砥　石	(11.0)	6.3	1.6	—	(168.9)	60	片岩	覆土中	Q56

図版番号	種　別	計測値(cm)			重量(g)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚			
第30図20	鉄　鏃	(3.0)	(1.8)	0.3	(2.8)	南寄り床面直上	M1

第15号住居跡（第31図）

位置　調査区の中央部やや東側，V8j1区。

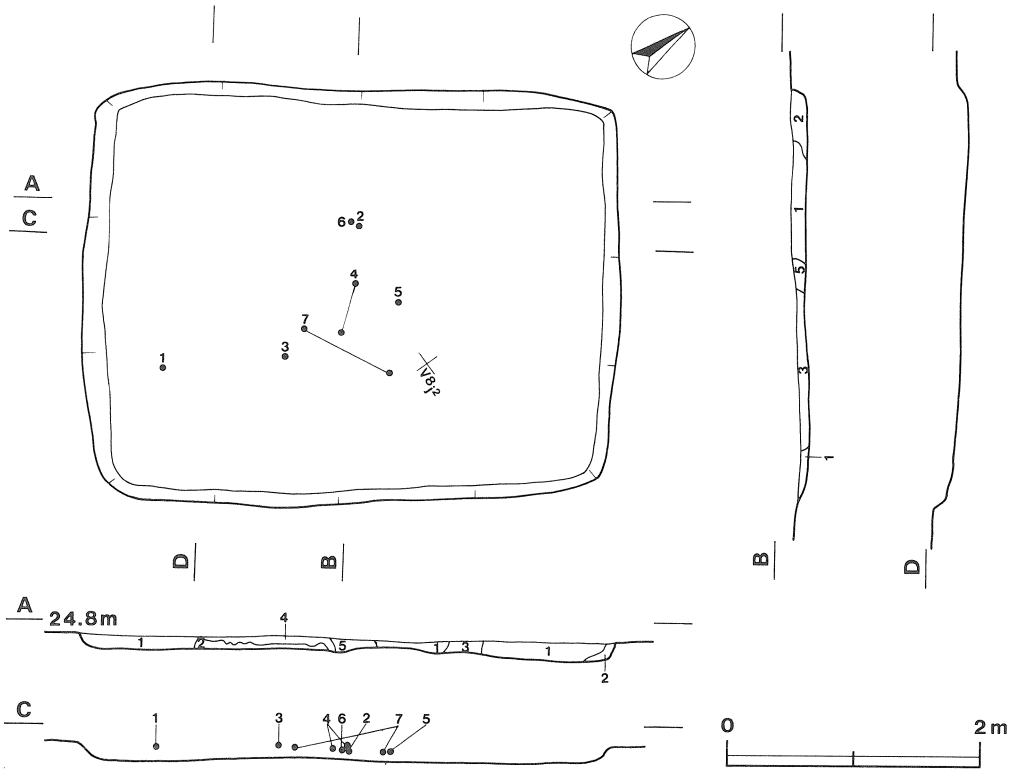
規模と平面形　長軸4.25m，短軸3.27mの長方形。

主軸方向　N－38°－E

壁　北西壁は耕作による撹乱によって殆ど残存せず，一部が遺存するのみである。壁高は5～12cmで，緩やかに外傾する。

床　平坦であるが，踏み固められた締まりはみられない。

覆土　5層から成る。覆土中層に焼土と炭化材がみられ，覆土下層から上層にかけて褐色土が厚く堆積している。

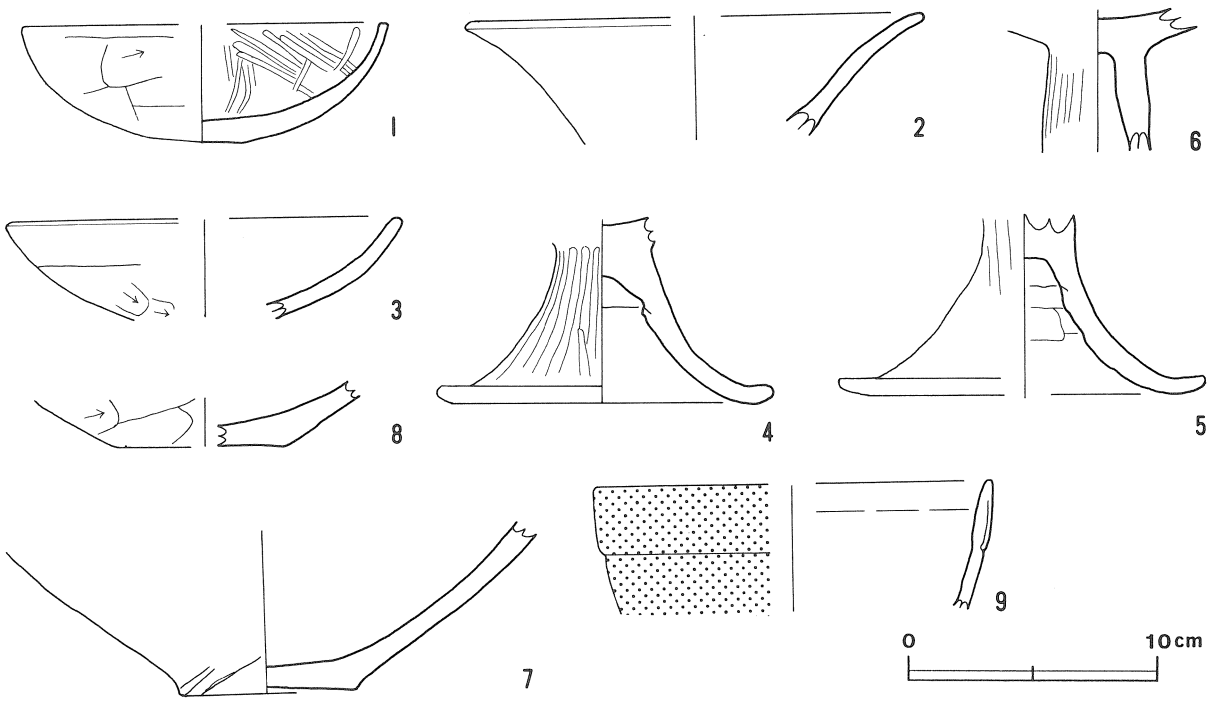


第31図　第15号住居跡実測図

土層解説

1　暗 褐 色　炭化材・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　暗 褐 色　炭化粒子中量，ローム粒子少量
4　黒 褐 色　炭化材中量，炭化粒子・ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
5　暗 褐 色　炭化材・炭化粒子少量，焼土粒子微量

遺物　中央付近の覆土中層から集中して出土している。第32図1の坏は南寄りの覆土中層から，2～6の高坏は，中央付近の覆土中層から集中して出土している。7の甕は中央付近の覆土中層から，8の甕と9の甑は



第32図　第15号住居跡出土遺物実測図

覆土中から出土したものである。

所見　本跡からは，内部施設が確認されず，床面の硬化面もみられないが，遺構の確認状況及び出土遺物から住居跡として捉えた。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第32図 1	坏 土師器	A［14.4］ B　4.8	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	P134　50% 南寄り覆土中層 口縁部摩耗
2	高　坏 土師器	A［18.4］ B（5.0）	坏部の破片。坏部は外傾して立ち上がる。	坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P135　15% PL14 中央付近覆土中層
3	高　坏 土師器	A［15.8］ B（4.0）	坏部の破片。坏部は外傾して立ち上がる。	坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P136　15% PL14 中央付近覆土中層 内面剝離
4	高　坏 土師器	B　7.4 E　6.2	脚部の破片。脚部はラッパ状に下方に開く。	脚部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ナデ。脚部内面輪積み痕。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P137　25% 中央付近覆土中層
5	高　坏 土師器	D［14.8］ E（7.2）	脚部の破片。脚部上位は柱状を呈し，下位はラッパ状に下方に開く。	脚部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・パミス 橙色 普通	P138　30% 中央付近覆土中層
6	高　坏 土師器	B（5.1） E（4.1）	脚部の破片。脚部は柱状を呈し，中位にやや凸が見られる。	脚部外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	P139　15% 中央付近覆土中層
7	甕 土師器	B（6.0） C　7.1	底部から体部下位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・パミス にぶい橙色 普通	P132　10% 中央付近覆土中層
8	甕 土師器	B　2.0 C［6.6］	底部から体部下位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・パミス にぶい橙色 普通	P133　10% 覆土中 底部内面煤付着
9	甑 土師器	A［15.8］ B（5.2）	体部上位から口縁部の破片。口縁部は複合口縁で，僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ヘラ磨き。体部外面赤彩。	砂粒・長石 浅黄橙色 普通	P140　5% 覆土中

第16号住居跡（第33図）

位置　調査区の北東部北側，V8d5区。

規模と平面形　長軸6.78m，短軸6.48mの方形。

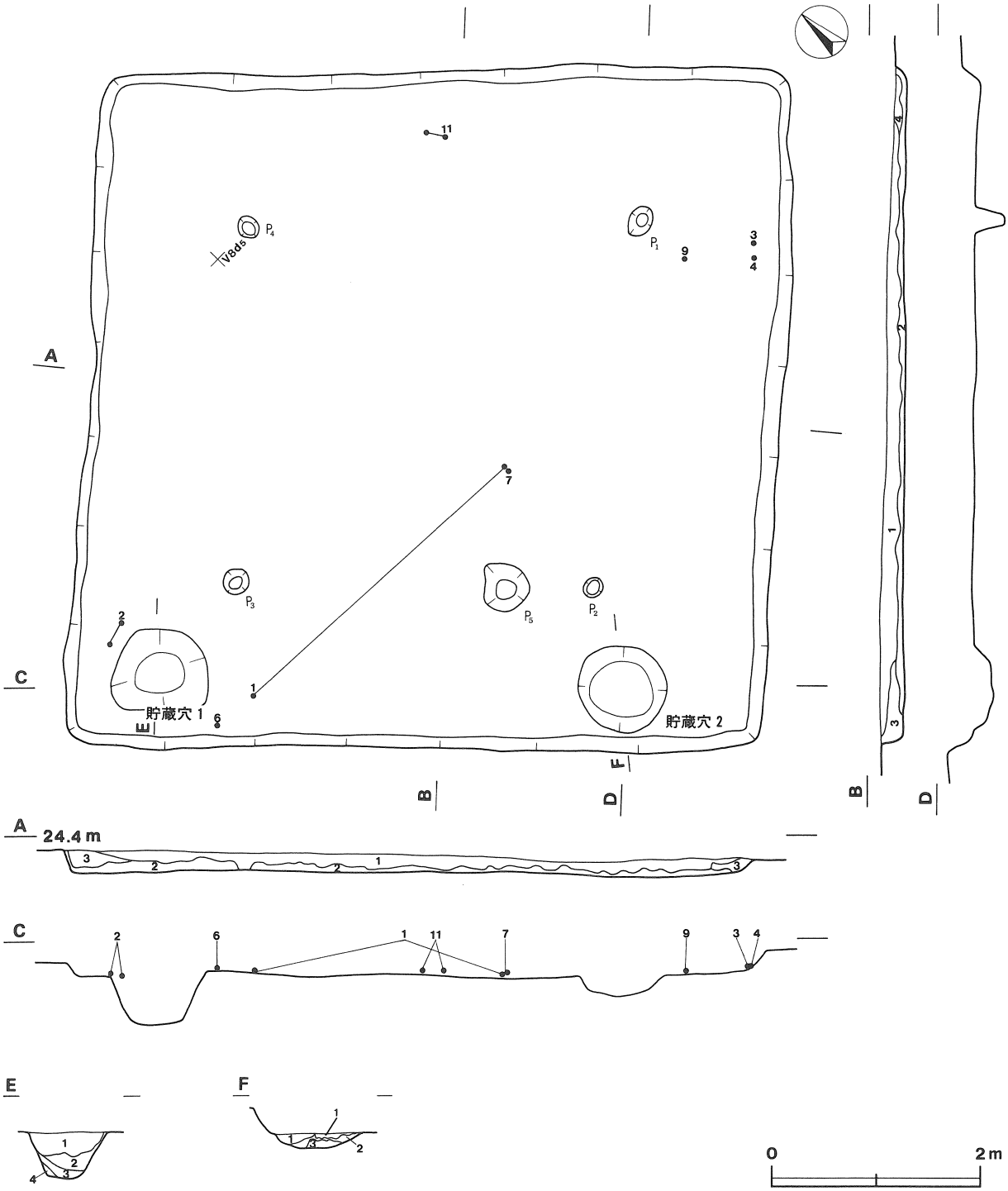
主軸方向　N－42°－W

壁　極めて緩やかな北下がりの斜面部に位置し，耕作土が比較的厚く堆積しているため残存状況が良好である。壁高は8～22cmで，緩やかに外傾している。

床　平坦であるが，踏み固められた硬化部分は確認できなかった。床面上は中央部から南部にかけ滲み状の黒色土が点在する。

ピット　5か所（P_1～P_5）。P_1～P_5は長径20～50cm，短径19～47cmの不整楕円形で，深さは23～35cmである。P_1～P_4は各コーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5はP_3の西側にあり，性格は不明である。

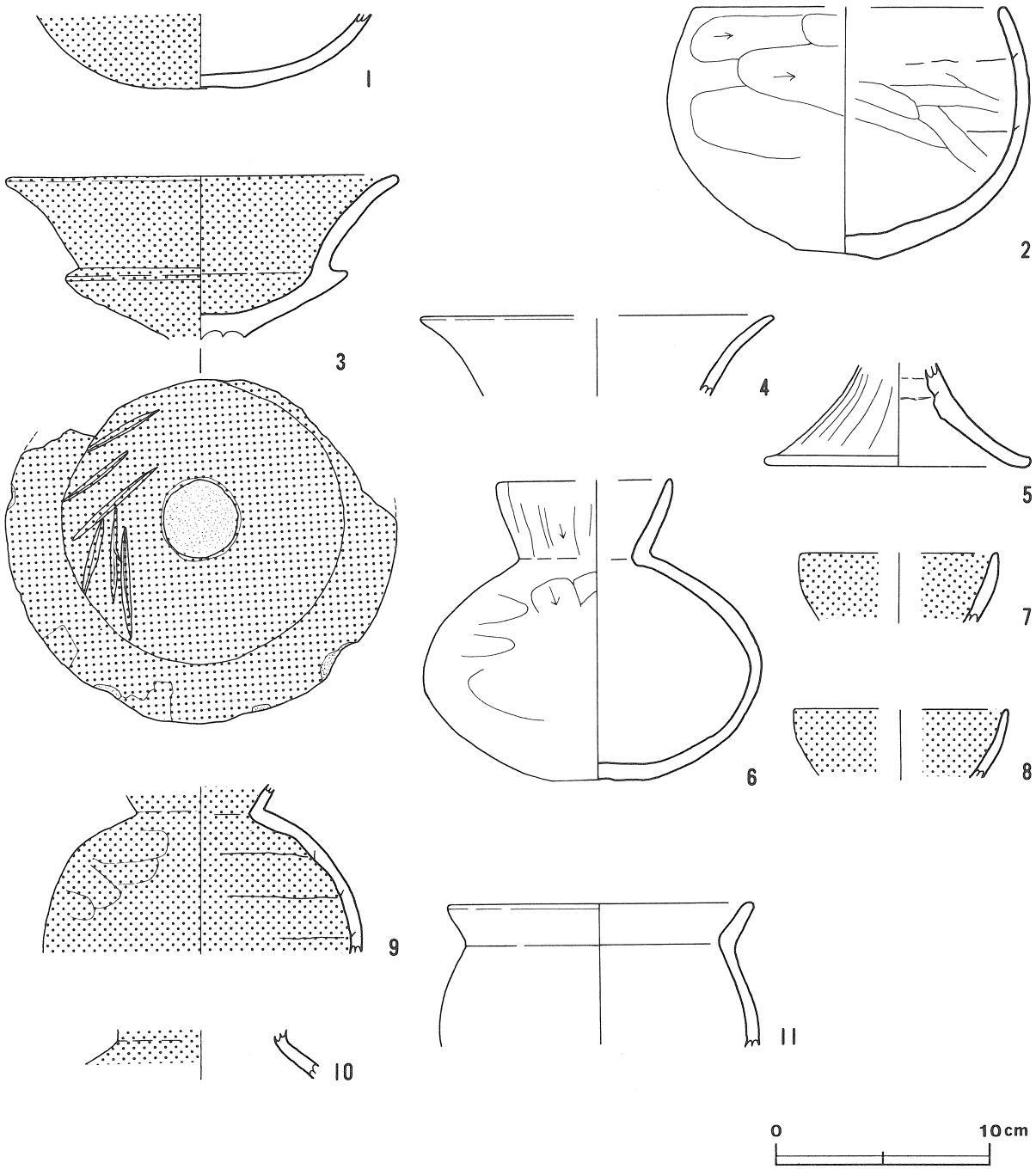
貯蔵穴　2か所。貯蔵穴1は西コーナー付近に付設され，平面形は長径94cm，短径76cmの不整楕円形で，深さ45cmである。覆土中層から炭化材が出土している。断面はU字形で，底部は皿状である。貯蔵穴2は南コーナーから南西壁沿い西寄りに付設され，径95cmの円形で，断面は擂鉢状である。



第33図　第16号住居跡実測図

貯蔵穴 1 土層解説
1　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗 褐 色　焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
3　黒 褐 色　炭化材少量，ローム小ブロック微量
4　褐　　色　炭化材中量，炭化粒子・ローム粒子微量

貯蔵穴 2 土層解説
1　暗　褐　色　炭化粒子・ローム粒子微量
2　橙　　色　ローム小ブロック・ローム粒子微量
3　にぶい橙色　ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量



第34図　第16号住居跡出土遺物実測図

覆土　4層から成る。壁際には暗褐色土が堆積し，覆土下層には褐色土，中層から上層にかけて黒褐色土がレンズ状を呈している。自然堆積である。

土層解説
1　黒 褐 色　焼土粒子・ローム粒子少量
2　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　暗 褐 色　ローム粒子微量，焼土粒子極微量
4　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物　覆土下層から床面直上にかけ土師器片が少量出土している。第34図1の坏は中央付近の覆土下層及び南寄りの床面直上から出土している坏片が接合したものである。2の鉢は南コーナー付近の床面直上から横位の状態で出土している。3～5の高坏は，3が南東壁際の床面直上から正位の状態で4の高坏と接して，5

は覆土中から出土している。6～10の坩は，6が南西壁寄りの床面直上から逆位の状態で，7が中央付近から，9が東寄りの床面直上から，8，10は覆土中から出土している。11の甕は北東壁寄りの覆土下層から横位の状態で出土している。

所見　本跡は，炉を伴わないが，遺構の確認状況及び出土遺物から住居跡と考えられる。出土遺物の中に供献土器が多量にみられることから，祭祀行為との関係が推測される。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第34図 1	坏 土師器	B（3.5） C　4.2	底部から体部下位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。底部ヘラ削り後ナデ。外面赤彩。	砂粒・パミス 褐色 普通	P142　30% 中央付近覆土下層から床面直上
2	鉢 土師器	A［14.6］ B　12.0 C　3.9	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 普通	P146　60% 南コーナー付近床面直上 二次焼成
3	高　坏 土師器	A　18.0 B（7.5）	坏部の破片。坏部は皿状に開いた後段をつくり，その後外反する。	坏部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面ヘラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P143　40% PL14 南東壁際床面直上 坏部下位研磨痕
4	高　坏 土師器	A［16.2］ B（3.7）	坏部の破片。坏部は外反する。	坏部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面ヘラ磨き。	砂粒・長石 灰褐色 普通	P144　5% 南東壁際床面直上 内・外面煤付着
5	高　坏 土師器	D　12.5 E（4.8）	脚部下位の破片。脚部は「ハ」の字状に下方に開く。	脚部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。脚部内面輪積み痕。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P145　25% 覆土中
6	坩 土師器	A　8.0 B　14.1	体部下位及び口縁部の破片。平底。体部は潰れた球形状を呈し，口縁部は緩やかに外反する。	口縁部外面ヘラナデ，内面ヘラ磨き。体部外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・雲母 灰白色 普通	P147　75% 南西壁寄り床面直上 底部外面研磨痕
7	坩 土師器	A［9.2］ B（3.2）	口縁部の破片。口縁部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石 褐色 普通	P148　5% 中央付近床面直上
8	坩 土師器	A［9.8］ B（3.2）	口縁部の破片。口縁部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・パミス にぶい褐色 普通	P149　5% 覆土中
9	坩 土師器	B（7.6）	体部中位から口縁部下位の破片。体部は球形状を呈し，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後丁寧なナデ。内・外面赤彩。体部内面輪積み痕。	砂粒・石英・雲母 赤褐色 普通	P150　20% 東寄り床面直上
10	坩 土師器	B（1.7）	体部上位の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾する。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。外面赤彩。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 普通	P151　5% 覆土中
11	甕 土師器	A　14.1 B（6.6）	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・スコリア・石英・雲母 橙色　普通	P141　15% 北東壁寄り覆土下層

第20号住居跡（第35図）

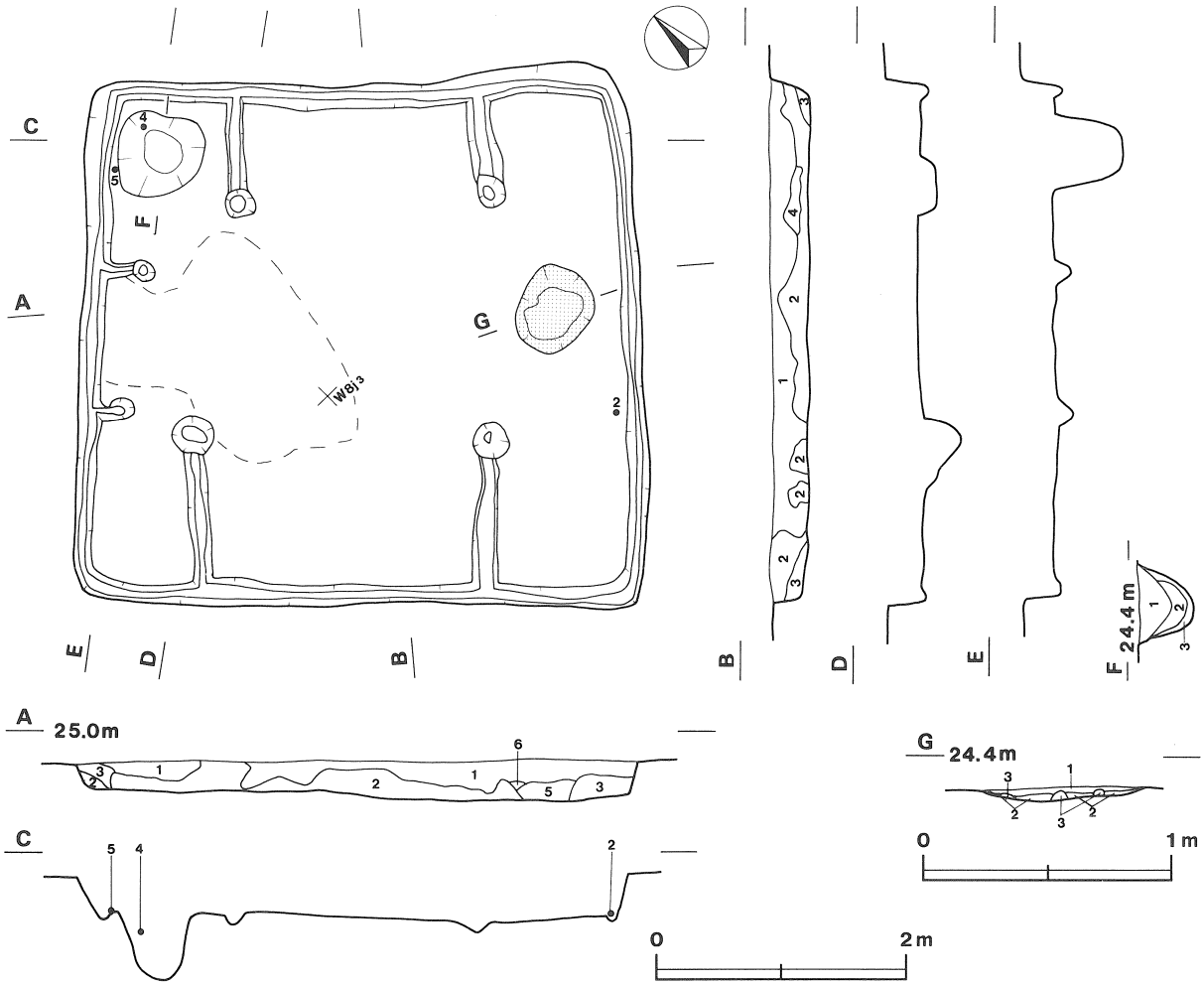
位置　調査区の東部中央付近，W8i3区。

規模と平面形　長軸4.49m，短軸4.16mの方形。

主軸方向　N－45°－W

壁　北西壁の中央付近が耕作による撹乱を受けている以外は残存状況は良好である。壁高は19～40cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　壁下を全周している。上幅10～15cm，深さ5～9cmで，断面形はU字形である。



第35図　第20号住居跡実測図

間仕切り溝　北東壁から２条，南西壁から２条，北西壁から２条それぞれ中央に向かって伸びている。南西壁からの２条については，入口ピットあるいはその施設に関係するものと思われる。

床　平坦であるが，全体に極めて緩く西側に傾いている。中央付近から北西壁付近にかけては踏み固められ堅緻である。

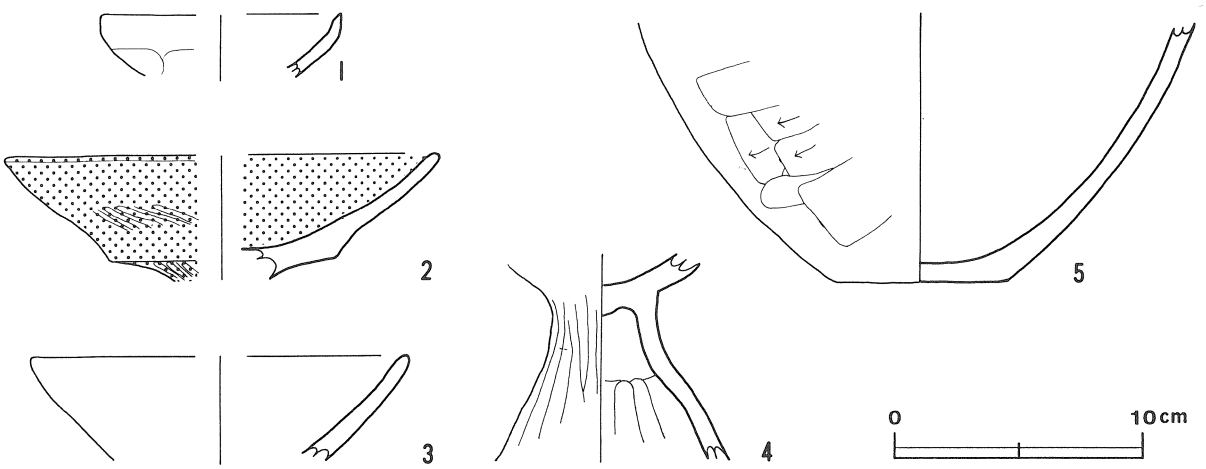
ピット　６か所（P_1～P_6）。P_1～P_4は長径24～35cm，短径20～32cmの楕円形または不整楕円形で，深さは５～10cmである。各コーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P5，P6は長径20cm，短径15～20cmで，規模や位置から出入口に伴うピットと思われる。

貯蔵穴　北コーナー付近に付設され，平面形は長径77cm，短径64cmの不整楕円形で，深さは45cmである。断面はU字形である。

貯蔵穴土層解説
1　黒 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　褐　　色　焼土粒子・ローム粒子微量

炉　南東壁の中央部壁際に付設され，長径72cm，短径58cmの楕円形で，床面を約10cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受けているが，やや赤変した程度である。

炉土層解説
1　褐　　色　焼土粒子少量，焼土小ブロック微量
2　赤 褐 色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，炭化物微量
3　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量



第36図　第20号住居跡出土遺物実測図

覆土　6層から成る。覆土下層から上層にかけて焼土粒子を含む黒褐色土が厚く堆積し，壁際には壁の崩れによるものと考えられるロームブロック，ローム粒子を含む暗褐色土が堆積している。

土層解説

1　黒褐色　ローム中ブロック少量，焼土粒子微量
2　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量
3　黒褐色　ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
4　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
5　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
6　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子極微量

遺物　覆土中及び床面直上から土師器片が少量出土している。第36図1，3の坏と高坏は覆土中から，2の高坏は南東壁の壁溝覆土上面から出土し，4の高坏は貯蔵穴内覆土上層から，5の甕は北コーナー付近の床面直上から横位の状態で出土している。

所見　本跡は，西側に入口ピットと考えられる施設を付設しており，他の住居跡とは方角的に大きく異なる。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36図 1	坏 土師器	A [9.6] B 2.4	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P157　5％ 覆土中
2	高坏 土師器	A [17.5] B (5.0)	坏部の破片。坏部は脚部との境に強い稜を持ち，外傾して開く。	坏部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面ヘラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P158　25％ PL14 南東壁溝覆土上面 外面煤付着
3	高坏 土師器	A [15.2] B (4.0)	坏部の破片。坏部は外傾して開く。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面ヘラ磨き。	砂粒・長石 灰褐色 普通	P159　5％ 覆土中
4	高坏 土師器	B (6.2) E (5.1)	脚部の破片。脚部は下方に開く。	脚部外面ヘラ削り後ナデ，内面雑なヘラナデ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P160　20％ 貯蔵穴内覆土上層
5	甕 土師器	B (10.4) C 6.8	底部から体部中位の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。底部雑なヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P156　20％ PL14 北コーナー付近床面直上

第21号住居跡（第37図）

位置　調査区の東部中央付近，W8f4区。

規模と平面形　長軸5.44m，短軸5.29mの方形。

主軸方向　N—36°—E

壁　壁高は25～40cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　壁下を全周している。上幅7～20cm，深さ8～12cmで，断面形はU字形である。

間仕切り溝　北東壁から2条，南東壁から1条，南西壁から2条それぞれ中央に向かって伸びている。

床　ほぼ平坦で，よく踏み固められ，全体に火熱を受け赤変硬化している部分が広がり堅緻である。中央付近から南東壁寄りに径115cmの円形状の撹乱を受けている。

ピット　6か所（P_1～P_6）。P_1～P_4は長径28～34cm，短径20～25cmの楕円形または不整楕円形で，深さは56～75cmである。それぞれ各コーナー付近に付設され，P_4は壁側にやや傾くように掘り込まれている。規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5，P_6は径24～27cmの円形で，深さ12cmで浅くU字状に掘りこまれている。規模や位置から，双方とも出入口施設に伴うピットと思われる。

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は長径77cm，短径55cmの不整楕円形で，深さは68cmである。断面はU字形である。

貯蔵穴土層解説

1　褐　色　ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
2　暗褐色　焼土小ブロック多量，ローム粒子微量
3　暗褐色　焼土小ブロック中量，焼土粒子少量

炉　2か所。炉1は中央から北西寄りに付設され，長径118cm，短径100cmで，床面を約6cm掘り窪めた不定形の地床炉である。炉床は火熱を受け赤変硬化している。炉2は中央から北東寄りに付設され，長径80cm，短径20cmで，床面を約5cm掘り窪めた長楕円形の地床炉である。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉1土層解説

1　暗褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量
2　暗褐色　焼土小ブロック・焼土粒子少量，ローム粒子微量
3　暗赤褐色　焼土小ブロック多量，焼土粒子少量

炉2土層解説

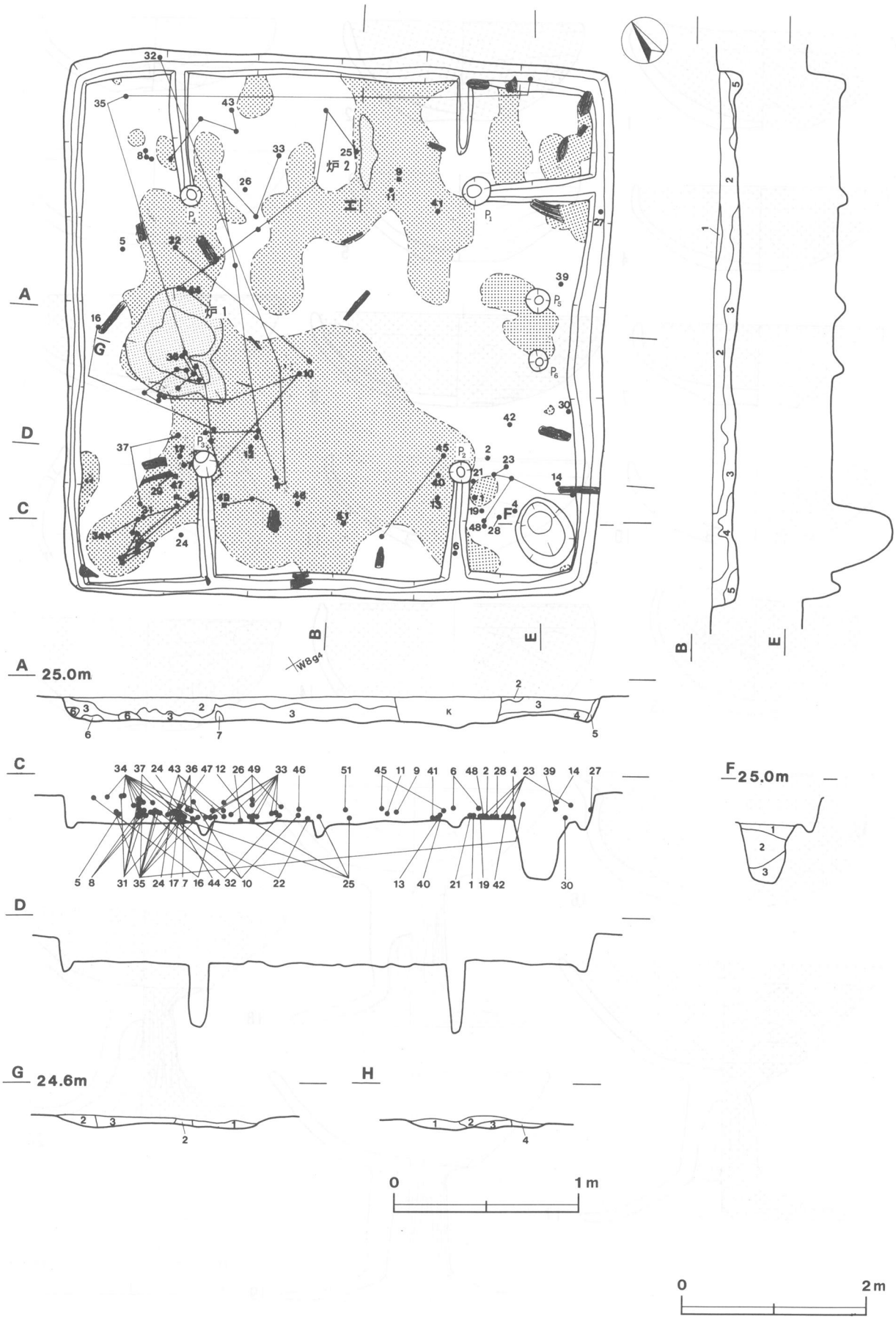
1　褐　色　ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量
2　暗赤褐色　焼土小ブロック多量，焼土粒子少量
3　褐　色　焼土粒子少量，ローム粒子微量
4　褐　色　ローム小ブロック中量，焼土中ブロック少量，炭化粒子微量

覆土　7層から成る。床面上からは広い範囲で火熱を受けて赤変硬化した焼土塊が確認され，東コーナー付近からは炭化材が出土している。第6層は覆土下位から上位にかけて焼土粒子を含む黒褐色土が厚く堆積し，壁際には炭化物を中量含む暗赤褐色土が堆積している。中央部から西側の覆土中からは投棄された状態で多量の土師器が出土している。人為堆積と思われる。

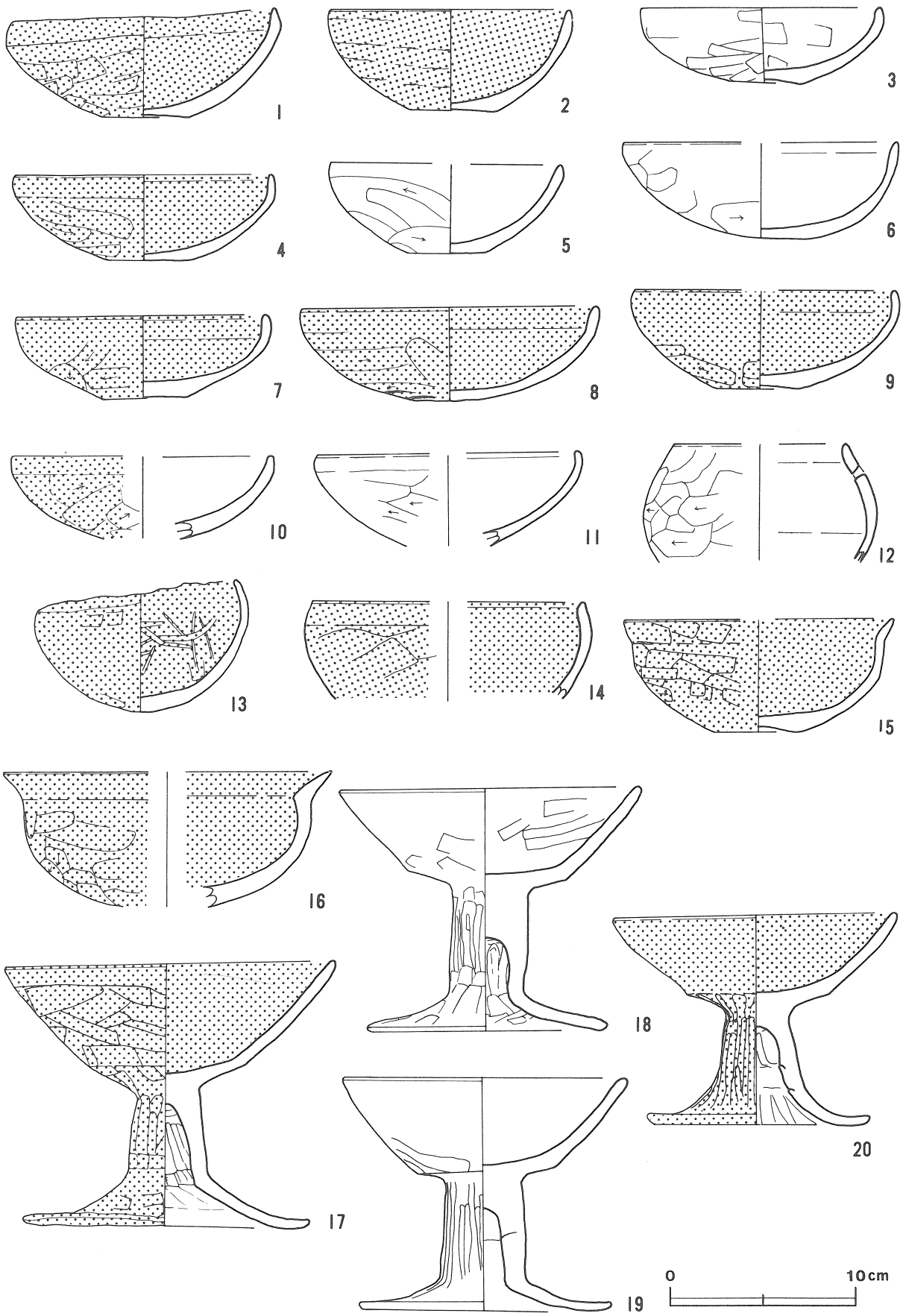
土層解説

1　暗褐色　焼土粒子・ローム小ブロック微量
2　黒褐色　ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化物少量
3　褐　色　ローム小ブロック・焼土小ブロック少量，焼土粒子微量
4　にぶい赤褐色　ローム粒子・炭化物少量，ローム小ブロック微量
5　暗赤褐色　炭化物中量，ローム中ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
6　黒褐色　炭化物中量，ローム粒子・焼土小ブロック少量，焼土粒子微量
7　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

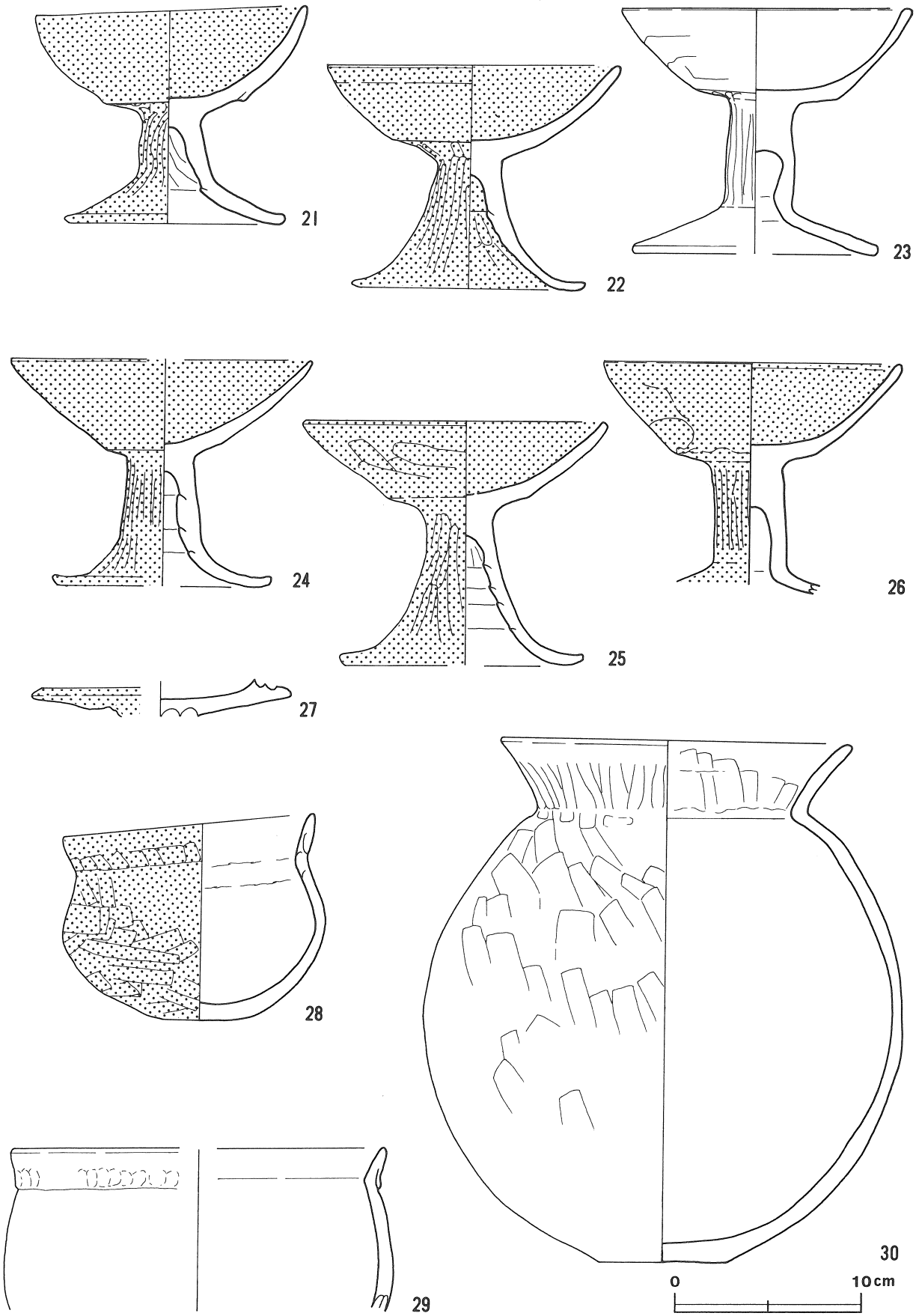
遺物　中央付近を除いた覆土上層から床面直上にかけて多量に土師器が出土している。第38・39・40・41・42図1～11の坏は，1，2，4が南寄りの床面直上から逆位で，5が北西寄りの覆土中層から正位の状態で，6が南寄りの覆土中層から，7と8は，西コーナー付近と北コーナー付近の床面直上から，9，11が東寄り



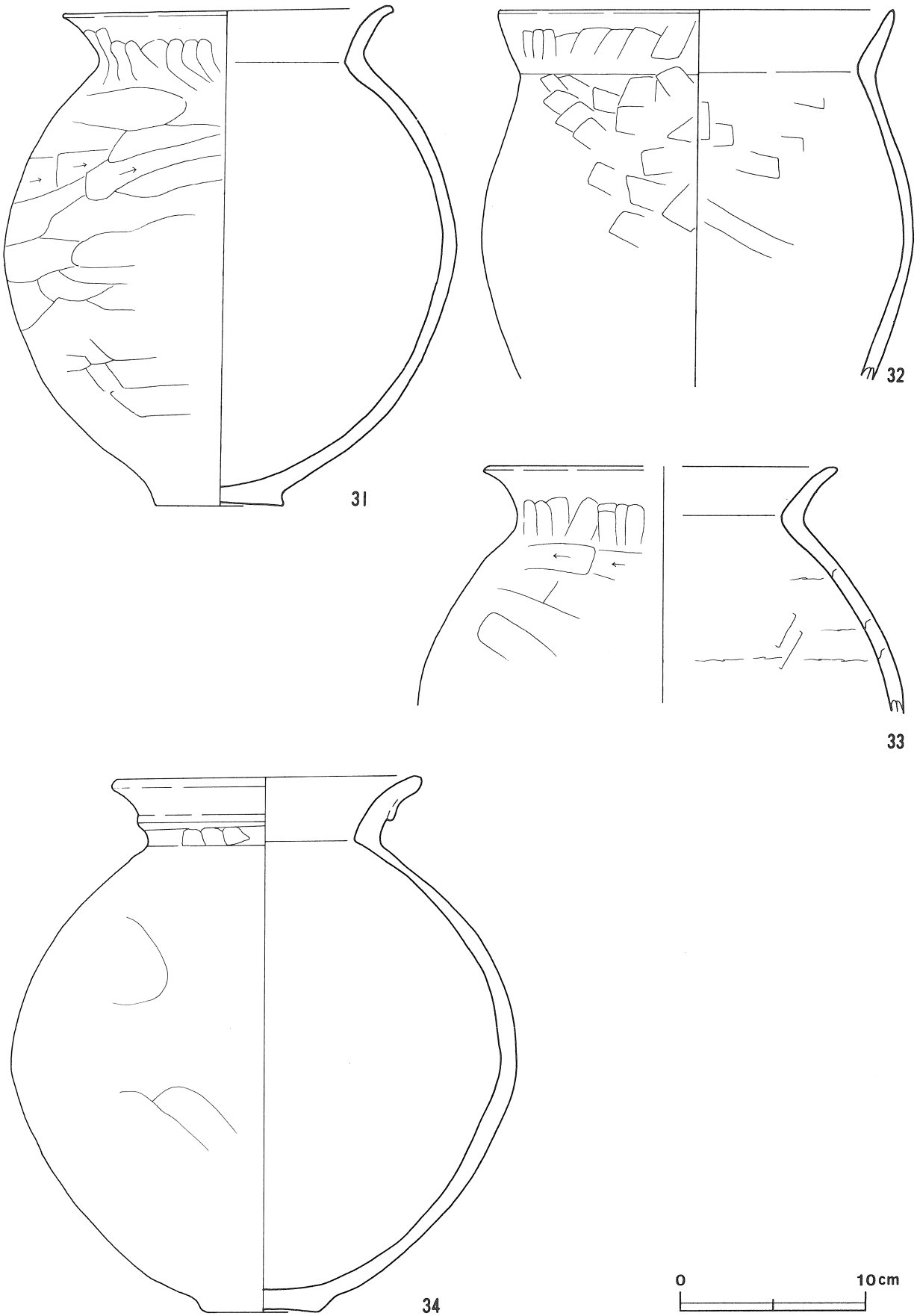
第37図　第21号住居跡実測図



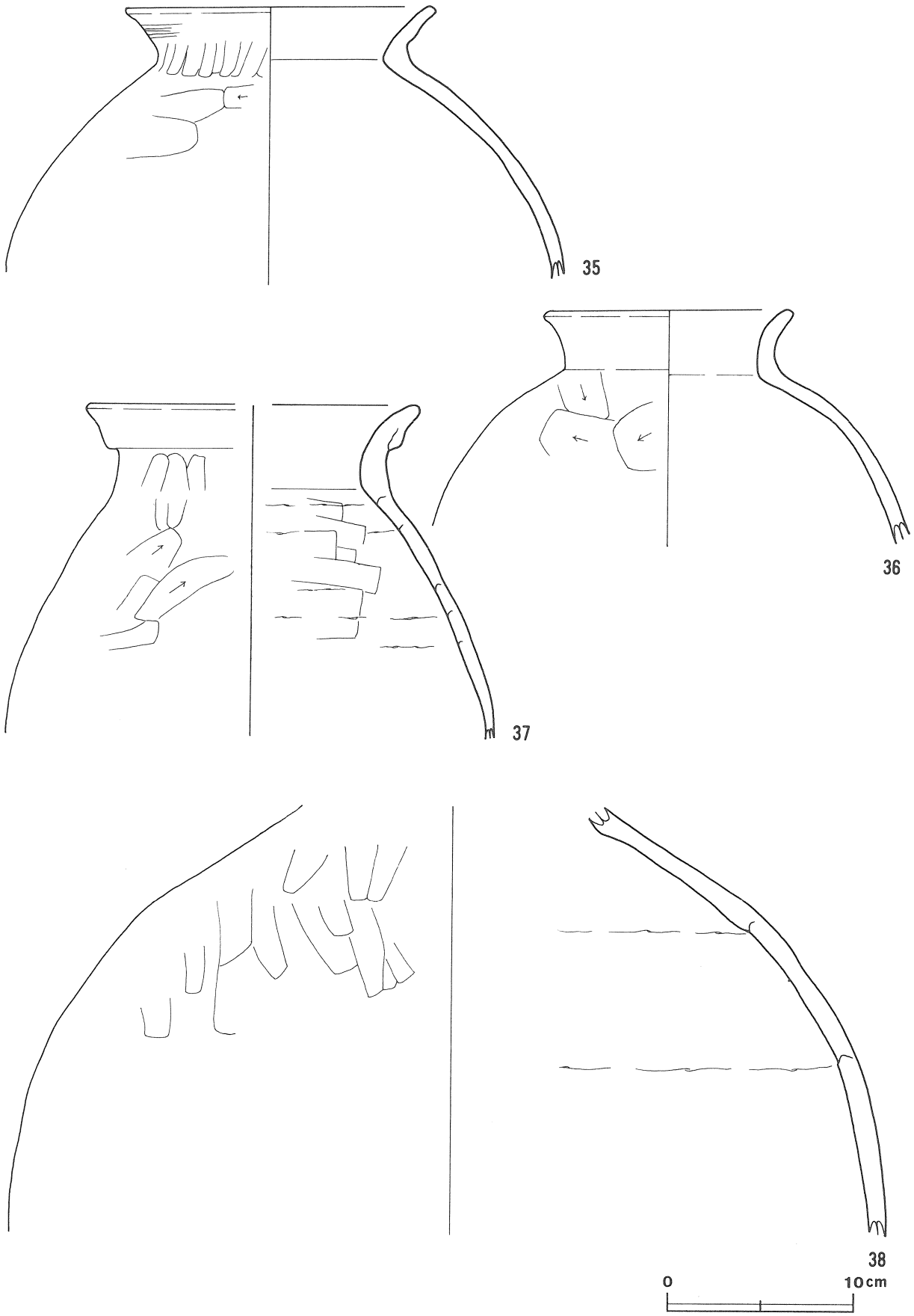
第38図　第21号住居跡出土遺物実測図(1)



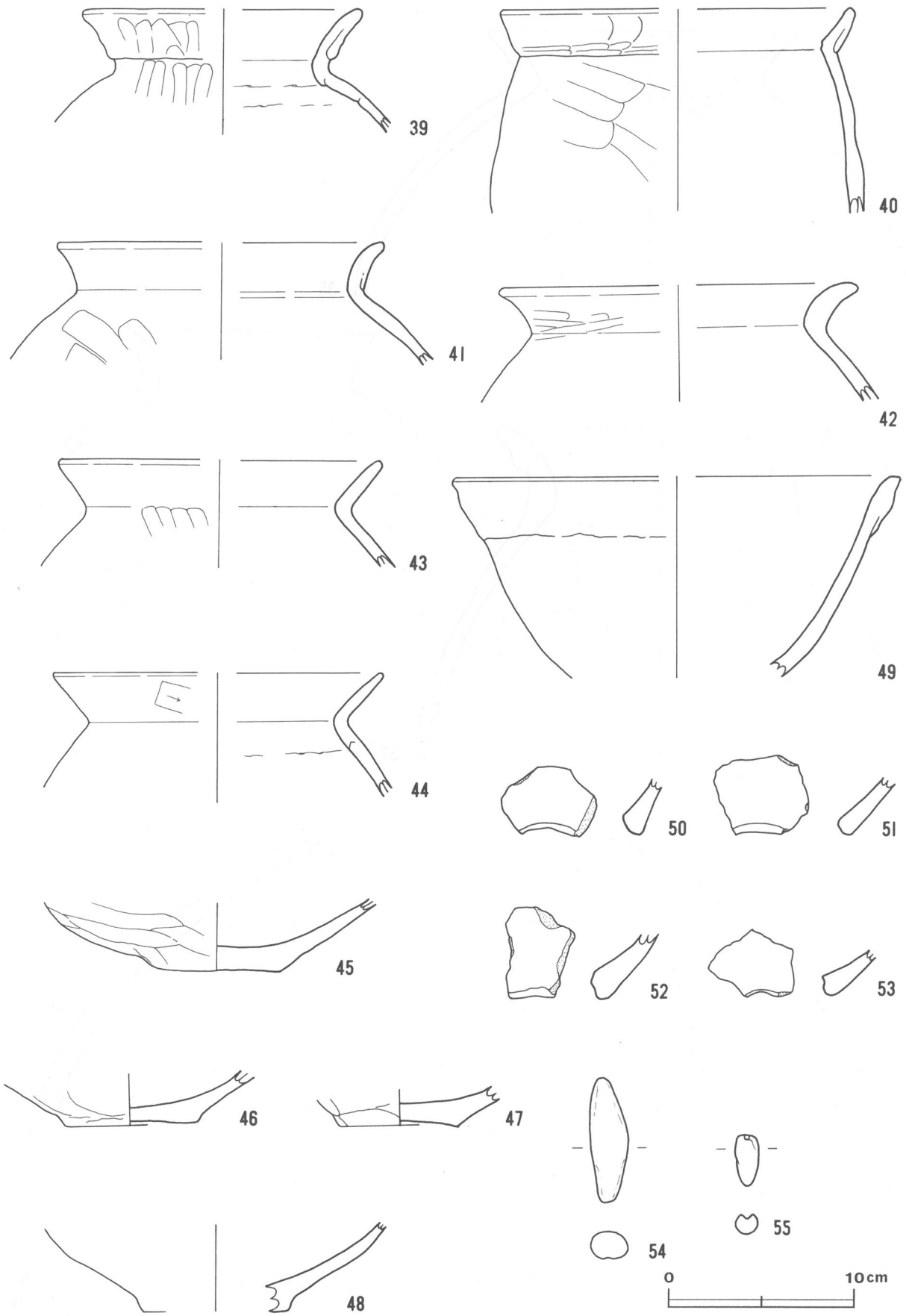
第39図　第21号住居跡出土遺物実測図(2)



第40図　第21号住居跡出土遺物実測図(3)



第41図　第21号住居跡出土遺物実測図(4)



第42図　第21号住居跡出土遺物実測図(5)

の覆土下層から，10が中央付近の覆土下層及び西寄りの覆土中層から出土している坏片と接合したものである。12～14の椀は，12が西寄りの覆土下層から，13，14が南寄りの覆土下層から逆位の状態で出土している。17～27の高坏は，17，24が西寄りの覆土下層から正位の状態で，19，21，23が南寄りの床面直上から，19が逆位，21が正位，23は脚部と坏部が接合し，27が南東壁際の覆土中層から出土している。28～48の甕は，39，41が東寄りの覆土下層及び床面直上から横位の状態で，31，34，37，46，47が西寄りの覆土下層及び床面直上から，28，30，40，45，48が南寄りの覆土下層及び床面直上から，32が北東壁際の覆土中層から逆位の状態で出土している体部に西寄りの覆土下層から出土している甕片が接合し，35は北寄りの覆土中層から出土している甕片に東寄りと西寄りの覆土下層から出土している甕片が接合したものである。49～53の甑は，49，51が西寄りの覆土下層から出土している。3，15，16，18，20，22，25，26，29，33，38，50，52，53はいずれも覆土中より出土したもので，その他，54の土玉，55の不明土製品が覆土中から出土している。

所見　本跡は，覆土上層から床面直上にかけ，遺物が多量に重なり合って出土している住居跡である。床面が火熱を受け，赤変硬化し炭化材も出土している状況から考えると，住居焼失後，遺物を投棄したものと思われる。また，出土遺物に占める供献土器の割合と，赤彩されている遺物の割合が高く，祭祀行為との関係が考えられる。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第38図 1	坏 土師器	A 14.0 B 4.9	平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部は内削ぎ状で直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P184　100% PL14 南寄り床面直上
2	坏 土師器	A 12.8 B 5.6 C 4.5	平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はやや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。底部ヘラ削り。内・外面赤彩。体部外面輪積痕有り。	砂粒・長石・石英 黄褐色 普通	P185　100% PL14 南寄り床面直上 内面摩耗
3	坏 土師器	A 13.2 B 4.3 C 4.0	上げ底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 普通	P186　100% PL14 覆土中
4	坏 土師器	A 13.6 B 4.6 C 4.6	体部中位及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P187　70% PL14 南寄り床面直上 内面剝離 二次焼成
5	坏 土師器	A [12.0] B 4.8 C 4.8	平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒 スコリア にぶい褐色 普通	P188　60% PL14 北西寄り覆土中層 二次焼成
6	坏 土師器	A [14.7] B 5.2 C 5.7	体部及び口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面ヘラ磨き。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P189　65% PL14 南寄り覆土中層
7	坏 土師器	A 13.6 B 4.5 C 4.5	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P190　70% PL15 西コーナー付近床面直上 二次焼成
8	坏 土師器	A 16.1 B 5.1	体部及び口縁部一部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	口縁部外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P192　50% PL14 北コーナー付近床面直上 内面剝離
9	坏 土師器	A [14.3] B 5.4 C 4.2	底部から口縁部の破片。上げ底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。底部ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P194　50% 東寄り覆土下層 内面剝離
10	坏 土師器	A [14.2] B (4.5)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ちながり，口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。外面赤彩。	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	P195　40% 中央付近覆土下層 体部外面煤付着
11	坏 土師器	A [14.2] B (5.0)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	P196　20% 東寄り覆土下層 二次焼成

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第38図 12	椀 土師器	A [9.1] B (6.4)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は端部が内削ぎ状にほぼ直立する。	口縁部内面横ナデ，外面ヘラ削り後ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・パミス にぶい赤褐色 普通	P163　20% 西寄り覆土下層 体部上位穿孔
13	椀 土師器	A　10.8 B　7.1 C　1.4	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P183　100% PL14 南寄り覆土下層 内面剝離 二次焼成
14	椀 土師器	A [14.8] B (5.1)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒 にぶい橙色 普通	P197　20% 南寄り覆土下層
15	鉢 土師器	A　14.6 B　6.1 C　4.6	体部及び口縁部一部欠損。上げ底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・石英 明赤褐色 普通	P191　60% 覆土中
16	鉢 土師器	A [17.6] B (7.3)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・スコリア・雲母 橙色 普通	P193　40% PL14 覆土中 著しい内面剝離
17	高　坏 土師器	A　17.9 B　14.5 D　15.4 E　7.6	坏部一部欠損。脚部はほぼ柱状を呈し，端部は反る。坏部は脚部との境に弱い稜を持ち，外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面丁寧なナデ。脚部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。脚部内面を除く内・外面赤彩。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P198　95% PL14 西寄り覆土下層
18	高　坏 土師器	A　16.3 B　13.1 D　13.0 E　7.8	脚部一部欠損。脚部は柱状を呈し，下位で大きく開く。坏部は脚部との境に強い稜を持ち，内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。脚部外面ヘナラデ，内面ナデ。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P199　95% PL15 覆土中 脚部外面指頭痕 二次焼成
19	高　坏 土師器	A　15.3 B　12.6 D　13.6 E　7.0	脚部は柱状を呈し，下位で大きく開き，端部は反る。坏部は脚部との境に強い稜を持ち，内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラナデ，内面ナデ。脚部外面ヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・スコリア にぶい黄橙色 普通	P200　100% PL15 南寄り床面直上 二次焼成
20	高　坏 土師器	A　13.1 B　11.5 D　11.2 E　6.3	脚部は下位で大きく開き，端部は反る。坏部は脚部との境に強い稜を持ち，内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラナデ。脚部外面ヘラナデ，内面ナデ。脚部内面輪積み痕。脚部内面を除く内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	P201　100% PL15 覆土中 坏部内面著しい剝離
第39図 21	高　坏 土師器	A　14.6 B　11.7 D　11.8 E　5.5	脚部一部欠損。脚部は下位で大きく開く。坏部は脚部との境に強い稜を持ち，内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラナデ。脚部外面ヘラナデ，内面ナデ。脚部内面を除いた内・外面赤彩。	砂粒・雲母 橙色 普通	P202　95% 南寄り床面直上 坏部内面著しい剝離
22	高　坏 土師器	A　15.8 B　12.1 D　12.5 E　6.9	脚部一部欠損。脚部はラッパ状に開き，端部は反る。坏部は脚部との境に強い稜を持ち，内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。脚部外面ヘラナデ，内面ナデ。脚部内面輪積み痕。内・外面赤彩。	砂粒・雲母 赤褐色 普通	P203　90% 覆土中 二次焼成
23	高　坏 土師器	A　15.4 B　13.3 D [13.0] E　8.0	脚部及び坏部一部欠損。脚部はほぼ柱状を呈し，中位にやや膨らみを持ち，下位で大きく開く。坏部は脚部との境に強い稜を持ち，内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。脚部外面ヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	P204　85% PL15 南寄り床面直上 二次焼成
24	高　坏 土師器	A [16.1] B　12.3 D [11.8] E　7.3	脚部及び坏部一部欠損。脚部はほぼ柱状を呈し，下位で大きく開き，端部は反る。坏部は脚部との境に強い稜を持ち，内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ヘラ磨き。脚部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ナデ。脚部内面輪積み痕。脚部内面を除き赤彩。	砂粒 褐色 普通	P205　60% 西寄り覆土下層
25	高　坏 土師器	A　16.3 B　13.1 D [13.0] E　8.1	脚部及び坏部一部欠損。脚部はラッパ状に開き，端部は反る。坏部は脚部との境に弱い稜を持ち，内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ナデ。脚部ヘラナデ，内面ナデ。脚部内面輪積み痕。脚部内面を除き赤彩。	砂粒・パミス にぶい黄橙色 普通	P206　60% 覆土中
26	高　坏 土師器	A　15.8 B [12.0] E　6.7	脚部一部欠損。脚部は柱状を呈し，下方で開く。坏部は脚部との境に強い稜を持ち，内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラナデ，内面ナデ。脚部外面ヘラナデ。脚部内面を除いて赤彩。	砂粒・長石・パミス・雲母 にぶい褐色 普通	P207　60% 覆土中 坏部内面剝離

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第39図 27	高　坏 土師器	B (1.9)	坏部の破片。坏部は下半で段を持ち，外反する。	坏部外面ヘラナデ。外面赤彩。	砂粒・長石・石英・パミス にぶい褐色 普通	P208　10% 南東壁際覆土中層 坏部内面剝離
28	甕 土師器	A　13.6 B　11.7 C　4.0	口縁部及び体部一部欠損。平底。体は内彎しながら立ち上がり，頸部は括れ，口縁部は端部で折り返し，複合口縁となり，外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部雑なヘラ削り。外面赤彩。	砂粒・長石 橙色 普通	P161　95% PL15 南寄り覆土下層及び床面直上 内面剝離 体部外面煤付着
29	甕 土師器	A [10.0] B　8.8	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部の端部で折り返し，複合口縁となり，体部内面に弱い稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P162　10% 覆土中 口縁部外面指頭痕
30	甕 土師器	A　18.5 B　28.3 C　6.8	平底。体部は球形状を呈し，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面ヘラ削り後横ナデ。頸部内・外面ヘラ削り後なで。体部外面ヘラ削り後ナデ。底部雑なヘラ削り。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P164　100% PL15 南寄り覆土下層及び床面直上 体部外面煤付着 著しい内面剝離
第40図 31	甕 土師器	A　17.9 B　27.0 C　7.0	底部から口縁部の破片。突出した平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・パミス・雲母 にぶい橙色 普通	P165　50% PL15 西寄り覆土下層及び床面直上 二次焼成
32	甕 土師器	A　21.4 B (20.1)	体部中位から口縁部の破片。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部ヘラ削り。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石 淡赤橙色 普通	P166　50% PL16 北東壁際覆土中層 二次焼成
33	甕 土師器	A [19.1] B (13.2)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P167　30% 覆土中
34	甕 土師器	A　16.2 B [32.8] C　6.0	底部から口縁部の破片。丸底。体部は球形状を呈し，頸部に強い稜を持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。頸部外面輪積み痕。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P168　45% PL16 西寄り覆土下層及び床面直上 体部外面煤付着
第41図 35	甕 土師器	A　16.6 B (14.4)	体部中位から口縁部の破片。体部は球形状を呈し，最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面斜位のヘラナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P169　20% 北寄り覆土中層
36	甕 土師器	A　13.5 B (12.0)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラ削り。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P170　15% PL16 覆土中 体部外面煤付着
37	甕 土師器	A [18.0] B (17.8)	体部中位から口縁部の破片。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり，口縁部は折り返しのある複合口縁となり，外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面斜位のヘラ削り。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P171　20% 西寄り覆土下層 及び床面直上 内面剝離
38	甕 土師器	B (23.2)	体部中位から頸部の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面雑なヘラナデ。内面輪積み痕。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P172　10% 覆土中 内面剝離
第42図 39	甕 土師器	A [15.0] B (6.2)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は端部で折り返しの複合口縁となり，外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラ削り後ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・パミス 灰褐色 普通	P173　5% 東寄り覆土下層 及び床面直上 口縁部外面煤付着
40	甕 土師器	A [19.2] B (11.0)	体部中位から口縁部の破片。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり，口縁部は端部で折り返しの複合口縁となり，外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部ヘラナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。	砂粒・長石・パミス 灰褐色 普通	P174　5% 南寄り覆土下層 及び床面直上
41	甕 土師器	A [17.4] B (6.3)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P175　5% PL16 東寄り覆土下層及び床面直上
42	甕 土師器	A [19.4] B　6.3	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部ヘラ削り。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P176　5% 覆土中 二次焼成
43	甕 土師器	A [17.0] B (5.8)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラ削り。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石・パミス にぶい橙色 普通	P177　5% 覆土中 二次焼成

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第42図 44	甕 土師器	A [17.7] B (6.3)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 褐灰色 普通	P178　5％ 覆土中 二次焼成
45	甕 土師器	B (3.7) C　7.0	底部から体部下位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面雑なヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。底部雑なヘラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母 褐灰色 普通	P179　5％ 南寄り覆土下層及び床面直上 内面剝離　二次焼成
46	甕 土師器	B (2.4) C　7.1	底部から体部下位の破片。やや突出した平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P180　10％ 西寄り覆土下層及び床面直上 内面煤付着
47	甕 土師器	B (1.4) C　6.3	底部から体部下位の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石 褐灰色 普通	P181　5％ 西寄り覆土下層及び床面直上 二次焼成
48	甕 土師器	B (4.5) C [7.8]	底部から体部下位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒 褐灰色 普通	P182　5％ 南寄り覆土下層及び床面直上 二次焼成
49	甑 土師器	A [24.0] B (10.8)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	口縁部内面横ナデ，外面雑なヘラナデ。体部外面ヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	P209　30％ PL16 西寄り覆土下層
50	甑 土師器	—	孔部から体部下位の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・石英・雲母・スコリア にぶい橙色　普通	P210　5％ 覆土中
51	甑 土師器	—	孔部から体部下位の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア 黒褐色 普通	P211　5％ 西寄り覆土下層 二次焼成
52	甑 土師器	—	孔部から体部下位の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色　普通	P212　5％ 覆土中
53	甑 土師器	—	孔部から体部下位の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・パミス にぶい橙色　普通	P213　5％ 覆土中

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径				
第42図54	土　玉	(2.8)	(3.2)	—	(0.8)	(11.3)	30	覆土中	DP 7
55	不明土製品	7.7	2.0	1.5	—	18.0	100	覆土中	DP 8

第23号住居跡（第43図）

位置　調査区の東部農道隣接部，$V8_{g6}$区。

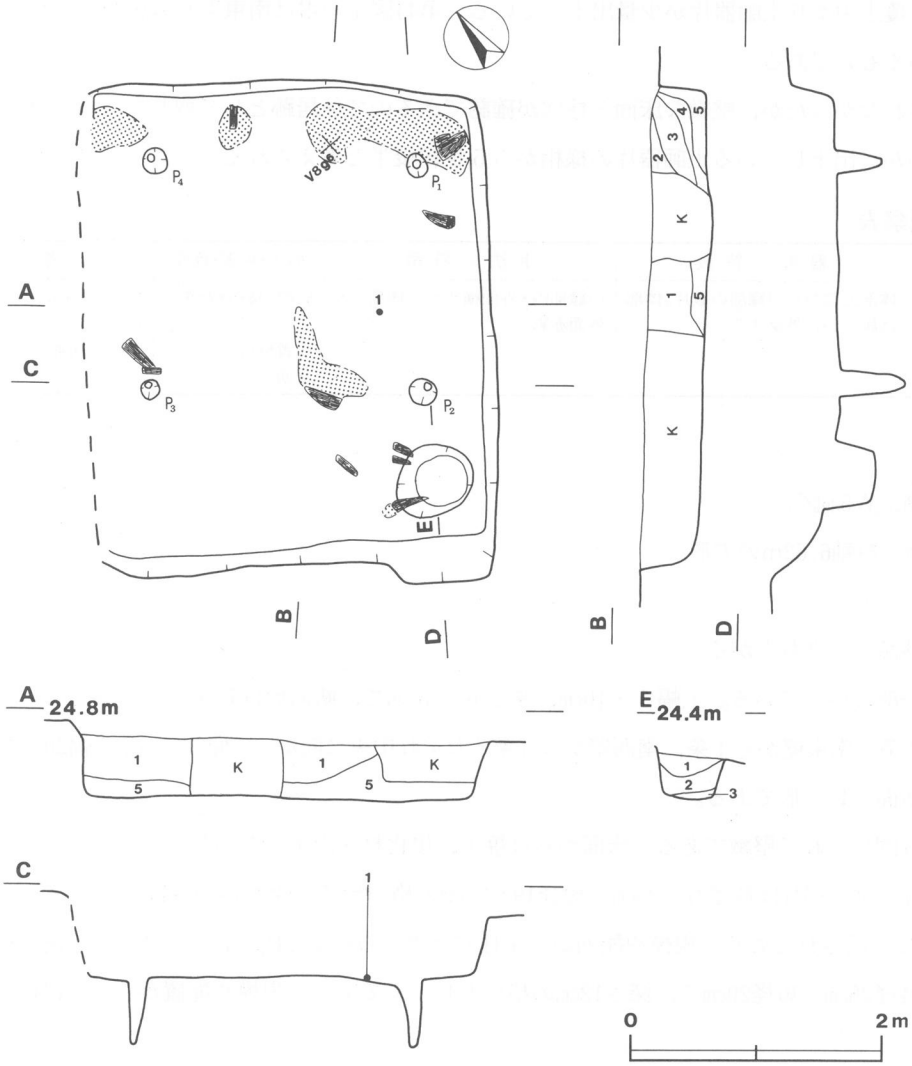
規模と平面形　長軸3.93m，短軸［3.26］mの長方形。

主軸方向　N－38°－E

壁　北西壁は農道に接するため，明確に確認することはできなかった。南コーナーから西側の一部は耕作による撹乱で殆ど残存しない。壁高は34～62cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦で，よく踏み固められ堅緻である。北西壁中央から南東壁に向かって幅70cmの馬背上の高まりが伸びている。南コーナー付近には撹乱がみられる。

ピット　4か所（P_1～P_4）。P_1～P_4は長径16～22cm，短径15～20cmの楕円形で，深さは37～48cmである。P_1は北コーナー，P_2は東コーナー付近に付設され，P_3は南コーナーから南東壁に沿って，また，P_4は西コーナーから南西壁に沿って，それぞれ北東に寄った所に付設されている。規模や配列から主柱穴と考えられる。

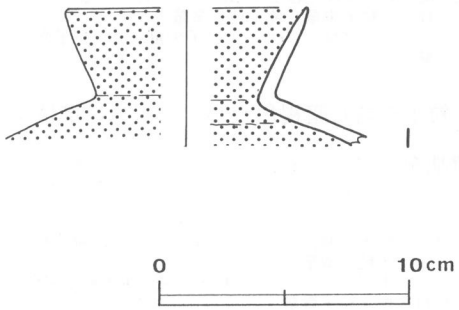


第43図　第23号住居跡実測図

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は長径67cm，短径57cmの楕円形で，円筒状に34cm程掘り込まれ，覆土上層からは炭化材が出土している。

貯蔵穴土層解説
1　暗 褐 色　炭化物・炭化粒子少量，焼土粒子微量
2　黒 褐 色　焼土小ブロック・焼土粒子少量
3　褐　　色　焼土粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック微量

覆土　5層から成る。中央付近から南側は撹乱を広く受けているが，自然堆積と思われる。



土層解説
1　黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒 褐 色　焼土小ブロック・ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
3　暗 褐 色　焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
4　暗赤褐色　ローム粒子多量，焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量
5　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

第44図　第23号住居跡出土遺物実測図

遺物　出土遺物が少なく，覆土中より土師器片が少量出土している。第44図１の坩は南東寄りの床面直上から斜位の状態で出土しているものである。

所見　本跡は，炉が確認されなかったが，堅緻な床面と柱穴が確認できるので住居跡として取り扱った。時期を判断する遺物は少ないが，出土している土師器片の様相から５世紀後半と考えられる。

第23号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第44図 1	坩 土師器	A［9.4］ B（5.2）	体部上位から口縁部の破片。体部は緩やかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英・スコリア 浅黄橙色 普通	P215　10% PL16 南東寄り床面直上

第27号住居跡（第45図）

位置　調査区の中央部南側，W5d9区。

規模と平面形　長軸6.92m，短軸6.62mの方形。

主軸方向　N－50°－W

壁　壁高は45～66cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　南東壁と南西壁の一部に巡っている。上幅５～10cm，深さ６～８cmで，断面形はU字形である。

間仕切り溝　北東壁から２条，南東壁から１条，南西壁から３条それぞれ中央に向かって伸びている。幅20～28cm，深さ５～12cmで，断面はU字形である。

床　ほぼ平坦で，よく踏み固められて堅緻である。床面からは焼土，炭化材が出土している。

ピット　５か所（P_1～P_5）。P_1～P_4は長径21～25cm，短径19～22cmの楕円形で，深さは59～77cmである。P_1～P_4は各コーナー付近に付設されており，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は南コーナーから南東壁沿い北側に付設され，長径25cm，短径20cmで，深さ12cmの楕円形ピットである。規模や配置から出入口に伴うピットと思われる。

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は長径85cm，短径75cmのほぼ長方形で，深さ56cmである。断面はU字形で，底部は皿状である。

貯蔵穴土層解説

1　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック小量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック微量
3　暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック少量
5　暗褐色　ローム粒子中量，炭化材・炭化粒子少量，ローム小ブロック微量

炉　北西壁中央寄りに付設され，長径170cm，短径83cmで，床面を約５cm掘り窪めた長方形の地床炉である。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

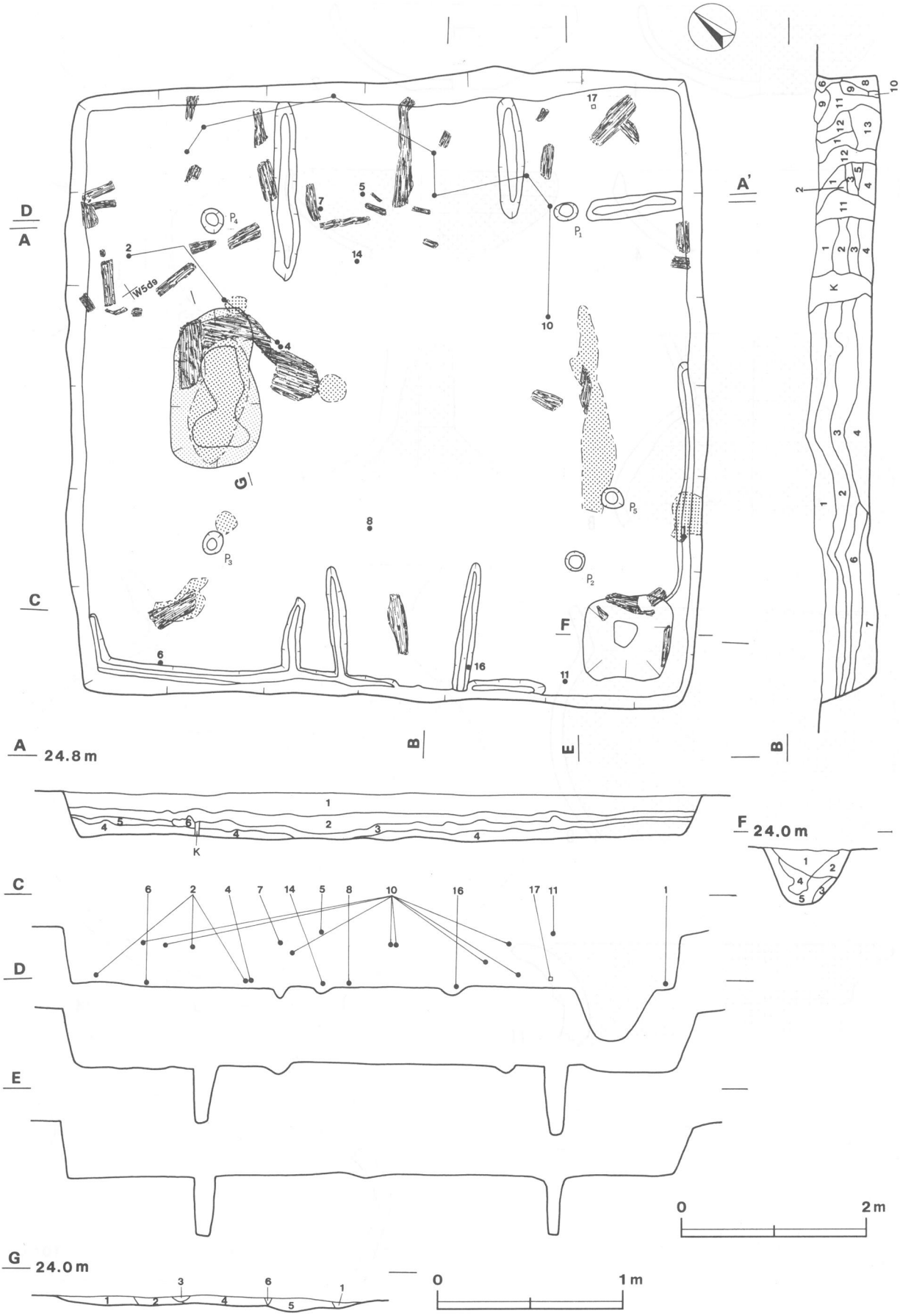
炉土層解説

1　赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子多量，炭化粒子中量
2　極暗褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化粒子中量，ローム粒子少量
3　極暗赤褐色　焼土粒子・炭化粒子多量，焼土小ブロック中量
4　暗褐色　焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量
5　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
6　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量

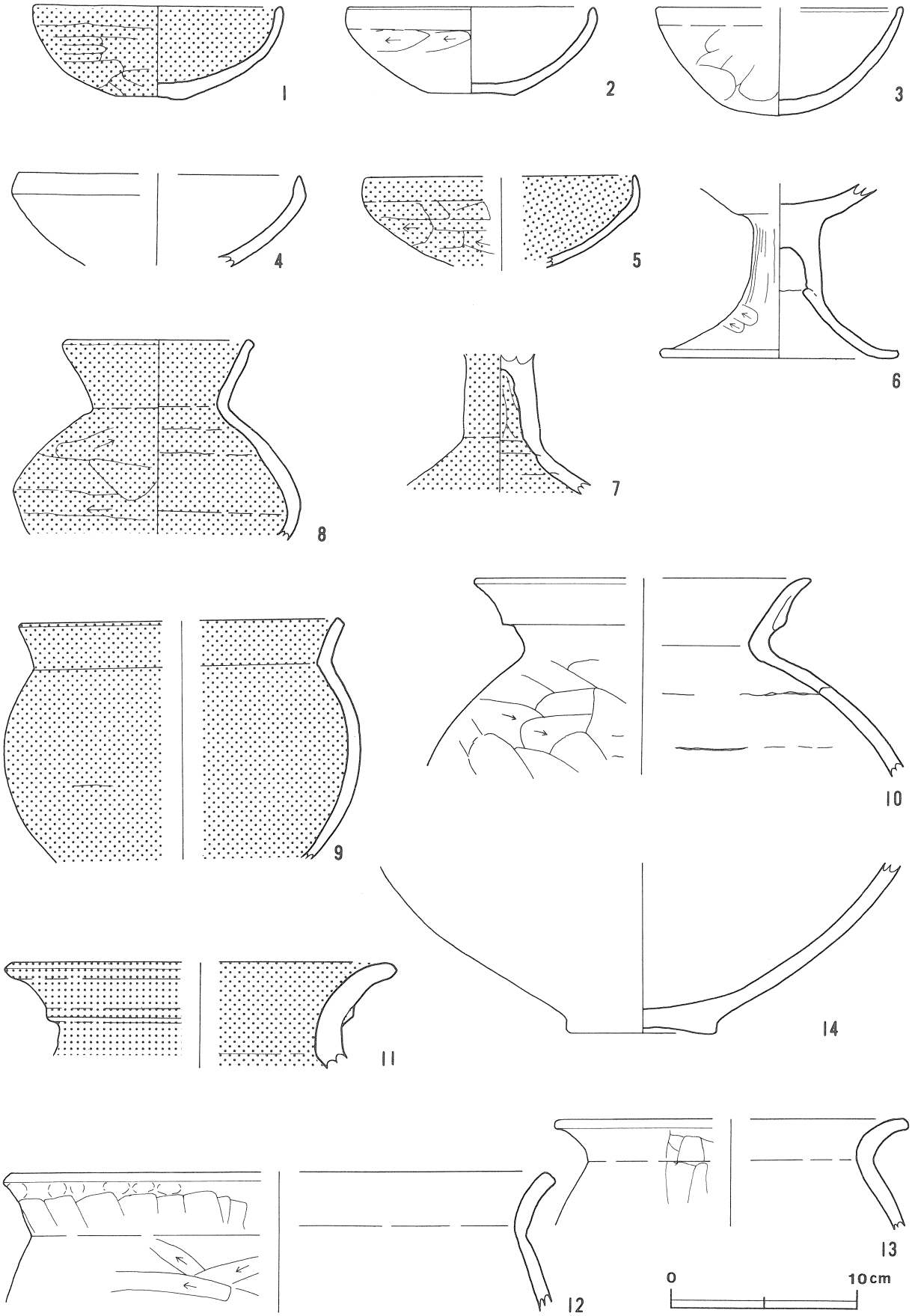
覆土　13層から成る。覆土は下層から上層にかけて焼土粒子，炭化粒子を含む暗褐色土がレンズ状に堆積し，自然堆積と考えられる。中央付近から南東壁にかけては帯状の撹乱をうけている。

土層解説

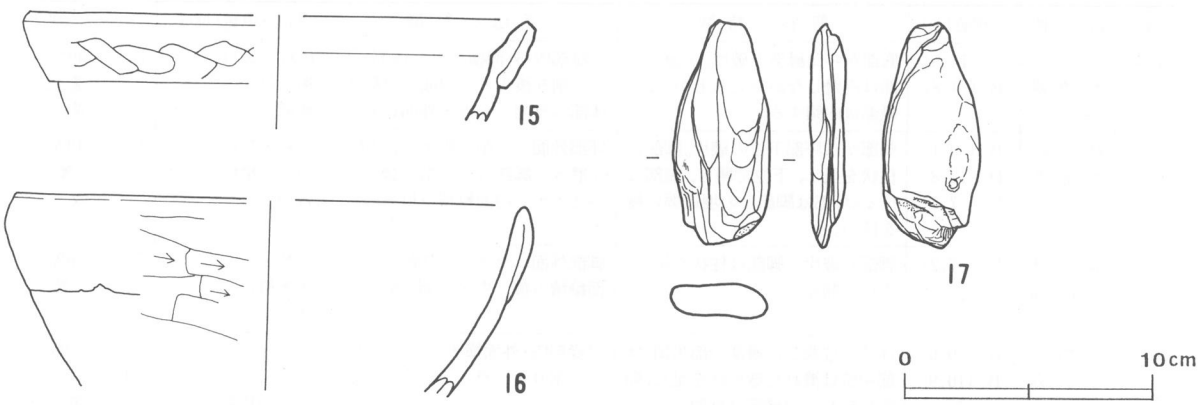
1　黒褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子・炭化材微量
2　黒褐色　焼土粒子・炭化材微量，炭化粒子・ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
3　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　褐　色　ローム中ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化材・炭化粒子微量



第45図　第27号住居跡実測図



第46図　第27号住居跡出土遺物実測図(1)



第47図　第27号住居跡出土遺物実測図(2)

5　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
6　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
7　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
8　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化材・炭化粒子少量
9　暗 褐 色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
10　赤 褐 色　焼土小ブロック多量，焼土粒子少量
11　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
12　褐　　色　ローム小ブロック中量，ローム粒子少量
13　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量

遺物　覆土上層から床面直上にかけて土師器片が中量出土している。第46・47図1～5の坏は，1が北東壁際の覆土下層から斜位の状態で，2が北寄りの覆土上層及び覆土下層から正位の状態で出土している坏片が接合し，4が中央付近の覆土下層から，5は北東寄りの覆土上層から，3は覆土中から出土している。6，7の高坏は，西コーナー覆土下層と北東寄りの覆土上層から共に逆位の状態で出土し，8の坩は中央寄りの覆土下層から横位の状態で出土し，体部内から炭化米が出土している。9～14の甕は，9が覆土中から，10は北東から東寄りの覆土中層から出土している甕片が接合し，11は南寄りの覆土上層から，12，13は覆土中から，14は北東寄りの覆土下層から出土している。15，16の甑は，15が覆土中から，16が南西壁際の間仕切り溝内覆土上面から横位の状態で出土している。

所見　本跡は，床面にみられる炭化材から焼失家屋と思われる。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第27号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第46図 1	坏 土師器	A 13.4 B 5.0 C 3.4	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P225　95% PL16 北東壁際覆土下層　内面剝離 二次焼成
2	坏 土師器	A 13.2 B 4.6 C 4.4	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒 灰黄褐色 普通	P226　80% 北寄り覆土上層及び下層 二次焼成
3	坏 土師器	A [13.4] B 5.8	底部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面ナデ。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	P227　30% 覆土中 二次焼成
4	坏 土師器	A [15.2] B (5.0)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石 明褐灰色 普通	P228　30% 中央付近覆土下層 二次焼成

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第46図 5	坏 土師器	A [14.5] B (4.8)	底部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。体部ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・長石 褐灰色 普通	P229　30% 北東寄り覆土上層 二次焼成
6	高　坏 土師器	B (9.1) D　12.8 E　 7.5	脚部から坏部下位の破片。脚部は柱状を呈し，下位で開き，端部は反る。坏部は脚部との境に弱い稜を持つ。	坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。脚部はヘラ削り後ナデ，内面ナデ。内面輪積み痕有り。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P230　40% 西コーナー覆土下層 二次焼成
7	高　坏 土師器	E (7.2)	脚部の破片。脚部は柱状を呈し，下位で開く。	脚部外面ヘラナデ，内面ナデ。内面輪積み痕。内・外面赤彩。	砂粒・パミス 浅黄橙色 普通	P231　20% 北東寄り覆土上層
8	坩 土師器	A　 9.6 B (10.9)	体部下位及び口縁部一部欠損。体部中位は潰れた球形状を呈し，頸部は括れ，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P232　70% PL16 中央寄り覆土下層 著しい内面剝離
9	甕 土師器	A [17.4] B (12.9)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。体部内・外面赤彩。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P217　15% 覆土中
10	甕 土師器	A [18.0] B (10.1)	体部上位から口縁部の破片。体部は球形状を呈し，頸部に強い稜を持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・パミス にぶい褐色 普通	P219　20% 北東から東寄り覆土中層 体部内面剝離 二次焼成
11	甕 土師器	A [20.0] B (5.1)	口縁部の破片。口縁部は頸部との境に弱い稜を持ち，外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部ヘラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・雲母・パミス にぶい黄橙色 普通	P220　5% 南寄り覆土上層
12	甕 土師器	A [29.8] B (7.0)	口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面斜位のヘラ削り。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ヘラナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P221　5% 覆土中 頸部外面指頭痕
13	甕 土師器	A [18.6] B (5.7)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P222　5% 覆土中
14	甕 土師器	B (9.1) C　 8.1	底部から体部中位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラナデ。	砂粒 灰白色 普通	P223　10% 北東寄り覆土下層 体部内面剝離 二次焼成
第47図 15	甑 土師器	A [20.0] B (4.1)	口縁部の破片。口縁部は折り返しの複合口縁で，打ち削ぎ状にやや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面斜位のヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P218　5% 覆土中
16	甑 土師器	A [20.7] B (7.8)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P224　10% 南西壁際間仕切り溝内覆土上面 体部外面煤付着

図版番号	種　別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第47図17	不明石製品	(9.1)	(3.9)	1.4	—	(58.4)	70	片岩	覆土中	Q58

第28号住居跡（第48図）

位置　調査区の南西部南側，W6e1区。

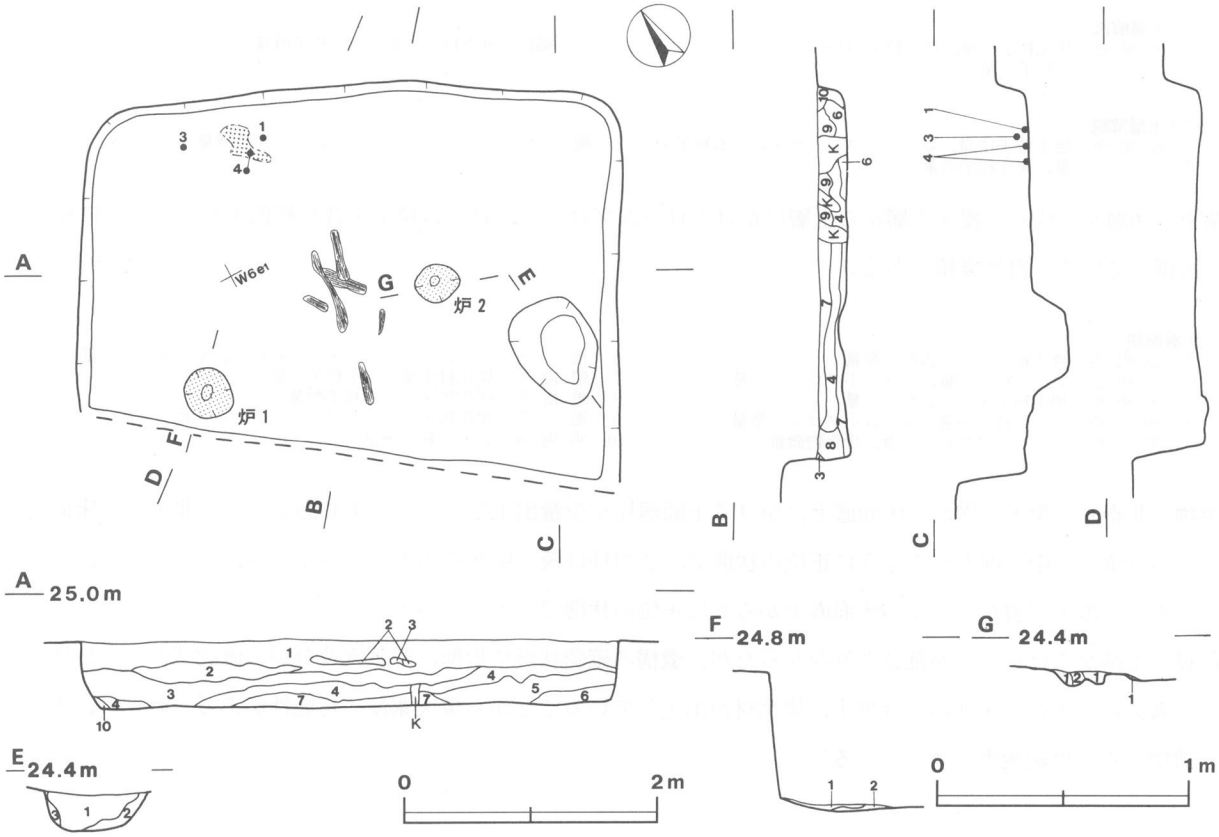
規模と平面形　本跡は，調査区に隣接する農道の真下にあり，調査区外で完掘が出来なかったため規模は不明であるが，平面形は一辺が4.31mの隅丸方形と考えられる。

主軸方向　N—63°—W

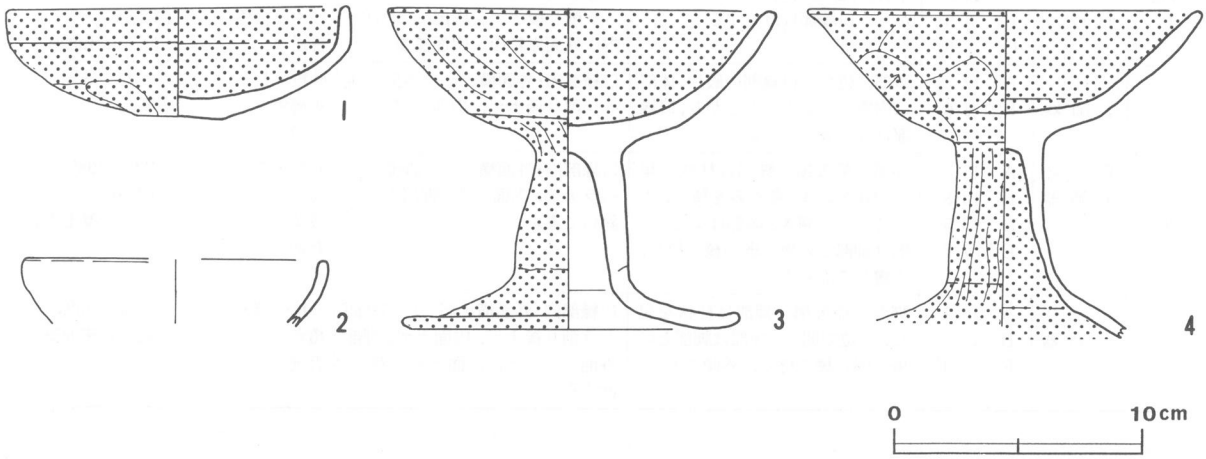
壁　壁高は21～30cmで，外傾して立ちあがる。南西壁は調査区外のため確認できなかった。

床　平坦で，よく踏み固められている。床面直上から焼土，炭化材が出土している。

貯蔵穴　南東壁の中央付近から南寄りに付設され，平面形は長径86cm，短径60cmの楕円形で，深さ61cmである。断面は円筒状で，底部は平坦である。



第48図　第28号住居跡実測図



第49図　第28号住居跡出土遺物実測図

貯蔵穴土層解説
1　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　暗 褐 色　ローム小ブロック中量，ローム粒子小量
3　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

炉　2か所。炉1は中央から北西寄りに付設され，径40cmの円形で，床面を約5cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受け赤変硬化している。炉2は東コーナーから中央寄りに付設され，径35cmの円形で，床面を約10cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受け赤変硬化し，焼土ブロックが堆積している。

炉1土層解説
1　黒褐色　炭化粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　暗赤褐色　焼土粒子少量，炭化粒子微量

炉2土層解説
1　赤褐色　焼土粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子微量

覆土　10層から成る。覆土下層から上層にかけてロームブロック，ローム粒子を含む褐色土がレンズ状に厚く堆積している。自然堆積である。

土層解説
1　暗褐色　焼土粒子・ローム粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3　黒褐色　焼土粒子・ローム粒子少量
4　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
5　褐　色　ローム小ブロック少量，炭化物微量
6　褐　色　ローム中ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量
7　暗褐色　炭化材中量，焼土粒子少量，ローム粒子微量
8　暗褐色　炭化物・ローム粒子微量
9　褐　色　炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
10　明褐色　ローム粒子多量

遺物　北寄りの覆土下層から床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第49図1の坏は北寄りの床面直上から焼土の中に埋もれるように正位の状態で，2の坏は覆土中から出土している。3，4の高坏は，3が北寄りの覆土下層から，4が床面直上から共に正位の状態で出土している。

所見　本跡からはピットが確認されなかったが，遺構の確認状況や形態，貯蔵穴及び炉の確認状況から住居跡と考える。また，床面からは焼土，炭化材が出土していることから焼失家屋の可能性がある。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第49図 1	坏 土師器	A　13.8 B　4.5 C　3.0	平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。底部ヘラ削り。内・外面赤彩後，内面漆塗り。	砂粒・雲母・パミス にぶい橙色 普通	P233　100% PL16 北寄り床面直上
2	坏 土師器	A［12.2］ B（2.6）	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石 灰褐色 普通	P234　5% 覆土中
3	高　坏 土師器	A　15.7 B　12.8 D　13.5 E　7.2	坏部一部欠損。脚部は柱状を呈し，中位にやや膨らみを持ち，下位で大きく開き，端部は反る。坏部は脚部との境に弱い稜を持ち，内彎して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。脚部外面ヘラナデ，内面ナデ。脚部内面を除いて赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P235　98% PL16 北寄り覆土下層
4	高　坏 土師器	A　16.1 B（12.7） E（7.4）	脚部一部欠損。脚部は柱状を呈し，下位で開く。坏部は脚部との境に弱い稜を持ち，外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。脚部外面ヘラナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・スコリア 橙色 普通	P236　80% 北寄り床面直上

第29号住居跡（第50図）

位置　調査区の東部中央付近，W6f3区。

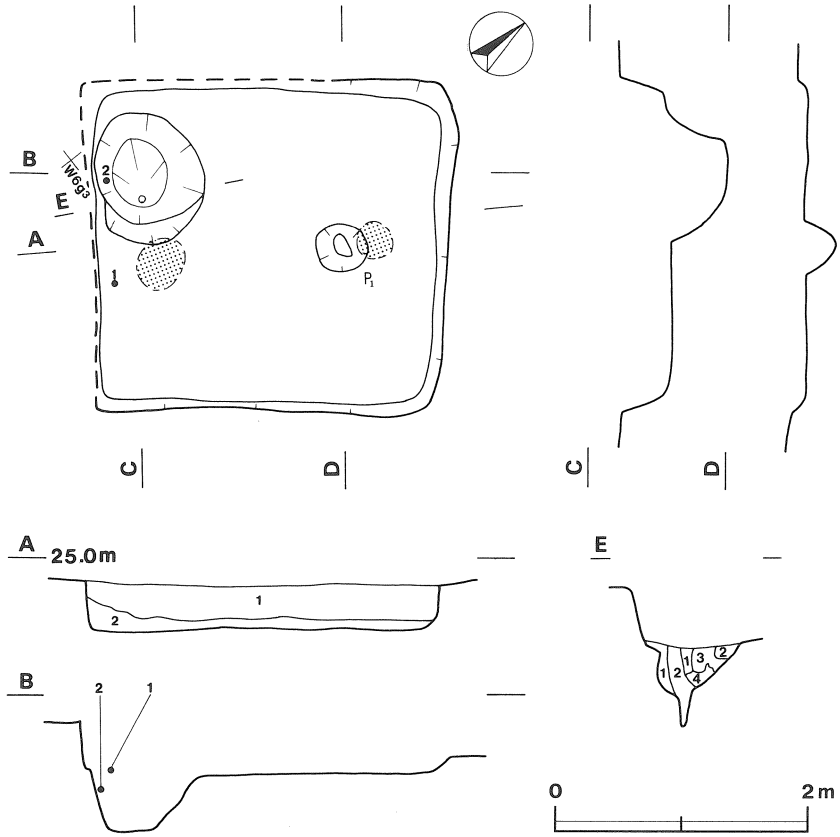
規模と平面形　南西方向は調査区外のため完掘ができず南東方向の長さ及び北西方向の長さは不明であるが，一辺2.88mの隅丸方形と推定される。

主軸方向　N－38°－E

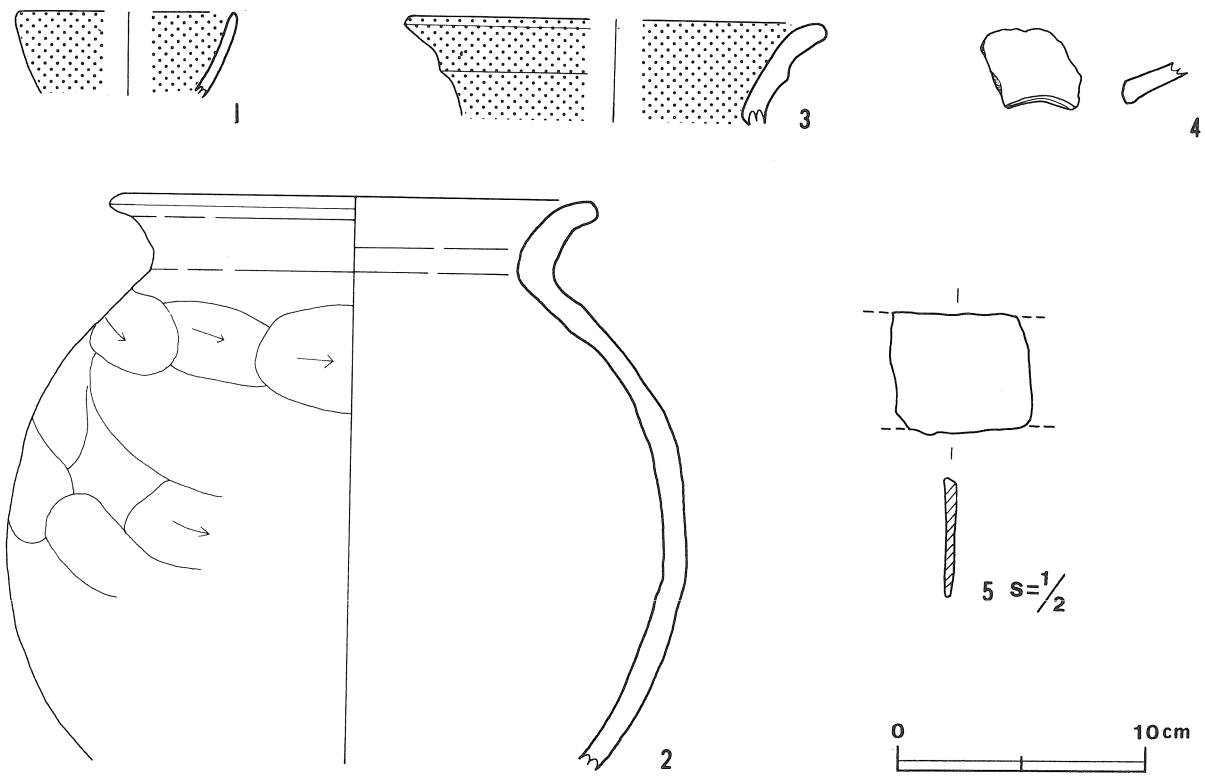
壁　壁高は9～32cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。　南東壁と北西壁の一部は確認できなかった。

床　平坦であるが，踏み固められた硬化面はみられない。

ピット　P1は径40cmの円形で，北東壁中央から内側にはいったところに付設され，深さは25cmで，断面は鉢形である。性格は不明である。



第50図　第29号住居跡実測図



第51図　第29号住居跡出土遺物実測図

貯蔵穴　西コーナー付近に付設され，平面形は長径105cm，短径90cmの不整楕円形で，深さ45cmである。南東壁から貯蔵穴内側に張り出しがみられる。

貯蔵穴土層解説
1　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　黒 褐 色　ローム粒子少量
3　暗 褐 色　ローム粒子中量
4　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子微量

覆土　2層から成る。2層とも覆土は北側に向かって傾斜して堆積する。自然堆積と思われる。

土層解説
1　暗 褐 色　ローム粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック微量

遺物　南寄りの覆土中層及び貯蔵穴内から土師器片が出土している。第51図1の坩は貯蔵穴内覆土上面から出土し，2の甕は貯蔵穴の覆土中層から底部の上に体部が二段状態で重なるように出土している。3，4，5の甕，甑，不明鉄製品は覆土中から出土したものである。

所見　本跡からは，主柱穴及び炉が確認できなかったが，遺構の確認状況，形態及び貯蔵穴と思われる施設を付設していることから住居跡として取り扱ったが，倉庫的な建物跡の可能性もある。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第29号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第51図 1	坩 土師器	A［8.5］ B（3.5）	口縁部の破片。口縁部は緩やかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石 褐色 普通	P239　5％ 貯蔵穴内覆土上面
2	甕 土師器	A　18.5 B（22.8）	体部下位一部欠損。体部は球形状を呈し，頸部は括れ，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P237　60％ PL17 貯蔵穴内覆土中層 二次焼成
3	甕 土師器	A［17.0］ B（4.0）	口縁部の破片。頸部との境に弱い稜を持ち，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石 赤褐色 普通	P238　5％ 覆土中
4	甑 土師器	—	底部下位の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石 褐色　普通	P240　5％ 覆土中

図版番号	種　別	計測値(cm)			重量(g)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚			
第51図5	不明鉄製品	(4.1)	(3.3)	0.4	(14.8)	覆土中	M2　PL19

第30号住居跡（第52図）

位置　調査区の中央部南側，$X6_{a8}$区。

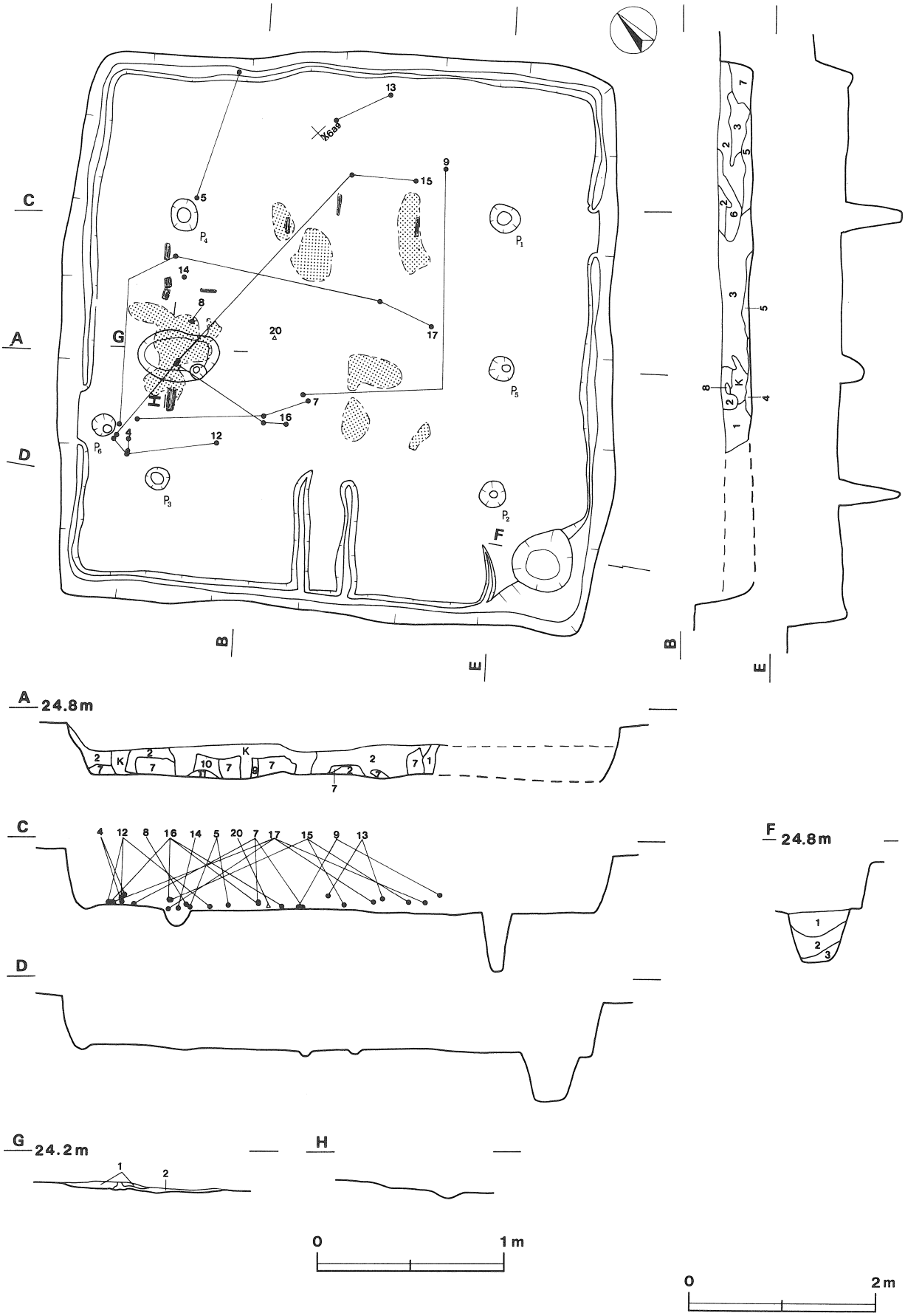
規模と平面形　長軸6.10m，短軸5.92mの方形。

主軸方向　N－47°－E

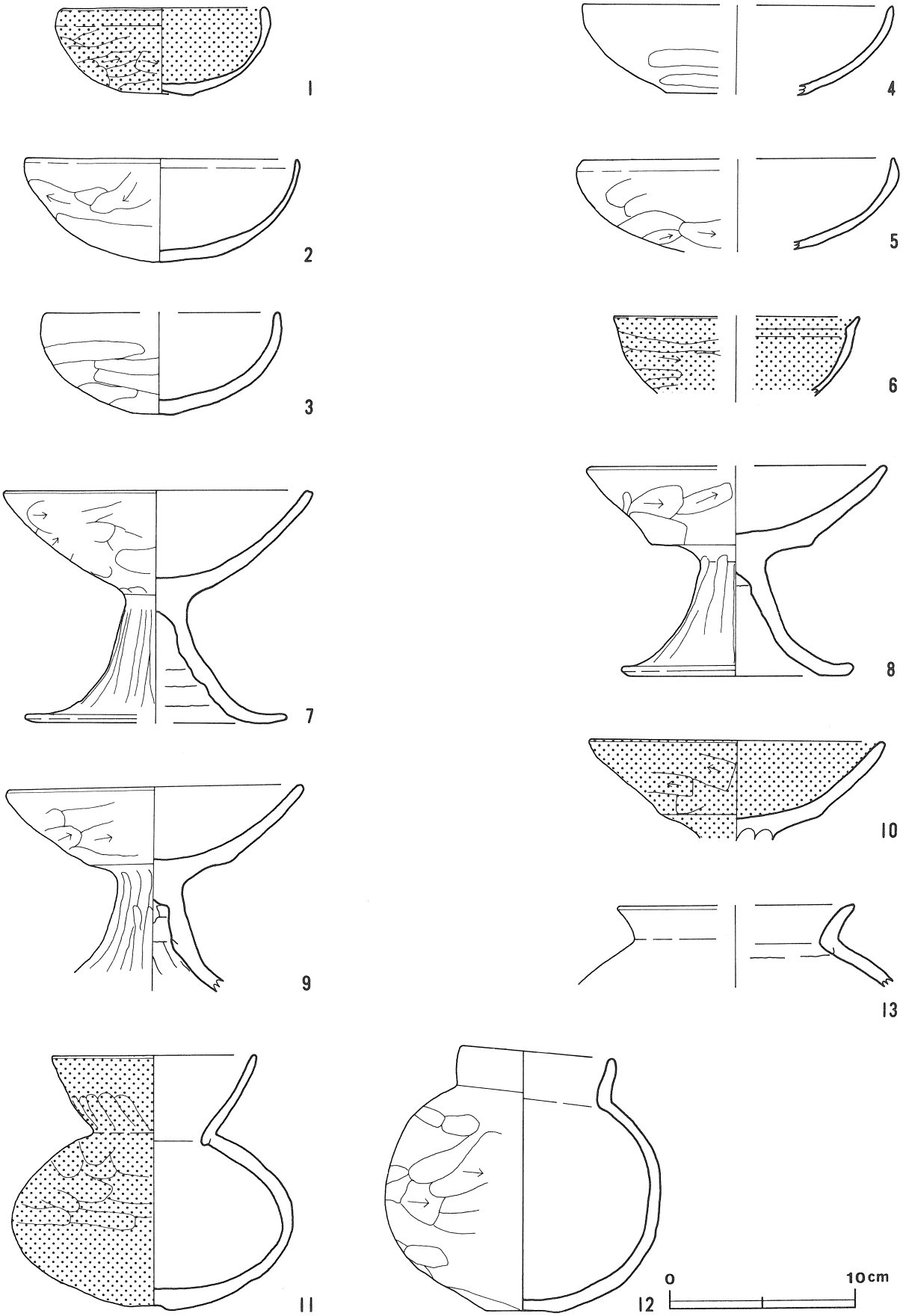
壁　壁高は38～65cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　貯蔵穴の回り，南東壁と北西壁の一部を除いては全周している。上幅5～15cm，深さ3～5cmで，断面はU字形である。

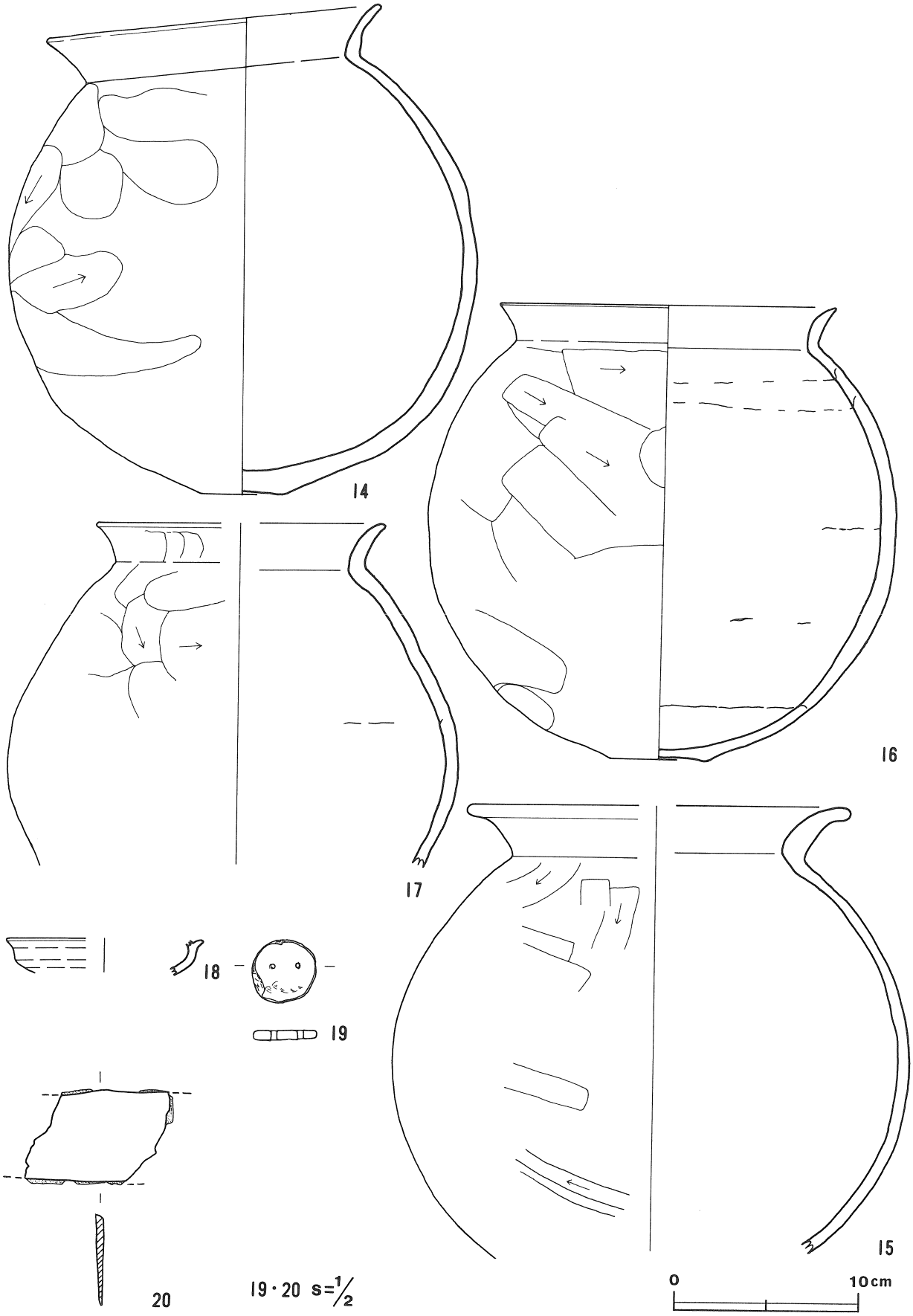
間仕切り溝　南西壁から中央に向かって2条みられ，幅14～22cm，深さ6cm，断面形はU字形である。



第52図　第30号住居跡実測図



第53図　第30号住居跡出土遺物実測図(1)



第54図　第30号住居跡出土遺物実測図(2)

床　ほぼ平坦で，よく踏み固められ堅緻である。

ピット　6か所（P_1～P_6）。P_1～P_6は長径25～35cm，短径23～27cmの楕円形で，深さは46～61cmである。　P_1～P_5は，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_6の性格は不明である。

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は長径70cm，短径64cmの楕円形で，深さ50cmである。断面はU字形で，底部は平坦である。覆土は3層で，暗褐色土が堆積している。

貯蔵穴土層解説

1　暗褐色　焼土粒子・ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
2　暗褐色　焼土粒子・ローム粒子微量，ロームブロック極微量，締まり強
3　褐　　色　ロームブロック少量，ローム粒子微量，締まり強

炉　北西壁寄りに付設され，長径90cm，短径55cmの楕円形で，床面を約4cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

1　暗褐色　焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化物微量
2　赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子多量，炭化物少量

覆土　11層から成る。耕作による撹乱がみられるが，覆土下層から中層にかけて焼土粒子とローム粒子を含む褐色土が堆積している。人為堆積と考えられる。

土層解説

1　暗褐色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2　黒褐色　ローム中ブロック中量，焼土粒子微量
3　黒褐色　ローム粒子少量，ローム中ブロック微量，焼土粒子極微量
4　褐　　色　ローム小ブロック多量，ローム粒子微量，締まり強
5　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量
6　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，締まり強
7　褐　　色　ローム中ブロック・ローム粒子少量
8　褐　　色　ローム小ブロック多量，焼土粒子微量
9　暗褐色　ローム粒子・焼土小ブロック少量，ローム小ブロック微量，炭化粒子極微量
10　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック微量，炭化材極微量
11　褐　　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，焼土粒子微量

遺物　南西寄りの覆土下層から床面直上にかけ土師器片が多量に出土している。第53・54図1～6の坏は，1～3，6が覆土中から，4，5が北西寄りと北寄りの覆土下層から共に正位の状態で出土している。7～10の高坏は，7が中央と北西壁寄りの覆土下層から出土している脚部と坏部が接合し，8は北西寄りの覆土下層から，9が中央寄りの覆土中層と床面直上から出土し，10は覆土中から出土している。12の壺は北西寄りの床面直上から正位の状態で，11は覆土中から出土している。13～17の甕は，13が北東壁寄りの覆土下層から，14が北西寄りの床面直上から，15が北東寄りの覆土下層から出土している甕片と，北西寄りの床面直上から出土している甕片が接合し，16は北西寄りの覆土下層及び床面直上から，17は中央付近の覆土下層から出土している甕片に，北西寄りの床面直上から出土している甕片と接合したものである。その他，18の須恵器片と，19の双孔円板が覆土中から，20の不明鉄製品が中央付近の床面直上から出土している。

所見　本跡の床面からは焼土と，僅かながら炭化材が出土していることから焼失家屋の可能性がある。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第30号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第53図 1	坏 土師器	A　10.8 B　4.7 C　3.8	体部及び口縁部一部欠損。上げ底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・石英・雲母・スコリア 橙色　普通	P247　75% PL17 覆土中

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第53図 2	坏 土師器	A　14.4 B　5.6	体部及び口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石・パミス にぶい橙色 普通	P248　75% PL17 覆土中 二次焼成
3	坏 土師器	A　12.4 B　6.0 C　2.3	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P249　65% PL17 覆土中
4	坏 土師器	A［16.6］ B（4.8） C（7.6）	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P250　40% 北西寄り覆土下層　内面剝離 二次焼成
5	坏 土師器	A［16.8］ B（4.9）	底部から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石 灰白色 普通	P251　30% 北寄り覆土下層 内面剝離
6	坏 土師器	A［13.4］ B（4.2）	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。頸部に弱い稜を持ち，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P252　10% 覆土中
7	高　坏 土師器	A　16.0 B　12.5 D［14.0］ E　6.9	脚部及び口縁部一部欠損。脚部はラッパ状に下方に開く。坏部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。脚部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。脚部内面輪積み痕。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P253　80% PL17 中央及び北西壁寄り覆土下層
8	高　坏 土師器	A［15.8］ B　11.2 D　11.6 E　6.1	坏部一部欠損。脚部はラッパ状に下方に開き，端部は反る。坏部は脚部との境に強い稜を持ち，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。脚部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・石英・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P254　60% PL17 北寄り覆土下層 脚部外面煤付着
9	高　坏 土師器	A　15.8 B　10.5 E（4.9）	脚部及び坏部一部欠損。脚部はラッパ状に下方に開く。坏部は脚部との境に強い稜を持ち，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。脚部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P255　70% 中央寄り覆土中層から床面直上 脚部内面指頭痕
10	高　坏 土師器	A　15.9 B（5.3）	脚部一部欠損。坏部は脚部との境に強い稜を持ち，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・スコリア にぶい黄橙色 普通	P256　50% PL17 覆土中
11	坩 土師器	A　11.0 B　13.7 C　2.5	体部中位一部欠損。平底。体部は潰れた球形状を呈する。口縁部はやや内彎しながら立ち上がり，外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面ナデ。底部ヘラ削り。外面赤彩。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P257　85% PL17 覆土中
12	壺 土師器	A　8.2 B　14.3	体部一部欠損。平底。体部は球形状を呈し，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面ヘラナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P241　80% PL17 北西寄り床面直上 二次焼成
13	甕 土師器	A［12.8］ B（4.2）	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面雑なナデ。	砂粒・雲母・パミス 灰褐色 普通	P242　10% 北東壁寄り覆土下層
第54図 14	甕 土師器	A　18.0 B　27.6 C　4.3	体部一部欠損。平底。体部は球形状を呈し，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ヘラナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P243　80% PL17 北西寄り床面直上
15	甕 土師器	A［20.9］ B（23.8）	底部及び口縁部一部欠損。体部は球形状を呈し，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P244　75% PL18 北東寄り覆土下層 北西寄り床面直上 口縁部外面煤付着
16	甕 土師器	A［18.2］ B　24.5 C［5.4］	底部から口縁部の破片。平底。体部は球形状を呈し，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P245　35% 北西寄り覆土下層及び床面食上 二次焼成
17	甕 土師器	A［15.6］ B（18.3）	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラ削り。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・長石・パミス にぶい橙色 普通	P246　40% 中央付近覆土下層 北西寄り床面直上 内面剝離
18	坏　身 須恵器	B（1.9）	体部中位から頸部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，受部に至る。受部はやや反る。	巻き上げ，横ナデ成形。体部外面回転ヘラ削り。	長石・砂粒 灰色 良好	P258　5% 覆土中

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	石　質	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第54図19	双孔円板	2.3	2.3	1.4	0.15	3.8	100	覆土中	滑石	Q59　PL19

図版番号	種　別	計　測　値　(cm)			重量(g)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚			
第54図20	不明鉄製品	(5.4)	(3.3)	0.5	(17.0)	中央付近床面直上	M3

第31号住居跡（第55図）

位置　調査区の西部，V5d3区。

規模と平面形　本跡の南西方向の大部分は調査区外のため完掘ができず，南西壁の一部と北西壁の規模は不明であるが，平面形は一辺が4.41mの隅丸方形と推定される。

主軸方向　N－40°－E

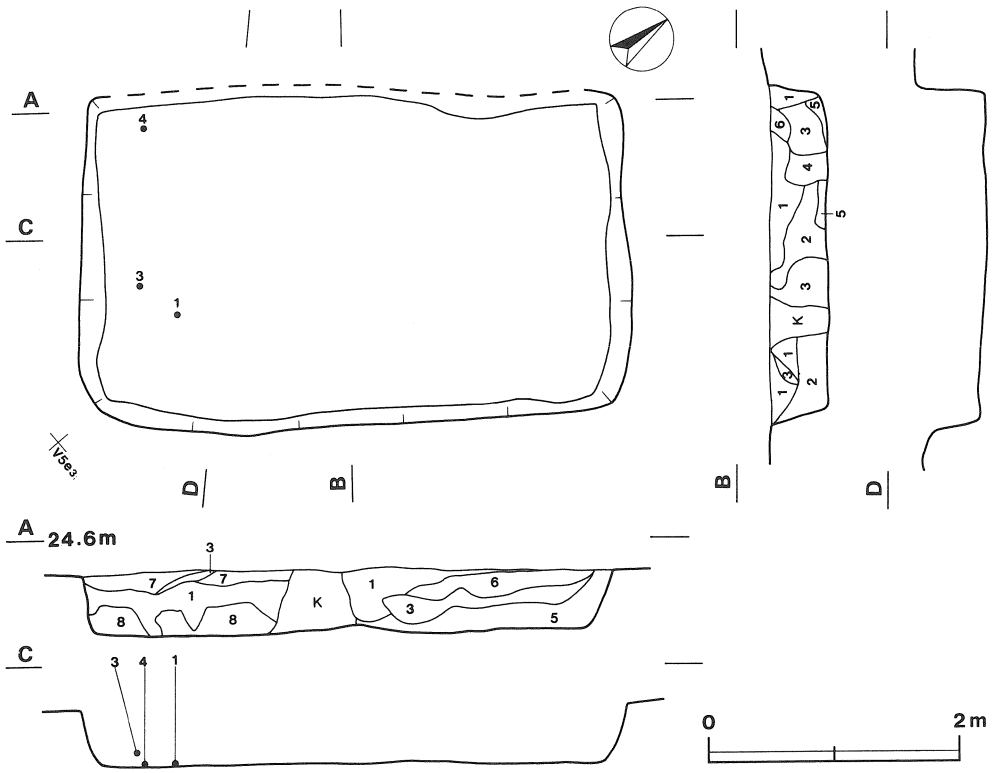
壁　壁高は34～44cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦で，よく踏み固められている。北西部に多少高まりがみられる。

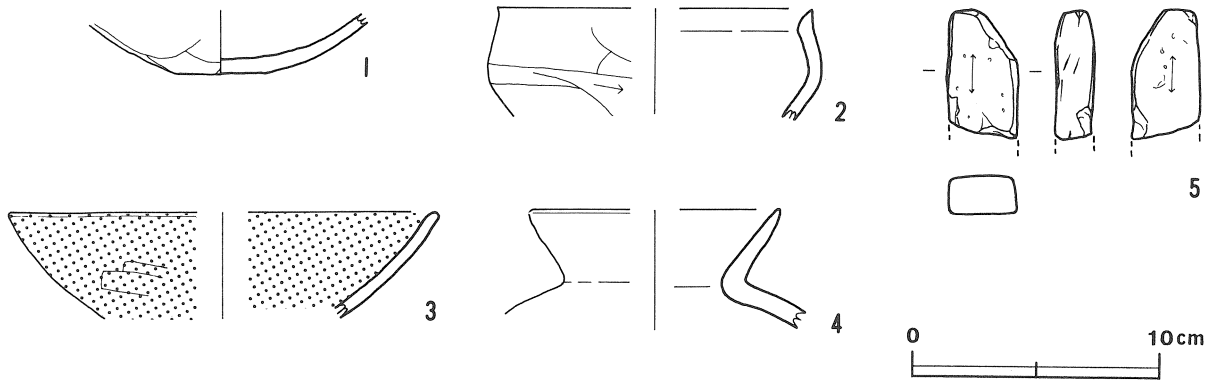
覆土　8層から成る。北西部は調査区外のため全容をつかむことは不可能であるが，壁際や床面上にかけて褐色土が堆積し，下層及び中層にかけ焼土粒子を含む暗褐色土が堆積している。各層とも炭化粒子とロームブロックを少量含む。中央部の一部は耕作により円筒状の撹乱を受けている。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗褐色　炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック少量，炭化粒子微量
4　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
5　褐　色　ローム中ブロック少量，炭化粒子微量，締まり強
6　黒褐色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック微量
7　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
8　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物　南寄りの覆土下層及び床面直上から少量の土師器片が出土している。第56図1の坏と3の高坏は，南寄りの床面直上と覆土下層から，4の坩は西寄りの床面直上から出土したもので，2の椀は覆土中から出土したものである。その他，5の砥石が覆土中から出土している。



第55図　第31号住居跡実測図



第56図　第31号住居跡出土遺物実測図

所見　本跡からは，住居跡及び建築物として付設される施設を確認することができなかったが，遺構の確認状況と遺物の出土状態から住居跡として取り扱った。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第31号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第56図 1	坏 土師器	B（2.0） C　3.8	底部から体部下位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石 灰褐色　普通	P260　10% 南寄り床面直上 体部内面剝離
2	椀 土師器	A［12.6］ B（4.4）	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口唇部は内削ぎ状に尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P259　15% 覆土中
3	高　坏 土師器	A［17.2］ B（4.3）	坏部の破片。坏部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。	坏部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。。	砂粒・長石 にぶい橙色　普通	P261　25% 南寄り覆土下層
4	坩 土師器	A［10.0］ B（4.2）	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P262　10% 西寄り床面直上

図版番号	種　別	計測値（cm）			重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚					
第56図5	砥　石	(5.2)	2.8	1.6	(36.3)	50	砂岩	覆土中	Q60

第32号住居跡（第57図）

位置　調査区の西部，$U5_{h5}$区。

規模と平面形　長軸5.65m，短軸5.61mの方形。

主軸方向　N－46°－W

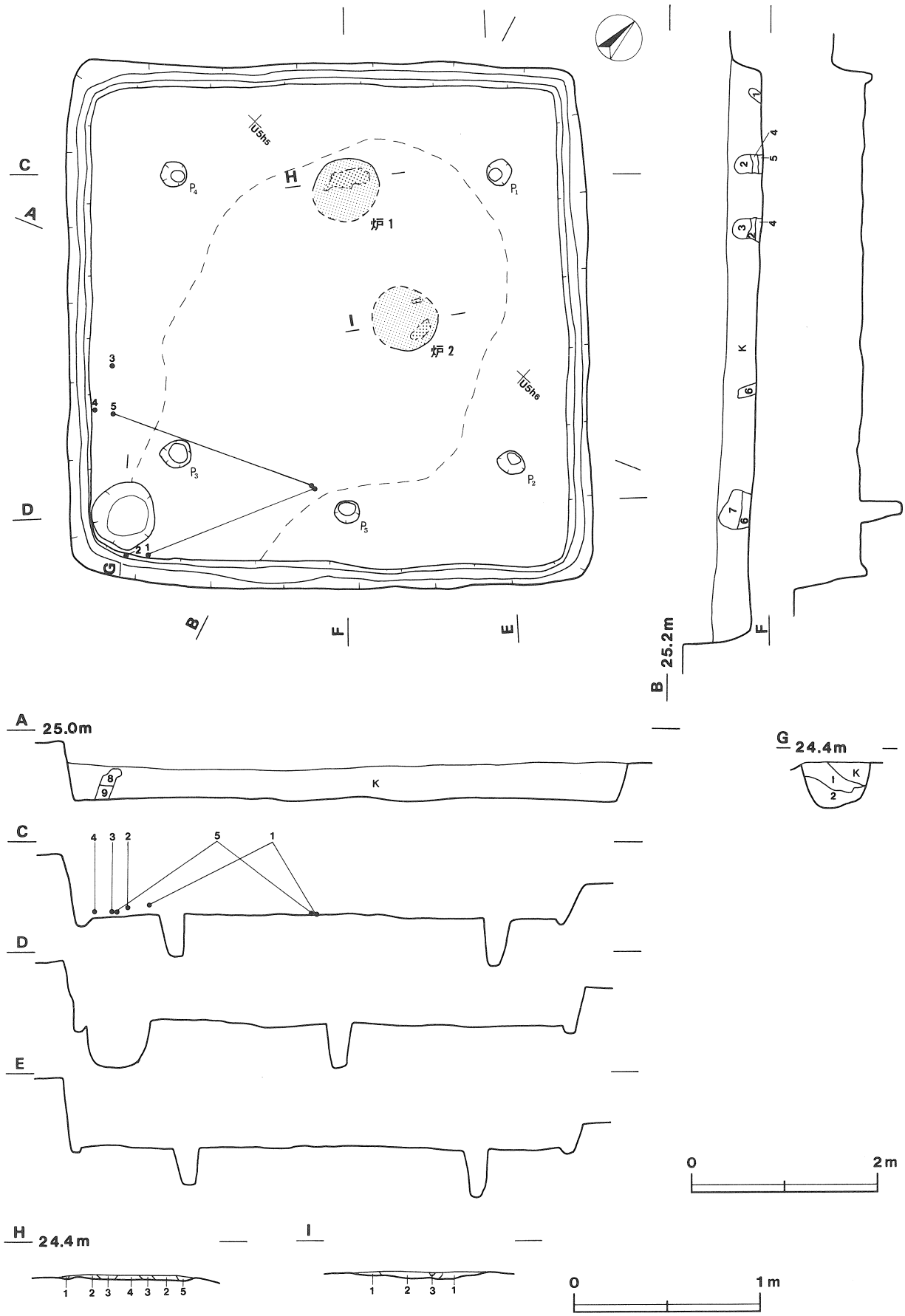
壁　壁高は26～44cmで，外傾して立ち上がる。全面に耕作による撹乱を受けている。

壁溝　壁下を周回する。上幅10～15cm，深さ6～9cmで，断面形はU字形である。

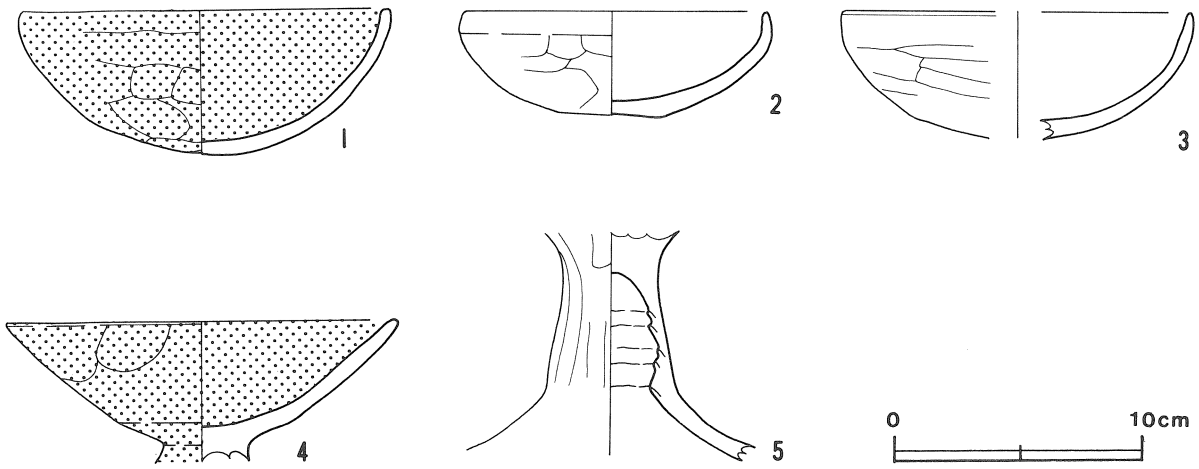
床　ほぼ平坦で，踏み固められている。撹乱を受けている。

ピット　5か所（P_1～P_5）。P_1～P_4は長径33～35cm，短径24～28cmの楕円形または不整楕円形で，深さは35～50cmである。各コーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は径25cmの円形で，南東壁寄りの中央部に付設され，規模や位置から出入口に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は長径70cm，短径65cmの楕円形である。深さは50cm，断面はU字



第57図　第32号住居跡実測図



第58図　第32号住居跡出土遺物実測図

形で底部は皿状である。

貯蔵穴土層解説
1　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子極微量

炉　2か所。炉1は遺構中央部から北西壁寄りに付設され，平面形は長径75cm，短径65cmの楕円形で，床面を5cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土は焼土ブロック，焼土粒子を含む暗褐色土が堆積している。炉床はトレンチャーによる撹乱を受けているが，残存部分は赤変硬化している。炉2は中央部からやや北東に寄った位置に付設され，平面形は径70cmの円形で，床面を6cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土には焼土ブロックが残存し，炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉1土層解説
1　暗 褐 色　焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子微量
2　暗 褐 色　焼土大ブロック多量，焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
3　暗 褐 色　焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子微量
4　暗 褐 色　焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子微量
5　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量

炉2土層解説
1　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量，焼土粒子微量
2　暗 褐 色　焼土大ブロック・焼土小ブロック中量，焼土中ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子微量
3　褐　　色　焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子微量

覆土　9層から成る。撹乱を受けて，全体の堆積状況の把握はできない。

土層解説
1　褐　　色　ローム粒子多量
2　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量
4　極暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
5　暗 褐 色　ローム粒子多量，ローム中ブロック微量
6　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
7　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック極微量
8　暗 褐 色　炭化物・ローム粒子微量
9　黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子微量

遺物　南寄りの覆土下層及び床面直上から土師器片が少量出土している。第58図1の坏は，南コーナー付近の覆土下層から出土している体部に，南東寄りの床面直上から出土している坏片が接合したもので，2の坏は南コーナーの覆土下層から斜位の状態で，3の坏は南西寄りの覆土下層から逆位の状態で出土している。4の高坏は南西寄りの覆土下層から正位の状態で，5の高坏は南西寄りの覆土下層から横位の状態で出土している脚部に，南東寄りの床面直上から出土している裾部片が接合したものである。

所見　本跡の時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第32号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第58図 1	坏 土師器	A 14.7 B 5.8	体部及び口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに内彎する。口縁部外面に極めて弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石 明褐灰色 普通	P277 85% PL18 南コーナー付近覆土下層 体部内・外面煤付着
2	坏 土師器	A 12.1 B 4.3 C 4.0	体部中位及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外面に弱い稜を持ち，僅かに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P278 60% PL18 南コーナー覆土下層 体部外面煤付着
3	坏 土師器	A [14.1] B (5.1)	体部中位及び口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石・パミス 橙色 普通	P279 20% 南西寄り覆土下層 体部外面底部煤付着
4	高　坏 土師器	A 15.6 B (5.6)	坏部片。坏部下位に弱い稜を持ち，外上方に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P280 40% 南西寄り覆土下層 内面剝離
5	高　坏 土師器	E (8.7)	脚部から裾部の破片。脚部は柱状を呈し，下位に膨らみを持ち，裾部は「ハ」の字状に開く。	脚部外面縦位のヘラ削り。裾部外面ナデ。脚部内面輪積み痕。	砂粒・長石 明褐色 普通	P281 30% 南西寄り覆土下層 脚部外面煤付着

第33号住居跡（第59図）

位置　調査区の西部，U5f4区。

規模と平面形　長軸6.46m，短軸6.36mの方形。

主軸方向　N－29°－W

壁　壁高は17～46cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦で，踏み固められている。

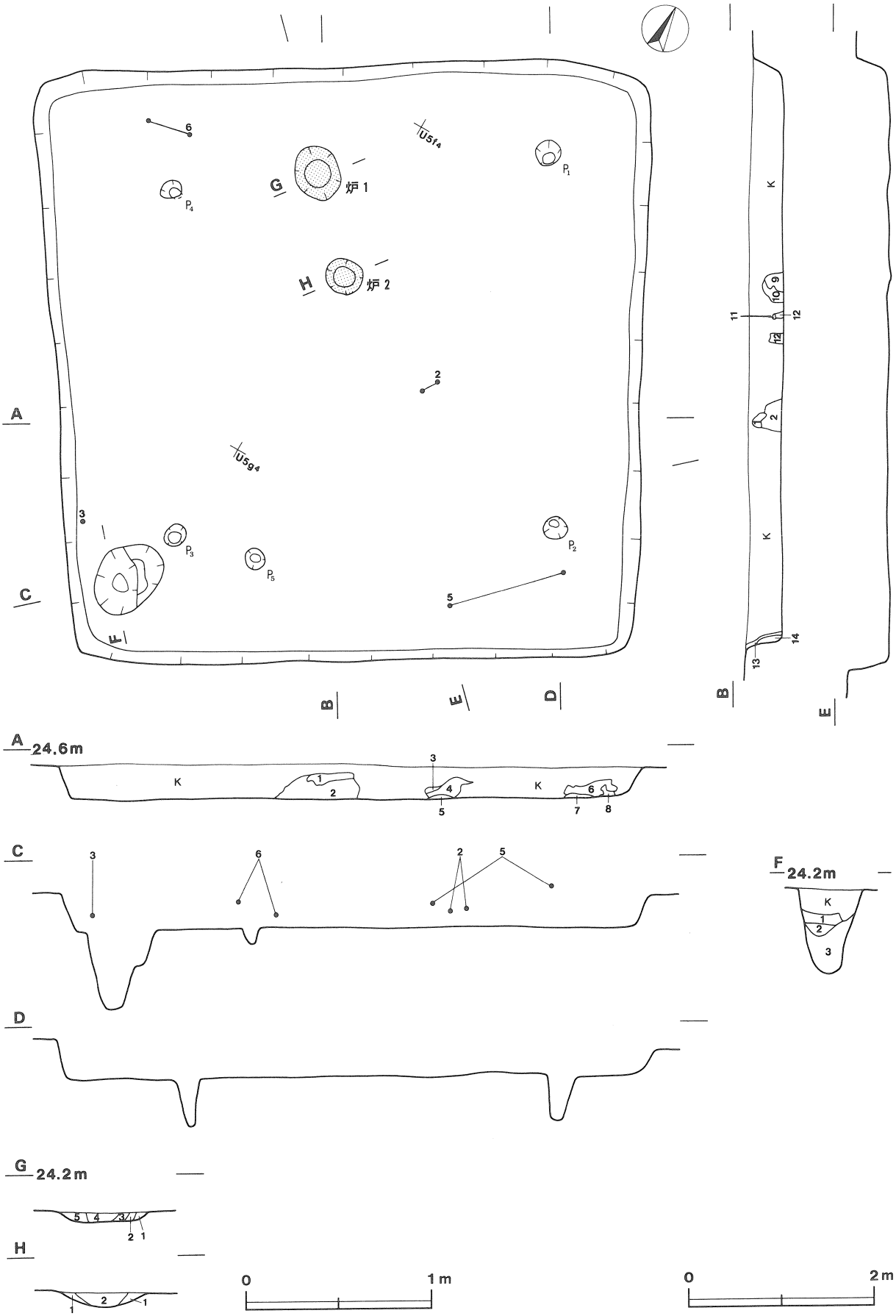
ピット　5か所（P_1～P_5）。P_1～P_4は長径25～29cm，短径20～28cmの楕円形または不整楕円形で，深さは17～46cmである。各コーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は長径25cm，短径20cmの楕円形で，P_3からやや北東に付設され，出入口に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は長径95cm，短径73cmの不整楕円形である。深さ80cmで，断面は深鉢状を呈し，中位に段を持つ。底部は内側に向かってやや駆け上がる。

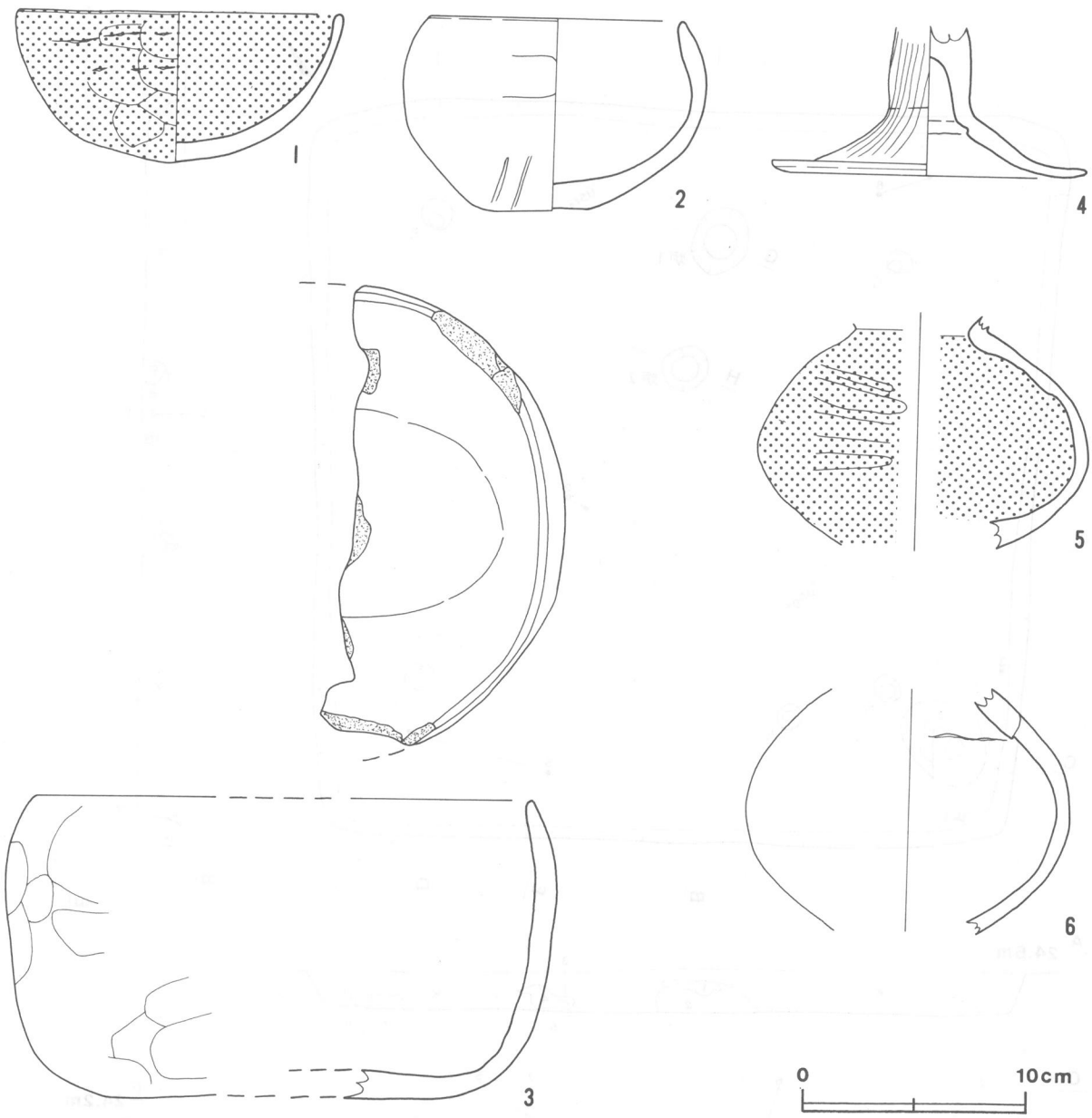
貯蔵穴土層解説
1　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック微量，粘性強

炉　2か所。炉1は，中央付近から北西方向に付設され，平面形は長径62cm，短径50cmの長楕円形で，床面を5cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土は焼土ブロック，焼土粒子を含む暗褐色土が堆積している。炉床は耕作による撹乱を受けている。残存部分に火熱を受け硬化している部分はみられない。炉2は，炉1の北東方向に付設され，平面形は径40cmの円形で，床面を8cm掘り窪めた皿状の地床炉である。炉内覆土はいずれも焼土ブロック，焼土粒子を含む赤褐色土が堆積している。炉床は柔らかく硬化していない。

炉1土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック微量
2　暗赤褐色　焼土大ブロック多量，焼土粒子少量，ローム粒子微量
3　暗褐色　焼土小ブロック中量，焼土粒子少量，焼土中ブロック・ローム粒子微量
4　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック少量，炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
5　暗褐色　焼土粒子少量，焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子微量



第59図　第33号住居跡実測図



第60図　第33号住居跡出土遺物実測図

炉2土層解説

1	褐　　色	焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量	2　にぶい赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子中量，ローム粒子少量，焼土中ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック微量

覆土　14層から成る。耕作用トレンチャーによる撹乱を受けて，全体の堆積状況の把握はできないが，覆土下層から中層にかけ褐色土，暗褐色土，黒褐色土が複雑に堆積している様子がみられ，人為堆積の様相を呈する。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子中量
2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
3	黒褐色	ローム粒子微量
4	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
5	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
6	暗褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，締まり強
7	褐　　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，締まり強
8	褐　　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，締まり強
9	暗褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
10	暗褐色	ローム粒子少量
11	褐　　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
12	褐　　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック微量
13	暗褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
14	褐　　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量

遺物　覆土中層から土師器片が少量出土している。第60図1の坏は覆土中から，2の椀は中央寄りの覆土中層

から出土し，３の鉢形土器は南西壁際の覆土下層から正位の状態で出土している。４の高坏は覆土中から，５の坩は東寄りの覆土上面から出土している坩の破片と覆土中層から出土している破片が接合し，６の坩は西寄りの覆土中層から出土している坩の破片と覆土下層の破片が接合したものである。

所見　本跡の時期は，出土遺物から５世紀後半と考えられる。

第33号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第60図 1	坏 土師器	A　14.3 B　6.7	底部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は緩やかに立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。体部外面輪積み痕。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石 赤褐色 普通	P282　90% PL18 覆土中
2	椀 土師器	A　11.2 B　8.5 C　4.4	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部中位に膨らみを持ち，内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口唇部は内削ぎ状に僅かに反る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・雲母・パミス にぶい橙色 普通	中央寄り覆土中層 二次焼成
3	鉢形土器 土師器	B　13.3	底部から口縁部の破片。平底気味の丸底。体部は舟形状を呈す。底部から口縁部にかけ，ほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石・パミス・スコリア にぶい橙色 普通	P284　40% PL18 南西壁際覆土下層 体部外面煤付着
4	高　坏 土師器	A　14.0 E（6.6）	坏部から裾部は柱状を呈し，裾部は「ハ」の字状に開く。	脚部外面縦位のヘラナデ。裾部内・外面ナデ。	砂粒・石英・長石・パミス にぶい黄橙色 普通	P285　50% 覆土中
5	坩 土師器	B（9.5）	体部の破片。体部は潰れた球形状を呈し，体部中位に最大径を持つ。	体部外面丁寧なヘラナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・雲母・パミス 赤褐色 普通	P286　40% 東寄り覆土中面及び覆土中層
6	坩 土師器	B（10.8）	体部の破片。体部は潰れた球形状を呈する。	体部内面ナデ。体部上位輪積み痕。	砂粒・石英・長石 橙色 普通	P287　20% 西寄り覆土中層 体部外面著しい剥離痕 体部外面下位煤付着

第34号住居跡（第61図）

位置　調査区の中央付近，U5a3区。

規模と平面形　長軸7.58m，短軸7.30mの方形。

主軸方向　N－30°－W

壁　壁高は13～25cmで，外傾して立ち上がる。

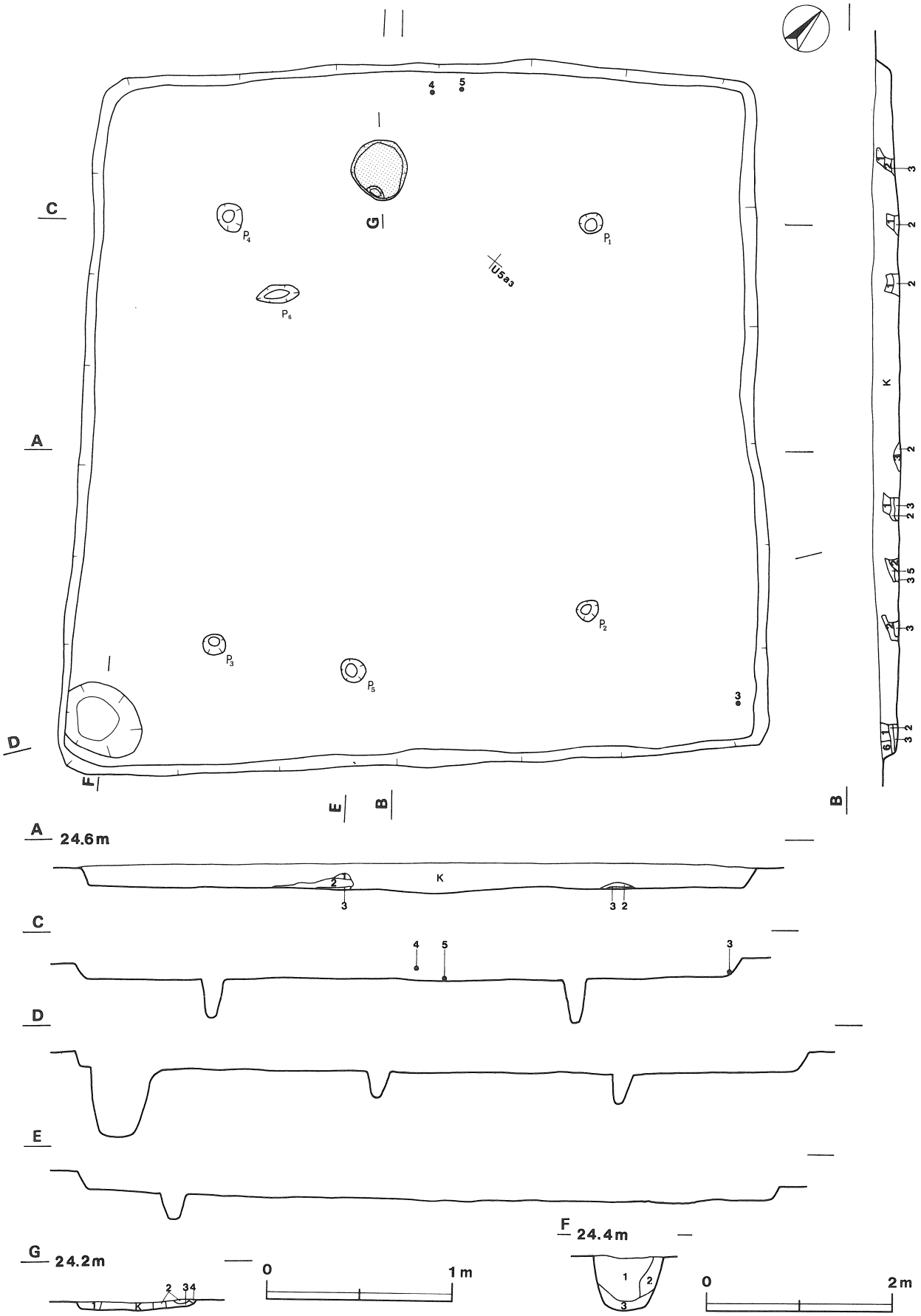
床　平坦で，踏み固められ硬化している部分はみられない。

ピット　６か所（P_1～P_6）。P_1～P_4は長径25～33cm，短径20～25cmの楕円形または不整楕円形で，深さは25～38cmである。各コーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は径25cmの円形で，P_3から北東方向に付設され，梯子ピットと考えられる。P_6はP_4の東方向に付設され，長径45cm，短径20cmの長楕円形で，深さは20cmである。ピットの形状から補助柱穴とするには疑問が残り，性格は不明である。

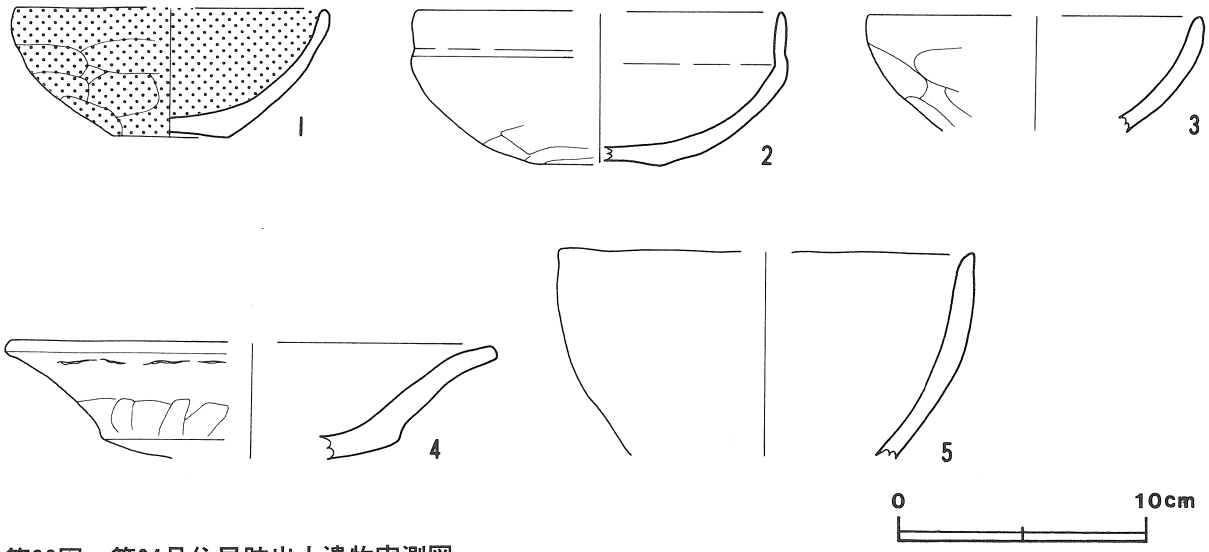
貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は長径85cm，短径75cmの不整楕円形である。深さ70cmで，円筒状に掘り込まれている。底部は皿状である。

貯蔵穴土層解説
1　黒　　色　ローム粒子微量
2　黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　褐　　色　ローム大ブロック少量

炉　中央付近から北西方向に付設され，平面形は長径60cm，短径55cmの楕円形で，床面を４cm掘り窪めた地床炉である。炉の中央部は耕作による撹乱を受けている。



第61図　第34号住居跡実測図



第62図　第34号住居跡出土遺物実測図

炉土層解説

1　にぶい赤褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，焼土小ブロック微量，ローム小ブロック極微量
2　極暗褐色　ローム粒子・焼土粒子微量，ローム小ブロック極微量
3　暗褐色　焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
4　極暗褐色　ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子微量，ローム小ブロック極微量

覆土　6層から成る。撹乱を受けて，全体の堆積状況の把握はできない。

土層解説

1　極暗褐色　焼土粒子・ローム少ブロック・ローム粒子少量
2　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量
3　暗褐色　ローム粒子少量，ローム少ブロック微量
4　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
5　褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック極微量
6　褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物　覆土中層から覆土下層にかけて土師器片が少量出土している。第62図1，2の坏は覆土中から出土し，3の坏は東コーナー寄りの覆土下層から斜位の状態で，4，5の高坏と甑は，北東寄りの覆土中層と床面直上から出土したものである。

所見　本跡の時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第34号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第62図 1	坏 土師器	A［12.4］ B　5.2	体部中位及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ナデ。底部ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石・パミス にぶい黄橙色 普通	P288　50% PL18 覆土中
2	坏 土師器	A［14.6］ B　6.2 B（4.4）	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に明瞭な稜を持ち，口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・スコリア 淡橙色 普通	P289　35% 覆土中
3	坏 土師器	A［13.4］ B（4.6）	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面丁寧なヘラナデ。	砂粒・石英・雲母・パミス・スコリア にぶい橙色 普通	P290　15% 東コーナー寄り 覆土下層
4	高坏 土師器	A［19.8］ B（4.7）	坏部の破片。坏部下位に明瞭な稜を持ち，外上方に立ち上がり，口縁部は反る。	口縁部内面・外面及び中位横ナデ，下位縦位のヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・石英・長石・パミス にぶい橙色　普通	P291　15% 北寄り覆土中層
5	甑 土師器	A［16.6］ B（8.3）	体部中位及び口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は僅かに反る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石 にぶい赤橙色 普通	P292　25% 北寄り床面直上 内・外面剝離

第35号住居跡（第63図）

位置　調査区の西部，T5f6区。

規模と平面形　長軸6.64m，短軸6.58mの方形。

主軸方向　N－36°－W

壁　壁高は18～33cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦で，踏み固められ硬化している。南コーナーから南東壁一帯には馬蹄形の高まりがみられ，出入口施設に関係のあるものと考えられる。

ピット　5か所（P_1～P_5）。P_1～P_4は長径25～30cm，短径23～26cmの楕円形または不整楕円形で，深さは55～74cmと深い。各コーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は長径20cm，短径15cmの楕円形で，P_3からやや北東に付設され，規模や位置から梯子ピットと思われる。

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は径70cmの円形で，深さは90cmである。深鉢状に掘り込まれ，底部は平坦である。底部及び壁面から粘土が多量に出土していることから，粘土貼りの貯蔵穴とも推測される。

貯蔵穴土層解説
1　極暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック極微量
2　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック極微量
3　暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，ローム中ブロック極微量
4　暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

炉　中央付近から北西方向に付設され，平面形は長径65cm，短径50cmの楕円形で，床面を3cm程掘り窪めた地床炉である。炉床の掘り込みは浅く，火熱を受けた硬化部分はみられない。炉内覆土には少量の焼土ブロックと焼土粒子の堆積がみられる程度である。

炉土層解説
1　暗赤褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・ローム小ブロック少量，締まり強
2　黒　褐　色　ローム粒子微量
3　極暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子少量，ローム粒子微量
4　黒　褐　色　炭化粒子・ローム粒子少量
5　暗赤褐色　ローム粒子少量

覆土　5層から成る。耕作による撹乱を受けて全体の把握は難しいが，レンズ状に堆積している部分がみられるが，覆土下層から上層にかけ焼土粒子が，北西壁沿いには，覆土下層から上層にかけ炭化粒子を含む褐色土，暗褐色土の堆積状況がみられるところから，部分的ではあるが人為的に埋め戻されたものと考えられる。

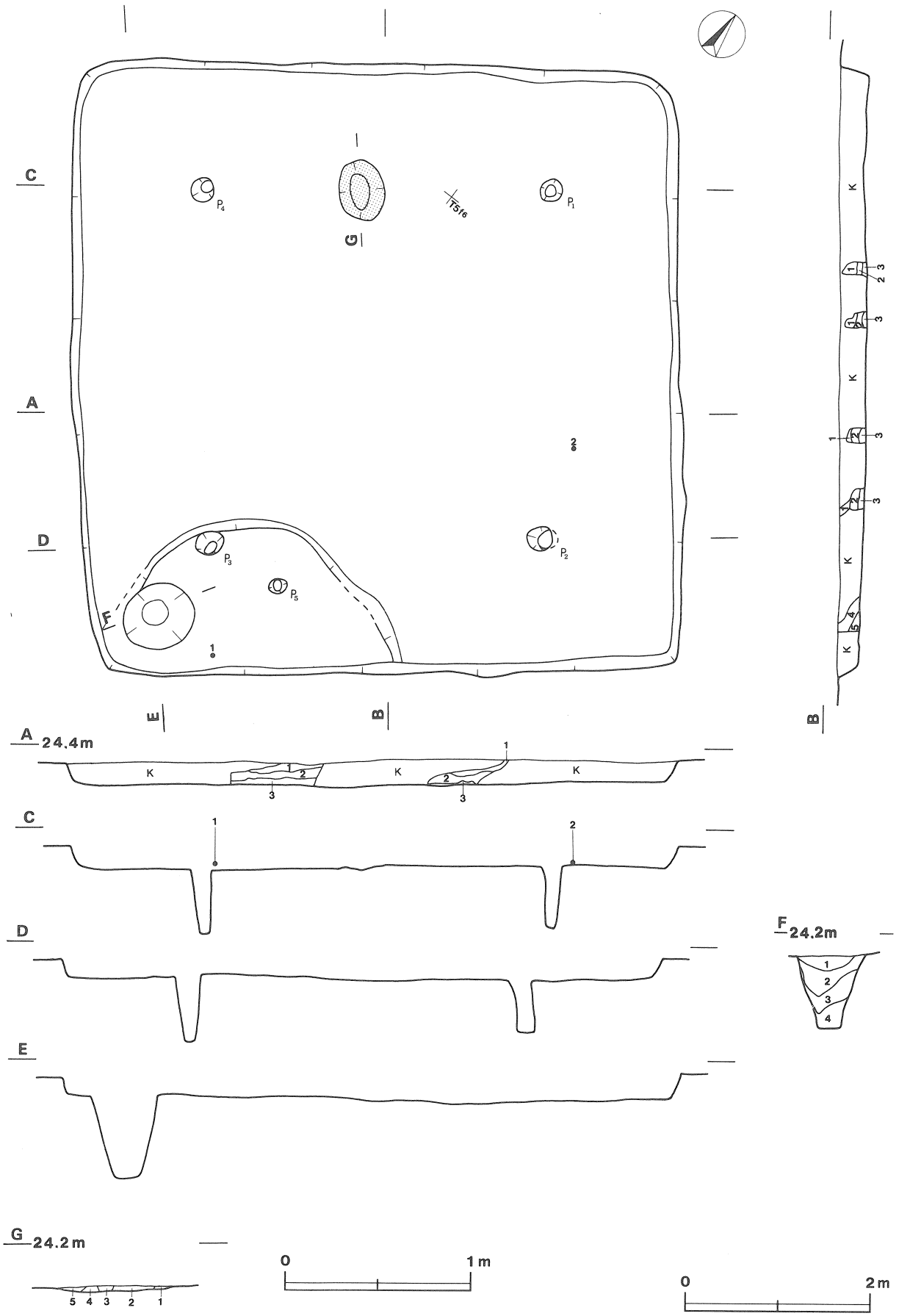
土層解説
1　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子極微量
2　黒 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック微量
3　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック極微量
4　暗 褐 色　ローム粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック極微量
5　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック極微量

遺物　覆土中層から床面直上にかけて少量の土師器片が出土している。第64図1の坏は南東壁際の床面直上から斜位の状態で出土し，2の坩は北東寄りの床面直上から出土している。その他，3の凹石，4の磨石が覆土中から出土している。

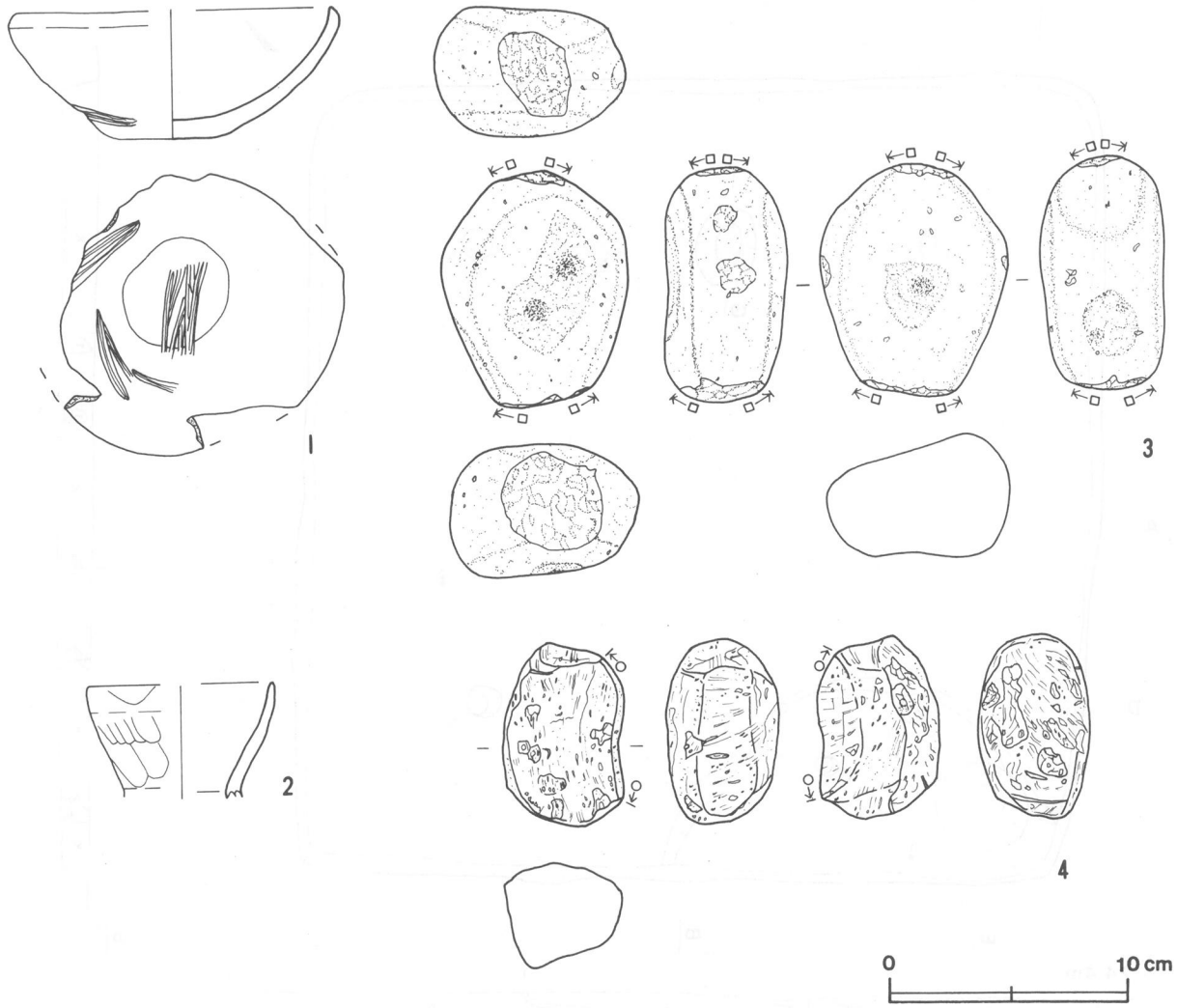
所見　本跡の時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第35号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第64図 1	坏 土師器	A［13.2］ B　5.3 C　4.4	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部外面上位に稜を持ち，内傾する。口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・パミス 橙色 普通	P293　50% PL18 東南壁際床面直上　内面剝離 底部煤付着　底部及び体部外面研磨痕



第63図　第35号住居跡実測図



第64図　第35号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第64図 2	坩 土師器	A［7.9］ B（4.7）	頸部及び口縁部の破片。頸部中位に弱い稜を持ち，口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面縦位のヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・石英・長石 明褐色 普通	P294　10% 北東寄り床面直上

図版番号	種　別	計測値 (cm)			重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚					
第64図 3	凹　石	9.8	7.9	5.5	632.4	100	砂岩	覆土中	Q119
4	磨　石	7.6	4.8	4.3	41.2	100	軽石	覆土中	Q120

（2）　竪穴遺構

当遺跡では，竪穴住居跡として調査した第4・14・18・19・22・24号住居跡は，床面に踏み締まりが見られないこと，柱穴と考えられるピットがないこと，炉が確認されていないことなどから，住居を目的とした竪穴住居跡と区別できるため，ここでは，これらを竪穴遺構とし，第1号～第6号竪穴遺構と改称して記載する。

第１号竪穴遺構（第65図）

位置　調査区の西部，V5i8区。

規模と平面形　長軸7.26m，短軸3.95mの長方形。

長軸方向　N－31°－E

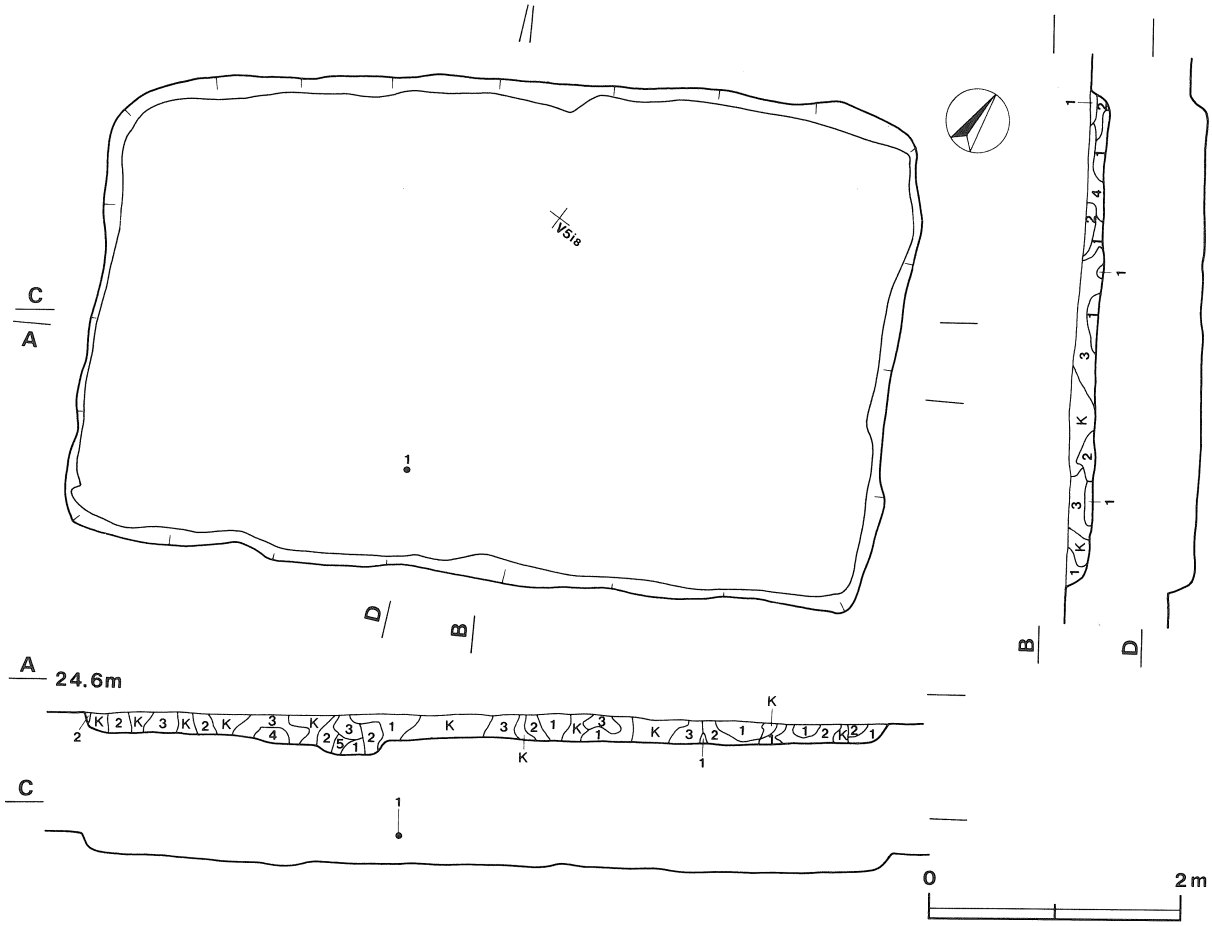
壁　掘り込みが浅く，南東壁から南西壁にかけては耕作による撹乱を受けて残存部分が少ない。壁高は12～20cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

床　平坦であるが，踏み固まった部分は確認されない。撹乱によりローム塊混じりの褐色土がみられる。

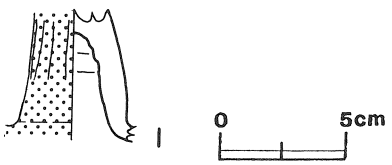
覆土　５層から成る。壁際からの流れ込みと思われる褐色土の堆積がみられる。下層から上層にかけ撹乱を受けている。人為堆積と考えられる。

土層解説

1　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子中量
2　暗 褐 色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
3　黒 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
4　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
5　褐　　色　ローム小ブロック中量，ローム粒子微量



第65図　第１号竪穴遺構実測図



第66図　第１号竪穴遺構出土遺物実測図

遺物　覆土中から土師器甕片134点，坏片47点が出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物が少なく，しかも覆土中から出土している遺物も撹乱を受けている可能性もあり特定はできないが，覆土中から出土している土師器片から5世紀後半頃のものではないかと推測される。性格は不明である。

第1号竪穴遺構出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第66図 1	高　坏 土師器	B（4.7）	脚部の破片。脚部は円柱状を呈する。	脚部外面ヘラ削り。外面赤彩。	砂粒・石英・雲母 橙色 普通	P23　15% 覆土中 内面摩耗

第2号竪穴遺構（第67図）

位置　調査区の北部，W7e7区。

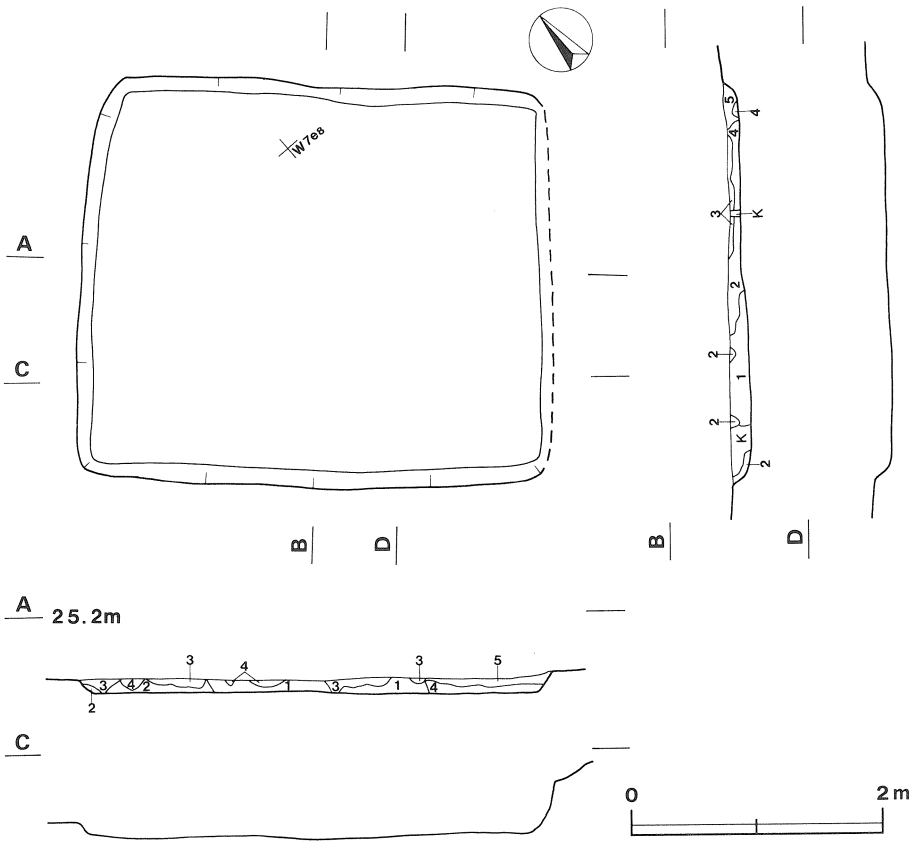
規模と平面形　長軸3.80m，短軸3.18mの長方形。

長軸方向　N—48°—W

壁　壁高は12～20cmで，緩やかに外傾している。

床　平坦で,床面はあまり踏み固められておらず全体的に軟らかい。中央から北側に滲み状の黒色土の広がりがみられる。

覆土　5層から成る。壁際には流れ込みと思われる暗褐色土の堆積，中層から上層にかけては砂を含む明褐色土の層が薄く堆積している。人為堆積と考えられる。



第67図　第2号竪穴遺構実測図

土層解説
1　橙　　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，締まり強
2　明 褐 色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
3　明赤褐色　ローム粒子・砂少量
4　暗 褐 色　ローム小ブロック・砂少量，ローム粒子微量
5　黒 褐 色　ローム小ブロック中量，ローム粒子微量

遺物　覆土中から土師器片甕72点，坏11点，鉄片３点が出土しているが，本跡に伴う明確な出土遺物はなかった。

所見　本跡の時期は，出土遺物が少なく，また，覆土中から出土している土師器片も撹乱を受けている可能性があり特定できないが，覆土中から出土している土師器片から５世紀後半頃のものではないかと推測される。性格は不明である。

第３号竪穴遺構（第68図）

位置　調査区の北部，U7e6区。

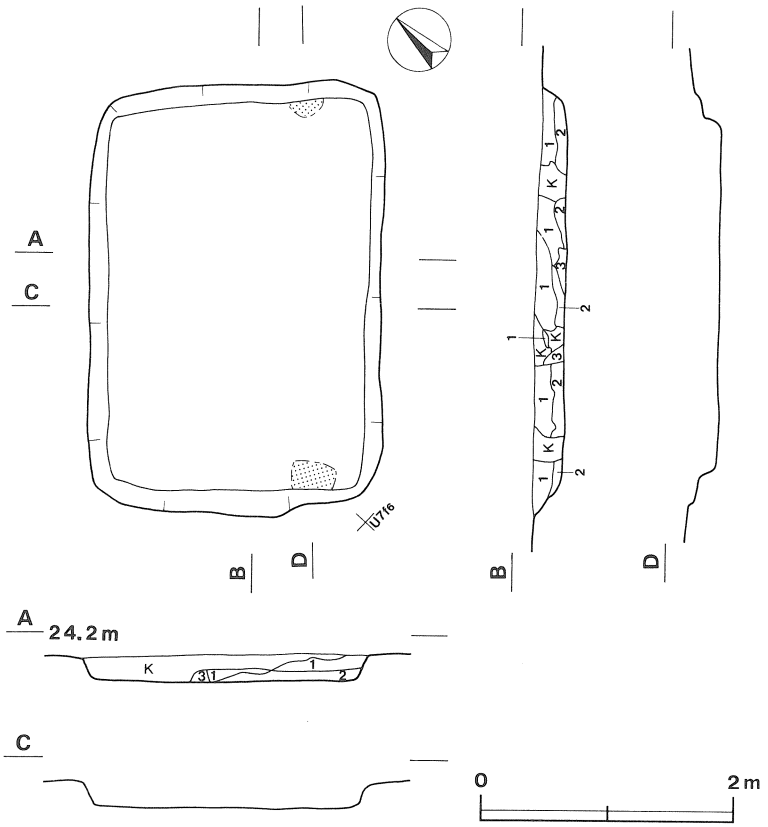
規模と平面形　長軸3.41m，短軸2.29mの長方形。

長軸方向　N－47°－E

壁　北東壁と南西壁の上部は，耕作による撹乱を受け残存状況が悪い。壁高は15～20cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦で，踏み締まった硬化部分は確認されず，全体的に柔らかい。

覆土　３層から成る。中層から上層にかけ撹乱を受けているが，南と東の両コーナー付近の床面上には粘土粒子混じりの褐色土と焼土ブロックを含む明赤褐色のローム土の堆積がみられる。部分的にレンズ状の堆積状況がみられるが，人為堆積と考えられる。



第68図　第３号竪穴遺構実測図

土層解説
1　黒 褐 色　ローム粒子少量
2　明 褐 色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
3　黒 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

遺物　覆土中から出土している土師器片１点と，土師質須恵器１点が出土しているだけである。

所見　本跡の時期は，遺構に伴う明確な出土遺物がないことから特定することはできないが，土師器片の様相から５世紀後半頃のものではないかと推測される。性格は不明である。

第４号竪穴遺構（第69図）

位置　調査区の北側，U7e7区。

規模と平面形　長軸3.73m，短軸2.93mの長方形。

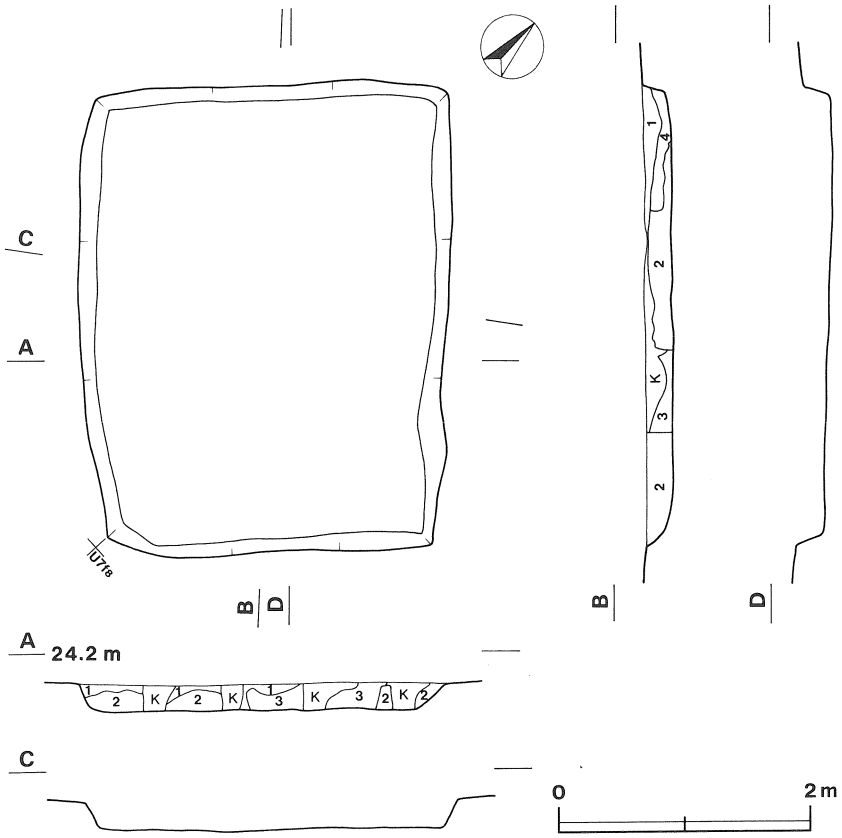
長軸方向　N－47°－W

壁　壁高は18～23cmで，外傾して立ち上がる。

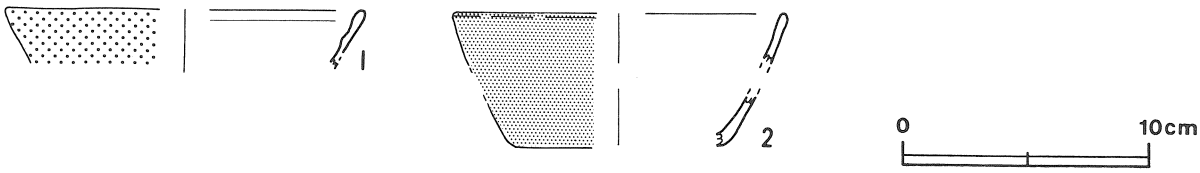
床　平坦で，踏み締まりのある硬化した部分もなく，全体的に軟らかい。

覆土　４層から成る。壁際にはローム粒子を含む明褐色土が堆積する。覆土下層から上層にかけて部分的に耕作による撹乱を受けている。人為堆積と考えられる。

土層解説
1　暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，粘性強
2　明 褐 色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
3　黒 褐 色　ローム粒子微量，炭化粒子極微量
4　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子微量



第69図　第４号竪穴遺構実測図



第70図　第４号竪穴遺構出土遺物実測図

遺物　覆土中から土師器甕片56点，坏片４点が出土しているだけで，遺構に伴う明確な出土遺物がみられない。

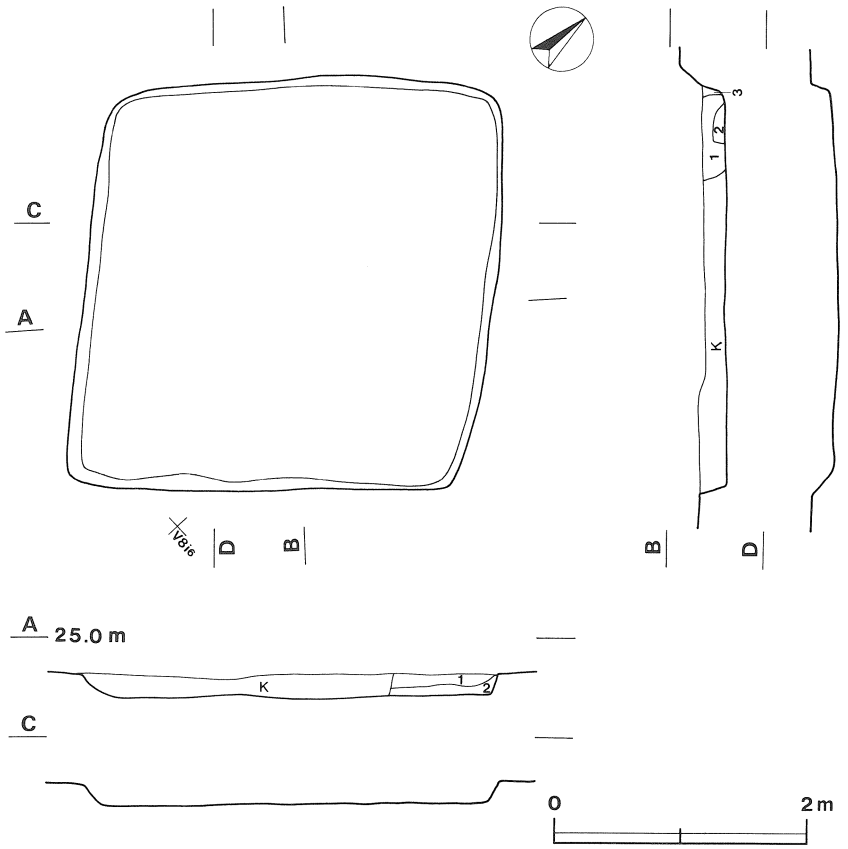
所見　本跡は，出土遺物がいずれも覆土中であり，しかも撹乱を受けている可能性があるため，時期を特定することはできないが，覆土中から出土している土師器の様相から，５世紀後半頃のものではないかと推測される。性格は不明である。

第４号竪穴遺構出土遺物観察表

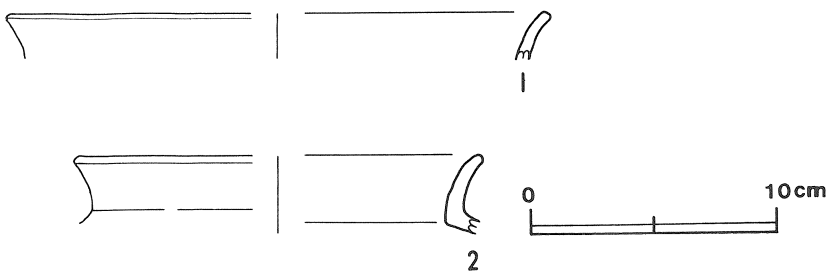
図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第70図 1	高　坏 土師器	A [14.2] B (2.4)	坏部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。外面赤彩。	砂粒・石英 にぶい褐色 普通	P152　5％ 覆土中 内・外面剝離痕
2	坏 土師質須恵器	A [13.4] B (2.0) C [8.2]	体部及び口縁部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面回転ヘラ削り。外面黒色処理。	砂粒・雲母 灰白色 不良	P153　5％ 覆土中

第５号竪穴遺構（第71図）

位置　調査区の中央部北側，V8h5区。



第71図　第５号竪穴遺構実測図



第72図　第5号竪穴遺構出土遺物実測図

規模と平面形　長軸3.30m，短軸3.22mの方形。

長軸方向　N－40°－W

壁　壁高は15～16cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦で，踏み固まった部分も確認されず，全体的に軟らかい。中央付近と南東壁付近にかけて耕作による撹乱を受けている。

覆土　3層から成る。部分的にローム粒子を含む暗褐色土の厚い堆積状況がみられる。人為堆積と考えられる。

土層解説
1　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子微量
2　褐　　色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子微量，炭化粒子極微量

遺物　覆土中から土師器甕片50点が出土しているが，遺構に伴う明確な出土遺物はみられない。

所見　本跡の時期は，遺構に伴う出土遺物がないことから特定はできないが，覆土中から出土している土師器片の様相から5世紀後半頃のものではないかと推測される。性格は不明である。

第5号竪穴遺構出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第72図 1	壺 土師器	A［21.8］ B（1.8）	口縁部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	P154　5％ 覆土中 外面煤付着
2	甕 土師器	A［16.4］ B（2.7）	口縁部の破片。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色　普通	P155　5％ 覆土中

第6号竪穴遺構（第73図）

位置　調査区の中央部北側，$V8_{e8}$区。

規模と平面形　長軸5.10m，短軸3.58mの長方形。

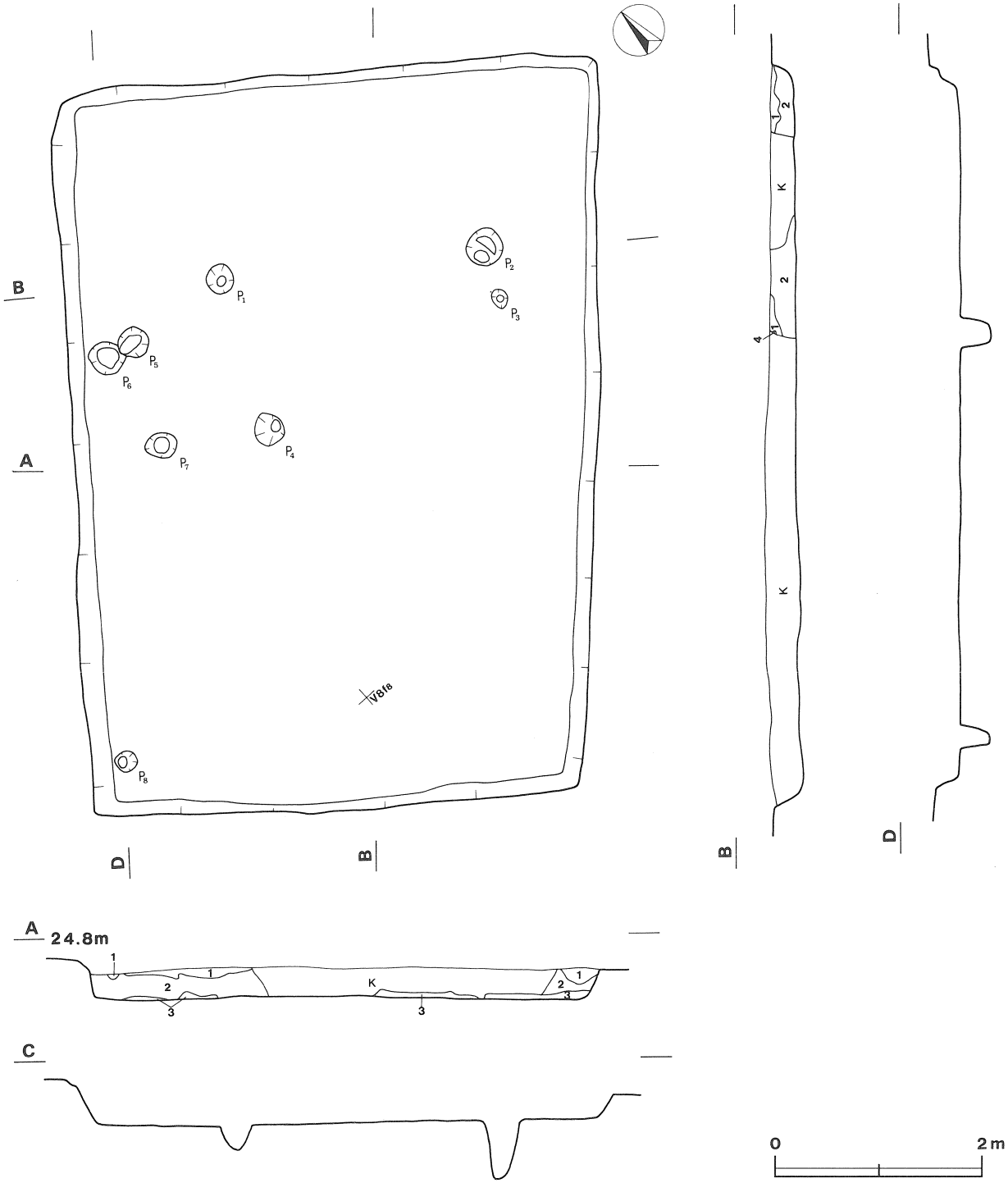
長軸方向　N－40°－E

壁　壁高は16～18cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦で，踏み固まった部分も確認されず，全体的に軟らかい。

ピット　8か所（P_1～P_8）。P_1～P_8は長径20～39cm，短径19～35cmの楕円形ピットで，深さは20～35cmである。P_2は中央位途中に張り出しがみられる。P_5はP_6を削平するように付設されている。何れもピットの性格は不明である。

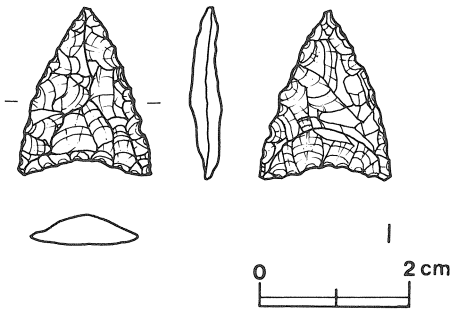
覆土　3層から成る。耕作による撹乱を受けている。一部にローム粒子を含む褐色土の堆積がみられる。



第73図　第6号竪穴遺構実測図

土層解説
1　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子微量
2　褐　色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量，締まり強
3　褐　色　ローム小ブロック中量，ローム粒子微量，粘性強
4　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物　遺構に伴う出土遺物がほとんどなく，覆土中から土師器の壺片1点，甕片1点が出土しているだけである。石鏃1点が出土しているが混入したものとおもわれる。



第74図　第6号竪穴遺構出土遺物実測図

所見　本跡の時期は，遺構に伴う出土遺物がないことから特定はできないが，土師器片の様相から5世紀後半頃のものではないかと推測される。性格は不明である。

図版番号	種　別	計　測　値　(cm)			重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚					
第74図1	石　鏃	2.3	1.8	0.5	1.3	100	チャート	中央部覆土下層	Q57　PL19

（3）　土坑

第220号土坑（第75図）

位置　調査区の東部，W7g9区。

規模と平面形　長径1.50m，短径1.35mの楕円形で，深さ0.35mである。

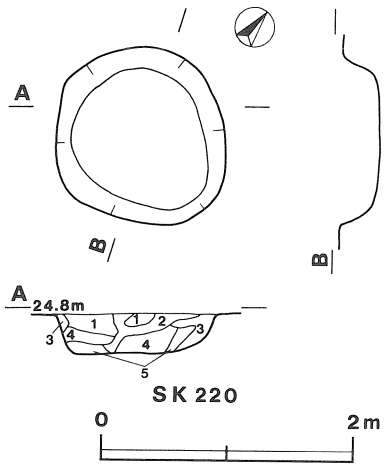
長径方向　N—45°—W

壁面　外傾して立ち上がる。

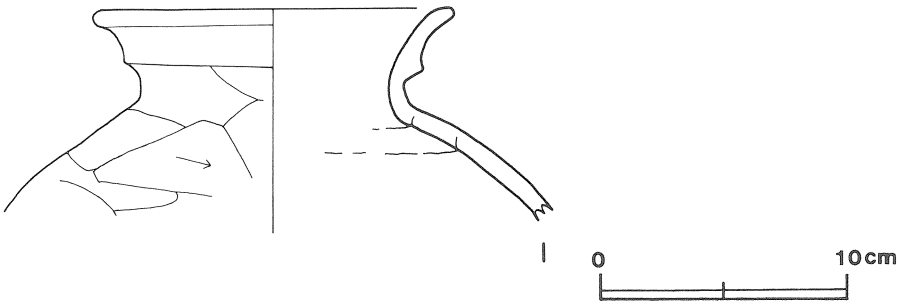
覆土　5層から成る。人為堆積と考えられる。

土層解説

1　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，炭化粒子極微量
3　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
4　黒褐色　炭化粒子・ローム粒子少量
5　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量



第75図　第220号土坑実測図



第76図　第220号土坑出土遺物実測図

遺物　覆土の中層付近から土師器片が出土している。第76図１の甕は土坑中央の覆土中層から正位の状態で出土したものである。

所見　本跡の時期は，出土遺物から５世紀後半頃のものと考えられるが，性格は不明である。

第220号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第76図 1	甕 土師器	A　14.3 B（8.1）	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は頸部との境に弱い稜を持ち，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面雑なヘラナデ。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P264　30% 中央寄り覆土中層 体部外面煤付着

3　平安時代の遺構と遺物

当遺跡からは，調査区の西部南側と中央部の２か所で平安時代の竪穴住居を２軒確認した。第２号住居跡の竈は北東向きに付設されているが，袖部が削平され残存せず，中央部が耕作に伴う撹乱を受け残存状況は良くなかった。第25号住居跡の竈の残存状況は比較的良好だが竈を付設する方向が南向きと，両住居跡では対照的な住居の構築となっている。

以下，遺構と遺物について記載する。

（１）竪穴住居跡

第２号住居跡（第77図）

位置　調査区の西部，V6a2区。

規模と平面形　長軸3.40m，短軸3.23mの方形。

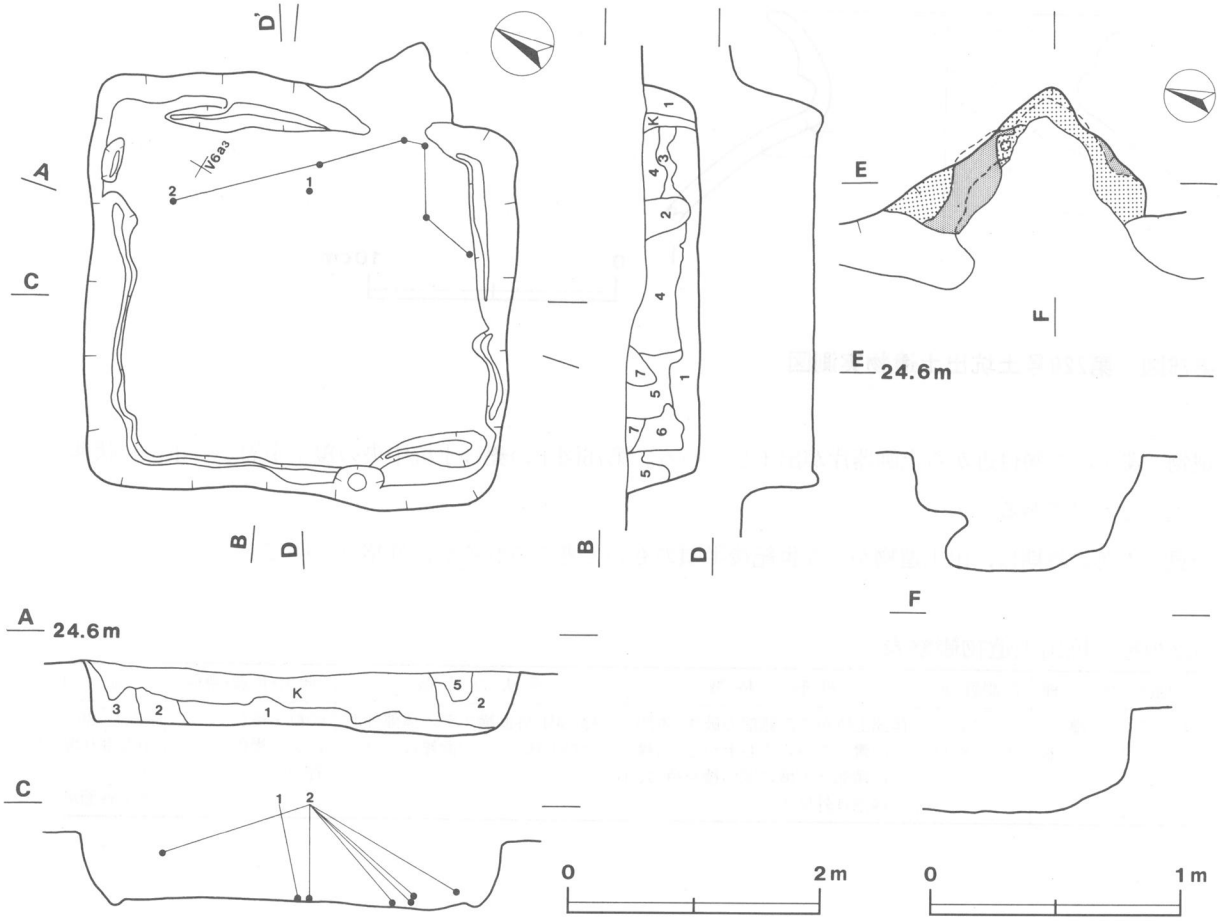
主軸方向　N－65°－E

壁　壁高は45～63cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

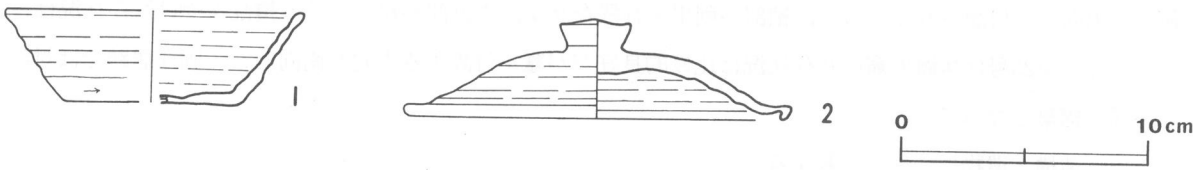
壁溝　北コーナー付近を除き周回している。上幅５～28cm，深さ約４cmで，断面形は皿状をしている。

床　ほぼ平坦で，踏み締まった堅い部分は確認されない。北西部に多少高まりがある。

竈　北東壁中央から東寄りの壁面を約80cm壁外に掘り込み，ロームを掘り残して袖基部とし，砂混じりの粘土で構築されている。規模は，長さ85cm，幅65cmである。天井部は崩落し，両袖部も残存してない。燃焼部には，焼土ブロック，焼土粒子，炭化粒子がみられる。火床部はほとんど掘り窪められていないが，熱を受けて赤変硬化し，内壁も焼土化している。撹乱を受け覆土中には黒色土が混入し，確認できたのは２層のみである。煙道は火床から緩やかに外傾しているが，立ち上がりの部分は撹乱で確認されない。



第77図　第２号住居跡実測図



第78図　第２号住居跡出土遺物実測図

竈土層解説

1　褐　　色　ロームブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

2　褐　　色　焼土小ブロック・焼土粒子少量，ローム粒子極微量，締まり強

覆土　７層から成る。下層から上層にかけロームブロックを含む暗褐色土が厚く堆積し，各層にわたって粘土粒子と砂が混じる。中層から上層付近は広く撹乱されている。人為堆積と思われる。

土層解説

1　暗 褐 色　ローム粒子少量，粘土粒子・砂微量

2　黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，粘土粒子・砂微量

3　黒 褐 色　ローム小ブロック・砂少量，ローム粒子・粘土粒子微量

4　暗 褐 色　ローム粒子・粘土粒子・砂少量

5　黒 褐 色　ローム小ブロック・粘土粒子・砂少量，ローム粒子微量

6　黒 褐 色　粘土粒子・砂少量，ローム小ブロック・ローム粒子微量

7　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子・砂少量

遺物　覆土中から土師器甕片231点，坏片12点，須恵器坏片２点が出土している。遺構に伴う遺物は覆土下層から少量出土しているだけである。第78図１と２の坏，坏蓋は東寄りの竈と周辺の覆土下層から出土し，１の坏は北東寄りの床面直上から逆位の状態で出土し，２の坏蓋は，竈焚き口付近の覆土下層及び床直上から出

土しているつまみ部に，北寄りの覆土中層から出土している坏片が接合したものである。

所見　本跡から出土している坏蓋の接合関係をみると，須恵器片を意図的に投げ込んでいるようにも思われ，祭祀行為との関係も推測される。時期は，出土遺物から８世紀後半と考えられる。

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第78図 1	坏 須恵器	A［12.0］ B　3.7 C［7.0］	底部から口縁部の破片。平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部下位回転ヘラけずり。底部一方向のヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 灰白色 良好	P８　40% PL18 北東寄り床面直上
2	坏蓋 須恵器	A　15.6 B　4.0 F　2.9 G　1.1	天井部及び口縁部一部欠損。つまみは上部に突起があり，外周部が接合部よりも大きい。天井部から口縁部へなだらかに下降する。端部は屈曲し，短く垂下する。	天井部回転ヘラ削り。	砂粒・長石・石英 赤灰色 良好	P９　45% PL18 竈焚き口付近覆土下層

第25号住居跡（第79図）

位置　調査区の西部，V5j5区。

規模と平面形　長軸3.24m，短軸2.99mの長方形。

主軸方向　N―28°―E

壁　南西壁は調査区外で確認できず，さらに木根による撹乱と耕作による撹乱を複雑に受けている。壁高は22～53cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

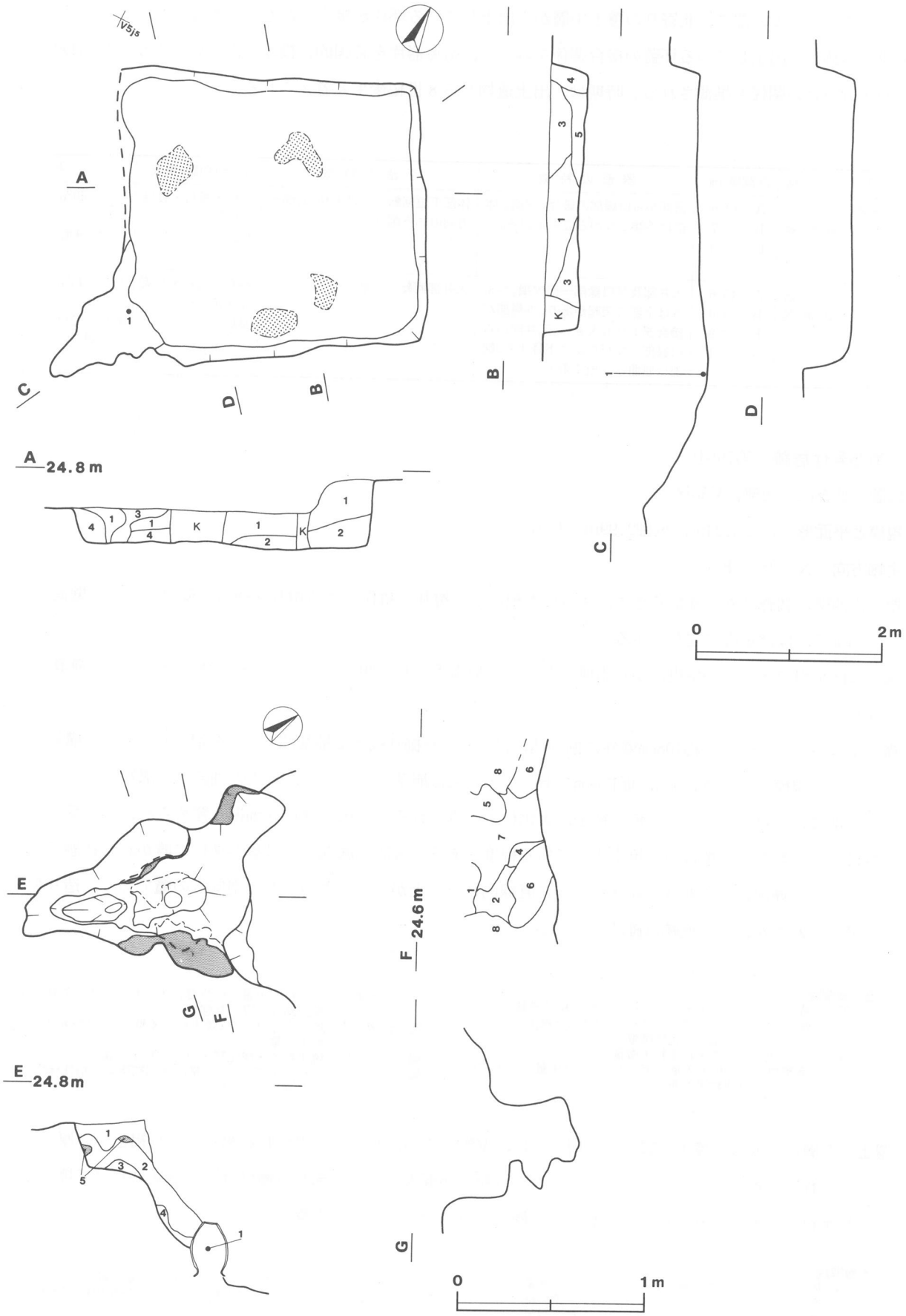
床　ほぼ平坦であるが，中央部から南側にかけてやや南下がりに傾斜している。踏み固まった部分は確認できなかった。

竈　南コーナーの壁面を約108cm壁外に掘り込み，ロームを掘り残して袖基部とし，砂混じりの粘土で構築されている。規模は，長さ150cm，幅100cmである。天井部は崩落しているが，南西の袖部は一部残存している。燃焼部には，焼土ブロック，焼土粒子，炭化粒子がみられる。火床部は約５cm掘り窪められ，熱を受けて赤変硬化しており，内壁はやや焼土化している程度である。火床部底部からは甕が逆位に置かれた状態で出土している。煙道は，約30度の傾きを持って直線的に立ち上がる。類例の少ない南向きの竈であり，造り替えも考えられたが，その痕跡は確認されなかった。

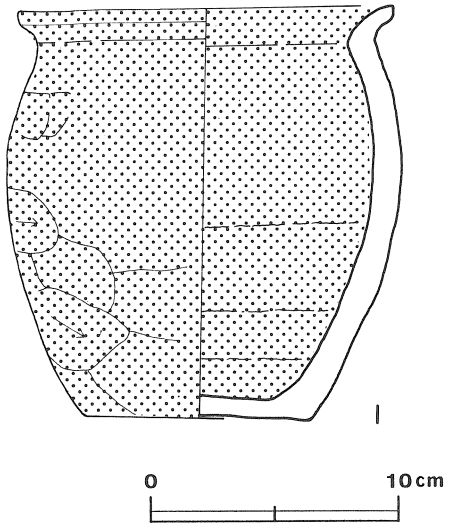
竈土層解説
1　暗　褐　色　炭化粒子・ローム粒子・粘土粒子微量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック少量，炭化物微量
3　褐　　色　炭化物・粘土粒子微量
4　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，炭化物・粘土粒子少量
5　にぶい黄褐色　粘土粒子多量，砂少量，焼土粒子・炭化物微量，粘性・締まり強
6　明赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子多量，炭化物・粘土粒子少量
7　褐　　色　焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量
8　褐　　色　ローム小ブロック少量，炭化物微量，粘性・締まり強

覆土　５層から成る。覆土下層から上層にかけ，壁際からの流れ込みと思われる褐色土と暗褐色土の厚い堆積がみられる。各層にはロームブロック，ローム粒子が混入し，中央部から竈付近の下層部にかけて焼土粒子と粘土粒子の堆積がみられる。中層から上層にかけ耕作による撹乱を受けている。

土層解説
1　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
2　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，締まり強
3　暗褐色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
4　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，締まり強
5　暗褐色　ローム小ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量



第79図　第25号住居跡実測図



第80図　第25号住居跡出土遺物実測図

遺物　覆土中から土師器甕片141点が出土している。第80図１の常総型甕は竈焚き口付近の底部から，意図的に逆位に伏せた状態で出土し，内部は半空洞状を呈していた。

所見　本跡は南コーナーに竈を付設する住居跡である。竈の位置関係から造り替えも考えられ，その痕跡を調査したがそうした痕跡はみられなかった。時期は，出土遺物から９世紀前半と考えられる。

第25号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第80図 1	甕 土師器	A　15.0 B　16.6 C　9.0	口縁部一部欠損。平底。体部は上位に最大径を持ち，内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は外反する。	口縁部内・外面及び頸部横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	P216　98% PL18 竈焚き口付近底部 内面剝離

（２）　土坑

第67号土坑（第81図）

位置　調査区の西部，V5c9区。

規模と平面形　長径2.20m，短径1.75mの不整形で，深さ0.25mである。

長径方向　N－46°－E

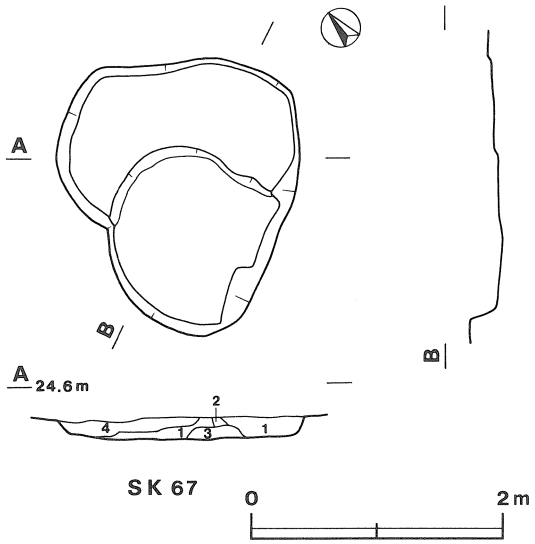
壁面　北東壁は削平され殆ど残存しないが，南西壁は緩やかに外傾している。

底面　平坦である。

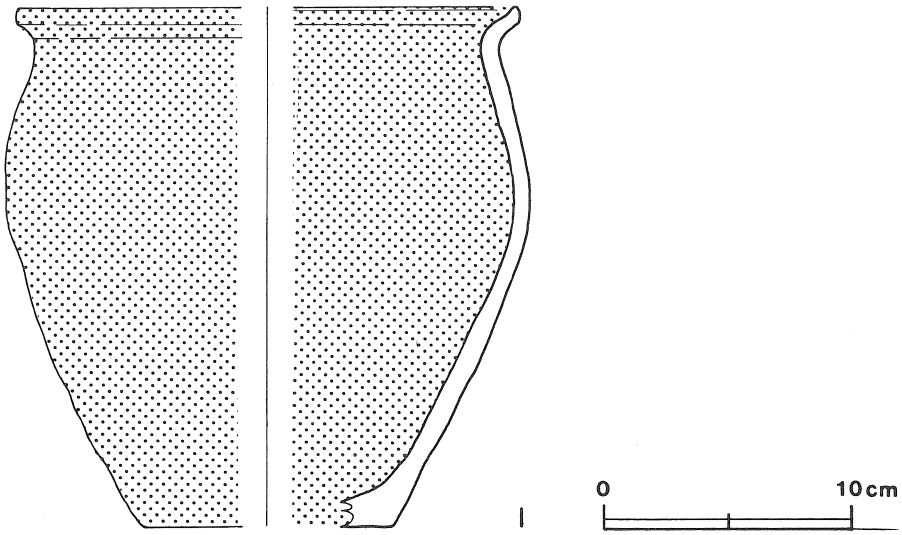
覆土　４層から成る。人為堆積と考えられる。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム中ブロック少量
2　暗褐色　炭化粒子・ローム粒子少量
3　暗褐色　焼土粒子中量，炭化粒子少量
4　黒褐色　炭化粒子・ローム粒子少量

遺物　覆土の中層から下層にかけて，土師器片が出土している。第82図１の常総型甕は中央付近の覆土下層から出土したものである。



第81図　第67号土坑実測図



第82図　第67号土坑出土遺物実測図

所見　本跡は，土坑として取り扱ったが，形状が不明確であるため，竪穴遺構の可能性もある。遺構の確認状況と出土遺物から8世紀後半から9世紀前半のものと考えられる。性格は不明である。

第67号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第82図 1	甕 土師器	A［20.0］ B　20.8 C［10.0］	底部から口縁部の破片。平底。体部上位に最大径を持ち，頸部から口縁部にかけて外反する。口縁部を僅か上方に摘まみ上げている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ磨き，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P263　98% PL18 中央付近覆土下層 体部内面煤付着

4　その他の遺構と遺物

(1)　土　坑

調査区のほぼ全域から土坑158基を確認した。形状や規模には各々差異が認められ，遺物も殆どなく，時期や性格について不明の部分が多い。ここでは，調査した土坑について一覧表（表2）に記載した。

表2　中下根遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)				
1	$T6_{f8}$	N-35°-E	不整楕円形	0.89×0.68	64	緩斜	凹凸	人為	
3	$T6_{g8}$	N-39°-E	長方形	0.98×0.85	47	外傾	皿状	人為	
5	$T6_{g9}$	N-47°-E	楕円形	0.48×0.36	28	外傾	平坦	自然	
7	$T6_{h9}$	N-48°-E	不整楕円形	0.88×0.47	30	緩斜	皿状	人為	
8	$T6_{h0}$	N-40°-W	不整形	0.62×0.52	46	垂直	皿状	自然	
9	$T7_{j1}$	N-61°-W	不整形	1.61×1.03	57	緩斜	皿状	人為	
11	$T6_{j8}$	N-41°-W	楕円形	0.94×0.58	36	外傾	皿状	自然	
13	$T6_{j9}$	N-32°-E	不整円形	0.48×0.47	44	外傾	皿状	人為	
15	$T6_{a0}$	N-6°-E	不整形	0.81×0.36	54	外傾	凹凸	人為	
18	$U7_{b5}$	N-45°-E	楕円形	0.49×0.38	22	外傾	皿状	自然	
19	$U7_{b5}$	N-64°-W	円形	0.58×0.57	27	緩斜	皿状	人為	
20	$U7_{c5}$	N-49°-W	長楕円形	2.36×0.78	40	外傾	平坦	人為	
21	$U7_{c4}$	N-60°-W	楕円形	2.00×1.18	95	緩斜	平坦	人為	
25	$U7_{d3}$	N-58°-E	楕円形	1.05×0.69	28	緩斜	皿状	自然	
26	$U7_{b3}$	N-45°-W	不整長方形	1.45×0.36	32	外傾	皿状	自然	
27	$U7_{b3}$	N-40°-W	不整長楕円形	1.02×0.41	46	緩斜	皿状	人為	
30	$U6_{b0}$	N-52°-E	不整楕円形	0.88×0.71	18	外傾	皿状	人為	
31	$U6_{c9}$	N-56°-E	不整楕円形	0.74×0.54	34	外傾	皿状	人為	
32	$U6_{d8}$	N-36°-E	不整長楕円形	1.82×0.87	53	外傾	平坦	自然	
35	$U6_{b7}$	N-43°-E	不整形	1.95×0.94	65	外傾	平坦	人為	
37	$U6_{c5}$	N-53°-W	不整隅丸長方形	2.74×1.11	72	外傾	平坦	自然	
38	$U6_{c4}$	N-35°-E	不整長方形	1.50×0.82	70	外傾	平坦	人為	
39	$U6_{e4}$	N-57°-W	不整形	1.20×0.71	54	外傾	皿状	人為	
44	$U6_{e2}$	N-49°-W	不整円形	1.12×0.94	23	垂直	平坦	人為	
45	$U6_{d1}$	N-72°-W	不整楕円形	1.19×0.79	35	外傾	皿状	人為	
49	$U5_{f0}$	N-43°-E	楕円形	0.89×0.73	36	外傾	皿状	自然	
50	$U6_{f1}$	N-20°-E	不整円形	0.50×0.48	56	外傾	平坦	自然	
51	$U6_{g1}$	N-47°-E	不整円形	0.38×0.37	28	外傾	皿状	人為	
53	$U6_{f3}$	N-87°-E	不整楕円形	1.79×0.95	58	外傾	皿状	人為	
56	$U6_{e6}$	N-51°-W	不整長楕円形	1.26×0.56	30	緩斜	皿状	自然	
57	$U6_{g6}$	N-50°-E	不整楕円形	0.46×0.32	32	外傾	皿状	自然	
59	$U6_{j5}$	N-47°-W	不整長方形	1.42×0.62	35	外傾	平坦	自然	
60	$U6_{h3}$	N-6°-W	不整形	1.16×0.53	35	緩斜	平坦	人為	
63	$U5_{i8}$	N-53°-E	円形	0.75×0.74	18	外傾	平坦	自然	
64	$U5_{i8}$	N-46°-W	楕円形	1.06×0.74	20	外傾	平坦	人為	
67	$V5_{c9}$	N-46°-E	不整形	2.20×1.75	25	緩斜	平坦	人為	土師器片25(坏6，甕19)，常総型甕1点
70	$U5_{j6}$	N-51°-W	円形	0.93×0.93	37	外傾	平坦	自然	
72	$W5_{b8}$	N-57°-W	楕円形	0.80×0.66	25	緩斜	皿状	人為	
73	$V5_{h0}$	N-51°-W	楕円形	1.32×0.86	45	外傾	平坦	人為	土師器片39(坏6，甕33)
74	$V6_{i2}$	N-48°-W	不整形	0.85×0.63	45	外傾	皿状	自然	
75	$W6_{a4}$	N-51°-W	不整形	1.00×0.69	41	外傾	凹凸	自然	
79	$V6_{g9}$	N-57°-W	不整楕円形	0.78×0.70	25	緩斜	平坦	自然	
81	$V6_{g7}$	N-42°-E	楕円形	1.53×1.13	24	緩斜	平坦	人為	
87	$V6_{d7}$	N-41°-W	隅丸長方形	1.87×1.20	88	外傾	平坦	人為	
89	$V6_{b8}$	N-40°-E	隅丸方形	2.70×2.62	96	緩斜	平坦	人為	

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)				
90	$U6_{j0}$	N-50°-E	不整楕円形	1.32×0.95	24	緩斜	皿状	人為	
92	$U7_{g2}$	N-70°-W	不整楕円形	2.80×1.80	71	緩斜	皿状	自然	
93	$U7_{h4}$	N-22°-E	不整形	1.25×0.85	85	緩斜	平坦	人為	
97	$U7_{f6}$	N-85°-W	楕円形	0.90×0.65	24	緩斜	皿状	自然	
103	$U7_{d7}$	N-38°-E	楕円形	0.94×0.74	35	緩斜	平坦	自然	
104	$U7_{d7}$	N-37°-E	円形	0.60×0.56	24	緩斜	凹凸	人為	
105	$U7_{d8}$	N-7°-E	楕円形	1.20×0.80	33	緩斜	平坦	人為	
106	$U7_{f9}$	N-63°-E	不整長楕円形	2.15×0.86	51	垂直	平坦	人為	
107	$U7_{f8}$	N-37°-W	不整長楕円形	1.73×0.85	49	外傾	平坦	人為	
108	$U7_{g9}$	N-43°-W	隅丸長方形	1.75×0.93	40	外傾	平坦	自然	
109	$U6_{f1}$	N-73°-W	不整長楕円形	2.14×0.66	34	緩斜	平坦	自然	
110	$U7_{g0}$	N-37°-E	不整楕円形	1.16×0.81	23	緩斜	皿状	人為	
111	$U8_{h1}$	N-31°-W	楕円形	0.88×0.72	25	緩斜	皿状	人為	
112	$U7_{h9}$	N-12°-E	不整形	2.75×1.10	25	緩斜	凹凸	自然	
113	$U7_{h9}$	N-20°-W	不整楕円形	1.66×1.10	30	緩斜	皿状	自然	
114	$U7_{i8}$	N-37°-E	隅丸長方形	1.76×0.68	36	外傾	平坦	自然	
115	$U7_{i5}$	N-0°	不整形	1.55×0.74	50	外傾	平坦	人為	
116	$U7_{j5}$	N-45°-E	不整形	3.30×2.03	75	緩斜	凹凸	自然	
118	$V7_{a5}$	N-40°-E	楕円形	1.05×0.76	20	緩斜	平坦	自然	
121	$V7_{b6}$	N-38°-E	円形	1.10×1.00	38	緩斜	皿状	自然	
122	$U7_{i8}$	N-40°-E	楕円形	1.13×0.94	29	緩斜	平坦	自然	
123	$U7_{j8}$	N-36°-E	円形	0.93×0.92	28	緩斜	皿状	人為	
124	$U7_{j9}$	N-42°-W	楕円形	0.88×0.75	38	緩斜	平坦	人為	
125	$U7_{j9}$	N-4°-W	不整形	3.00×1.05	45	緩斜	平坦	自然	
126	$U7_{g0}$	N-42°-E	不整形	6.00×1.20	23	外傾	平坦	人為	
127	$U7_{i0}$	N-40°-E	円形	1.00×0.96	24	緩斜	平坦	自然	
130	$U8_{j2}$	N-27°-E	長楕円形	3.00×1.10	29	外傾	平坦	人為	
131	$U8_{l2}$	N-33°-E	隅丸長方形	2.51×1.20	34	緩斜	平坦	自然	
132	$U8_{h2}$	N-46°-E	楕円形	0.92×0.80	23	外傾	皿状	自然	
133	$U8_{g2}$	N-38°-W	楕円形	1.30×1.06	28	緩斜	平坦	自然	
136	$V8_{a4}$	N-40°-E	楕円形	2.26×1.75	25	緩斜	平坦	人為	
137	$V8_{a4}$	N-47°-W	円形	0.74×0.72	31	緩斜	平坦	自然	
139	$V8_{b5}$	N-58°-E	不整形	7.85×2.13	25	緩斜	平坦	自然	
140	$V7_{b7}$	N-27°-E	楕円形	1.42×0.92	30	緩斜	平坦	自然	
141	$V7_{b6}$	N-45°-W	不整楕円形	1.28×1.05	20	緩斜	平坦	人為	
143	$V8_{c6}$	N-32°-E	不整楕円形	1.77×0.95	23	緩斜	平坦	自然	
144	$V8_{c6}$	N-24°-W	楕円形	1.05×0.90	30	緩斜	皿状	自然	
146	$V8_{c3}$	N-54°-E	不整形	4.40×2.23	51	緩斜	凹凸	自然	
147	$V8_{c4}$	N-53°-E	不整形	1.05×1.40	35	緩斜	凹凸	自然	
149	$V8_{b3}$	N-42°-E	不整形	2.90×1.54	42	緩斜	皿状	自然	
151	$V8_{a2}$	N-21°-E	不整円形	1.29×1.22	27	緩斜	平坦	自然	
152	$V8_{b2}$	N-71°-E	不整形	1.59×1.42	47	外傾	平坦	人為	
156	$V7_{b0}$	N-76°-E	不整形	1.91×0.92	23	外傾	平坦	人為	
157	$V8_{b1}$	N-45°-W	不整楕円形	1.34×0.94	32	外傾	平坦	人為	
161	$V7_{c0}$	N-48°-W	不整楕円形	1.04×0.80	27	外傾	平坦	人為	
162	$V7_{b1}$	N-38°-E	不整楕円形	1.07×0.94	33	外傾	凹凸	自然	

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)				
163	$V7_{c0}$	N-40°-W	不整隅丸長方形	1.77×0.84	23	外傾	平坦	人為	
164	$V7_{a9}$	N-21°-W	楕円形	1.03×0.77	28	外傾	皿状	人為	
166	$V7_{c8}$	N-12°-W	不整楕円形	0.72×0.58	21	外傾	平坦	自然	
167	$V7_{c9}$	N-48°-W	不整形	1.35×0.69	25	外傾	平坦	人為	
168	$V7_{c8}$	N-53°-W	不整楕円形	1.05×0.61	20	外傾	平坦	人為	
169	$V7_{d7}$	N-44°-E	不整楕円形	0.97×0.82	22	外傾	やや凹凸	自然	
170	$V7_{d7}$	N-68°-E	不整楕円形	1.25×1.05	22	外傾	平坦	人為	
171	$V7_{e6}$	N-46°-E	不整形	0.66×0.58	30	外傾	凹凸	自然	
172	$V7_{e9}$	N-33°-E	不整楕円形	0.94×0.68	29	外傾	凹凸	自然	
173	$V7_{e8}$	N-40°-E	不整形	0.83×0.56	23	外傾	皿状	人為	
176	$V7_{e9}$	N-44°-E	楕円形	0.90×0.60	24	外傾	平坦	自然	
178	$V7_{f0}$	N-90°	楕円形	1.22×0.86	32	緩斜	皿状	人為	
179	$V7_{f0}$	N-72°-E	楕円形	1.04×0.58	42	緩斜	皿状	自然	
180	$V7_{f0}$	N-8°-E	楕円形	0.56×0.46	21	緩斜	平坦	自然	
182	$V8_{g1}$	N-25°-E	隅丸長方形	2.18×0.60	22	緩斜	皿状	人為	
184	$V8_{e2}$	N-63°-E	楕円形	1.70×1.03	41	外傾	平坦	人為	
185	$V8_{e2}$	N-57°-E	不整楕円形	1.31×0.76	35	外傾	平坦	自然	
189	$V8_{d3}$	N-57°-W	円形	1.20×1.12	24	外傾	平坦	人為	
190	$V8_{d3}$	N-57°-W	不整形	1.17×0.96	26	外傾	皿状	自然	
191	$V8_{e4}$	N-42°-W	楕円形	1.95×1.10	50	外傾	平坦	自然	
193	$V7_{f3}$	N-45°-E	楕円形	1.73×0.92	20	緩斜	平坦	自然	
194	$V7_{g3}$	N-25°-E	不整楕円形	1.30×0.85	25	緩斜	凹凸	自然	
202	$W7_{c8}$	N-77°-E	不整形	2.06×1.33	28	外傾	平坦	自然	土師器片42(坏9，甕33)
209	$W6_{i8}$	N-52°-W	不整形	1.75×0.88	33	垂直	平坦	人為	
211	$V8_{g9}$	N-63°-E	不整形	3.28×2.71	24	緩斜	平坦	人為	
212	$V8_{h8}$	N-85°-E	不整楕円形	1.92×1.62	49	緩斜	皿状	人為	
213	$V8_{i9}$	N-70°-E	不整楕円形	0.95×0.66	23	外傾	平坦	人為	
218	$V8_{i7}$	N-53°-E	不整長方形	1.97×1.70	22	緩斜	やや凹凸	人為	
219	$V8_{j6}$	N-22°-W	不整長楕円形	4.06×1.59	20	外傾	平坦	人為	
220	$W7_{g9}$	N-45°-W	楕円形	1.50×1.35	35	緩斜	平坦	人為	土師器片45点（坏12，甕33）
221	$W8_{a8}$	N-84°-E	不整楕円形	2.64×1.52	22	外傾	凹凸	自然	
223	$W8_{b8}$	N-51°-W	不整形	1.22×0.90	25	緩斜	平坦	人為	
225	$U6_{h4}$	N-77°-W	不整形	0.80×0.61	28	緩斜	皿状	人為	SI3を掘り込んでいる。
226	$W9_{b1}$	N-23°-W	不整形	3.64×1.03	22	外傾	平坦	自然	
229	$W9_{d1}$	N-75°-E	不整形	1.48×1.11	68	外傾	皿状	人為	
234	$W9_{i1}$	N-20°-E	不整円形	0.62×0.57	23	外傾	平坦	人為	
235	$W9_{i1}$	N-62°-E	円形	0.55×0.50	25	外傾	平坦	人為	
237	$X8_{a0}$	N-20°-W	楕円形	0.75×0.60	25	緩斜	平坦	自然	
239	$V8_{i4}$	N-41°-E	不整隅丸長方形	1.95×1.23	27	緩斜	平坦	自然	
240	$W8_{a5}$	N-22°-E	円形	0.68×0.67	34	緩斜	皿状	自然	
243	$W8_{a5}$	N-59°-W	不整長楕円形	2.00×0.95	20	緩斜	平坦	人為	
244	$U5_{g6}$	N-44°-E	楕円形	1.44×0.59	50	垂直	平坦	自然	
245	$U5_{f5}$	N-14°-W	楕円形	0.94×0.78	22	外傾	皿状	自然	
246	$U5_{a5}$	N-24°-E	楕円形	0.73×0.60	55	外傾	平坦	自然	
247	$T5_{i4}$	N-38°-E	楕円形	0.93×0.63	40	外傾	平坦	自然	
248	$T5_{j2}$	N-53°-W	楕円形	1.80×0.68	40	緩斜	皿状	自然	

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)				
249	$U4_{b9}$	N-17°-E	楕円形	1.88×0.71	50	垂直	やや凹凸	自然	
250	$T4_{j5}$	N-81°-E	不整楕円形	1.30×0.90	45	緩斜	皿状	自然	
251	$T4_{h4}$	N-48°-E	不整形	1.97×0.85	35	外傾	やや凹凸	自然	
252	$T4_{h3}$	N-3°-E	不整形	1.36×1.36	34	緩斜	皿状	自然	
253	$T6_{g3}$	N-75°-W	不整形	1.50×0.74	39	外傾	皿状	自然	
254	$T5_{e0}$	N-44°-E	楕円形	1.72×1.05	58	外傾	平坦	自然	
255	$T5_{e0}$	N-36°-E	楕円形	1.87×1.27	69	外傾	平坦	自然	
256	$T6_{c3}$	N-82°-W	不整形	1.80×1.45	75	外傾	皿状	自然	
257	$T6_{a2}$	N-58°-W	楕円形	1.55×1.20	39	緩斜	皿状	自然	
258	$T6_{a1}$	N-54°-W	不整形	2.05×1.36	85	外傾	平坦	自然	
259	$T5_{a7}$	N-16°-E	楕円形	2.73×1.14	41	外傾	皿状	自然	
260	$T4_{d6}$	N-12°-E	円形	0.46×0.41	36	外傾	皿状	自然	
261	$T4_{c6}$	N-60°-E	不整円形	0.57×0.54	29	外傾	皿状	自然	
262	$T4_{d9}$	N-67°-W	不整円形	0.67×0.59	22	緩斜	皿状	自然	
263	$T4_{c9}$	N-64°-W	不整長方形	0.70×0.62	23	緩斜	皿状	自然	
264	$T4_{c9}$	N-44°-W	不整楕円形	0.86×0.75	62	外傾	皿状	自然	
265	$S4_{j8}$	N-68°-E	不整楕円形	1.20×1.03	29	外傾	平坦	自然	
266	$T5_{a1}$	N-24°-W	長楕円形	2.86×1.23	100	外傾	皿状	自然	
267	$T5_{f1}$	N-34°-E	不整円形	1.30×1.21	86	外傾	やや凹凸	自然	
268	$T5_{e2}$	N-45°-W	楕円形	1.64×1.35	72	外傾	平坦	自然	
270	$T5_{a4}$	N-30°-W	楕円形	1.80×1.06	61	外傾	平坦	自然	

（2）　溝

今回の調査では，時期不明の溝１条を確認した。以下，確認した遺構について記載する。

第１号溝（付図１）

位置　調査区の南西部から北東部中央付近，$V5_{i4}$～$U7_{d6}$区。

確認状況　本跡は，遺構確認調査時から黒色土混じりの堆積状況がみられた。

規模と形状　全長120mで，端部はそれぞれ調査区外に延びている。最大幅は2.5mで，最小幅は1.6mである。断面形は「V」字状をし，深さは最大で0.7mである。底部は薬研掘りの様相を呈する。

方向　N―57°―E

壁面　中位付近には凹凸がある。中位から上位にかけて耕作による撹乱を受けている。

覆土　８層から成る。一部撹乱を受けているが自然堆積と考えられる。

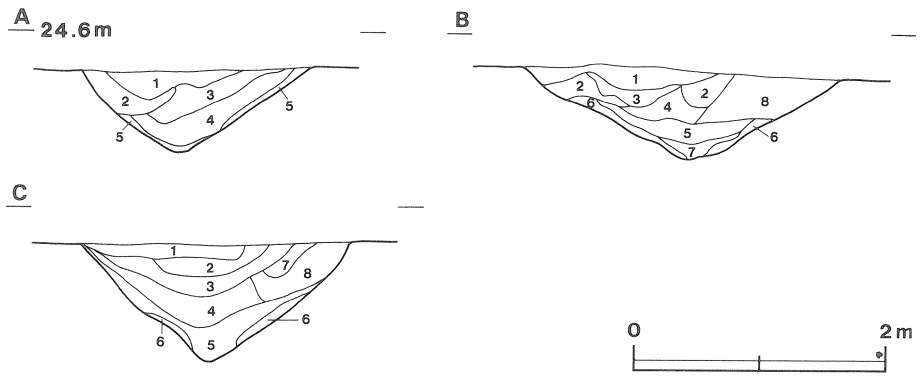
土層解説

1　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　暗褐色　ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子少量
4　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量，炭化粒子極微量
5　暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
6　褐　色　ローム粒子微量
7　暗褐色　ローム粒子微量
8　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極微量

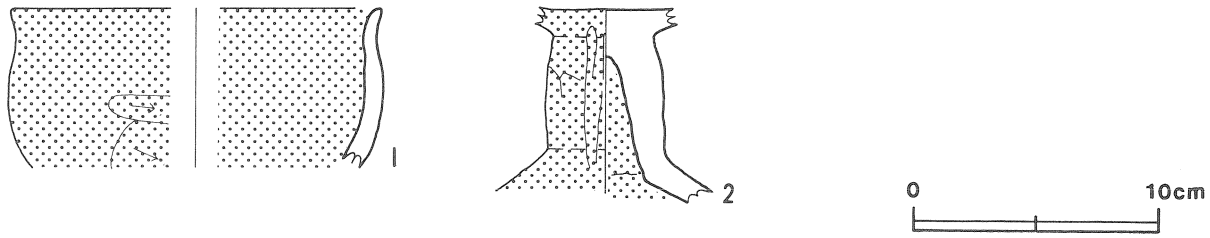
遺物　覆土中層から底部にかけての出土遺物は殆どみられず，僅かに土師器片が出土しているだけである。第84図１の椀は覆土下層から横位の状態で，２の高坏は覆土下層から斜位の状態で出土したものである。底部

からの出土遺物はみられない。

所見　本跡に伴う出土遺物が殆どないため，時期及び性格は不明である。



第83図　第１号溝断面図



第84図　第１号溝出土遺物実測図

第１号溝出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第84図 1	椀 土師器	A [14.8] B (6.3)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P265　10% 覆土下層
2	高　坏 土師器	B (8.4)	脚部の破片。脚部は柱状を呈し，中位に僅かな膨らみを持ち，下位で開く。	脚部外面ヘラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英・スコリア 赤褐色 普通	P266　10% 覆土下層

5　遺構外出土遺物

当遺跡からは，表採及び遺構確認の際に出土したものも含めた遺構に伴わない旧石器時代から近世にかけての遺物が出土している。ここでは，これらの出土遺物のうち，縄文時代の土器片，弥生時代の土器片及び古墳時代の須恵器片の特徴的なものについて解説をし，その他の出土遺物については一覧表で記載する。

縄文時代（第85図）

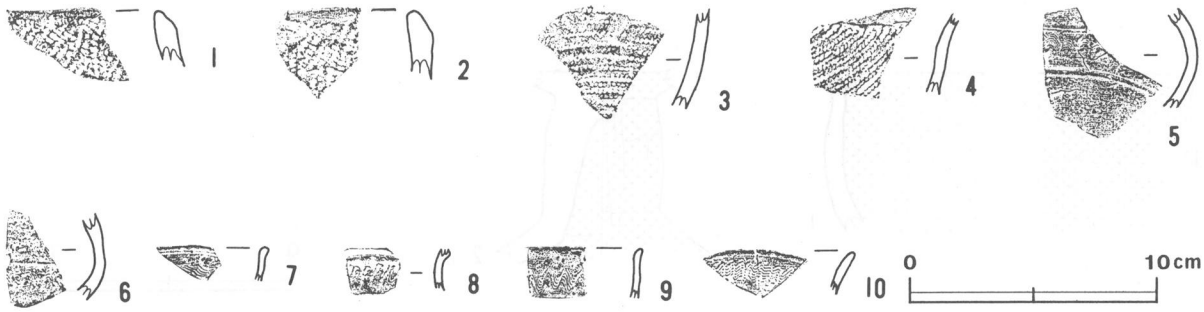
１と２は後期前葉の土器である。共に深鉢の波状口縁部の破片で，単節縄文ＲＬを縦位回転で粗く施文している。堀之内１式土器である。

弥生時代（第85図）

3と4は後期後半の土器である。3は頸部中位から頸部下位の破片で，附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。4は頸部から口縁部下半にかけての破片で，口縁部下半を無文とし，頸部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

古墳時代（第85図）

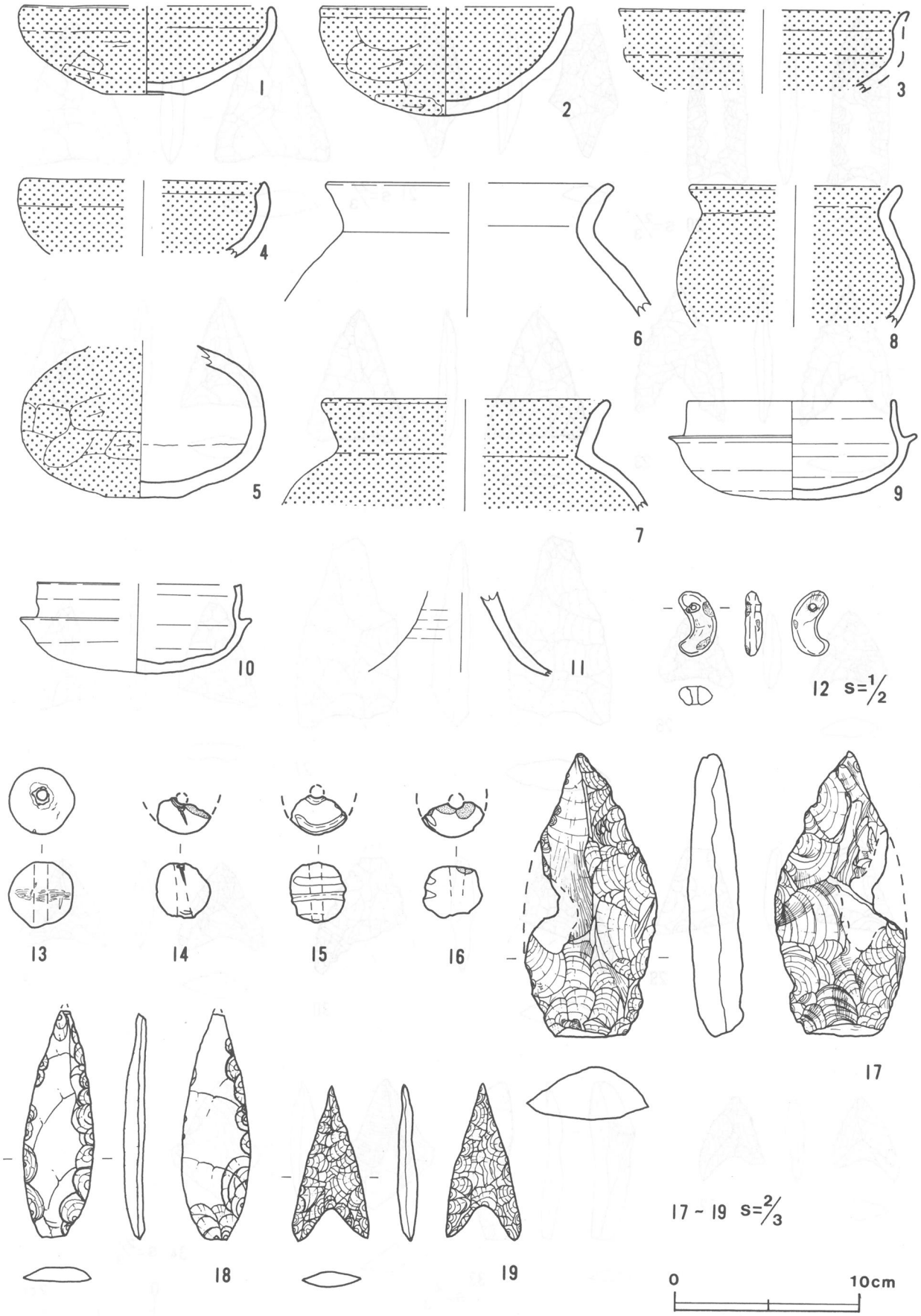
5から10は中期の須恵器である。いずれも瓿の体部及び口縁部片である。5は体部の破片で，体部上位に6条の櫛描波状文を施し，それを挟んで上方と下方に2条の弱い沈線が施されている。6も体部の破片で，中位に6条の櫛描波状文を施し，その上方には横ナデ沈線がみられ，外面には自然釉が付着している。7・8・9・10は口縁部の破片で，7には5条，8・9には6条，10には7条の櫛描波状文が施され，8の体部内・外面には自然釉が付着している。



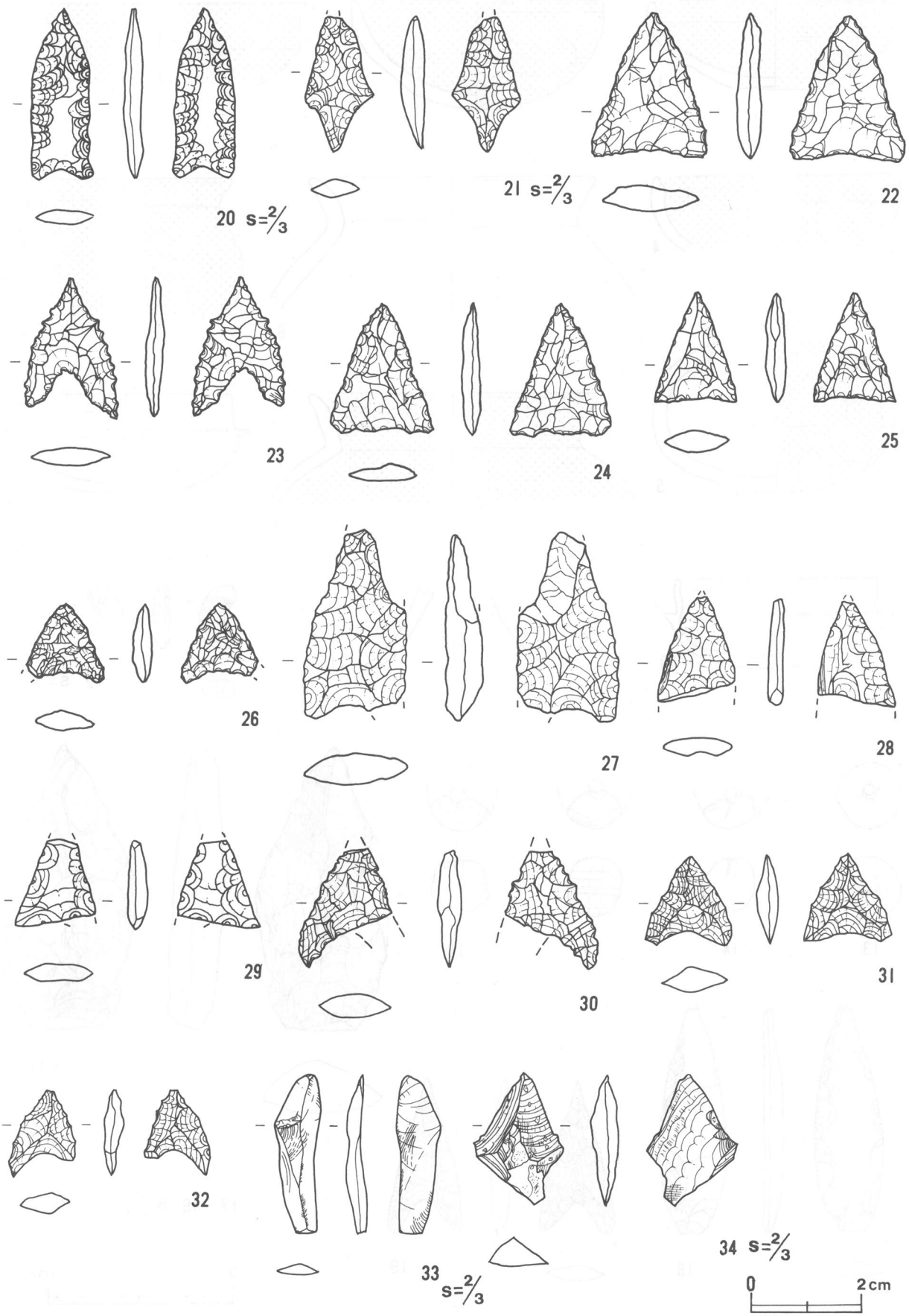
第85図　遺構外出土遺物拓影図

遺構外出土遺物観察表

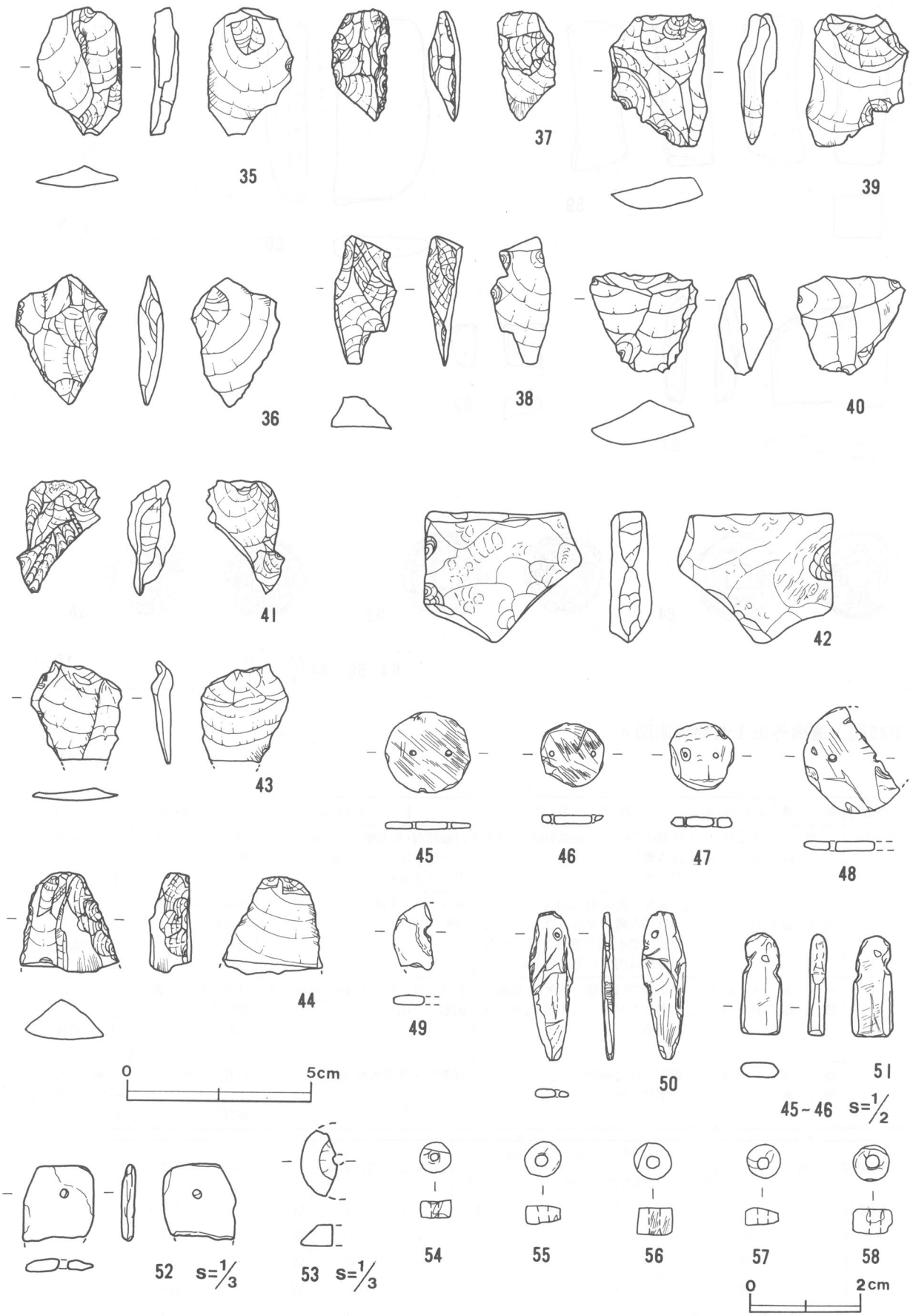
図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第86図 1	坏 土師器	A［13.6］ B　4.8	体部及び口縁部一部欠損。上げ底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。底部ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤褐色 普通	P270　80% PL19 覆土　二次焼成
2	坏 土師器	A［13.2］ B　5.9	体部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はやや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色　普通	P271　50% 覆土 二次焼成
3	坏 土師器	A［15.6］ B（4.3）	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，頸部で直上し後外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P272　15% 覆土 外面剝離
4	坏 土師器	A［13.4］ B（4.1）	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部内側に弱い稜を持ち，口縁部は内削ぎ状に内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤褐色 普通	P273　10% 覆土
5	坩 土師器	B（8.2） C　4.0	口縁部破損。平底。体部中位はソロバン玉状を呈する。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。体部外面赤彩。	砂粒・長石 黄褐色 普通	P274　70% PL19 覆土 体部外面煤付着
6	甕 土師器	A［15.5］ B（6.5）	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P267　5% 覆土
7	甕 土師器	A［15.5］ B（5.7）	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P268　5% 覆土



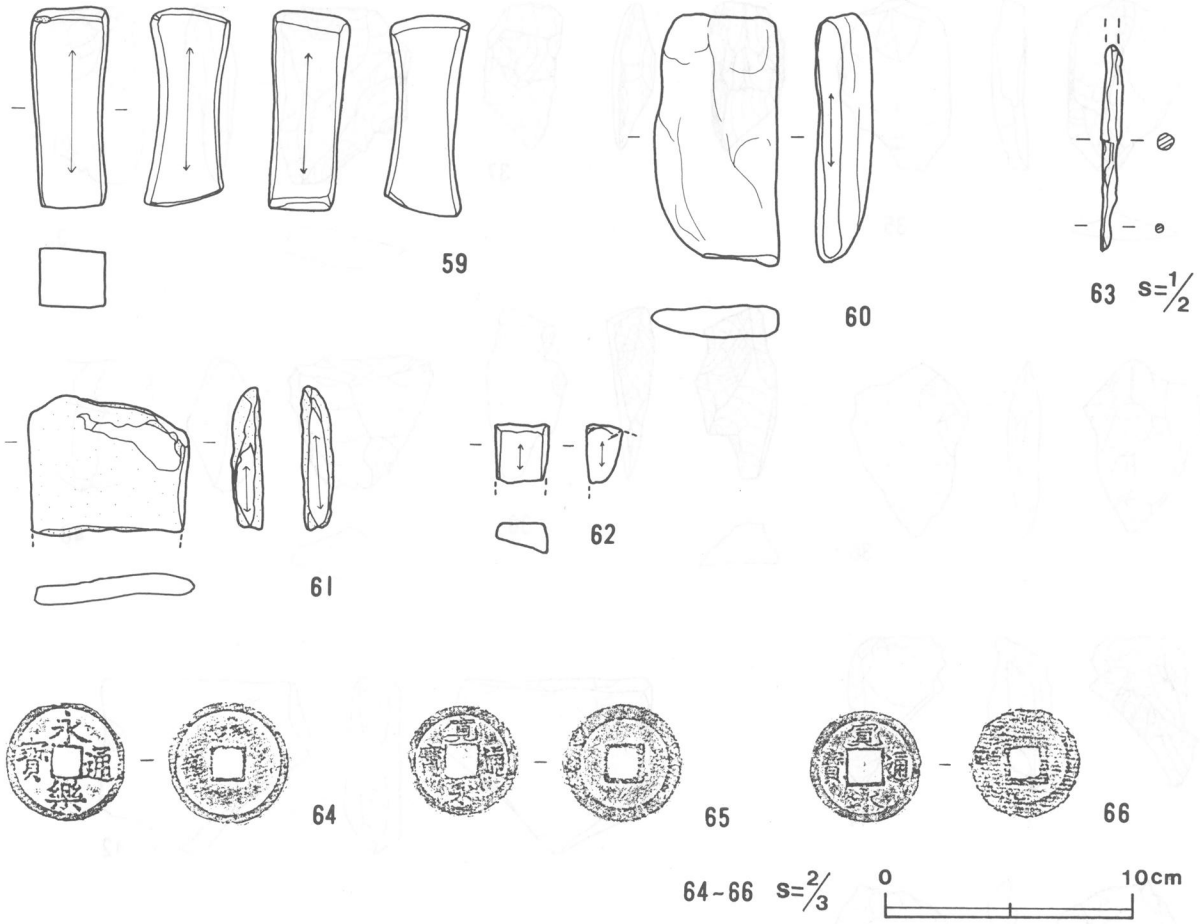
第86図　遺構外出土遺物実測図(1)



第87図　遺構外出土遺物実測図(2)



第88図　遺構外出土遺物実測図(3)



第89図　遺構外出土遺物実測図(4)

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第86図 8	甕 土師器	A [11.4] B (7.6)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P269　30% PL19 覆土
9	坏　身 須恵器	A　11.5 B　5.3	口縁部一部欠損。底部から体部にかけて内彎しながら立ち上がり，受部に至る。受け部は上方に伸び，口縁部は内彎して立ち上がる。	巻き上げ，水挽き成形。体部下半回転ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 灰黄色 良好	P275　95% PL19 SI 3 付近覆土上層
10	坏　身 須恵器	A　10.8 B　4.8	受部及び口縁部一部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり，受け部に至る。	巻き上げ，水挽き成形。体部下半回転ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 褐灰色 良好	P276　75% PL19 SI 3 付近覆土上層
11	高　坏 須恵器	E [4.2]	脚部下位は裾部へ向かって「ハ」の字状に開く。	脚部内・外面水挽き成形。	砂粒・石英・長石 灰色 良好	P296　5% SI 3 付近覆土上層

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径				
第86図12	勾　玉	2.3	1.3	0.6	0.4	2.0	100	W 6 $_{f1}$区	D P 1
13	球状土錘	3.5	3.5	—	0.8	37.2	100	W 7 $_{c5}$区	D P 2
14	球状土錘	3.0	(2.8)	—	(0.6)	(9.1)	30	W 7 $_{c5}$区	D P 4
15	球状土錘	3.2	(3.0)	—	(0.7)	(12.5)	30	W 7 $_{c5}$区	D P 5
16	不明土製品	2.7	1.3	1.2	—	3.7	100	V 5 $_{b6}$区	D P 9

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第86図17	尖頭器	7.6	(3.5)	1.5	—	(30.9)	90	黒曜石	表採	Q61　PL19
18	尖頭器	(6.1)	1.8	0.4	—	(6.0)	98	安山岩	表採	Q62　PL19
19	石鏃	4.2	1.6	0.4	—	2.9	100	チャート	表採	Q63　PL19
第87図20	石鏃	4.6	1.6	0.4	—	3.7	100	チャート	$X8_{a1}$区	Q64　PL19
21	石鏃	(3.6)	1.3	0.6	—	(2.8)	70	頁岩	$X7_{a2}$区	Q65　PL19
22	石鏃	2.6	2.1	0.4	—	1.7	100	チャート	$V6_{a3}$区	Q66　PL19
23	石鏃	2.5	1.7	0.3	—	0.9	100	チャート	表採	Q67　PL19
24	石鏃	2.4	1.8	0.3	—	1.2	100	チャート	$U6_{i4}$区	Q68　PL19
25	石鏃	1.9	1.5	0.4	—	0.8	100	チャート	表採	Q69　PL19
26	石鏃	(1.4)	1.0	0.3	—	(0.5)	95	黒曜石	表採	Q70　PL19
27	石鏃	(3.4)	1.9	0.5	—	(3.0)	80	頁岩	表採	Q71　PL19
28	石鏃	(1.9)	1.4	(0.3)	—	(0.7)	60	チャート	$V6_{b6}$区	Q72　PL19
29	石鏃	(1.6)	(1.4)	(0.4)	—	(0.7)	70	チャート	表採	Q73　PL19
30	石鏃	(2.1)	(1.6)	0.4	—	(0.9)	70	頁岩	表採	Q74　PL19
31	石鏃	1.6	1.6	0.5	—	0.7	100	頁岩	表採	Q121　PL19
32	石鏃	1.6	1.2	0.3	—	0.4	100	チャート	表採	Q122　PL19
33	石刃	(4.3)	1.1	(0.3)	—	(1.5)	90	頁岩	表採	Q75
34	剝片	3.5	2.4	0.8	—	3.7	100	頁岩	表採	Q76
第88図35	剝片	3.5	2.2	0.6	—	4.7	100	頁岩	表採	Q77
36	剝片	3.5	2.4	0.7	—	4.1	100	頁岩	表採	Q78
37	剝片	2.9	1.6	0.9	—	2.8	100	頁岩	表採	Q79
38	剝片	3.5	1.6	0.8	—	4.0	100	頁岩	表採	Q88
39	剝片	3.8	3.0	0.6	—	7.6	100	メノウ	表採	Q89
40	剝片	3.1	2.7	1.1	—	7.5	100	メノウ	$V4_{f1}$区	Q92
41	剝片	3.2	2.0	1.2	—	4.9	100	メノウ	$V4_{a2}$区	Q93
42	剝片	(4.2)	3.5	1.1	—	(19.4)	60	メノウ	$U7_{i1}$区	Q94
43	剝片	2.7	2.3	0.3	—	1.7	100	頁岩	表採	Q85
44	縦長剝片	(2.7)	(2.6)	1.1	—	(6.6)	50	頁岩	表採	Q86
45	双孔円板	(3.1)	2.9	0.2	0.15	(4.6)	99	片岩	$U4_{i4}$区	Q100　PL19
46	双孔円板	(2.3)	2.2	0.3	0.15	(2.8)	95	片岩	$U4_{i4}$区	Q101　PL19
47	双孔円板	(2.4)	(2.3)	0.3	0.1	(3.6)	80	片岩	$U4_{i4}$区	Q102　PL19
48	双孔円板	(3.9)	(3.5)	0.3	0.2	(6.7)	55	片岩	表採	Q103　PL19
49	有孔円板	(2.4)	(1.3)	0.3	0.25	(2.0)	30	片岩	表採	Q104　PL19
50	剣形石製模造品	(5.3)	1.6	0.4	0.2	(5.2)	95	片岩	表採	Q105　PL19
51	剣形石製模造品	5.5	2.1	0.9	—	19.5	100	頁岩	表採	Q106未製品 PL19
52	穂摘具	(4.1)	(3.9)	0.6	0.4	(15.4)	50	片岩	$U6_{i4}$区	Q107　PL19
53	紡錘車	(3.5)	(2.0)	1.2	(0.5)	(9.5)	40	蛇紋岩	$V5_{b6}$区	Q108
54	臼玉	0.6	0.6	0.3	0.1	0.2	100	片岩	$U6_{i4}$区	Q109
55	臼玉	0.6	0.6	0.3	0.2	0.2	100	片岩	$U6_{i4}$区	Q110
56	臼玉	0.7	0.7	0.5	0.2	0.3	100	片岩	$U6_{i4}$区	Q111
57	臼玉	0.6	0.6	0.3	0.2	0.2	100	滑石	$U6_{i4}$区	Q112
58	臼玉	0.7	0.7	0.4	0.2	0.2	100	滑石	表採	Q113
第89図59	砥石	8.0	2.3	2.3	—	128.5	100	片岩	表採	Q114
60	砥石	(10.2)	5.1	1.3	—	(117.1)	95	片岩	$U5_{i4}$区	Q115
61	砥石	(6.5)	(5.7)	(1.2)	—	(60.3)	20	頁岩	表採	Q116
62	砥石	(2.4)	(2.2)	(1.2)	—	(9.0)	20	頁岩	$W5_{a4}$区	Q117

図版番号	種　別	計測値 (cm)			重量(g)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚			
第89図63	錐	(5.5)	0.5	—	(3.0)	X 5 $_{a9}$区	M4

図版番号	種　別	初鋳年		出土地点	備　考
		時　代	年　号		
第89図64	永楽通寶	明（中国銭）	1408年	V 5 $_{a3}$区	M5
65	寛永通寶	江戸初期～明治中頃	1636年	V 5 $_{e5}$区	M6青銅
66	寛永通寶	江戸初期～明治中頃	1636年	V 5 $_{e4}$区	M7鉄

表3　中下根遺跡住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向(長軸方向)	平面形	規模(m)(長軸×短軸)	壁高(cm)	床面	内部施設						炉・竈	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
							壁溝	間仕切溝	主柱穴	貯蔵穴	ピット	入口				
1	V5$_{b6}$	N-31°-W	方形	6.13×5.73	18～30	平坦	—	—	4	2	4	—	炉1	人為	土師器(坏,甕),石製品(臼玉,砥石),石製模造品(双孔円板)	
2	V6$_{a2}$	N-65°-E	方形	3.40×3.23	45～63	ほぼ平坦	ほぼ全周	—	—	—	—	—	竈1	人為	須恵器(坏,蓋)	
3	U6$_{h4}$	N-39°-W	方形	8.94×8.66	9～18	ほぼ平坦	—	—	4	—	4	—	炉1	人為	土師器(坏,甕),須恵器(坏,坏身,甑),石製品(勾玉,臼玉,砥石),石製模造品(双孔円板),その他(ガラス玉)	SK225に切られる。
5	W5$_{a9}$	N-55°-E	方形	5.90×5.70	30～40	凹凸	—	—	4	1	4	—	炉1	人為	土師器(坏,高坏,甕,手捏土器)	
6	W6$_{d2}$	N-49°-W	方形	5.60×5.32	10～29	凹凸	—	—	4	—	6	—	炉1	人為	土師器(坏,高坏,甕)	
7	V6$_{f1}$	N-43°-W	方形	8.22×8.02	28～42	ほぼ平坦	全周	—	4	1	4	—	炉2	自然	土師器(坏,椀,高坏,壺,甕),須恵器(坏,坏身,蓋,甑),石製品(石鏃,臼玉,砥石),石製模造品(勾玉,双孔円板,剣形石製模造品),その他(ガラス玉)	
8	V6$_{e3}$	N-44°-E	長方形	6.32×5.09	4～10	ほぼ平坦	—	—	—	1	—	—	—	不明	土師器(坏,高坏,坩,小形壺,甕)	
9	V6$_{j3}$	N-50°-E	方形	6.90×6.60	43～57	ほぼ平坦	—	—	4	2	4	—	—	人為	土師器(坏,甕),石製品(石鏃,臼玉),石製模造品(剣形石製模造品)	
10	W6$_{c4}$	N-52°-W	長方形	4.94×3.72	14～25	平坦	—	—	2	1	2	—	炉1	人為	土師器(坏,高坏,甕)	
11	V6$_{i8}$	N-53°-E	長方形	7.04×5.52	16～28	凹凸	—	—	—	1	—	—	炉2	人為	土師器(坏,高坏,甕,甑),石製模造品(双孔円板)	
12	V7$_{c4}$	N-47°-E	方形	8.68×8.48	14～25	ほぼ平坦	—	1	4	1	5	—	炉2	人為	土師器(坏,高坏,坩,甕),須恵器(甑),石器(凹石)	
13	W7$_{c5}$	N-50°-W	方形	7.80×7.60	31～44	平坦	全周	—	4	2	5	—	炉1	人為	土師器(坏,高坏,坩,甕),石製品(砥石),石製模造品(双孔円板),鉄製品(鉄鏃),土製品(土玉)	焼失家屋
15	V8$_{j1}$	N-38°-E	長方形	4.25×3.27	5～12	平坦	—	—	—	—	—	—	—	人為	土師器(坏,高坏,甕,甑)	
16	V8$_{d5}$	N-42°-W	方形	6.78×6.48	8～22	平坦	—	—	4	2	5	—	—	自然	土師器(坏,高坏,坩,甕,鉢)	
20	W8$_{i3}$	N-45°-W	方形	4.49×4.16	19～40	平坦	全周	6	4	1	6	2	炉1	人為	土師器(坏,高坏,甕)	
21	W8$_{f4}$	N-36°-E	方形	5.44×5.29	25～40	ほぼ平坦	全周	5	4	1	6	2	炉2	人為	土師器(坏,椀,鉢,高坏,甕,甑),土製品(土玉),その他(不明土製品)	焼失家屋
23	V8$_{g6}$	(N-38°-E)	[長方形]	3.93×[3.26]	34～62	ほぼ平坦	—	—	4	1	4	—	—	自然	土師器(坩)	
25	V5$_{j5}$	(N-28°-E)	[長方形]	3.24×2.99	22～53	ほぼ平坦	—	—	—	—	—	—	竈1	自然	土師器(甕)	
27	W5$_{d9}$	N-50°-W	方形	6.92×6.62	45～66	ほぼ平坦	一部	6	4	1	5	1	炉1	自然	土師器(坏,高坏,坩,甕,甑),その他(不明石製品)	焼失家屋
28	W6$_{e1}$	(N-63°-W)	[隅丸方形]	4.31×[2.88]	21～30	平坦	—	—	—	1	—	—	炉2	自然	土師器(坏,高坏)	焼失家屋
29	W6$_{f3}$	(N-38°-E)	[隅丸方形]	[2.88]×[2.61]	9～32	平坦	—	—	—	1	1	—	—	自然	土師器(坩,甕,甑),その他(不明鉄製品)	
30	X6$_{a8}$	N-47°-E	方形	6.10×5.92	38～65	ほぼ平坦	ほぼ全周	2	5	1	6	—	炉1	人為	土師器(坏,高坏,坩,壺,甕),須恵器(坏身),石製模造品(双孔円板),その他(不明鉄製品)	
31	V5$_{d3}$	(N-40°-E)	[隅丸方形]	4.41×[2.71]	34～44	ほぼ平坦	—	—	—	—	—	—	—	人為	土師器(坏,椀,高坏,坩),石製品(砥石)	
32	U5$_{h5}$	N-46°-W	方形	5.65×5.61	26～44	ほぼ平坦	全周	—	4	1	5	1	炉2	人為	土師器(坏,高坏)	
33	U5$_{f4}$	N-29°-W	方形	6.46×6.36	17～46	平坦	—	—	4	1	5	1	炉2	人為	土師器(坏,高坏,椀,坩,鉢形土器)	
34	U5$_{a3}$	N-30°-W	方形	7.58×7.30	13～25	平坦	—	—	4	1	6	1	炉1	人為	土師器(坏,高坏,甑)	
35	T6$_{f6}$	N-36°-W	方形	6.64×6.58	18～33	平坦	—	—	4	1	5	1	炉1	人為	土師器(坏,坩),石器(磨石),その他(凹石)	

第4節　まとめ

当遺跡で確認した遺構は，竪穴住居跡27軒，竪穴遺構6基，土坑158基，陥し穴9基及び溝1条である。ここでは，時期別に各時代の主な遺構と遺物についての概要を述べ，まとめとする。

旧石器時代

当遺跡からは，黒曜石を石材とする樋状剝離のみられる有樋尖頭器，安山岩を石材とする槍先形尖頭器及び頁岩を石材とする石刃が表面採集されている。その他，二次加工のみられる剝片が表土中や後世の遺構の覆土中から出土している。出土石器の石材は，黒曜石，安山岩，頁岩及びメノウで，いずれも本県の主要な石器石材で，在地石材の使用が推測されるところであるが，一方で，遠隔地石材の使用も少なからず考えられ，具体的分析に基づく石材の特定産地の検討が求められる。表面採集されている旧石器時代の遺物は，今回の調査区が平坦地でローム層の流失が考えられないことから，耕作等による旧石器時代文化層の撹乱等で表面採集されたものと考えられるが，生活面をもつ文化層は確認されていない。剝片の一部は縄文時代以降の所産である可能性もある。

縄文時代

後期前葉の縄文土器の深鉢口縁部片が僅かに2点表面採集されている。遺構としては，9基の陥し穴が，調査区の北東部を中心に東西に散在して構築されている。これらは，小野川から深く入り込む谷津の低地及び湿地等に集まる動物の捕殺及び捕獲等を目的としたものと考えられる。石器では，石鏃が縄文時代に属する可能性が高い。

弥生時代

後期後半の弥生土器片2点が表採で出土している。遺構は確認していない。

古墳時代

当遺跡の中心となる時期で，竪穴住居跡，竪穴遺構及び土坑を確認した。当該期に属する竪穴住居跡25軒の時期は，5世紀中葉，後葉の2期に分けることができる。

第1期（5世紀中葉）

第1，5，6，8，9～11，15，16，20，21，23，27～29，31～35号住居跡の時期で，当遺跡内における主たる住居跡群である。当遺跡におけるこの時期の住居跡は，付設されている施設に類似するものがみられるが，規模と形態には企画性がみられない。土器の組成は，土師器の坏，椀，高坏，坩，甕及び甑である。このうち，坏と椀には平底と丸底がみられ，坏の体部外面及び内面にヘラナデあるいはヘラ削り後ヘラ磨きが施され，体部と口縁部の境に弱い稜がみられる。坏，椀の赤彩されている個体数は3分の1以上を数える。第30号住居跡出土の坏は平底と丸底である。高坏の脚部はラッパ状あるいは下方に大きく開くか，柱状を呈するがややエンタシス状の膨らみを持っている。坏部外面下位に稜がみられ，整形はヘラナデかヘラ磨きが施され，赤彩率が高い。第28号住居跡出土の高坏は脚部が柱状を呈し，その中位にエンタシス状の膨らみを持ち，下方に大きく開き，端部が反り，坏部下位に弱い稜がみられる。坩は体部が潰れた球形状のものとソロバン玉状のものがみ

られる。整形は内・外面にヘラナデが施され，出土する個体数は少ないが赤彩率は高い。甕は体部が球形状を呈し，口縁部は「く」の字状に外反するものが多く，口縁部の中位に段を有するものもみられる。整形は内・外面ヘラナデである。甑は底部が単孔式で，口縁部がほぼ垂直に立ち上がるものと折り返しのある複合口縁のものがある。整形はヘラナデである。第20，21号住居跡は，他の住居跡より時期的に先行する可能性がある。当該期は，陶邑編年のＴＫ216に併行する時期である。

第２期（５世紀後葉）

第３，７，12，13，30号住居跡の時期である。当遺跡におけるこの時期の住居跡は，一辺が６～８ｍの大規模のものが多い。付設されている施設には，壁溝や間仕切り溝を付設するものと付設しないものなどのばらつきがみられる。土器の組成は，土師器の坏，椀，高坏，坩及び甕，須恵器の坏，坏蓋及び甑である。坏には須恵器坏蓋を模倣したものがみられるようになり，椀と同様に赤彩率が高い。坩は丁寧なヘラ磨きが施され，赤彩されている。甕は体部の球形が顕著で，底部突出のものが減り平底となる。この時期になると須恵器を伴う住居跡が多くなり，第３号住居跡出土の第10図11の須恵器坏身は，陶邑編年のＴＫ208からＴＫ23に併行する時期のものである。第７号住居跡から出土している須恵器甑の時期も同時期の範囲で考えられる。22の須恵器壺は混入したもので，横ナデ後体部に磨り消しが施され陶邑編年のＴＫ216からＴＫ73に併行する時期である。

平安時代

第２，25号住居跡及び第67号土坑の時期で，２期に分けることができる。

第１期（８世紀後半）

第２号住居跡の時期である。本跡の竈は北東壁に掘り込まれ，竈焚き口付近から須恵器の坏と坏蓋が出土している。

第２期（９世紀前半）

第25号住居跡，第67号土坑の時期である。第25号住居跡の南コーナー部に竈が確認され，その焚き口部から常総型甕が意図的な意味を持たせるように逆位の状態で出土している。これは，竈の規模と出土地点等から支脚への転用遺物の可能性もある一方，南竈を付設する特異な住居跡であることから，住居跡自体が火の神に深く関連していたとも考えられる。第67号土坑からも同時期の常総型甕が出土している。この土坑は掘り込みが浅く，２段掘りの様相を呈していることから小竪穴遺構として取り扱うことも可能である。

参考文献

○　樫村宣行・浅井哲也　「常陸地域の鬼高式土器」『考古学ジャーナル№342』1992年

○　樫村宣行「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート２号』茨城県教育財団　1993年７月

○　浅井哲也「茨城県内における奈良・平安時代の土器（II）」『研究ノート２号』茨城県教育財団　1993年７月

○　茨城県教育財団「牛久市北部特定区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ｉ）ヤツノ上遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第81集』1993年３月

○　茨城県教育財団「牛久市北部特定区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（II）中久喜遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第86集』1993年９月

第４章　西ノ原遺跡

第１節　遺跡の概要

西ノ原遺跡は，牛久市の北北東部，小野川支流の乙戸川右岸から南西に入り込む谷津頭に面し，標高24～25mの洪積台地である稲敷台地上に立地する，旧石器時代から古墳時代にわたる複合遺跡である。調査前の現況は，山林及び畑地で，今回の調査区域は南西に約121m，南東に約112m，面積13,227m²である。

今回の調査によって確認した遺構は，旧石器時代の石器集中地点５か所，縄文時代の陥し穴４基，古墳時代の竪穴住居跡21軒，古墳時代の竪穴遺構１基，その他に土坑41基，溝１条である。

旧石器時代の石器集中地点は，調査区の中央部よりやや北側に散在しており，石材は黒曜石を主として，他に頁岩，安山岩が使用されている。

縄文時代の遺構としては，４基の陥し穴を確認した。

古墳時代の遺構は，調査区中央から南東にかけて多くみられる。住居跡の形状はおおよそ，方形ないしは長方形のものである。古墳時代中期の竪穴住居跡は，調査区中央部付近から16軒を散在して確認した。後期の竪穴住居跡は，調査区から５軒確認し，一部が調査エリア外に延びているため完掘できなかった第１号住居跡を除いて，第２・４・６・９号竪穴住居跡は，いずれも北西壁に竈を付設したものである。竪穴住居跡以外では，古墳時代中期のものと思われる竪穴遺構１基を調査区中央部から確認した。住居跡とは異なるスロープ状の出入口施設とピットを持ち，床面の造り等から片流れ屋根の掘立小屋的上屋構造が推測される。その他，遺跡の中央を東西に走る溝１条を確認した。溝は，第17号，第18号竪穴住居跡との切り合いから古墳時代中期以降のものと思われるが，具体的な時期や性格については不明である。

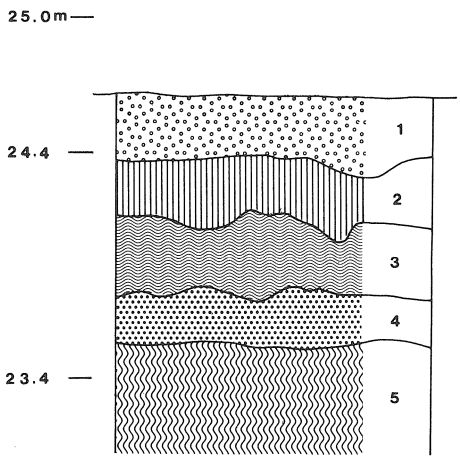
遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に46箱ほど出土している。旧石器時代の遺物は，石器集中地点からナイフ形石器，スクレイパー，縦長剝片が出土している。縄文時代の遺物は，早・中期の縄文土器や，有舌尖頭器，石鏃が遺構確認面や覆土中から出土している。古墳時代の遺物は，土師器の坏，高坏，甕，甑等が出土し，その中には赤彩されたものも多くみられる。その他，竈内からの支脚，土製品の土玉，石製品の紡錘車，砥石，臼玉，石製模造品の剣，有孔円板，勾玉も出土している。また，第16号住居跡の覆土中からはガラス玉も出土している。

第２節　基本層序

西ノ原遺跡においては，調査区北東部Ｖ4_{i7}区にテストピットを設定し，表土除去後，第90図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第１層は，褐色のロームブロックを少量含み，厚さは25～35cmである。第２層は，褐色のハードローム層で，厚さは19～30cmである。第３層から第５層は，褐色のハードローム層で，厚さは10～40cmあり，いずれもロームブロックを中量含む。

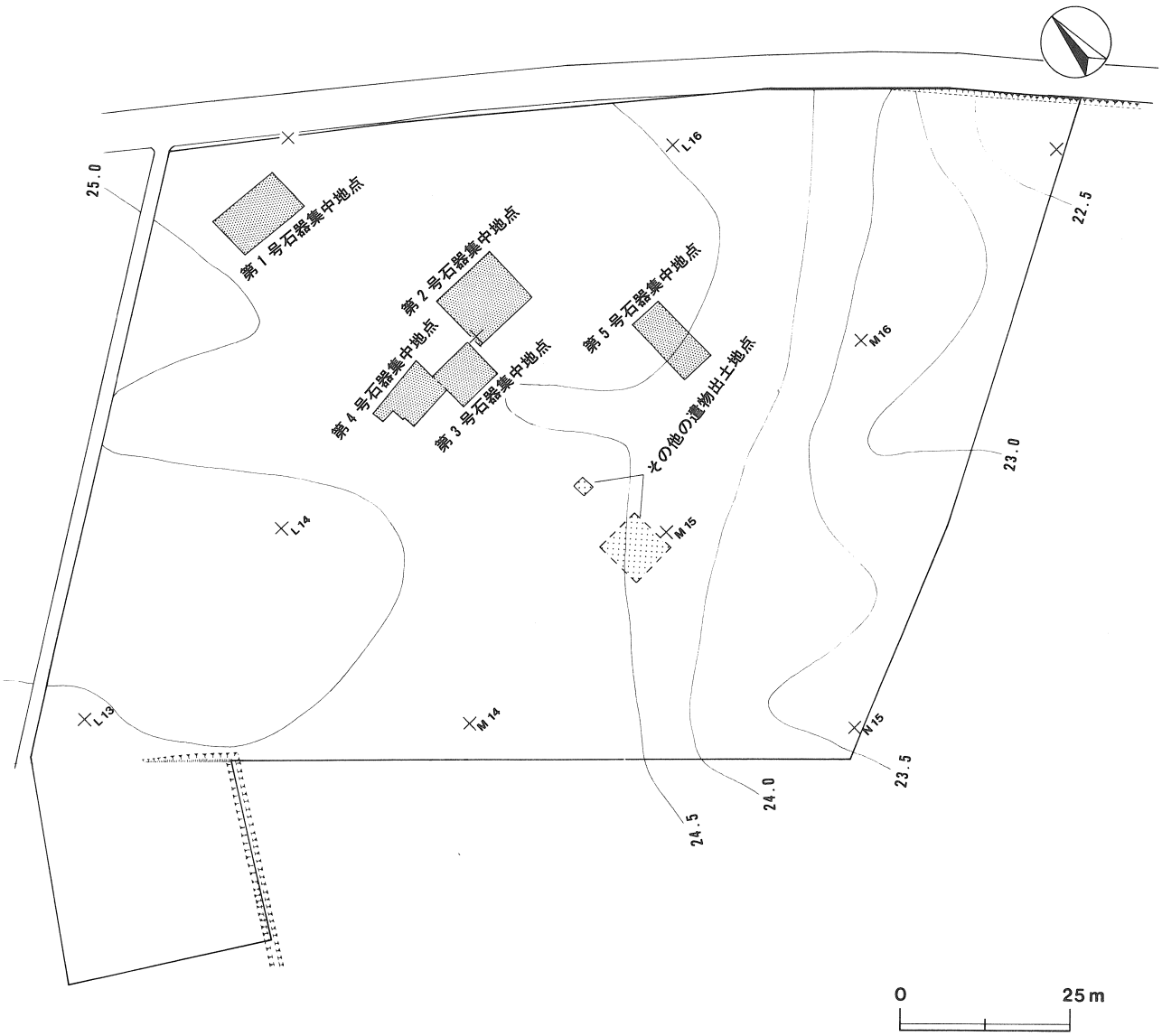
土壌鉱物分析をおこなった結果，第２層の中位でバ



第90図　西ノ原遺跡基本土層図

ブル型火山ガラスの含有量が極大値を示し，上位では含有量を減じ，第１層では，更に減じている。第２層の中位から下位にかけては殆ど含有量が認められず，このことから，層位とバブル型火山ガラスの特徴で第２層上位から第１層にかけてが姶良Tn火山灰の降灰層準に相当するものと考えられる。このことは，第１，２層が武蔵野台地の立川ローム層黒色帯に比定されるものと言える。なお，今回の分析結果では，ローム層上位の指標テフラである立川ローム最上部ガラス質火山灰ＵＧが確認されず，第１層の上位にあるものと考えられるが，削剝により確認されていない。

第３節　遺構と遺物



第91図　西ノ原遺跡旧石器集中地点配置図

1　旧石器時代の遺構と遺物

当遺跡における旧石器時代の調査は，乙戸川の谷津頭に面する傾斜地を除く調査区のほぼ全面に12.5%の試掘を実施し,遺物が出土した地点を中心に約373.5m²について本調査を実施し，本調査区域については第4層まで発掘した。遺物を確認した地点に隣接する平坦地に遺物出土層位を確認するため，ローム層上面から灰白色の粘土層上面まで試掘坑を設定した。確認した土層堆積状況は前節で述べたとおりである。なお，詳細については,付章西ノ原遺跡土壌の自然科学分析を参照されたい。

調査の結果，文化層中から石器等の遺物が374点出土している。これらの遺物は，ほとんどが5か所（第1～5号集中地点）から集中して出土しており，いずれも調査区の北側中央寄りの標高24m程の平坦な台地上と緩斜面に位置する。

（1）　石器集中地点

第1号石器集中地点

位置　調査区の北部，$K14_{b8}$区。出土遺物の平面分布については第92図で示したとおりである。その中で，特に出土遺物の集中する地点は中央部である。

規模　平面形約東西11m，南北7mと広範囲で確認したが，中には疎密の差がみられ，出土遺物は$K14_{b8}$区を中心に確認している。

確認土層　土層1から4の範囲で確認した。土層1のローム上層から土層3のハードローム下層にかけ遺物出土を確認した。土層2の褐色土上層及び下層で石器が集中的に確認している。文化層の層準は，この前後の範囲に求めることができる。なお，土層1，2からは極めて微量ながら粘土ブロックの混入が確認されているが，調査前の立ち木の根の痕による混入物と考えられる。

遺物　本石器集中地点からの出土遺物総数は109点である。内訳はナイフ形石器2点，ナイフ状の石器1点，ピエス・エスキーユ2点，石核2点，剥片41点，砕片60点，礫1点の計109点である。

1と2はナイフ形石器である。1は$K14_{a9}$区から出土したもので完整品と思われ，安山岩の石刃を素材として，側面部には急角度の剥離面がみられ，バルブは確認できないが，リングの様子から中央部にあったものと考えられる。石器の最大厚，最大幅共に中央部よりやや上位にみられる。

2は$K14_{b8}$区から出土したもので完形品である。ホルンフエルスを石材としており，一側辺に急角度の剥離と，その片側には縦方向の稜が認められる。末端部には基部調整の剥離痕がみられ，最大厚は末端部やや上位に，最大幅は中央部よりやや下位にみられる。

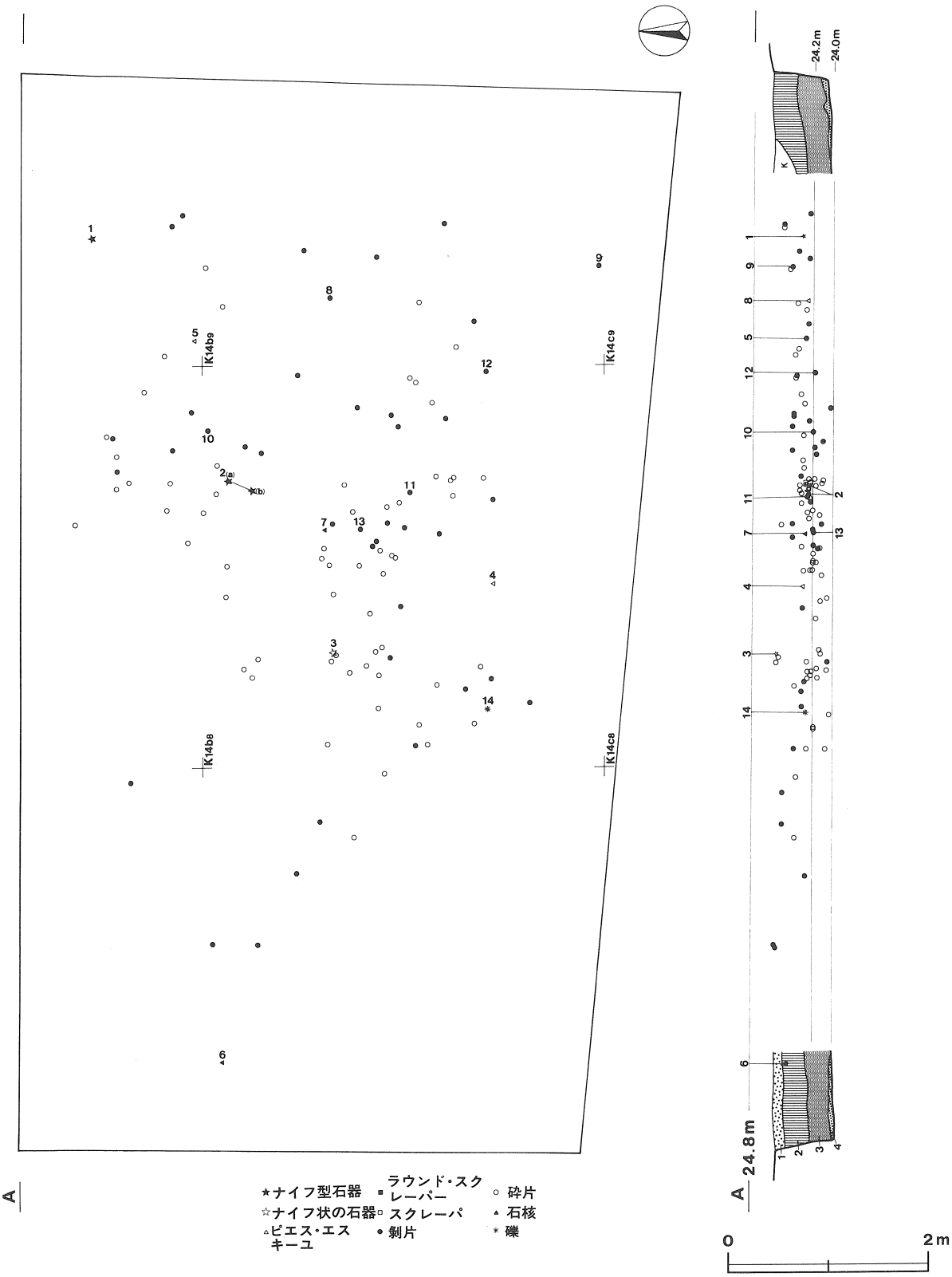
3はナイフ状の石器で，$K14_{b8}$区から出土したものである。黒曜石の石刃を素材としている。中央部から先端部は欠損している。一側面は急角度の剥離面が残り，片側側面部中央には縦長の稜が走る。基部の裏面には剥離調整痕が残る。

4はピエス・エスキーユである。$K14_{b8}$区から出土したもので，石材は黒曜石である。全体が上下両端からの剥離面によって覆われている。

5のピエス・エスキーユは$K14_{a9}$区から出土したもので，黒曜石の剥片を素材としている。全体が上下両端からの剥離面によって覆われ，上端の一部に刃潰し加工が観察される。

6は石核である。$K14_{b7}$区から出土したもので，石材は安山岩である。立方体のような面を持ち，上下両端及び両側面には多方向からの剥離面がみられ，上面の一部には自然面が残る。

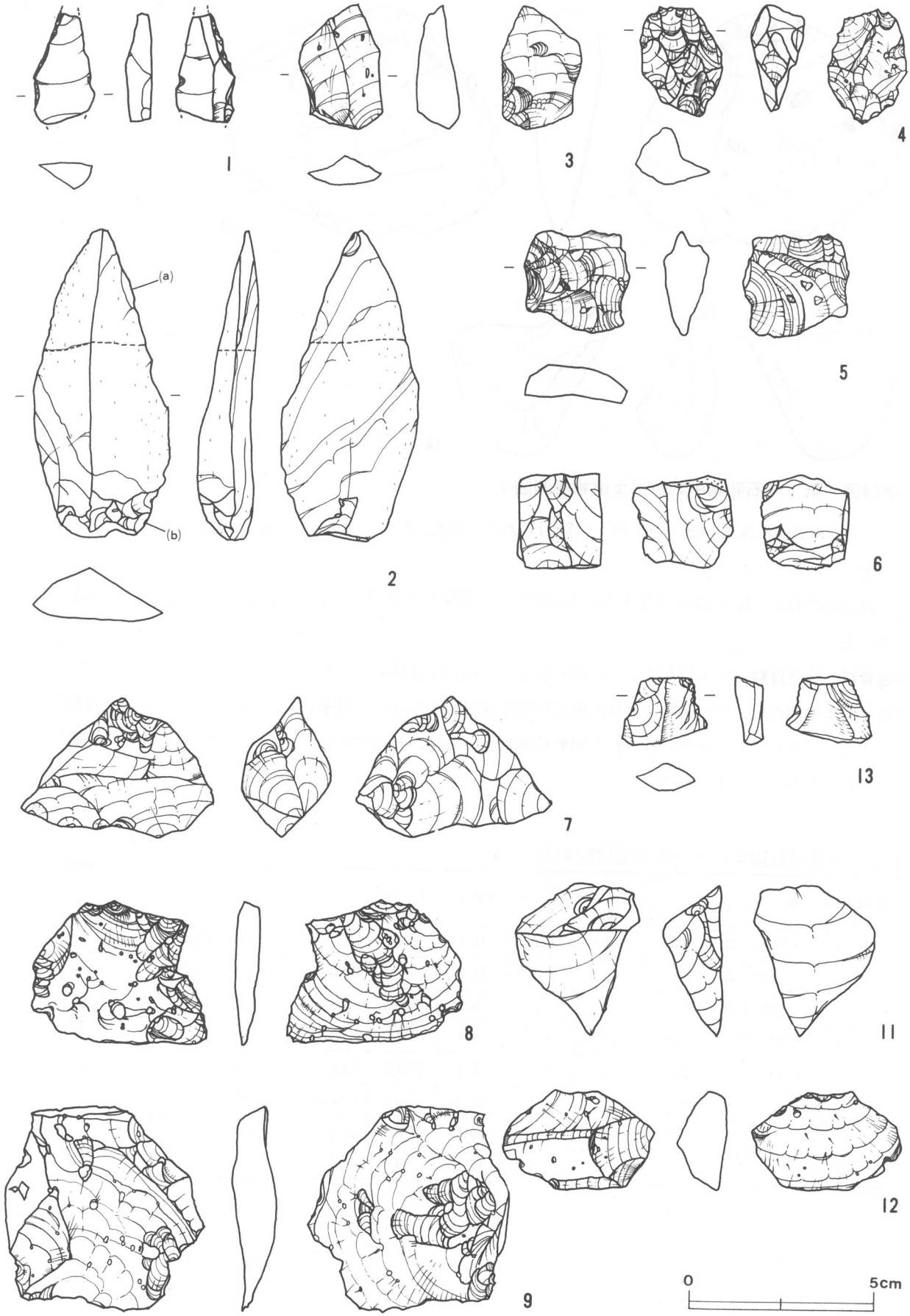
7の石核は$K14_{b8}$区から出土したもので，石材は黒曜石である。上下両端及び両側に大きな打点が残り，細



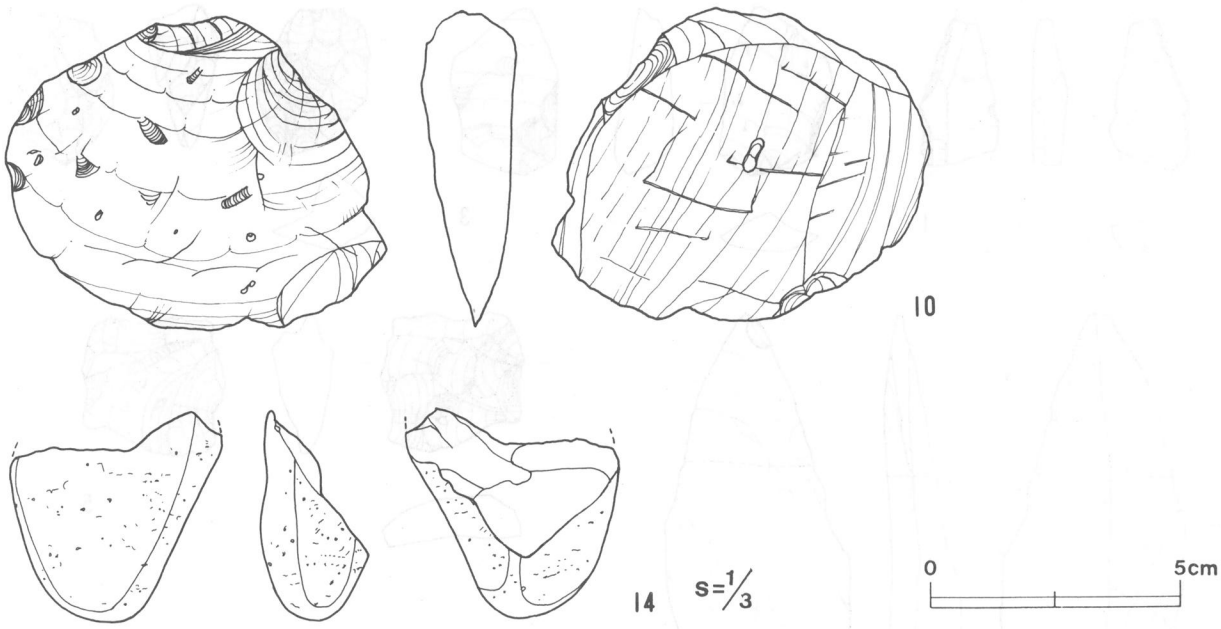
第92図　第1号石器集中地点遺物出土状況図

かな貝殻状剥片を剥離した際の剥離面が認められる。

8～13は剥片である。13の石材がチャートである以外は，いずれも石材は黒曜石で，複数の方向に加撃し，剥片生産をしている。10はK14b8区から出土したもので，当遺跡内の集中地点から出土した剥片としては最大



第93図　第１号石器集中地点出土遺物実測図(1)



第94図　第1号石器集中地点出土遺物実測図(2)

のもので，長さ8.5cm，幅6.5cm，重さは71.4gある。最初の打点で剝離した後，側縁部に細かな調整を4か所施している。

14は礫である。K14$_{b8}$区から出土したものである。本集中地点でただ1点出土したもので，熱を受け赤化している。

接合資料　接合資料は1例存在する。平面分布図の2(a)と，2(b)の縦長剝片どうしの接合例にみられる。

所見　本集中地点は，出土遺物の石材の殆どが黒曜石で占められる。黒曜石の出土点数に占める製品の割合の低さと，出土している剝片にみられる頻繁な剝離面からは，剝片生産後，剝片を素材とした利器等の製作が行われていたことが窺われる。

表4　第1号石器集中地点出土遺物観察表

図版番号	種　別	計測値 (cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石　質	出土地点	備　考
第93図 1	ナイフ形石器	3.0	1.6	0.7	41.3	安山岩	K14$_{a9}$区	Q76　PL29
2	ナイフ形石器	8.2	3.6	1.4	31.1	ホルンフエルス	K14$_{b8}$区	Q77　PL29
3	ナイフ状の石器	3.3	2.2	1.0	6.0	黒曜石	K14$_{b8}$区	Q78　PL29
4	ピエス・エスキーユ	3.1	2.1	1.5	1.4	黒曜石	K14$_{b8}$区	Q79
5	ピエス・エスキーユ	2.7	2.7	0.9	6.4	黒曜石	K14$_{a9}$区	Q80
6	石　核	2.3	2.2	2.2	21.2	安山岩	K14$_{b7}$区	Q81
7	石　核	5.2	3.7	2.4	33.9	黒曜石	K14$_{b8}$区	Q82
8	剝　片	4.7	3.8	0.8	11.1	黒曜石	K14$_{b9}$区	Q83

図版番号	種　別	計測値 (cm)			重量(g)	石　質	出土地点	備　考
		長さ	幅	厚さ				
第93図 9	剝　片	5.5	5.3	1.2	26.5	黒曜石	K14b9区	Q84
第94図 10	剝　片	8.5	6.5	1.6	71.4	黒曜石	K14b8区	Q85
第93図 11	剝　片	4.1	2.1	1.1	10.1	黒曜石	K14b8区	Q86
12	剝　片	4.5	3.5	1.6	15.0	黒曜石	K14b8区	Q87
13	剝　片	2.3	1.7	0.8	2.6	チャート	K14b8区	Q88
第94図 14	礫	8.6	8.4	3.8	211.9	安山岩	K14b8区	Q89

表5　第1号石器集中地点石器組成表

種　別	黒曜石	安山岩	頁　岩	流紋岩	チャート	ホルンフエルス	計
ナイフ形石器	—	1	—	—	—	1	2
ナイフ状の石器	1	—	—	—	—	—	1
尖頭器	—	—	—	—	—	—	0
ピエス・エスキーユ	2	—	—	—	—	—	2
二次加工のある剝片	—	—	—	—	—	—	0
剝　片	40	—	—	—	1	—	41
石　核	1	1	—	—	—	—	2
砕　片	60	—	—	—	—	—	60
礫　器	—	—	—	—	—	—	0
礫	—	1	—	—	—	—	1
破砕礫	—	—	—	—	—	—	0
計	104	3	0	0	1	1	109

表6　第1号石器集中地点接合資料一覧表

図版番号	石　材	内　訳	内　容	数　量
第93図2	ホルンフェルス	ナイフ形石器　2	2(a) ナイフ形石器→2(b) ナイフ形石器	2

第2号石器集中地点（第95図）

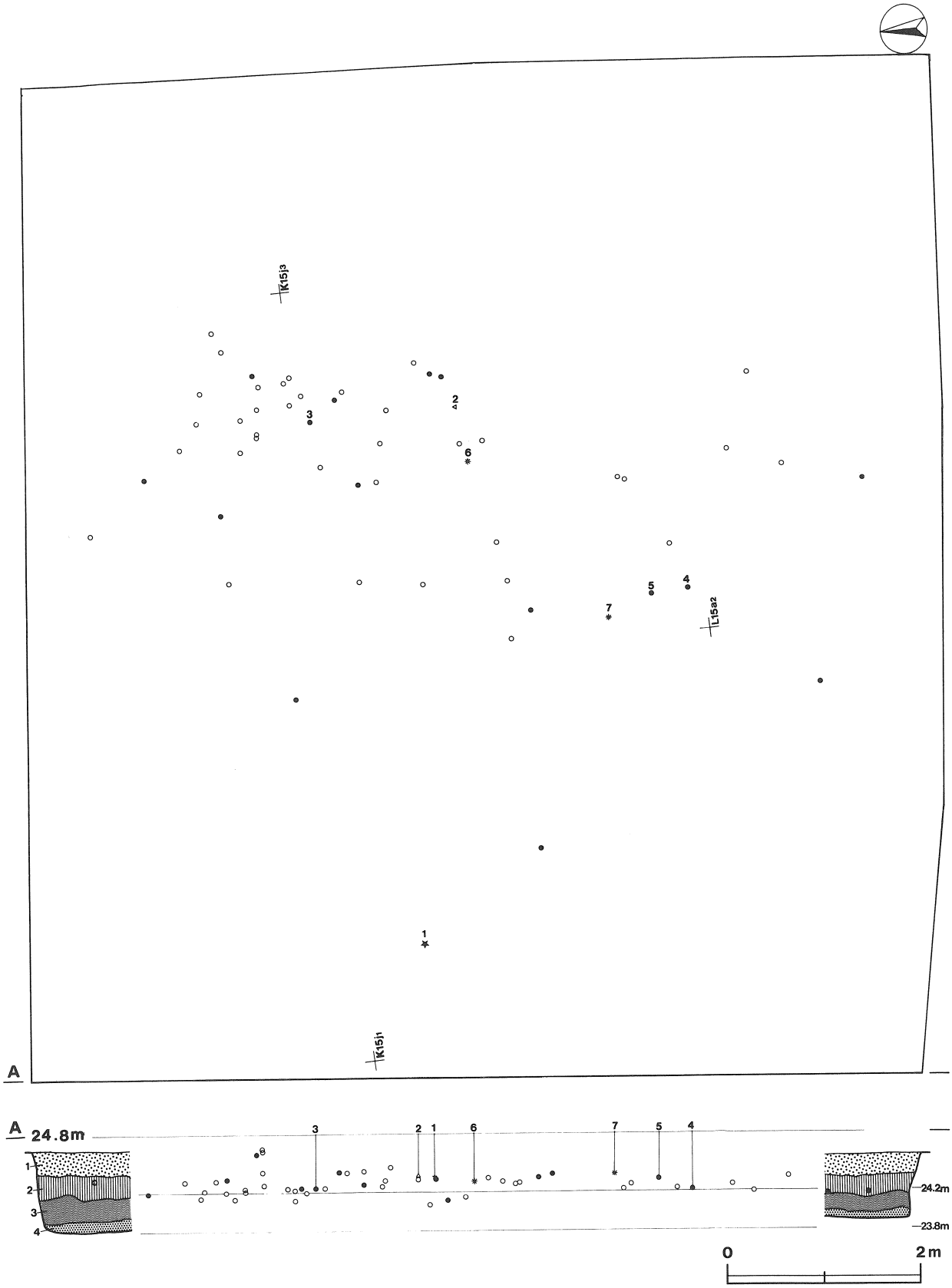
位置　調査区の北部，K15j1区。出土遺物の平面分布については第95図で示したとおりである。その中で，特に，出土遺物が集中する地点は北部である。

規模　平面形約東西10.5m，南北9mと広範囲で確認したが，分布密度の差はあまりみられない。

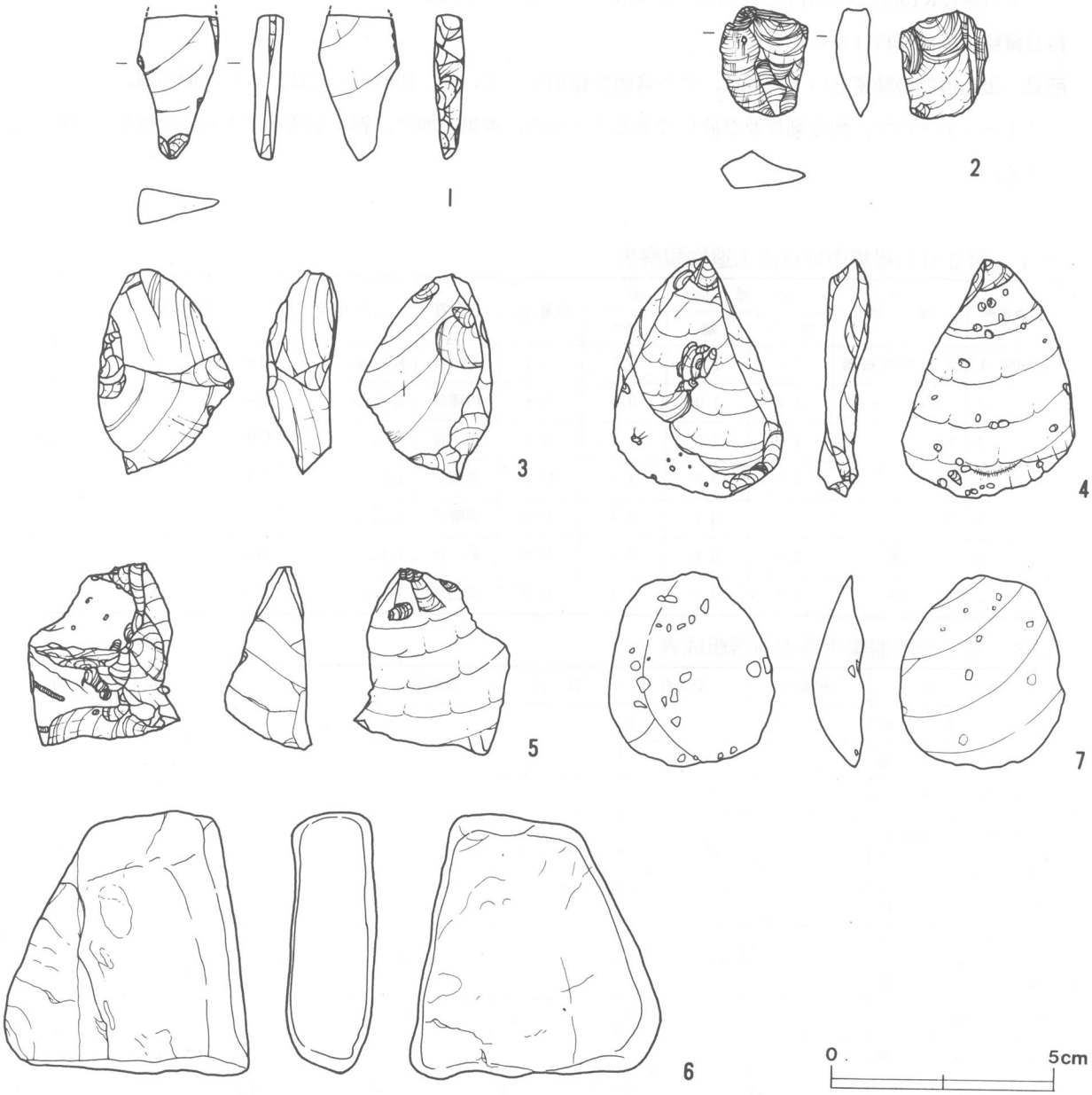
確認土層　土層1から4の範囲で確認した。土層1のローム上層から土層4のハードローム上層にかけて出土遺物を確認した。特に，土層2の上面からは石器が集中的に出土していることから，文化層の層準は，この前後に求めることができる。土層1，2からは極微量ながら砂の混入が確認されている。また，調査区中央の土層3には極微量ながら焼土粒子の混入がみられたが出土量が少なく，旧石器時代の文化層との関係は把握できなかった。

遺物　本石器集中地点からの出土遺物総数は56点である。内訳はナイフ形石器1点，ピエス・エスキーユ1点，剝片16点，砕片36点，礫2点の計56点である。

1はナイフ形石器である。K15j1区から出土したもので完成品と思われ，石材は安山岩である。中央部から先端部の欠損部分は出土していない。石刃を素材とし，山形の打面を持ち下端には石核時の平坦な部分が残



第95図　第２号石器集中地点遺物出土状況図



第96図　第２号石器集中地点出土遺物実測図

るが，バルブは確認できない。石器の最大厚，最大幅ともに中央部付近にあるものと考えられる。

２はピエス・エスキーユである。K15$_{j2}$区から出土したもので，黒曜石の剝片を素材としている。

３～５は剝片である。３はK15$_{j2}$区から出土したもので，石材は頁岩である。側縁部中央上面に最初の打点が見られ，急角度で剝離し，その後，最初の打点とは反対側の側縁部で剝片を取り出したもので，自然面を僅かに残している。

４はK15$_{j2}$区から出土したもので，石材は黒曜石である。側縁部中央上面に最初の打点が残り，縦方向の両側には稜線が認められる。中央部には２度にわたる剝片取り出しの大きな剝離痕がみられる。

５はK15$_{j2}$区から出土したもので，石材は黒曜石である。片側には剝離面が残り，反対側には剝片剝離痕がみられる。自然面の一部残る。

６～７は礫である。６はK15$_{j2}$区から出土したもので，剝片を剝離し，不要になった礫片の一部が他の目的に転用され，熱を受け赤化したものと考えられる。

7の礫はK15$_{j2}$区から出土したもので，端部に打点がみられる。

接合資料　接合資料はみられない。

所見　出土遺物の疎密という点では，やや貧弱な様相をしている。利器としては，ナイフ形石器，ピエス・エスキーユの2点で，他は剥片及び砕片であることから，本集中地は，剥片生産を基本とした性格の様相が窺える。

表7　第2号石器集中地点出土遺物観察表

図版番号	種　別	計測値 (cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石質	出土地点	備考
第96図 1	ナイフ形石器	3.2	1.8	0.7	3.1	安山岩	K15$_{j1}$区	Q90　L29
2	ピエス・エスキーユ	2.4	1.9	0.6	2.8	黒曜石	K15$_{j2}$区	Q91
3	剥片	4.6	3.0	1.4	31.1	頁岩	K15$_{j2}$区	Q92
4	剥片	5.3	3.8	1.1	17.7	黒曜石	K15$_{j2}$区	Q93
5	剥片	5.2	3.7	2.4	33.9	黒曜石	K15$_{j2}$区	Q94
6	礫	5.8	5.4	1.9	76.8	砂岩	K15$_{j2}$区	Q95
7	礫	4.3	3.8	1.1	20.2	安山岩	K15$_{j2}$区	Q96

表8　第2号石器集中地点石器組成表

種　別	黒曜石	安山岩	頁岩	流紋岩	砂岩	ホルンフエルス	計
ナイフ形石器	—	1	—	—	—	—	1
尖頭器	—	—	—	—	—	—	0
ピエス・エスキーユ	1	—	—	—	—	—	1
二次加工のある剥片	—	—	—	—	—	—	0
剥片	16	—	—	—	—	—	16
石核	—	—	—	—	—	—	0
砕片	36	—	—	—	—	—	36
礫器	—	—	—	—	—	—	0
礫	—	1	—	—	1	—	2
破砕礫	—	—	—	—	—	—	0
計	53	2	0	0	1	0	56

第3号石器集中地点（第97図）

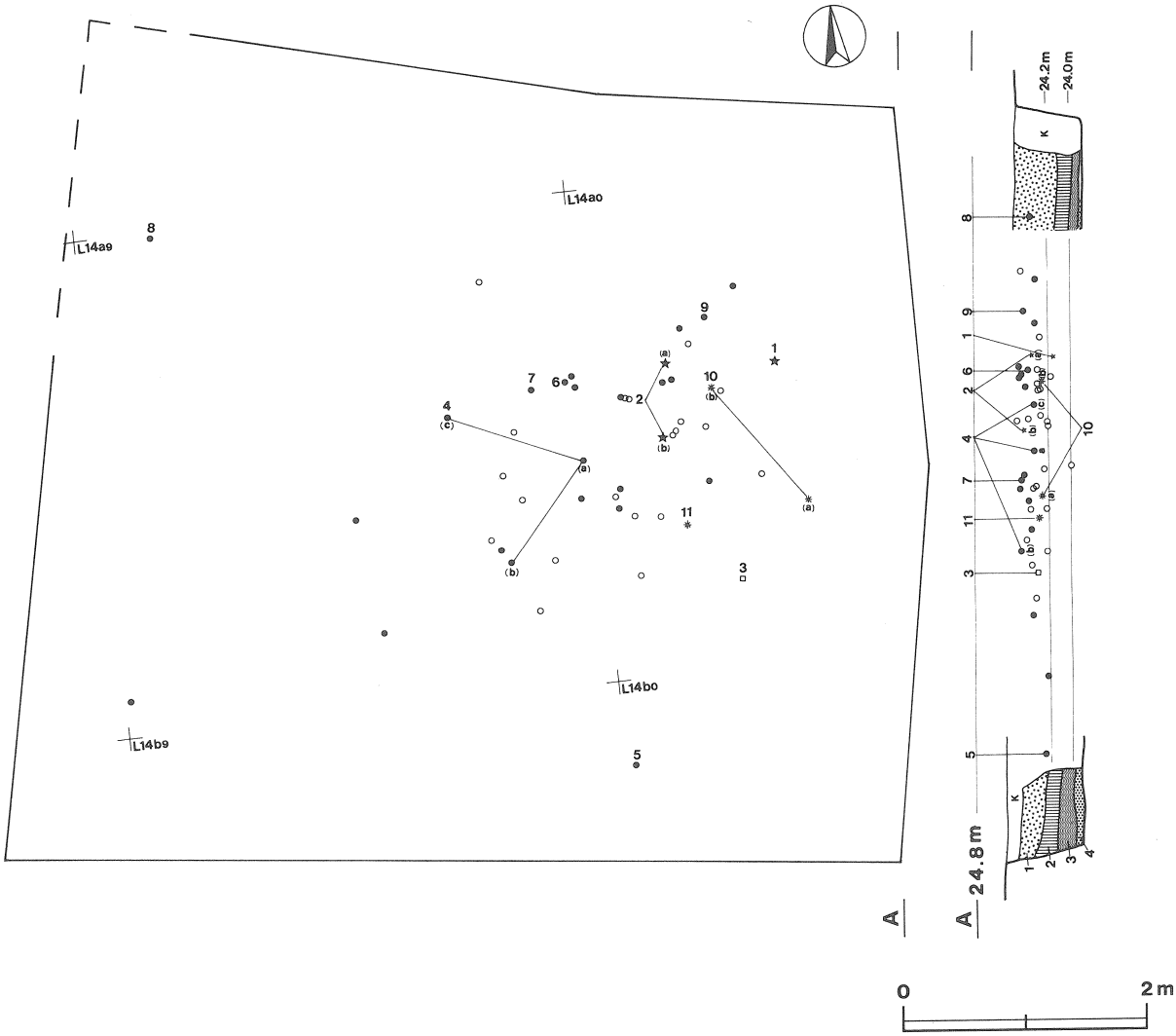
位置　調査区の北東部からやや中央寄り，L14$_{a9}$区。第4集中地点に接しているが，遺物の分布状況から第3集中地とする。出土遺物の平面分布については第97図で示したとおりである。その中で，特に出土遺物が集中している地点は，中央部からやや東側である。

規模　平面形約東西7m，南北6mの範囲で確認した。

確認土層　土層1から4層の範囲で確認した。土層1のローム上層から土層3のハードローム下層にかけて出土遺物を確認した。本石器類集積地では，土層2の褐色土上面及び下位から定型的な石器が出土している。

遺物　本石器集中地点からの出土遺物総数は48点である。内訳はナイフ形石器2点，礫器1点，縦長剥片1点，二次加工のある剥片1点，剥片19点，砕片22点，礫2点の計48点である。

1と2はナイフ形石器である。1のナイフ形石器はL14$_{a0}$区から出土したもので完形品である。ホルフエンスの石刃を素材としており，一側辺に最初の剥離痕が残り，背部整形及び基部の整形に刃潰し加工を施して



第97図　第3号石器集中地点遺物出土状況図

いる。最大厚，最大幅とも中央部にみられる。

2のナイフ形石器は$L14_{a0}$区から出土したもので完成品であるが，先端部は欠損している。頁岩の石刃を素材としている。背部整形及び基端部の整形を行い，一端のみに鋭い切出し状の剥離面を利用した刃を持っている。また，一側面に2度にわたる剥離調整痕が残る。最大厚を中央部に，最大幅は中央部やや下位にみられる。

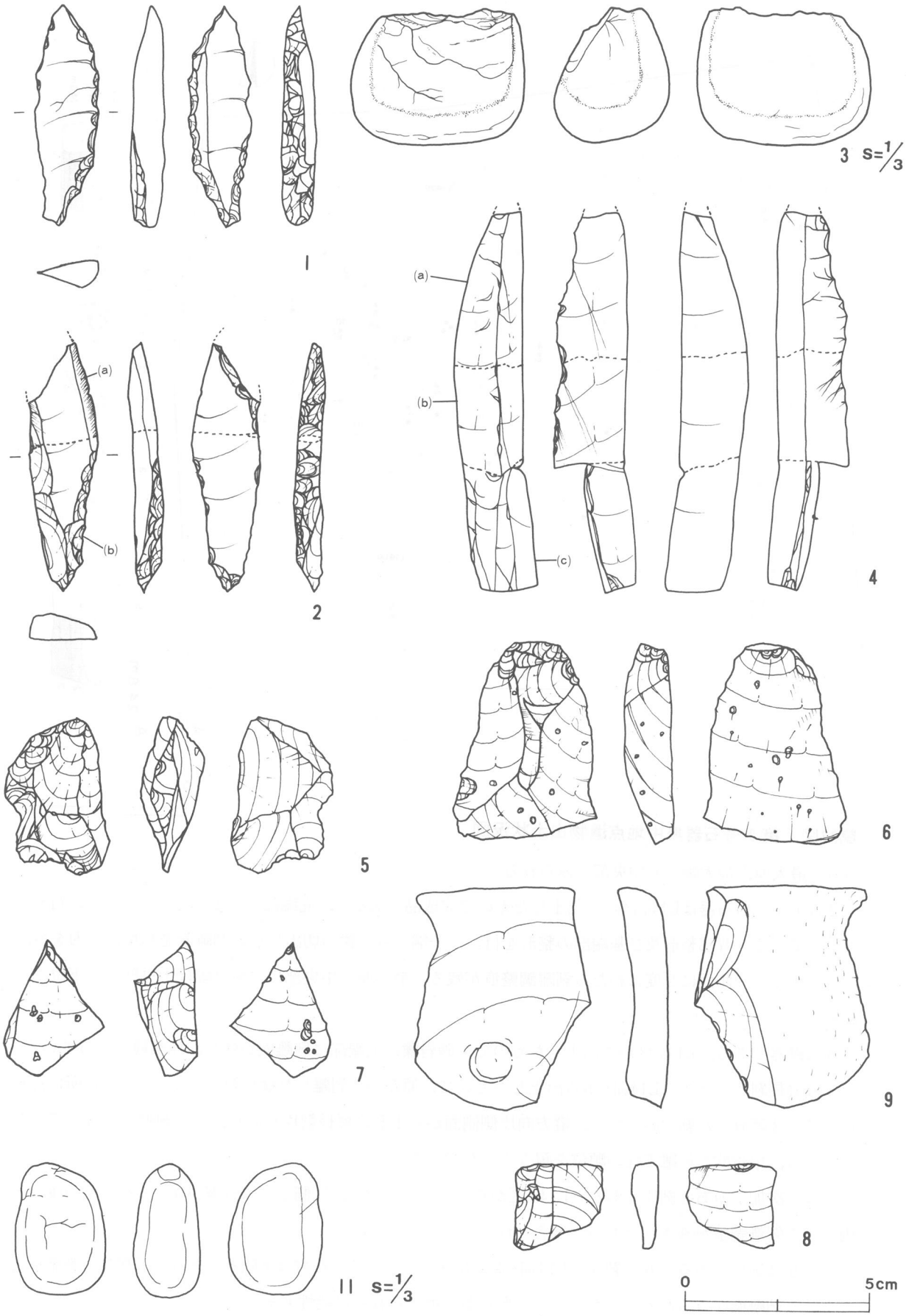
3は礫器である。$L14_{a0}$区から出土したもので，砂岩礫の上端部に剥離面が残り，作業縁となっている。

4は縦長剥片である。$L14_{a9}$区から出土したもので，原石から剥離した縦長剥片を（さらに2か所に打撃を加えて）3等分した剥片の一つに，縦方向片側側面から小形の縦長剥片を取り出した剥離痕を残しているところから，相対的な剥離工程の順位を窺うことができる。

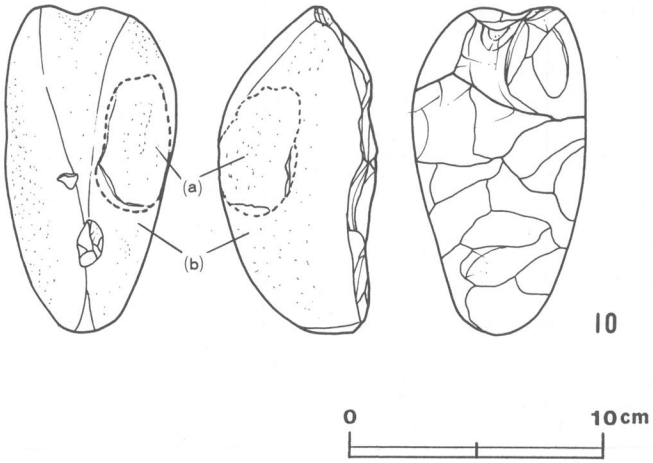
5は二次加工のある剥片である。$L14_{b0}$区から出土したもので，片側上面に打撃が加えられ，その後，表裏両面から剥離調整が施されたものと考えられる。

6～9は剥片である。6の剥片は$L14_{a9}$区から出土したもので，石材は黒曜石である。下端部に調整痕と考えられる剥離面がみられることからナイフ形石器と捉えられる可能性もある。

7と8は黒曜石の剥片で，$L14_{a9}$区から出土したもので，単純な剥離面がみられる。



第98図　第3号石器集中地点出土遺物実測図(1)



第99図　第3号石器集中地点出土遺物実測図(2)

9の剥片は砂岩の剥片である。L14a0区から出土したもので，片側には滑らかな自然面がみられる。

10と11は礫である。10の礫はL14a0区から出土した安山岩で，2度の加撃による剥離面がみられる。

11の礫はL14a0区から出土した安山岩の円礫である。使途は不明である。

接合資料　接合資料は3例存在する。内訳は，平面分布図の2（a）と2（b）のナイフ形石器，3（a）と3（b）及び3（c）の縦長剥片，9（a）と9（b）の礫にみられる。

所見　本石器集中地点で確認した利器は，ナイフ形石器2点であるが，いずれも他の場所で製作されたものを搬入したものである。安山岩の礫が出土しているが，黒曜石以外の剥片生産の様子を窺うことができず，黒曜石の剥片生産を基本とする集中地点であることが考えられる。

表9　第3号石器集中地点出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値 (cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石質	出土地点	備考
第98図 1	ナイフ形石器	5.9	1.7	1.0	7.5	ホルンフェルス	L14a0区	Q97　PL29
2	ナイフ形石器	6.6	1.8	0.9	21.1	頁岩	L14a0区	Q98　PL29
3	礫器	9.3	7.4	6.2	575.6	砂岩	L14a0区	Q99
4	縦長剥片	10.1	1.9	2.0	33.4	砂岩	L14a9区	Q100　PL29
5	二次加工のある剥片	4.2	2.7	1.7	12.4	黒曜石	L14b0区	Q101　PL29
6	剥片	5.3	3.9	1.3	20.6	黒曜石	L14a9区	Q102
7	剥片	3.6	2.6	1.7	10.1	黒曜石	L14a9区	Q103
8	剥片	2.4	2.2	0.7	2.9	黒曜石	L14a9区	Q104
9	剥片	6.0	4.7	1.1	37.0	砂岩	L14a0区	Q105
第99図 10	礫	12.9	6.9	6.4	648.4	安山岩	L14a0区	Q106
第98図 11	礫	7.0	4.9	3.5	164.7	安山岩	L14a0区	Q107

表10　第3号石器集中地点石器組成表

種別	黒曜石	安山岩	頁岩	流紋岩	砂岩	ホルンフェルス	計
ナイフ形石器	—	—	1	—	—	1	2
尖頭器	—	—	—	—	—	—	0

種　　別	黒曜石	安山岩	頁　岩	流紋岩	砂　岩	ホルンフエルス	計
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	0
縦　長　剝　片	—	—	—	—	1	—	1
二次加工のある剝片	1	—	—	—	—	—	1
剝　　片	19	—	—	—	—	—	19
石　　核	—	—	—	—	—	—	0
砕　　片	22	—	—	—	—	—	22
礫　　器	—	—	—	—	1	—	1
礫	—	2	—	—	—	—	2
破　砕　礫	—	—	—	—	—	—	0
計	42	2	1	0	2	1	48

表11　第3号石器集中地点接合資料一覧表

図版番号	石　　材	内　　訳	内　　容	数　量
第98図2	頁岩	ナイフ形石器2	2(a) ナイフ形石器→2(b) ナイフ形石器	2
4	砂岩	石刃3	4(a) 石刃→4(b) 石刃→4(c) 石刃	3
第99図10	安山岩	礫2	10(a) 礫→10(b) 礫	2

第4号石器集中地点

位置　調査区の北東部からやや中央寄り，L14a8区。第3集中地点に接する。出土遺物の平面分布については第100図で示したとおりである。その中で，特に出土遺物の集中する地点は，中央部である。

規模　平面形東西約7～10m，南北6mの範囲で確認したが，疎密はほぼ一定である。

確認土層　土層1から4層の範囲で確認した。土層1のローム上層から土層3のハードローム上層にかけて出土遺物を確認したが，特に土層2付近での分布密度が高い。

遺物　本石器集中地点からの出土遺物総数は57点である。内訳はピエス・エスキーユ1点，二次加工のある剝片1点，剝片24点，砕片27点，礫4点の計57点である。

1はピエス・エスキーユである。K14j7区から出土したもので，石材は黒曜石である。比較的大形の剝片を素材とし，上下両端に微細な調整が観察される。

2は二次加工のある剝片である。K14j8区から出土したもので，石材は黒曜石である。主要剝離面に二次加工が観察される。

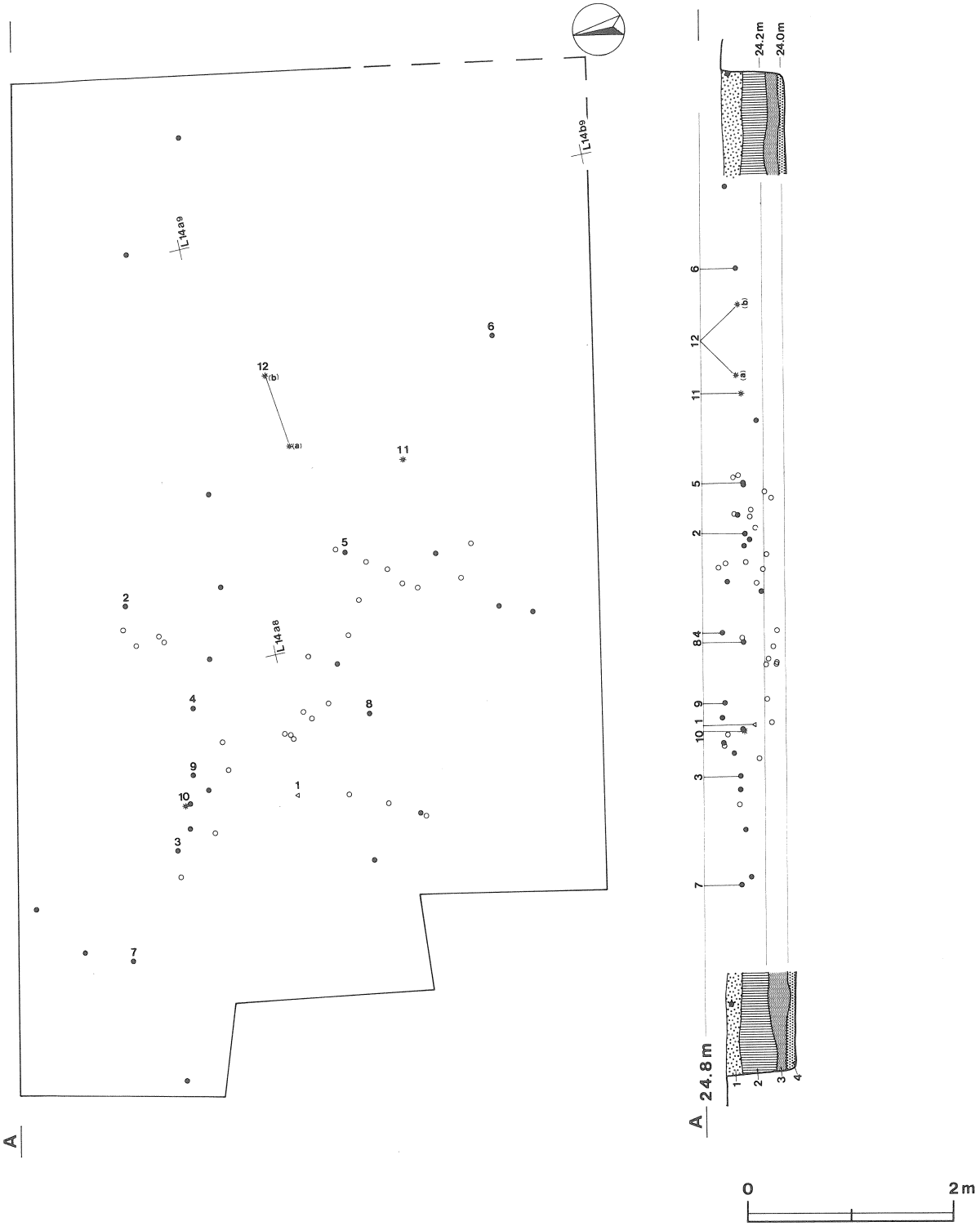
3～9は剝片である。3と4はK14j7区から出土したもので，石材はいずれも砂岩である。原石に最初の打撃が加えられ，その後，小形の剝片が剝離したものと思われる。それぞれ片側に滑らかな自然面を残し，上下両面に剝離痕が認められる。

5と6の剝片は，L14a8区から出土したもので，石材は黒曜石である。5の剝片には微細な使用痕が観察され，6の剝片では単純な剝離面がみられ，5の剝片については使用された可能性も否めない。

7と8の剝片は，K14j7区，L14a7区から出土したもので，石材は頁岩である。特に7の剝片は，バルブが明確に確認でき，中央部には縦に2本の稜線が入る。

9の剝片は，K14j7区から出土したもので，石材はメノウである。最初の打点の残る両側には左右からの細かな剝離調整痕が残る。

10～12は礫である。10と11の礫は安山岩で，特に10の礫は，被熱のため中央部が大きく裂け縦横の割れ目が走っている。



第100図　第４号石器集中地点遺物出土状況図

12の礫はチャートである。

接合資料　接合資料は１例存在する。平面分布図の12（a）と，12（b）の礫どうしの接合例にみられる。

所見　本石器集中地点出土の利器は，ピエス・エスキーユの１点で，利器の製作を反映する資料が乏しく，また，剥片の石材が複数に及んでいるが，それに見合う砕片の出土がみられないことから，剥片製作を基本とする石器集中地点と考えられる。

第101図　第４号石器集中地点出土遺物実測図

表12　第４号石器集中地点出土遺物観察表

図版番号	種　別	計測値 (cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石質	出土地点	備考
第101図１	ピエス・エスキーユ	4.3	1.3	1.2	6.6	黒曜石	K14$_{j7}$区	Q108
2	二次加工のある剥片	3.9	3.1	1.3	11.5	黒曜石	K14$_{j8}$区	Q109　PL29
3	剥　片	7.2	4.4	1.7	51.2	砂岩	K14$_{j7}$区	Q110
4	剥　片	5.6	4.1	0.8	24.2	砂岩	K14$_{j7}$区	Q111
5	剥　片	3.7	2.8	1.3	9.8	黒曜石	L14$_{a8}$区	Q112
6	剥　片	2.9	2.5	0.7	3.2	黒曜石	L14$_{a8}$区	Q113
7	剥　片	2.7	2.3	0.6	3.2	頁岩	K14$_{j7}$区	Q114
8	剥　片	2.9	1.7	0.4	1.7	頁岩	L14$_{a7}$区	Q115
9	剥　片	2.1	1.7	0.6	1.6	メノウ	K14$_{j7}$区	Q116
10	礫	9.0	8.2	5.2	417.7	安山岩	K14$_{j7}$区	Q117
11	礫	8.2	7.2	2.9	229.9	安山岩	L14$_{a8}$区	Q118
12	礫	6.1	3.0	3.0	63.2	チャート	L14$_{a8}$区	Q119

表13　第４号石器集中地点石器組成表

種　別	黒曜石	安山岩	頁岩	メノウ	砂岩	チャート	計
ナイフ形石器	—	—	—	—	—	—	0
尖頭器	—	—	—	—	—	—	0
ピエス・エスキーユ	1	—	—	—	—	—	1
二次加工のある剥片	1	—	—	—	—	—	1
剥　片	19	—	2	1	2	—	24
石　核	—	—	—	—	—	—	0
砕　片	27	—	—	—	—	—	27
礫　器	—	—	—	—	—	—	0
礫	—	2	—	—	—	2	4
破砕礫	—	—	—	—	—	—	0
計	48	2	2	1	2	2	57

表14　第４号石器集中地点接合資料一覧表

図版番号	石　材	内　訳	内　容	数　量
第101図12	チャート	礫2	12(a) 礫→12(b) 礫	2

第５号石器集中地点

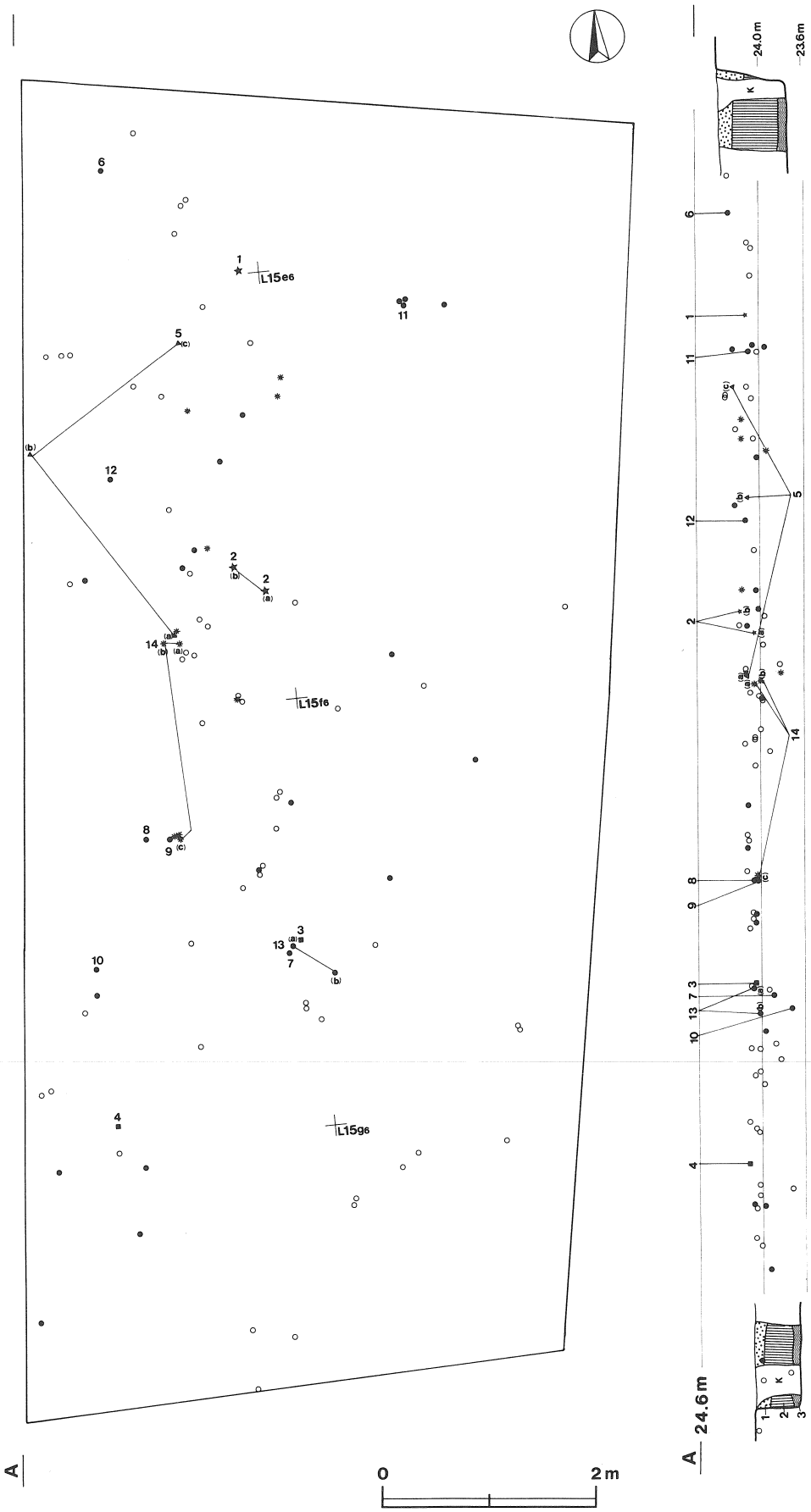
位置　調査区の南東中央部寄り，やや傾斜地のL15$_{e6}$区。出土遺物の平面分布については第102図で示したとおりであり，特に出土遺物が集中する地点は西側である。

規模　平面形東西約５m，南北11mの広範囲で確認した。

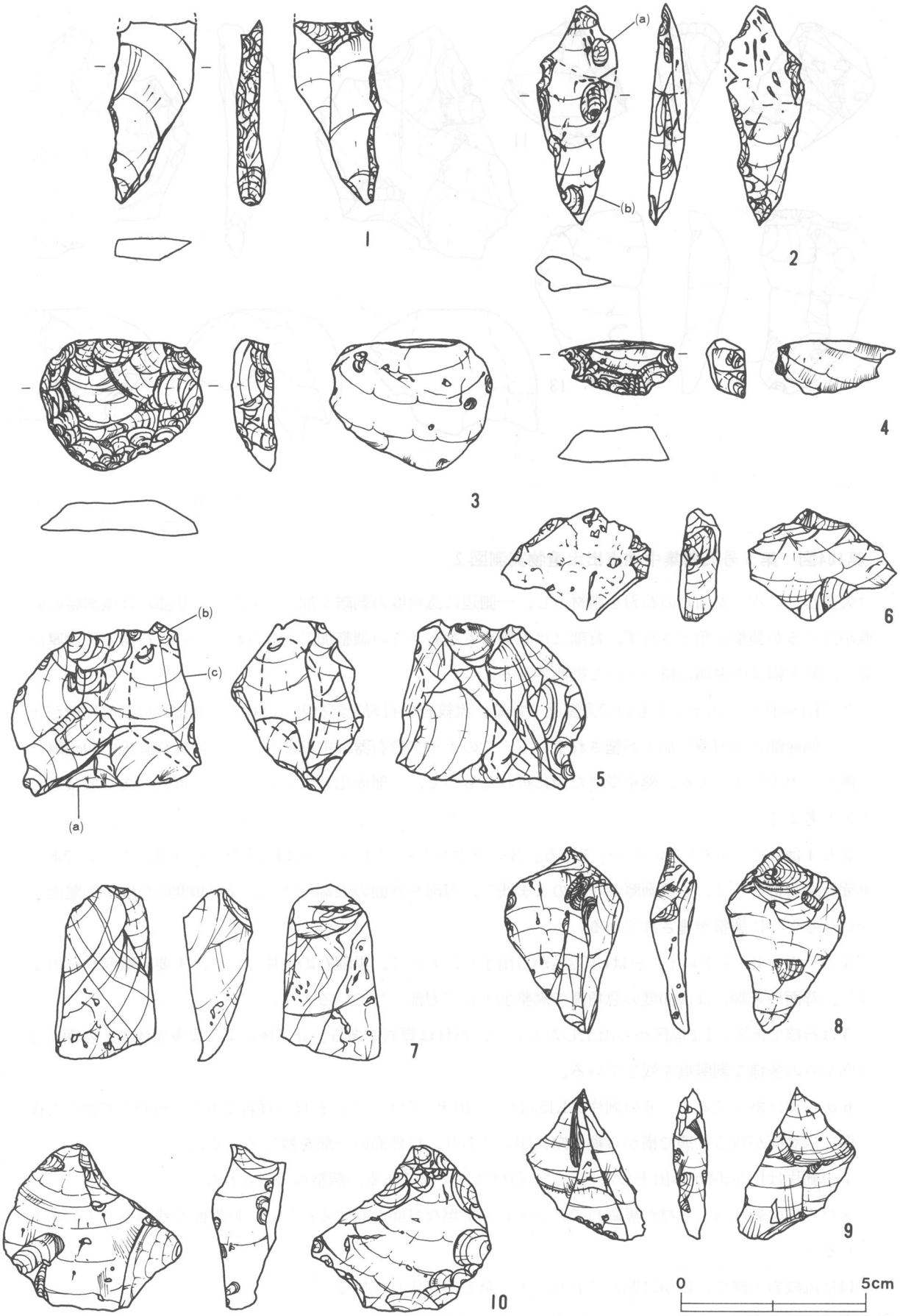
確認土層　土層１から３層の範囲で確認した。その中で，出土遺物の分布密度の濃い層位は土層２の上層から中層である。定型的な石器は土層１の褐色土下層から土層３の褐色土上面と垂直分布に開きがある。

遺物　本石器類集積地からの出土遺物総数は104点で，ナイフ形石器２点，ラウンド・スクレイパー２点が出土している。その他の出土遺物では，石核１点，剥片29点，砕片57点，礫13点の計100点である。

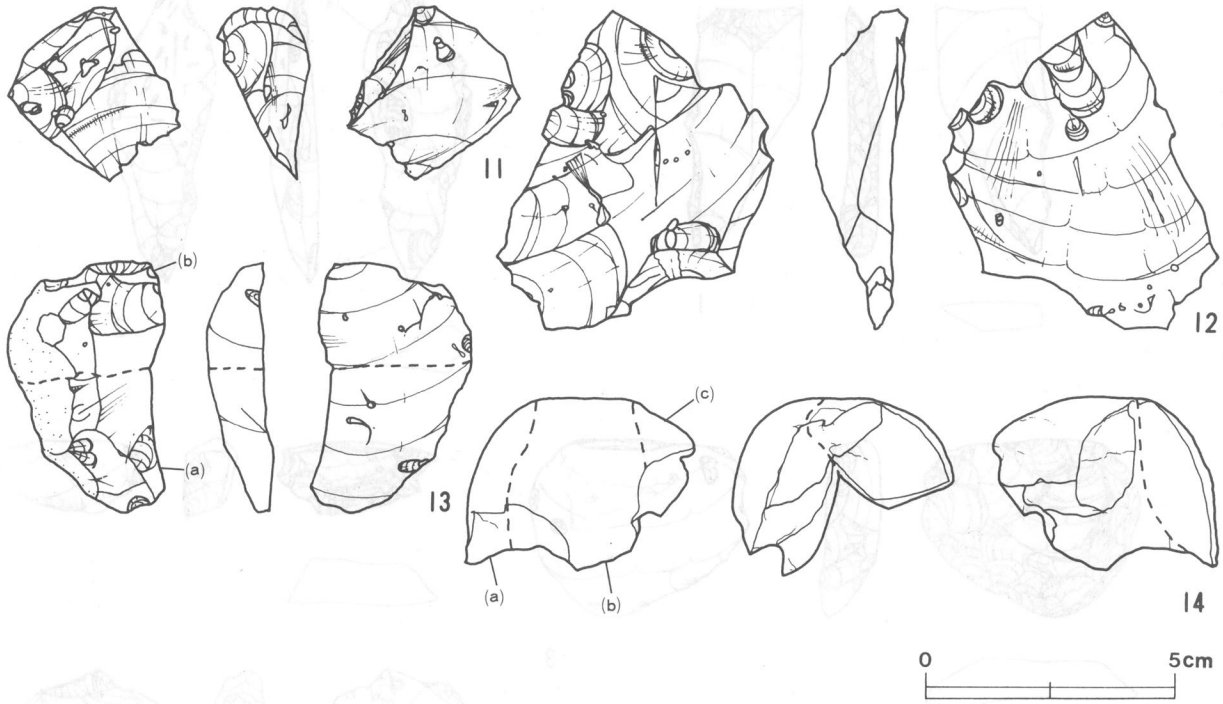
１と２はナイフ形石器である。１はL15$_{d5}$区から出土したもので完整品と思われる。中央部から先端部にか



第102図　第５号石器集中地点遺物出土状況図



第103図　第５号石器集中地点出土遺物実測図(1)



第104図　第５号石器集中地点出土遺物実測図(2)

け欠損している。安山岩の石刃を素材とし，一側辺に急角度の剥離を加えたもので，基部には微調整の剥離痕がのこるが調整は殆どされず，背部には両側とも左右からの調整加工が施されている。石器の最大厚は基部に，最大幅は中央部に持つものと推測される。

２はL15$_{e5}$区から出土したもので完整品である。流紋岩の石刃を素材としている。基部には調整剥離が施され，一側縁部には刃潰し加工が施されている。このナイフ形石器は中央部から二つに折れ直線で40cm離れた位置から出土しているが，熱を受けた後に折れたもので，一部赤化している。二つに折れた後で放棄されたものと考える。

３と４はラウンド・スクレイパーである。３のラウンド・スクレイパーはＬ15$_{f5}$区から出土したものである。黒曜石を石材として，主要剥離面をそのまま残し，刃部を背面の末端に持ち，ほぼ40度の角度で剥離面が並列になるように調整が施されている。

４のラウンド・スクレイパーはL15$_{f5}$区から出土したもので，黒曜石の剥片として，主要剥離面をそのまま残し，背面の末端にほぼ60度の急角度で調整加工して刃部としている。

５は石核である。L15$_{e5}$区から出土したもので，石材は頁岩である。立方体のような多面体で，各面には他方向からの多様な剥離痕を残している。

６から13は剥片である。６の剥片はL15$_{d5}$区から出土したもので，石材は頁岩である。原石を荒割した後，上面に自然面が残る状態で横から縦方向に叩いており，自然面の一部を残している。

７の剥片はL15$_{f5}$区から出土したもので，石材はメノウである。調整痕はみられない。

８から13の剥片は，石材が黒曜石で，いずれも平坦な打面を有する剥片で，自然面を残存させるものもみられる。

14は流紋岩の礫で，細かに割れており，その全てが赤化している。

接合資料　接合資料は４例存在する。内訳は，平面分布図の２（a）と２（b）のナイフ形石器，５（a）と（b）及び（c）の石核と剥片，13（a）と13（b）の剥片，14（a）と14（b）の礫どうしの接合例にみられる。

所見　本石器集中地点は，５つの集中地点の中では出土遺物が最も多く出土している。利器の出土も複数みられるが，ナイフ形石器は他の場所から製品の形で搬入したものと考えられ，本石器集中地点は基本的に，剥片生産を反映するものと考えられる。接合資料５の（a），（b）の石核と（c）の剥片との接合関係からは剥片生産技術が窺え，興味深いものがある。

表15　第５号石器集中地点出土遺物観察表

図版番号	種　別	計測値 (cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石　質	出土地点	備　考
第103図１	ナイフ形石器	5.1	2.1	0.7	8.9	安山岩	L15$_{d5}$区	Q120　PL29
2	ナイフ形石器	5.9	2.0	1.1	8.2	流紋岩	L15$_{e5}$区	Q121　PL29
3	ラウンド・スクレイパー	4.4	3.5	1.2	16.5	黒曜石	L15$_{f5}$区	Q122
4	ラウンド・スクレイパー	3.2	1.5	1.1	4.2	黒曜石	L15$_{f5}$区	Q123　PL29
5	石　核	5.0	4.6	3.6	59.0	頁　岩	L15$_{e5}$区	Q124
6	剥　片	4.0	3.0	1.0	10.6	頁　岩	L15$_{d5}$区	Q125
7	剥　片	4.7	2.1	1.8	20.6	メノウ	L15$_{f5}$区	Q126
8	剥　片	5.0	3.1	1.2	10.0	黒曜石	L15$_{f5}$区	Q127
9	剥　片	4.1	3.1	1.0	6.2	黒曜石	L15$_{f5}$区	Q128
10	二次加工のある剥片	4.7	4.5	2.0	25.8	黒曜石	L15$_{f5}$区	Q129
第104図11	剥　片	3.4	3.4	1.8	11.7	黒曜石	L14$_{e6}$区	Q130
12	剥　片	6.3	5.5	1.9	35.5	黒曜石	L15$_{e5}$区	Q131
13	剥　片	4.9	3.2	1.2	13.3	黒曜石	L15$_{f6}$区	Q132
14	礫	4.5	4.5	3.3	48.2	流紋岩	L15$_{e5}$区	Q133

表16　第５号石器集中地点石器組成表

種　別	黒曜石	安山岩	頁　岩	流紋岩	砂　岩	ホルンフエルス	メノウ	計
ナイフ形石器	—	—	1	1	—	—	—	2
尖　頭　器	—	—	—	—	—	—	—	0
ラウンド・スクレイパー	2	—	—	—	—	—	—	2
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	0
二次加工のある剥片	1	—	—	—	—	—	—	1
剥　片	27	—	—	—	—	—	1	28
石　核	—	—	1	—	—	—	—	1
砕　片	57	—	—	—	—	—	—	57
礫　器	—	—	—	—	—	—	—	0
礫	2	—	—	1	1	—	—	4
破　砕　礫	—	—	—	9	—	—	—	9
計	89	0	2	11	1	0	1	104

表17　第５号石器集中地点接合資料一覧表

図版番号	石　材	内　訳	内　容	数　量
第103図２	流紋岩	ナイフ形石器２	２(a) ナイフ形石器→２(b) ナイフ形石器	2
5	頁　岩	石核1 石核1 剥片1	5(a) 石核→5(b) 石核→5(c) 剥片	3

図版番号	石　　材	内　　訳	内　　容	数　　量
第104図13	黒曜石	剝片2	13(a) 剝片→13(b) 剝片	2
14	流紋岩	礫2	14(a) 礫→14(b) 礫	2

その他の遺物出土地点

旧石器時代の調査では，少数ながら石器集中地点以外からも出土遺物を確認した。しかし，その後の出土遺物は確認できず，石器類の数量が乏しく，内容的な評価もできない。このため，ここでは石器集中地点とは区別し，出土遺物一覧表及び石器組成表の記載に留める。

表18　その他の出土遺物観察表

種　別	計測値 (cm)			重量(g)	石　質	出土地点	備　考
	長さ	幅	厚さ				
剝　片	2.0	1.8	0.5	3.1	黒曜石	M14$_{f9}$区	
剝　片	1.9	0.9	0.4	2.7	黒曜石	M14$_{f9}$区	
剝　片	2.2	1.7	0.3	3.9	黒曜石	M14$_{f9}$区	
剝　片	2.0	1.1	0.5	2.8	黒曜石	M14$_{f9}$区	
剝　片	1.1	0.8	0.4	2.1	黒曜石	L14$_{f9}$区	

表19　その他の出土遺物組成表

種　別	黒曜石	安山岩	頁　岩	流紋岩	砂　岩	ホルンフエルス	計
剝　片	5	—	—	—	—	—	5
石　核	—	—	—	—	—	—	0
砕　片	3	—	—	—	—	—	3
礫　器	—	—	—	—	—	—	0
礫	—	—	—	—	—	—	0
破砕礫	—	—	—	—	—	—	0
計	8	0	0	0	0	0	8

2　縄文時代の遺構と遺物

(1) 陥し穴

当遺跡で確認した45基の土坑の内，形状や規模から陥し穴と考えられる4基の遺構について記載する。

第1号陥し穴（第105図）

位置　調査区の北部，J14$_{j7}$区。

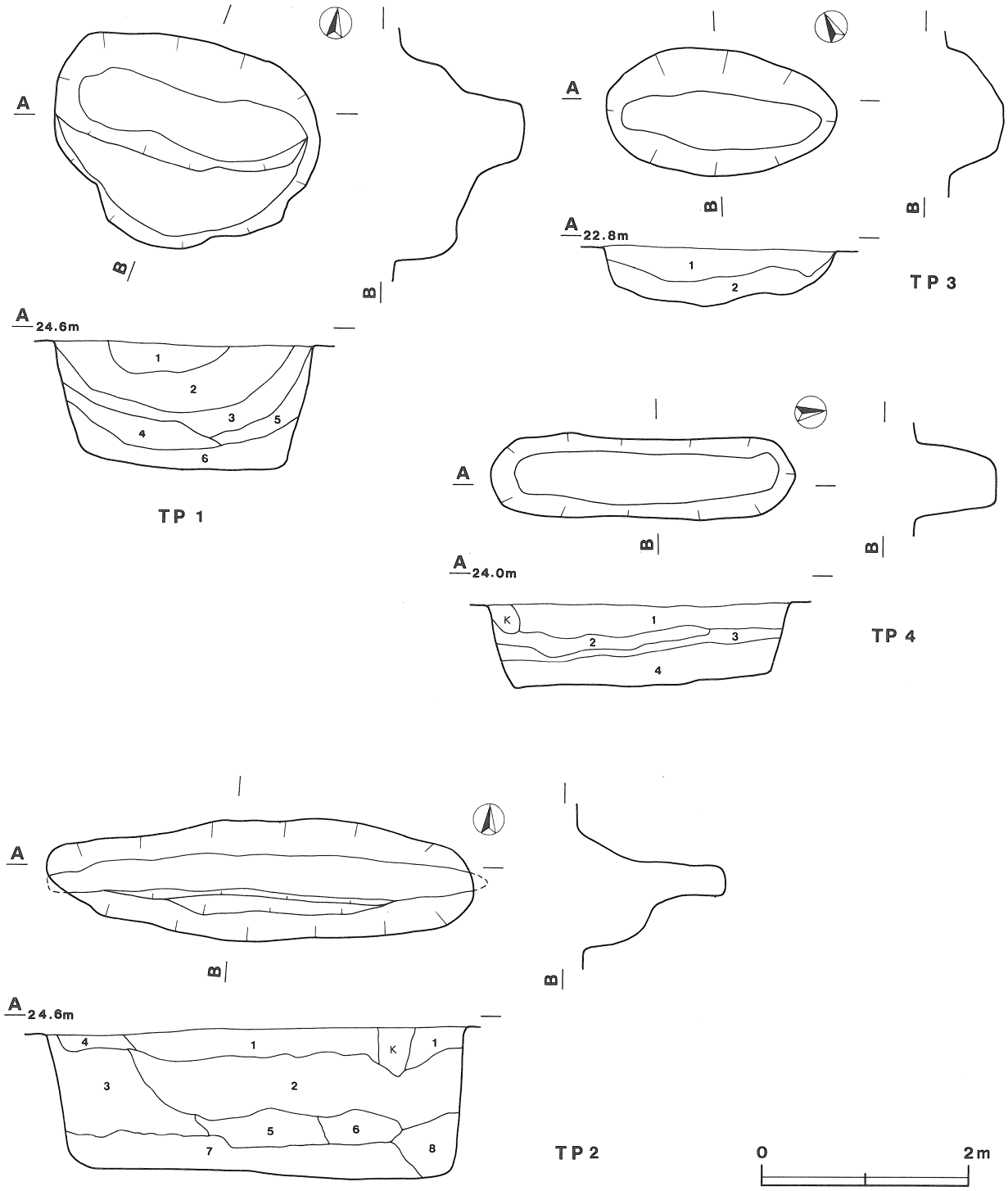
規模と平面形　長径2.62m，短径2.03mの不整楕円形で，深さは1.19mである。

長径方向　N—79°—W

壁面　外傾して立ち上がり，中位で段を成している。

底面　皿状である。

覆土　6層から成る。自然堆積である。



第105図　第1・2・3・4号陥し穴実測図

土層解説

1　暗 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量，締まり強
2　暗 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック微量
3　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
4　暗 褐 色　ローム粒子中量，炭化物・ローム小ブロック微量
5　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
6　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化物・ローム大ブロック・ローム中ブロック微量

所見　本跡は，井戸状遺構の様相を呈し，その可能性もあるが，遺構の形態から陥し穴と考える。遺物は出土していないが，時期は，縄文時代のものと思われる。

第２号陥し穴（第105図）

位置　調査区の南部，L13$_{i0}$区。

規模と平面形　長径4.27m，短径1.17mの長楕円形で，深さは1.39mである。

長径方向　N－88°－W

壁面　北壁は垂直に立ち上がり，南壁は中位に段を成している。

底面　皿状である。

覆土　８層から成る。自然堆積と考えられる。

土層解説

1	褐	色	ローム粒子多量，炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック微量
2	褐	色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，締まり強
3	褐	色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック微量
4	褐	色	ローム粒子多量，炭化物微量
5	褐	色	ローム粒子多量，ローム小ブロック微量
6	褐	色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック微量
7	褐	色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム大ブロック・ローム小ブロック少量
8	褐	色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック微量

所見　本跡は，遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物は出土していないが，時期は縄文時代のものと思われる。

第３号陥し穴（第105図）

位置　調査区の東部，M15$_{f5}$区。

規模と平面形　長径2.23m，短径1.22mの楕円形で，深さは0.52mである。

長径方向　N－58°－W

壁面　外側に緩傾する。

底面　皿状である。

覆土　２層から成る。自然堆積と思われる。

土層解説

1	黒	色	焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
2	黒褐	色	ローム粒子微量

所見　本跡は，遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物は出土していないが，時期は縄文時代のものと思われる。

第４号陥し穴（第105図）

位置　調査区の南部，M14$_{e8}$区。

規模と平面形　長径2.95m，短径0.76mの楕円形で，深さは0.79mである。

長径方向　N－5°－E

壁面　ほぼ垂直に立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　4層から成る。自然堆積と思われる。

土層解説

1	褐　色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・焼土粒子・炭化物極微量	3	黒　色	ローム粒子・焼土粒子極微量
2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物極微量	4	黒　色	ローム粒子・焼土粒子極微量

所見　本跡は，谷津に面する傾斜地にあり，遺構の上部が削平されて，深い落ち込みはみられないが遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物は出土していないが，時期は縄文時代のものと思われる。

3　古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では，古墳時代の竪穴住居跡21軒，竪穴遺構1基，土坑4基を確認した。これら住居跡の中には，小型のもので，住居以外の目的と用途を持った建物跡と考えられるものと，内部施設の有無等がみられるが，ここではそれらの建物跡も住居跡として取り上げた。以下，確認した遺構と遺物について記載する。

（1）竪穴住居跡

竪穴住居跡は，当調査区の中央部を中心に散在して21軒を確認した。重複し合っているのは2か所で，共に溝と重複しているものである。調査区の中央部で確認した住居跡は遺存状態の良好なものが多い。竪穴住居跡の第1号，第13号及び第14号は調査区外へ延びているため完掘ができず，その規模については推定することにする。

以下，確認した住居跡の特徴や遺物について記載する。

第1号住居跡（第106図）

位置　調査区の北西部，K13$_{e6}$区。

規模と平面形　本跡の北西側は調査区外に延びるため，長さは不明であるが，平面形は一辺6.00mの隅丸方形と推定される。

主軸方向　N－55°－E

壁　壁高20～32cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝　調査区内の部分は，南西壁の一部を除いて周回しており，上幅は3～12cm，深さ12cm程で，断面形はU字形である。

床　平坦で，全体的に踏み固められ硬く締まっている。

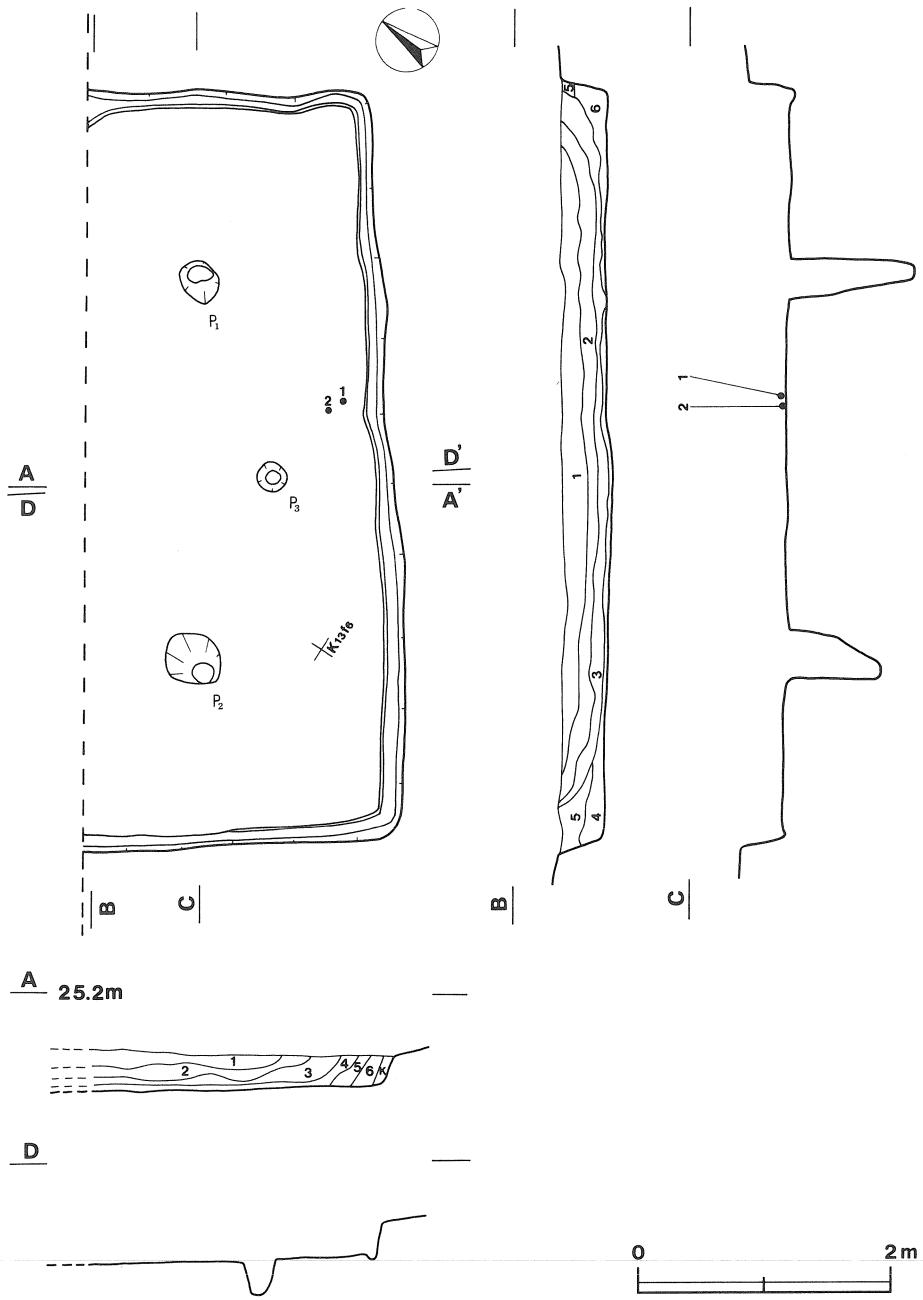
ピット　3か所（P_1～P_3）。P_1，P_2は長径35～50cm，短径30～43cmの不整楕円形で，深さは72～98cmである。各コーナー近くにあり，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_3は径25cmの円形で，深さは25cm程である。P_1，P_2の中間から少し南東壁寄りに付設され，規模や配置から出入口ピットと考えられる。

覆土　6層から成る。覆土下層から上層にかけて焼土粒子と炭化粒子を含む暗褐色土がレンズ状に堆積する。自然堆積である。

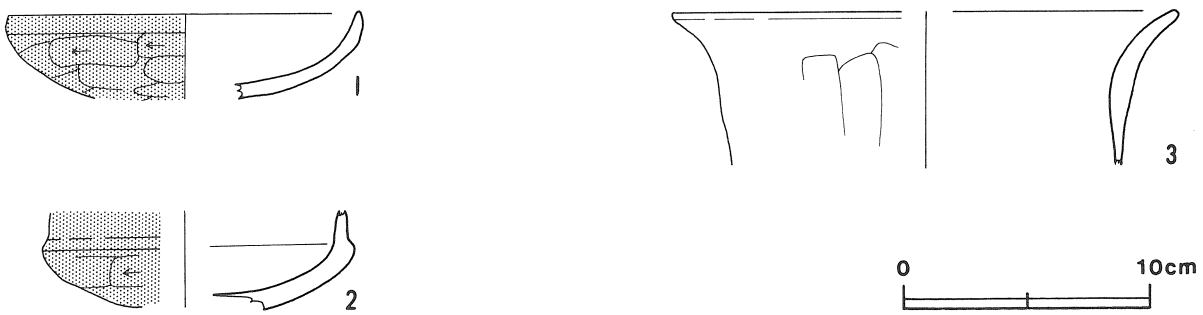
土層解説

1	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量	4	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック微量
2	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量，ローム粒子多量	5	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3	褐　色	ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量，ローム小ブロック少量	6	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物　南東壁際の床面直上から少量の遺物が出土している。第107図1，2の坏は共に南東壁際の覆土下層と床面直上から出土し，3の甑は覆土中から出土したものである。



第106図　第１号住居跡実測図



第107図　第１号住居跡出土遺物実測図

所見　本跡の時期は，出土遺物から6世紀後半と考えられる。

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第107図 1	坏 土師器	A　14.1 B（3.5）	底部及び口縁部一部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに内傾する。口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。外面黒色処理。	砂粒・長石・石英 浅黄橙色 普通	P1　60% PL30 南東壁際覆土下層
2	坏 土師器	B（4.0）	底部及び口縁部一部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は体部との境に稜を持ち，直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。外面黒色処理。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P2　60% 南東壁際床面直上
3	甑 土師器	A［20.4］ B（16.6）	口縁部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P3　5% 覆土中

第2号住居跡（第108・109図）

位置　調査区の西部，L13$_{c0}$区。

規模と平面形　長軸7.40m，短軸6.97mの方形。

主軸方向　N－37°－W

壁　壁高は48～59cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝　竈部分を除き全周する。上幅10～22cm，深さ4～12cmで，断面形はU字形である。

床　平坦で，よく踏み締まっている。

ピット　5か所（P_1～P_5）。P_1～P_4は径70～90cmの不整円形または不整楕円形ピットで，深さは66～90cmである。各コーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は径50cmの円形で，深さは25cmである。南東壁際中央にあり，規模や位置から出入口ピットと考えられる。

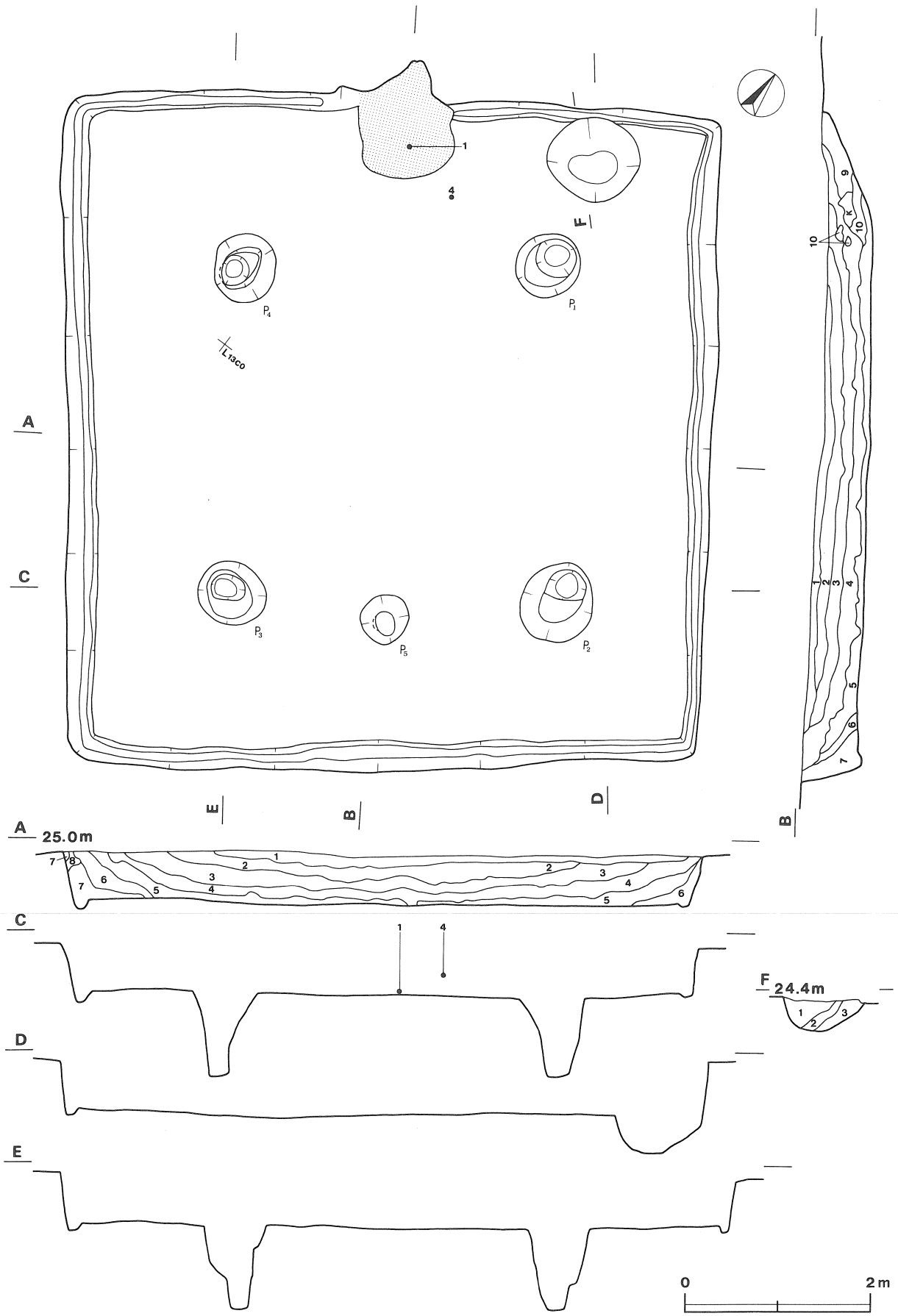
貯蔵穴　北コーナーから竈寄り北西壁に接して付設され，平面形は長径100cm，短径90cmの不整楕円形で，深さは40cmである。底面は皿状で，壁の一部は延長して住居の北西壁の一部となっている。

貯蔵穴土層解説
1　褐　　色　ローム小ブロック中量，ローム粒子多量
2　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量
3　明褐色　ローム小ブロック中量，ローム粒子多量

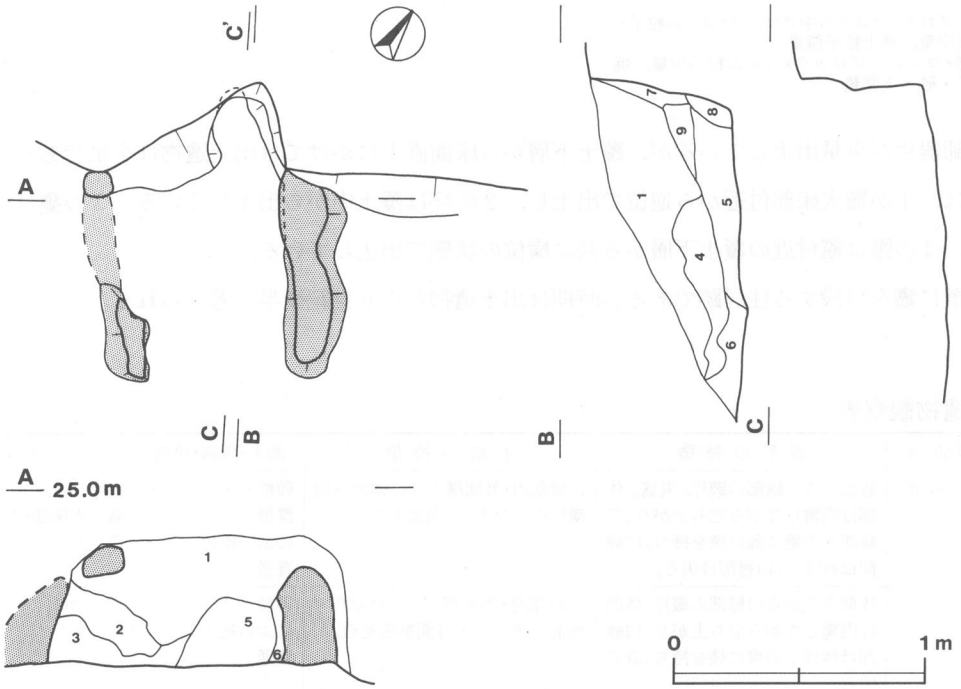
竈　北西壁中央部の壁面を約40cm壁外に掘り込み，砂混じりの粘土を使用して構築している。規模は，長さ120cm，幅100cm程で，弧状に掘り込んでいる。天井部は崩落し，袖部は，片袖の一部を除いて遺存している。燃焼部には，僅かに焼土ブロック，焼土粒子，炭化粒子がみられる。火床部は約10cm掘り窪められ，中央部やや手前の袖部内側に熱を受けて赤変硬化している部分がみられる。内壁はやや焼土化している程度である。煙道の立ち上がりは約45度と急である。

竈土層解説
1　にぶい黄褐色　ローム粒子・粘土粒子多量，焼土粒子少量，炭化物・炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子・粘土粒子多量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
3　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
4　にぶい黄褐色　焼土粒子・粘土粒子多量，焼土小ブロック・炭化物少量，ローム粒子少量，炭化粒子微量
5　にぶい黄褐色　焼土粒子・粘土粒子多量，焼土小ブロック少量，ローム小ブロック・ローム粒子微量
6　赤　褐　色　焼土粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム粒子少量，炭化粒子・粘土粒子微量
7　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
8　明　褐　色　ローム小ブロック多量，ローム粒子中量
9　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量

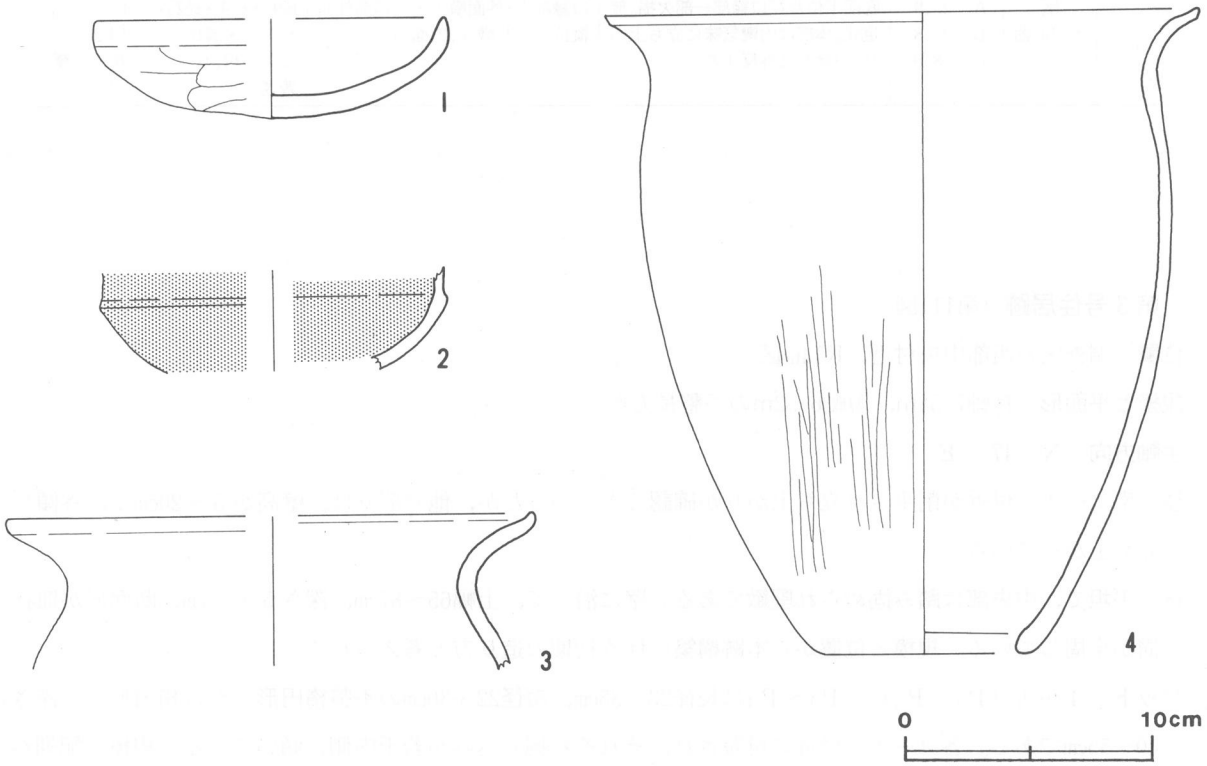
覆土　10層から成る。壁際と下層には褐色土が堆積し，中層から上層にかけては黒褐色土がレンズ状に堆積する。自然堆積と考えられる。



第108図　第２号住居跡実測図(1)



第109図　第２号住居跡竈実測図(2)



第110図　第２号住居跡出土遺物実測図

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・砂微量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・ローム中ブロック・砂微量
3　黒　褐　色　ローム中ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子微量
4　極黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
5　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，炭化物微量
6　にぶい褐色　炭化物中量，ローム粒子・焼土小ブロック少量，焼土粒子微量
7　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
8　明　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化物微量

9　灰　褐　色　焼土小ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子・砂・灰少量，焼土粒子微量
10　にぶい褐色　炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・砂・灰微量

遺物　覆土中から土師器片が少量出土しているが，覆土下層から床面直上にかけては出土遺物は少量である。第110図1・2の坏は，1が竈火床部付近から逆位で出土し，2の坏は覆土中から出土している。3の甕は竈付近の覆土中から，4の甑は竈付近の覆土下層から共に横位の状態で出土している。

所見　本跡は，北西壁に竈を付設する住居跡である。時期は出土遺物から6世紀後半と考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第110図 1	坏 土師器	A [14.0] B 3.5	底部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部は直立し，口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい橙色 普通	P4 30% 竈内火床部付近 覆土中
2	坏 土師器	B (4.1)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は体部との境に稜を持ち，直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	P5 20% 覆土中
3	甕 土師器	A [21.0] B (6.0)	頸部から口縁部の破片。頸部はやや丸味を持って口縁部に至る。口縁部は外反し，口唇部は外上方につまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・雲母 橙色 普通	P6 5% 竈付近覆土中 内・外面剝離
4	甑 土師器	A 23.9 B 25.8 C 8.0	底部下位及び口縁部一部欠損。無定式。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ磨き，内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石・パミス・雲母 にぶい橙色 普通	P7 80% PL29 竈付近覆土下層

第3号住居跡（第111図）

位置　調査区の西部中央付近，K14h8区。

規模と平面形　長軸7.58m，短軸6.52mの不整長方形。

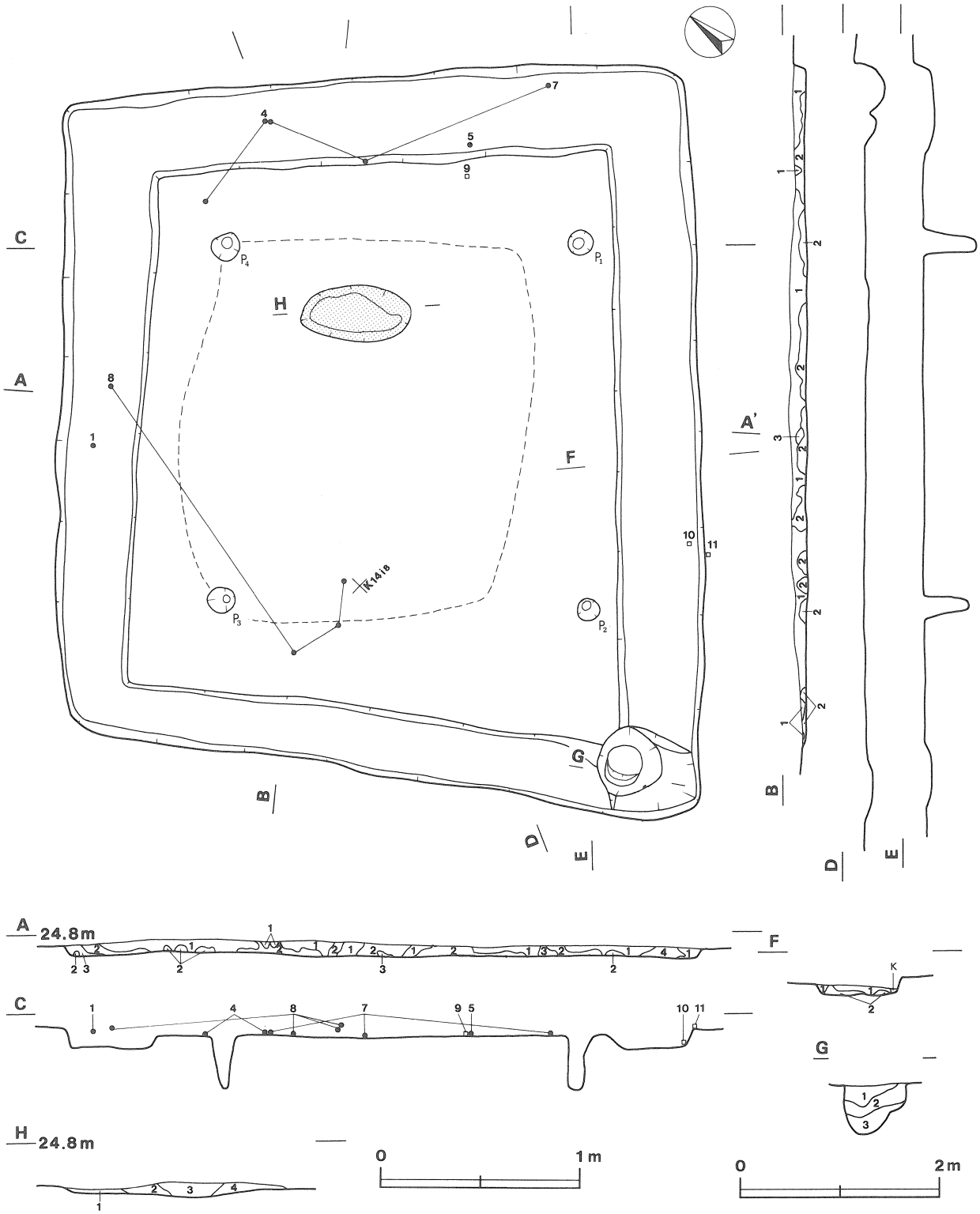
主軸方向　N－47°－E

壁　南コーナー付近が削平され立ち上がりが確認できなかったが，他の部分は，壁高が5～20cmで，外傾して立ち上がっている。

床　平坦で，中央部は踏み固められ堅緻である。壁に沿って，上幅65～87cm，深さ5～8cm，断面形が皿状の溝が全周している。規模と位置から本跡構築に伴う初期の造り方と考えられる。

ピット　4か所（P_1～P_4）。P_1～P_4は長径23～35cm，短径22～30cmの不整楕円形または楕円形で，深さは40～55cmである。各コーナー付近に付設され，それぞれ掘り込みが若干内側に傾いている。規模や配列から主柱穴と考えられる。

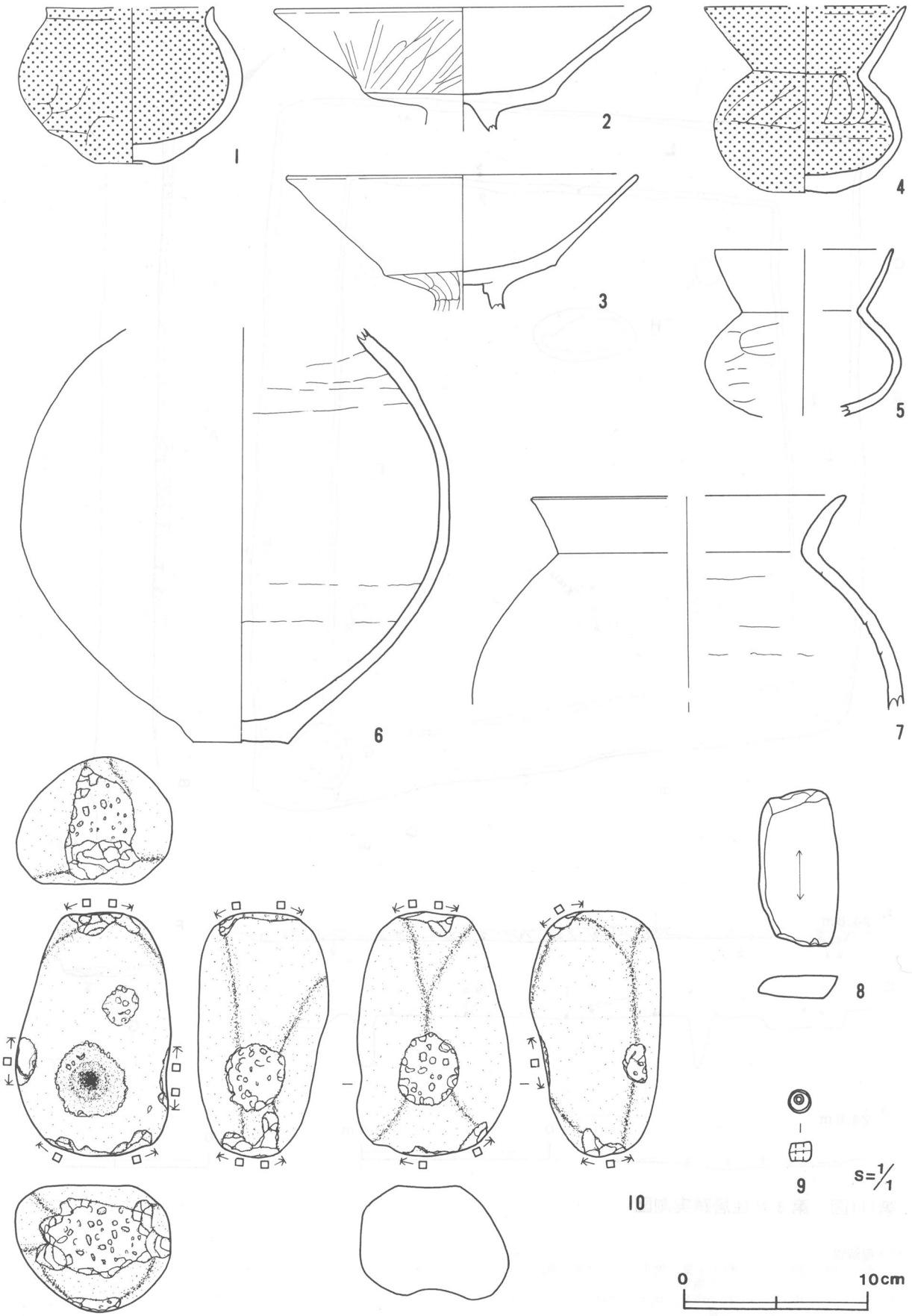
炉　中央から北東寄りに付設され，長径110cm，短径55cmで，床面を8cm程皿状に掘り窪めた不整楕円形の地床炉である。炉床には火熱を受けている部分がみられない。



第111図　第3号住居跡実測図

炉土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土小ブロック少量，ローム小ブロック微量
2　褐　　色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・ローム小ブロック少量
3　にぶい褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
4　にぶい赤褐色　焼土粒子・ローム小ブロック少量，炭化物微量



第112図　第3号住居跡出土遺物実測図

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は径70cmの不整円形で，円筒状に深さ62cm程掘り込まれており，木根跡と思われる窪みが底部に見られる。

貯蔵穴土層解説
1　暗褐色　ローム小ブロック少量，焼土小ブロック・ローム粒子微量
2　明褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化物微量
3　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，焼土粒子極微量

覆土　4層から成る。掘り込みが極めて浅く，全体的な堆積状況の把握は難しいが，僅かにみられる覆土下層から上層にかけてのロームブロックを含む褐色土の堆積状況から，人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土小ブロック少量，ローム小ブロック微量
2　褐　　色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・ローム中ブロック少量
3　にぶい褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
4　にぶい赤褐色　焼土粒子・ローム小ブロック少量，炭化物微量

遺物　覆土中層から床面直上にかけて土師器片が中量出土している。第112図1の椀は北西寄りの覆土上層から底部を斜位の状態にして出土し，2・3の高坏は，2が覆土中から，3が北寄りの床面直上から出土している。4・5の坩は，4が東寄りの床面直上から斜位の状態で，5は覆土中から出土している。6・7の甕は，6が北東壁付近の床面直上から出土している甕片が接合したもので，7は東寄りの覆土下層から床面直上にかけて出土している甕片が接合したものである。その他，8の砥石が東寄りの床面直上から横位の状態で，9の臼玉が南東壁際の覆土下層から，10の凹石が南東壁面の上から横位の状態で出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第112図 1	椀 土師器	A [9.1] B 8.4 C 4.0	体部下位及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内削ぎ状にやや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。底部ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・長石 橙色 普通	P10 50% 北西寄り覆土上層 体部外面下位煤付着
2	高　坏 土師器	A 20.2 B (6.5)	坏部の破片。脚部との境に強い稜を持ち，外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面斜位のヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい橙色 普通	P8 40% PL30 覆土中
3	高　坏 土師器	A 18.9 B (7.2)	坏部の破片。下位に強い稜を持ち，外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ナデ。接合部外面縦位のヘラナデ。	砂粒・石英・雲母・パミス にぶい橙色　普通	P9 30% 北西寄り床面直上
4	坩 土師器	A [11.0] B 10.0 C 3.4	体部下位及び口縁部一部欠損。平底。体部はソロバン玉状を呈し，口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・石英・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P11 60% PL30 東寄り床面直上 体部内面剝離
5	坩 土師器	A [9.7] B (8.8)	体部下位から口縁部の破片。体部はソロバン玉状を呈し，口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・石英 にぶい褐色 普通	P12 30% 覆土中 口縁部外面煤付着
6	甕 土師器	B (22.3) C 5.2	底部から体部上位の破片。平底。底部は小さく，体部は長胴を呈し，上位に最大径を持つ。	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面ヘラナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 褐色 普通	P13 40% 北東壁寄り床面直上 体部内・外面煤付着
7	甕 土師器	A [17.2] B (11.3)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P14 10% 東寄り覆土下層

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第112図8	砥　石	(8.5)	(4.3)	(1.2)	—	(2.1)	不明	砂岩	東寄り床面直上	Q2
9	臼　玉	0.4	0.4	0.4	0.2	0.1	100	滑石	南東壁際の覆土下層	Q3 PL34
10	凹　石	13.1	8.4	6.8	—	1201.4	100	礫岩	南東壁面の上	Q4 PL34

第４号住居跡（第113図）

位置　調査区の北部，K15f1区。

規模と平面形　長軸6.16m，短軸5.98mの方形。

主軸方向　N－32°－W

壁　壁高は35～49cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝　竈部分を除き全周する。上幅９～17cm，深さ４～７cmで，断面形はU字形である。

床　ほぼ平坦で，踏み締まっている。中央部付近に極めて緩い皿状の窪みがみられる。

ピット　５か所（P_1～P_5）。P_1は径62cmの円形で，深さは70cmである。P_2～P_4は長径47～75cm，短径35～60cmの不整楕円形で，深さ27～80cmである。それぞれ各コーナー付近に付設され，深さには多少差異があるが規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は長径25cm，短径18cmの不整楕円形で，深さ23cmである。南東壁際中央寄りに付設され，規模や位置から出入口ピットと考えられる。

貯蔵穴　北コーナーから竈寄り北西壁沿いに付設され，平面形は長径79cm，短径58cmの不整楕円形で，深さ52cmの円筒状に掘られ，底面は平坦である。

貯蔵穴土層解説

1	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化物・粘土ブロック微量
2	褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子中量，締まり強
3	褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子微量，粘性強
4	褐　色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，締まり強

竈　北西壁中央部の壁面を約40cm壁外に掘り込み，砂混じりの粘土を使用して構築している。規模は，長さ128cm，幅95cm程で，弧状に掘り込んでいる。天井部は崩落しているが，両袖部とも遺存している。燃焼部には，焼土ブロック，焼土粒子，炭化粒子がみられる。火床部は約10cm掘り窪められ，中心部や袖部内側は火熱を受けて赤変硬化している部分がみられる。煙道の立ち上がりは約45度と急である。

竈土層解説

1	褐　色	ローム粒子少量，焼土粒子・粘土粒子微量
2	灰褐色	粘土粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
3	にぶい黄褐色	炭化粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子少量，ローム粒子微量
4	にぶい赤褐色	炭化粒子・粘土粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子少量，ローム粒子微量
5	にぶい赤褐色	焼土粒子・粘土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック・炭化物微量
6	暗褐色	粘土粒子中量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック微量
7	にぶい赤褐色	焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子微量
8	暗赤褐色	焼土中ブロック少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム粒子微量
9	にぶい赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量
10	褐　色	ローム粒子中量，焼土粒子微量
11	褐　色	焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子微量
12	にぶい赤褐色	焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子中量，ローム粒子少量
13	にぶい赤褐色	炭化物・炭化粒子少量，ローム粒子微量
14	明褐色	ローム粒子中量，炭化物・ローム小ブロック少量

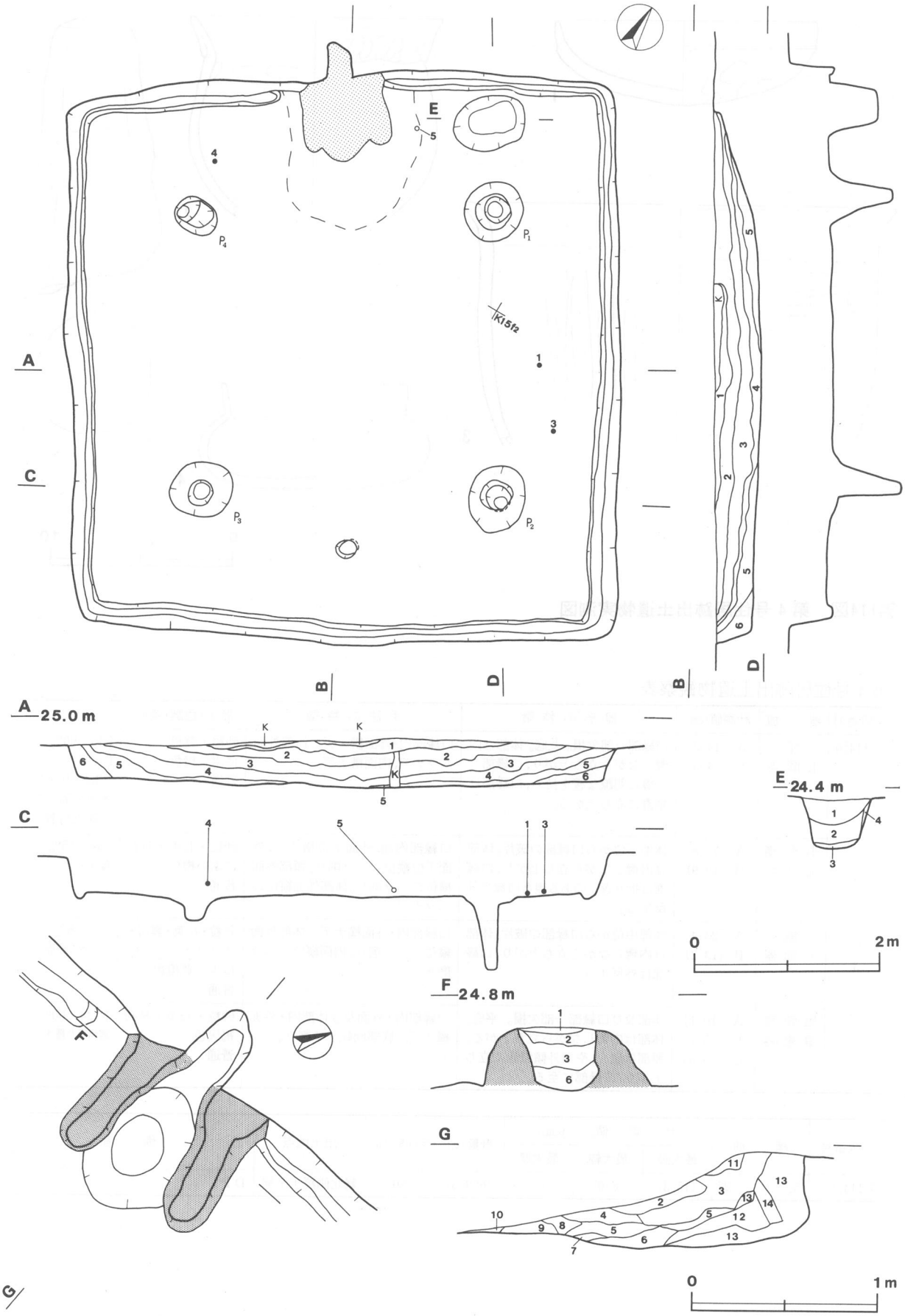
覆土　６層から成る。壁際と下層には褐色土が堆積し，中層から上層にかけて焼土混じりの黒褐色土がレンズ状に堆積する。下層から中層にかけては一部耕作による撹乱を受けている。自然堆積と考えられる。

土層解説

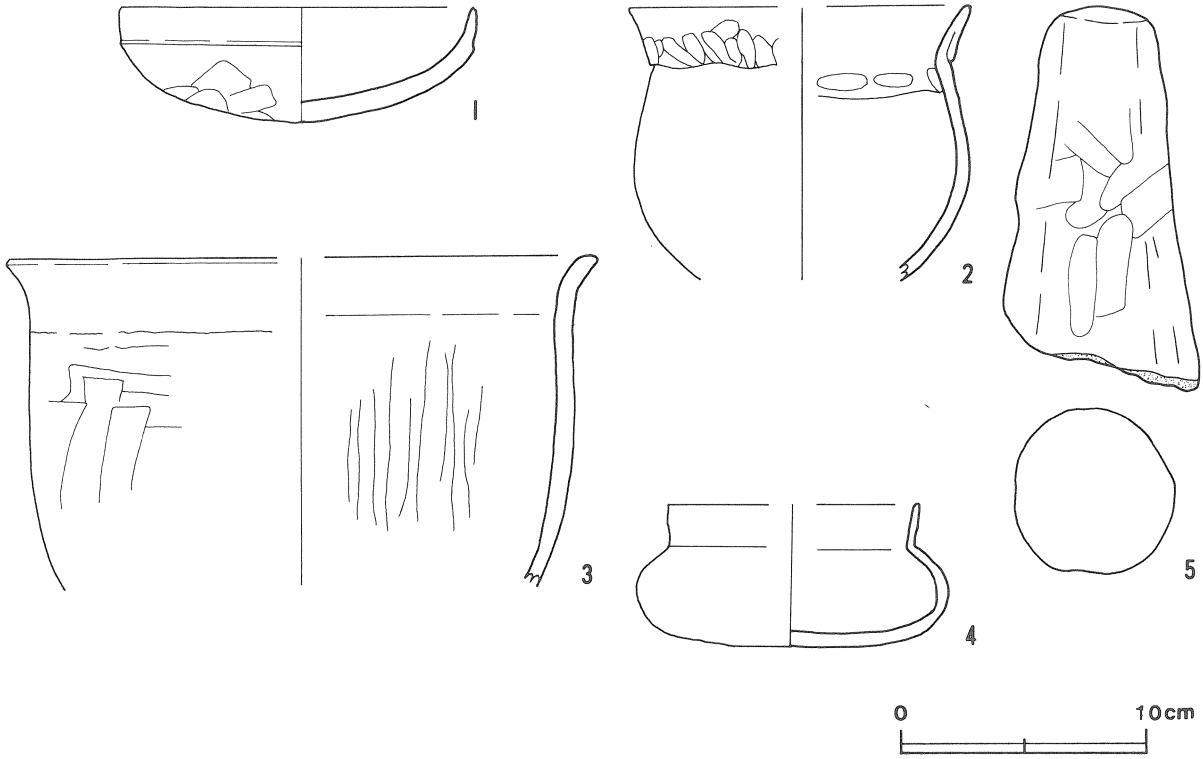
1	黒褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子微量
3	黒褐色	焼土中ブロック少量，ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量
4	褐　色	ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，焼土粒子微量
5	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
6	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量

遺物　北寄りの覆土下層から床面直上にかけ土師器片が少量出土している。第114図１の坏は北東寄りの床面直上から逆位の状態で出土し，２の小形甕は覆土中から，３の甑は北東寄りの床面直上から出土している。４の短頸壺は竈の西寄りの覆土中層から正位の状態で出土し，５の支脚は竈北側の覆土下層から竈の向きに沿って出土している。

所見　本跡は，北西壁に竈を付設する住居跡で，その遺存状態は良好である。時期は，出土遺物から６世紀後半と考えられる。



第113図　第4号住居跡・竈実測図



第114図　第４号住居跡出土遺物実測図

第４号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第114図 1	坏 土師器	A　14.2 B　4.5	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に明瞭な稜を持ち，口縁部は垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P15　90% PL30 北東寄り床面直上 体部外面及び口縁部煤付着
2	小形甕 土師器	A［13.8］ B（10.9）	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は折り返しのある複合口縁で外反する。	口縁部内面，外面上位横ナデ，外面下位縦位のヘラ削り。頸部外面横位のヘラ削り。体部外面縦位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石 にぶい橙色 普通	P16　15% 覆土中
3	甑 土師器	A［23.4］ B（13.2）	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ削り，内面縦位のヘラ磨き。	砂粒・石英・雲母・スコリア にぶい黄橙色 普通	P17　5% 北東寄り床面直上
4	短頸壺 須恵器	A［10.1］ B　5.7 C　5.5	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。頸部は短く，やや外傾気味に立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面及び体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・石英・長石 褐灰色 普通	P134　60% 竈西寄り覆土中層

図版番号	種　別	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚				
第114図５	支　脚	(15.3)	(8.0)	—	(659.5)	80	竈北側覆土下層	ＤＰ1

第５号住居跡（第115図）

位置　調査区の中央部北東端，K15$_{g7}$区。

規模と平面形　長軸5.69m，短軸4.24mの長方形。

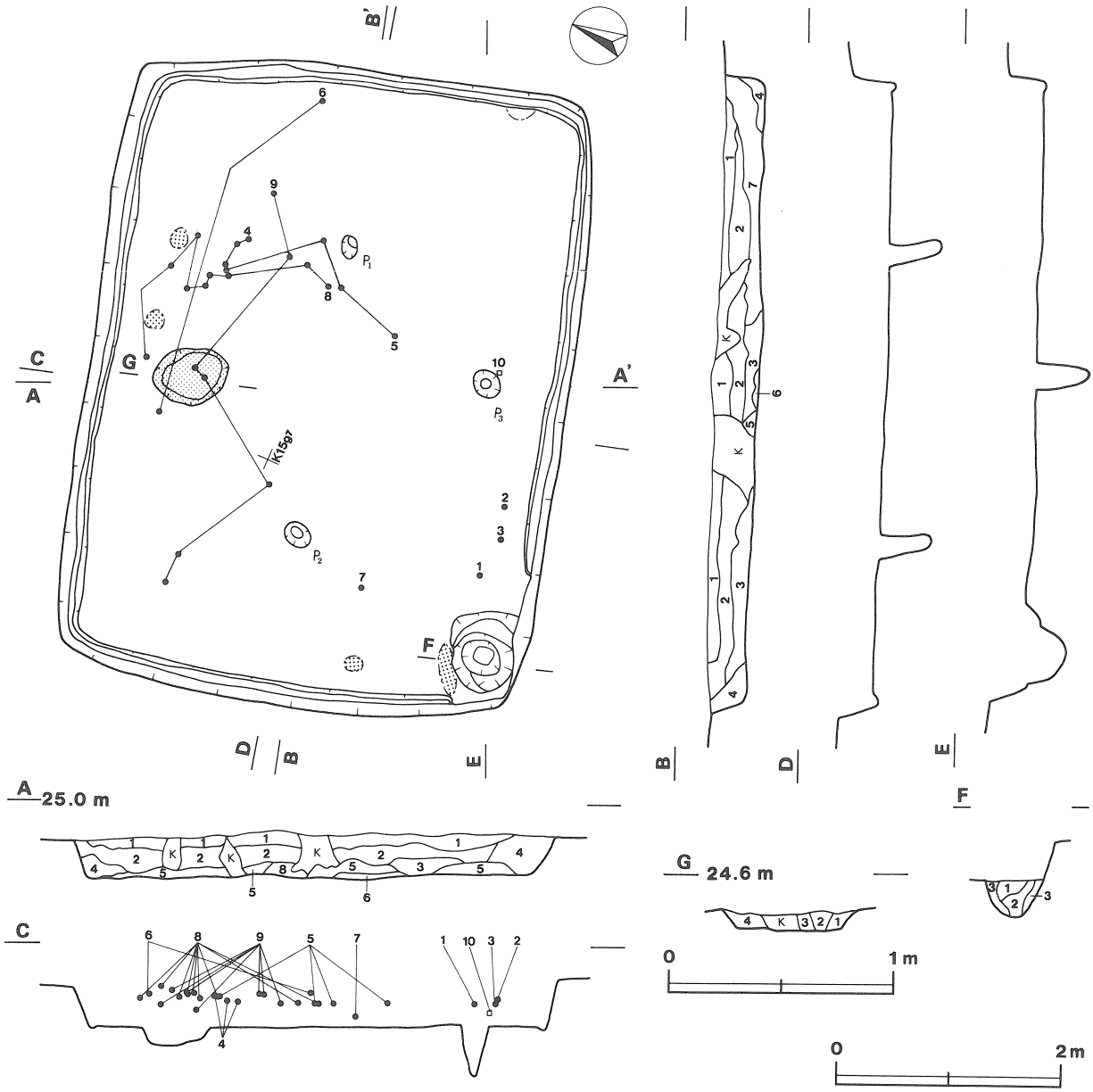
主軸方向　N－74°－E

壁　壁高は30～41cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

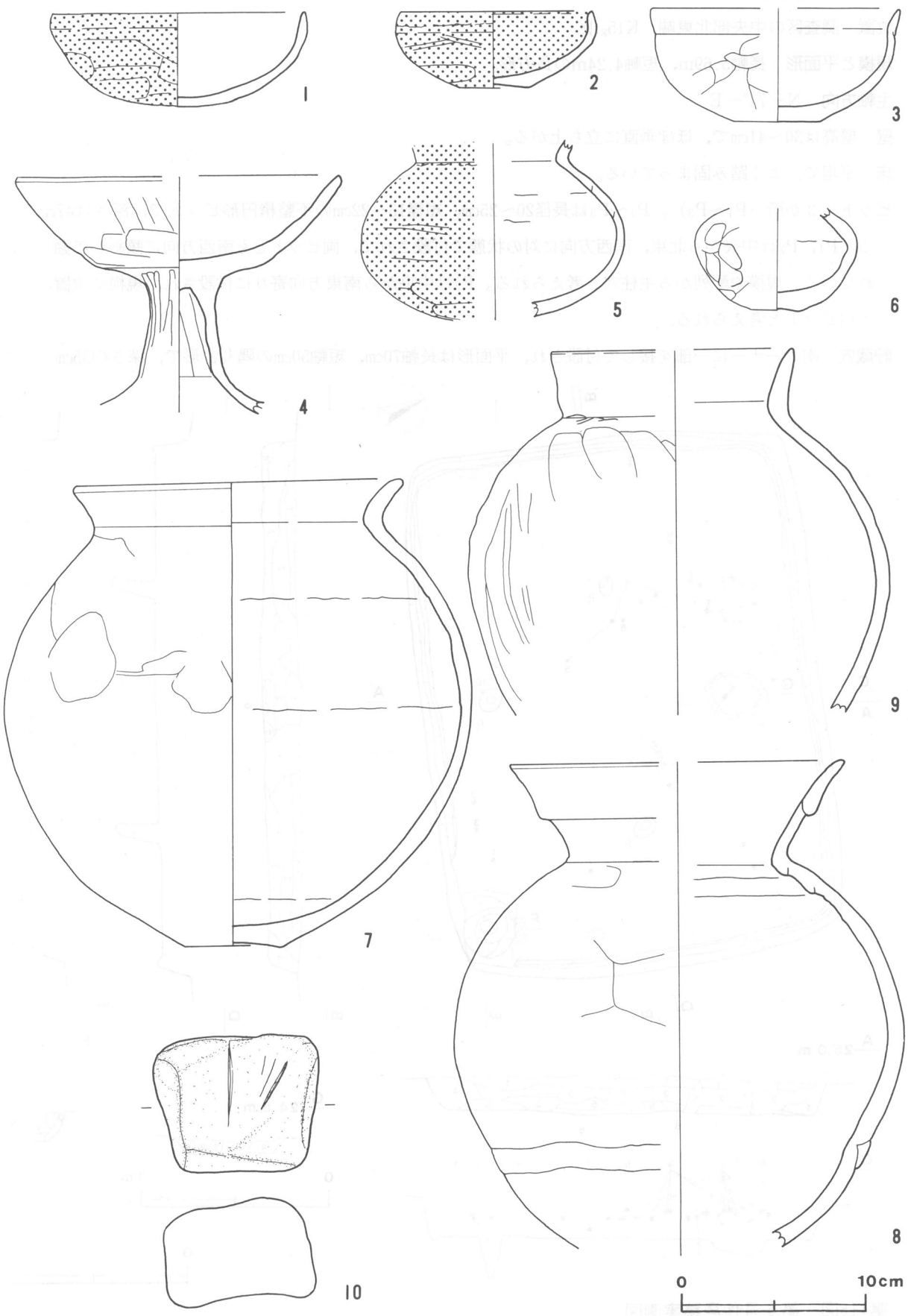
床　平坦で，よく踏み固まっている。

ピット　３か所（P_1～P_3）。P_1～P_3は長径20～25cm，短径15～22cmの不整楕円形ピットで，深さは47cmである。P_1，P_2は中央から北東，南西方向に対の状態で付設されて，両ピットとも南西方向に傾斜して掘り込まれている。規模や配列から主柱穴と考えられる。P_3は中央から南東方向寄りに付設され，規模や位置から出入口ピットと考えられる。

貯蔵穴　南コーナーに一部を接して付設され，平面形は長軸70cm，短軸50cmの隅丸台形で，深さ約35cmで，断



第115図　第５号住居跡実測図



第116図　第５号住居跡出土遺物実測図

面形はU字形である。

貯蔵穴土層解説
1　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子極微量
2　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子極微量
3　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，締まり強

炉　中央部から北西壁寄りに付設され，長径65cm，短径50cmで，床面を7cm掘り窪めた楕円形の地床炉である。炉内覆土には焼土粒子を含む褐色土が堆積しているが，炉床は火熱を受けやや赤変している程度である。

炉土層解説
1　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，炭化粒子極微量
2　褐　　色　焼土粒子少量，ローム粒子微量
3　褐　　色　焼土粒子多量，ローム粒子微量
4　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子微量

覆土　8層から成る。各壁際には焼土粒子，ローム粒子を含む褐色土が堆積している。覆土下層から上層にかけては帯状に耕作による撹乱を受けている。覆土下層ほど堆積状況に乱れがみられ，覆土下層から東側は人為的に埋め戻しが行われ，その後，自然堆積したものと考えられる。

土層解説
1　暗 褐 色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック微量
2　暗 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
3　暗赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子中量，炭化粒子少量，炭化物微量
4　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物微量
5　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
6　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量
7　暗 褐 色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック微量
8　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

遺物　中央から北寄りの覆土中層付近から大量に土師器片が出土している。第116図1～3の坏は，共に南寄りの覆土中層から斜位の状態で出土している。4の高坏，5・6の坩は北寄りの覆土中層から出土し，5は中央寄りの覆土中層から出土している破片と接合し，6は西寄りの覆土中層から出土している破片と接合したものである。7～9の甕は，7が南西寄りの床面直上から斜位の状態で，8・9が北西寄りの覆土中層から点在している甕片が接合したものである。その他，10の砥石が東寄りの覆土下層から出土している。

所見　本跡から出土している遺物は，ほぼ中層位から出土していることから住居の廃棄に伴い，遺物を投棄したものと考えられる。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第116図 1	坏 土師器	A　13.7 B　5.0	体部上位及び口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに内傾し，口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面横ナデ。外面赤彩。	砂粒・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P18　70% PL30 南寄り覆土中層
2	坏 土師器	A　10.3 B　4.1 C　3.8	体部上位及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P19　70% PL30 南寄り覆土中層
3	坏 土師器	A［13.3］ B　6.1 C　4.4	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は折り返しのある複合口縁で，内面に稜を持ち，外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・石英・スコリア・雲母 にぶい黄橙色 普通	P21　30% 南寄り覆土中層 体部及び底部煤付着 内面剝離
4	高　坏 土師器	A［17.6］ B（12.7）	裾部から坏部の破片。脚部はほぼ柱状を呈し，裾部は下方に開く。坏部は脚部との境に強い稜を持ち，外傾し，外上方に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラナデ，内面ナデ。脚部外面縦位のヘラナデ。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい黄橙色 普通	P20　50% 北寄り覆土中層 坏部外面煤付着
5	坩 土師器	B（9.2）	体部下位から口縁部の破片。体部は潰れた球形状を呈し，最大径を体部中位に持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。外面赤彩。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P22　30% 北寄り覆土中層 体部外面下位煤付着

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第116図 6	坩 土師器	B (5.5) C　2.8	底部から体部上位の破片。平底。体部は潰れた球形状を呈し，最大径を体部上位に持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい黄橙色 普通	P23　30% 北寄り覆土中層 内面剝離
7	甕 土師器	A　17.4 B　25.0 C　5.4	平底。体部は内彎しながら立ち上がり，球形状を呈し，最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・石英・長石・スコリア 浅黄橙色 普通	P24　100% PL30 南西寄り床面直上 体部外面剝離 体部外面煤付着
8	甕 土師器	A [18.2] B (26.1)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は折り返しのある複合口縁で，「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。体部外面粘土紐補強痕。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P25　40% 北西寄り覆土中層
9	甕 土師器	A [13.2] B (19.5)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ削り，内面横ナデ。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい橙色 普通	P26　30% 北西寄り覆土中層

図版番号	種　別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第116図10	砥　石	(7.4)	(10.5)	(6.0)	—	(605.6)	不明	砂岩	東寄り覆土下層	Q5　PL34

第6号住居跡（第117・118図）

位置　調査区の中央からやや北側，K15$_{i5}$区。

規模と平面形　長軸7.38m，短軸7.26mの方形。

主軸方向　N—46°—W

壁　壁高は40～53cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝　竈部分と南コーナー付近の一部にはみられない。また，南東壁付近は根切り溝により削平されて確認できなかった。残存する壁溝は上幅7～15cm，深さ3～5cmで，断面形はU字形である。

床　ほぼ平坦で，踏み締まっている。東コーナーから南コーナーのやや西側に向かって，根切り溝による削平がみられる。

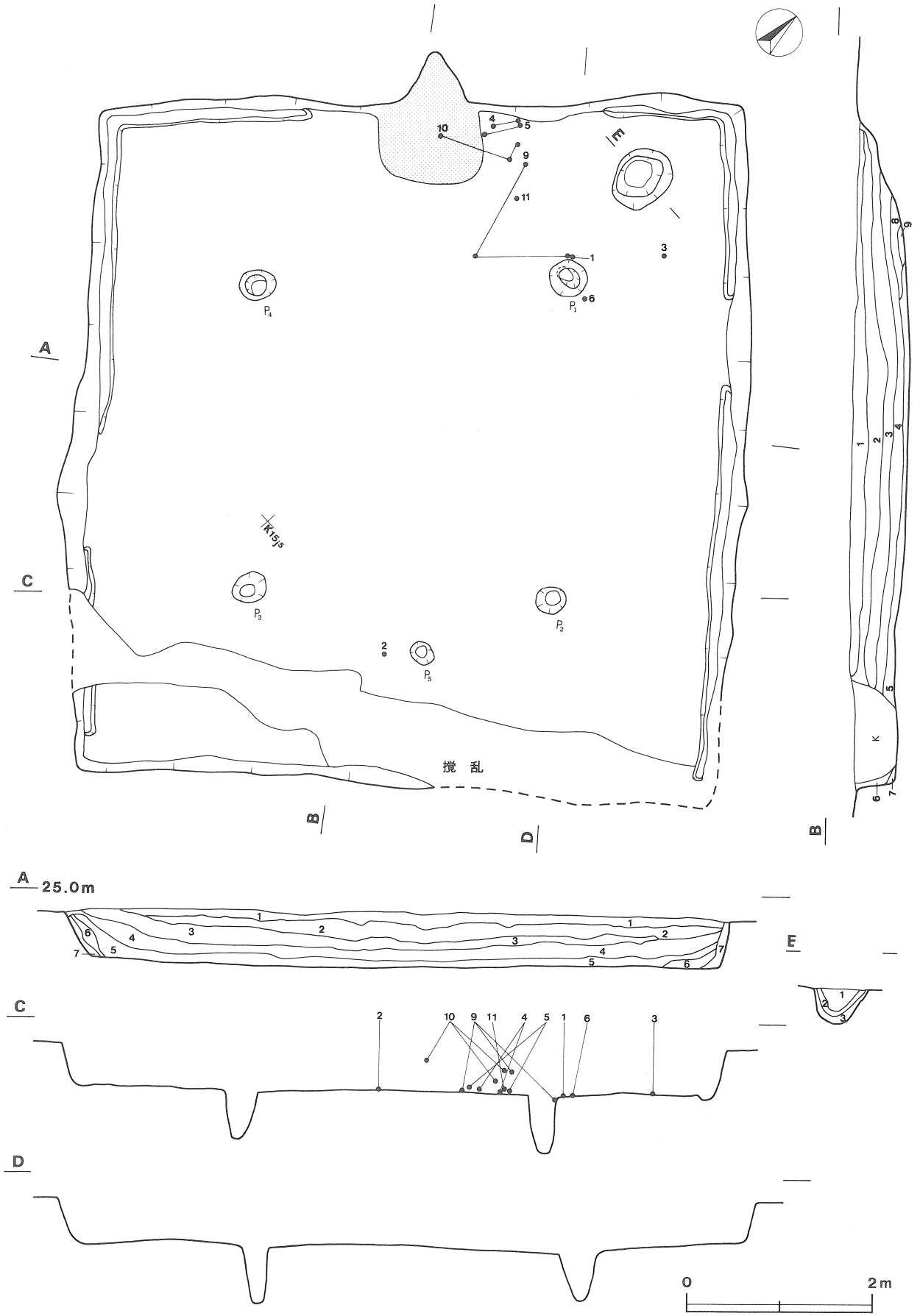
ピット　5か所（P_1～P_5）。P_1は径43cmの円形で，深さは52cmである。P_2～P_4は長径33～39cm，短径30～33cm，深さ52～64cmの楕円形である。いずれも各コーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は長径33cm，短径22cmの不整楕円形で，深さ19cmである。南東壁際中央寄りに付設され，規模や位置から出入口ピットと考えられる。

貯蔵穴　北コーナー付近に付設され，平面形は長径73cm，短径60cmの不整楕円形で，深さ40cmに掘り込まれ，断面はU字形で，底面は中央に向かって緩く傾斜している。

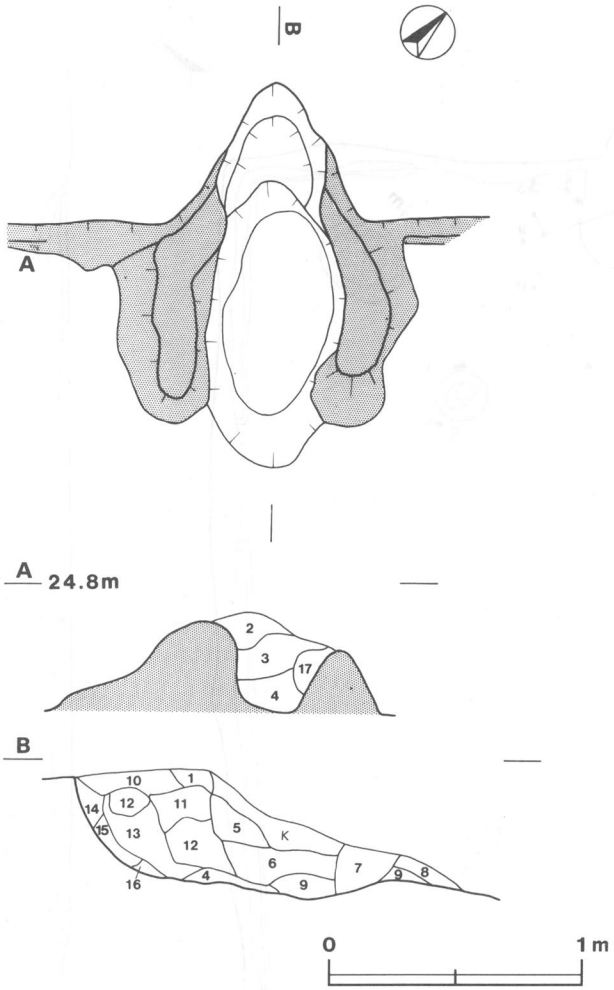
貯蔵穴土層解説

1　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量，炭化物・焼土小ブロック極微量
2　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，焼土粒子極微量
3　褐　色　ローム粒子多量，焼土小ブロック・ローム小ブロック極微量

竈　北西壁中央部の壁面を約63cm壁外に掘り込み，砂混じりの粘土を使用して構築している。規模は，長さ140cm，幅112cm程で，平面は三角形状をしている。天井部は崩落しているが，両袖部とも遺存している。燃焼部には，焼土ブロック，焼土粒子が厚く堆積し，炭化粒子もみられる。火床部は約13cm程掘り窪められ，中心部や袖部内側は焼けて赤変硬化している。煙道の立ち上がりは約25度で緩やかである。



第117図　第６号住居跡実測図(1)



第118図　第6号住居跡竈実測図(2)

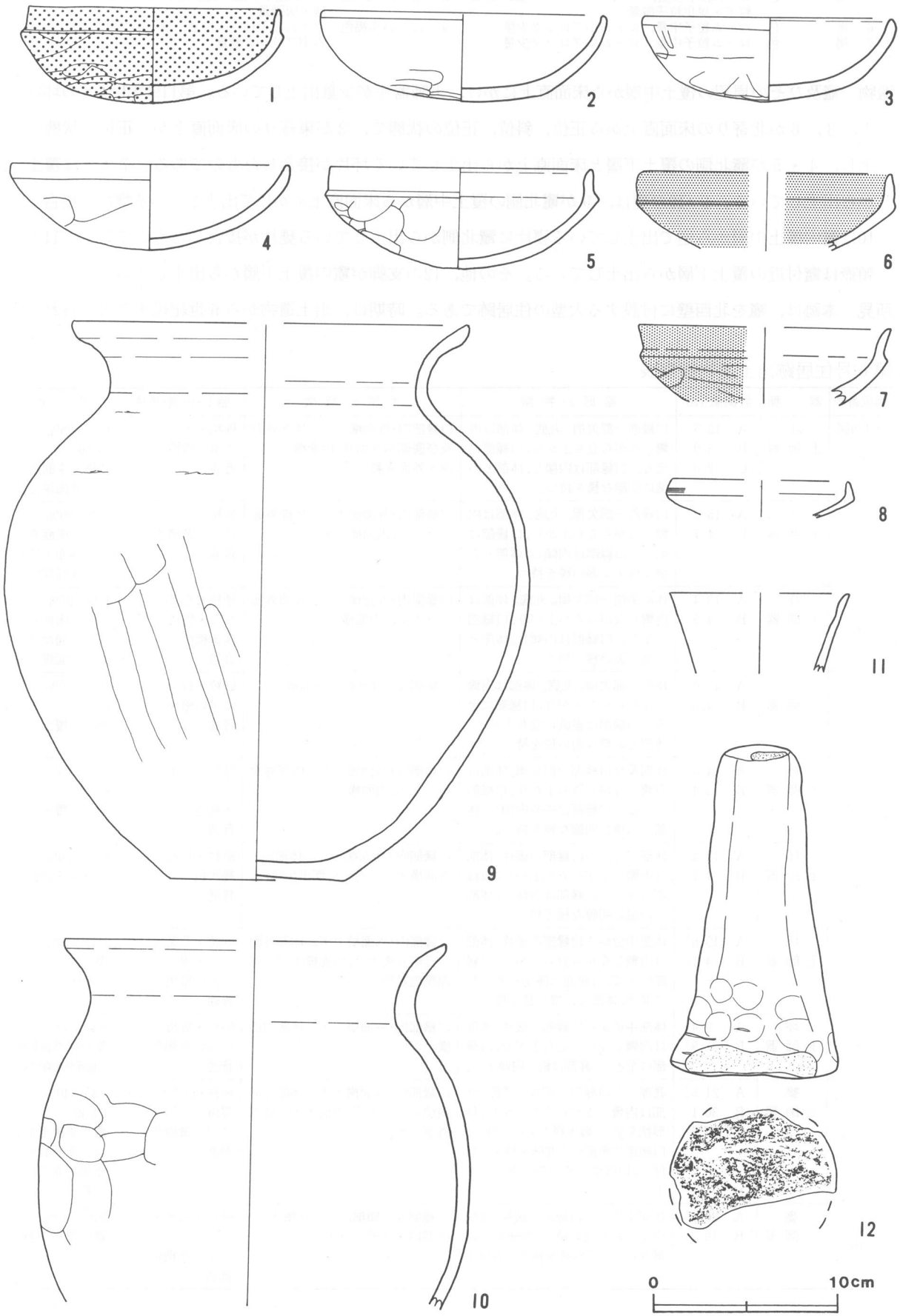
竈土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少量，灰微量，焼土中ブロック・炭化物極微量
2	暗褐色	灰少量，焼土中ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム粒子極微量
3	にぶい褐色	炭化物・ローム粒子・灰少量，焼土小ブロック・砂極微量
4	にぶい褐色	炭化物・ローム小ブロック・砂・灰少量，焼土粒子・粘土粒子極微量
5	黒褐色	ローム小ブロック少量，焼土ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム粒子極微量
6	極暗褐色	焼土小ブロック・ローム粒子・砂少量，焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック極微量
7	にぶい褐色	焼土小ブロック・灰少量，焼土粒子・炭化物・ローム粒子・粘土粒子極微量
8	褐色	焼土小ブロック・ローム粒子・砂少量，焼土粒子・炭化物・粘土粒子極微量
9	にぶい橙色	焼土小ブロック中量，焼土粒子・炭化物・粘土粒子・砂少量
10	褐色	焼土粒子・ローム粒子・粘土粒子・灰・砂少量，焼土小ブロック・炭化粒子微量
11	にぶい褐色	粘土粒子多量，焼土粒子・ローム粒子少量，粘性・締まり極強
12	にぶい橙色	粘土粒子多量，焼土粒子少量，ローム粒子微量，粘性・締まり極強
13	赤褐色	焼土粒子多量，焼土小ブロック少量，炭化粒子・ローム粒子微量，粘性・締まり強
14	明赤褐色	焼土粒子多量，粘土粒子少量
15	暗赤褐色	炭化粒子多量，焼土粒子中量，粘土粒子少量，ローム粒子微量
16	明赤褐色	焼土粒子・粘土粒子多量
17	にぶい褐色	焼土粒子・粘土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子微量，粘性・締まり極強

覆土　9層から成る。北西壁を除く壁際には褐色土が堆積し，床面には焼土粒子を含む褐色土が堆積している。下層から上層にかけて焼土粒子混じりの黒褐色土がレンズ状に堆積しており，自然堆積と思われる。南東壁沿いは根切り溝による撹乱を受けている。

土層解説

1	黒褐色	焼土粒子・ローム中ブロック・ローム粒子・砂微量
2	黒褐色	ローム中ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・砂微量
3	黒褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
4	黒褐色	ローム粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック少量，炭化粒子微量



第119図　第６号住居跡出土遺物実測図

5　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
7　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
8　暗赤褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック・砂・灰微量
9　にぶい赤褐色　ローム粒子・砂・灰中量，焼土小ブロック・ローム小ブロック微量

遺物　竈及びその周辺の覆土中層から床面直上にかけ，土師器片が少量出土している。第119図1～8の坏は，1，3，6が北寄りの床面直上から正位，斜位，正位の状態で，2が東寄りの床面直上から正位の状態で出土し，4・5が竈北側の覆土下層と床面直上から出土している坏片が接合したものである。7・8は覆土中から出土している。9・10の甕は，9が竈北側の覆土中層から床面直上にかけて出土している甕片が接合し，10は竈内覆土中層から逆で出土している甕片に竈北側から出土している甕片が接合したものである。11の長頸壺は竈付近の覆土下層から出土している。その他，12の支脚が竈内覆土下層から出土している。

所見　本跡は，竈を北西壁に付設する大型の住居跡である。時期は，出土遺物から6世紀後半と考えられる。

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第119図 1	坏 土師器	A 13.5 B 5.0 C 2.0	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は内傾し，体部との境に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面及び底部ヘラ削り，内面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P27 95% PL30 北寄り床面直上 内・外面煤付着
2	坏 土師器	A 15.2 B 4.7	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は内傾し，体部との境に極めて弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面横ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P28 95% 東寄り床面直上 体部外面上位及び口縁部煤付着
3	坏 土師器	A 13.4 B 4.5	体部中位一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は内傾し，体部との境に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面横ナデ。	砂粒・石英・スコリア・雲母 浅黄橙色 普通	P29 95% 北寄り床面直上 体部外面及び口縁部内面煤付着
4	坏 土師器	A 15.0 B 4.5	体部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は垂直に立ち上がり，体部との境に弱い稜を持つ。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P30 80% PL30 竈北側覆土下層
5	坏 土師器	A 14.0 B 5.4	体部及び口縁部一部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部はやや内傾し，体部との境に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面横ナデ。	砂粒・石英・パミス 灰褐色 普通	P31 80% PL30 竈北側覆土下層
6	坏 土師器	A [13.4] B (4.1)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は内傾し，体部との境に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・長石 褐灰色 普通	P32 20% 北寄り床面直上
7	坏 土師器	A [13.6] B (4.1)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は僅かに外反して開き，体部との境に稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面横ナデ。外面黒色処理。	砂粒・石英・スコリア・雲母 にぶい橙色 普通	P33 10% 覆土中
8	坏 土師器	A [9.4] B (1.9)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は鋭く内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	P34 5% 覆土中 外面剝離 口縁部外面煤付着
9	甕 土師器	A [21.5] B 30.1 C 9.5	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，球形状を呈し，最大径を上位に持つ。口縁部は頸部から丸味を持って外反し，口唇部はやや外上方に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラナデ，内面ナデ。底部外面ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	P35 40% PL30 竈北側覆土中層及び床面直上 体部外面下位煤付着
10	甕 土師器	A [20.4] B (19.7)	体部中位から口縁部の破片。体部中位に最大径を持ち，頸部から口縁部にかけて丸味を持って外反する。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・石英・スコリア・パミス にぶい黄橙色 普通	P36 50% 竈内覆土中層

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第119図 11	長頸壺 須恵器	A［9.8］ B（4.4）	口縁部の破片。口縁部は僅かに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 黄灰色 普通	P135　5% 竈付近覆土下層 二次焼成

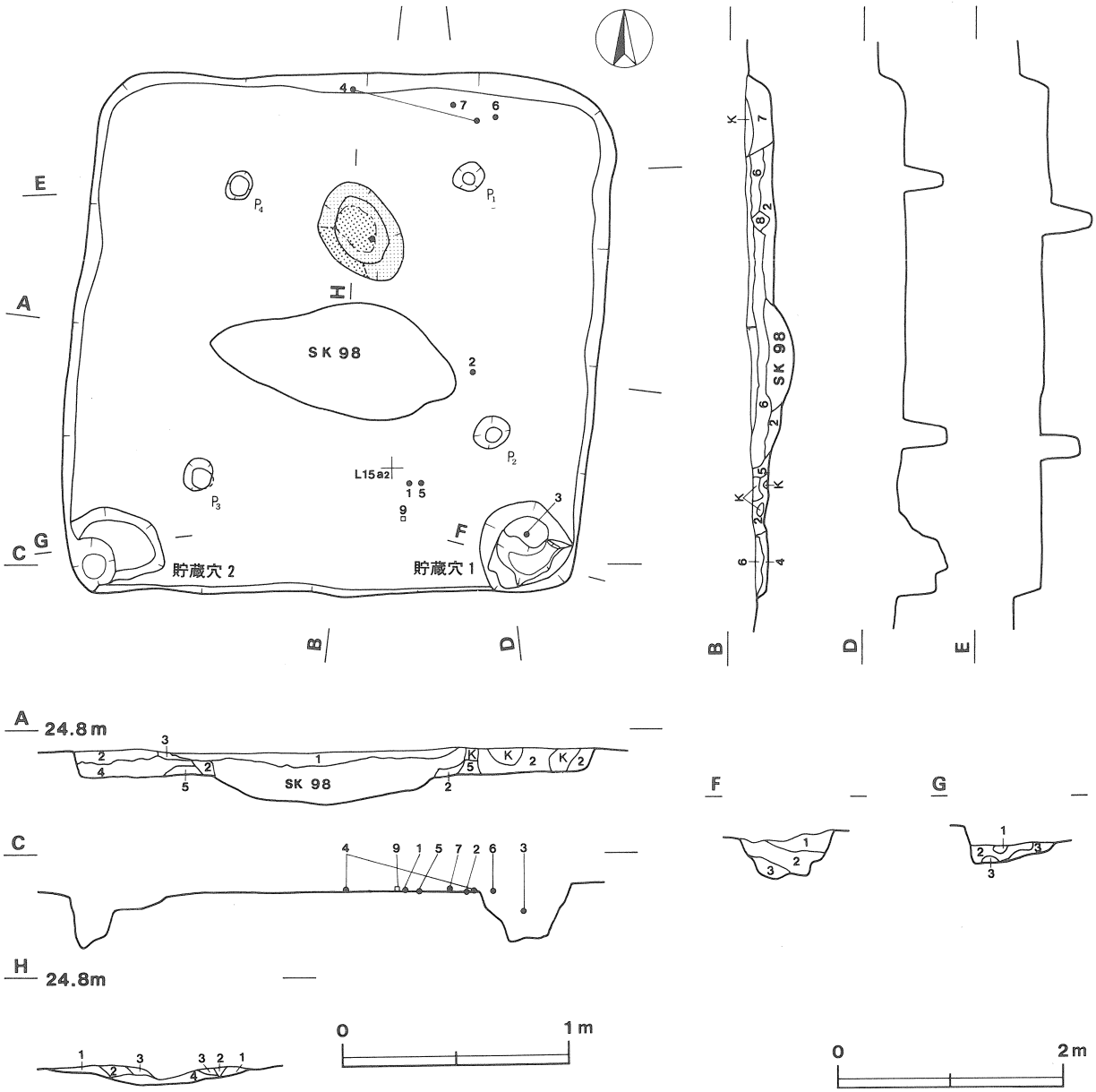
図版番号	種　別	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚				
第119図12	支　脚	18.0	(9.0)	—	(699.6)	95	竈内覆土下層	DP2　底部木葉痕　PL34

第7号住居跡（第120図）

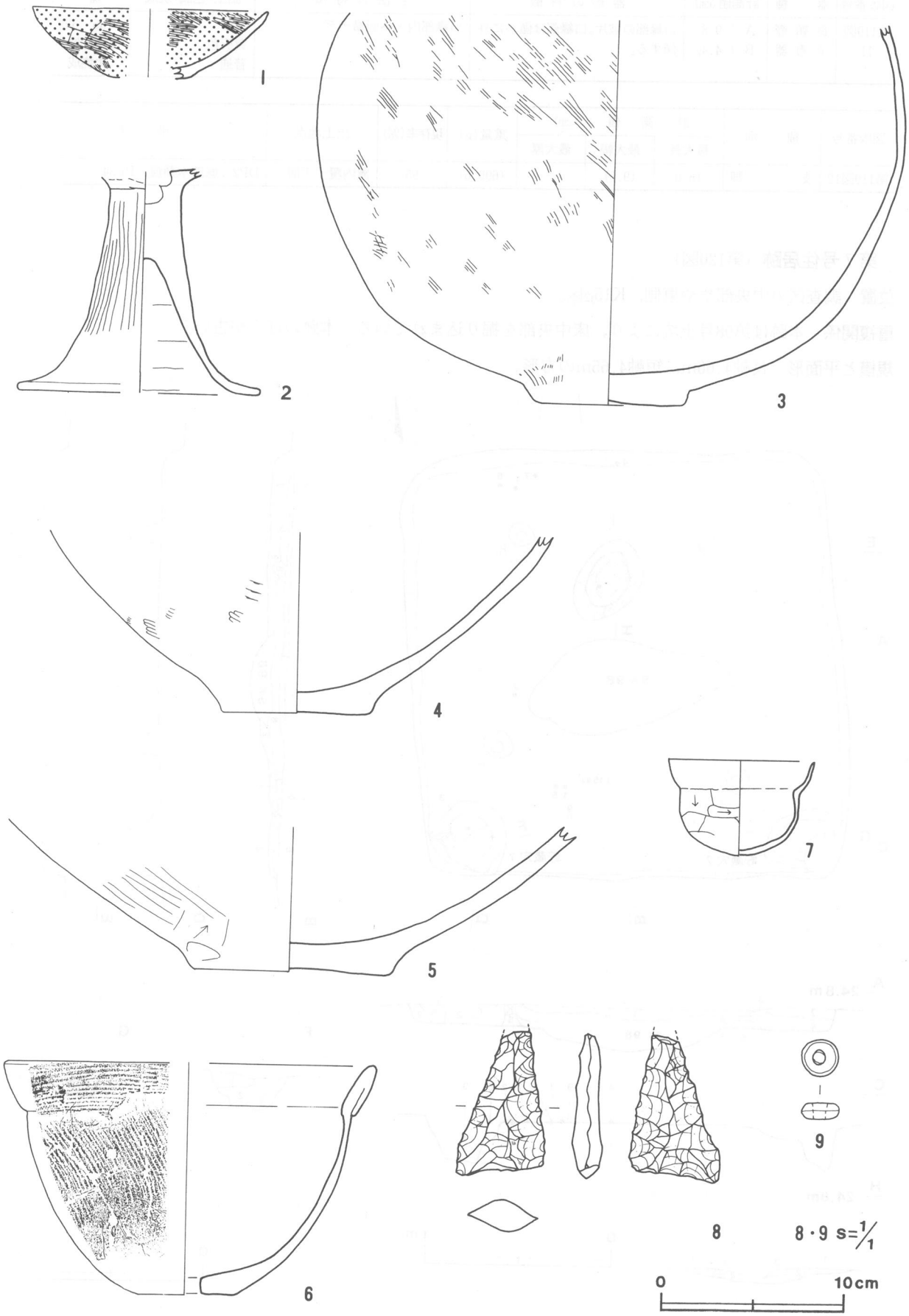
位置　調査区の中央部やや東側，K15j2区。

重複関係　本跡は第98号土坑により，床中央部を掘り込まれている。本跡のほうが古い。

規模と平面形　長軸4.66m，短軸4.65mの方形。



第120図　第7号住居跡実測図



第121図　第７号住居跡出土遺物実測図

主軸方向　N－50°－E

壁　壁高は10～25cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦で，踏み締まっている。

ピット　4か所（P_1～P_4）。P_1～P_4は長径26～33cm，短径22～28cmの不整楕円形で，深さは34～40cmである。それぞれ各コーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。

貯蔵穴　2か所。貯蔵穴1は南東コーナーに一部を接して付設され，平面形は長軸88cm，短軸80cmの隅丸台形で，擂鉢状に掘られ，深さは約46cmである。底面には木根跡による落ち込みがみられる。貯蔵穴2は南西コーナーに接して付設され，平面形は長径80cm，短径66cmの楕円形である。深さ40cm程の袋状に掘り込まれ，底面は凸状を呈している。

貯蔵穴1土層解説
1　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック微量
2　暗褐色　ローム小ブロック少量，ローム粒子極微量
3　明褐色　ローム小ブロック・ローム粒子多量

貯蔵穴2土層解説
1　褐　色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロツク極微量
2　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック極微量，締まり強
3　明褐色　ローム小ブロツク・ローム粒子少量，締まり強

炉　中央から北寄りに付設され，長径95cm，短径65cmで，床面を15cm掘り窪めた楕円形の地床炉である。炉内覆土には焼土ブロックを含む明赤褐色土が厚く堆積し，炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，炭化粒子極微量
2　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量
3　明褐色　焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子少量
4　明赤褐色　焼土中ブロック・焼土粒子多量，炭化物中量

覆土　8層から成る。各壁際には褐色土が堆積している。北壁と東壁際は耕作による撹乱をうけ，中央部分は第98号土坑に掘り込まれている。人為的に埋め戻されたものと思われる。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量
3　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
4　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
5　褐　色　ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
6　暗褐色　焼土粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック微量
7　褐　色　焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム粒子少量
8　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量

遺物　中央付近から南西寄りの床面直上にかけ土師器片が中量出土している。第121図1・2の高坏は，1が南寄りの床面直上から，2が東寄りの床面直上から出土している。3の壺は貯蔵穴1の覆土上層から逆位の状態で出土したものである。4・5の甕は，北壁際と南寄りで共に床面直上から出土している。6・7の甑，ミニチュア土器は，共に東寄りの床面直上から出土したものである。その他，9の臼玉が南寄りの床面直上から出土しているが，覆土中から出土している8の石鏃は混入したものと思われる。

所見　本跡の時期は，出土遺物から5世紀前半と考えられる。

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第121図 1	高　坏 土師器	A［12.8］ B（3.7）	坏部の破片。坏部は下位に稜を持ち，内彎しながら立ち上がり，外上方に開く。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面刷毛目整形後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	P37　10% 南寄り床面直上
2	高　坏 土師器	B（11.9） D［13.2］	袖部から脚部の破片。脚部は柱状に下方に開く。	脚部外面縦位のヘラナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P38　30% 東寄り床面直上 体部外面煤付着

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第121図 3	壺 土師器	B (21.0) C 8.4	底部から体部上位の破片。やや突出した平底。体部は球形を呈する。	体部外面刷毛目整形後ヘラ磨き，内面ナデ。底部ナデ。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P40 70% 貯蔵穴1の覆土上層 内面剝離 体部外面煤付着
4	甕 土師器	B (9.8) C 8.0	底部から体部中位の破片。突出した平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部外面刷毛目整形後ナデ，内面ナデ。底部丁寧なナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P41 30% PL31 北壁際床面直上 二次焼成 内面剝離
5	甕 土師器	B (7.9) C 10.7	底部から体部下位の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面丁寧なヘラナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・石英・スコリア・雲母 橙色 普通	P42 30% 南寄り床面直上
6	甑 土師器	A [20.0] B 12.4 C 5.0	体部及び口縁部一部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は折り返しのある複合口縁となる。底部は単孔を穿つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面刷毛目整形，体部外面刷毛目整形後ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・スコリア・パミス 橙色 普通	P43 50% PL31 東寄り床面直上
7	ミニチュア土器 土師器	A 8.0 B 5.1	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外上方に開き，立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面横ナデ，外面上位縦位のヘラナデ，中位よりナデ。	砂粒・スコリア・パミス・雲母 にぶい橙色 普通	P39 60% PL31 東寄り床面直上

図版番号	種　別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第121図 8	石　鏃	(2.7)	(1.6)	1.2	—	(1.7)	80	頁岩	覆土中層	Q6 PL34
9	臼　玉	0.65	0.65	0.3	0.2	0.1	100	滑石	南寄り床面直上	Q7 PL34

第8号住居跡（第122図）

位置　調査区のほぼ中央，L14e8区。

規模と平面形　長軸5.56m，短軸5.31mの方形。

主軸方向　N－47°－W

壁　壁高は22～36cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝　各壁下の一部分にみられる。上幅7～14cm，深さ3～6cmで，断面形はU字形である。

床　平坦で，踏み締まっている。

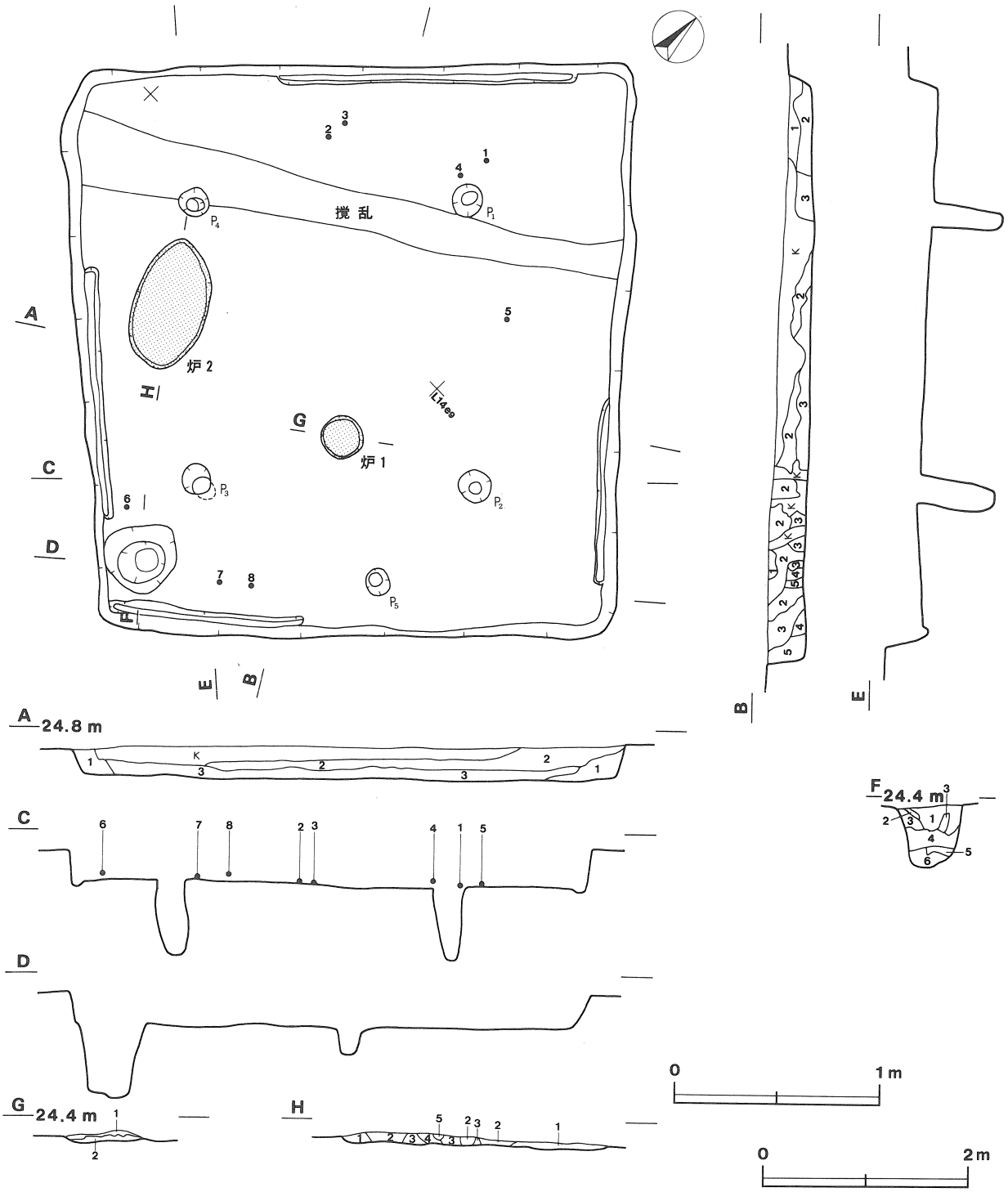
ピット　5か所（P_1～P_5）。P_1，P_4は長径30cm，短径25～27cmで，深さ67～74cmの不整楕円形で，P_2，P_3は径30cm，深さ70～75cmの円形である。いずれも各コーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は長径27cm，短径22cmで，深さ25cmの不整楕円形で，南東壁際中央寄りにあり，規模や位置から出入口ピットと考えられる。

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は長径72cm，短径63cmの隅丸台形である。深さは約60cmで，円筒状に掘り込まれ，底面は皿状である。

貯蔵穴土層解説

1　暗褐色　ローム中ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物極微量
2　明褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量，焼土粒子極微量
3　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物極微量
4　褐　色　ローム粒子中量，炭化物・ローム小ブロック少量，焼土粒子極微量
5　明褐色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック少量
6　暗褐色　焼土小ブロック・炭化物・ローム粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロツク少量

炉　2か所。炉1は中央からやや南東寄りに付設されている。径40cmの円形で，床面を7cm掘り窪めた地床炉である。炉床の一部は削平され残存しないが，残存部分は火熱を受け赤変している。炉2は南西壁寄り中央部に付設されている。長径127cm，短径72cmで，床面を8cm掘り窪めた楕円形の地床炉である。炉内覆土には粘土ブロックを含む赤褐色土，粘土粒子を含む明褐色土が堆積している。炉床は火熱を受け赤変硬化している。



第122図　第8号住居跡実測図

炉1土層解説

1　明褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物極微量

2　明褐色　ローム粒子中量，焼土中ブロック・ローム小ブロック少量，焼土粒子極微量

炉2土層解説

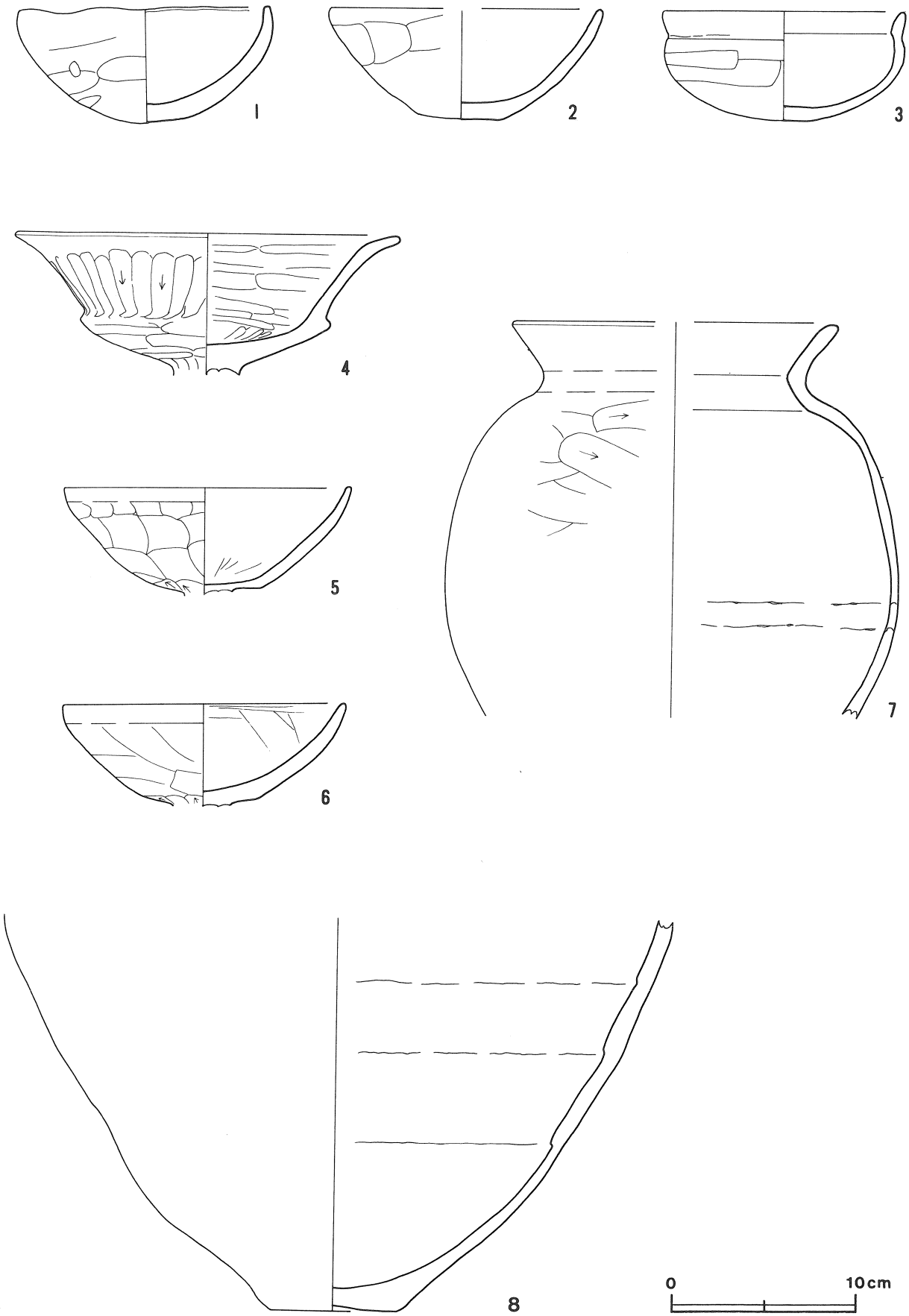
1　明褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子・粘土粒子少量，炭化物・ローム小ブロック極微量

2　赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量，粘土ブロック極微量

3　明褐色　焼土粒子・ローム粒子少量，焼土中ブロック・炭化物・ローム小ブロック極微量

4　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量，炭化物・ローム小ブロック極微量

5　褐　色　焼土小ブロック・ローム粒子微量



第123図　第８号住居跡出土遺物実測図

覆土　5層から成る。北東壁から中央付近にかけて褐色土，暗褐色土が複雑に堆積し，壁際には黒褐色土が堆積している。床面上から中層にかけては焼土粒子を含む褐色土が厚く堆積しているが，中層から上層にかけて耕作による撹乱を受け残存状態は悪い。人為堆積と思われる。

土層解説

1　赤褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，焼土粒子・炭化物微量
2　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック微量
4　暗褐色　焼土粒子・炭化物微量，ローム小ブロック極微量
5　黒褐色　焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック微量

遺物　南寄りの覆土下層及び床面直上と，北寄りの床面直上から土師器が出土している。第123図1，4の坏，高坏は北寄りの床面直上から逆位の状態で，2・3の坏は，北西の床面直上から逆位の状態でそれぞれ並んで出土している。5・6の高坏は，5が北東寄りの床面直上から，6が南コーナー付近の覆土中層から正位の状態で出土している。7・8の甕は，共に南東寄りの床面直上と覆土下層から出土している。

所見　本跡から出土している坏の出土状況は，意図的に逆位に伏せた状態で出土するものが大部分で，祭祀行為との関連も考えられる。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第123図 1	坏 土師器	A　13.4 B　6.2 C　2.0	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のナデ，内面ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P44　98% PL31 北寄り床面直上 体部外面煤付着
2	坏 土師器	A［14.6］ B　6.0 C　4.0	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・石英・長石・スコリア にぶい橙色　普通	P45　60% 北西床面直上 体部外面中位煤付着
3	坏 土師器	A　13.1 B　5.9 C　3.0	体部及び口縁部一部欠損。小さな平底。体部は内彎しながら立ち上がり，やや器厚を増して口縁部に至る。口縁部内面に稜を持ち，やや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。底部ヘラナデ。	砂粒・スコリア・パミス にぶい橙色 普通	P46　60% 北西床面直上
4	高坏 土師器	A　20.6 B（7.5）	坏部。坏部下位に段を有し，上位は外傾しながら外上方に開き，口縁部は反る。	口縁部内・外面中位縦位の強いナデ，内面下位及び外面下位ナデ。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P47　50% PL31 北寄り床面直上 口縁部煤付着
5	高坏 土師器	A　15.4 B（5.7）	坏部。下位に弱い稜を持ち，内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P48　50% 北東寄り床面直上 外面煤付着
6	高坏 土師器	A　15.2 B（5.5）	坏部。下位に稜を持ち，内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面斜位のヘラナデ。坏部内・外面ナデ。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P49　40% 南コーナー付近覆土中層 内・外面煤付着
7	甕 土師器	A［17.6］ B（21.2）	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は「く」の字状に外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。頸部内面ヘラ整形痕。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P50　40% 南東寄り床面直上 二次焼成
8	甕 土師器	B（21.2） C　6.9	底部から体部中位の破片。小さな平底。体部は長胴を呈し，上位に最大径を持つと推測される。	体部外面ヘラ削り後横位のナデ，内面ヘラナデ。底部ヘラナデ。内面輪積み痕。	砂粒・石英・長石・スコリア にぶい橙色　普通	P51　50% 南東寄り覆土下層 内・外面煤付着

第9号住居跡（第124図）

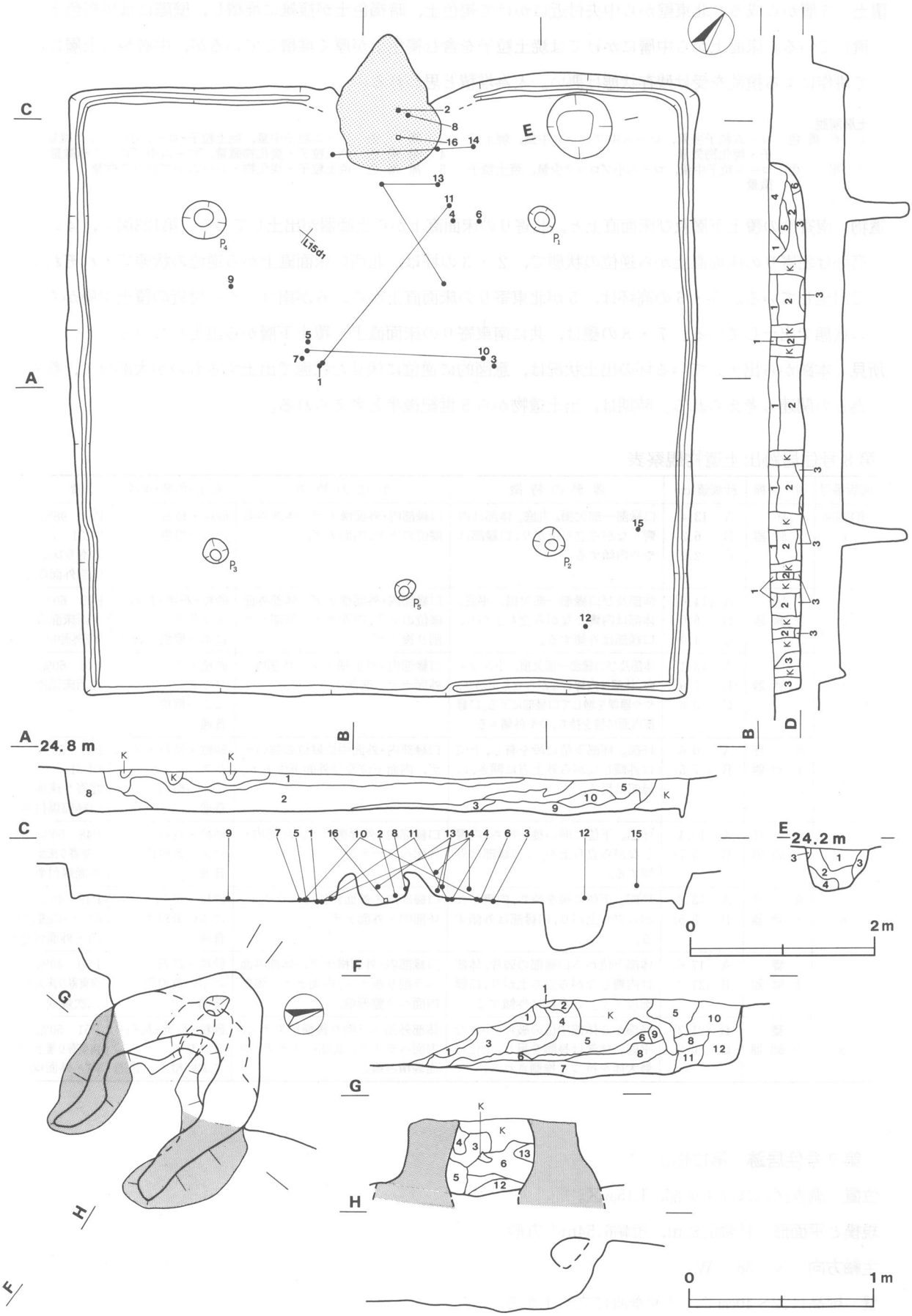
位置　調査区のほぼ中央部，L15d1区。

規模と平面形　長軸6.82m，短軸6.54mの方形。

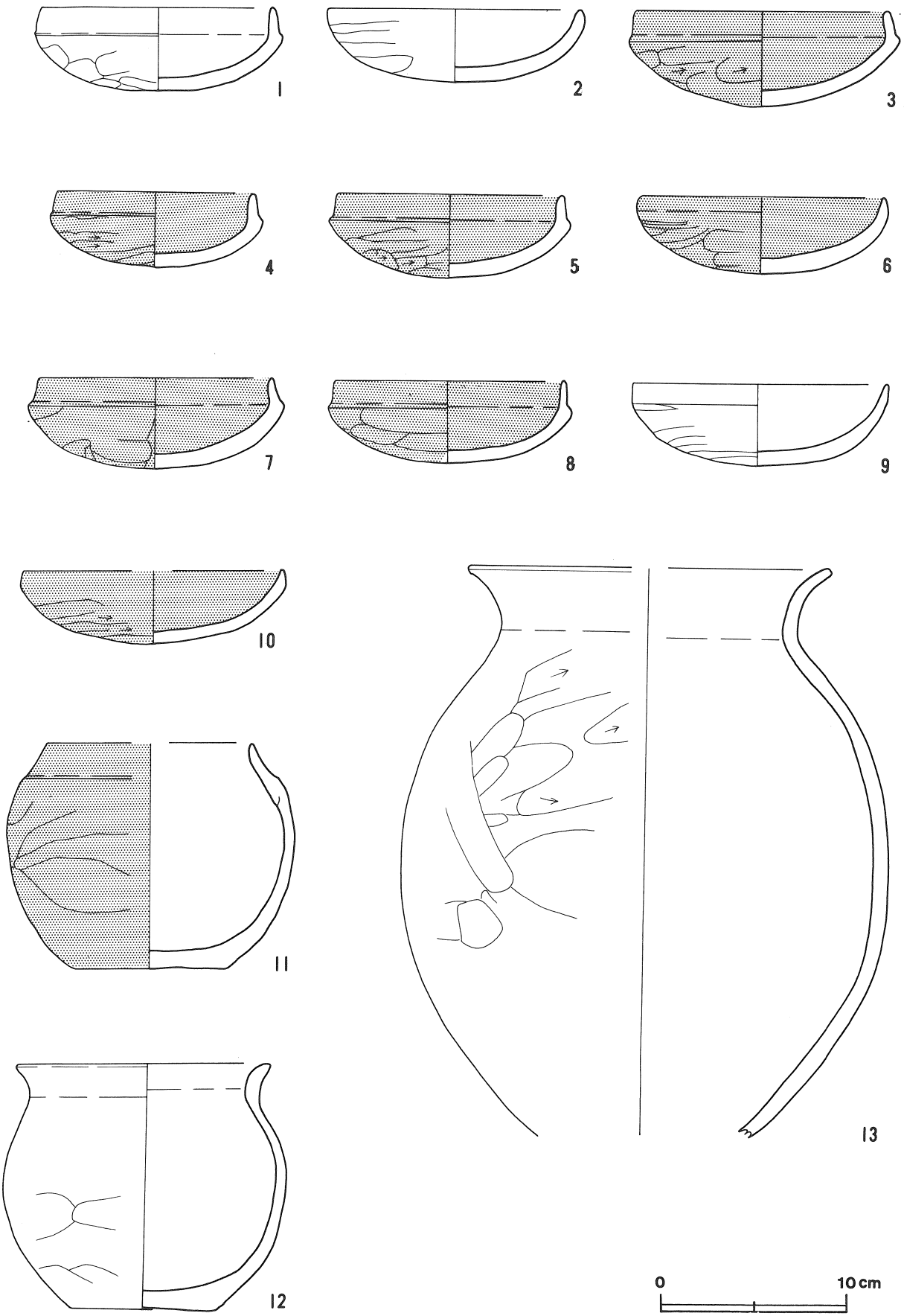
主軸方向　N－38°－W

壁　壁高は22～40cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

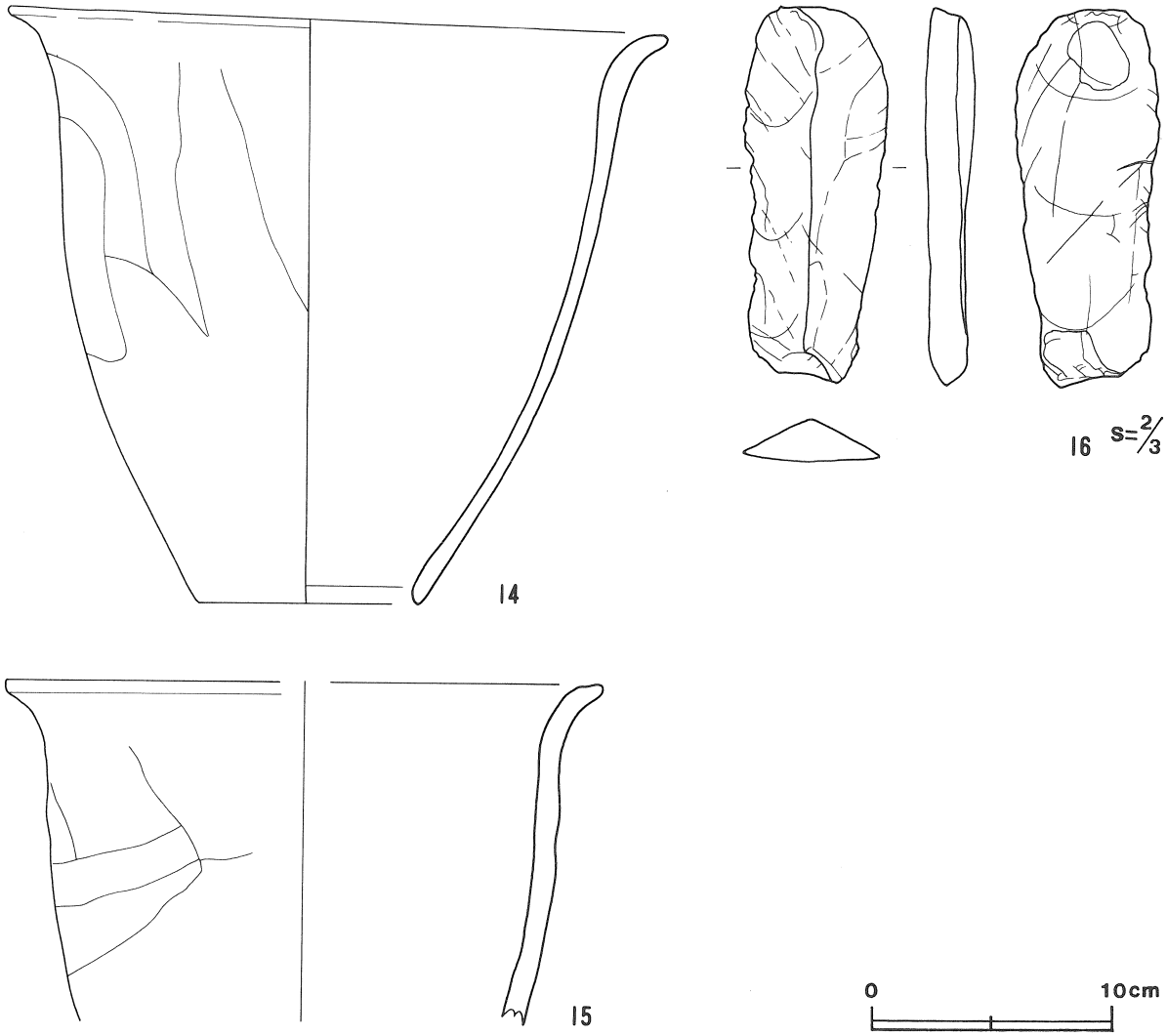
壁溝　竈部分と南東壁中央から南コーナーにかけて，耕作による撹乱を受け，確認できないが，ほぼ全周して



第124図　第９号住居跡・竈実測図



第125図　第９号住居跡出土遺物実測図(1)



第126図　第9号住居跡出土遺物実測図(2)

いる。上幅8～14cm，深さ5～8cmで，断面形はU字形である。

床　ほぼ平坦で，踏み締まっている。

ピット　5か所（P_1～P_5）。P_1～P_4は長径26～48cm，短径26～40cmで，深さ66～81cmの楕円形または不整楕円形である。各コーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は長径25cm，短径20cm，深さ45cmの不整楕円形で，南東壁際中央寄りに付設され，規模や位置から出入口ピットと考えられる。

貯蔵穴　北コーナーと竈との中間，北西壁際付近に付設され，平面形は径68cmのほぼ円形で，円筒状に45cm程掘られ，底面は北東側から中央に向かってやや傾斜している。

貯蔵穴土層解説

1　明褐色　ローム中ブロック・ローム粒子少量，粘性強
2　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土小ブロック極微量
3　褐　　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
4　明褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，締まり強

竈　北西壁中央部の壁面を約55cm壁外に掘り込み，砂混じりの粘土を使用して構築している。規模は長さ140cm，幅98cm程で，平面はやや馬蹄形をしている。天井部は崩落しているが，両袖部と煙道部は遺存している。燃焼部には，焼土ブロック，焼土粒子が厚く堆積し，炭化物や炭化粒子も含まれている。火床部は約10cm程掘り窪められ，中心部や袖部内側は焼けて赤変硬化している。煙道の立ち上がりは約45度で急である。

竈土層解説

1　暗赤褐色　炭化物少量，焼土粒子・砂微量，焼土小ブロック極微量
2　にぶい赤褐色　炭化物・ローム粒子少量，ローム小ブロック・砂微量，焼土小ブロック・焼土粒子極微量
3　橙色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・粘土粒子・砂少量，焼土粒子極微量
4　暗赤褐色　焼土粒子・炭化物中量，焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・砂・粘土粒子少量
5　にぶい黄橙色　砂・粘土粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化物・ローム粒子微量
6　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化物・粘土粒子少量
7　褐色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・砂・粘土粒子極微量
8　赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子・砂・粘土粒子少量
9　明赤褐色　焼土粒子・ローム粒子中量，炭化物少量，粘土粒子・焼土小ブロック・砂極微量
10　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子極微量
11　明赤褐色　焼土粒子・ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量
12　暗褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・粘土粒子少量，炭化物極微量，締まり極強
13　暗褐色　焼土粒子・ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量

覆土　10層から成る。北東壁際下層から南西壁際上層にかけて，焼土粒子，炭化粒子を含む黒褐色土が厚く堆積している。北東部床面上から上層にかけて黒褐色土，暗褐色土，褐色土が複雑に重なり合いながら堆積しており，人為的に埋め戻されたものと思われる。耕作による撹乱を受けている。

土層解説

1　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
3　褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・ローム小ブロック微量
4　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量
5　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量
6　褐色　粘土粒子中量，ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
7　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
8　褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
9　褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
10　褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物　中央付近から，竈及び竈周辺にかけて土師器が大量に出土している。第125・126図1～10の坏は，1・5・7の坏が中央付近の床面直上から正位の状態で纏まって出土し，2・8が竈内覆土中層から共に斜位の状態で出土している。3・10は北東寄りの床面直上から正位の状態で出土し，10は中央付近の床面直上から出土している坏片と接合する。4・6は竈付近の床面直上から正位の状態で並ぶように出土している。11の鉢は竈付近の床面直上から出土し，中央付近の床面直上から出土している鉢片と接合し，12の小形甕は東寄りの床面直上から横位の状態で出土している。13の甕は，竈付近の覆土下層から出土している甕片が接合したもので，14・15の甑は，14が竈周辺の床面直上から，15が東寄りの覆土中層から逆位の状態で出土している。16の縦長剝片は混入したものと思われる。なお，竈内からは支脚が出土している。

所見　本跡から出土している坏は意図的に，正位の状態で床面直上に置いたように出土することから，何らかの祭祀行為との関連も考えられる。時期は，出土遺物から6世紀後半と考えられる。

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第125図 1	坏 土師器	A 12.5 B 4.4	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに内傾し，体部との境に明瞭な稜を有し，端部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・スコリア・雲母 明褐灰色 普通	P52 100% PL32 中央付近床面直上 口縁部及び体部外面煤付着
2	坏 土師器	A 13.6 B 3.9	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部で僅かに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り，内面横ナデ。	砂粒・石英・長石・スコリア 浅黄橙色　普通	P53 90% 竈内覆土中層
3	坏 土師器	A 13.8 B 5.1	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内傾する。口縁部と体部との境には明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・スコリア・雲母 灰褐色 普通	P54 90% 北東寄り床面直上
4	坏 土師器	A 10.4 B 4.0	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。体部と口縁部との境に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラナデ，内面ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P55 90% PL31 竈付近床面直上

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第125図 5	坏 土師器	A　12.0 B　4.5	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。体部と口縁部との境に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ヘラ削り後横位のナデ，内面ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・石英・長石・スコリア 黒褐色 普通	P56　90% 中央付近床面直上
6	坏 土師器	A　13.3 B　4.1	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに内傾する。口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ヘラ削り後横ナデ，下位ナデ，内面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・長石 黒褐色 普通	P57　90% 竈付近床面直上
7	坏 土師器	A　12.4 B　4.9	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに内傾する。口縁部と体部との境に明瞭な稜を持つ。端部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P58　90% 中央付近床面直上
8	坏 土師器	A　12.3 B　4.5	口縁部一部欠損。体部は外上方に立ち上がり，口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。体部と口縁部との境に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・石英・長石・スコリア 黒褐色 普通	P59　85% PL32 竈内覆土中層
9	坏 土師器	A　13.8 B　4.5	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は垂直に立ち上がる。口唇部は尖り，口縁部と体部との境に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ磨き，内面放射状のヘラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	P60　85% 覆土中 内面剝離
10	坏 土師器	A［14.0］ B　3.9	体部及び口縁部一部欠損。体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部は垂直に立ち上がる。口唇部は尖り，口縁部と体部との境に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り，内面ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・長石・雲母 黒褐色 普通	P61　60% 北寄り床面直上
11	鉢 土師器	A［11.0］ B　12.2 C　4.0	体部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，中位で器厚を減じ，上位で厚みを増す。口縁部は内傾し，やや内ち削ぎ状に反り，口唇部は尖る。口縁部と体部との境に稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ナデ。底部ヘラ削り。体部内面輪積み痕。外面黒色処理。	砂粒・スコリア・パミス・雲母 灰褐色 普通	P62　80% 竈付近床面直上
12	小形甕 土師器	A　13.8 B　13.3 C　7.3	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。頸部は括れ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P63　70% PL32 東寄り床面直上 内面剝離
13	甕 土師器	A［19.6］ B（30.7）	底部及び口縁部一部欠損。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。最大径を体部中位に持ち，口縁部は外反し，口唇部に丸味がある。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P64　50% 竈付近覆土下層 内面剝離
第126図 14	甑 土師器	A　27.0 B　24.5 C　9.0	体部及び口縁部一部欠損。無定式。体部は僅かに内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・石英・長石・スコリア 浅黄橙色　普通	P65　90% PL31 竈周辺床面直上
15	甑 土師器	A［24.4］ B（14.0）	体部中位から口縁部の破片。体部は僅かに内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・石英・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P66　30% 東寄り覆土中層 体部外面煤付着 内面剝離

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第126図16	縦長剝片	7.7	3.0	0.9	—	24.0	100	砂岩	覆土中	Q8

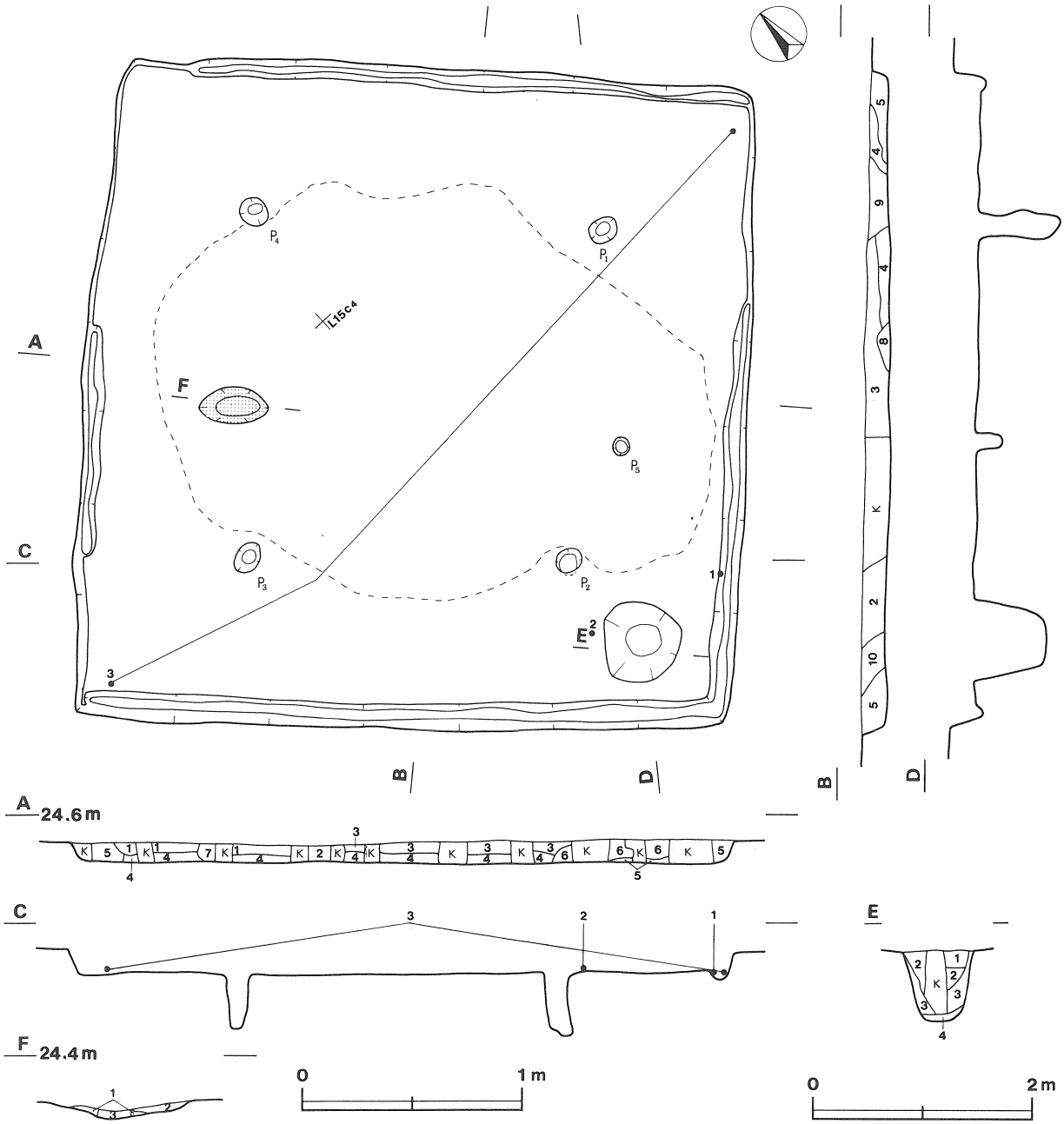
第10号住居跡（第127図）

位置　調査区の中央部，L15c4区。

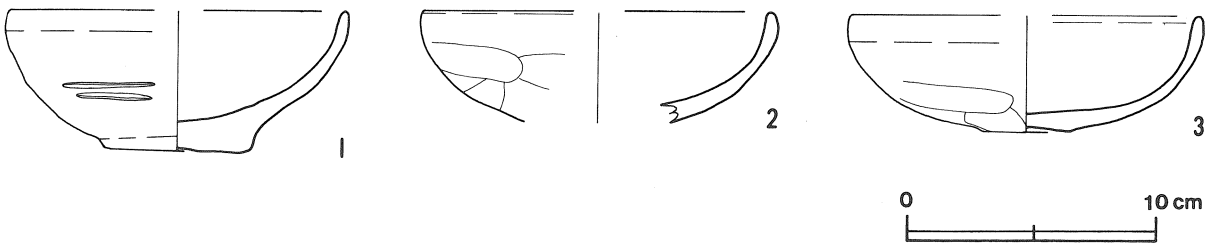
規模と平面形　長軸6.12m，短軸6.10mの方形。

主軸方向　N－47°－E

壁　壁高は16～26cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。



第127図　第10号住居跡実測図



第128図　第10号住居跡出土遺物実測図

床　平坦で，中央部は広い範囲が踏み固められており堅緻である。南西壁沿い床面上には焼土の広がりがみられる。

ピット　5か所（P_1～P_5）。P_1～P_4は長径25～32cm，短径22～25cmで，深さ47～75cmの不整楕円形で，各コーナー付近に付設され，位置や配列から主柱穴と考えられる。P_5は径20cm，深さ23cmの円形で中央から南東壁寄りに付設され，位置や配置から出入口ピットと思われる。

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は長軸75cm，短軸70cmの隅丸台形で，深さは約35cmで，円筒状に掘り込まれ，底面は平坦である。覆土下層から上層にかけ帯状の耕作による撹乱を受けている。

貯蔵穴土層解説
1　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム中ブロック微量，粘性強
2　暗 褐 色　ローム粒子中量，炭化物少量
3　暗 褐 色　焼土粒子少量，ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量
4　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量

炉　中央から北西寄りに付設されている。長径63cm，短径33cmで，床面を5cm掘り窪めた長楕円形の地床炉である。炉内覆土には焼土粒子を多量含む赤褐色土が堆積している。炉の中央部が北東から南西方向に撹乱を受けているが，残存する炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説
1　赤 褐 色　焼土粒子多量，炭化粒子少量，ローム粒子微量
2　暗赤褐色　焼土粒子多量，炭化粒子・ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
3　褐　　色　焼土粒子・ローム粒子微量

覆土　10層から成る。壁際には褐色土が堆積し，覆土下層から上層にかけては焼土粒子，炭化粒子を含む暗褐色土が堆積している。帯状の撹乱を全面に受けているが，残存する土層から自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗 褐 色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量，ローム小ブロック極微量
2　黒 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
3　極暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子微量，炭化粒子極微量
4　黒 褐 色　ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
5　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック微量
6　極暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量，炭化物・ローム小ブロック微量
7　暗 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
8　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
9　暗 褐 色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化物少量
10　暗 褐 色　ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化物・炭化粒子微量

遺物　出土遺物が少なく，僅かに床面直上にみられる。第128図1～3の坏は，1が南東壁溝の覆土上面から斜位の状態で出土し，2が南寄りの床面直上から，3は東西両コーナー付近から出土した坏片が接合したものである。

所見　本跡の時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第128図 1	坏 土師器	A [13.4] B 5.6 C 5.8	体部及び口縁部一部欠損。やや突出した平底。体部はやや偏平で内彎しながら立ち上がり，口縁部は垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・パミス にぶい橙色 普通	P67　60% 南東壁溝覆土上面体部外面中位 研磨痕 底部外面煤付着
2	坏 土師器	A [14.0] B (4.4)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石 黒褐色 普通	P68　30% 南寄り床面直上 二次焼成
3	坏 土師器	A [13.8] B 4.6 C 3.4	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内削ぎ状に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石 黒褐色 普通	P69　40% 東西両コーナー付近覆土中 体部外面煤付着

第11号住居跡（第129図）

位置　調査区の中央部やや北東，L15b4区。

規模と平面形　長軸2.40m，短軸2.24mの方形。

主軸方向　N—57°—W

壁　壁高は6～7cmで，緩く外傾しスロープ状である。

床　やや凹凸があり，踏み固められた部分は認められない。北東から南西方向に耕作による撹乱を受けているが残存状況はよい。

覆土　2層から成る。掘り込みが極めて浅く，帯状の撹乱を全面に受けているため，覆土の全体的な堆積状況の把握は難しいが，部分的に褐色土と暗褐色土がレンズ状に堆積している状況がみられる。自然堆積と考えられる。

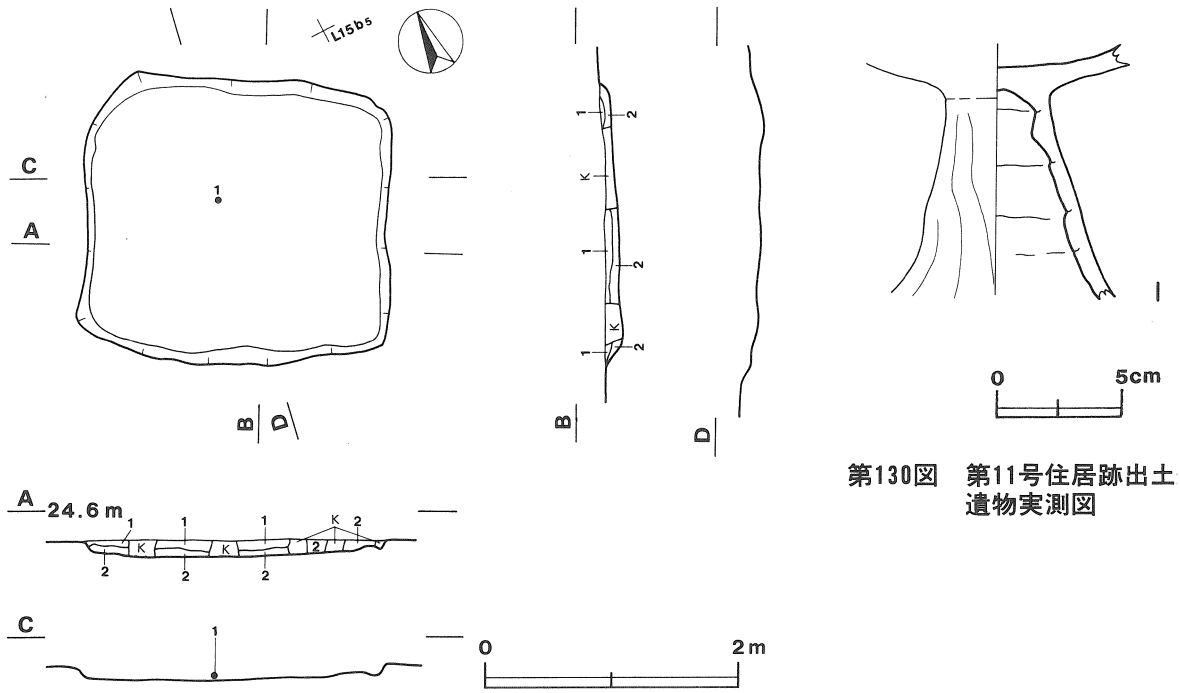
土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　色　ローム粒子多量，炭化物・炭化粒子極微量

遺物　覆土中から僅かに土師器片が出土している。第130図1の高坏は，中央付近の床面直上から横位の状態で出土したものである。

所見　本跡は，柱穴及び炉等を伴わず，竪穴住居跡として考えるには疑問ものこるが，遺構の残存状況から本跡に隣接する第10号住居跡及びその他の遺構の関連施設とも考えられる。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第130図 1	高　坏 土師器	B (10.1)	脚部片。脚部は柱状に下方に開く。	脚部外面縦位のヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・石英・長石・スコリア 橙色　普通	P70　40% 中央付近床面直上



第130図　第11号住居跡出土遺物実測図

第129図　第11号住居跡実測図

第12号住居跡（第131図）

位置　調査区の中央部やや東寄り，L15a7区。

規模と平面形　長軸6.00m，短軸4.35mの長方形。

主軸方向　N－48°－E

壁　壁高は4～8㎝で，緩く外傾して立ち上がる。掘り込みが浅く，また，谷津に向かう緩い傾斜地でもあるため東コーナー付近は削平されて殆ど残存しない。

床　やや凹凸があり，踏み固められた部分は認められない。

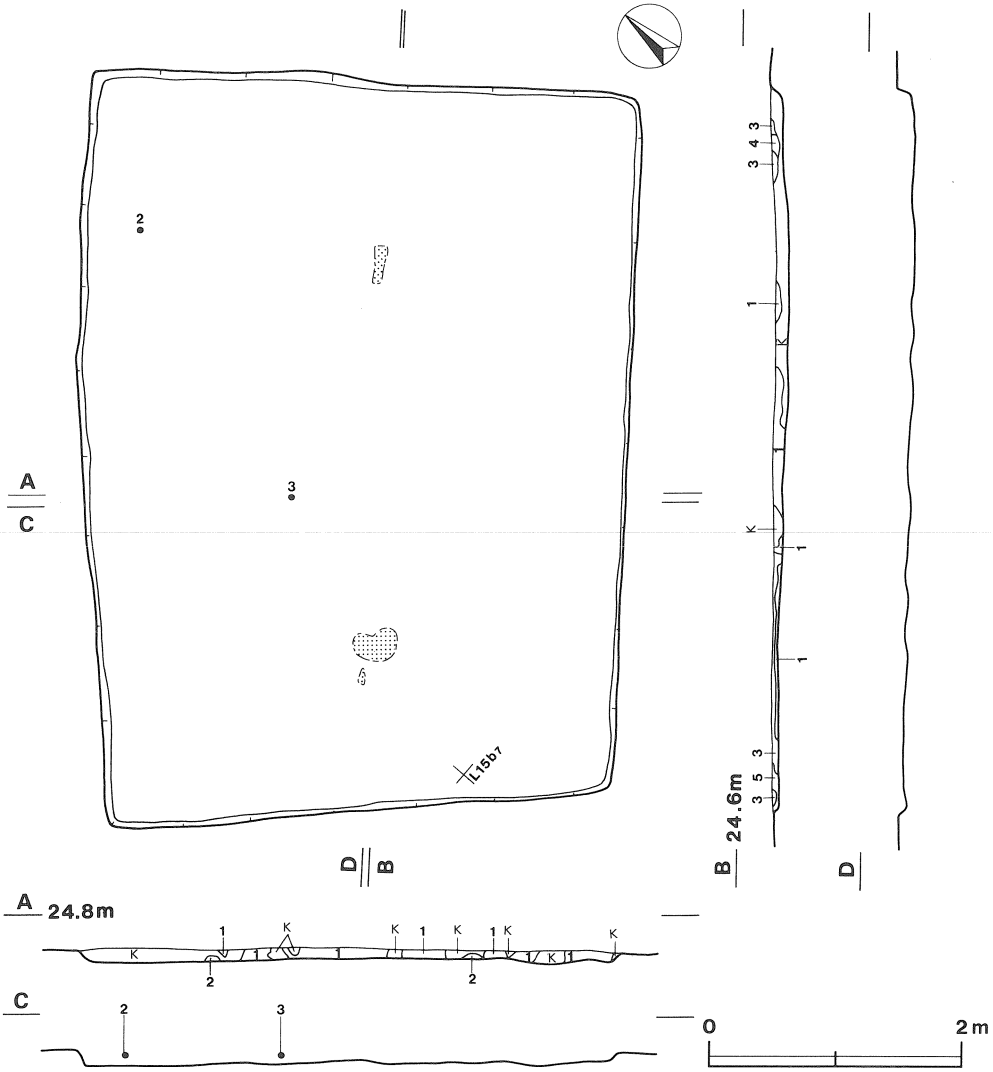
覆土　5層から成る。壁際には褐色土が堆積しているが，耕作による撹乱を受けているため，堆積状況は不明である。

土層解説

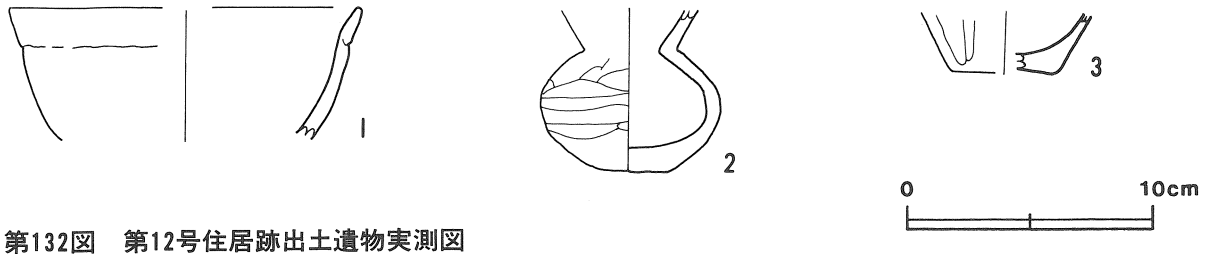
1	褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・ローム小ブロック極微量，締まり強	3	暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量，ローム小ブロック極微量
2	褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック極微量，締まり強	4	にぶい赤褐色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
		5	暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量

遺物　覆土中層から床面直上にかけ土師器片が少量出土している。第132図1の坏は南寄りの床面直上から，2の坩は北寄りの覆土中層から，3の手捏土器は中央寄りの覆土中層から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。



第131図　第12号住居跡実測図



第132図　第12号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第132図 1	坏 土師器	A［14.1］ B（5.4）	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は折り返しのある複合口縁で，やや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P71　5% 南寄り床面直上
2	坩 土師器	B（6.5） C　3.1	口縁部一部欠損。平底。体部は潰れた球形状を呈し，最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外上方に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ削り後，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P72　80% 北寄り覆土中層 体部外面中位煤付着
3	手捏土器 土師器	B（2.5） C［4.0］	底部から体部中位の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面縦位のヘラ削り，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P73　30% 中央寄り覆土中層

第13号住居跡（第133図）

位置　調査区の東端，K15$_{i0}$区。

規模と平面形　本跡の北東側は調査区外のため完掘ができず規模は不明であるが，平面形は一辺5.47mの方形と推定される。

主軸方向　N—50°—W

壁　壁高は28～50cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床　平坦で，踏み締まっている。

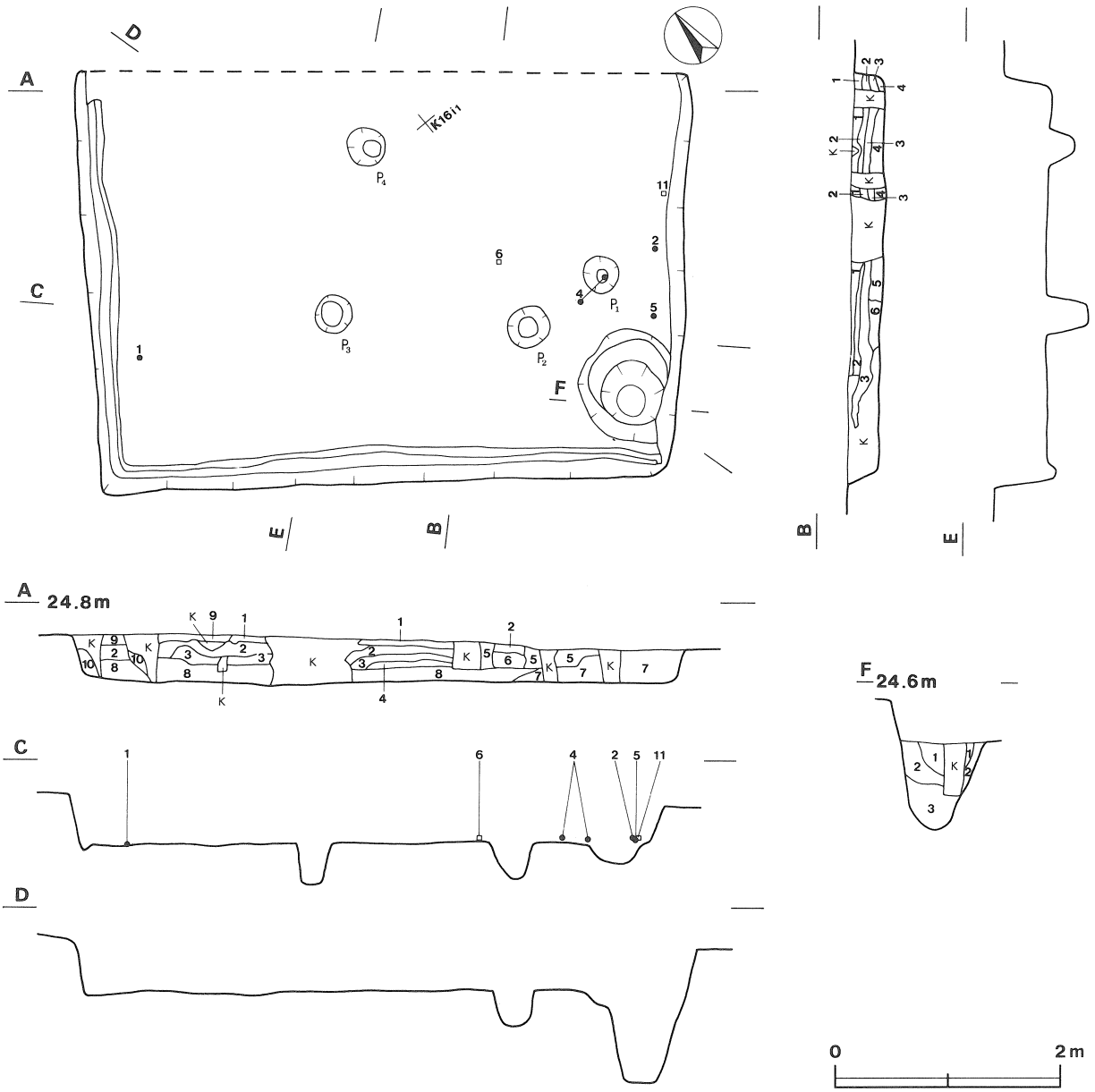
ピット　4か所（P_1～P_4）。各ピットは径30～35cm，深さ20～36cmの円形で，P_1・P_4は中央付近に付設され，P_2・P_3は南コーナー貯蔵穴付近に付設されている。P_1・P_2は南側に約10度の傾斜をもって掘り込まれている。各ピットの性格は不明である。

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は長径105cm，短径70cmの不整楕円形である。深さは80cmで，ほぼ円筒状に掘り込まれている。

貯蔵穴土層解説
1　褐　　色　ローム粒子少量，ローム中ブロック極微量
2　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
3　褐　　色　炭化粒子・ローム粒子微量

覆土　10層から成る。北東の壁際から床面にかけてロームブロック，ローム粒子を含む流れ込みと思われる暗褐色土が中央付近まで堆積し，床面上には焼土粒子，炭化粒子を含む暗褐色土が厚く堆積している。中層から上層にかけ暗褐色土がレンズ状に堆積する。耕作による帯状の撹乱を受け，堆積状況は明確に確認することはできないが，残存部分の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量

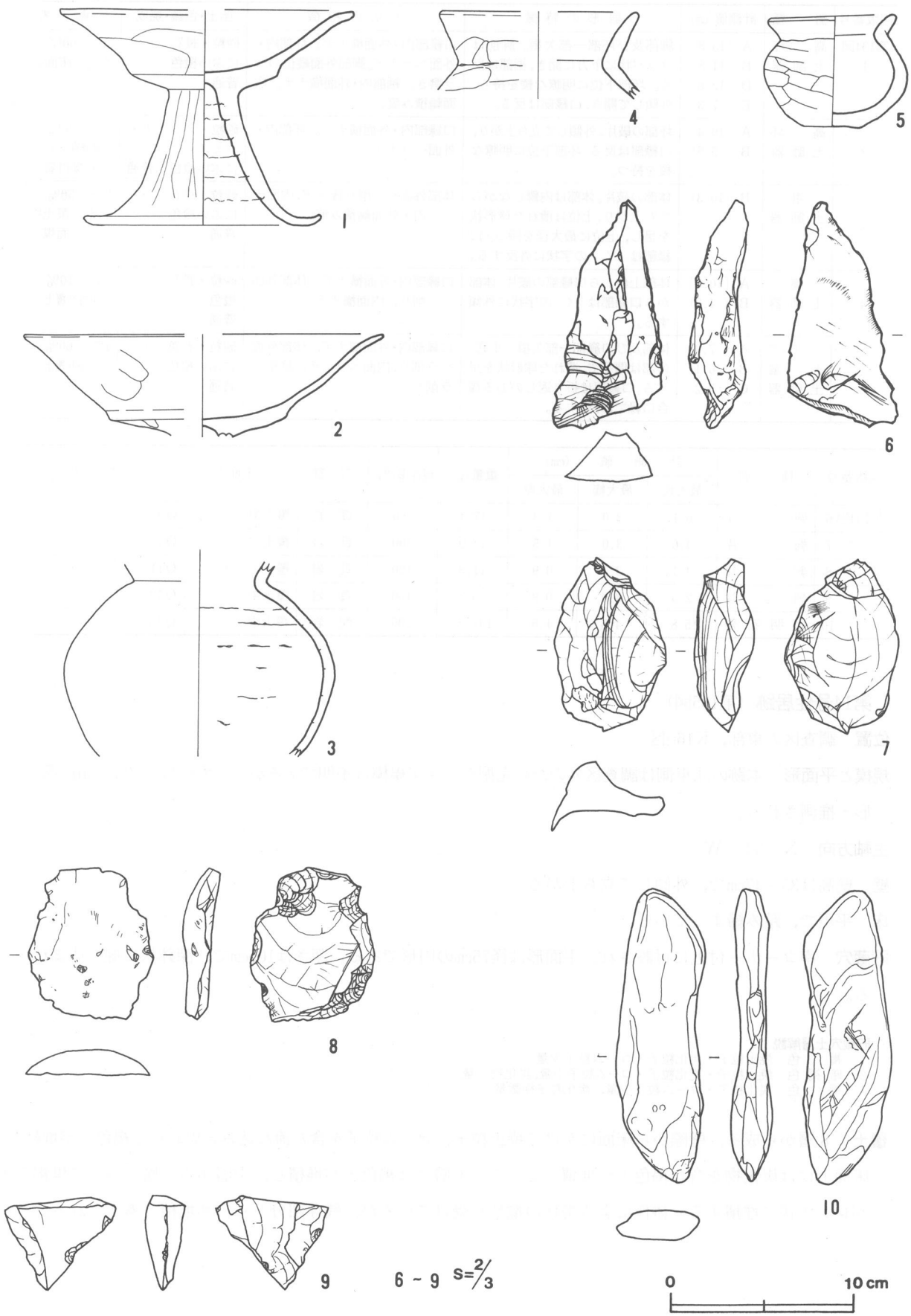


第133図　第13号住居跡実測図

3　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
4　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量，締まり強
5　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量，粘性強
7　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック微量，粘性強
8　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
9　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
10　褐　色　炭化粒子・ローム粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック微量

遺物　南寄りの覆土下層から床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第134図1・2の高坏は，1が西寄りの床面直上から横位の状態で，2が南東壁寄りの床面直上から斜位の状態で出土している。3の坩は北寄りの覆土中から，4の甕と5のミニチュア土器は，南東寄りの覆土下層から出土し，4は覆土下層から出土している甕片が接合し，5は横位の状態で出土している。その他，6～9の剝片と10の不明石器が出土しているが，剝片は混入したものと考えられるが，不明石器が住居跡に伴うものなのかは把握できない。

所見　本跡は，床面上に多量の炭化材・焼土が堆積している状況から，焼失家屋と考えられる。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。



第134図　第13号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第134図 1	高　坏 土師器	A [15.8] B 11.8 D 12.8 E 7.3	脚部及び坏部一部欠損。脚部はラッパ状に下方に開き，裾部は反る。坏部下位に明瞭な稜を持ち，外傾して開き，口縁部は反る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ヘラナデ。脚部外面縦位のヘラ磨き。袖部内・外面横ナデ。内面輪積み痕。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P74　60% 西寄り床面直上
2	高　坏 土師器	A [19.4] B (5.5)	坏部の破片。外傾して立ち上がり，口縁部は反る。坏部下位に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ヘラナデ。	砂粒・スコリア・パミス にぶい橙色　普通	P75　30% 南東壁寄り床面直上 外面煤付着
3	坩 土師器	B (10.3)	体部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，上位は潰れた球形状を呈し，上位に最大径を持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。内・外面輪積み痕。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P78　50% 北寄り覆土中 内・外面煤付着
4	甕 土師器	A [10.8] B (4.2)	体部上位から口縁部の破片。体部から口縁部は「く」の字状に外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P77　10% 南東寄り覆土下層
5	ミニチュア 土　器 土師器	A 7.0 B 6.1 C 3.2	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は偏平で，潰れた球形状を呈する。口縁部は折り返しのある複合口縁で，外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	P76　60% 南東寄り覆土下層

図版番号	種　別	計測値 (cm)			重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚					
第134図6	剝　片	6.1	3.0	1.3	17.4	100	頁　岩	覆土中	Q9
7	剝　片	4.6	3.0	1.5	13.9	100	頁　岩	覆土中	Q10
8	剝　片	4.1	3.3	0.9	11.8	100	頁　岩	覆土中	Q11
9	剝　片	2.5	3.0	0.9	5.3	100	頁　岩	覆土中	Q12
10	不明石器	15.8	4.5	1.5	197.2	100	泥　岩	覆土中	Q13

第14号住居跡（第135図）

位置　調査区の東部，K16$_{j2}$区。

規模と平面形　本跡の北東側は調査区外のため完掘ができず規模は不明であるが，平面形は一辺5.65mの隅丸方形と推測される。

主軸方向　N－32°－W

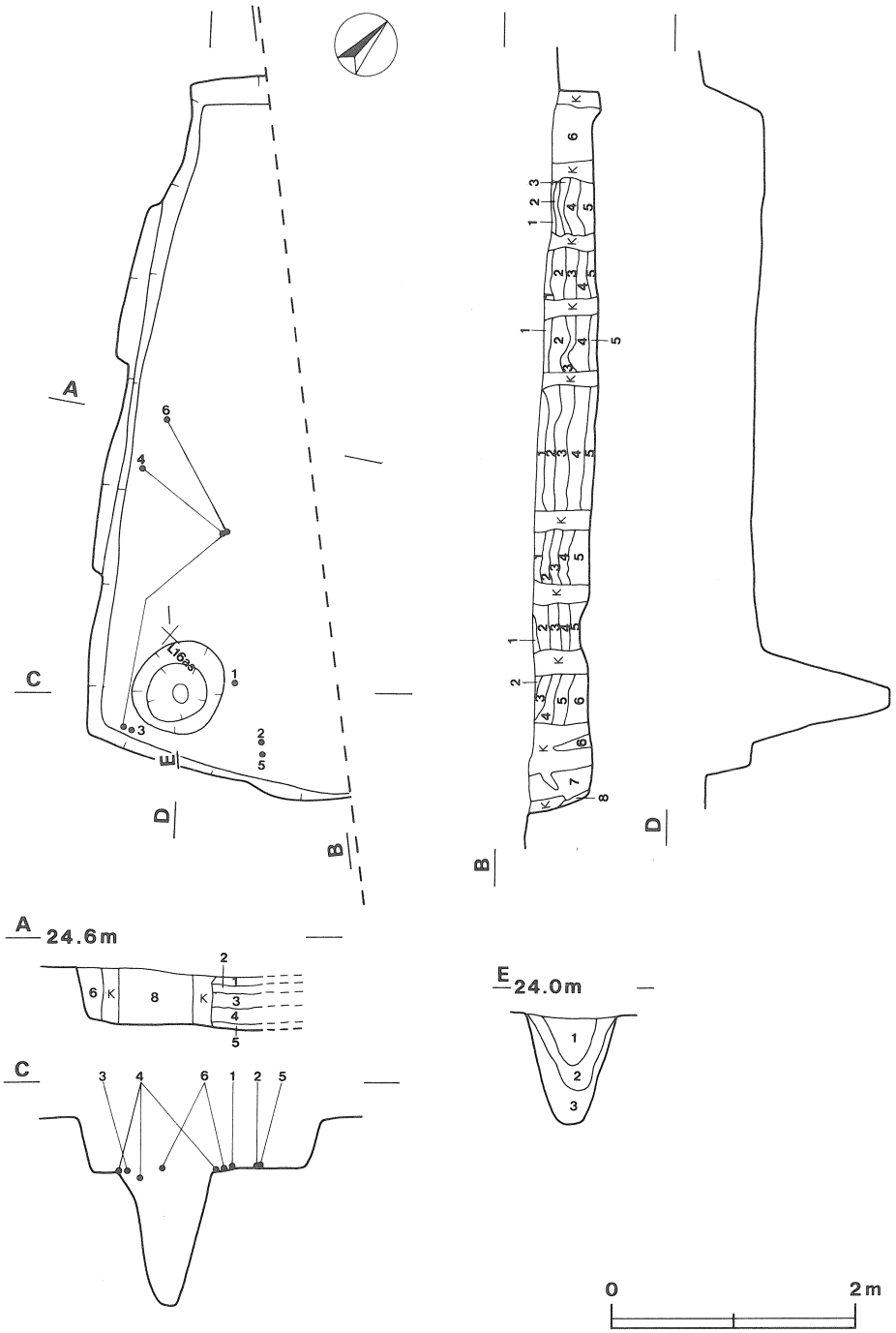
壁　壁高は35～47cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦で，踏み締まっている。

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は径75cmの円形である。深さは105cmで，深鉢状に掘り込まれている。

貯蔵穴土層解説
1　褐　　色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
2　暗 褐 色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子中量，炭化物少量
3　褐　　色　炭化粒子・ローム粒子少量，炭化粒子極微量

覆土　8層から成る。壁際から床面にかけて焼土粒子，ローム粒子を含む流れ込みと思われる褐色土が堆積し，床面上には炭化物を含む褐色土が堆積している。下層には褐色土が堆積し，中層から上層にかけて黒褐色土がレンズ状に堆積する。耕作による帯状の撹乱を受けているが，残存部分から自然堆積と考えられる。

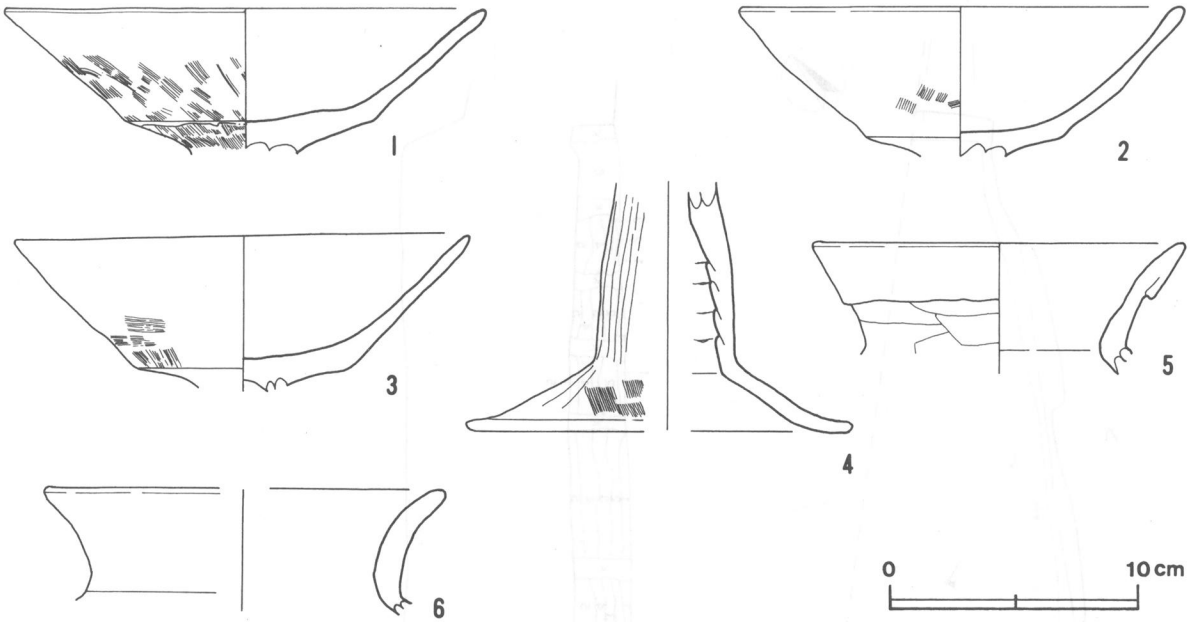


第135図　第14号住居跡実測図

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子少量，ローム中ブロック極微量	
2	黒褐色	ローム粒子多量，ローム中ブロック極微量	
3	黒褐色	ローム粒子多量，焼土粒子少量，ローム小ブロック微量，締まり強	
4	黒褐色	ローム粒子多量，焼土粒子微量，ローム小ブロック極微量	
5	褐色	ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック少量，粘性強	
6	褐色	焼土粒子中量，炭化材・ローム小ブロック・ローム粒子少量	
7	暗褐色	ローム粒子中量，焼土粒子微量，炭化物極微量	
8	暗褐色	ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量	

遺物　南コーナー寄りの床面直上から貯蔵穴内覆土上面から土師器片が少量出土している。第136図１～４の高坏は，１～３が南寄りの床面直上から共に正位の状態で，４が南西壁寄りと中央寄りの床面直上から出土している高坏片が接合したものである。５・６の甕は，５が南西壁寄りの床面直上から，６が西寄りの床面直上から出土している。その他，貯蔵穴内覆土中層及び覆土下層から計２点の坏が出土している。



第136図　第14号住居跡出土遺物実測図

所見　本跡は，炭化材と焼土が床面から出土していることから焼失家屋と考えられる。時期は，出土遺物から5世紀前半と考えられる。

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第136図 1	高　坏 土師器	A　19.3 B（6.0）	坏部片。坏部は外傾して立ち上がる。坏部下位に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面斜位の刷毛目整形後ヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P79　50% 南寄り床面直上 外面煤付着
2	高　坏 土師器	A　17.8 B（6.0）	坏部片。坏部は内彎しながら立ち上がる。坏部下位に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面刷毛目整形ヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・石英 橙色 普通	P80　50% 南寄り床面直上
3	高　坏 土師器	A　18.2 B（6.1）	坏部片。坏部は外傾して立ち上がる。坏部下位に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面刷毛目整形後ナデ，内面ナデ。	砂粒・石英・長石 橙色 普通	P81　50% 南寄り床面直上
4	高　坏 土師器	D［15.5］ E（10.0）	脚部から裾部の破片。脚部は柱状に開き，裾部は屈曲して大きく開く。	脚部外面縦位のヘラナデ。裾部外面刷毛目整形後ヘラナデ，内面ナデ。脚部内面輪積み痕。	砂粒・石英 橙色 普通	P82　45% 南西壁寄り床面直上
5	甕 土師器	A　14.8 B（4.3）	口縁部の破片。外傾して立ち上がり，折り返しのある複合口縁となり，「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石 橙色 普通	P83　10% 南西壁寄り床面直上 内・外面剝離
6	甕 土師器	A［16.0］ B（4.5）	口縁部の破片。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P84　10% 西寄り床面直上

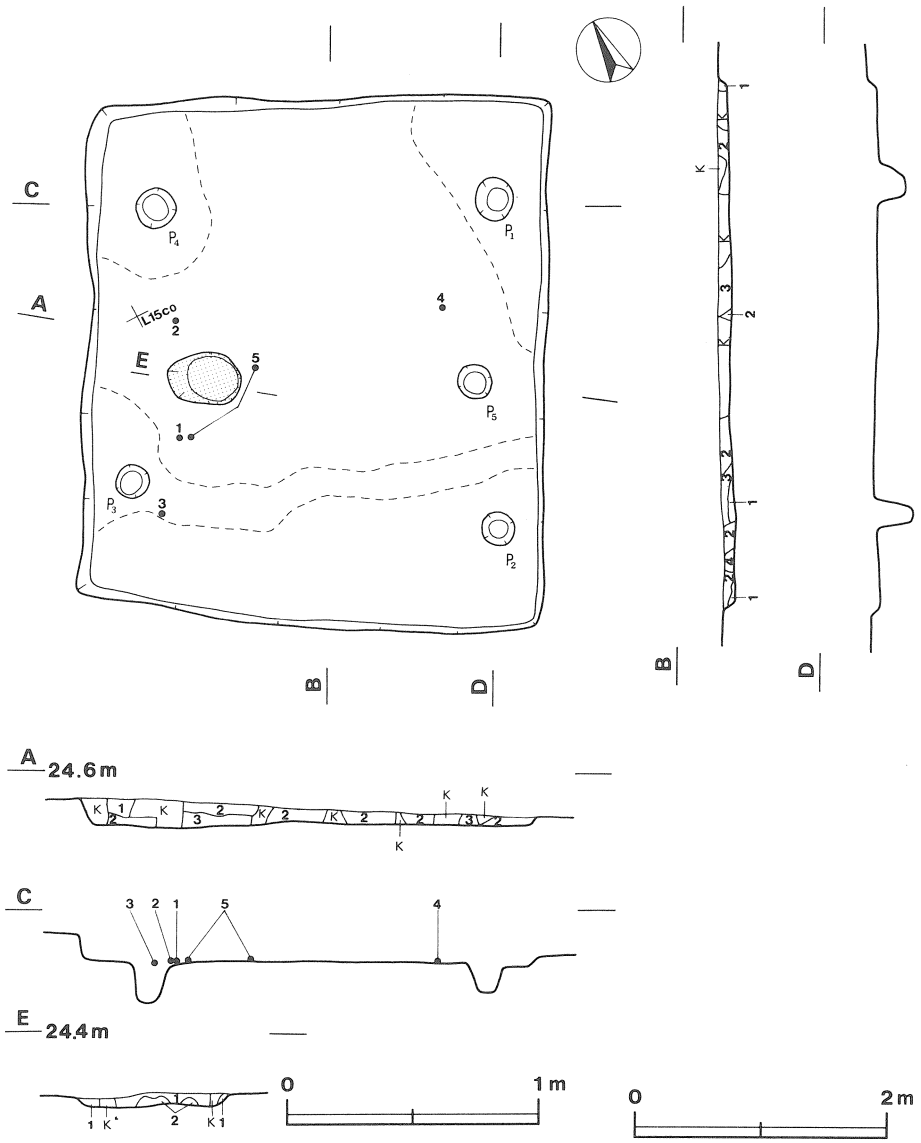
第15号住居跡（第137図）

位置　調査区の東部中央付近，L15c0区。

規模と平面形　長軸4.29m，短軸3.61mの長方形。

主軸方向　N－30°－E

壁　壁高は5～20cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。



第137図　第15号住居跡実測図

床　平坦で，北，東両コーナー付近を除いて，ほぼ全体が踏み固められ堅緻である。

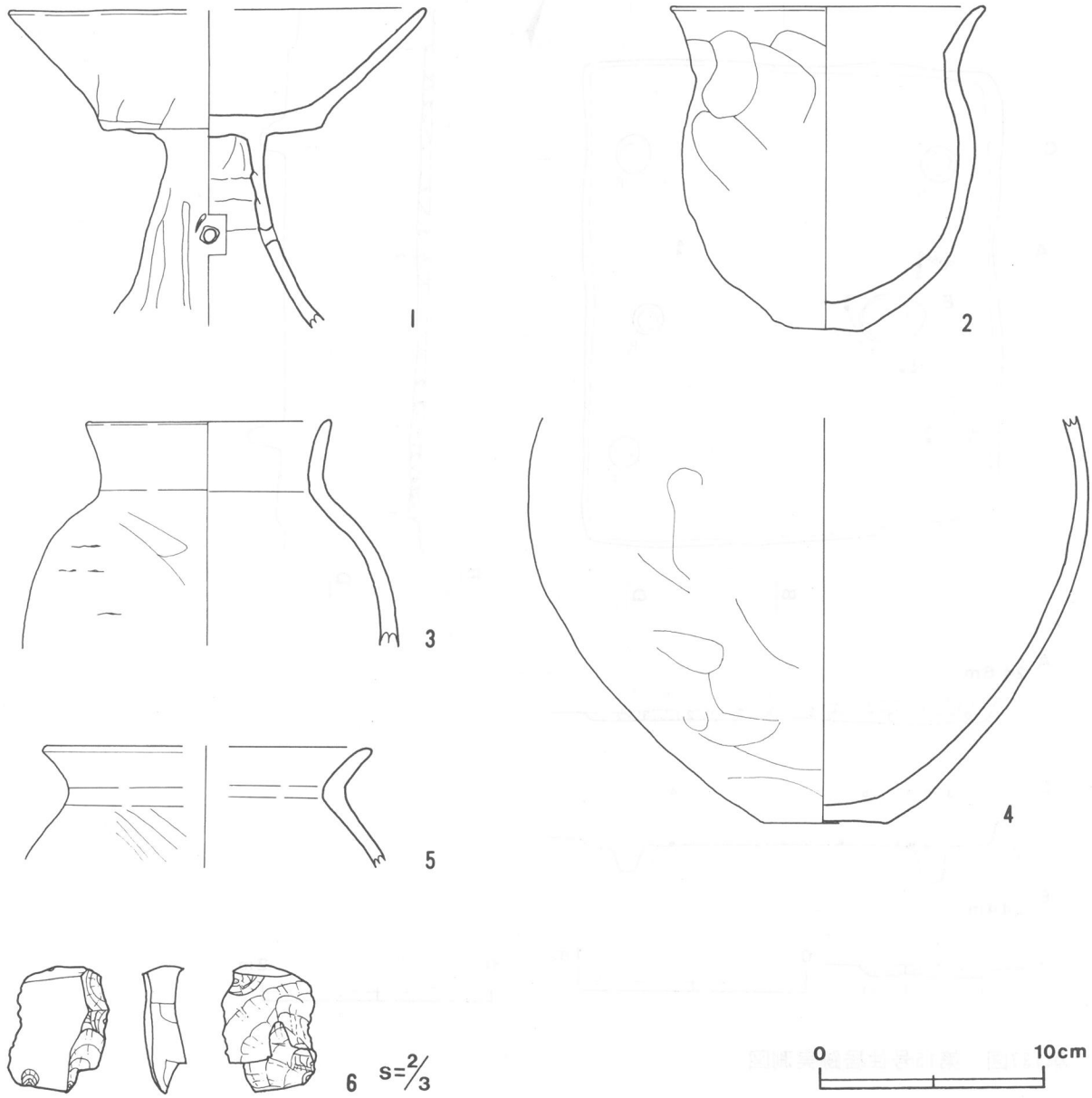
ピット　5か所（P_1～P_5）。P_1・P_4・P_5は径27～33cm，深さ22～31cmの円形である。P_2・P_3は長径29～34cm，短径25～33cmで，深さ17～30cmの楕円形である。P_1～P_4は各コーナー付近に付設され，位置や配列から主柱穴と考えられる。P_5は中央付近から南東壁寄りに付設され，周りはやや踏み締まった高まりを持ち，位置や深さから出入口ピットと考えられる。

炉　中央から北西壁寄りに付設されている。長径59cm，短径41cmで，床面を約5cm掘り窪めた楕円形の地床炉である。炉床はよく焼け赤変硬化している。

炉土層解説

1　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，炭化物極微量　　2　赤 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化物極微量

覆土　4層から成る。掘り込みが浅いため土層としてとらえることができたのは3層のみである。床面上から上層にかけて褐色土，暗褐色土が堆積しているが，耕作による撹乱を細かく受けている。



第138図　第15号住居跡出土遺物実測図

土層解説

1	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物極微量	3	褐　色	焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2	暗褐色	炭化物・ローム粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック微量，焼土小ブロック極微量	4	褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量

遺物　北西寄りの床面直上から土師器片が少量出土している。第138図1の高坏は北西寄りの床面直上から斜位の状態で出土している。2～5の甕は，2が北西寄りの床面直上から，3が西コーナー付近の床面直上から，4が東寄りの床面直上から出土し，5は北西寄りの床面直上から出土している甕片が接合したものである。その他，6の剝片が覆土中から出土しているが，混入したものと思われる。

所見　本跡の時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第138図 1	高　坏 土師器	A［18.4］ B（14.1） E（ 8.0）	裾部及び口縁部一部欠損。脚部は下方に大きく開く。坏部は外傾して外上方に開き，下位に明瞭な稜を持つ。脚部中央に二つの円孔が前後して穿たれている。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ナデ。脚部外面縦位のヘラナデ。脚部内面輪積み痕。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P85　60% 北西寄り床面直上
2	甕 土師器	A　14.0 B　14.3 C　 3.3	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反し，口唇部は僅かに反る。最大径を口縁部に持ち，頸部内面に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面縦位のヘラナデ。体部内・外面ナデ。底部ヘラナデ。	砂粒・石英・長石 にぶい赤褐色 普通	P86　90% 北西寄り床面直上 体部外面煤付着
3	甕 土師器	A［10.8］ B（10.0）	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は垂直気味に僅かに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石 にぶい橙色 普通	P87　30% 西コーナー付近 床面直上 体部外面煤付着
4	甕 土師器	B（17.9） C　 5.4	底部から体部中位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石 橙色 普通	P88　40% 東寄り床面直上 内・外面煤付着
5	甕 土師器	A［14.6］ B（ 5.0）	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ磨き，内面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P89　5% 北西寄り床面直上 外面煤付着

図版番号	種　別	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚					
第138図6	剝　片	2.8	2.1	0.8	4.8	100	メノウ	覆土中	Q14

第16号住居跡（第139図）

位置　調査区の東部中央付近，L15d6区。

規模と平面形　長軸6.84m，短軸6.54mの方形。

主軸方向　N—51°—E

壁　壁高は18～34cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　2か所ある貯蔵穴付近を除いては，ほぼ全周している。上幅6～12cm，深さ3～5cmで，断面形はU字形である。

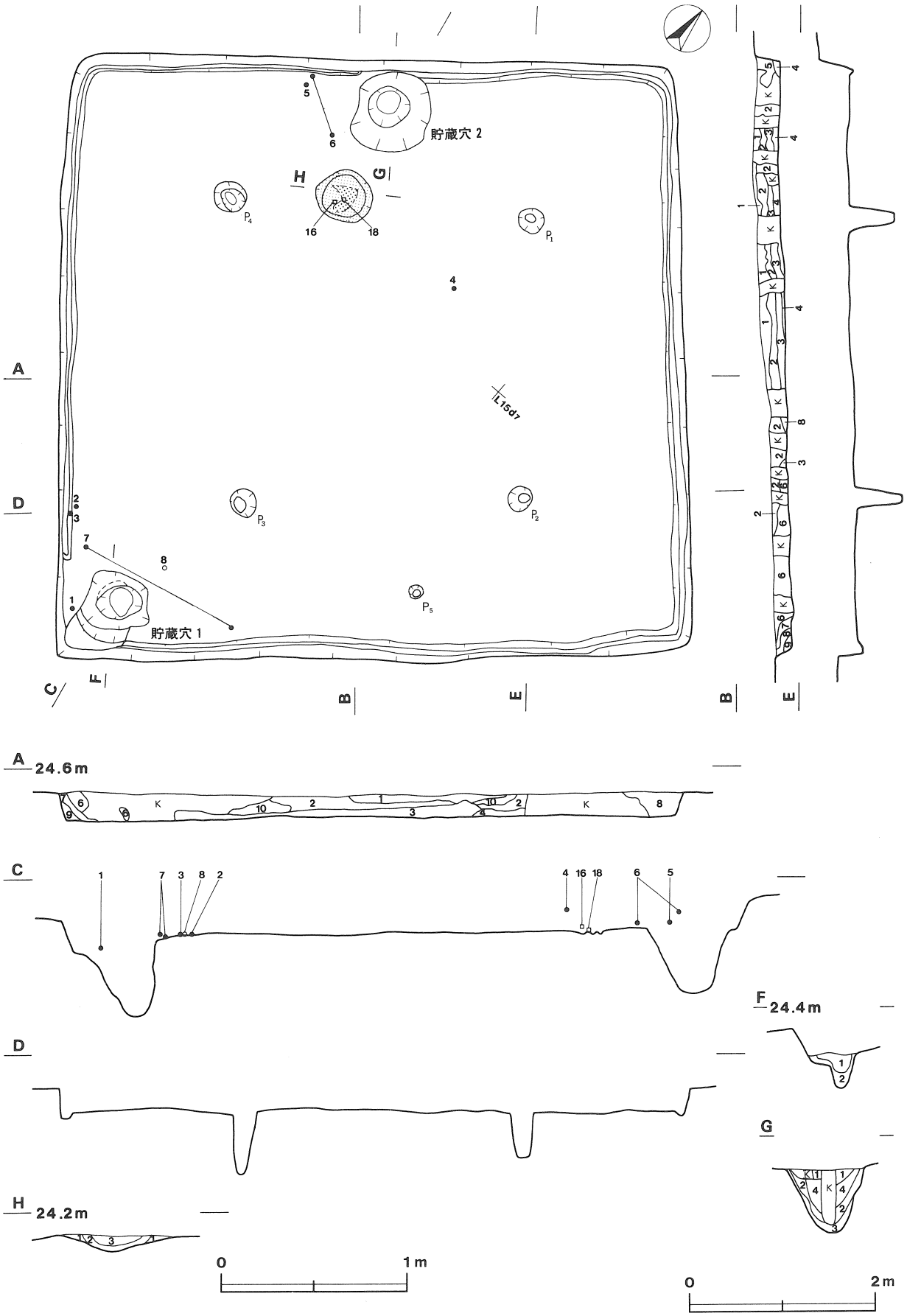
床　やや凹凸があり，ほぼ全体が踏み締まっている。

ピット　5か所（P_1～P_5）。P_1～P_4は長径28～35cm，短径24～34cmで，深さ44～68cmの不整楕円形である。各コーナーからやや中央に向かったところに付設され，位置や配列から主柱穴と考えられる。P_5は径15cm，深さ18cmの円形である。中央から南東壁寄りに付設され，位置や配列から出入口ピットと考えられる。

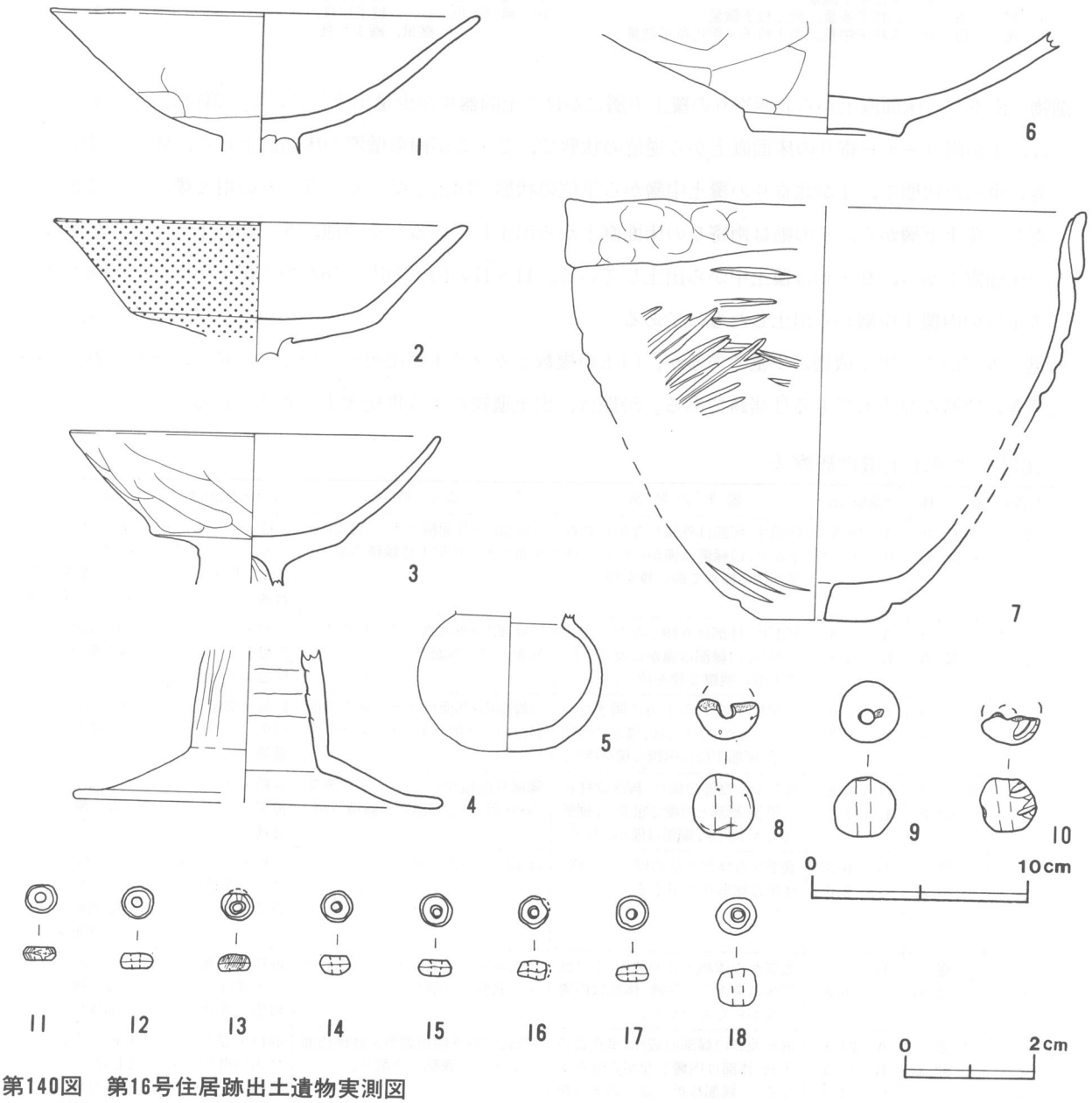
炉　中央から北西壁寄りに付設されている。長径59cm，短径41cmで，床面を約5cm掘り窪めた楕円形の地床炉である。炉床はよく焼け赤変硬化している。

炉土層解説
1　褐　　色　ローム粒子中量，ロームブロック微量，炭化物極微量
2　赤褐色　ロームブロック・ローム粒子中量，炭化物極微量
3　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子微量

貯蔵穴　2か所。貯蔵穴1は南コーナーに付設され，平面形は長径80cm，短径60cmの不定形である。深さは80cmあり，断面は深鉢状で，約10°の傾きを持って内側に掘り込まれている。貯蔵穴2は北西壁の中央部に接し，壁面を延長して北西壁の一部となっている。平面形は長軸95cm，短軸85cmの隅丸台形で，断面はU字形であ



第139図　第16号住居跡実測図



第140図　第16号住居跡出土遺物実測図

る。

貯蔵穴1土層解説

1　褐　色　焼土小ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量
2　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物微量

貯蔵穴2土層解説

1　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック微量
2　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物・ローム中ブロック微量
3　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量
4　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量

覆土　10層から成る。覆土下層から中層にかけて焼土粒子，炭化物，炭化粒子を含む暗褐色土が堆積し，中層から上層にかけてロームブロック，ローム粒子を含む褐色土が複雑に堆積している状況から，人為的に埋め戻されたものと考えられる。耕作による撹乱を広く受けている。

土層解説

1　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
2　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量

4　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量，締まり強
5　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子微量
7　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
8　暗 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
9　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック極微量
10　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量，締まり強

遺物　南寄りの床面直上から北西寄りの覆土下層にかけて土師器片が少量出土している。第140図１～４の高坏は，１が南コーナー寄りの床面直上から逆位の状態で，２・３が南東壁際の床面直上から，坏部を斜位の状態に重ねた状態で，４が北寄りの覆土中層から正位の状態で出土している。５，６の坩と甕は，共に北西壁寄りの覆土下層から，７の甑は南寄りの床面直上から出土している。その他，８～10の土玉は，８が南寄りの床面直上から，９・10は覆土中から出土している。11～17の臼玉の内，16が炉内覆土上面から，18のガラス玉は炉内覆土中層から出土したものである。

所見　本跡からの出土遺物は少量であるが，臼玉が複数とガラス玉が出土していることから，祭祀行為との関連等，特殊な見方もできる住居跡である。時期は，出土遺物から５世紀後半と考えられる。

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第140図 1	高　坏 土師器	A　19.5 B（6.5）	坏部片。坏部は外傾しながら立ち上がり，口縁部は僅かに反る。坏部下位に極めて弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ナデ。坏部下位輪積み痕。	砂粒・スコリア・パミス にぶい橙色 普通	P90　50% PL32 南コーナー寄り床面直上 内・外面煤付着
2	高　坏 土師器	A　18.8 B（5.5）	坏部片。坏部は外傾しながら立ち上がり，口縁部は僅かに反る。坏部下位に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ナデ。外面赤彩。	砂粒・スコリア・雲母 橙色　普通	P91　45% 南東壁際床面直上
3	高　坏 土師器	A　17.0 B（6.9）	坏部片。坏部は外上方に開きながら立ち上がり，その後，僅かに内傾する。坏部下位に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面斜位のヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P92　50% 南東壁際床面直上
4	高　坏 土師器	D［16.8］ E（7.2）	脚部から裾部の破片。脚部は柱状に開き，裾部との境で屈曲し，裾部は大きく開き，端部は僅かに反る。	脚部外面縦位のヘラナデ。裾部内・外面ナデ。脚部内面輪積み痕。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P93　40% 北寄り覆土中層
5	坩 土師器	B（6.3） C　2.0	底部から体部上位の破片。平底。体部は球形状を呈する。	体部内・外面ナデ。	砂粒・スコリア にぶい黄橙色 普通	P94　35% 北寄り覆土下層 外面剥離 内・外面煤付着
6	甕 土師器	B（5.0） C　6.8	底部から体部下位の破片。上げ底気味の突出した平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・パミス・雲母 橙色　普通	P95　20% 北寄り覆土下層 外面煤付着
7	甑 土師器	A［23.8］ B［14.6］ C　4.9	底部及び口縁部の破片。単孔式の平底。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は折り返しのある複合口縁で，ほぼ垂直に立ち上がり，口唇部はやや反る。	口縁部内・外面指調整。体部内面ヘラナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P96　25% PL32 南寄り床面直上 体部外面著しい研磨痕。

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径				
第140図8	土　玉	2.8	2.8	—	0.8	(9.4)	60	南寄り床面直上	ＤＰ３
9	土　玉	2.8	2.7	—	0.7	18.9	100	覆土中	ＤＰ４
10	土　玉	2.6	(2.5)	—	0.6	(7.2)	40	覆土中	ＤＰ５

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第140図11	臼　玉	0.4	0.4	0.2	0.2	0.1	100	滑　石	覆土中	Q15　PL34
12	臼　玉	0.5	0.5	0.2	0.15	0.1	100	滑　石	覆土中	Q16　PL34

図版番号	種　別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第140図13	臼　玉	(0.4)	0.5	0.25	0.2	(0.1)	90	滑　石	覆土中	Q17　PL34
14	臼　玉	0.5	0.4	0.3	0.15	0.1	100	滑　石	覆土中	Q18　PL34
15	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	滑　石	覆土中	Q19　PL34
16	臼　玉	0.5	(0.4)	0.3	0.15	(0.3)	90	滑　石	炉内覆土上面	Q20　PL34
17	臼　玉	0.5	0.3	0.5	0.15	0.3	100	滑　石	覆土中	Q21　PL34
18	ガラス玉	0.6	0.6	0.6	0.2	0.2	100	—	炉内覆土中層	Q22

第17号住居跡（第141図）

位置　調査区のほぼ中央部，L15$_{g2}$区。

重複関係　本跡は第１号溝により，壁，床の一部を南西から南東に掘り込まれ，南コーナーが削平している。本跡のほうが古い。

規模と平面形　長軸7.28m，短軸［5.43m］の長方形。

主軸方向　N—40°—E

壁　壁高は８～17cmで，外傾して立ち上がる。掘り込みが浅いため，南コーナーから南東壁中央部にかけて耕作によって削平され残存しない。

床　平坦で，全体が軟弱である。南コーナー付近は第１号溝によって掘りこまれ残存しない。

ピット　４か所（P_1～P_4）。P_1，P_2は長径25～35cm，短径22～32cmの不整楕円形で，深さ約36cmである。P_3，P_4は径20～22cm，深さ約40cmのほぼ円形に近いピットである。P_1～P_4は各コーナー付近に付設され，位置や配列から主柱穴と考えられる。

炉　中央から北西壁寄りに付設されている。平面形は長径93cm，短径65cmの長楕円形で，床面を約５cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受け僅かに赤変している。

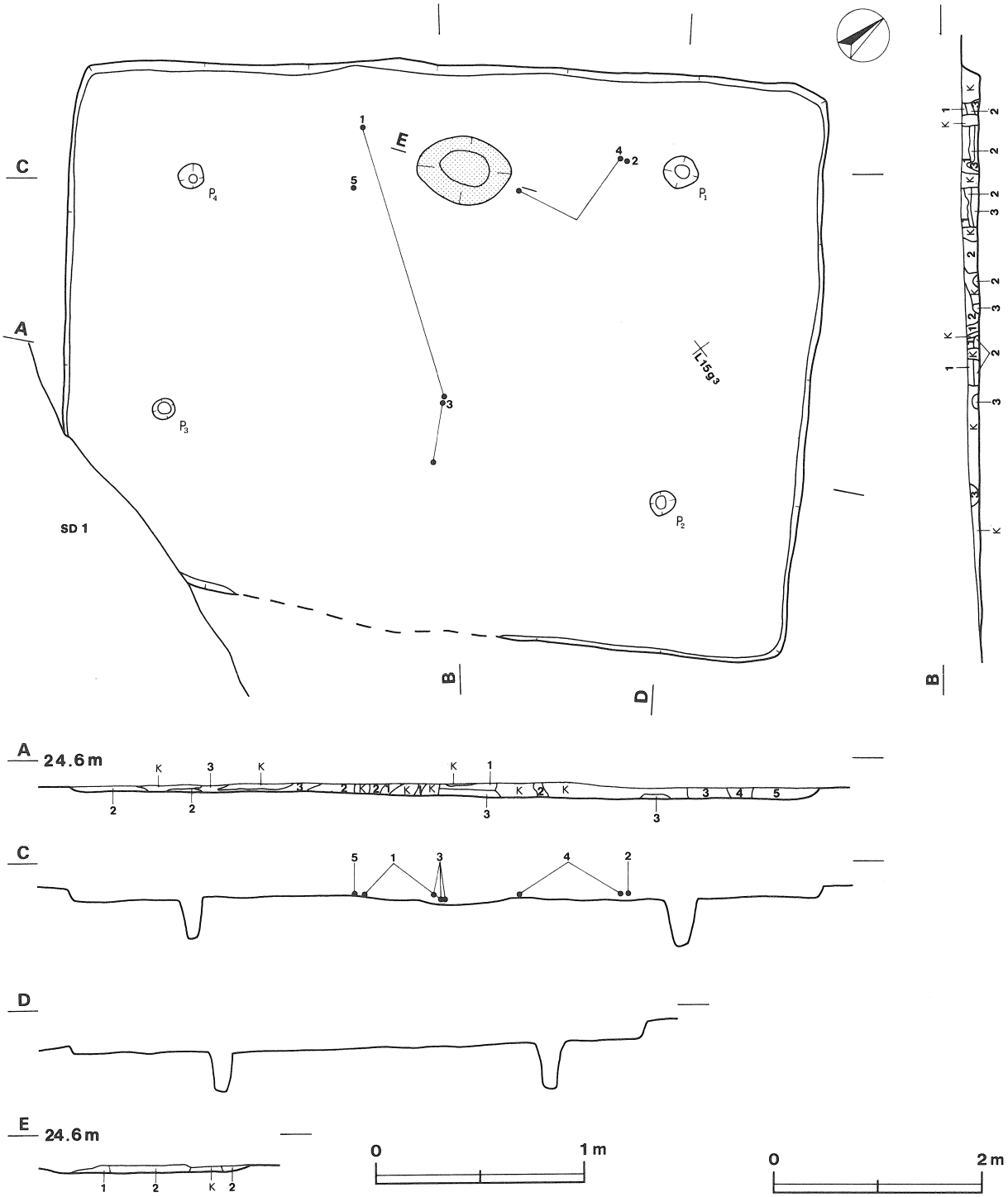
炉土層解説
1　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，炭化物極微量
2　赤褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量，粘性・締まり強

覆土　５層から成る。南東壁付近は削平されているため全体の層位関係を把握することはできないが，北西壁沿いの覆土下層から中層にかけて，焼土粒子，炭化粒子を含む褐色土の堆積がみられる。中層から上層にかけ部分的に炭化物とローム粒子を含む褐色土のレンズ状堆積がみられる。自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック微量
2　暗褐色　ローム粒子多量，炭化物微量
3　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
4　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック微量
5　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・ローム小ブロック少量，炭化粒子微量，締まり強

遺物　北西寄りの覆土下層から床面直上にかけて土師器片が中量出土している。第142図１の高坏は，北西寄りの床面直上から正位の状態で出土している坏部に，中央寄りの覆土下層から出土している高坏片が接合したものである。２～５の甕は，２が北寄りの覆土下層から，３が中央寄りの覆土中層から出土し，４が北寄りの覆土下層及び床面直上から出土している甕片と接合し，５が北西寄りの床面直上から出土している。

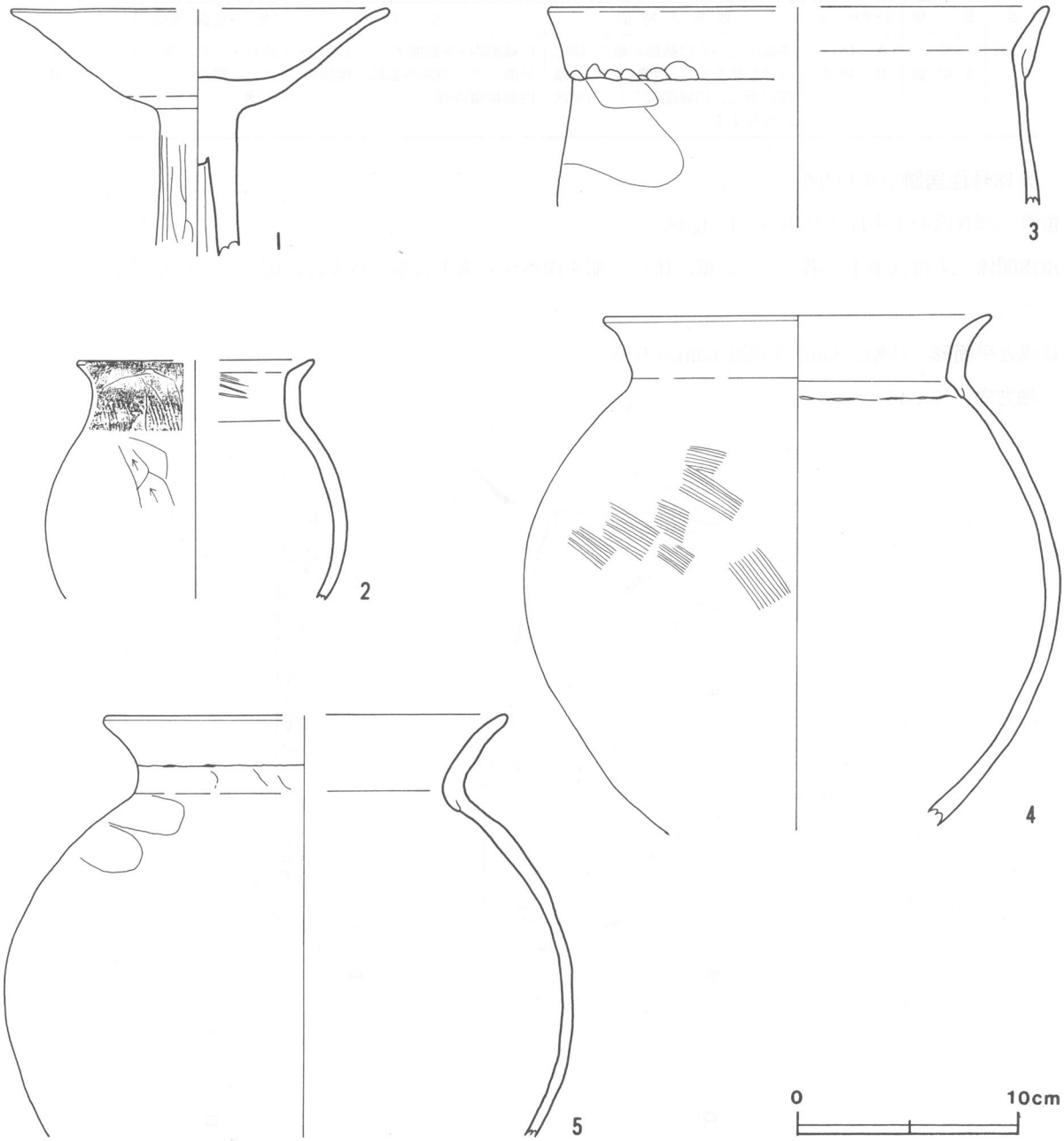
所見　本跡の時期は，出土遺物から５世紀前半と考えられる。



第141図　第17号住居跡実測図

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第142図 1	高　坏 土師器	A [17.0] B (10.8) E (6.3)	脚部から口縁部の破片。脚部は柱状を呈し，坏部は緩やかに外傾して立ち上がり，口縁端部は反る。坏部下位に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ナデ。脚部内・外面縦位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石 にぶい橙色 普通	P97　30% 北西寄り床面直上 脚部外面煤付着
2	甕 土師器	A [10.8] B (11.0)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，頸部は括れ，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部内・外面刷毛目整形後ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P98　15% 北寄り覆土下層 体部内面煤付着



第142図　第17号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第142図 3	甕 土師器	A [22.6] B (9.0)	体部上位から口縁部の破片。体部は中位が張り，僅かに内彎しながら立ち上がる。口縁部は折り返しのある複合口縁で，やや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。口縁部外面指圧痕。	砂粒・石英・長石・パミス 橙色 普通	P99　15% 中央寄り覆土中層
4	甕 土師器	A　17.6 B (23.0)	底部及び口縁部一部欠損。体部は球形状を呈し，内彎しながら立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面刷毛目整形後ナデ，内面ナデ。	砂粒・石英・長石 明赤褐色 普通	P100　60% PL32 北寄り覆土下層及び床面直上 体部外面煤付着

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第142図 5	甕 土師器	A［18.3］ B（19.0）	体部中位から口縁部の破片。体部は球形状を呈し，内彎しながら頸部に至る。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。頸部外面粘土補強痕。内面輪積み痕。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P101　40% 北西寄り床面直上

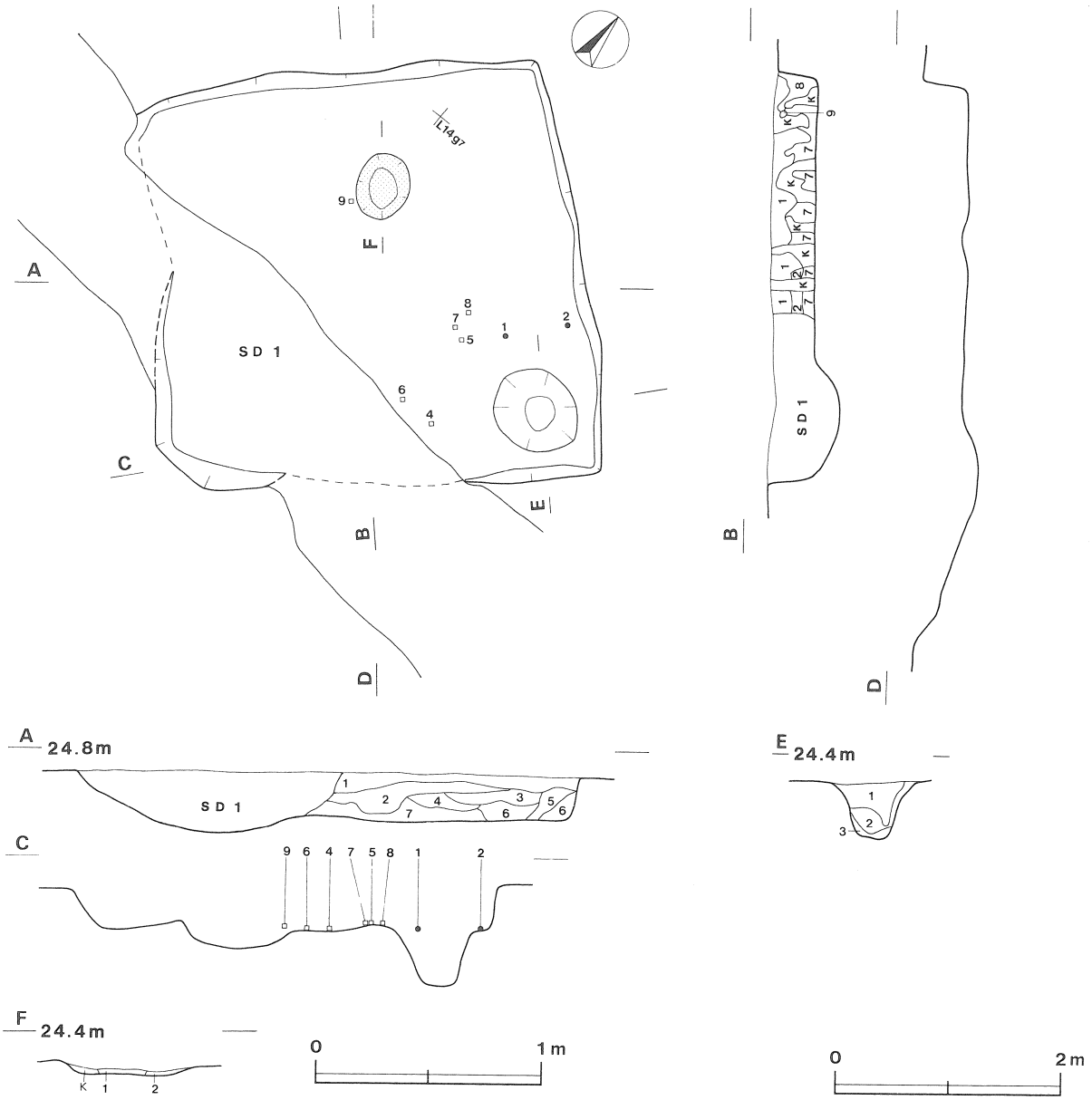
第18号住居跡（第143図）

位置　調査区の中央部やや南西，L14$_{g7}$区。

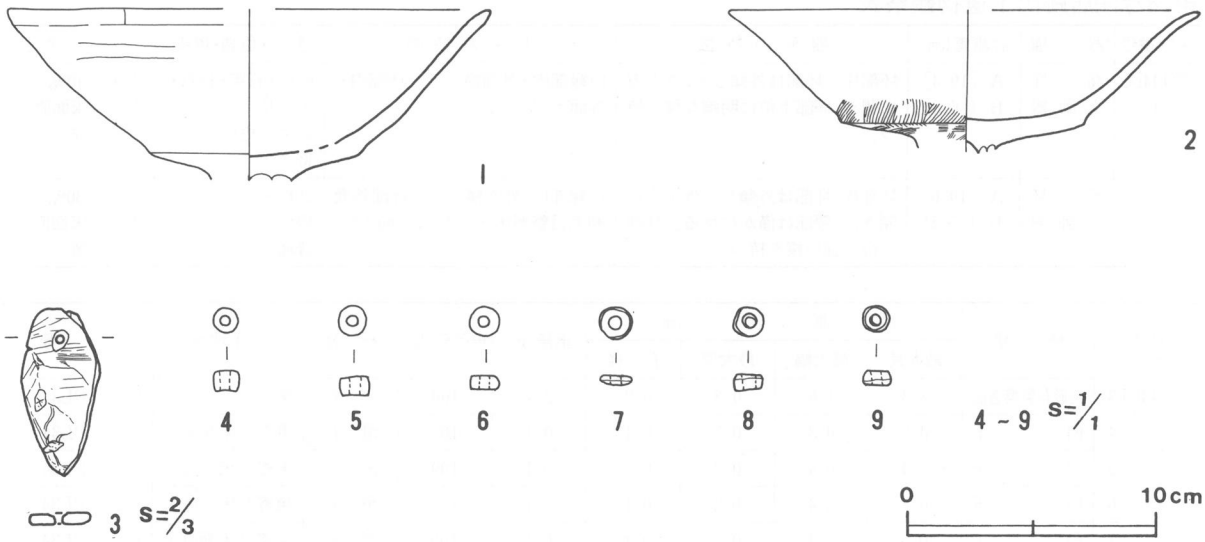
重複関係　本跡は第１号溝により，壁，床の一部を南西から南東に掘り込まれ，削平している。本跡のほうが古い。

規模と平面形　長軸3.95m，短軸3.63mの方形。

主軸方向　N－46°－E



第143図　第18号住居跡実測図



第144図　第18号住居跡出土遺物実測図

壁　壁高は30～38cmで，垂直に立ち上がる。南西壁中央から南東壁中央にかけて第1号溝が掘り込んでいるため一部残存しない。

床　平坦で，全体が踏み締まっている。

炉　中央から北西寄りに付設されている。平面形は長径57cm，短径46cmの楕円形で，床面を約4cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量
2　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量

貯蔵穴　東コーナー付近に付設され，平面形は長径84cm，短径66cmの楕円形である。深さは53cmで，断面は逆台形をしている。貯蔵穴周辺は踏み固められ，馬蹄形の高まりを持っている。

貯蔵穴土層解説

1　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，焼土粒子・炭化物極微量
2　褐　色　炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子微量
3　褐　色　焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量，焼土粒子極微量

覆土　9層から成る。部分的に自然堆積の様相もみられるが，床面上から上層までの複雑な堆積状況をみると，遺構の上層部分まで人為的に埋め戻しが行われ，その後，自然堆積したものと思われる。

土層解説

1　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化物・炭化粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子多量，焼土小ブロック・焼土粒子少量，ローム小ブロック微量，締まり強
3　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量，締まり強
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化物・炭化粒子微量
6　褐　色　ローム粒子多量，焼土小ブロック少量，炭化粒子微量
7　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量，焼土小ブロック微量
8　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
9　褐　色　ローム粒子・ロームブロック微量

遺物　覆土中層から床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第144図1・2の高坏は，共に東寄りの床面直上から正位の状態で出土している。その他，3の剣形石製模造品が覆土中から出土し，4～8の臼玉が東寄りの床面直上から，9の臼玉が北西寄りの床面直上から出土している。

所見　本跡は出土遺物から祭祀行為との関係が推測される住居跡である。時期は，出土遺物から5世紀前半と考えられる。

第18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第144図 1	高　坏 土師器	A [19.4] B (6.8)	坏部片。坏部は外傾して,外上方に開く。坏部下位に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ナデ。	砂粒・石英・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P102　40% 東寄り床面直上 二次焼成
2	高　坏 土師器	A [19.0] B (5.5)	坏部片。坏部は外傾して外上方に開き,口唇部は僅かに反る。坏部下位に強い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面刷毛目整形後ヘラナデ,内面ナデ。	砂粒・石英・長石 橙色 普通	P103　30% 東寄り床面直上 内面剝離

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第144図 3	剣形石製模造品	3.3	1.6	0.3	0.2	2.4	100	片　岩	覆土中	Q23　PL34
4	臼　玉	0.3	0.3	0.3	0.15	0.1	100	滑　石	東寄り床面直上	Q24　PL34
5	臼　玉	0.4	0.4	0.3	0.15	0.1	100	滑　石	東寄り床面直上	Q25　PL34
6	臼　玉	0.4	0.4	0.2	0.15	0.1	100	滑　石	東寄り床面直上	Q26　PL34
7	臼　玉	0.4	0.4	0.1	0.15	0.1	100	滑　石	東寄り床面直上	Q27　PL34
8	臼　玉	0.4	0.4	0.2	0.2	0.1	100	滑　石	東寄り床面直上	Q28　PL34
9	臼　玉	0.4	0.4	0.2	0.15	0.1	100	滑　石	北西寄り床面直上	Q29　PL34

第19号住居跡（第145図）

位置　調査区の南東部中央付近，L15$_{g7}$区。

規模と平面形　長軸5.50m，短軸5.35mの方形。

主軸方向　N－47°－E

壁　壁高は25～34cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　北西壁沿いを除いては，周回している。上幅４～８cm，深さ５～７cmで，断面形はU字形である。

床　平坦で，全体が踏み締まっている。

ピット　５か所（P_1～P_5）。P_1～P_4は長径24～30cm，短径20～26cmの不整楕円形である。深さは40～45cmである。各コーナーからやや中央に向かったところに付設され，位置や配列から主柱穴と考えられる。P_5は径25cm，深さ18cmの円形である。中央から南東壁寄りに付設され，位置や配列から出入口ピットと考えられる。

炉　中央から北西壁寄りに付設されている。長径105cm，短径39cmで，床面を約５cm掘り窪めた長楕円形の地床炉である。炉床はよく焼け赤変硬化している。

炉土層解説

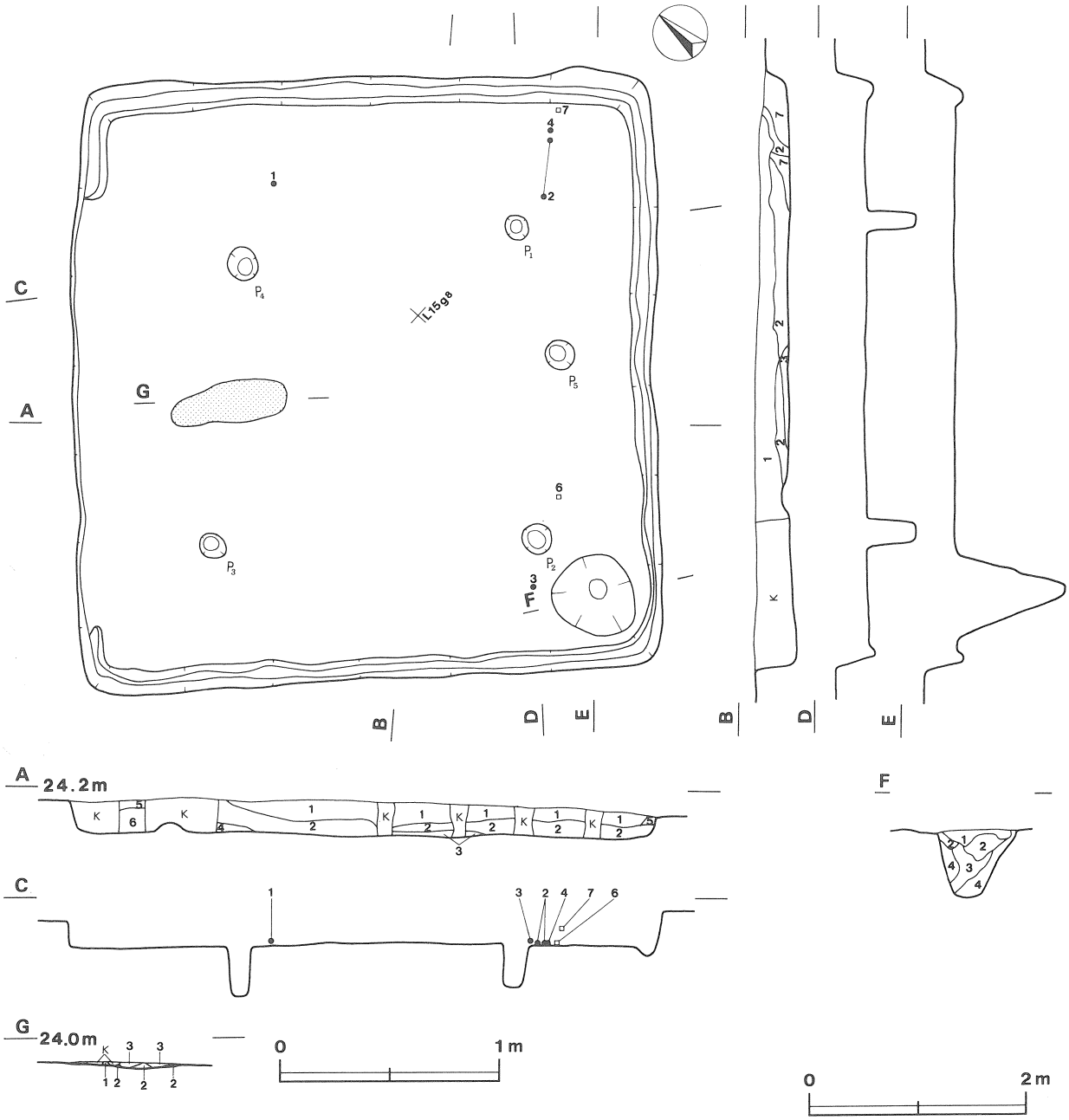
1　暗　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量
2　にぶい赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，焼土中ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
3　暗 赤 褐 色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，焼土中ブロック・炭化物少量，ローム粒子極微量

貯蔵穴　南コーナーに付設され，平面形は長径80cm，短径70cmの楕円形である。深さは65cmで，断面はU字形である。

貯蔵穴土層解説

1　褐　　色　焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量，炭化物微量
2　明 褐 色　炭化粒子中量，焼土中ブロック・焼土小ブロック・ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
3　褐　　色　焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量
4　明 褐 色　焼土小ブロック・炭化粒子少量，ローム小ブロック微量

覆土　７層から成る。南西壁沿い及び北西壁際は大きく耕作による撹乱を受け，壁際の土層堆積状況が不明であるが，北東壁際から床面中央に向かって褐色土が流れ込んでいる。覆土下層には焼土粒子と炭化物を含む褐色土が堆積し，中層から上層にかけてロームブロック，ローム粒子を含む暗褐色土が複雑に堆積している



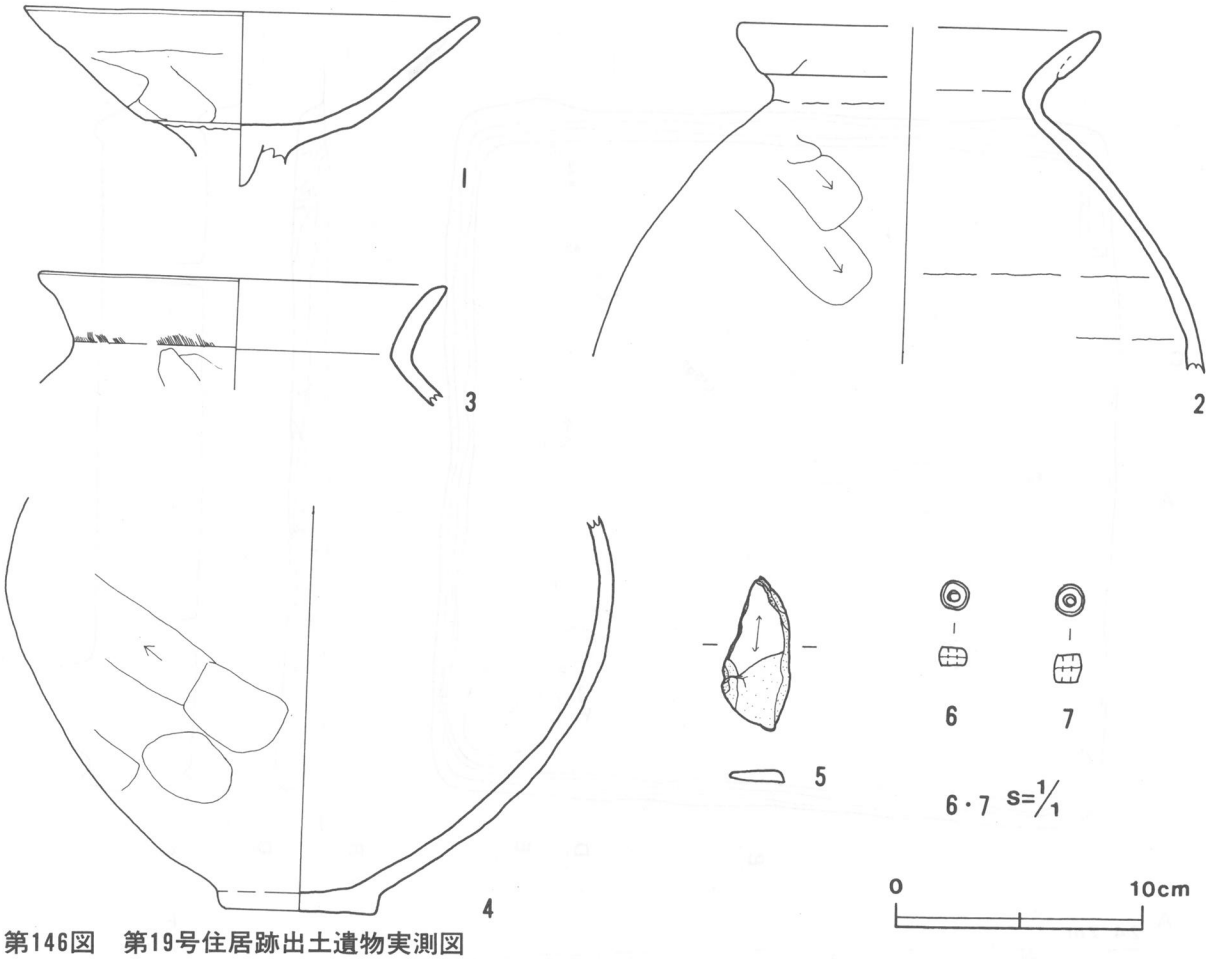
第145図　第19号住居跡実測図

状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量，締まり強
2　暗褐色　ローム粒子多量，炭化粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック微量，締まり強
3　褐　色　ローム粒子中量，炭化物・炭化粒子少量，焼土粒子微量
4　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化物微量
5　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量，締まり強
6　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子少量
7　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック微量

遺物　東寄りの覆土中層から床面直上にかけて，土師器片が少量出土している。第146図１の高坏は北寄りの覆土下層から出土している。２～４の甕は，２・４が東コーナー寄りの床面直上から，３が南コーナー寄りの覆土下層から出土している。その他，５の砥石が覆土中から，６の臼玉が南コーナー寄りの床面直上から，７の臼玉が東コーナー寄りの覆土中層から出土している。



第146図　第19号住居跡出土遺物実測図

所見　本跡の時期は，出土遺物から5世紀前半と考えられる。

第19号住居跡出土遺物観察表

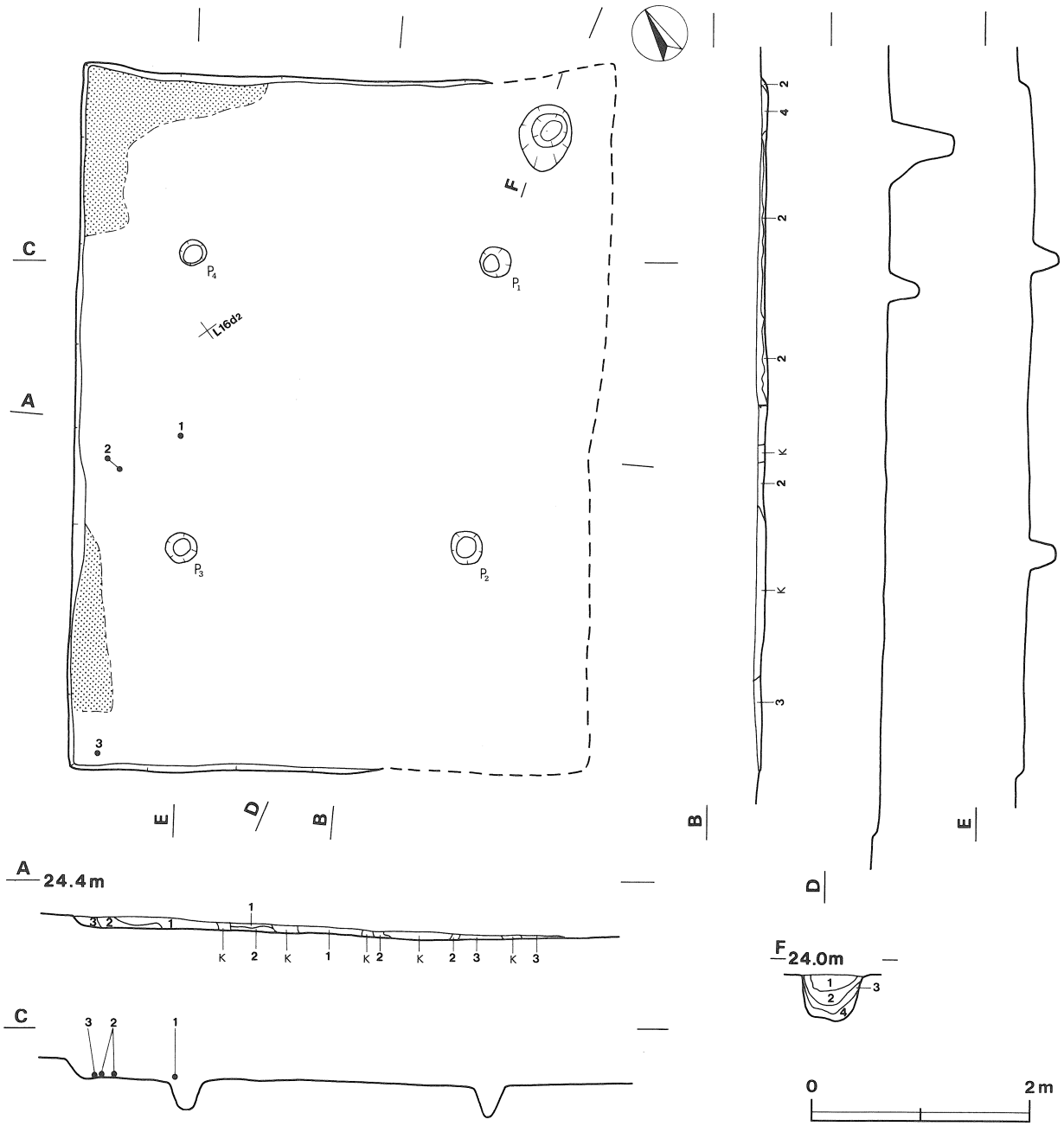
図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第146図 1	高　坏 土師器	A　18.4 B（5.9）	坏部片。坏部は外傾して外上方に開く。坏部下位に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面斜位のヘラナデ，内面ナデ。坏部下位に接合部の突起が残る。坏部外面輪積み痕。	砂粒・雲母 赤橙色 普通	P104　40% 北寄り覆土下層 内・外面煤付着
2	甕 土師器	A［15.0］ B（13.5）	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は折り返しのある複合口縁で，「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・石英・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P105　35% 東コーナー寄り 床面直上 内面剝離
3	甕 土師器	A　16.4 B（4.5）	体部上位及び口縁部の破片。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面刷毛目整形後ナデ。	砂粒・パミス 橙色 普通	P106　10% 南コーナー寄り 覆土下層
4	甕 土師器	B（16.2） C　6.3	底部から体部上位の破片。突出した平底。体部は球形状を呈し，内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ヘラナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・石英・長石 黒褐色 普通	P107　30% 東コーナー寄り 床面直上

図版番号	種　別	計　測　値　(cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第146図5	砥　石	(6.1)	(2.3)	(0.5)	—	(8.0)	不明	粘板岩	覆土中	Q30
6	臼　玉	0.4	0.4	0.25	0.15	0.1	100	滑　石	南コーナー床面直上	Q31　PL34
7	臼　玉	0.4	0.4	0.4	0.2	0.1	100	滑　石	東コーナー覆土中層	Q32　PL34

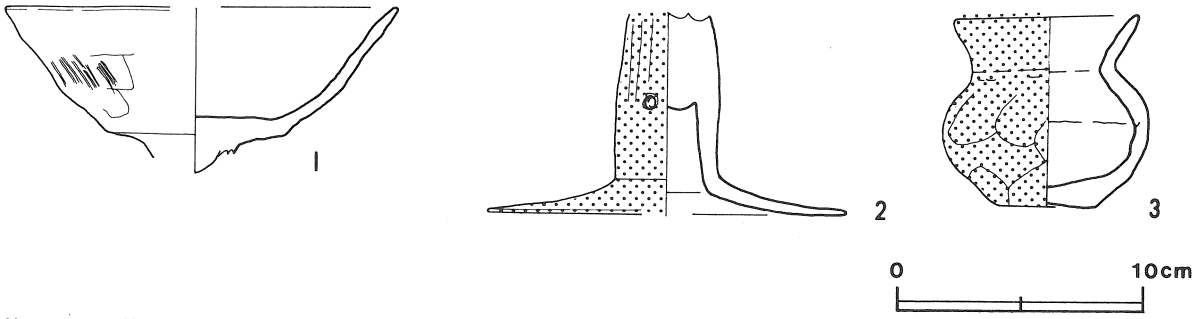
第20号住居跡（第147図）

位置　調査区の北東部，L16$_{d2}$区。

規模と平面形　本跡の東コーナー付近から南東壁中央部にかけて，壁面が削平され規模は不明であるが，残存する壁面から長軸6.46m，短軸4.76mの長方形と推測される。



第147図　第20号住居跡実測図



第148図　第20号住居跡出土遺物実測図

主軸方向　N－37°－E

壁　壁高は4～23cmで，外傾する。

床　平坦であるが，踏み締まりはみられない。西コーナー付近と北コーナーには焼土の広がりがみられる。

ピット　4か所（P_1～P_4）。P_1～P_4は径24～34cmの円形で，深さは25cm～30cmである。各コーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。

貯蔵穴　東コーナー付近に付設され，平面形は長径62cm，短径50cmの不整楕円形で，深さは55cmで，円筒状に掘られている。

貯蔵穴土層解説
1　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化粒子微量，粘性強
2　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック少量
3　褐　　色　ローム粒子多量，炭化粒子・炭化物微量
4　褐　　色　ローム粒子多量，締まり強

覆土　4層から成る。東コーナーから南東壁中央部にかけての土層堆積状況は確認できないが，土層堆積状況のよい北西壁沿いには褐色土が堆積し，自然堆積の様相がみられ，覆土下層から上層にかけて，焼土粒子，炭化粒子を含む暗褐色土が厚く堆積している。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化物少量，炭化粒子微量
2　暗褐色　焼土粒子・ローム粒子中量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物　南東寄りの床面上から土師器片が少量出土している。第148図1・2の高坏は，共に北西寄りの床面直上から逆位の状態で出土し，3の壺は西コーナー寄りの床面直上から斜位の状態で出土している。

所見　本跡の床面からは，炉が確認できなかったが，炭化材と焼成を受け硬化した不整形の粘土塊がみられ，西コーナー付近から北コーナーにかけ焼土の広がりもみられた。だが，床面全体の火熱を受けた硬化部分が確認できず焼失家屋と考えるには疑問が残る。本跡の時期は，出土遺物から5世紀前半と考えられる。

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第148図 1	高　坏 土師器	A［15.9］ B（6.0）	坏部片。坏部は内・外面に歪みを持ちながら，外傾して外上方に立ち上がる。坏部下位に明瞭な稜を持ち，接合部の突起が残る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面刷毛目整形後ナデ，内面ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P108　20% 北西寄り床面直上 内・外面剝離
2	高　坏 土師器	B（8.0） D［14.5］	脚部から裾部の破片。脚部は柱状を呈し，裾部で屈曲し大きく開く。脚部中位に一つの円孔が穿たれ，反対側に孔を穿つ途中の痕跡が残る。	口縁部外面横位のヘラナデ，内面ナデ。裾部内・外面ナデ。外面赤彩。	砂粒・石英・長石 明赤褐色 普通	P109　30% 北西寄り床面直上 著しい内面剝離

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第148図 3	壺 土師器	A　7.4 B　7.7 C　3.8	口縁部一部欠損。平底。体部中位に最大径を持ち，球形状を呈する。頸部は括れ，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ナデ。外面赤彩。	砂粒・石英・パミス・雲母 にぶい橙色 普通	P110　98% PL32 西コーナー寄り 床面直上 体部外面煤付着

第21号住居跡（第149図）

位置　調査区の東部，L16f7区。

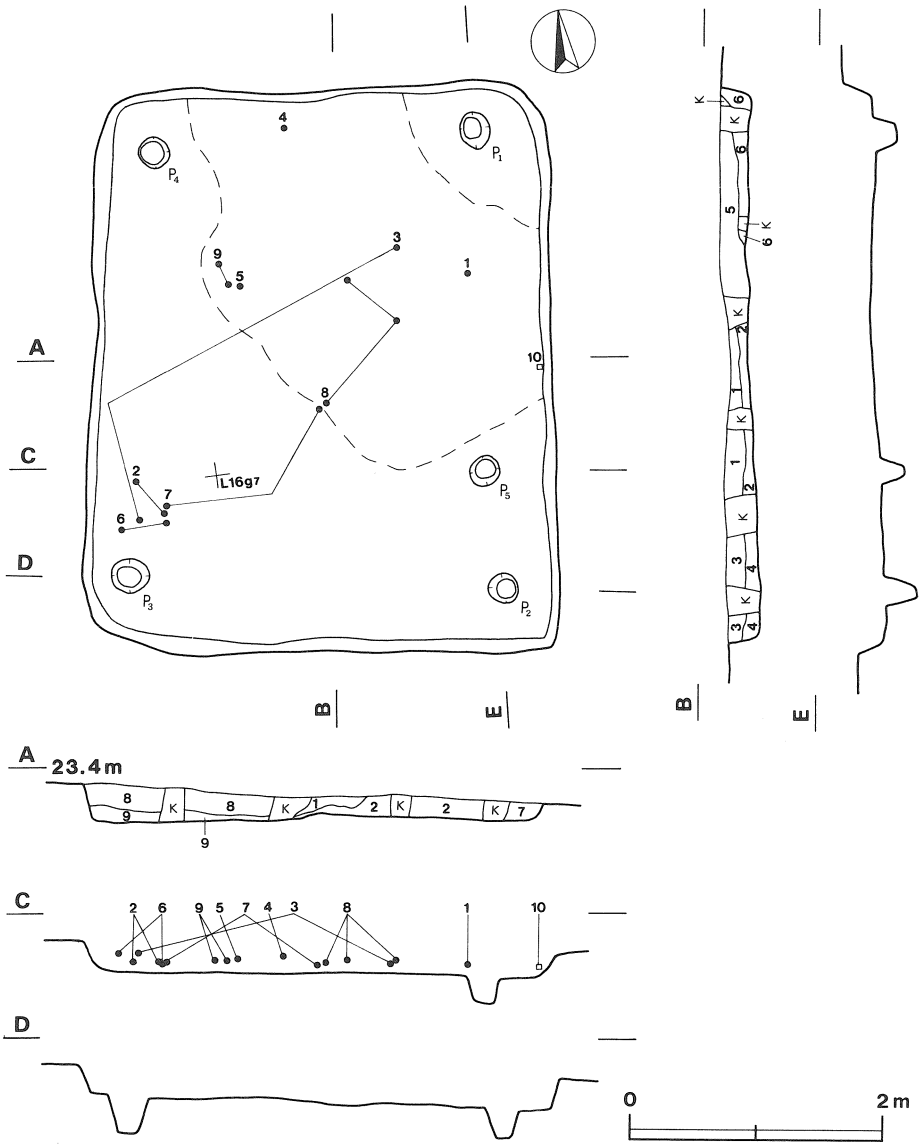
規模と平面形　長軸4.52m，短軸3.64mの長方形。

主軸方向　N－90°－E

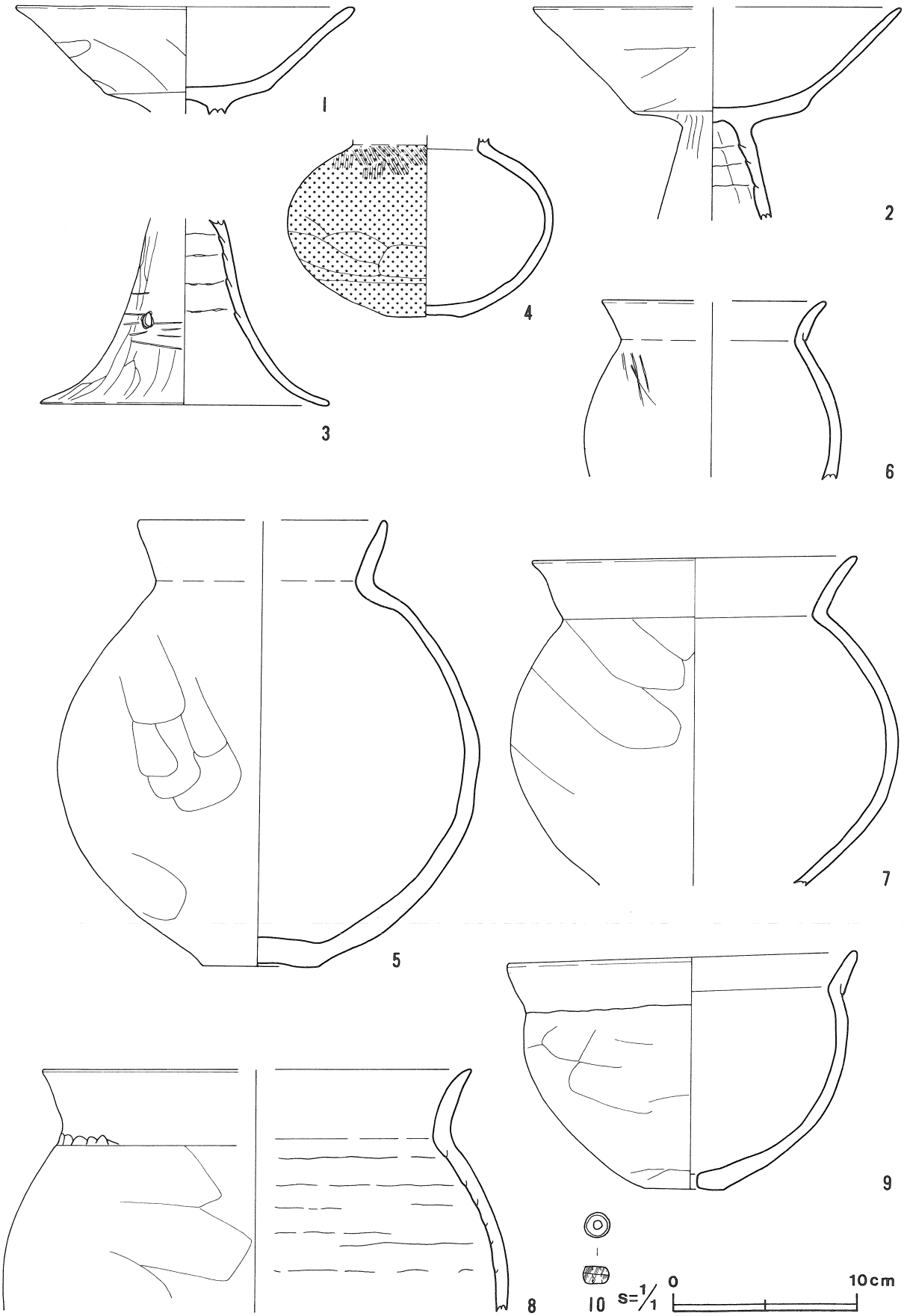
壁　壁高は14～25cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦で，踏み締まっている。

ピット　5か所（P_1～P_5）。P_1～P_4は長径26～32cm，短径22～30cmの不整楕円形で，深さは16～29cmである。各ピットはコーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は径25cmの円形で，深さは19cmである。南東壁際中央からやや南寄りにあり，規模や位置から出入口ピットと考えられる。



第149図　第21号住居跡実測図



第150図　第21号住居跡出土遺物実測図

覆土　9層から成る。西壁の覆土下層から中層にかけ褐色土が堆積し，中層から上層にかけて暗褐色土が厚く堆積し，南壁際には覆土下層から上層にかけて褐色土が厚く堆積している。

土層解説
1　黒褐色　ローム粒子多量，締まり強
2　暗褐色　ローム粒子中量
3　褐　色　ローム粒子少量
4　褐　色　ローム粒子少量
5　黒褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
6　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子極微量，締まり強
7　褐　色　焼土粒子・ローム粒子中量，締まり強
8　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，締まり強
9　褐　色　ローム粒子中量，締まり強

遺物　中央付近の覆土下層を中心に土師器片が中量出土している。第150図1～3の高坏は，1が北東寄りの覆土下層から逆位の状態で，2が南西寄りの覆土下層から正位の状態で出土している。3は北東寄りと，西寄りの覆土中層から出土している高坏片が接合したものである。4の坩は北寄りの覆土中層から逆位で出土している。5～8の甕は，5が北西寄りの覆土中層から出土し，6が西コーナー寄りの覆土下層から斜位の状態で，7が中央及び西寄りの覆土下層から出土している甕片が接合し，8が中央寄りの覆土下層から出土し，9の甑が北寄りの覆土下層から出土している。

所見　本跡は，当遺跡内から確認した同時期の住居跡が概ね付設している炉及び貯蔵穴の何れも持たない住居跡であるが，床面の硬化した部分が確認され，遺物及び出土状況から住居跡として取り扱った。時期は，出土遺物から5世紀前半と考えられる。

第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第150図 1	高　坏 土師器	A　18.3 B（5.7）	坏部片。坏部は外傾して外上方に開く。坏部下位に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P111　50% PL33 北東寄り覆土下層
2	高　坏 土師器	A［19.9］ B（11.3） E（4.9）	脚部から坏部の破片。脚部は下方にラッパ状に開く。坏部は外上方に立ち上がり，下位に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラナデ，内面ナデ。脚部外面縦位のヘラナデ。脚部内面輪積み痕。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P112　40% 南西寄り覆土下層
3	高　坏 土師器	D　15.5 E（10.0）	坏部欠損。脚部は下方にラッパ状に広がり，裾部は大きく開く。脚部中位に一つの孔を穿つ。	脚部外面縦位のヘラナデ，裾部外面横ナデ。脚部外面中位に横位の線刻。内面輪積み痕。	砂粒・石英・長石 橙色 普通	P113　50% PL33 北東及び西寄り覆土中層 内・外面煤付着
4	坩 土師器	B（9.5） C　4.2	口縁部一部欠損。平底。体部はソロバン玉状を呈し，最大径を体部中位に持つ。	体部外面上位刷毛目整形後ナデ，下位ヘラナデ，内面ナデ。外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P114　85% PL33 北寄り覆土中層 外面煤付着 内面剝離
5	甕 土師器	A［13.4］ B　23.9 C　6.3	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は球形状を呈し，最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・スコリア にぶい橙色　普通	P115　70% PL33 北西寄り覆土中層
6	小型甕 師器	A［12.0］ B（9.5）	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾して立ち上がり，その後，僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のナデ，内面ナデ。	砂粒・パミス・雲母 にぶい赤褐色 普通	P116　20% 西コーナー寄り 覆土下層 外面煤付着
7	甕 土師器	A　17.5 B（17.8）	底部欠損。体部中位は球形状を呈し，内彎しながら立ち上がり，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・パミス 橙色 普通	P117　60% PL33 中央及び西寄り 覆土下層 体部外面上位煤付着
8	甕 土師器	A［23.0］ B（13.0）	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はやや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面ナデ。頸部外面指圧痕。	砂粒・石英・長石 橙色 普通	P118　20% PL33 中央寄り覆土下層 口縁部内・外面煤付着
9	甑 土師器	A　18.9 B　12.9 C　4.3	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は折り返しのある複合口縁で，外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・雲母 橙色 普通	P119　90% PL32 北寄り覆土下層

図版番号	種　別	計　測　値　(cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第150図10	臼　玉	0.45	0.45	0.3	0.15	0.1	100	滑　石	覆土中	Q33　PL34

（2）竪穴遺構

当遺跡の調査では，炉を付設せず，対になる2本のピットをコーナーに持ち，明確に他の住居跡とは異なる構造物が推測できる遺構を調査区の北部で1基確認したので竪穴遺構とし，遺構及び遺物について記載する。

第1号竪穴遺構（第151図）

位置　調査区の北部，K15$_{g2}$区。

規模と平面形　長軸2.63m，短軸1.65mの長方形。

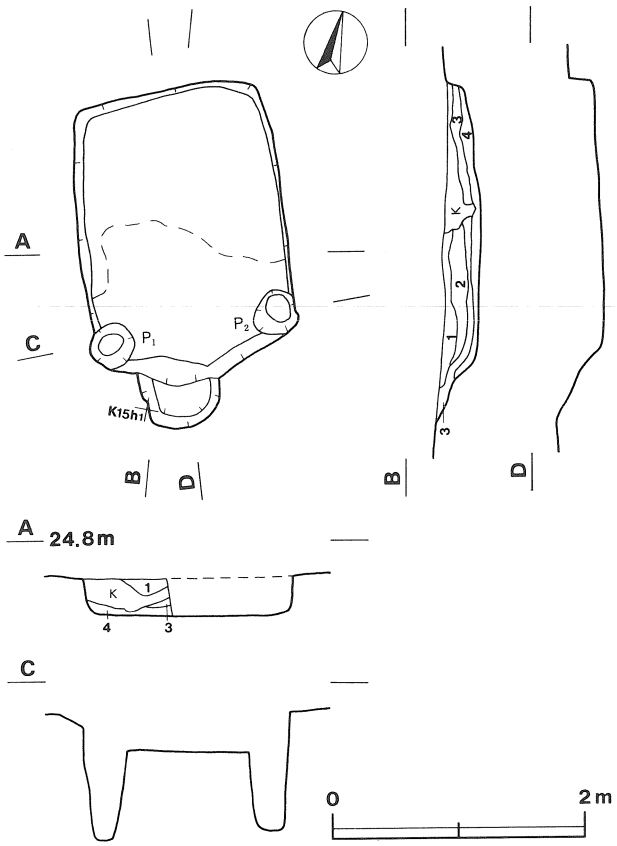
長軸方向　N—20°—W

壁　壁高は15～33cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床　出入り口から中央部にかけては平坦で，中央部から北西壁にかけ緩やかに駆け上がる。

ピット　2か所（P_1，P_2）。P_1，P_2は南西・南東両コーナーに壁面を延ばして，その一部となって付設され，長径35～40cm，短径31～34cmの不整楕円形で，深さ60～70cmである。規模や位置から主柱穴と考えられる。

覆土　4層から成る。覆土中層から上層にかけ一部耕作による撹乱を受けているが，その他はレンズ状の堆積状況がみられる。覆土下層から中層にかけて焼土粒子を含む褐色土が堆積し，中層から上層にかけて焼土粒子，炭化物を含む黒褐色土が堆積している。



第151図　第1号竪穴遺構実測図

土層解説

1	黒褐色	焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量	3	褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・ローム中ブロック微量
2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量	4	褐色	ローム粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック微量

遺物　覆土中から床面直上にかけて極めて少量で微細の土師器片が出土し，土師器の体部にはいずれも刷毛目整形痕が残る。

所見　本跡は，竈や炉を持たず，出入口と思われる部分に緩やかな傾斜を持ち，柱穴は東両コーナーに2か所付設されているところから，住居跡とは異なる片流れ屋根的掘立小屋といった上屋構造物が推測される。時期は，床面直上から出土している遺物が少量なので特定するには至らないが，土師器の様相から5世紀前半頃のものと考えられる。

（3）　土坑

今回の調査では，古墳時代の土坑を4基確認した。以下，確認した遺構と遺物ついて記載する。

第68号土坑（第152図）

位置　調査区の中央部からやや南，L14$_{f8}$区。

規模と平面形　長径0.73m，短径0.64mの円形で，深さは0.33mである。

長径方向　N－37°－W

壁面　北東壁に段を呈し，ほぼ垂直に立ち上がる。

底面　南西側に落ち込みがみられる。

覆土　耕作による撹乱を受け，層位の把握ができなかった。

遺物　覆土中や底面から土師器13片が出土している。1の甕は覆土中から斜位の状態で出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から5世紀後半のものと考えられる。性格は不明である。

第77号土坑（第152図）

位置　調査区の東部，L16$_{b3}$区。

規模と平面形　長径0.60m，短径0.51mの楕円形で，深さは0.56mである。

長径方向　N－53°－E

壁面　北東壁は垂直に立ち上がり，南西壁は外傾して立ち上がる。

底面　皿状である。

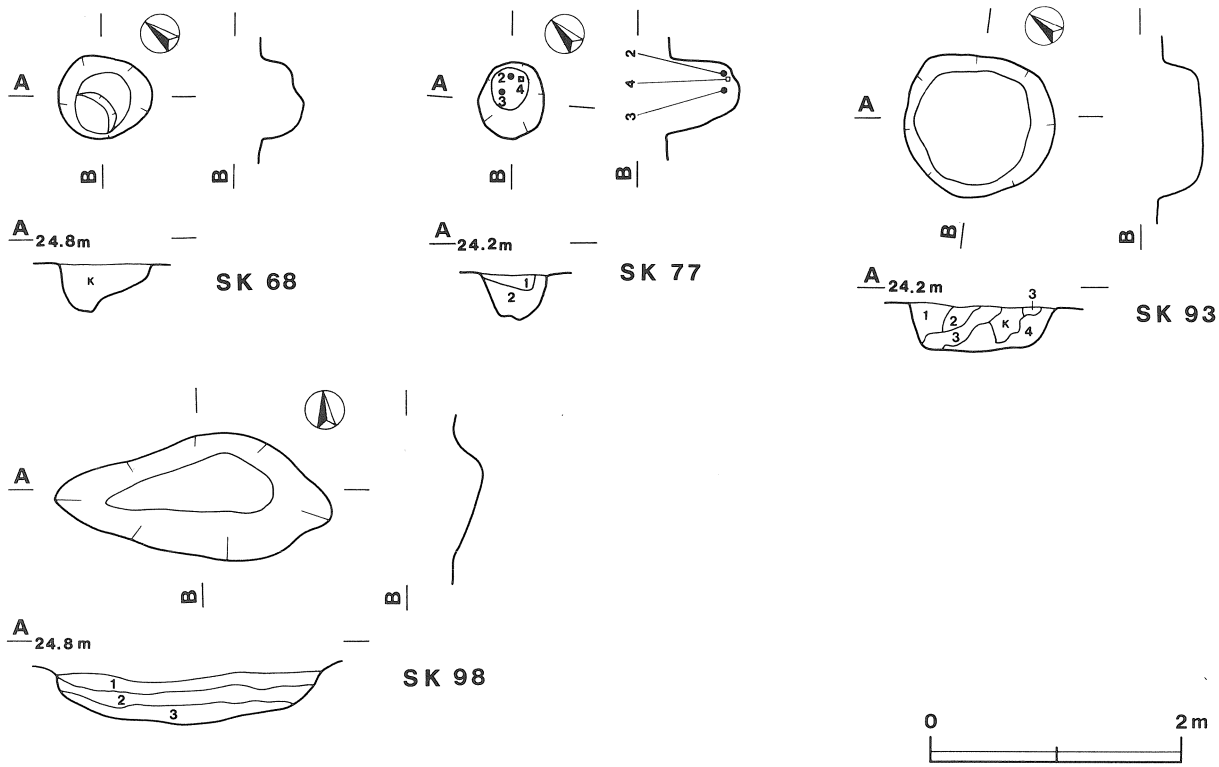
覆土　2層から成る。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量	2	暗褐色	ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物　覆土中や底面から土師器13片が出土している。2の高坏は正位の状態で底面から出土し，3の甕は斜位の状態で，底面から出土している。また，覆土中層から単孔円板が出土している。

所見　本跡出土の赤彩された高坏及び有孔円板の出土状況から，何らかの祭祀行為との関係も推測される。また，遺構の形状や規模などから外部貯蔵施設として利用された可能性もある。時期は，5世紀後半頃と考えられる。



第152図　第68・77・93・98号土坑実測図

第93号土坑（第152図）

位置　調査区の東部，M14a9区。

規模と平面形　長径1.18m，短径1.11mの不整円形で，深さは0.35mである。

長径方向　N—39°—W

壁面　西側の壁面は外傾して立ち上がり，東側はほぼ垂直に立ち上がる。

底面　平担である。

覆土　4層から成る。土層1から炭化物が，土層3からは焼土粒子と炭化物が確認されている。

土層解説
1　暗 褐 色　ローム粒子中量，炭化物・ローム小ブロック微量
2　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
3　暗 褐 色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化物・ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
4　暗 褐 色　ローム中ブロック・ローム粒子少量

遺物　覆土中層から剣形石製模造品が出土している。

所見　出土遺物の剣形石製模造品は，当遺跡内から出土しているものと類似するものであるが，他の出土遺物がないことから，時期の特定はできないが，5世紀代に属するものと推測される。性格は不明である。

第98号土坑（第152図）

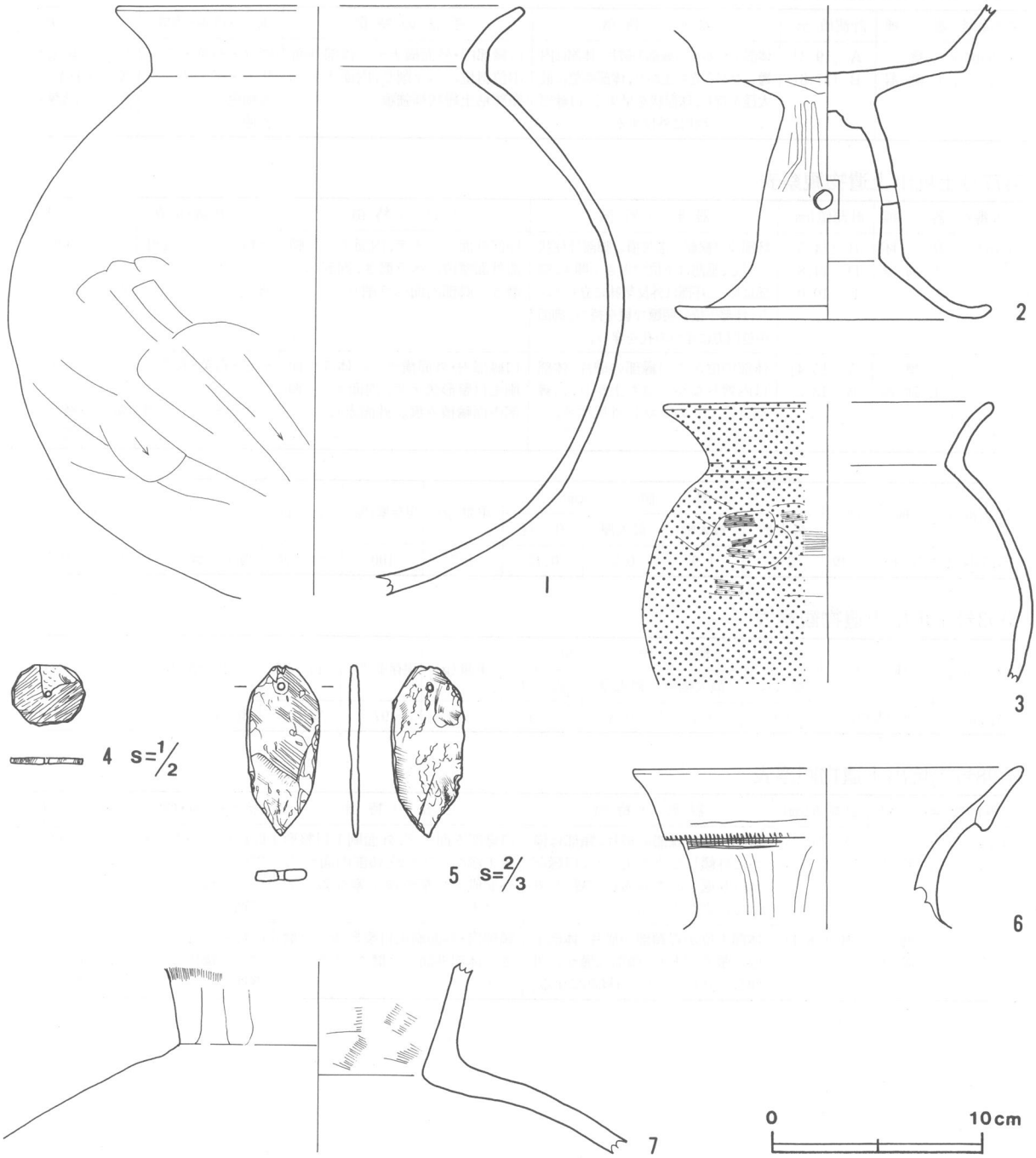
位置　調査区の中央部からやや東，K15j2区。

重複関係　本跡は，第7号住居跡の中央部を掘り込んでいる。

規模と平面形　長径2.20m，短径1.03mの不整楕円形で，深さは0.13mである。

長径方向　N—80°—W

壁面　緩斜する。



第153図　第68・77・93・98号土坑出土遺物実測図

底面　皿状である。

覆土　3層から成り，レンズ状の堆積状況がみられる。

土層解説

1	黒　　色	焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
2	極暗褐色	ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量，炭化物・ローム小ブロック微量
3	赤 褐 色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量

遺物　覆土中や底面から土師器62片が出土している。第153図6・7の壺は覆土中から出土したものである。

所見　本跡の時期は，出土遺物から第7号住居跡とほぼ同時期の5世紀前半のころと考えられるが，第7号住居跡よりやや先行するものと考えられる。性格は不明である。

第68号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第153図 1	甕 土師器	A [19.3] B (27.8)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，体部中位に最大径を持ち，球形状を呈する。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面中位斜位のヘラ削り，内面ナデ。頸部粘土紐状補強痕。	砂粒・石英・スコリア・パミス 黒褐色 普通	P120　40% 覆土中ＰＬ33 体部内・外面煤付着

第77号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第153図 2	高　坏 土師器	B (14.5) D　14.8 E　10.0	坏部及び裾部一部欠損。脚部は柱状を呈し，裾部は下位で大きく開き，端部は反る。坏部は外反気味に立ち上がり，坏部下位に明瞭な稜を持つ。脚部中位四方に４つの孔を穿つ。	坏部外面ヘラナデ，内面ナデ。脚部外面縦位のヘラ磨き，裾部ヘラ磨き。脚部内面ヘラ削り。	砂粒・パミス・雲母 にぶい橙色 普通	P121　70% PL33 覆土下層
3	甕 土師器	A [15.4] B (13.2)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面刷毛目整形後ナデ，内面ナデ。頸部内面輪積み痕。外面赤彩。	砂粒・石英・長石・スコリア にぶい橙色　普通	P122　40% PL34 覆土下層 二次焼成

図版番号	種　別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第153図４	有孔円板	2.2	1.9	0.2	0.15	1.7	100	片　岩	覆土下層	Q34　PL34

第93号土坑出土遺物観察表

図版番号	種　別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第153図５	剣形石製模造品	4.0	1.7	0.3	1.5	3.8	97	安山岩	覆土中	Q35　PL34

第98号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第153図 6	壺 土師器	A [18.3] B (7.5)	頸部から口縁部の破片。頸部は僅かに外傾して立ち上がり，口縁部は折り返しのある複合口縁で，外上方に立ち上がる。	口縁部内面ナデ，外面刷毛目整形後丁寧なヘラナデ。頸部内面ナデ，外面刷毛目整形後丁寧な縦位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P123　20% 覆土中
7	壺 土師器	B (8.1)	体部上位から頸部の破片。体部上位に張りがあり，頸部は僅かに外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	頸部内・外面刷毛目整形後ヘラ磨き。体部外面ヘラ磨き，内面ヘラナデ。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	P124　10% 覆土中 二次焼成

4　その他の遺構と遺物

(1) 土坑

調査区の全域から確認した土坑には，形状や規模に各々差異が認められ，伴出遺物も殆どなく，時期や性格が不明のものも多い。ここでは，それらを一覧表（表20）に記載した。

表20　西ノ原遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)				
23	$L13_{a1}$	N-28°-W	不整楕円形	1.12×0.87	61	緩斜	平坦	自然	
25	$L13_{c3}$	N-12°-E	不整円形	1.22×1.14	81	外傾	平坦	自然	
29	$L13_{b5}$	N-47°-E	不整楕円形	1.23×0.83	80	外傾	平坦	自然	
30	$L13_{b6}$	N-54°-W	楕円形	0.95×0.72	57	外傾	平坦	自然	
32	$L13_{b6}$	N-38°-E	不整長方形	1.14×0.69	84	緩斜	皿状	自然	
34	$K13_{j7}$	N-13°-E	不整楕円形	1.18×1.02	46	外傾	平坦	自然	
35	$K13_{j9}$	N-5°-E	円形	1.20×1.17	74	外傾	凹凸	自然	
36	$K14_{j1}$	N-26°-W	不整形	1.40×0.99	68	袋状	凹凸	自然	土師器片2(高坏1,甕1)
38	$K14_{i2}$	N-13°-E	不整楕円形	1.03×0.87	70	外傾	皿状	自然	
40	$K14_{i3}$	N-38°-W	楕円形	1.14×0.90	53	外傾	平坦	自然	
43	$K14_{f5}$	N-76°-E	不整楕円形	1.67×1.18	49	垂直	平坦	自然	
44	$K14_{e4}$	N-25°-W	円形	0.60×0.55	43	垂直	平坦	自然	
45	$K14_{e4}$	N-46°-E	不整方形	0.68×0.63	39	垂直	凹凸	自然	
46	$K14_{f6}$	N-22°-E	不整形	0.74×0.46	36	外傾	平坦	自然	
47	$K14_{f6}$	N-47°-W	不整円形	1.14×1.11	49	垂直	平坦	人為	
48	$K14_{e7}$	N-68°-E	不整長方形	1.20×0.98	70	外傾	凹凸	自然	土師器片5(甕)
49	$K14_{d6}$	N-84°-E	楕円形	0.63×0.41	42	垂直	皿状	自然	土師器片1(甕)
50	$K14_{a6}$	N-54°-E	不整楕円形	0.97×0.87	58	外傾	凹凸	自然	
52	$K14_{c8}$	N-0°	不整方形	1.00×1.00	71	垂直	平坦	自然	
55	$K14_{j7}$	N-80°-E	不整楕円形	1.54×0.85	23	緩斜	皿状	自然	
56	$K14_{j6}$	N-56°-W	不整長方形	0.90×0.65	34	緩斜	皿状	自然	
57	$K14_{b6}$	N-78°-W	不整楕円形	1.00×0.78	44	緩斜	平坦	自然	
59	$L14_{d4}$	N-59°-W	不整楕円形	1.82×1.03	96	垂直	凹凸	自然	
64	$L14_{d2}$	N-53°-E	不整円形	1.05×0.96	61	垂直	皿状	自然	
65	$L13_{h6}$	N-33°-W	不整長方形	1.27×0.96	30	緩斜	皿状	自然	
66	$L13_{h7}$	N-10°-E	不整楕円形	1.92×1.19	48	外傾	平坦	自然	
68	$L14_{f8}$	N-37°-W	円形	0.73×0.64	33	垂直	皿状	自然	土師器片14(甕)
69	$L15_{f1}$	N-22°-E	長楕円形	1.13×0.62	26	外傾	皿状	自然	土師器片4(甕)
77	$L16_{b3}$	N-53°-E	楕円形	0.60×0.51	56	垂直	皿状	自然	土師器13(高坏9,甕4),石製模造品(双孔円板),縄文土器
80	$L16_{f2}$	N-32°-E	不整楕円形	0.76×0.66	38	外傾	皿状	自然	
83	$L16_{h3}$	N-21°-E	不整楕円形	0.82×0.62	34	垂直	凹凸	人為	土師器片1(甕)
84	$M16_{b5}$	N-42°-E	不整長楕円形	3.72×1.24	80	外傾	凹凸	自然	
85	$L16_{h1}$	N-46°-W	長方形	0.81×0.71	23	垂直	凹凸	自然	
86	$L15_{h7}$	N-33°-W	円形	1.14×1.07	29	垂直	凹凸	人為	土師器片3(高坏2,甕1)
89	$L15_{j3}$	N-46°-E	不整長方形	1.31×0.95	32	垂直	平坦	自然	土師器片48(甕)
92	$M14_{b1}$	N-70°-W	不整楕円形	1.85×1.09	52	外傾	平坦	自然	土師器片9(甕)
93	$M14_{a9}$	N-39°-W	不整円形	1.18×1.11	35	外傾	平坦	人為	土師器片8(高坏4,甕4),石製模造品(剣形石製模造品)
94	$M14_{d8}$	N-16°-E	不整楕円形	0.73×0.55	76	垂直	平坦	自然	
96	$M14_{e8}$	N-66°-E	円形	0.95×0.90	70	垂直	平坦	自然	
97	$M14_{i9}$	N-73°-E	不定形	1.02×0.71	40	垂直	皿状	人為	
98	$K15_{j2}$	N-80°-W	不整長楕円形	2.20×1.03	13	緩斜	皿状	自然	土師器片62(壺),SI7を掘り込んでいる。

（2）　溝

今回の調査では，時期不明の溝１条を確認した。以下，確認した遺構について記載する。

第１号溝（付図２）

位置　調査区の西部から東部，L12$_{c6}$～L17$_{j1}$区。

確認状況　本跡は，遺構確認調査時から明瞭に確認出来た。

重複関係　本跡は第17・18号住居跡と重複する。本跡は第17・18号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と形状全長182mで，端部はそれぞれ調査区外に延びている。最大幅は2.4mで，最小幅は0.9mである。

断面形は「U」字形をし，深さは最大で0.67mで，西部ほど浅くなる。底部は概ね皿状に掘り込まれている。

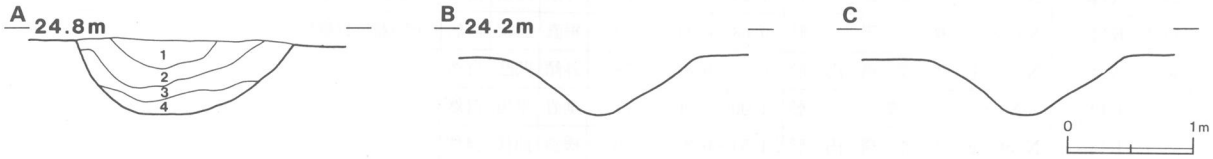
方向　N－80°－W

壁面　中位付近には凹凸がある。中位から上位にかけて耕作による撹乱を受けている。

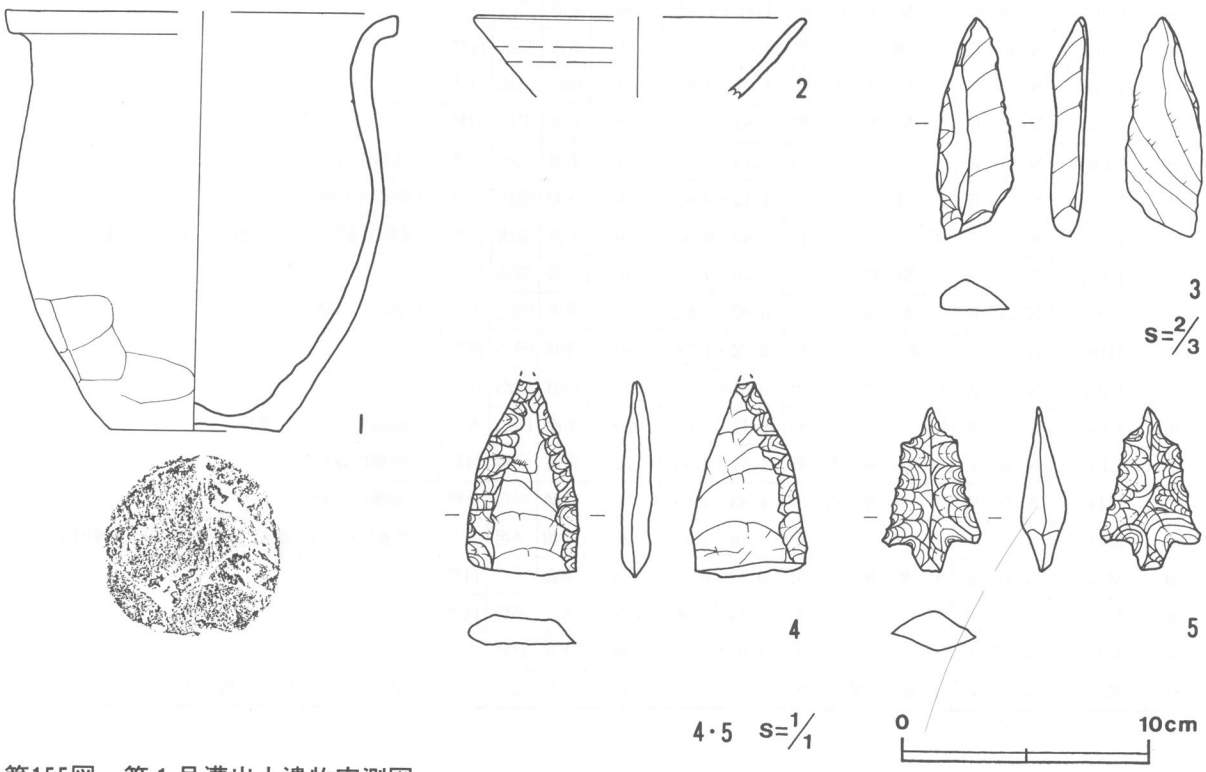
覆土　４層から成る。一部撹乱を受けている。自然堆積と考えられる。

土層解説

1　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
2　暗 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子極微量
3　褐　　色　ローム中ブロック・ローム粒子少量
4　褐　　色　炭化粒子・ローム小ブロック少量，炭化粒子極微量



第154図　第１号溝断面図



第155図　第１号溝出土遺物実測図

遺物　覆土中から土師器片が少量と，黒曜石を石材とする剝片が少量出土している。第155図１の常総型甕は，溝の東端の覆土上層から出土したもので，２の須恵器の坏は中央部付近の覆土中から出土している。３のナイフ形石器，４の先頭器，５の石鏃はいずれも溝を構築するときに混入したものと思われる。

所見　本跡の時期と性格は不明である。

第１号溝出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第155図 1	甕 土師器	A［15.7］ B　16.6 C　6.8	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり，頸部は括れ，口縁部に至る。口縁部に最大径を持つ。	口縁部内・外面及び頸部横ナデ。体部外面斜位のヘラ削り，内面ナデ。	砂粒・石英・長石 橙色 普通	P125　50% PL34 覆土上層底部に木葉痕
2	坏 須恵器	A〔 8.0〕 B（ 3.2）	体部及び口縁部の破片。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。口唇部に丸みを持つ。	体部外面横ナデ，内面ナデ。	石英・雲母 灰色 普通	P126　5% 中央部付近覆土中

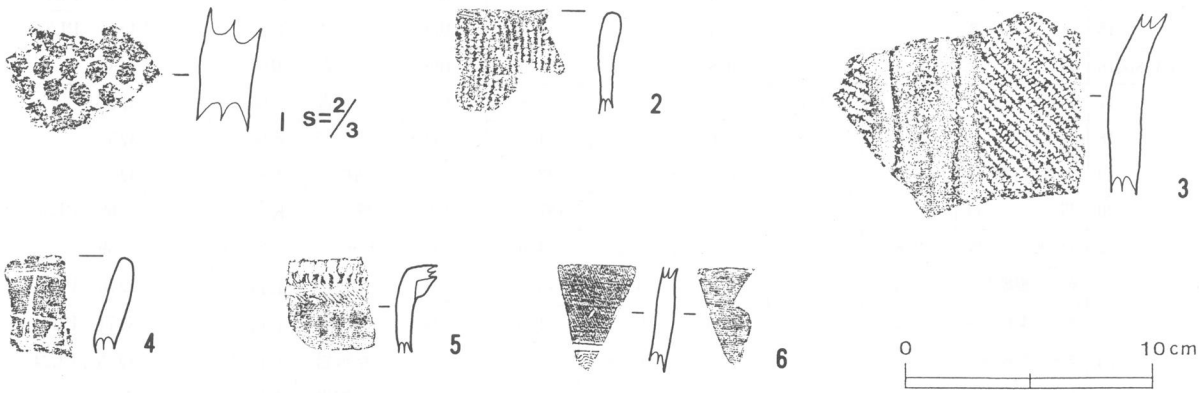
図版番号	種　別	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚					
第155図３	ナイフ形石器	4.3	1.5	0.6	4.2	100	安山岩	覆土中	Q36　PL34
4	尖頭器	(2.6)	(1.5)	0.4	(1.6)	50	頁岩	覆土中	Q37
5	石鏃	2.2	1.3	0.6	1.0	100	黒曜石	覆土中	Q39　PL34

5　遺構外出土遺物

当遺跡からは，表採及び遺構確認の際に出土したものも含めた遺構に伴わない旧石器時代から近世にかけての遺物が出土している。ここでは，これらの出土遺物のうち，縄文時代の土器片及び古墳時代の土師器と須恵器片について解説をし，石製品と石製模造品及び土製品については一覧表で記載する。

縄文時代（第156図）

１と２は早期の土器である。１は深鉢の胴部の破片で，鱗状の円形押型文が密接に施文されている。２は深鉢の口縁部片で，撚糸文が施文されている。夏島式土器である。３は中期後葉の土器である。深鉢の胴部片で，地文に単節縄文ＬＲが縦位回転で施され，微隆起線の磨消し帯を垂下させている。加曽利Ｅ４式土器である。４は時期不明の土器である。深鉢の波状口縁部の破片で，細沈線が施されている。



第156図　遺構外出土遺物拓影図

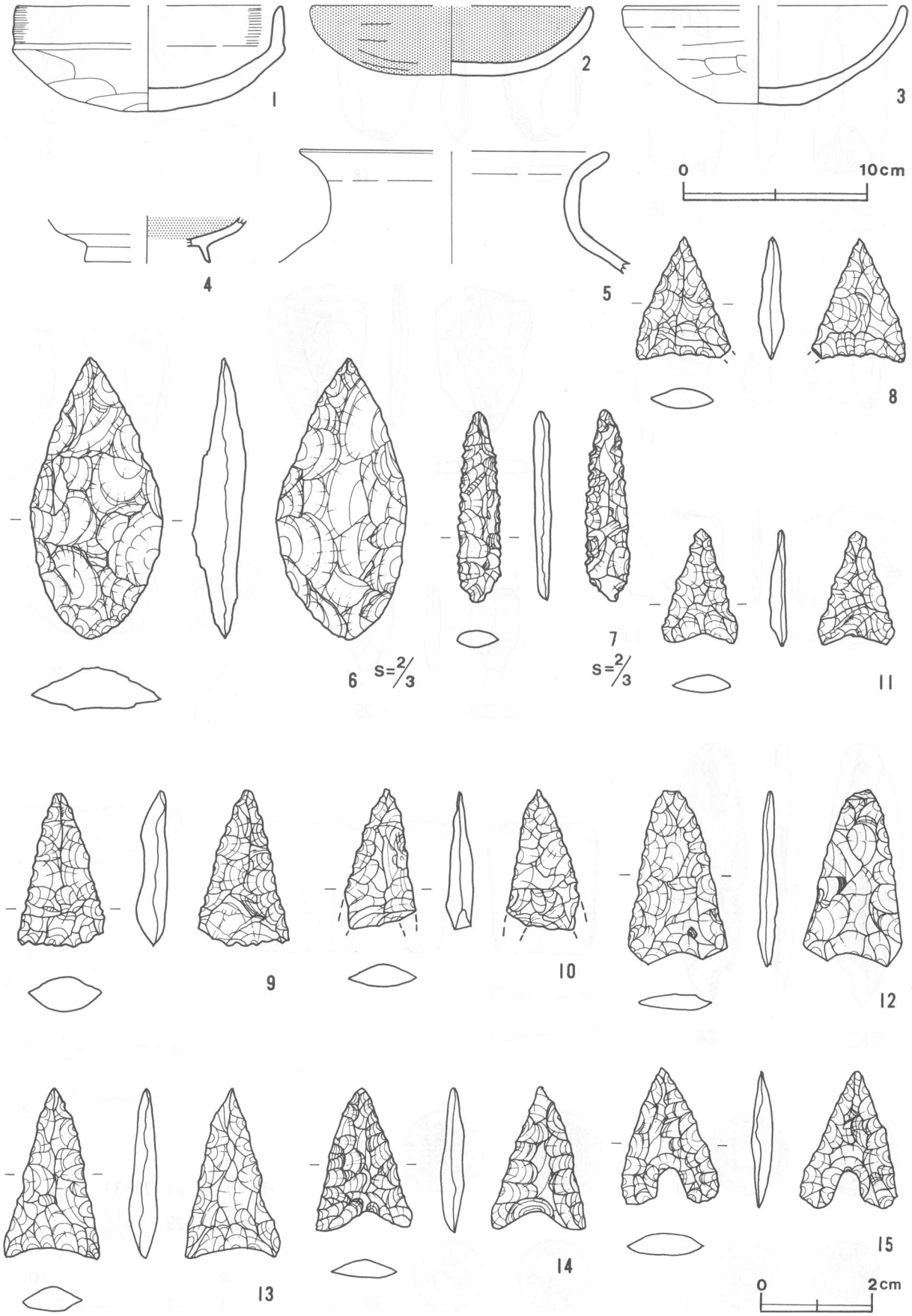
古墳時代（第156図）

5は前期の土師器で，パレスタイプ壺の頸部破片である。頸部と口縁部の間に段を持ち，段部にヘラによる刺突状の刻みを施し，刷毛目調整痕を残している。内・外面は赤彩されている。6は中期の須恵器で，壺の体部片である。6条の櫛描波状文が施され，その下方には沈線がみられる。

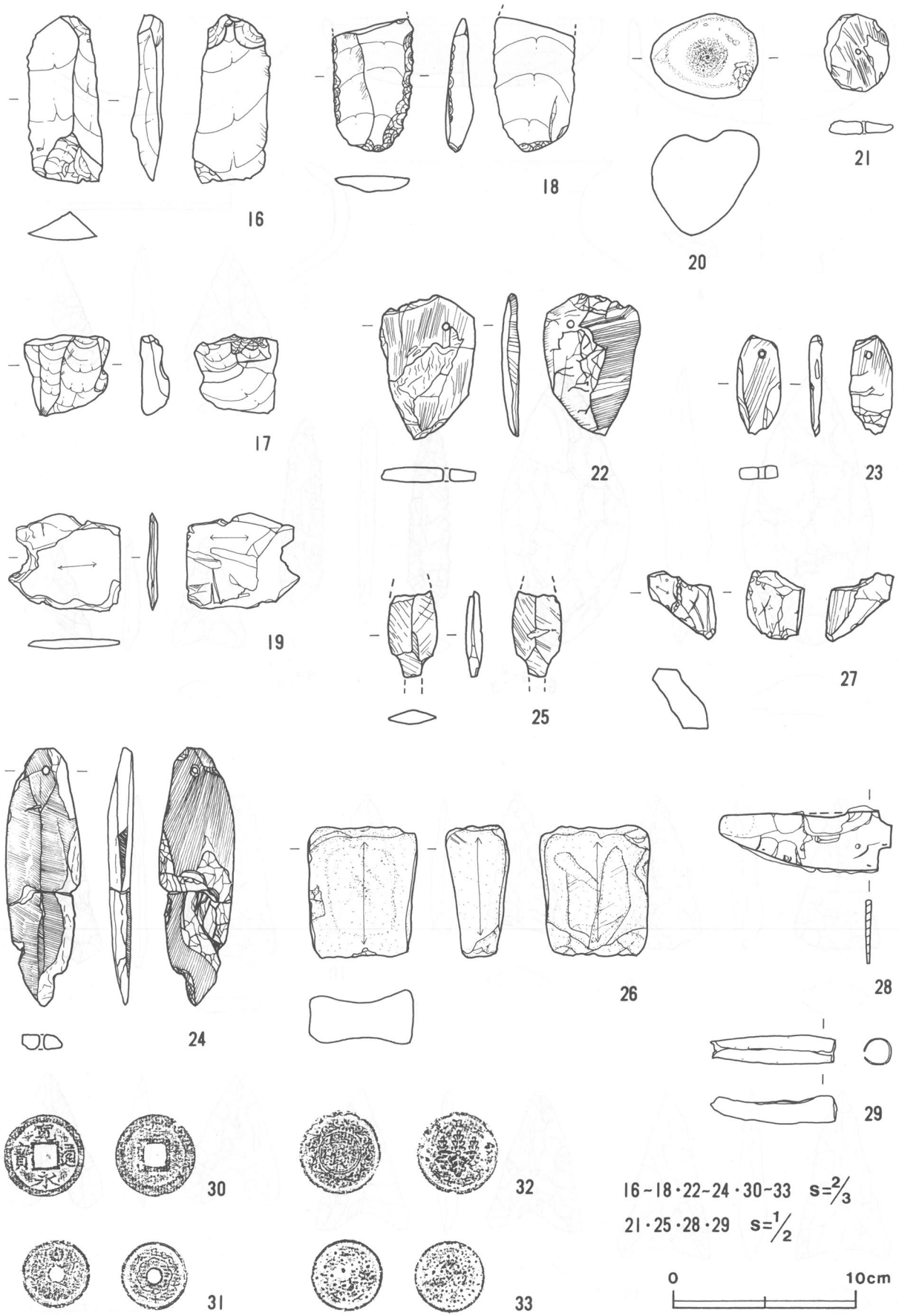
遺構外出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第157図 1	坏 土師器	A［14.2］ B　5.6	体部及び口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部と体部との境に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・石英・長石 にぶい橙色 普通	P128　55% 覆土 二次焼成
2	坏 土師器	A［15.1］ B　3.7 C　4.7	底部から口縁部の破片。底部は押し潰されたような平底である。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面及び底部横ナデ。 内・外面黒色処理	砂粒・スコリア・雲母 にぶい褐色 普通	P129　40% 覆土
3	坏 土師器	A［15.2］ B　5.3 C　4.4	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・パミス・長石にぶい黄橙色 普通	P130　65% 覆土
4	高台付坏 土師器	B（2.3） D［6.8］ E　0.8	底部及び体部下位の破片。平底。高台は僅かに「ハ」の字状に開き，底部は高台との間に幅の広い面を成す。体部は外傾しながら立ち上がる。	ロクロ整形。内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後高台貼り付け。 坏部内面黒色処理	砂粒・スコリア・雲母 にぶい橙色 良好	P131　10% 覆土
5	甕 土師器	A［16.5］ B（5.9）	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら頸部に至る。頸部は括れ，口縁部は反る。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。体部外面ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・石英・スコリア・雲母 にぶい赤褐色 普通	P133　10% 覆土

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第157図6	木葉形尖頭器	7.5	3.5	1.3	—	25.5	100	安山岩	M16$_{e1}$区	Q40　PL34
7	有舌尖頭器	5.1	1.1	0.4	—	2.8	100	頁　岩	表採	Q41　PL34
8	石　鏃	(2.2)	1.6	0.4	—	(1.0)	90	頁　岩	表採	Q43　PL34
9	石　鏃	(2.7)	1.5	0.6	—	(1.8)	80	頁　岩	表採	Q44　PL34
10	石　鏃	(2.5)	1.3	0.4	—	(0.9)	70	チャート	表採	Q45　PL34
11	石　鏃	(2.0)	1.3	0.3	—	(0.6)	95	チャート	表採	Q46　PL34
12	石　鏃	(3.1)	(1.7)	0.3	—	(1.4)	90	頁　岩	表採	Q47　PL34
13	石　鏃	3.0	1.7	0.4	—	1.9	100	頁　岩	表採	Q48　PL34
14	石　鏃	2.5	1.7	0.4	—	1.2	100	頁　岩	表採	Q49　PL34
15	石　鏃	2.5	1.8	0.4	—	1.4	100	チヤート	L14$_{a1}$区	Q50　PL34
第158図16	剝　片	4.5	2.1	0.8	—	6.5	100	頁　岩	表採	Q52
17	剝　片	2.2	2.3	0.8	—	2.8	100	頁　岩	表採	Q53
18	スクレイパー	(3.6)	2.2	0.6	—	(4.5)	50	頁　岩	表採	Q54
19	不明石製品	6.0	5.2	0.5	—	22.0	—	粘板岩	表採	Q59
20	凹　石	5.8	4.6	5.8	—	181.7	100	礫　岩	K15$_{j1}$区	Q68　PL34
21	有孔円板	2.8	2.4	0.5	0.15	4.0	100	チャート	L15$_{c5}$区	Q69
22	剣形石製模造品	3.8	2.5	0.4	0.15	(5.5)	98	粘板岩	L14$_{j7}$区	Q70　PL34
23	剣形石製模造品	2.7	1.2	0.3	0.2	(1.6)	98	粘板岩	L14$_{f8}$区	Q71　PL34
24	剣形石製模造品	6.9	2.0	0.6	0.15	(9.6)	95	粘板岩	L14$_{j8}$区	Q75　PL34
25	鏃形石製模造品	3.0	1.8	0.5	—	(3.8)	50	粘板岩	表採	Q72
26	砥　石	(7.0)	5.9	3.4	—	(186.0)	不明	砂　岩	表採	Q73
27	砥　石	(3.6)	(3.6)	(3.3)	—	(22.9)	不明	凝灰岩	K15$_{j2}$区	Q74



第157図　遺構外出土遺物実測図(1)



第158図　遺構外出土遺物実測図(2)

図版番号	種　別	計測値 (cm)			重量(g)	現存率(%)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚				
第158図28	刀　子	6.3	(2.4)	0.4	(10.2)	90	遺構外覆土	M1　PL34
29	煙　管	(4.5)	0.9	—	(4.2)	80	表採	M2

図版番号	種　別	初鋳年		出土地点	備　考
		時　代	年　号		
第158図30	永楽通寶	明（中国銭）	1408年	表採	M3
31	五銭白銅貨	大　正	1920年	L16$_{g7}$区	M4
32	一銭青銅貨	大　正	1916年	L16$_{g7}$区	M5
33	一円黄銅貨	昭　和	1948年	表採	M6

表21　西ノ原遺跡住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向(長軸方向)	平面形	規模(m)(長軸×短軸)	壁高(cm)	床面	内部施設						炉・竈	覆土	出土遺物	備　考
							壁溝	間仕切溝	主柱穴	貯蔵穴	ピット	入口				
1	K13$_{e6}$	[N-55°-E]	[隅丸方形]	6.00×[2.43]	20～32	平坦	[全周]	—	2	—	3	1	—	自然	土師器(坏,甑)	
2	L13$_{c0}$	N-37°-W	方　形	7.40×6.97	48～59	平坦	全周	—	4	1	5	1	竈1	自然	土師器(坏,甕,甑)	
3	K14$_{h8}$	N-47°-E	不整長方形	7.58×6.52	5～20	平坦	—	—	4	1	4	—	炉1	人為	土師器(椀,高坏,坩,甕),石器(凹石),石製品(臼玉,砥石)	
4	K15$_{f1}$	N-32°-W	方　形	6.16×5.98	35～49	ほぼ平坦	全周	—	4	1	5	1	竈1	自然	土師器(坏,小形甕,甑),須恵器(短頸壺),土製品(土製支脚)	
5	K15$_{g7}$	N-74°-E	長方形	5.69×4.24	30～41	平坦	—	—	2	1	3	1	炉1	自然一部人為	土師器(坏,高坏,坩,甕),石製品(砥石)	
6	K15$_{i5}$	N-46°-W	方　形	7.38×7.26	40～53	ほぼ平坦	ほぼ全周	—	4	1	5	1	竈1	自然	土師器(坏,甕),須恵器(長頸壺),土製品(土製支脚)	
7	K15$_{j2}$	N-50°-E	方　形	4.66×4.65	10～25	平坦	—	—	4	2	4	—	炉1	人為	土師器(高坏,壺,甕,甑,ミニチュア土器),石器(石鏃),石製品(臼玉)	SK98に掘り込まれている。
8	L14$_{e8}$	N-47°-W	方　形	5.56×5.31	22～36	平坦	一部	—	4	1	5	1	炉2	人為	土師器(坏,高坏,甕)	
9	L15$_{d1}$	N-38°-W	方　形	6.82×6.54	22～40	ほぼ平坦	ほぼ全周	—	4	1	5	1	竈1	人為	土師器(坏,鉢,小形甕,甑),その他(縦長剝片)	
10	L15$_{c4}$	N-47°-E	方　形	6.12×6.10	16～26	平坦	—	—	4	1	5	1	炉1	自然	土師器(坏)	
11	L15$_{b4}$	N-57°-W	方　形	2.40×2.24	6～7	やや凹凸	—	—	—	—	—	—	—	自然	土師器(高坏)	
12	L15$_{a7}$	N-48°-E	長方形	6.00×4.35	4～8	やや凹凸	—	—	—	—	—	—	—	不明	土師器(坏,坩,手捏土器)	
13	K15$_{i0}$	(N-50°-W)	[方　形]	5.47×[3.60]	28～50	平坦	—	—	—	1	4	—	—	自然	土師器(高坏,坩,甕,ミニチュア土器),その他(不明石器,剝片)	焼失家屋
14	K16$_{j2}$	(N-32°-W)	[隅丸方形]	5.65×[1.49]	35～47	平坦	—	—	—	1	—	—	—	自然	土師器(高坏,甕)	焼失家屋
15	L15$_{c0}$	N-30°-E	長方形	4.29×3.61	5～20	平坦	—	—	4	—	5	1	炉1	人為	土師器(高坏,甕),その他(剝片)	
16	L15$_{d6}$	N-51°-E	方　形	6.84×6.54	18～34	やや凹凸	ほぼ全周	—	4	2	5	1	炉1	人為	土師器(高坏,坩,甕,甑),石製品(臼玉),土製品(土玉),その他(ガラス玉)	
17	L15$_{g2}$	(N-40°-E)	長方形	7.28×[5.43]	8～17	平坦	—	—	4	—	4	—	炉1	自然	土師器(高坏,甕)	SD1に掘り込まれている。
18	L14$_{g7}$	N-46°-E	方　形	3.95×3.63	30～38	平坦	—	—	—	1	—	—	炉1	人為	土師器(高坏),石製品(臼玉),石製模造品(剣形石製模造品)	SD1に掘り込まれている。
19	L15$_{g7}$	N-47°-E	方　形	5.50×5.35	25～34	平坦	ほぼ全周	—	4	1	5	1	炉1	自然	土師器(高坏,甕),石製品(臼玉,砥石)	
20	L16$_{d2}$	(N-37°-E)	長方形	6.46×[4.76]	4～23	平坦	—	—	4	1	4	—	—	自然	土師器(高坏,壺)	焼失家屋の可能性がある。
21	L16$_{f7}$	N-90°-E	長方形	4.52×3.64	14～25	ほぼ平坦	—	—	4	—	5	1	—	人為	土師器(高坏,坩,小形甕,甕,甑),石製品(臼玉)	

第４節　まとめ

当遺跡で確認した遺構は，竪穴住居跡21軒，竪穴遺構１基，土坑41基，陥し穴４基及び溝１条である。

ここでは，時期別に各時代の主な遺構と遺物についての概要を述べ，まとめとする。

旧石器時代

木葉形尖頭器が表面採集され，剝片が表土中や後世の遺構の覆土中から出土している。木葉形尖頭器の出土地点は傾斜地で，ローム層の流失，または，耕作等による旧石器時代文化層の撹乱によって表面採集されたものである。石器集中地点は５か所確認したが，その他にも剝片等の出土地点を数か所確認している。今回確認した石器集中地点は，土壌の自然科学分析による指標テフラの堆積状況から，概ね南関東の武蔵野編年に対比させることができる。遺物の出土地点は黒色帯の上面，おおよそＡＴ層準Ｖ層下部からⅦ層上部に相当するものであり，石刃素材のナイフ形石器の形態的特徴等から，橋本編年の武蔵野Ｉｃ期段階（後期旧石器前半）に属するものと思われる。

当遺跡の石器集中地点は，その性格を二つの特徴からみることができる。一つは，石器製作に剝片を利用している点である。剝片生産の石器群という見方と石刃自体を他の場所から搬入し，大型の石刃を再利用しているという見方ができる。もう一つは，石材を黒曜石に求めている点である。出土遺物の大部分を占める黒曜石を石材とする剝片には細かなものが多く，半製品等の出土遺物がみられないことから少ない石材を有効に利用している様子が窺える。また，安山岩，ホルンフエルス及び流紋岩を石材とするナイフ形石器は，こうした石材の剝片及び砕片がみられないことから製品として他所より搬入したものと思われる。

しかし，第５石器集中地点で確認したエンド・スクレイパーの出土層位と石刃素材のナイフ形石器とがほぼ同一の層位から出土していることなど，まだ層位的に不安定な部分も残る。さらに，石器石材の大部分を黒曜石にもとめていることから，原産地について具体的分析に基づく検討を試み，遠隔地石材との関係を明らかにしていくことが必要である。

当遺跡で確認した石器集中地点は，遺物の出土している垂直分布図から一つの文化層と考えられる。

縄文時代

遺構は，詳細な時期は不明であるが４基の陥し穴が調査区の南西部を中心に散在して構築されており，谷津の低地に集まる動物の捕殺及び捕獲等を目的としたものと考えられる。当遺跡からは，早期から中期後葉の縄文土器片が極少量出土している。早期の土器片は押型文と撚糸文が施文され，中期後葉の土器片は微隆起線の磨消し帯を持つものである。特に，M14$_{d8}$区から出土した早期の鱗状の円形押型文土器は，本県での出土例は少ない。傾斜地からの出土のため，表土の流失に伴うものと考えられる。石器では，有舌尖頭器及び石鏃が縄文時代に属するほか，剝片の一部も縄文時代に属する可能性もある。

古墳時代

当遺跡の中心となる時代で，竪穴住居跡，竪穴遺構及び土坑を確認した。当該期に属する竪穴住居跡21軒は何れも古墳時代のもので，時期は３期に分けることができる。

第１期（５世紀前半）

第７・14・17・18・19・20・21号住居跡，第１号竪穴遺構，第77・98号土坑の時期である。当遺跡におけるこの時期の住居跡は，地形的には平坦部から緩斜面に位置し，集落の中では外側から後世の遺構を取り囲むように位置している。出土遺物は土師器片の坏及び椀類の出土が少なく，供献土器の割合が高い。第７号住居跡出土の高坏は脚部が下方に開き，坏部外面に刷毛目磨り消し痕が残っている。やや突出した平底を持つ壺及びミニチュア土器が出土しており，赤彩率は低いが刷毛目整形磨り消し痕を残しているものが多い。第17・18・19・20及び21号住居跡出土の高坏は脚部から裾部にかけて下方に大きく開き，口縁部下位に稜を持ち，第77号土坑出土の高坏は脚部にエンタシス状の膨らみを持ち，穿孔が穿たれて赤彩されている。壺はやや突出した平底を持ち，赤彩率は低いが刷毛目整形磨り消し痕を残すものが多くみられる。第14・17・19号住居跡及び第98号土坑出土の甕は口縁部に折り返しのある複合口縁がみられる。第１号竪穴遺構は，出入り口と思われる部分に緩斜面を設けている。本遺構の性格については，住居跡の付設する施設を持たないことから住居跡とは異なる上屋構造の存在が推測される。

第２期（５世紀後半）

第３・５・８・10・11・12・13・15・16号住居跡，第68号土坑の時期である。この時期の住居跡は，５世紀前半の住居跡からやや内側に位置するものが殆どである。住居跡の形態と規模及び付設する施設に一定の規格がみられない。出土遺物は土師器の坏，椀類の出土割合が低く，高坏，坩等の供献土器の占める割合が高い。高坏は坏部下位に稜がみられ，坩は体部がソロバン玉状もしくは球形状を呈するものが多くみられる。

第３期（６世紀後半）

第１・２・４・６・９号住居跡の時期である。この時期の住居跡は，集落の中で最も内側の平坦な部分に位置している。その規模と付設する施設はほぼ同一規格で構築され，１辺が６～７mの規模で，壁溝，主柱穴，貯蔵穴，出入口ピット及び竈の付設位置は同じで，ほぼ同一時期の単位で考えることができる。第２・４・６・９号住居跡の竈は壁外へ掘り込まれているが，使用頻度の高いものと低いものとがみられる。出土遺物では，大型の甑がみられ，坏は体部と口縁部との境に明瞭な稜を持ち，口縁部は直立し，黒色処理されたものが主体である。第114図４の須恵器短頸壺は混入したもので，ＴＫ216からＴＫ208に併行するものである。当該期は，ＴＫ43からＴＫ209に併行する時期と考えられる。

平安時代

この時期に伴う遺構は確認できなかったが，第１号溝の覆土中及び覆土上層から土師器の高台付坏片１点と常総型甕１点が出土している。

註

（１）橋本勝雄　『茨城の旧石器時代』茨城県考古学協会誌　第７号　1995年８月

参考文献

○　㈶千葉県文化財センター「八千代市北海道遺跡」「萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』1985年３月

○　㈶栃木県文化振興事業団「栃木県埋蔵文化財調査報告第112集」『三ノ谷東・谷館野北遺跡』1990年３月

○　樫村宣行「茨城県南部における鬼高式土器について」「研究ノート２号」　茨城県教育財団　1993年７月

○　浅井哲也「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅱ）」　「研究ノート２号」茨城県教育財団　1993年７月

第５章　隼人山遺跡

第１節　遺跡の概要

隼人山遺跡は，牛久市の北北東，小野川支流の乙戸川右岸の洪積台地である標高24～25mの稲敷台地上に立地し，縄文時代から平安時代にわたる複合遺跡である。調査区域は２区に分かれ，それぞれの調査前の現況は，山林及び畑地である。調査Ｉ区は南北に約245m，東西に約54m，面積は13,239m²，調査II区はＩ区から南西へ約70m離れた飛び地で，南北に50m，東西に65m，面積は3,242m²である。

今回調査によって確認した遺構は，縄文時代の陥し穴８基，古墳時代中期の竪穴住居跡31軒，竪穴遺構３基，平安時代の竪穴住居跡１軒，その他に土坑93基，溝１条である。

縄文時代の８基の陥し穴は，何れも断面形はＶ字状で，調査Ｉ区の中央部から北部付近に散在している。

古墳時代の住居跡は，調査区南部と北東部の２か所に集中してみられた。住居跡の形状はおおよそ方形ないし長方形のもので，間仕切り溝を伴う住居跡も確認された。中でも，当遺跡の第２号住居跡からは，刷毛目整形痕を残す土師器も出土している。また，第27号住居跡からは，赤彩された完形の土師器と共に，線刻された石製品も複数出土し，祭祀行為との関係も推測される。

平安時代の遺構としては，第35号住居跡１軒を確認した。北西壁に竈が付設され，出土遺物から時期は９世紀前半と考えられる。

その他の遺構としては，II区の調査区で南東から北西へ延びる溝１条を確認した。この溝は，その形状と地形図からみた方位とが，西ノ原遺跡で確認した溝と合致するものと考えられる。

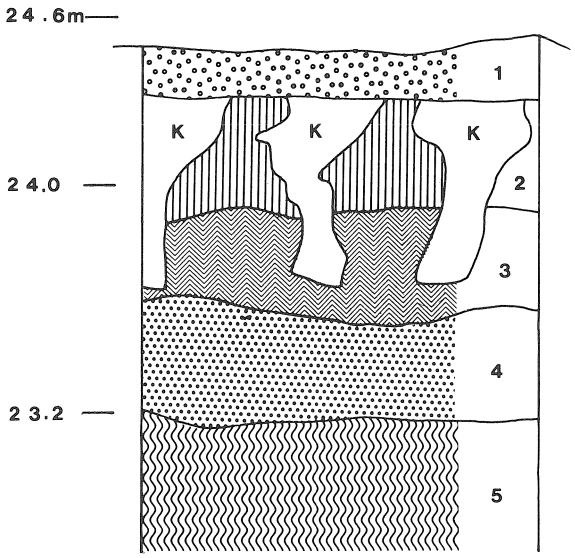
遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に50箱ほど出土している。旧石器時代の遺物は，調査II区の遺構外の覆土中から黒曜石のナイフ形石器が出土している。縄文時代の遺物は，中期の縄文土器片や石鏃が遺構の確認面や覆土中から出土している。古墳時代の遺物は，土師器の坏，椀，高坏，甕，甑等が出土しており赤彩されたものも多くみられる。また，須恵器の坏，甕の口縁部片，把手付椀の破片が若干ではあるが出土している。その他，土製品の土玉，石製品の紡錘車，砥石のほか多数の臼玉，石製模造品の有孔円板，勾玉，鉄製品の鎌が出土している。第６号住居跡の覆土中からはガラス玉も出土している。

第２節　基本層序

隼人山遺跡においては，調査区南東部Ｖ４$_{i7}$区にテストピットを設定し，第159図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第１層は，褐色の耕作土で，厚さは15～22cmである。

第２層は，明褐色のソフトローム層への漸移層で，厚さは35～45cmである。第３層は，厚さ10～22cmで褐色のソフトローム層で，火山ガラス性物質が微量含まれ，ＡＴ降灰層に相当するものと考えられる。以下，各層からの火山ガラス性物質は減少する。第４層は，明褐色のハードローム層で，厚さは29～40cmである。第５層は，褐色



第159図　隼人山遺跡基本土層図

のハードローム層で，厚さは55～65cmである。

隼人山遺跡の遺構は，第1層下面及び第2層上面で確認されている。

第3節　遺構と遺物

1　縄文時代の遺構と遺物

（1）　陥し穴

当遺跡で確認した101基の土坑の内，形状や規模から陥し穴と考えられる遺構を調査Ⅰ区で8基確認した。出土遺物がないことから，ここでは遺構について記載する。

第1号陥し穴（第160図）

位置　調査区の中央部西側，E4 g4区。

重複関係　本跡は，第18号住居跡に掘り込まれ，本跡の方が古い。

規模と平面形　長径（2.54）m，短径0.96mの長楕円形で，深さは1.05mである。

長径方向　N－54°－W

壁面　V字状に切り立ち，中位で緩やかな段を成して立ち上がる。

底面　皿状で，壁間は狭く，堅い。

覆土　9層から成る。覆土は暗褐色土及び褐色土で，各層にはロームブロックの混入が確認され，覆土中層の土層3・4・6には炭化粒子の混入もみられた。人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム大ブロック・ローム中ブロック微量，締まり強
2	褐色	ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
3	褐色	ローム粒子中量，炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
4	褐色	ローム粒子多量，炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
5	褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック・ローム中ブロック微量
6	褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化粒子・ローム中ブロック微量
7	暗褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック微量
8	褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
9	褐色	ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，ローム大ブロック微量

遺物　出土していない。

所見　本跡は，遺構の形態等から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第2号陥し穴（第160図）

位置　調査区の中央部東側，E5 i3区。

規模と平面形　長径3.60m，短径1.06mの長楕円形で，深さは1.46mである。

長径方向　N－18°－W

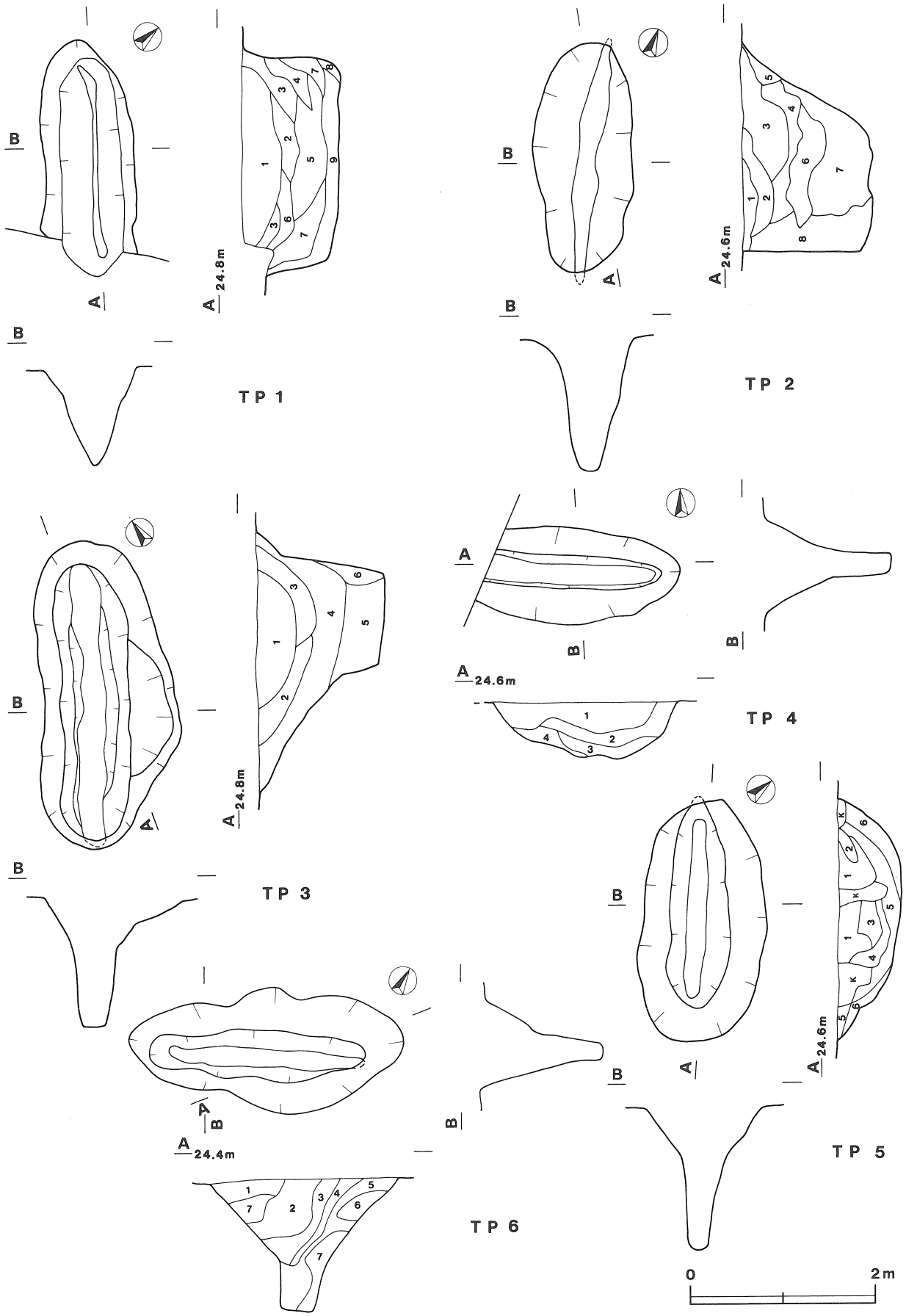
壁面　垂直に立ち上がる。

底面　皿状で，壁間は狭く，堅い。

覆土　8層から成る。土層3の褐色土を除く各層はロームブロックを含み，土層1から4の暗褐色土及び褐色土には炭化物の混入が確認できた。人為的に埋め戻しが行われたように思われる。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少量，炭化物・ローム小ブロック微量
2	褐色	炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子中量
3	褐色	焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量
4	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化物少量，ローム中ブロック微量
5	褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
6	明褐色	ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
7	にぶい褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子多量
8	橙色	ローム中ブロック・ローム粒子多量，ローム小ブロック中量



第160図　第1・2・3・4・5・6号陥し穴実測図

遺物　出土していない。

所見　本跡は，遺構の形態等から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第３号陥し穴（第160図）

位置　調査区の中央部，$E4_{g5}$区。

規模と平面形　長径3.32m，短径1.39mの不定形で，深さは1.47mである。

長径方向　N－32°－E

壁面　底面から中位にかけては垂直で，その後，外傾して立ち上がる。

底面　平坦で，壁間は狭く，堅い。

覆土　６層から成る。覆土下層及び中層に堆積する土層４，５の褐色土と上層に堆積する土層１の暗褐色土は焼土粒子を含み，人為的に埋め戻されたものと思われる。

土層解説

1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子微量，焼土粒子・炭化粒子極微量
2	褐色	ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量
3	暗褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
4	褐色	焼土粒子・ローム粒子極微量
5	褐色	焼土粒子・ローム粒子少量
6	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子極微量

遺物　出土していない。

所見　本跡は，遺構の形態等から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第４号陥し穴（第160図）

位置　調査区の北西部，$D4_{h4}$区。

規模と平面形　長径［2.08m］，短径1.06mの長楕円形で，深さは1.38mである。

長径方向　［N－82°－W］

壁面　垂直に立ち上がる。

底面　平坦で，壁間は狭く，堅い。

覆土　４層から成る。各層にはロームブロックが混入し，人為的に埋め戻されたものと思われる。

土層解説

1	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
3	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子微量
4	明褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量

遺物　出土していない。

所見　本跡の西側は調査区外のため未調査で詳細は捉えられないが，遺構の形態等から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第５号陥し穴（第160図）

位置　調査区の北西部，$D4_{d3}$区。

規模と平面形　長径2.63m，短径1.33mの長楕円形で，深さは1.53mである。

長径方向　N－49°－W

壁面　底面から中位にかけ垂直に立ち上がり，その後，外傾して立ち上がる。

底面　皿状で，壁間は狭く，堅い。

覆土　６層から成る。土層２の暗褐色土を除いて各層にロームブロックが混入している。いずれも強い締まり

を有する。

土層解説
1　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子極微量，締まり強
2　暗褐色　ローム粒子微量，締まり強
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子極微量
4　暗褐色　ローム小ブロック少量，ローム粒子極微量
5　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子極微量
6　褐　色　ローム大ブロック微量，ローム中ブロック・ローム粒子極微量

遺物　出土していない。

所見　本跡は，遺構の形態等から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第6号陥し穴（第160図）

位置　調査区の北部中央，C5$_{e4}$区。

規模と平面形　長径2.97m，短径1.31mの不定形で，深さは1.37mである。

長径方向　N―62°―E

壁面　底面から垂直に立ち上がり，その後，外傾して立ち上がる。

底部　平坦であるが，東側にやや傾斜している。

覆土　7層から成る。上層に堆積する土層1・2の暗褐色土及び5の褐色土には焼土粒子の混入が確認され，複雑な堆積状況を呈していることから人為的に埋め戻しが行われたものと思われる。

土層解説
1　暗褐色　ローム小ブロック少量，焼土粒子・ローム中ブロック・ローム粒子微量
2　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化物・ローム中ブロック微量
3　褐　色　ローム中ブロック・ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
4　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
5　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
6　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
7　にぶい褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム粒子少量

遺物　出土していない。

所見　本跡は，遺構の形態等から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第7号陥し穴（第161図）

位置　調査区の北部中央，C5$_{j1}$区。

規模と平面形　長径2.40m，短径1.13mの長楕円形で，深さは1.72mである。

長径方向　N―42°―W

壁面　ほぼ垂直に立ち上がる。

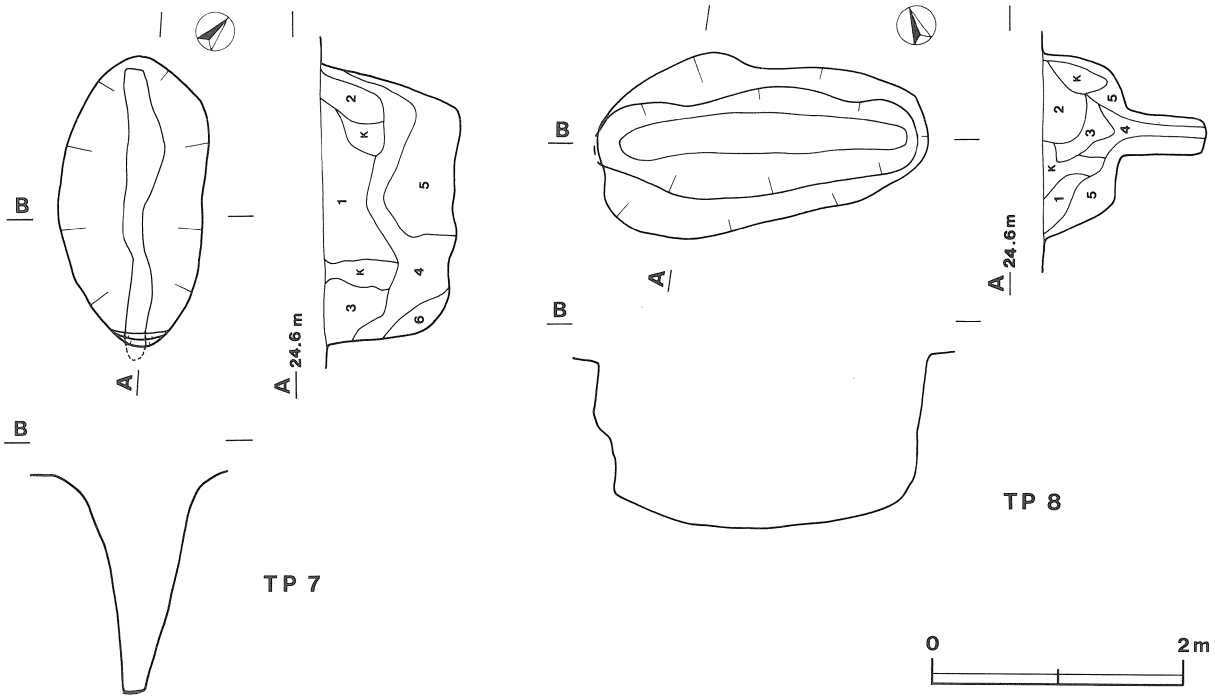
底部　平坦である。

覆土　6層から成る。土層1の暗褐色土を除いてすべて褐色土で，土層2の褐色土以外にはロームブロックの混入がみられる。土層の堆積状況に乱れがみられることから人為的に埋め戻しが行われたものと考えられる。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック極微量
2　褐　色　ローム粒子極微量
3　褐　色　ローム粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック極微量
4　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子極微量
5　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，ローム大ブロック・ローム粒子極微量
6　褐　色　ローム小ブロック少量，ローム粒子極微量

遺物　出土していない。

所見　本跡は，遺構の形態等から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第161図　第7・8号陥し穴実測図

第８号陥し穴（第161図）

位置　調査区の北部中央，C4i8区。

規模と平面形　長径2.66m，短径1.22mの長楕円形で，深さは1.35mである。

長径方向　N－71°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

底部　皿状で，壁間は狭い。

覆土　５層から成る。各層にはロームブロックの混入がみられる。

土層解説

1　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック微量
3　暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
4　褐　　色　ローム粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
5　褐　　色　ローム大ブロック・ローム中ブロック少量，ローム小ブロック微量

遺物　出土していない。

所見　本跡は，遺構の形態等から縄文時代の陥し穴と考えられる。

2　古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では，古墳時代の竪穴住居跡31軒，竪穴遺構３基を確認した。これらのうち，規模が極端に小型で，他の住居と別の目的や用途を持ったものと考えられる建物跡や，内部施設の有無等に差異がみられるものもあるが，ここでは住居跡として取り上げ，確認した遺構と遺物について記載する。

（1）　竪穴住居跡

確認した竪穴住居跡は31軒（ＳＩ－１～43のうち，29・30・37～42は欠番）あるが，これらすべての住居跡は調査Ｉ区で確認したもので，そのうち調査区外へ延びる第６号住居跡は一部未調査である。

第１号住居跡（第162図）

位置　調査区の南部，H4a5区。

規模と平面形　長軸2.74m，短軸2.02mの長方形。

主軸方向　N－41°－W

壁　壁高は12～14cmで，外傾して立ち上がるが，北西壁はややゆるく外傾している。

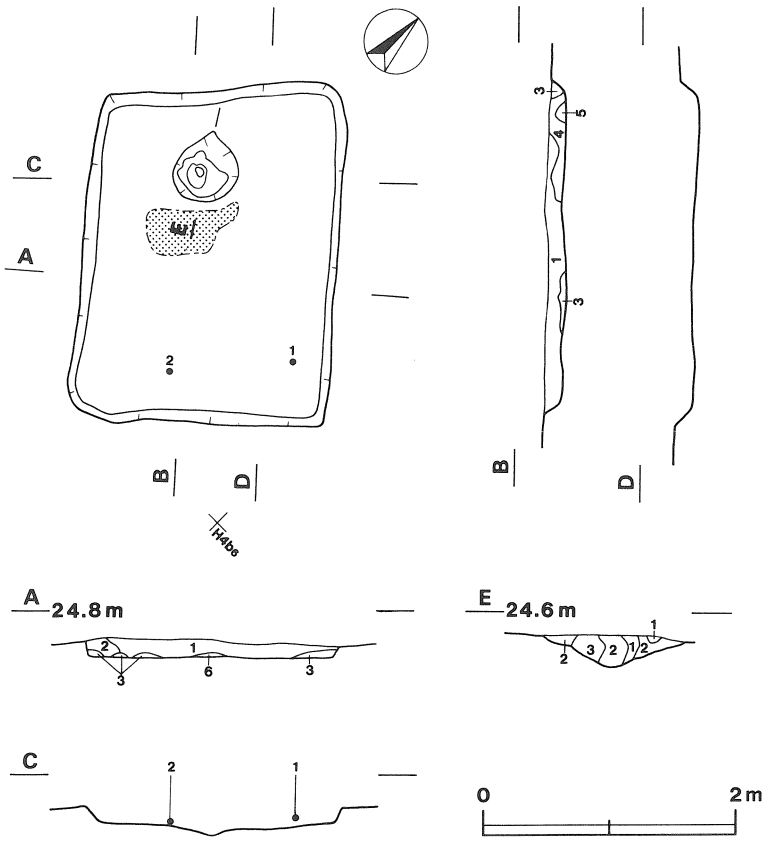
床　全体的に凹凸があり，中央付近に膨らみがある。あまり踏み締まった部分はみられない。

炉　中央部から北西壁方向に付設され，長径55cm，短径52cmの不定形で，床面を23cm掘り窪めた地床炉である炉内覆土はいずれも焼土粒子を含んでいる。焼土ブロックは少量みられるものの，炉床は赤変硬化していない。

炉土層解説
1　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
3　にぶい褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量

覆土　６層から成る。中央部付近に暗褐色土が厚く堆積し，覆土下層付近と壁際に褐色土，暗褐色土の重なりがみられる。土層３を除く各層は炭化粒子を含み，土層３・６以外の覆土は焼土粒子を含んでいる。人為堆積と考えられる。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗褐色　焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子中量
4　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，焼土大ブロック・炭化粒子微量
5　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
6　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量



第162図　第１号住居跡実測図

第163図　第１号住居跡出土遺物実測図

第１号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第163図 1	甕 土師器	B（6.4） C　5.0	底部及び体部下位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・雲母・パミス にぶい褐色 普通	P1　10% PL49 東コーナー寄り覆土下層
2	甑 土師器	A［26.4］ B（9.0）	体部上位から口縁部の破片。体部は緩やかに立ち上がり，口縁部は僅かに内傾する。	口縁部内・外面ナデ。体部外面刷毛目整形後ナデ，内面刷毛目整形。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P2　5% 南東寄り床面直上 体部外面煤付着

遺物　覆土下層から床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第163図１の甕は，東コーナーに近い覆土下層から，２の甑は，南東寄りの床面直上から出土している。

所見　本跡は，ピットが確認されず，小規模で，炉の使用頻度も少ない。また，上記の出土遺物の整形痕等が隣接する第２号住居跡と合致するところから，その関連施設で住居以外の目的をもった建物跡と思われ，時期は，出土遺物から５世紀前半と考えられる。

第２号住居跡（第164図）

位置　調査区の南部，$G4_{i6}$区。

規模と平面形　長軸5.37m，短軸5.24mの方形。

主軸方向　N－37°－W

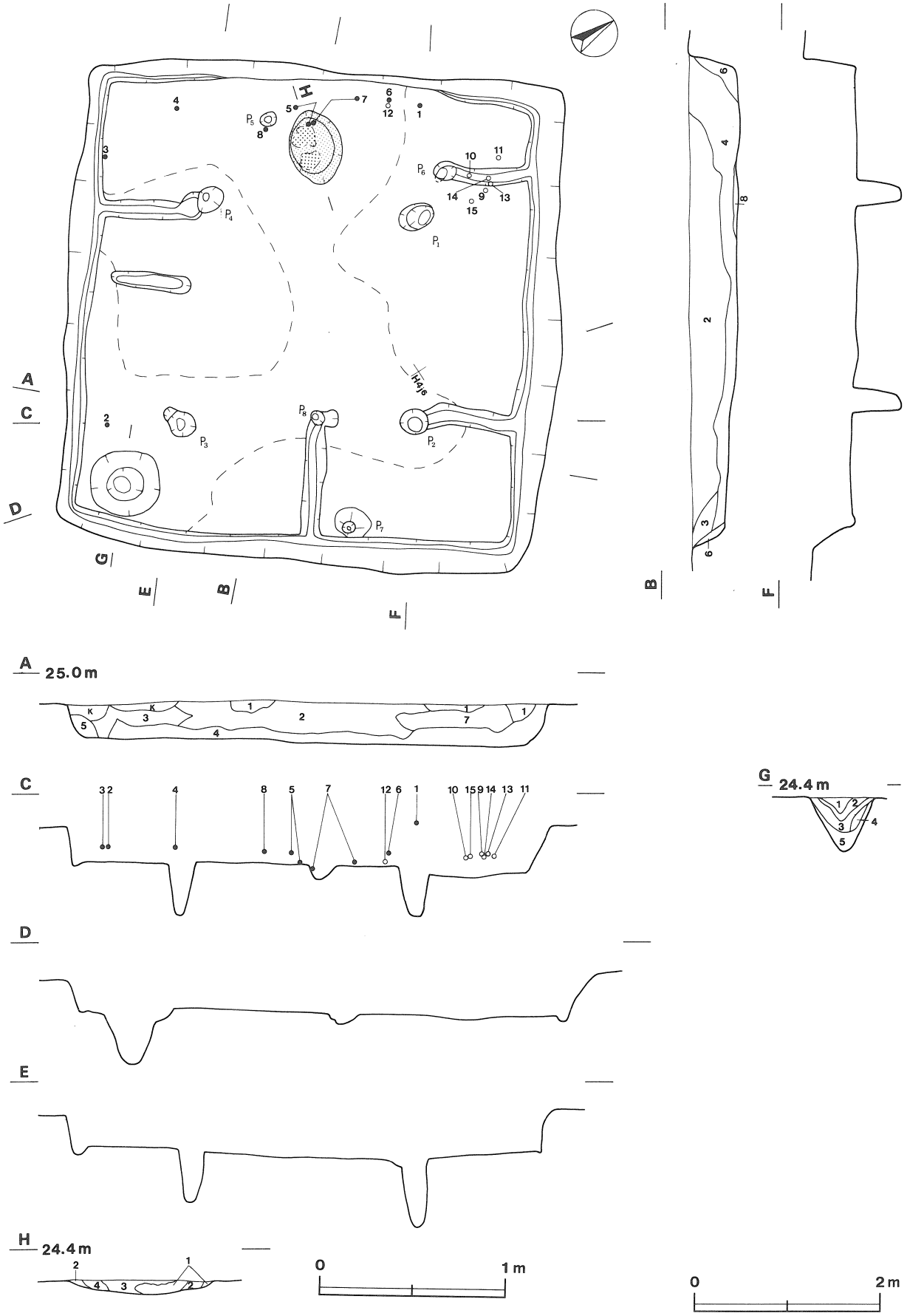
壁　壁高は34～55cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝　南西壁の一部を除き全周する。上幅８～16cm，深さ５～８cmで，断面形はU字形である。

間仕切り溝　北東壁から２条，南東壁から１条，南西壁から２条それぞれ中央付近に向かって伸びている。幅18～25cm，深さは各10cmで，断面形はU字形である。

床　やや凹凸があり，中央付近が緩やかな皿状である。中央部から南，西コーナー付近にかけ踏み固められ，堅緻な部分が帯状に広がっている。

ピット　８か所（P_1～P_8）。P_1～P_4は長径31～40cm，短径27～29cmの不整楕円形または不定形で，深さは32～70cmである。何れも各コーナー付近に付設され，規模や位置から主柱穴と考えられる。P_5は炉の南西方向に付設され，長径18cm，短径14cmの楕円形で，深さは５cmと浅く，掘り込みの状況及び炉との位置関係から柱穴ではないとも考えられ，性格は不明である。P_6は間仕切り溝の突端に付設され，長径26cm，短径20cmの楕円形で，深さは40cmであるが，性格は不明である。P_7は南東壁から伸びる間仕切り溝の東側に付設され，径12cmの円形で，深さは９cmと浅いが，掘り込みの周りを灰白色の粘土で補強され，造りは強固である。そ



第164図　第２号住居跡実測図

の南西方向には出入口に伴うピットと考えられる柱穴もあることから，それを補強するような性格が考えられる。P_8は南東壁から伸びる間仕切り溝の突端に付設され，長径18cm，短径15cmの楕円形で，深さは23cmである。規模や位置から出入口に伴うピットと思われる。

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は長径75cm，短径67cmの隅丸長方形で，深さ60cmである。断面はV字形で，底部は深鉢状である。

貯蔵穴土層解説

1　暗褐色　焼土小ブロック・炭化材・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物微量
2　暗褐色　ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
3　暗褐色　焼土小ブロック・炭化材・炭化物・ローム粒子中量
4　黒褐色　炭化材・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子微量
5　褐　色　ローム小ブロック中量，炭化物・ローム粒子少量

炉　中央から北西壁寄りに付設され，長軸80cm，短軸55cmで，床面を14cm掘り窪めた隅丸長方形の地床炉である。炉床は火熱を受け焼土ブロックが厚く堆積し，赤変硬化している。

炉土層解説

1　褐　色　ローム粒子多量，炭化物極微量
2　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗褐色　焼土中ブロック・小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量
4　赤褐色　焼土中ブロック・小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量

覆土　8層から成る。北西壁際には焼土粒子とロームブロックを含む暗褐色土及び焼土粒子と炭化物を含む極暗褐色土が堆積し，南東壁際には焼土粒子及び炭化物を含む黒褐色土が堆積している。それぞれの壁際では埋め戻された堆積状況の様子がみられるが，住居の中央付近では自然堆積の様相もみられることから，壁際は人為堆積による埋め戻しが行われ，中央付近は覆土が自然に堆積したものと考えられる。

土層解説

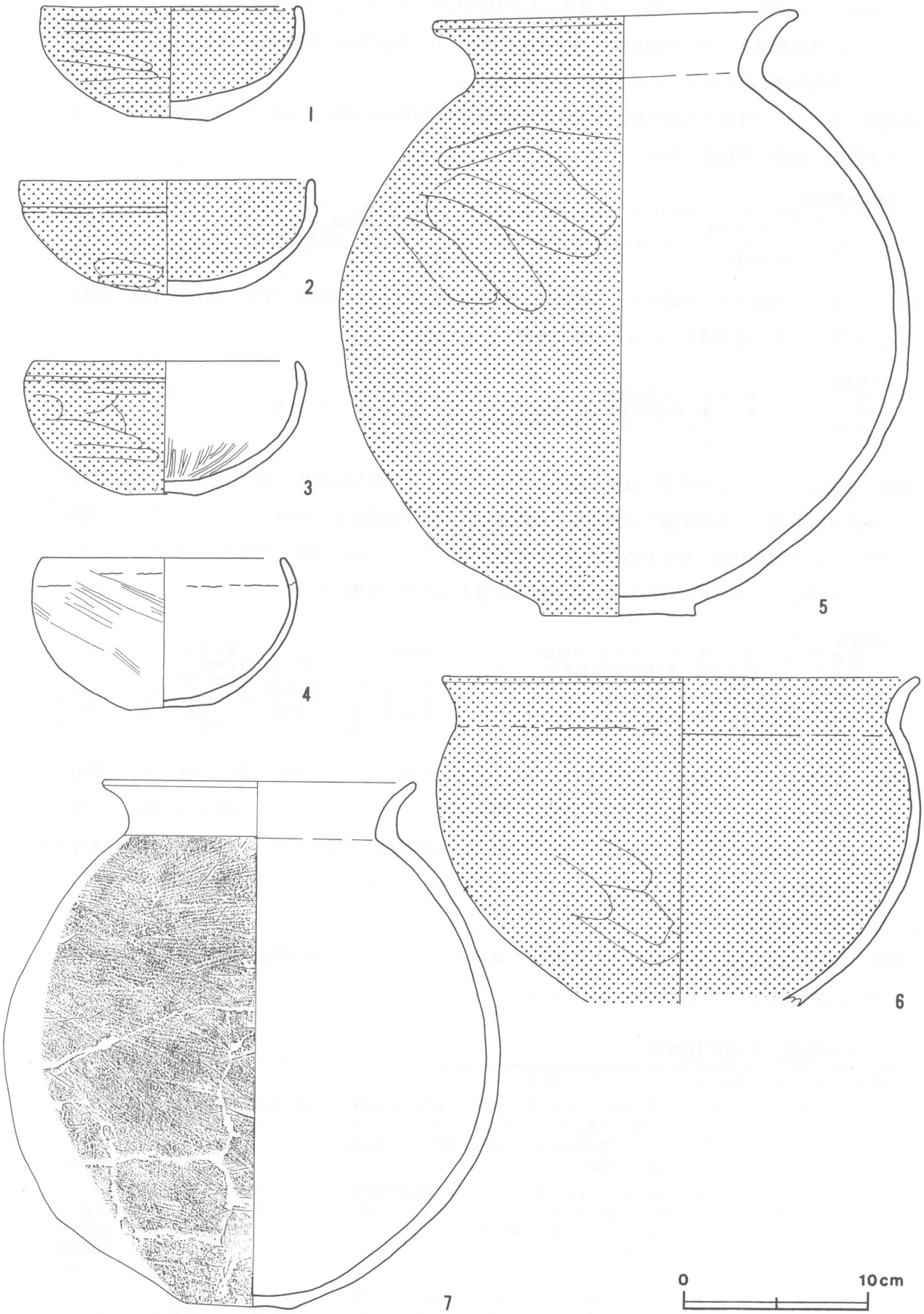
1　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム大ブロック微量
3　暗褐色　焼土粒子中量，ローム粒子少量
4　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム大ブロック微量
5　極暗褐色　ローム大ブロック中量，焼土粒子・ローム粒子少量，炭化物・炭化粒子微量
6　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
7　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
8　黒褐色　炭化物・炭化粒子・ローム粒子中量，焼土粒子少量，ローム大ブロック微量

遺物　北西壁際の覆土下層から遺物が集中して出土し，その他，中央及び南東の覆土下層からも少量出土している。第165図2・3は坏で，共に南西壁沿いの覆土下層から出土している。4の椀は北西壁沿いの覆土下層から正位の状態で出土している。5・6・7は甕で，北西壁沿いの覆土下層から出土している。8は北西壁際出土の甕で，体部内から土玉が1点出土している。9～15の土玉は北コーナー付近の床面直上から集中して出土している。

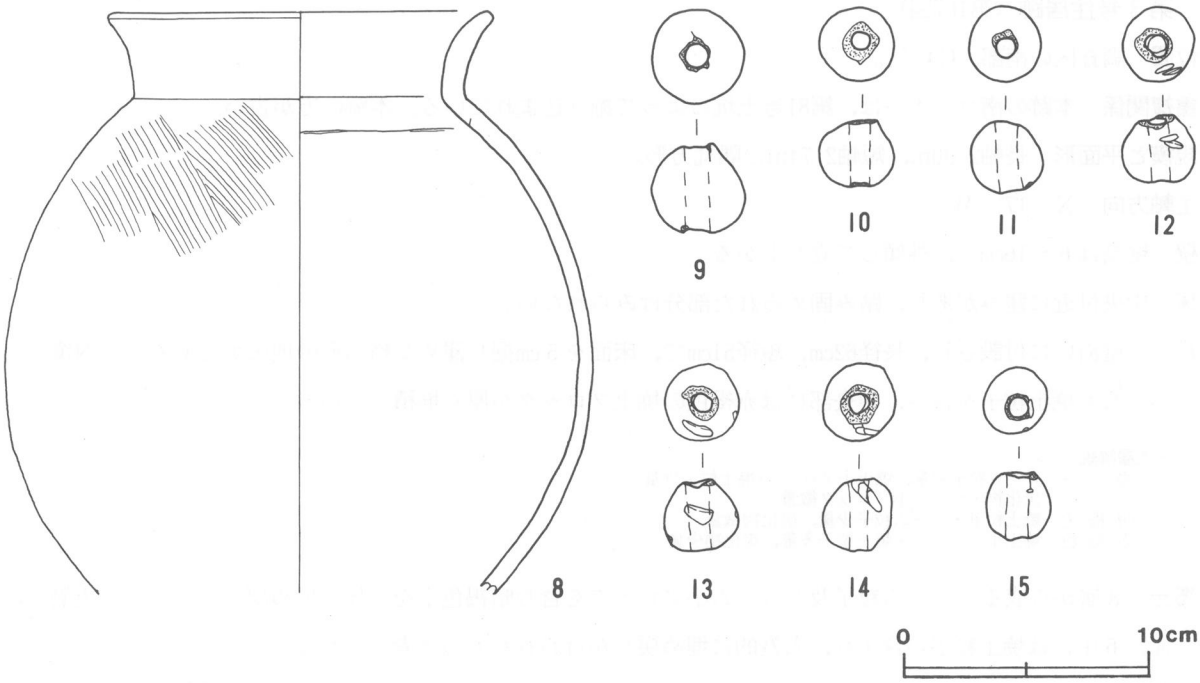
所見　本跡の遺物は完形品が多く，北西壁際から集中していることから意図的に投棄されたものと思われ，時期は，出土遺物から5世紀前半と考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第165図 1	坏 土師器	A 14.0 B 6.1 C 4.1	体部上位及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，中位で器厚を減じる。口縁部は僅かに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面丁寧なナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・雲母・パミス にぶい褐色 普通	P3　90% PL49 覆土中 体部外面煤付着
2	坏 土師器	A 15.8 B 6.2	体部中位一部欠損。偏平な丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は体部との境に明瞭な稜を持ち，直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石 明褐灰色 普通	P4　80% PL49 南西壁沿い覆土下層 内面剝離 二次焼成
3	坏 土師器	A 14.3 B 7.2 C 3.7	底部及び体部下位一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部外面に弱い稜を持ち，口唇部はやや尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後丁寧なナデ，内面放射状のヘラ磨き。底部ヘラ削り。外面赤彩。	砂粒・石英・長石・パミス にぶい黄橙色 普通	P5　90% PL49 南西壁沿い覆土下層



第165図　第２号住居跡出土遺物実測図(1)



第166図　第２号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第165図 4	椀 土師器	A 14.5 B 8.1 C 4.4	体部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。刷毛目整形後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。口縁部内・外面輪積み痕。	砂粒・石英・パミス にぶい橙色 普通	P６　60% 北西壁沿い覆土下層 底部外面煤付着
5	甕 土師器	A 19.8 B 32.5 C 8.4	体部下位一部欠損。やや突出した平底。体部は内彎しながら立ち上がり，中位に最大径を持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後斜位のヘラナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。体部外面赤彩。	砂粒・石英・長石 にぶい橙色 普通	P７　90% PL49 北西壁沿い覆土下層
6	甕 土師器	A 25.7 B (17.6)	体部下位一部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり，体部上位に最大径を持つ。頸部は括れ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石 にぶい橙色 普通	P８　70% PL49 北西壁沿い覆土下層 体部外面煤付着
7	甕 土師器	A 16.9 B 23.2	底部及び体部一部欠損。平底。体部は中位に最大径を持ち，内彎しながら立ち上がる。口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面刷毛目整形，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母・パミス 橙色 普通	P９　95% 北西壁沿い覆土下層
第166図 8	甕 土師器	A 15.4 B (23.2)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面刷毛目整形後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P10　30% 北西壁際

図版番号	種　別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径				
第166図９	土　玉	(3.6)	3.8	—	1.0	(43.9)	90	北コーナー付近床面直上	ＤＰ1　PL55
10	土　玉	(2.7)	3.1	—	0.8	(21.8)	95	北コーナー付近床面直上	ＤＰ2　PL55
11	土　玉	(2.9)	2.9	—	1.0	(22.4)	95	北コーナー付近床面直上	ＤＰ3　PL55
12	土　玉	(2.7)	3.0	—	0.7	(20.5)	95	北コーナー付近床面直上	ＤＰ4　PL55
13	土　玉	(2.9)	3.0	—	0.8	(20.9)	95	北コーナー付近床面直上	ＤＰ5　PL55
14	土　玉	(2.9)	(2.9)	—	0.9	(20.4)	90	北コーナー付近床面直上	ＤＰ7　PL55
15	土　玉	(2.8)	2.6	—	0.9	(17.8)	98	北コーナー付近床面直上	ＤＰ6　PL55

第３号住居跡（第167図）

位置　調査区の南部，G4h6区。

重複関係　本跡の南コーナーは，第81号土坑によって掘り込まれている。本跡の方が古い。

規模と平面形　長軸2.90m，短軸2.74mの隅丸方形。

主軸方向　N－17°－W

壁　壁高は６～16cmで，外傾して立ち上がる。

床　中央付近に窪みがあり，踏み固められた部分はみられない。

炉　北壁沿いに付設され，長径62cm，短径51cmで，床面を５cm掘り窪めた楕円形の地床炉である。炉内覆土はいずれも焼土粒子を含み，中央部には赤褐色の焼土ブロックが厚く堆積している。

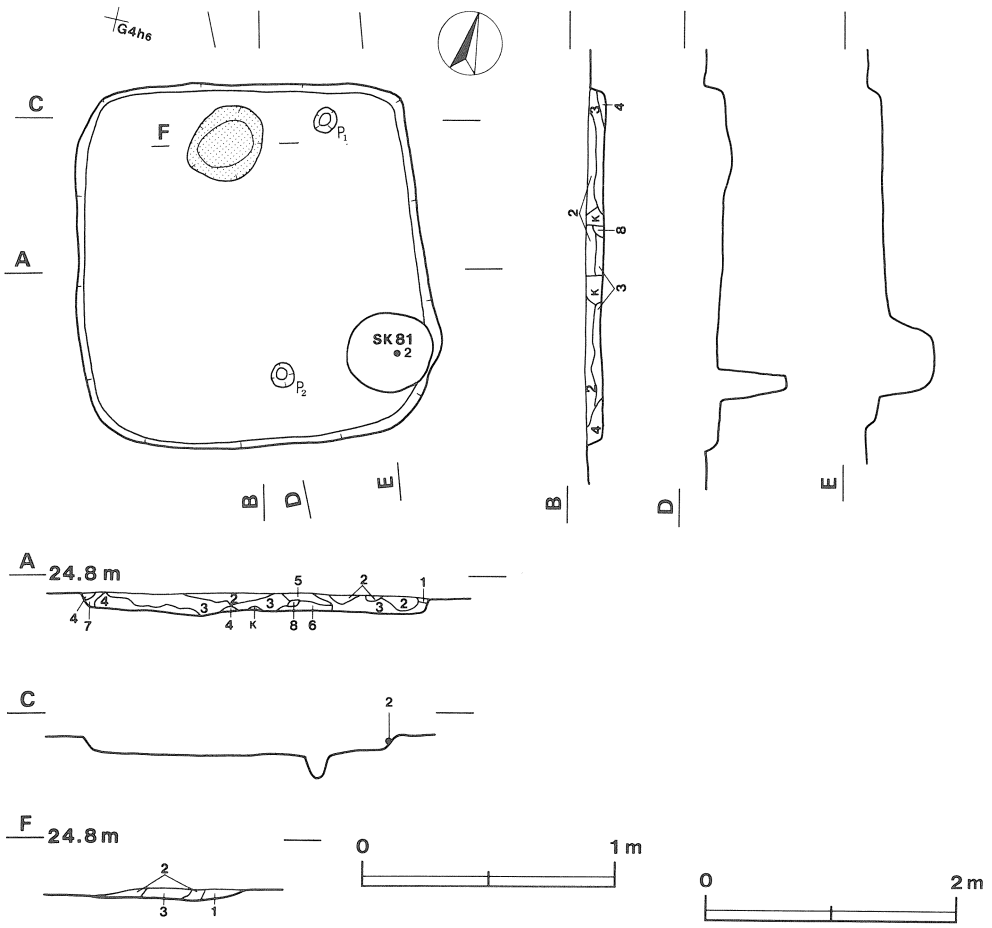
炉土層解説

1　褐　　色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化物・ローム小ブロック微量
2　明 褐 色　焼土粒子・ローム粒子少量，炭化物微量
3　赤 褐 色　焼土小ブロック・焼土粒子多量，炭化物少量

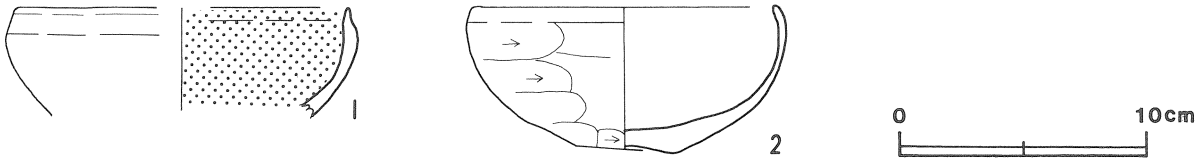
覆土　８層から成る。ローム粒子及びローム小ブロックを含む暗褐色土を主体に埋め戻されている。土層２，４，６中には焼土粒子が含まれ，人為的に埋め戻しが行われたものと考えられる。

土層解説

1　暗 褐 色　ローム粒子微量
2　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量
3　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
4　暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，焼土粒子極微量
5　暗 褐 色　ローム粒子少量
6　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子極微量
7　褐　　色　ローム粒子微量
8　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量



第167図　第３号住居跡実測図



第168図　第３号住居跡出土遺物実測図

第３号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第168図 1	坏 土師器	A [13.2] B (4.3)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は外面に極めて弱い稜を持ち，やや内傾し，その後直立する。口唇部は内削ぎ状に尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。体部内面赤彩。	砂粒・長石・パミス にぶい橙色 普通	P11　5％ 覆土中
2	坏 土師器	A　12.2 B　5.8 C　3.8	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部外面に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。口縁部外面赤彩痕。	砂粒・石英・長石 にぶい橙色 普通	P12　85％ PL49 東コーナー壁際覆土中 内面剝離

遺物　覆土中層から下層にかけて土師器片が少量出土している。第168図２の坏は東コーナー壁際の覆土中層から出土している。

所見　本跡は，炉の使用頻度も低く，柱穴を伴わず，その規模等から住居以外の目的をもった建物跡とも考えられる。また，隣接する住居跡の関連施設とも考えられるが根拠に乏しく，その関係は不明である。時期は，出土遺物から５世紀後半と考えられる。

第４号住居跡（第169図）

位置　調査区の南部，G4f5区。

規模と平面形　長軸5.36m，短軸5.12mの方形。

主軸方向　N－43°－W

壁　壁高は31～55cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　全周する。上幅12～20cm，深さ３～５cmで，断面形はほぼU字形で，一部逆台形をしている。

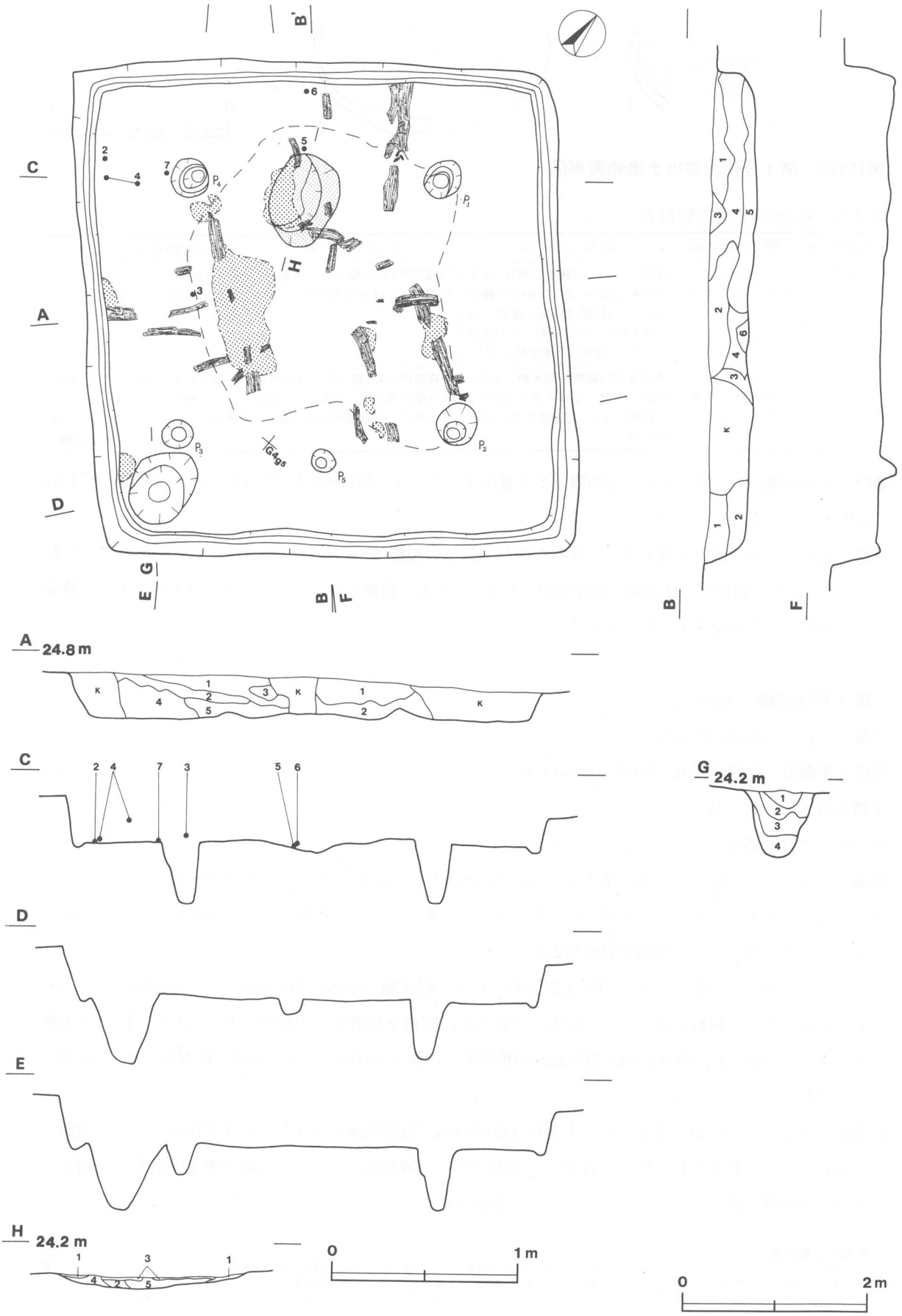
床　やや凹凸があり，中央付近が緩やかな皿状を呈し，南コーナーの貯蔵穴付近には高まりがみられる。中央付近には踏み固められた堅緻な部分が広がっている。

ピット　５か所（P_1～P_5）。P_1～P_4は長径35～47cm，短径36～43cmの楕円形または不整楕円形で，深さは35～60cmである。何れも各コーナー付近に付設され，規模や位置から主柱穴と考えられる。P_5は南東壁から中央寄りに付設され，長径27cm，短径23cmの楕円形で，深さは16cmである。規模や位置から出入口に伴うピットと思われる。

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は長径85cm，短径65cmの不定形で，深さ70cmである。遺構の内側に傾斜をもつ。断面はU字形で，底部には内側下がりの傾斜がみられる。貯蔵穴覆土中層及び下層からは，家屋の焼失時に混入したと思われる炭化材が確認されている。

貯蔵穴土層解説
1　褐　色　ローム中・小ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量
2　褐　色　炭化物・ローム小ブロック少量，ローム粒子微量，焼土粒子極微量
3　暗褐色　炭化材少量，炭化物・ローム少ブロック・ローム粒子極微量
4　暗褐色　炭化材・炭化物・ローム粒子少量

炉　中央から北西壁寄りに付設され，長径100cm，短径75cmで，床面を６cm掘り窪めた楕円形の地床炉である。



第169図　第４号住居跡実測図

炉床は火熱を受け焼土ブロックが厚く堆積し，赤変硬化している。

炉土層解説

1　極暗褐色　炭化物中量，焼土粒子・ローム粒子少量
2　黒 褐 色　炭化物多量，焼土粒子中量，焼土中・小ブロック・ローム粒子少量
3　赤 褐 色　焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物多量，ローム粒子極微量
4　褐　　色　焼土粒子・ローム小ブロック少量
5　暗赤褐色　焼土粒子・ローム小ブロック中量，焼土中・小ブロック・炭化物・ローム粒子少量

覆土　6層から成る。床面上に家屋消失時の炭化材が広がり，北西壁には床面から壁面に沿って炭化材が鍵形状に折れた状態で出土している。土層4以外の各層は焼土粒子を含み，炭化物を含む黒褐色土と暗褐色土及び褐色土が互いに堆積し，南西及び北西方向から埋め戻されているように思われる。人為堆積である。

土層解説

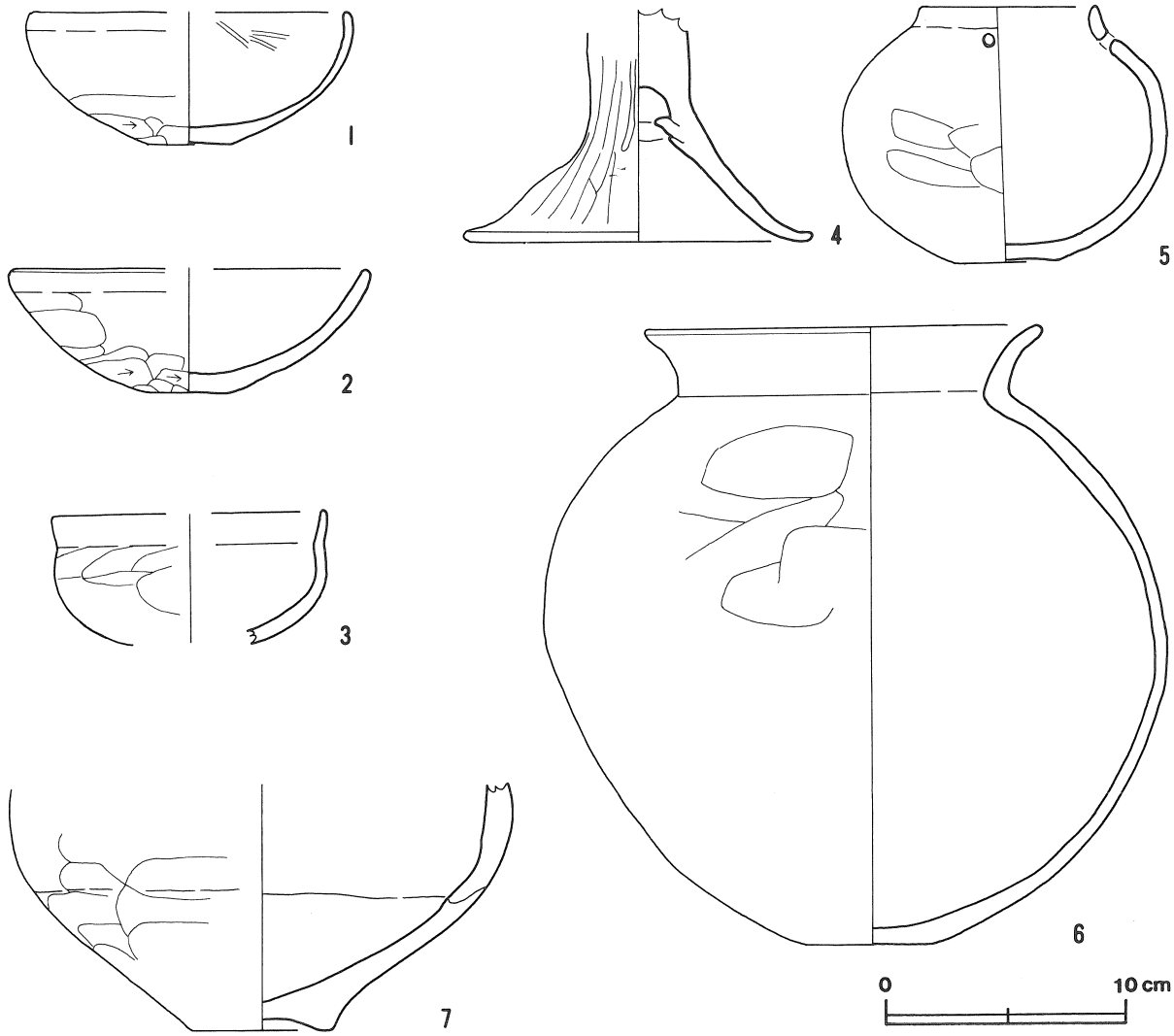
1　暗 褐 色　ローム中ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物極微量
2　暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，焼土粒子・炭化物極微量
3　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子・ローム中ブロック極微量
4　褐　　色　ローム粒子中量，ローム中・小ブロック少量，炭化物極微量
5　褐　　色　ローム中・小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子極微量
6　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物極微量

遺物　覆土中層から床面直上にかけ出土している。第170図2の坏は西コーナー付近の覆土下層から斜位の状態で，4の高坏は西コーナー寄りの覆土中層の高坏と覆土下層の高坏片が接合したものである。5の短頸壺は北西壁寄りの覆土下層から斜位の状態で，6の甕は体部を北西壁に接して斜位の状態で，7の甕は西コーナー付近の床面直上から出土している。

所見　本跡は，住居の建築材の一部と考えられる炭化材が良好な状態で残存している焼失家屋である。炭化材は，貯蔵穴内からも確認され，炭化材が周辺遺跡及び当遺跡内の他の住居跡出土の樹種と全く同じであるとして，炭化材樹脂同定の分析でも住居建築材が流入したとしても矛盾はないとしている。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第170図 1	坏 土師器	A [12.8] B 5.5 C 3.4	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部外面に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石 黒褐色 普通	P13　25% PL49 覆土中 二次焼成
2	坏 土師器	A [14.8] B 5.1 C 3.1	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は外面に弱い稜を持ち，外上方に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。底部雑なヘラ削り。内・外面赤彩痕。	砂粒・石英・長石 にぶい橙色 普通	P14　30% PL49 西コーナー付近覆土下層
3	椀 土師器	A [11.3] B (5.4)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は弓なり状に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P15　20% 覆土中
4	高　坏 土師器	D 14.4 E (8.6)	裾部及び脚部の破片。脚部は柱状を呈し，裾部は「ハ」の字状に下方に開く。	脚部及び裾部外面縦位のヘラナデ，内面ナデ。脚部内面輪積み痕。	砂粒・長石・パミス にぶい橙色 普通	P16　40% 西コーナー寄り覆土中層
5	短頸壺 土師器	A 7.1 B 10.6 C 4.0	体部下位一部欠損。平底。体部は内彎しながら口縁部に至る。口縁部は内傾して立ち上がり，口唇部は内削ぎ状に直立する。体部上位に相対して二つの孔が穿たれている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石 黒褐色 普通	P17　90% PL49 北西壁寄り覆土下層 二次焼成
6	甕 土師器	A 16.5 B 25.5 C 5.2	体部一部欠損。平底。体部は偏平ながら球形状を呈し，内彎しながら立ち上がり，口唇部で「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・パミス 黒褐色 普通	P18　90% PL50 北西壁覆土中 二次焼成
7	甕 土師器	B (10.2) C 5.6	底部から体部中位の破片。上げ底気味の平底。体部は内彎しながら中位で立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。体部内面輪積み痕。	砂粒・雲母・パミス にぶい橙色 普通	P19　30% 西コーナー付近床面直上 二次焼成



第170図　第4号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡（第171図）

位置　調査区の南部，G4i9区。

規模と平面形　長軸3.07m，短軸2.74mの長方形。

主軸方向　N－41°－W

壁　壁高は7～17cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

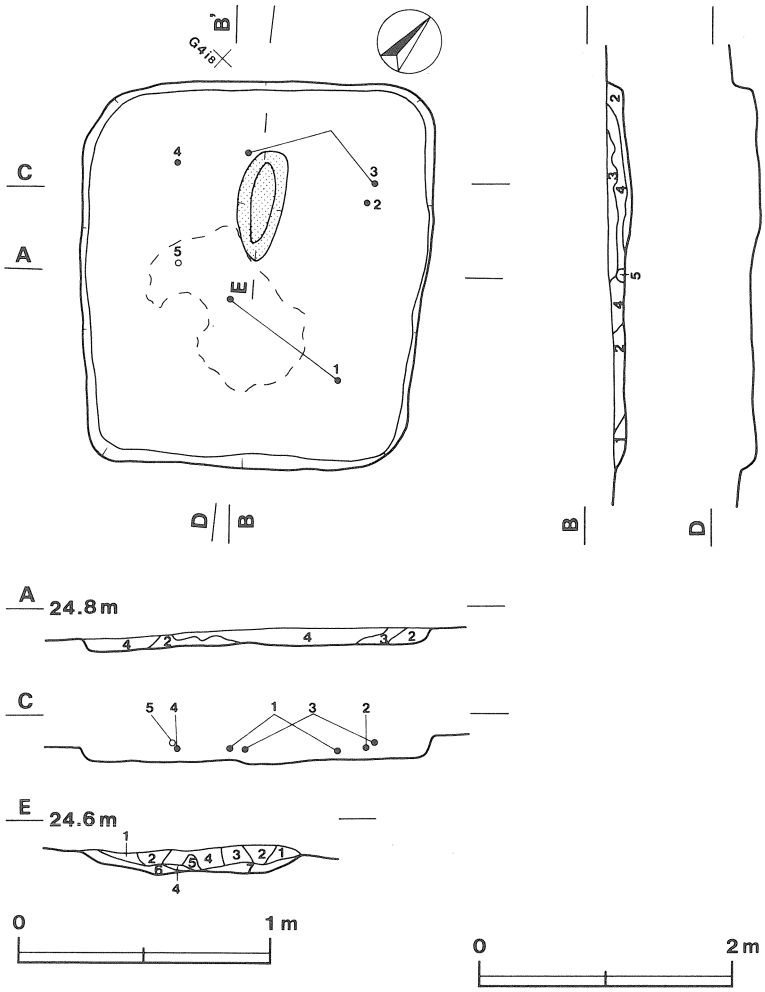
床　ほぼ平坦である。中央付近に踏み固められた堅緻な部分がみられる。

炉　中央から北西壁寄りに付設され，長径90cm，短径35cmで，床面を10cm掘り窪めた長楕円形の地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変しているが，硬化はしていない。

炉土層解説

1　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子極微量
2　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子・ローム粒子微量，炭化粒子極微量
3　赤 褐 色　焼土粒子・ローム小ブロック少量，焼土小ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子極微量
4　赤 褐 色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化粒子極微量
5　赤 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子極微量
6　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，焼土粒子極微量
7　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子・ローム小ブロック中量，炭化粒子極微量

覆土　5層から成る。各層は焼土粒子，炭化物及びロームブロックを含み，土層4の極暗褐色土には炭化材の



第171図　第5号住居跡実測図

混入も見られ，南東方向から埋め戻されたものと考えられる。人為堆積である。

土層解説

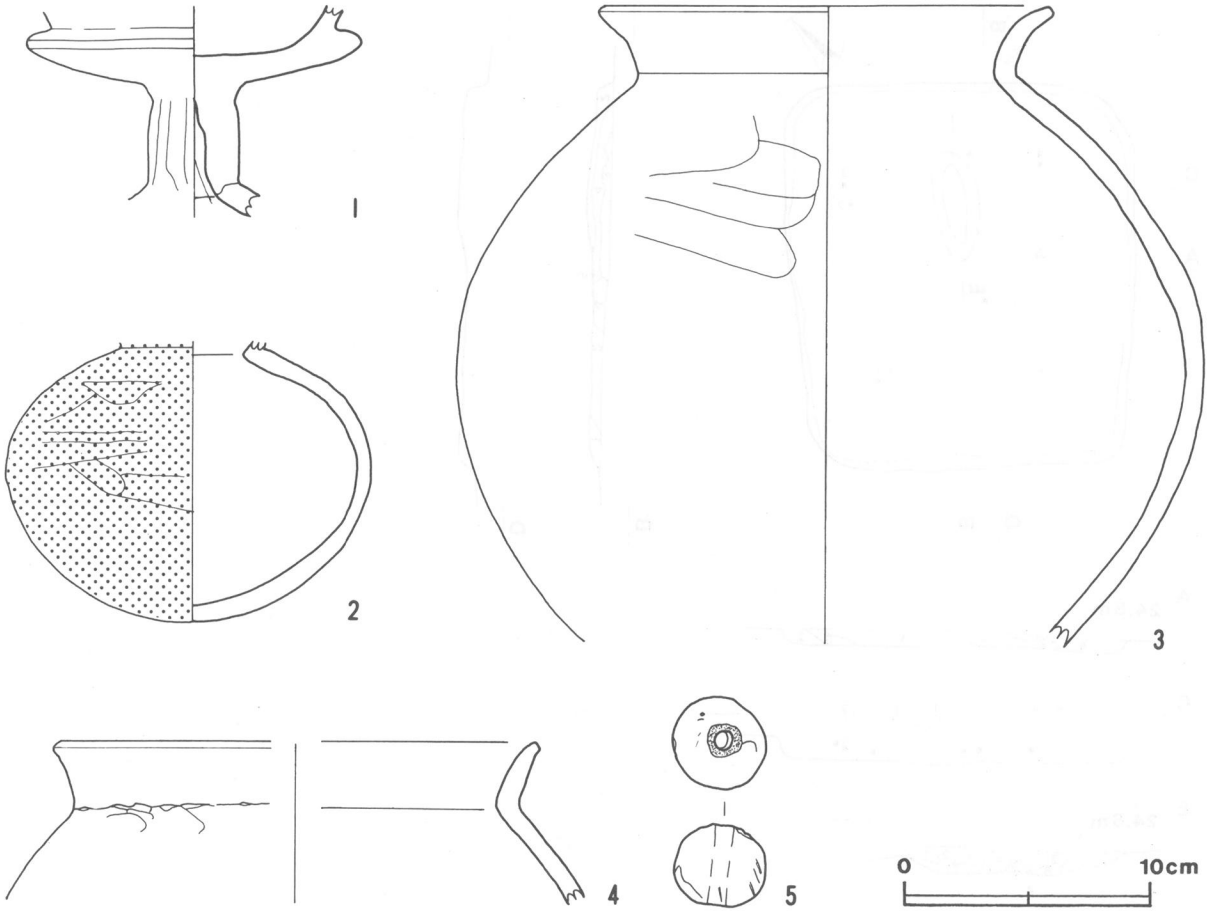
1　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物極微量
2　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック少量，炭化粒子極微量
3　黒褐色　焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック少量，ローム粒子極微量
4　極暗褐色　焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化材微量
5　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量

遺物　覆土中層から下層にかけ土師器片が中量出土している。第172図1の高坏は東コーナー付近の覆土下層出土の坏部片と中央覆土下層の脚部片が接合したものである。2の坩は北コーナー寄りの覆土中層から正位の状態で出土し，3の甕は北西寄りの覆土中層から逆位で出土している甕の口縁部と北西壁寄りの覆土中層から出土している体部片が接合したものである。4の甕は西コーナーの覆土下層から斜位の状態で出土している。

所見　本跡は，柱穴及び貯蔵穴の内部施設が確認されず，また，その規模等から考えて住居以外の目的をもった建物跡と考えられる。特に位置関係から隣接する第6号住居跡との関係が推測されるが，根拠に乏しい。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第172図 1	高　坏 土師器	B (8.3) E (5.0)	脚部から坏部の破片。脚部は柱状を呈し，坏部下位に張り出しのある段を有する。	坏部外面下位ヘラナデ，内面ナデ。脚部外面縦位のヘラナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P20　20% 東コーナー付近 覆土下層



第172図　第5号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第172図 2	坩 土師器	B (11.0)	口縁部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，中位のやや上部に最大径を持ち，楕円形の様相を呈する。	体部外面丁寧なヘラナデ，内面ナデ。体部外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P21　80% PL50 北コーナー寄り覆土中層 体部外面下位煤付着
3	甕 土師器	A　18.0 B (25.8)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P22　35% 北西寄り覆土中層
4	甕 土師器	A [19.6] B (6.3)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎して口縁部に至る。口縁部は外傾し，口唇部は僅かに反る。	口縁部内・外面中位横ナデ，外面下位縦位のヘラナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・石英・パミス 橙色 普通	P23　5% 西コーナー覆土下層

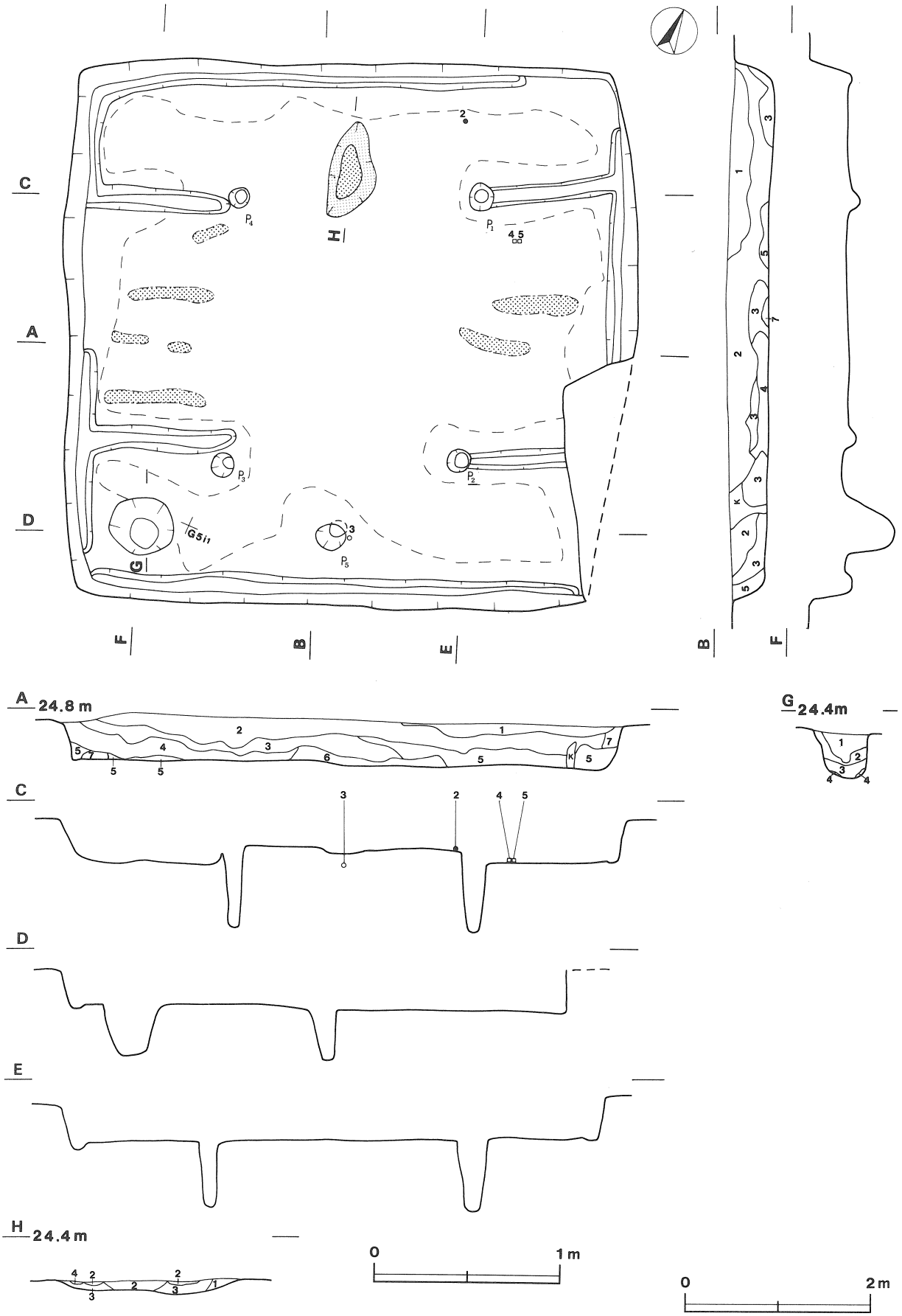
図版番号	種　別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径				
第172図5	土　玉	3.2	3.7	—	0.7	38.3	100	覆土中	DP8　PL55

第6号住居跡（第173図）

位置　調査区の南部，G5h1区。

規模と平面形　長軸6.18m，短軸5.82mであるが，東壁半ばから南東コーナーにかけては調査区外へ伸びており，完掘できなかった。完掘できた部分から推定すると方形になるものと思われる。

主軸方向　N—24°—W



第173図　第６号住居跡実測図

壁　壁高は30～40cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝　西壁際中央部及び北東コーナーの一部を除きほぼ全周する。上幅15～22cm，深さ３～10cmで，断面形はU字形または逆台形である。

間仕切り溝　東壁から２条，西壁から２条それぞれ中央に向かって伸びている。それぞれ幅20～25cm，深さ10cm，断面はU字形である。

床　ほぼ平坦であるが，北西，北東コーナー付近に僅かな窪みがみられる。全体に踏み固められた堅緻な部分が広がる。間仕切り溝とは異なった位置に，西壁際から３条，東壁際から２条の焼土がいずれも幅10～15cm，長さ40～95cmで中央に向かって伸びている。

ピット　５か所（P_1～P_5）。P_1～P_4は長径23～32cmの楕円形または不整楕円形ピットで，深さは55～75cmである。各コーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は長径32cm，短径27cmの楕円形で，深さは55cmである。南壁から中央方向にあり，規模や位置から出入口ピットと考えられる。

貯蔵穴　南西コーナー付近に付設され，平面形は長径65cm，短径60cmの隅丸方形で，深さは55cmである。断面はU字形で，底部は皿状である。壁は内側が垂直に立ち上がり，外側は壁中段に緩い段を持ち，外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1	暗褐色	炭化材・ローム小ブロック中量，炭化物・ローム粒子少量，焼土粒子・ローム中ブロック微量	3	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化物・ローム中ブロック少量
2	褐色	ローム小ブロック中量，炭化物少量，ローム粒子微量	4	橙色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量

炉　中央から北壁寄りに付設され，長径107cm，短径50cmで，床面を７cm掘り窪めた長楕円形の地床炉である。土層４の褐色土を除き，各層に焼土ブロックや炭化物の混入もみられる。また，土層２の暗赤褐色土からは極微量ながら炭化材も確認されている。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1	にぶい赤褐色	焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化物少量，ローム小ブロック・ローム粒子微量	3	暗赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子中量，焼土中ブロック少量，炭化物微量，ローム粒子極微量
2	暗赤褐色	焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化物微量，炭化材・ローム粒子極微量	4	褐色	ローム粒子多量，ローム中・小ブロック中量

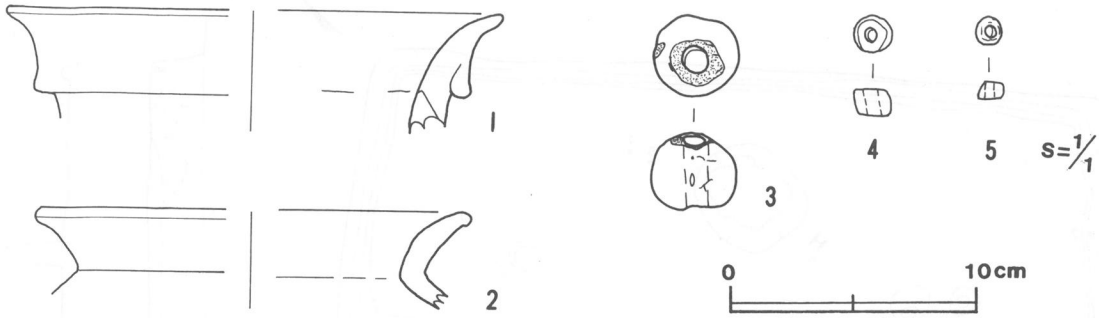
覆土　７層から成る。土層２の極暗褐色土以外は暗褐色土や褐色土が堆積し，土層１から土層６は炭化物やロームブロックが混入し，各壁際から埋め戻されていったように考えられる。壁際や下層に堆積する暗褐色土の土層５には灰の混入もみられる。

土層解説

1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量	5	暗褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物中量，炭化材少量，ローム中・小ブロック・ローム粒子・灰微量
2	極暗褐色	焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子微量	6	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化材・炭化物少量
3	暗褐色	焼土粒子・炭化物中量，ローム粒子少量	7	褐色	ローム粒子少量，炭化粒子極微量
4	褐色	ローム粒子少量，炭化物・ローム中・小ブロック微量			

遺物　床面直上から少量の土師器片が出土している。第174図２の甕は北西壁寄りの床面直上から斜位の状態で出土している。３の土玉は出入口ピットの中層位から，４・５のガラス玉は共に北西寄りの床面直上から出土している。

所見　本跡は，床面に筋状の焼土や，覆土中に焼土ブロックと灰が確認されたが，床面上からは炭化材や多量の焼土が確認されていないことから焼失家屋とは考えにくい。時期は，出土遺物から５世紀後半と考えられる。



第174図　第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第174図 1	甕 土師器	A［20.0］ B（4.5）	口縁部の破片。口縁部は折り返しのある複合口縁で，外反し，口唇部は丸味を持ちやや反る。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P24　5％ 覆土中
2	甕 土師器	A［17.5］ B（3.4）	口縁部の破片。口縁部は「く」の字状に外反し，口唇部に丸味を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・パミス 褐色 普通	P25　5％ 北西壁寄り床面直上

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径				
第174図 3	土　玉	(3.2)	3.5	—	1.0	(27.9)	95	出入口ピット中層	DP9　PL55

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径				
第174図 4	ガラス玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	北西寄り床面直上	Q1
5	ガラス玉	0.35	0.35	0.2	0.1	0.05	100	北西寄り床面直上	Q2

第7号住居跡（第175図）

位置　調査区の南部，G4f0区。

規模と平面形　長軸6.32m，短軸6.26mの方形。

主軸方向　N－49°－E

壁　壁高は36～53cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

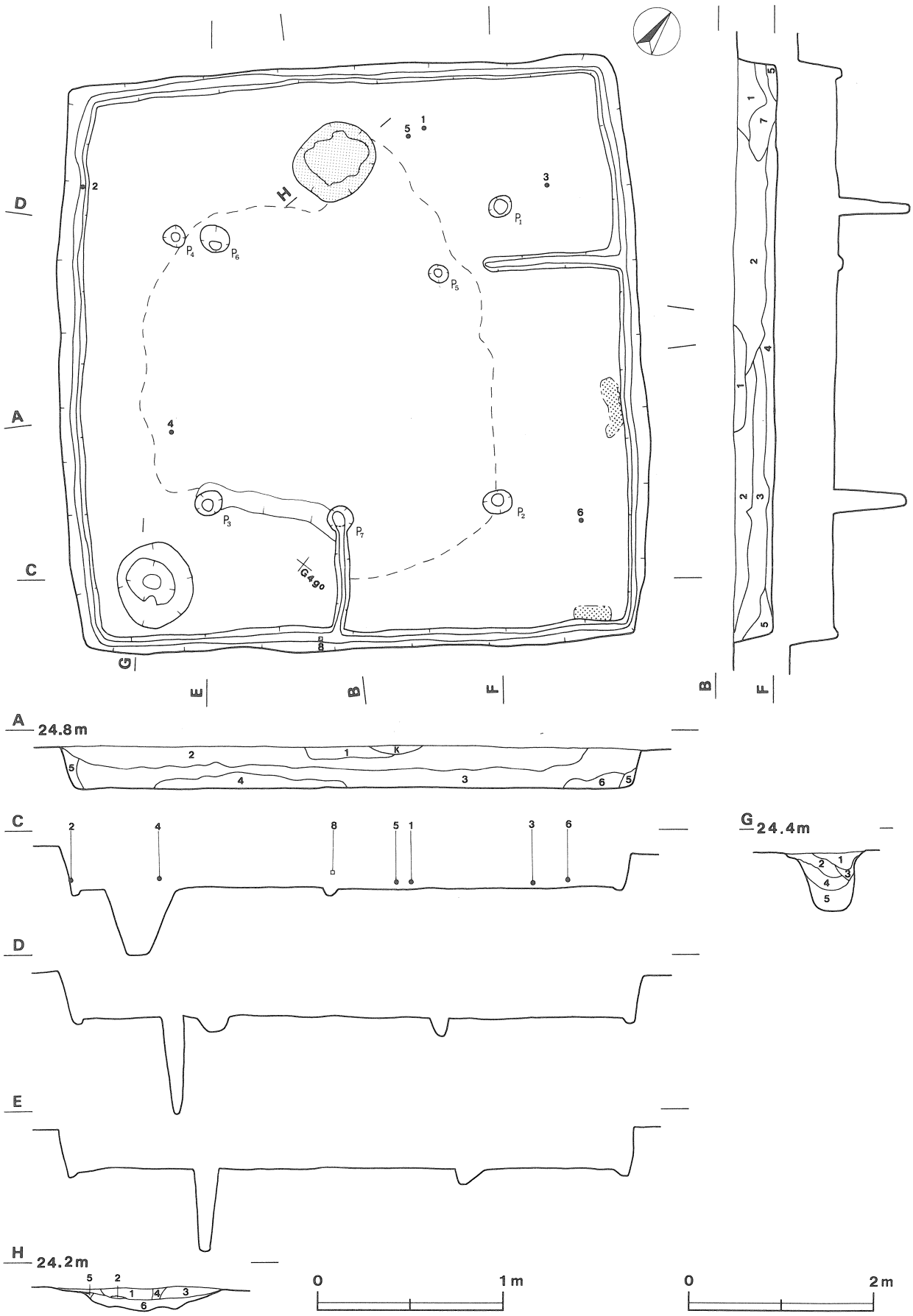
壁溝　全周している。上幅10～15cm，深さ4～8cmで，断面形はU字形である。

間仕切り溝　北東壁から1条，南東壁から1条それぞれ中央に向かって伸びている。幅12～17cm，深さ4～8cmで，断面はU字形である。

床　平坦で，中央付近に踏み固められた堅緻な部分が広がる。

ピット　7か所（P_1～P_7）。P_1～P_4は長径23～30cmの楕円形または不整楕円形ピットで，深さは78～109cmである。各コーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は径18cmの円形で，深さは20cm，P_6は長径33cm，短径29cmの不整楕円形である。P_5はP_1の南方向，P_6はP_4の北東方向に付設され，規模や位置から補助柱穴と推測される。P_7は径27cmの円形で，南東壁から伸びる間仕切り溝の突端に付設されている。規模や位置から出入口に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は長径90cm，短径80cmの楕円形で，深さは62cmである。断面はV



第175図　第７号住居跡実測図

字形で，底部は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1　黒褐色　炭化物・ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　明褐色　ローム粒子多量，炭化物微量
3　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化物微量
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム小ブロック少量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム中・小ブロック中量

炉　北西壁からやや中央寄りに付設され，長軸87cm，短軸75cmで，床面を12cm掘り窪めた隅丸長方形の地床炉である。覆土は土層6の焼土ブロックを含む赤褐色土が下層に厚く堆積し，炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1　黒褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
2　暗褐色　焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
3　極暗褐色　焼土中・小ブロック・焼土粒子中量，炭化物少量
4　暗褐色　焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
5　暗赤褐色　焼土小ブロック・ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
6　赤褐色　焼土中・小ブロック・焼土粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック極微量

覆土　7層から成る。何れも焼土粒子を含む。土層4の暗褐色土はロームブロックを少量含み，それ以外の各層からは炭化粒子は確認されていない。

土層解説

1　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　極暗褐色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
3　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物微量
4　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・ローム中・小ブロック微量
5　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　暗褐色　ローム粒子多量，焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
7　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量

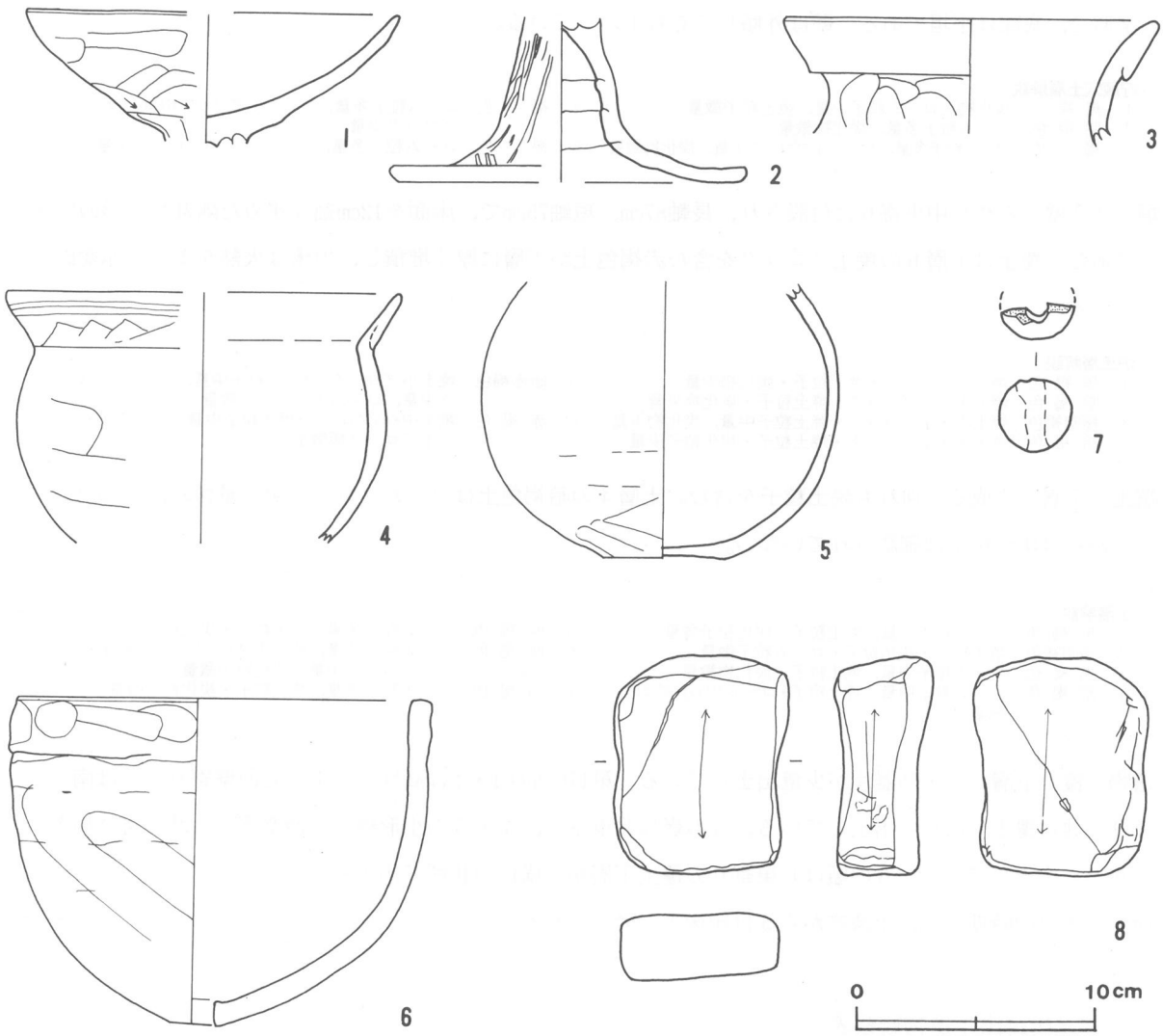
遺物　覆土下層から土師器片が少量出土している。第176図の1・2は高坏で，1は北西壁寄り，2は南西壁寄りの共に覆土下層から出土している。3の壺は北東寄り，4・5の小形甕は南西壁寄りと北西寄りの覆土下層から出土している。6の甑は北東寄りの覆土下層から横位の状態で出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第176図 1	高坏 土師器	A [15.6] B (5.3)	坏部の破片。下位に稜を持ち，外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラナデ，内面ナデ。接合部外面縦位のヘラナデ。	砂粒・石英・スコリア・パミス にぶい橙色 普通	P26　35% 北西壁寄り覆土下層 外面煤付着
2	高坏 土師器	D [14.9] E (6.8)	脚部の破片。脚部は下方に緩やかに開き，裾部で大きく開く。端部はやや反る。	脚部外面縦位のヘラ磨き。内面輪積み痕。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P27　40% 南西壁寄り覆土下層
3	壺 土師器	A　15.8 B (4.8)	頸部から口縁部の破片。頸部は緩やかに外傾し，口縁部は折り返しのある複合口縁となる。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラナデ，内面ナデ。内・外面赤彩痕。	砂粒・石英・長石 浅黄橙色 普通	P28　20% 北東寄り覆土下層
4	小形甕 土師器	A [16.4] B (10.4)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面上位横ナデ，外面下位ヘラナデ。体部外面ヘラナデ，内面ナデ。口縁部外面赤彩痕。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	P29　10% 南西壁寄り覆土下層 口縁部外面3条の沈線
5	小形甕 土師器	B (11.3) C　4.9	底部から体部上位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，球形状を呈する。	体部内・外面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 橙色 普通	P30　10% 北西寄り覆土下層 体部外面煤付着
6	甑 土師器	A　17.2 B　13.6	口縁部一部欠損。無底式。底部に単孔が穿たれ，体部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部内面横ナデ，外面指圧痕。体部外面雑なナデ，内面ナデ。体部外面積み痕。	砂粒・石英・長石 にぶい橙色 普通	P31　95% PL50 北東寄り覆土下層

図版番号	種別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	孔径				
第176図7	土玉	(3.1)	(3.1)	—	0.8	(10.6)	50	覆土中	DP10　PL55



第176図　第７号住居跡出土遺物実測図

図版番号	種　別	計測値 (cm)			重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚					
第176図８	砥　石	9.0	7.1	3.8	338.4	100	砂岩	覆土中	Q3

第８号住居跡（第177図）

位置　調査区の南部，$G4_{d5}$区。

規模と平面形　長軸5.00m，短軸3.96mの長方形。

主軸方向　N－42°－E

壁　壁高は22～35cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床　平坦で，全体が踏み固められており，特に中央付近に堅緻な部分が広がる。西コーナー付近に木根痕による落ち込みがある。

ピット　３か所（P_1～P_3）。P_1～P_3は長径17～25cmの楕円形または不整楕円形で，深さは25～35cmである。南東壁沿いに各ピットが並ぶように付設されている。P_1，P_2は付設する位置が不規則で主柱穴とは考えにくく，性格は不明である。P_3は規模や位置から出入口に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴　南東壁際の中央付近に付設され，平面形は長径60cm，短径45cmの不定形で，深さは30cmである。断面はU字形で，底部は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

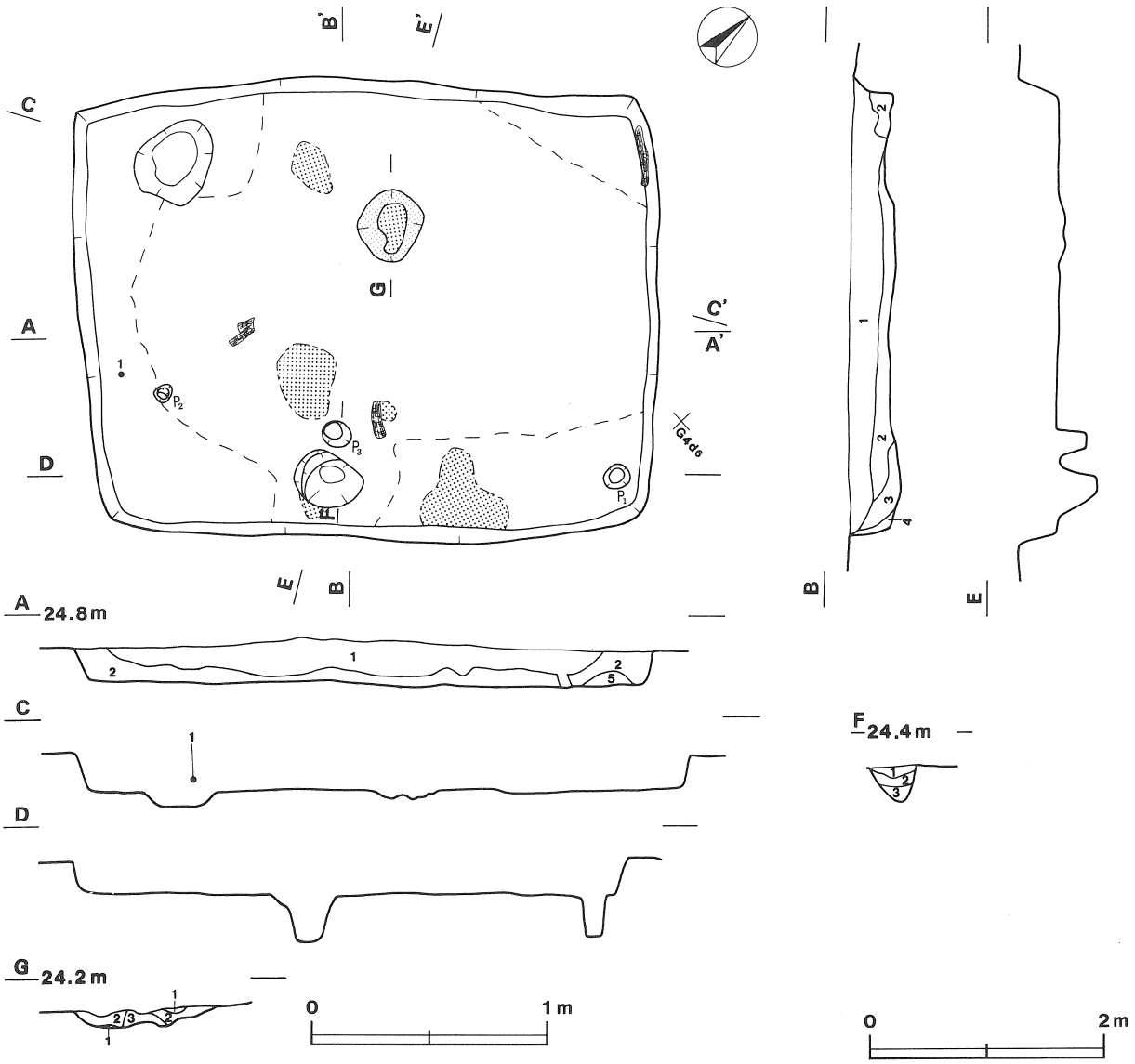
1　黒 褐 色　ローム粒子中量，炭化材・炭化物・ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
2　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，炭化物極微量
3　黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物極微量

炉　中央からやや北西寄りに付設され，長径60cm，短径55cmで，床面を7cm掘り窪めた不整楕円形の地床炉である。覆土は炉の中央部分に土層3の焼土ブロックを含む暗褐色土が厚く堆積し，それを囲むように土層2の褐色土が堆積しており，炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

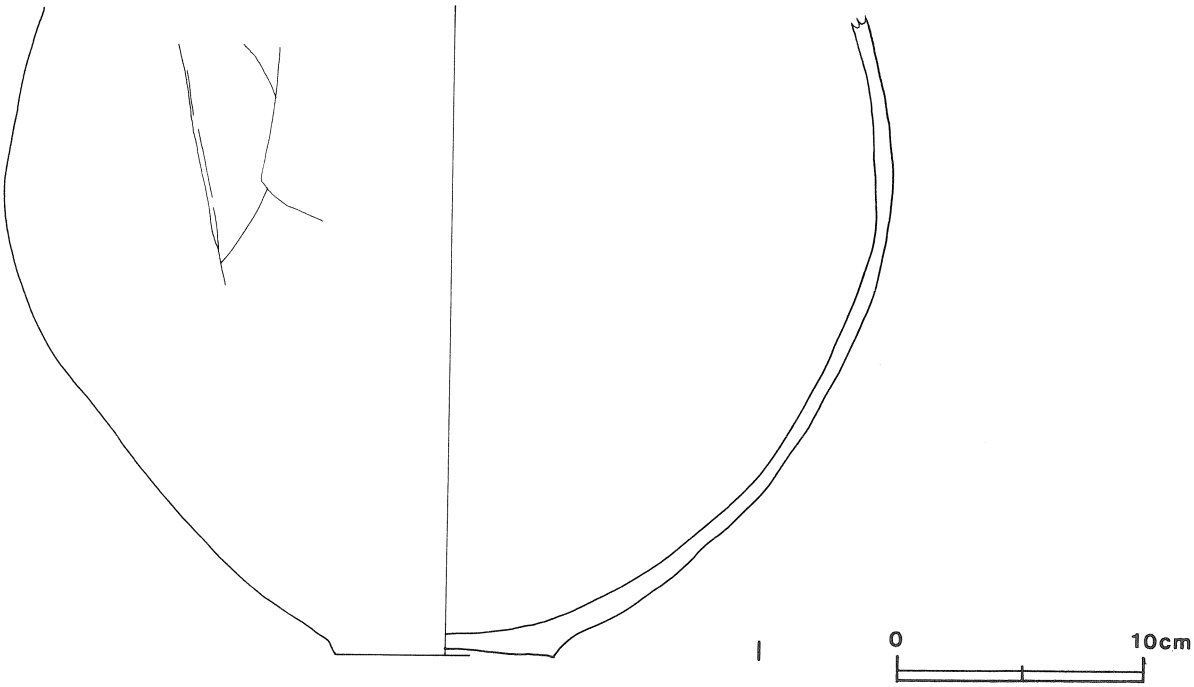
炉土層解説

1　暗 褐 色　ローム粒子中量，炭化物・ローム小ブロック少量，焼土粒子極微量
2　褐　　色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化物極微量
3　暗 褐 色　焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量，炭化物極微量

覆土　5層から成る。焼土粒子や炭化粒子を含む土層1，2の黒褐色土及び暗褐色土が下層から上層にかけて大部分を占める。



第177図　第8号住居跡実測図



第178図　第8号住居跡出土遺物実測図

土層解説
1　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム少ブロック微量
2　暗褐色　炭化物・炭化粒子・ローム少ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量
3　黒褐色　炭化物・炭化粒子・ローム粒子少量，焼土粒子微量
4　暗褐色　ローム粒子微量
5　極暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物　覆土下層から土師器片が少量出土している。第178図の1は土師器の甕で，南西壁際の覆土下層から正位の状態で出土している。

所見　本跡は，主柱穴となるピットが，撹乱を全く受けていない北コーナー付近からも確認できなかったことから，片流れ屋根的建物といった上屋構造物も推測される。また，床面から確認されている炭化材については，炭化材樹脂同定により本住居跡の構築材であることが確認されている。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第178図 1	甕 土師器	B (25.7) C　8.8	底部から体部上位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・スコリア 橙色 普通	P32　50% 南西壁際覆土下層 内面剝離

第9号住居跡（第179図）

位置　調査区の南部，$G4_{a4}$区。

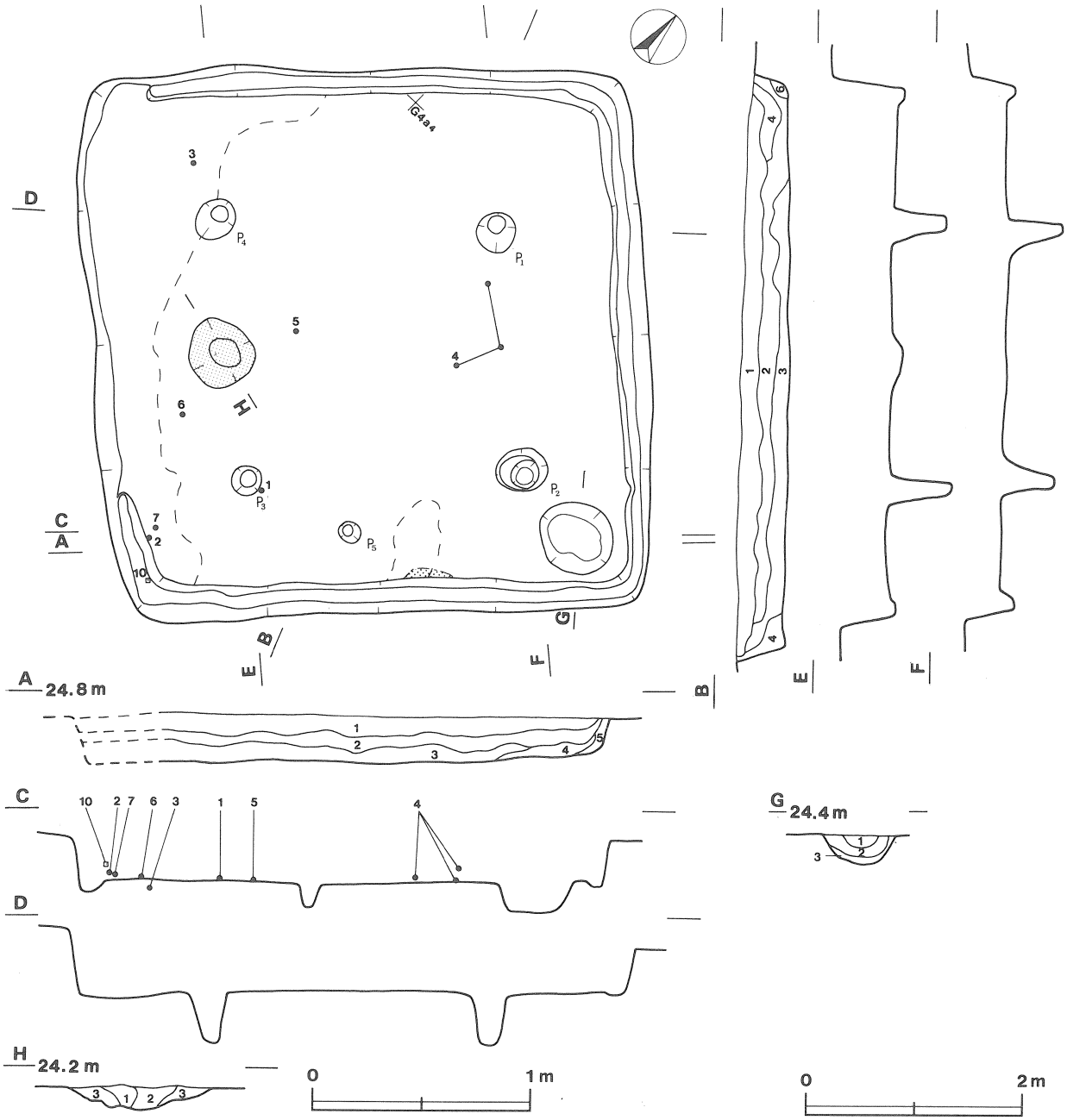
規模と平面形　長軸5.14m，短軸4.96mの方形。

主軸方向　N－45°－E

壁　壁高は34～60cmで，傾斜して立ち上がる。

壁溝　南西壁際を除いて，周回している。

床　平坦で，南西壁沿いを除いて全体的に踏み固められ，堅緻な部分が広がる。



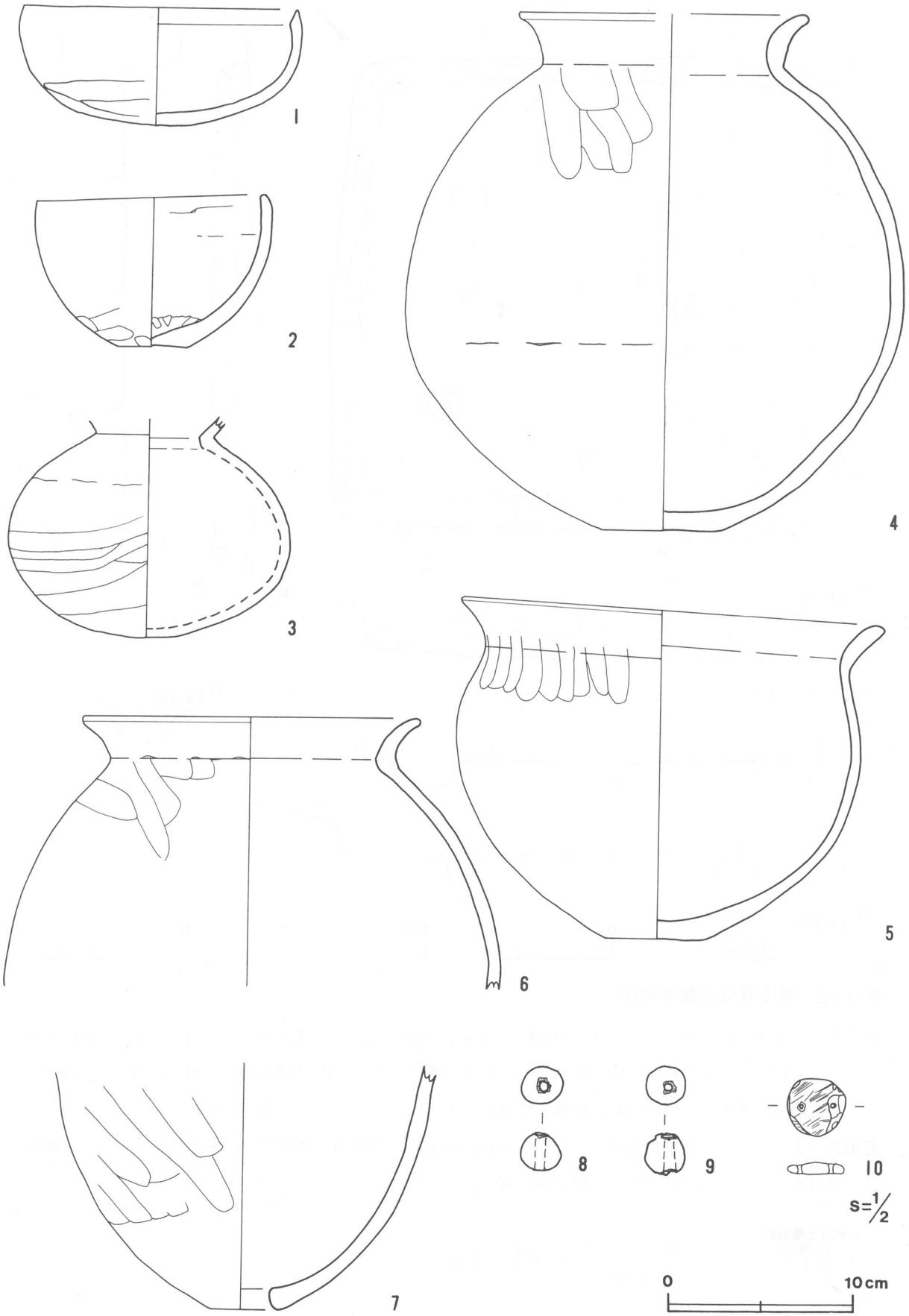
第179図　第9号住居跡実測図

ピット　5か所（P_1～P_5）。P_1～P_4は長径25～50cmの楕円形または不整楕円形で，深さは45～55cmである。各コーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は径20cmの円形で，深さは20cmである。南東壁から中央寄りに付設され，規模や位置から出入口に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴　東コーナー付近に付設され，平面形は長径75cm，短径63cmの楕円形で，深さは25cmである。断面は浅い擂鉢形で，底部は皿状である。壁は緩く立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子極微量
3　褐　色　ローム小ブロック極微量

炉　中央から南西寄りに付設され，長径65cm，短径55cmで，床面を10cm掘り窪めた楕円形の地床炉である。覆土は焼土ブロックを含む暗赤褐色土を暗褐色土が囲むように堆積している。炉床は火熱を受けて赤変硬化し



第180図　第９号住居跡出土遺物実測図

ている。

炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック微量
2　暗赤褐色　焼土粒子少量，焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子極微量
3　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子極微量

覆土　6層から成る。焼土粒子やローム粒子を含む黒褐色土及び暗褐色土が厚く堆積し，各壁際には暗褐色土及び褐色土が流れ込みの様相で堆積している。自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒 褐 色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化物・ローム粒子少量
2　暗 褐 色　焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量
3　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子微量
4　暗 褐 色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子極微量
5　褐　　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
6　暗 褐 色　焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物極微量

遺物　覆土下層から床面直上にかけて出土している。第180図1の坏は南側の床面直上から正位の状態で出土し，2の椀と7の甑は，南コーナー寄りの覆土下層から高坏の坏部，椀，甑の順に正位の状態で重なり合って出土している。4の甕は北東寄りの覆土下層から床面直上の土師器片が接合したものである。5・6の甕は中央及び南側の床面直上から斜位の状態で出土したものである。10の双孔円板は覆土中層位から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第180図 1	坏 土師器	A 14.7 B 6.3	体部下位から口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内削ぎ状に尖る。内面に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面丁寧なナデ，内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア・パミス にぶい橙色 普通	P33 60% PL50 南側床面直上 内面剝離
2	椀 土師器	A 12.3 B 8.2	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石 淡赤橙色 普通	P34 95% PL50 南コーナー寄り覆土下層
3	坩 土師器	B (11.5) C 2.5	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，潰れた球形状を呈する。	体部外面横位のヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・石英・雲母・パミス にぶい橙色 普通	P35 90% 覆土中
4	甕 土師器	A [15.8] B 27.8 C 6.4	体部中位から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P36 70% PL51 北東寄り覆土下層 二次焼成
5	甕 土師器	A 22.3 B 18.3 C 5.7	体部中位一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は大きく外反する。最大径を口縁部に持つ。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面上位斜位のヘラナデ。体部外面ヘラナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・スコリア にぶい黄橙色 普通	P37 85% PL51 中央床面直上 二次焼成
6	甕 土師器	A 18.0 B (14.5)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・石英・雲母・スコリア にぶい黄橙色 普通	P38 40% 南側床面直上
7	甑 土師器	B (12.8) C 3.5	底部から体部中位の破片。無底式。底部に単孔が穿たれ，体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・雲母・パミス にぶい褐色 普通	P39 50% 南コーナー寄り覆土下層 二次焼成

図版番号	種　別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径				
第180図 8	土　玉	(2.0)	2.2	—	0.5	(8.1)	98	覆土中	DP11 PL55
9	土　玉	(2.2)	2.1	—	0.5	(7.5)	98	覆土中	DP12 PL55

図版番号	種　別	計　測　値　(cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第180図10	双 孔 円 板	—	2.1	0.4	0.15	3.0	100	片岩	覆土中層	Q4

第10号住居跡（第181図）

位置　調査区の南西部，$G4_{a5}$区。

重複関係　本跡の東コーナーは，第82号土坑によって掘り込まれている。本跡の方が古い。

規模と平面形　長軸2.59m，短軸2.33mの方形。

主軸方向　N—25°—W

壁　壁高は8～20cmで，南壁は垂直に，西壁及び東壁は外傾して立ち上がり，北壁は緩く外傾して立ち上がる。

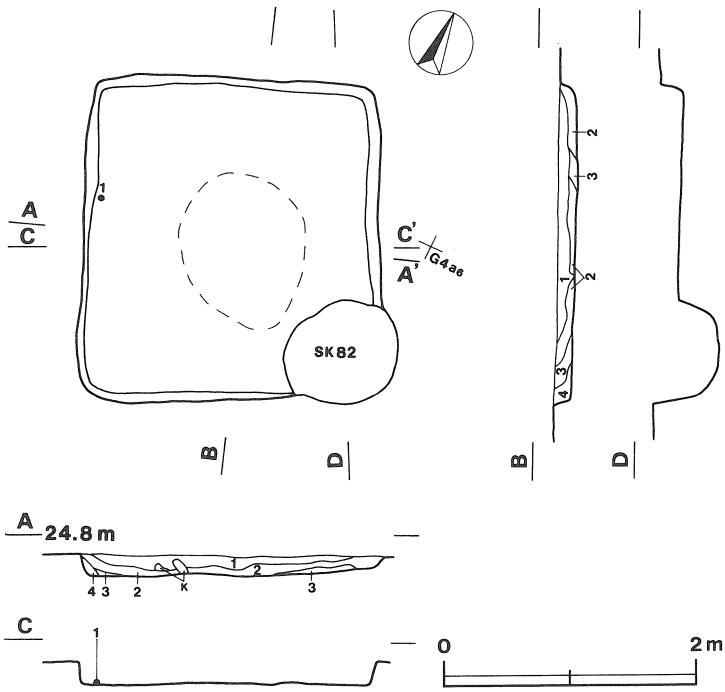
床　平坦で，中央付近に踏み固められた堅緻な部分がみられる。

覆土　4層から成る。下層から上層には暗褐色土が厚く堆積し，下層の一部に褐色土が堆積している。各層とも焼土粒子及びローム粒子を含み，暗褐色土にはロームブロックが混入している。人為堆積と考えられる。

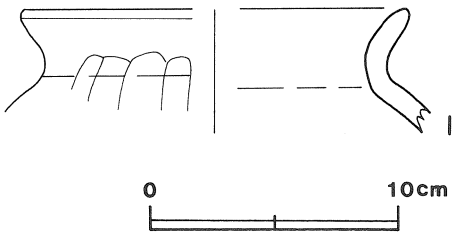
土層解説
1　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量，炭化物極微量
2　暗 褐 色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量
3　褐　　色　炭化物・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子極微量
4　暗 褐 色　焼土粒子・ローム粒子極微量

遺物　覆土下層から少量の土師器片が出土している。第182図1の甕は南西壁際の覆土下層から出土している。

所見　本跡は，炉及び柱穴等の内部施設を伴わない小規模の建物跡であることから，住居以外の目的をもった建物と考えられる。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。



第181図　第10号住居跡実測図



第182図　第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第182図 1	甕 土師器	A［15.6］ B　4.2	口縁部の破片。口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内面横ナデ，外面上位横ナデ・下位縦位のヘラナデ。	砂粒・雲母・パミスにぶい橙色 普通	P41　5％ 南西壁際覆土下層

第11号住居跡（第183図）

位置　調査区の南東部，G 4 b0区。

重複関係　本跡の南西壁は，第83号土坑によって掘り込まれている。本跡の方が古い。

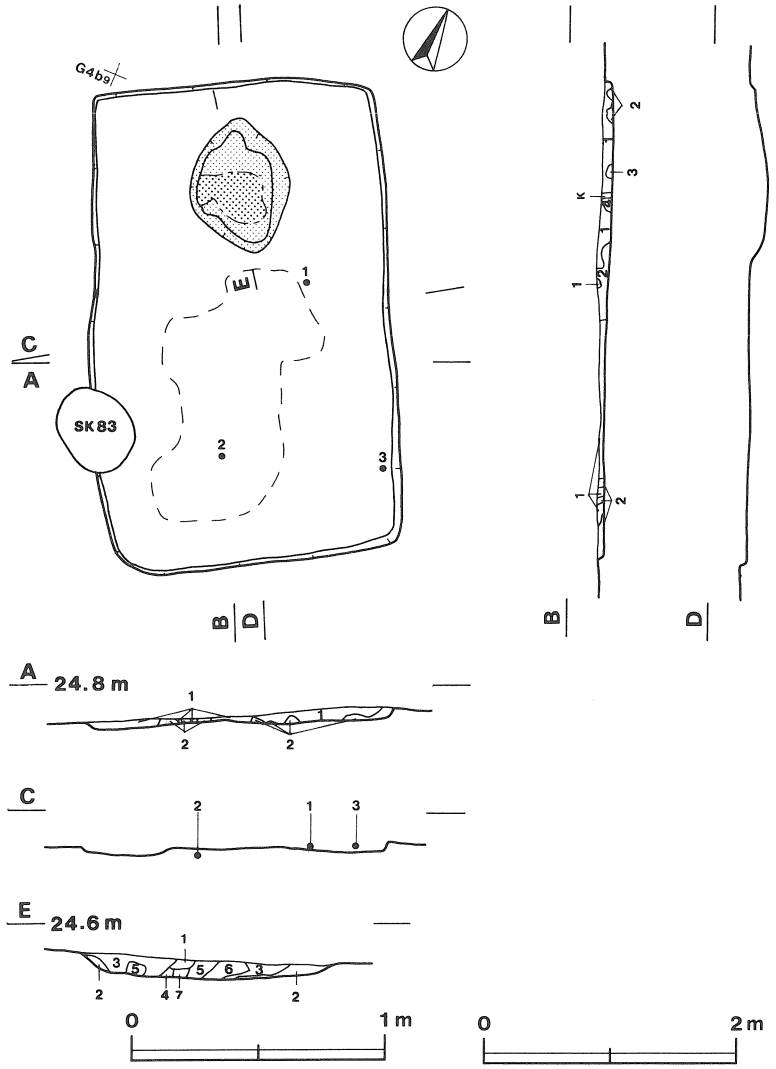
規模と平面形　長軸3.84m，短軸2.42mの長方形。

主軸方向　N—27°—W

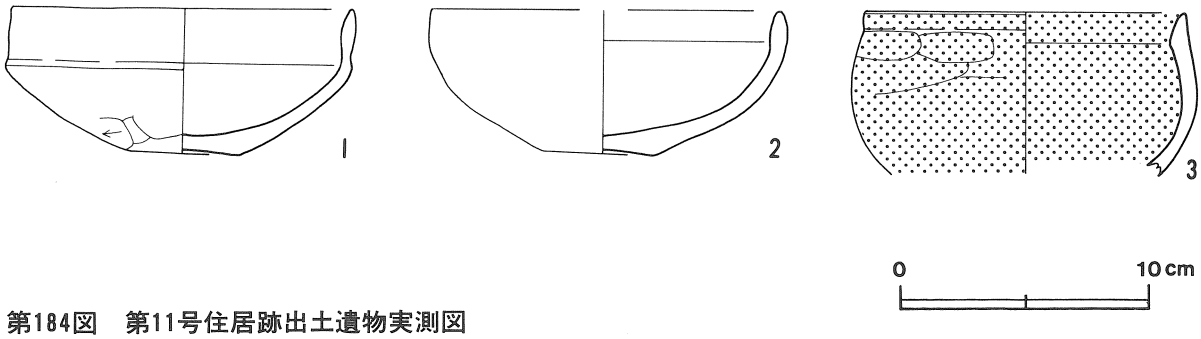
壁　壁高は2～7cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床　やや凹凸があり，中央部から南東部に踏み固められた堅緻な部分がみられる。

炉　北西壁寄りに付設され，長径108cm，短径80cmの楕円形で，床面を約7cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土下層から上層にかけて焼土ブロックの堆積がみられたが，炉床はさほど赤変硬化していない。



第183図　第11号住居跡実測図



第184図　第11号住居跡出土遺物実測図

炉土層解説

1　暗褐色　焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量
2　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量，炭化物極微量
3　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物少量，焼土小ブロック極微量
4　明赤褐色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物少量，ローム小ブロック極微量
5　赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化物少量，炭化材・ローム粒子微量
6　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化材・炭化物少量，ローム粒子微量
7　暗赤褐色　焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子極微量

覆土　4層から成る。覆土中からはロームブロツク及び炭化物が確認され，黒褐色土からは炭化材と埋め戻しに伴うものと思われる遺物の混入もみられる。人為堆積と考えられる。

土層解説

1　黒褐色　焼土小ブロック・炭化材・炭化物・ローム粒子少量
2　明褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量
3　明褐色　焼土粒子・炭化物少量，焼土粒子・ローム粒子極微量
4　赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化物・ローム粒子少量

遺物　覆土下層から床面直上にかけ少量出土している。第184図1の坏は中央付近の床面直上から逆位の状態で出土し，2の坏は南寄りの床面直上から正位の状態で出土している。3の椀は東寄りの覆土下層から斜位の状態で出土している。

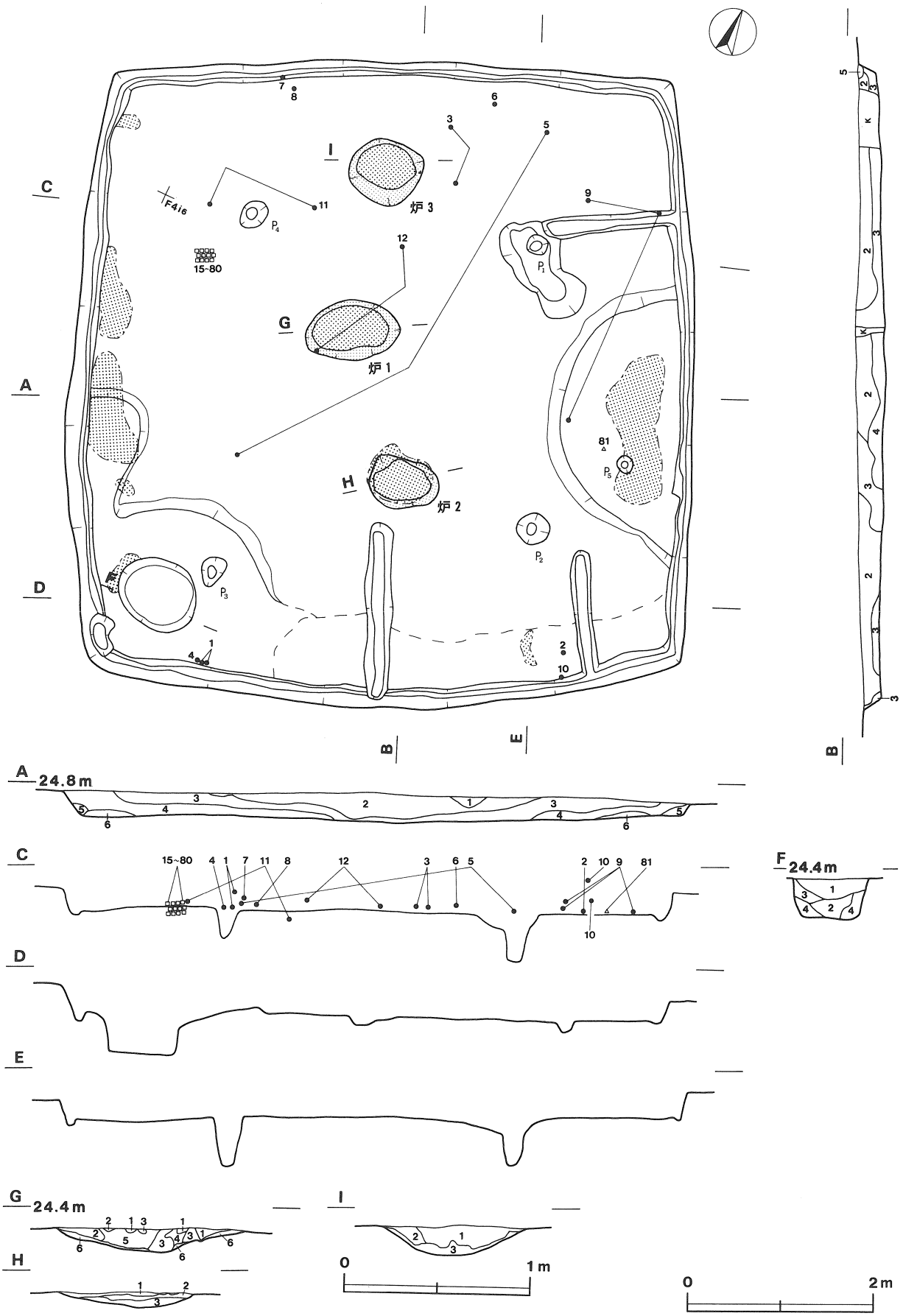
所見　本跡は，柱穴等の内部施設を伴わない小規模の建物跡で，確認された他の小規模建物跡が中規模ないし大型の住居跡に隣接しているのに対し，本跡に隣接する建物跡は確認されず，その性格は不明であるが，住居もしくはそれ以外の目的をもった建物跡とも考えられる。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第184図 1	坏 土師器	A　13.8 B　6.0 C　4.4	体部一部欠損。平底。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり，口縁部は外面に稜を持ち，直立する。口唇部は内削ぎ状にやや尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ，内面磨き。底部ヘラ削り。体部内・外面赤彩痕。	砂粒・石英・雲母 灰褐色 普通	P42　95% PL51 中央付近床面直上
2	坏 土師器	A［14.0］ B　5.8 C　4.2	体部下位から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は内面に弱い稜を持ち，ほぼ直立する。口唇部は内削ぎ状にやや尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面丁寧なヘラナデ。底部ヘラ削り。内・外面赤彩痕。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P43　60% 南寄り床面直上 二次焼成
3	椀 土師器	A　12.8 B（6.5）	体部上位から口縁部破片。体部は内彎しながら口縁部に至る。口縁部は内面に明瞭な稜を持ち，内削ぎ状に直立する。口縁部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面磨き。内・外面赤彩。	砂粒・石英・スコリア 赤橙色 普通	P44　40% 東寄り覆土下層 二次焼成

第12号住居跡（第185図）

位置　調査区の南西部，F4$_{i6}$区。



第185図　第12号住居跡実測図

規模と平面形　長軸6.94m，短軸6.76mの方形。

主軸方向　N—25°—W

壁　壁高は18～29cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝　全周する。上幅10～16cm，深さ３～８cmで，断面はU字形である。

間仕切り溝　北東壁から１条，南東壁から２条，それぞれ中央付近に向かって伸びている。幅18～28cm，深さは各10cmで，断面は逆台形である。

床　ほぼ平坦であるが，北東壁沿いに半円形状の高まり，南コーナー付近に約７～８cmの高まりがみられ，どちらも踏み固められている。南東壁沿いにも幅80～90cmの範囲で帯状に堅緻な部分がみられる。

ピット　５か所（P_1～P_5）。P_1～P_4は長径21～35cm，短径21～32cmの不整楕円形または不定形で，深さは32～55cmである。何れも各コーナー付近に付設され，規模や位置から主柱穴と考えられる。P_5は北東壁寄りに付設され，長径20cm，短径16cmの楕円形で，深さは57cmである。規模と位置から主柱穴の補助的なものと考えられるが，具体的な性格は不明である。

炉　３か所。炉１～炉３は南東壁から北西壁の中央線上に南側から炉２，１，３の順に付設されている。炉１は長径100cm，短径65cmで，床面を13cm掘り窪めた楕円形の地床炉である。覆土は焼土粒子を含み，炉床は火熱を受け赤変硬化している。炉２は長軸75cm，短軸55cmで，床面を８cm掘り窪めた隅丸長方形の地床炉である。覆土上層には焼土ブロックを含む赤褐色土が筋状に堆積している。炉床は火熱を受け赤変硬化している。炉３は長軸83cm，短軸73cmで，床面を15cm掘り窪めた隅丸方形の地床炉である。覆土は焼土粒子を含む土層１の褐色土が厚く堆積し，下層には褐色土が堆積している。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉１土層解説
1　にぶい赤褐色　焼土粒子少量
2　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子少量
3　赤褐色　焼土中ブロック・焼土粒子少量
4　赤褐色　焼土中ブロック・焼土粒子少量
5　明赤褐色　焼土粒子中量，焼土中ブロック微量
6　褐色　ローム粒子多量，焼土粒子微量，ローム中ブロック・ローム小ブロック極微量

炉２土層解説
1　赤褐色　焼土粒子少量
2　赤褐色　焼土粒子・ローム粒子少量
3　褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，ローム大ブロック微量

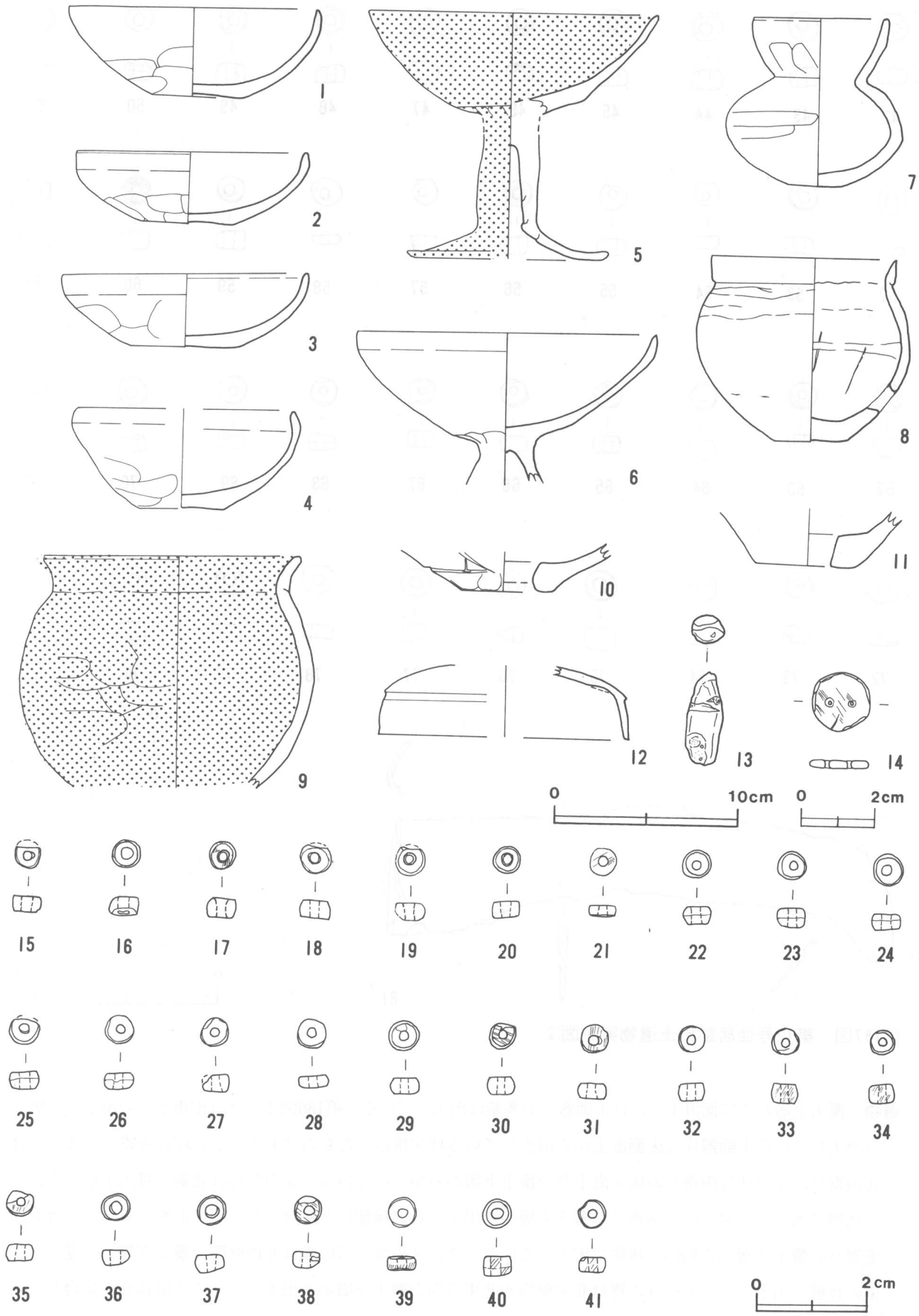
炉３土層解説
1　褐色　焼土粒子・ローム小ブロック極微量
2　赤褐色　焼土中ブロック多量
3　褐色　ローム大ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は長径90cm，短径75cmの楕円形で，深さ41cmである。円筒形に掘り込まれ，底部はほぼ平坦である。

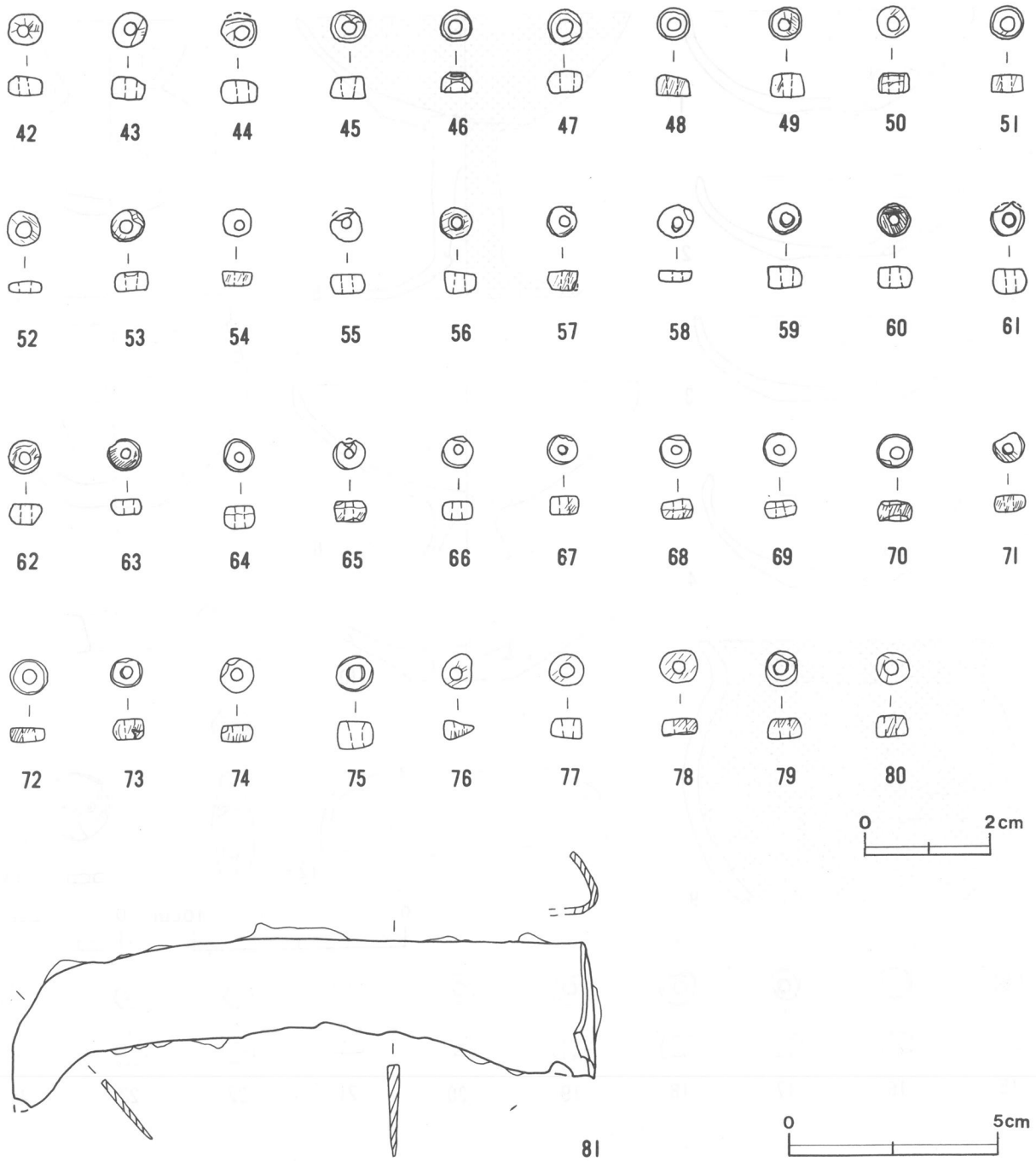
貯蔵穴土層解説
1　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　褐色　ローム小ブロック微量
3　褐色　ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子極微量
4　褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量

覆土　６層から成る。土層５の暗褐色土以外の各層は焼土粒子を含み，また，土層１の褐色土を除く各層には炭化物の混入がみられる。人為堆積と考えられる。

土層解説
1　褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，焼土粒子極微量
2　暗褐色　焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物極微量
3　褐色　焼土粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック少量，焼土小ブロック・炭化物極微量
4　黒褐色　焼土粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック極微量
5　暗褐色　ローム粒子少量，炭化物・ローム小ブロック極微量
6　褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量



第186図　第12号住居跡出土遺物実測図(1)



第187図　第12号住居跡出土遺物実測図(2)

遺物　覆土上層から床面直上にかけ土師器片が多量に出土している。第186図１の坏は南東寄りの覆土中　層から出土している土師器片と床面直上から出土している坏が接合したものである。２の坏は東寄り，３の坏は北西寄り，４の坏は南寄りの床面直上及び覆土下層から出土している。５の高坏は北側の覆土下層から正位の状態で出土したものが，南寄りの覆土下層から出土した口縁部片と接合したものである。６の高坏は北西壁寄りの覆土下層から斜位の状態で出土している。７，８の坩と広口壺は北西壁際の覆土下層から逆位と斜位の状態で出土している。９の甕は北東壁際や北東方向の覆土下層から出土している土師器片が接合したものである。11の甑は覆土下層から出土している甑片と床面直上から出土している土師器片が接合したもので，12の須恵器坏蓋は中央寄りの覆土下層から出土し接合したものである。15～80の臼玉は西コーナー寄りの床

面直上から，81の鉄鎌は北東寄りの床面直上から出土している。

所見　本跡は，当遺跡の同規模の住居跡と比較しても出土遺物や，使用頻度の高い炉を3基付設するなど内部施設の状況から，祭祀行為との関係が考えられる特殊な性格を持った住居跡と思われる。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第186図 1	坏 土師器	A 13.5 B 4.9 C 4.7	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は僅かに内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石 にぶい赤橙色 普通	P45 90% PL50 南東寄り覆土中層 内面剝離
2	坏 土師器	A 12.5 B 4.0 C 5.0	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ削り後ナデ，内面磨き。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石 にぶい橙色 普通	P46 85% PL50 東寄り覆土下層
3	坏 土師器	A 13.2 B 4.1 C 5.8	体部下位から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部外面に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。内・外面赤彩痕。	砂粒・石英・長石・雲母・パミス にぶい褐色 普通	P48 55% 北西寄り覆土下層
4	坏 土師器	A [11.6] B 5.4 C 4.6	体部中位から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。体部外面赤彩痕。	砂粒・石英・長石・雲母・スコリア 橙色 普通	P49 65% 南寄り床上直上及び覆土下層 体部外面研磨痕
5	高坏 土師器	A 15.8 B [13.4] D [10.9] E (6.9)	裾部及び口縁部一部欠損。脚部は柱状を呈し，裾部は下位で大きく開き端部は反る。坏部は下位に稜を持ち，外上方に開く。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ナデ。坏部外面及び脚部外面縦位のヘラナデ。裾部ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	P50 70% PL51 北側覆土下層
6	高坏 土師器	A 16.2 B (8.2)	坏部の破片。坏部下位に弱い稜を持ち，内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母・パミス にぶい黄橙色 普通	P51 50% 北西壁寄り覆土下層
7	坩 土師器	A 7.4 B 9.2 C 2.9	口縁部一部欠損。平底。体部はソロバン玉状を呈し，口縁部はやや内彎して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。底部ヘラ削り。口縁部内面赤彩痕。	砂粒・石英・長石・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P53 98% PL51 北西壁際覆土下層
8	広口壺 土師器	A [10.0] B 9.9 C 3.8	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，上位に最大径を持つ。口縁部は折り返しのある複合口縁となり，内削ぎ状に直立する。口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。体部内・外面輪積み痕。	砂粒・長石 浅黄橙色 普通	P54 90% PL51 北西壁際覆土下層
9	小形甕 土師器	A 14.0 B (12.5)	体部中位から底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり，頸部は括れ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・パミス にぶい褐色 やや不良	P55 50% PL50 北東壁際及び北東の覆土下層 二次焼成
10	甑 土師器	B (2.1) C 4.9	底部から体部下位の破片。やや平底気味の無底式。底部に単孔が穿たれ，体部は外上方に立ち上がる。	体部外面雑なヘラ削り，内面ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P56 5% 覆土中 底部外面研磨痕
11	甑 土師器	B (2.7) C 5.3	底部の破片。平底。底部に単孔が穿たれている。	底部内・外面ナデ。	砂粒・石英・スコリア・パミス 浅黄橙色 普通	P57 5% 覆土下層
12	坏蓋 須恵器	A [13.6] B (3.8)	天井部から口縁部にかけての破片。天井部下位は緩やかに内彎し，外面に明瞭な稜を持つ。口縁部はやや内傾し，端部は平坦な面を成す。	巻き上げ，横ナデ整形。内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 不良	P58 15% 中央寄り覆土下層

図版番号	種別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	孔径				
第186図13	不明土製品	3.3	1.2	1.2	—	2.7	100	覆土中	DP19

図版番号	種　別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第186図14	双孔円板	—	2.1	0.3	0.15	2.9	100	片岩	床面直上	Q5
15	臼　玉	(0.4)	0.5	0.4	0.2	(0.1)	80	片岩	床面直上	Q6
16	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	床面直上	Q7
17	臼　玉	0.4	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q8
18	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q9
19	臼　玉	(0.4)	0.5	0.3	0.2	(0.1)	80	片岩	床面直上	Q10
20	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q11
21	臼　玉	0.5	0.5	0.2	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q12
22	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q13
23	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q14
24	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q15
25	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q16
26	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q17
27	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.1	(0.1)	98	片岩	床面直上	Q18
28	臼　玉	0.5	0.5	0.2	0.15	0.1	100	片岩	床面直上	Q19
29	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	(0.1)	98	片岩	床面直上	Q20
30	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.15	(0.1)	85	片岩	床面直上	Q21
31	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.15	0.1	100	片岩	床面直上	Q22
32	臼　玉	0.5	0.5	0.35	0.15	(0.1)	95	片岩	床面直上	Q23
33	臼　玉	0.5	0.5	0.35	0.15	0.1	100	片岩	床面直上	Q24
34	臼　玉	0.45	0.45	0.3	0.15	0.1	100	片岩	床面直上	Q25
35	臼　玉	0.45	0.5	0.3	0.15	(0.1)	85	片岩	床面直上	Q26
36	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q27
37	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	(0.1)	70	片岩	床面直上	Q28
38	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	(0.1)	98	片岩	床面直上	Q29
39	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q30
40	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	床面直上	Q31
41	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q32
第187図42	臼　玉	0.5	0.5	0.4	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q33
43	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q34
44	臼　玉	(0.5)	0.6	0.3	0.2	(0.1)	70	片岩	床面直上	Q35
45	臼　玉	(0.5)	0.5	0.4	0.2	(0.1)	85	片岩	床面直上	Q36
46	臼　玉	0.5	0.5	0.4	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q37
47	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q38
48	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q39
49	臼　玉	0.5	0.5	0.4	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q40
50	臼　玉	0.5	0.3	0.2	0.1	0.1	50	片岩	床面直上	Q41
51	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q42
52	臼　玉	0.5	0.5	0.2	0.2	0.05	100	片岩	床面直上	Q43
53	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	床面直上	Q44
54	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.15	0.1	100	片岩	床面直上	Q45
55	臼　玉	(0.45)	0.5	0.3	0.15	(0.1)	60	片岩	床面直上	Q46
56	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.15	0.1	100	片岩	床面直上	Q47
57	臼　玉	(0.4)	(0.45)	0.3	0.15	(0.1)	70	片岩	床面直上	Q48
58	臼　玉	0.5	0.5	0.2	0.2	0.05	100	片岩	床面直上	Q49
59	臼　玉	0.5	0.5	0.4	0.2	(0.1)	65	片岩	床面直上	Q50
60	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q51

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
61	臼　玉	0.5	(0.5)	0.4	0.2	(0.1)	65	片岩	床面直上	Q52
62	臼　玉	0.5	0.5	(0.3)	0.2	(0.1)	75	片岩	床面直上	Q53
63	臼　玉	(0.5)	0.5	0.2	0.2	(0.1)	95	片岩	床面直上	Q54
64	臼　玉	0.5	0.5	0.4	0.15	0.2	100	片岩	床面直上	Q55
65	臼　玉	(0.4)	0.5	0.3	0.15	(0.1)	95	片岩	床面直上	Q56
66	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.15	0.1	100	片岩	床面直上	Q57
67	臼　玉	0.45	0.45	0.3	0.15	0.1	100	片岩	床面直上	Q58
68	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.15	0.1	100	片岩	床面直上	Q59
69	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.15	0.1	100	片岩	床面直上	Q60
70	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	(0.1)	70	滑石	床面直上	Q61
71	臼　玉	0.5	(0.5)	0.3	0.2	(0.1)	70	滑石	床面直上	Q62
72	臼　玉	0.5	0.5	0.2	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q63
73	臼　玉	(0.5)	0.5	0.3	0.2	(0.1)	80	片岩	床面直上	Q64
74	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	(0.1)	90	滑石	床面直上	Q65
75	臼　玉	0.5	0.5	0.4	0.2	0.2	100	片岩	床面直上	Q66
76	臼　玉	(0.5)	(0.4)	0.3	0.2	(0.1)	50	片岩	床面直上	Q67
77	臼　玉	(0.5)	0.5	0.35	0.2	(0.1)	90	滑石	床面直上	Q68
78	臼　玉	0.5	0.5	0.2	0.2	0.1	100	滑石	床面直上	Q69
79	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q70
80	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	床面直上	Q71

図版番号	種　別	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚				
第187図81	鎌	(18.3)	4.3	0.4	250.0	90	北東寄り床面直上	M1　PL55

第13号住居跡（第188図）

位置　調査区の南西部，$F4_{h4}$区。

規模と平面形　長軸6.38m，短軸6.16mの方形。

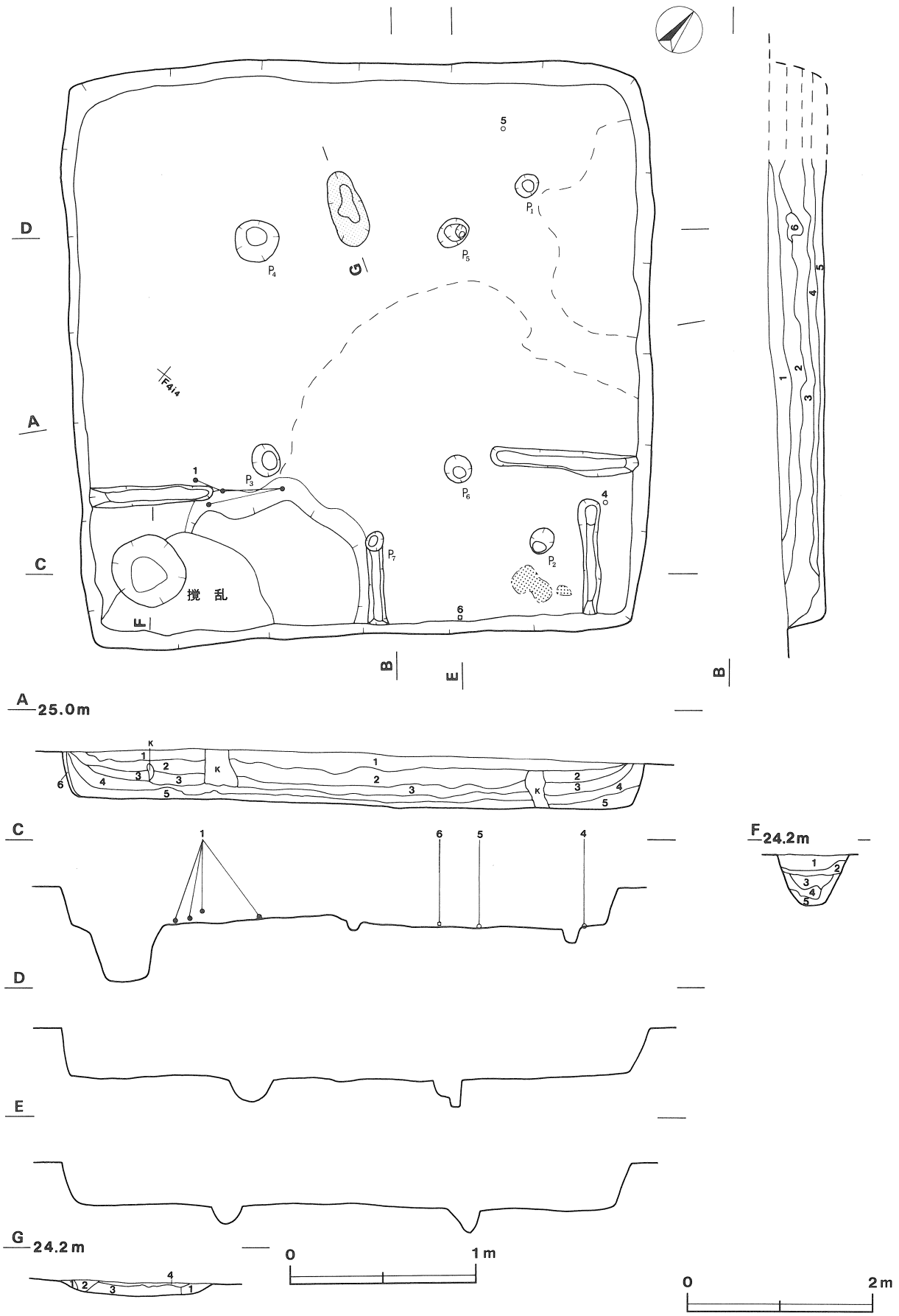
主軸方向　N—40°—E

壁　壁高は35～64cmで，外傾して立ち上がる。

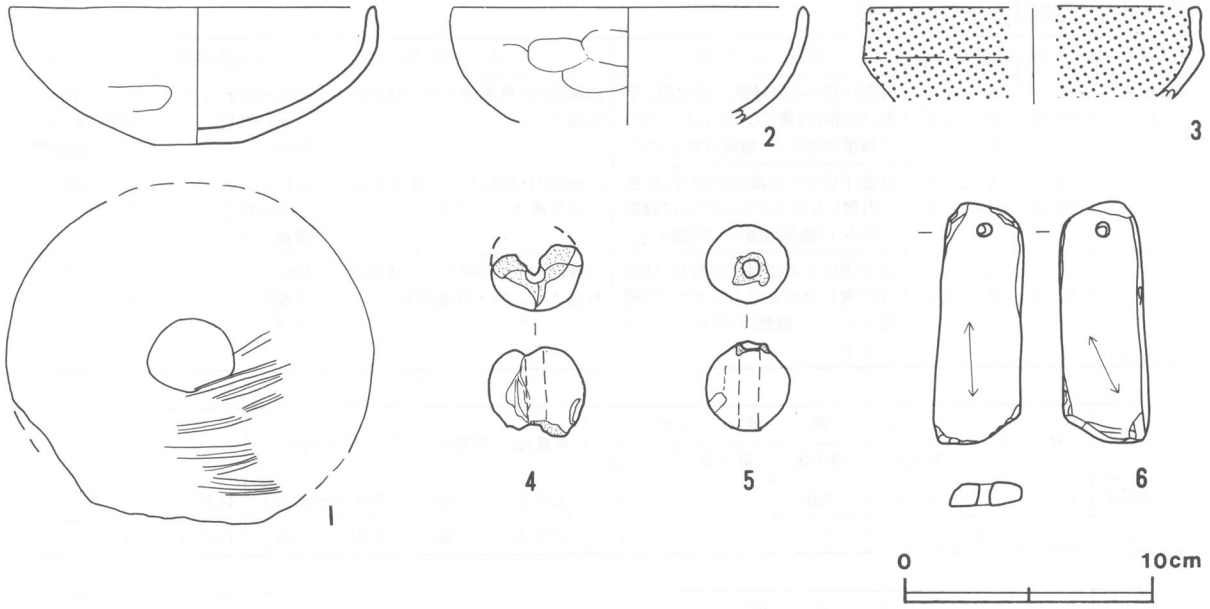
間仕切り溝　北東壁から１条，南東壁から２条，南西壁から１条それぞれ中央付近に向かって伸びている。幅15～28cm，深さは10～12cmで，断面はU字形ないし逆台形である。

床　平坦である。南コーナー付近から南東壁に沿って高さ７～８cmの不定形の高まりがみられ，出入口に伴う施設と考えられる。踏み固められた堅緻な部分は住居の東側全体にみられる。南コーナー付近は木根による撹乱を受けている。

ピット　７か所（P_1～P_7）。P_1～P_4は長径25～50cm，短径20～45cmの楕円形または不整楕円形で，深さは26～49cmである。何れも各コーナーからやや中央寄りに付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は長径35cm，短径30cmの楕円形，P_6は径30cmの円形である。それぞれ深さは20～27cmで，P_1，P_2からさらに中央中心部に向かって付設され，規模や位置から主柱穴の補助的な性格をもつものと考えられる。P_7は南東壁からやや中央寄りの間仕切り溝突端に接して付設され，長径22cm，短径16cmの不整楕円形で，深さは22cmである。規模や位置から出入口に伴うピットと考えられる。



第188図　第13号住居跡実測図



第189図　第13号住居跡出土遺物実測図

炉　北西壁から中央寄りに付設され，長径82cm，短径35cmで，床面を8cm掘り窪めた長楕円形の地床炉である。覆土下層から上層には暗褐色土が堆積し，その周りに褐色土が堆積している。各層とも焼土粒子及び炭化粒子を含み，炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

1　褐　色　焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子極微量
2　暗褐色　焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子極微量
3　暗褐色　焼土粒子中量，炭化粒子少量，ローム粒子微量
4　暗褐色　焼土粒子中量，炭化粒子少量

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は長軸77cm，短軸72cmの隅丸方形で，深さは55cmである。断面はU字形で，底部は皿状である。東側半分は根による撹乱を受けている。

貯蔵穴土層解説

1　暗褐色　ローム粒子微量，焼土粒子・炭化粒子極微量
2　暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック微量
3　暗褐色　ローム小ブロック少量，焼土粒子・ローム粒子微量，焼土小ブロック極微量
4　暗褐色　焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子微量，ローム小ブロック極微量
5　褐　色　ローム粒子少量

覆土　6層から成る。各層の堆積土には，土層2の極暗褐色土を除いてロームブロックの混入がみられるが，土層の乱れが殆どみられずレンズ状の堆積を成していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック少量，炭化物・ローム粒子極微量
2　極暗褐色　焼土小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物極微量
3　暗褐色　ローム粒子中量，炭化物・ローム小ブロック少量
4　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化物極微量
5　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子極微量
6　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物　覆土下層から床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第189図1の坏は南側の覆土下層及び床面直上から出土した土師器片が接合したものである。4・5の土玉は東寄りと北寄りの床面直上から出土し，6の砥石は南東壁際の床面直上から横位の状態で出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第189図 1	坏 土師器	A 14.6 B 5.5 C 3.1	体部中位から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P40 70% 南側覆土下層 二次焼成 体部外面研磨痕
2	坏 土師器	A [14.0] B (4.6)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は僅かに内傾する。	口縁部内・外面ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P59 10% 覆土中
3	坏 土師器	A [13.3] B (3.7)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は内傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・パミス 赤褐色 普通	P60 5% 覆土中

図版番号	種　別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径				
第189図 4	土　玉	(3.5)	3.6	—	0.8	(24.8)	60	東寄り床面直上	DP13 PL55
5	土　玉	(3.5)	3.3	—	0.7	(31.2)	98	北寄り床面直上	DP14 PL55

図版番号	種　別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第189図 6	砥　石	(9.7)	(3.5)	1.9	0.5	78.9	不明	砂岩	南東壁際床面直上	Q72 PL55

第14号住居跡（第190図）

位置　調査区の南東部，F5$_{h4}$区。

規模と平面形　長軸6.06m，短軸5.92mの方形。

主軸方向　N－62°－W

壁　壁高は30～42cmで，垂直に立ち上がる。

間仕切り溝　北東壁から１条，南西壁から２条それぞれ中央付近に向かって伸びている。幅17～23cm，深さは８～10cmで，断面はU字形である。

床　ほぼ平坦で，南東壁沿いの一部を除いて全体が踏み固められ，堅緻である。

ピット　５か所（P_1～P_5）。P_1～P_4は長径25～33cm，短径22～26cmの楕円形または不整楕円形で，深さは75～88cmである。何れも各コーナーからやや中央寄りに付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は長径32cm，短径25cmの楕円形で，規模や位置から出入口に伴うピットと考えられる。

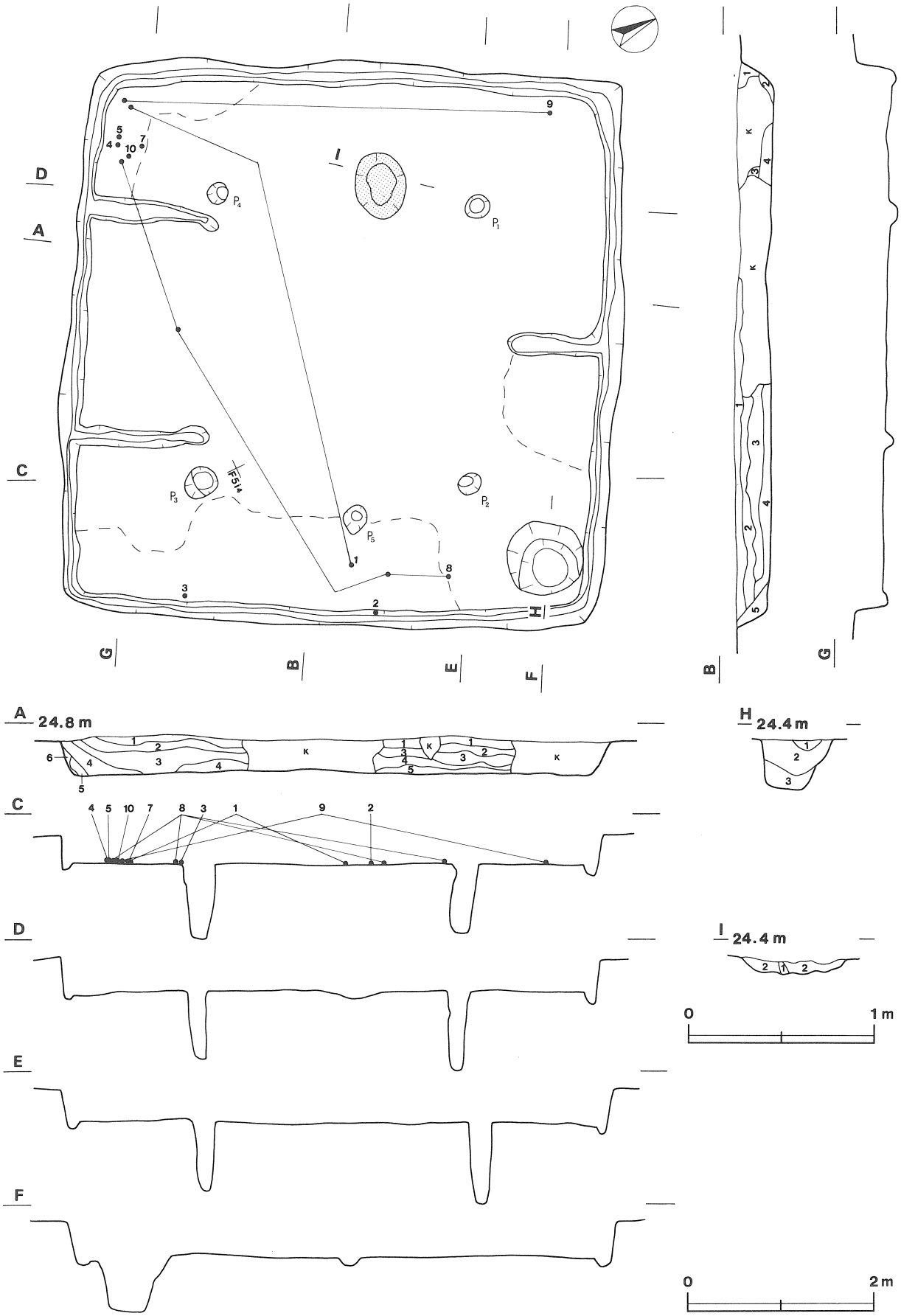
炉　中央から北西壁寄りに付設され，長径70cm，短径55cmの不整楕円形で，床面を７cm掘り窪めた地床炉である。焼土ブロックを含む赤褐色土が覆土の大部分を占め，炉の中央部覆土下層から上層にかけ褐色土が帯状に堆積している。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説
1　褐　色　焼土粒子少量，ローム小ブロック・ローム粒子極微量　2　赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量

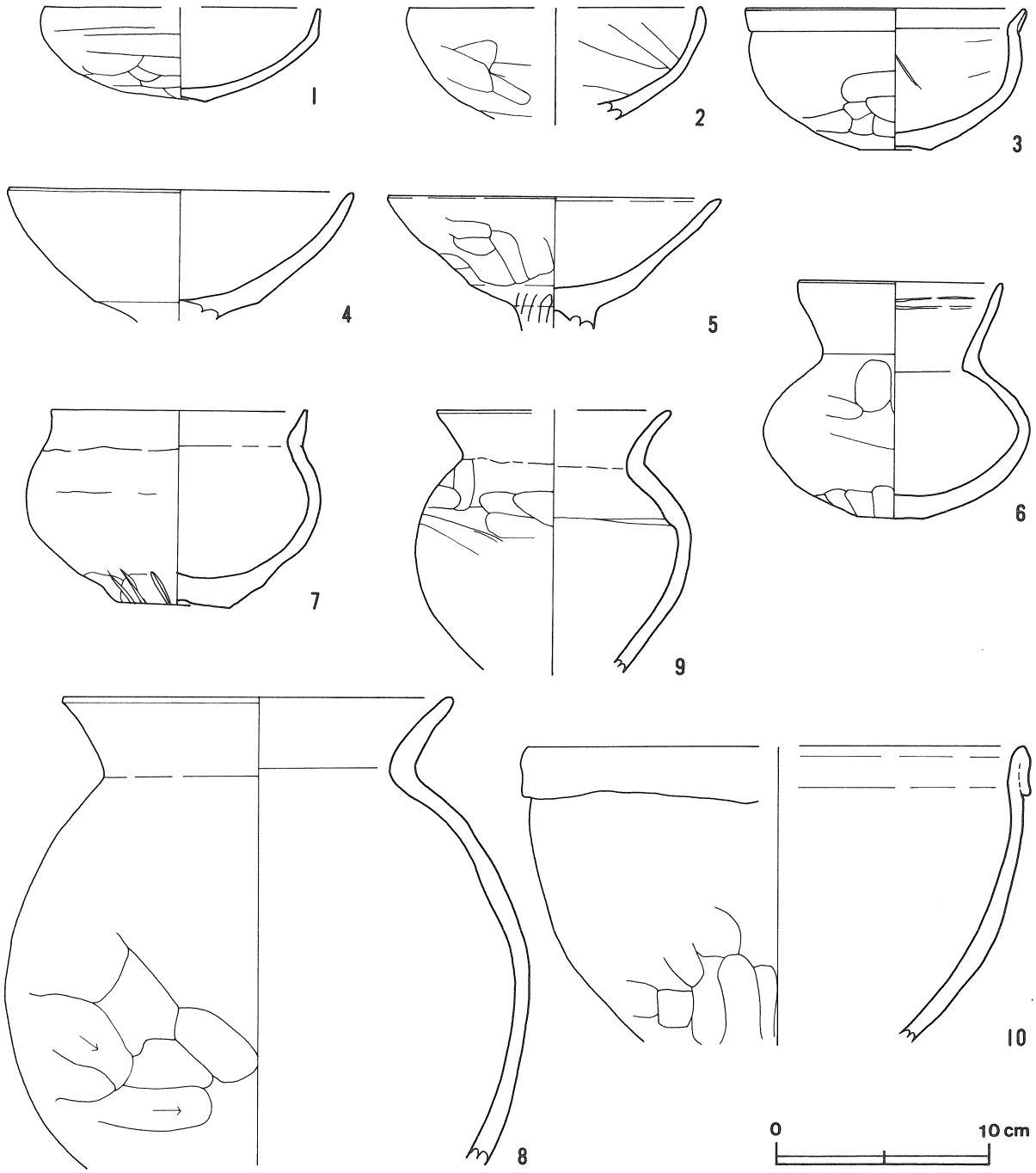
貯蔵穴　東コーナー付近に付設され，平面形は長軸80cm，短軸75cmの隅丸方形で，深さ61cmである。断面形はU字形で，底部は皿状である。北西壁上部に張り出しがみられる。

貯蔵穴土層解説
1　暗褐色　ローム中ブロック・ローム粒子微量
2　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
3　暗褐色　ローム粒子・粘土粒子少量

覆土　６層から成る。南東壁付近はロームブロックを含む暗褐色土が人為的に埋め戻され，その他の部分は堆



第190図　第14号住居跡実測図



第191図　第14号住居跡出土遺物実測図

積状況が乱れておらず，自然堆積と考えられる。木根による撹乱を受けている。

土層解説

1	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量	4	黒褐色	炭化物・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子極微量
2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化物・ローム中ブロック少量，焼土粒子極微量	5	極暗褐色	炭化物少量，ローム小ブロック・ローム粒子微量
3	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物極微量	6	褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

遺物　西コーナー付近の床面直上及び南東壁寄りから土師器片が中量出土している。第191図1の坏と8の甕は共に，西コーナー付近と南東壁寄りの床面直上から出土したものが接合し，9の小形甕は西コーナーと北コーナー付近の床面直上から出土したものが接合したもので，それぞれ意図的に投棄されたものとおもわれる。

3の椀は南東壁寄りの床面直上から正位の状態で出土している。4・5の高坏は西コーナー寄りの床面直上から坏部を正位に重ねた状態で出土し，7の壺と10の甑は高坏に接する状態で出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から，隣接する第15号住居跡と時期的に重なると思われる部分があるが，建物構造上と出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第191図 1	坏 土師器	A 12.3 B 4.2 C 3.4	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P61 60% PL51 西コーナー付近床面直上
2	坏 土師器	A [13.5] B (5.3)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は僅かに内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面斜位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石 にぶい橙色 普通	P62 35% 覆土中 二次焼成
3	椀 土師器	A 14.1 B 6.6 C 3.3	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は折り返しのある複合口縁で，内面に稜を持ち，外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。体部外面赤彩痕。	砂粒・石英・長石・スコリア 橙色 普通	P63 95% PL51 南東壁寄り床面直上
4	高坏 土師器	A 16.2 B (6.0)	坏部片。下位に稜を持ち，外上方にやや内傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面ヘラ磨き。坏部外面赤彩痕。	砂粒・長石・スコリア・パミス 黒褐色 普通	P64 50% 西コーナー寄り床面直上 二次焼成
5	高坏 土師器	A 15.4 B (6.2)	坏部片。外面下位に弱い稜を持ち，外上方に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラナデ，内面磨き。	砂粒・石英・長石・雲母・パミス にぶい橙色 普通	P65 50% 西コーナー寄り床面直上 二次焼成
6	坩 土師器	A 9.7 B 11.1 C 3.1	体部中位一部欠損。平底。体部はソロバン玉状を呈し，頸部は括れ，外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・石英・長石 にぶい黄橙色 普通	P66 75% PL51 覆土中 二次焼成
7	壺 土師器	A 12.0 B 9.2 C 5.2	体部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，上位で内彎し，頸部に至る。口縁部は内削ぎ状にやや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面雑なヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。口縁部外面接合痕。	砂粒・長石・雲母 黒褐色 不良	P67 60% 西コーナー寄り床面直上 二次焼成
8	甕 土師器	A 18.1 B (21.6)	体部下位及び口縁部一部欠損。体部は球形状を呈する。口縁部は頸部から「く」の字状に外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面縦位のヘラナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P68 50% PL52 南東壁寄り床面直上 二次焼成
9	小形甕 土師器	A [10.8] B (12.3)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。体部上位に最大径を持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ナデ。	砂粒・長石・パミス にぶい橙色 普通	P69 40% 西コーナー及び北コーナー付近床面直上
10	甑 土師器	A [25.2] B (13.7)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は折り返しのある複合口縁となる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面雑なヘラ削り，内面ナデ。	砂粒・石英・雲母・スコリア・パミス にぶい黄橙色 普通	P70 25% 西コーナー寄り床面直上

第15号住居跡（第192図）

位置　調査区の南東部，F5$_{g3}$区。

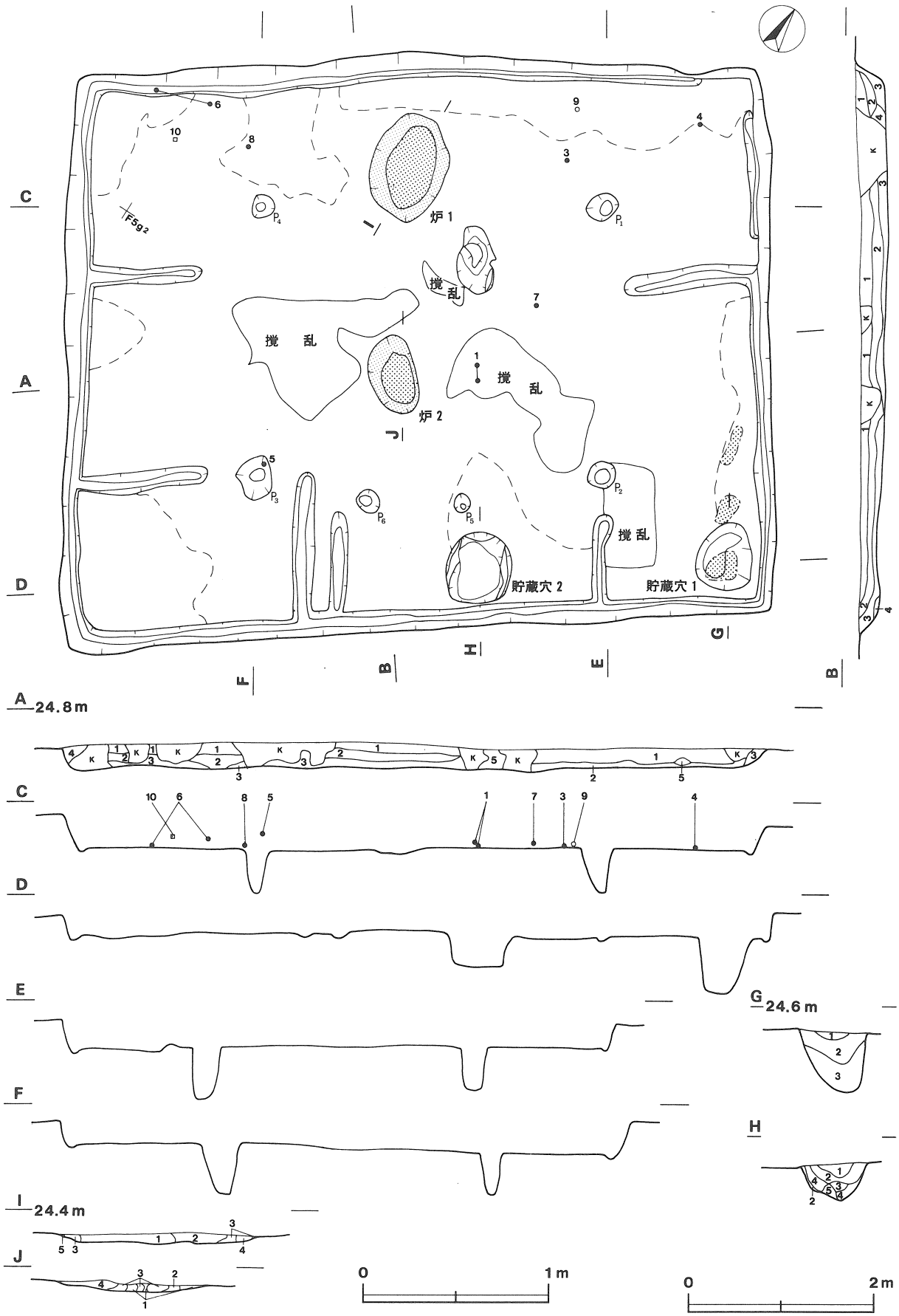
規模と平面形　長軸7.74m，短軸6.18mの長方形。

主軸方向　N－54°－E

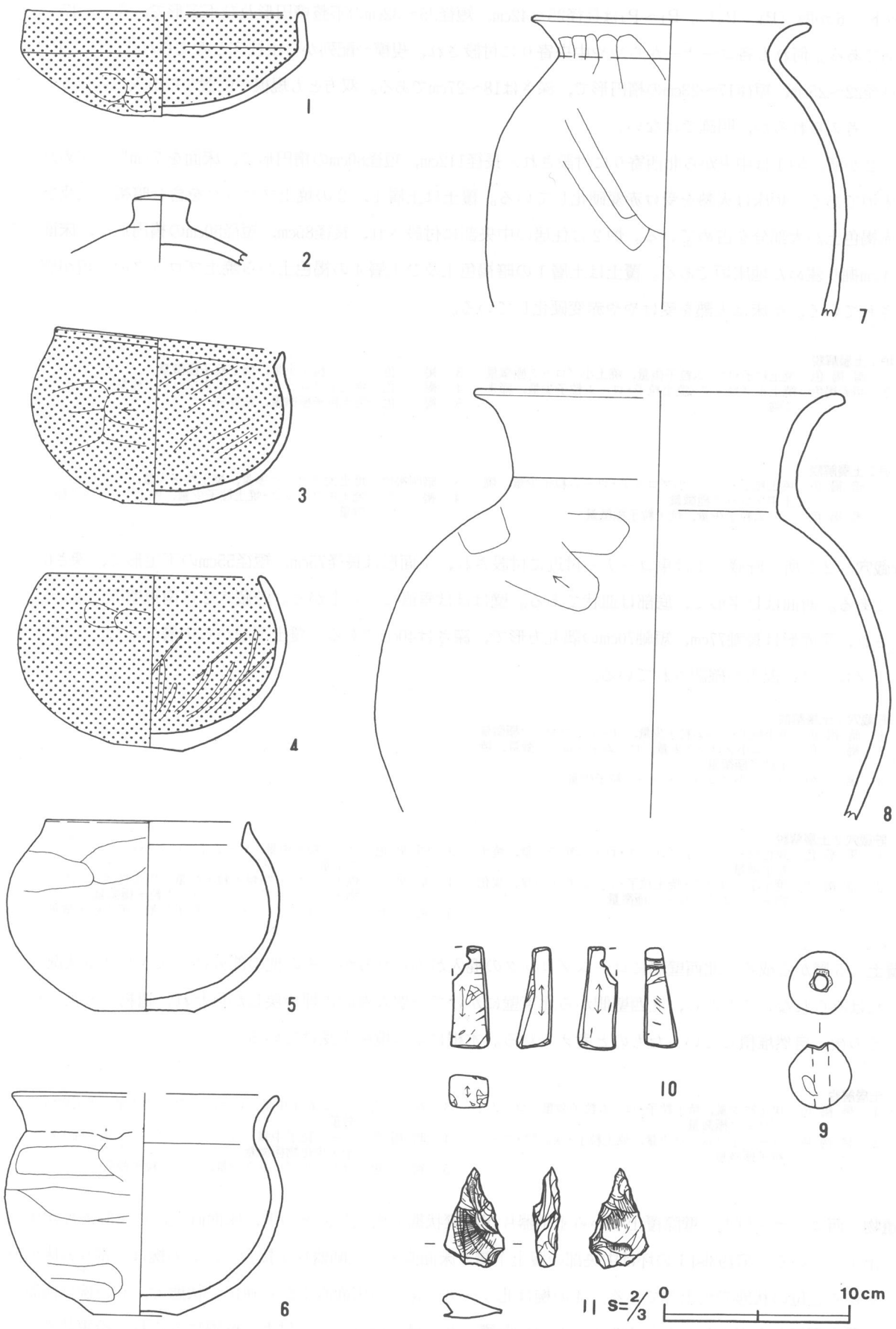
壁　壁高は20～37cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

間仕切り溝　北東壁から1条，南東壁から3条，南西壁から2条それぞれ中央付近に向かって伸びている。幅15～25cm，深さは3～12cmで，断面はU字形及び逆台形である。

床　ほぼ平坦で，各コーナー付近や壁沿いの一部を除いて全体が踏み固められ，堅緻である。中央付近は木根による撹乱を受けている。



第192図　第15号住居跡実測図



第193図　第15号住居跡出土遺物実測図

ピット　6か所（P_1～P_6）。P_1～P_4は長径25～42cm，短径25～32cmの不整楕円形及び不定形で，深さは47～58cmである。何れも各コーナーからやや中央寄りに付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5，P_6は長径22～25cm，短径17～23cmの楕円形で，深さは18～27cmである。双方とも規模や位置から出入口に伴うピットと考えられるが，明確ではない。

炉　2か所。炉1は中央から北西寄りに付設され，長径112cm，短径80cmの楕円形で，床面を7cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受け赤変硬化している。覆土は土層1，2の焼土ブロックを含む暗褐色土及び明赤褐色土が大部分を占めている。炉2は住居の中央部に付設され，長径85cm，短径50cmの楕円形で，床面を4cm掘り窪めた地床炉である。覆土は土層1の暗褐色土及び土層4の褐色土から焼土ブロックの堆積が確認されている。炉床は火熱を受けやや赤変硬化している。

炉1土層解説

1	暗褐色	焼土粒子・ローム粒子微量，焼土小ブロック極微量
2	明赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量，締まり強
3	褐色	ローム粒子少量，焼土粒子極微量
4	褐色	焼土小ブロック・ローム大ブロック極微量
5	褐色	焼土粒子極微量，粘性強

炉2土層解説

1	暗褐色	焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土中ブロック極微量
2	黒褐色	ローム粒子少量，焼土粒子極微量
3	暗明褐色	焼土大ブロック多量，焼土粒子少量，締まり強
4	褐色	焼土中ブロック・焼土粒子少量，焼土小ブロック極微量

貯蔵穴　2か所。貯蔵穴1は東コーナー付近に付設され，平面形は長径75cm，短径55cmの不定形で，深さ64cmである。断面はU字形で，底部は皿状である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。貯蔵穴2は南東壁際中央に付設され，平面形は長軸77cm，短軸70cmの隅丸方形で，深さは40cmである。覆土下層から中層の暗褐色土には焼土ブロックの混入が確認されている。

貯蔵穴1土層解説

1	暗褐色	焼土粒子・ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量
2	褐色	ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量，焼土粒子極微量
3	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量

貯蔵穴2土層解説

1	黒褐色	炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量
2	暗褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量，炭化物・ローム小ブロック極微量
3	明褐色	ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
4	暗褐色	焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化材微量，炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子極微量
5	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量

覆土　5層から成る。北西壁際にロームブロックの混入がみられるが，その他の部分には大きな堆積状況の乱れはみられないことから，北西壁側から北東壁にかけて一部人為的に埋め戻しが行われ，遺物が投棄され，その後，自然堆積していったものと考えられる。木根による撹乱を受けている。

土層解説

1	黒褐色	炭化物少量，焼土粒子・ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量
2	暗褐色	ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物・ローム粒子極微量
3	褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化物極微量
4	暗褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物極微量
5	褐色	ローム小ブロック少量，ローム粒子微量

遺物　西コーナー付近の壁際覆土中から土師器片が投棄状態で出土し，その他，床面直上から土師器片が中量出土している。第193図1の坏は中央部の覆土下層と床面直上の土師器片が接合し，3の椀は北寄りの床面直上から正位の状態で出土している。4の椀は北コーナー寄りの床面直上から逆位の状態で，5の椀は南寄りの覆土下層から出土したものである。6の小形甕，8の甕は西コーナー付近の壁際にみられる投棄状態の土師器片の中より出土しているものである。7の甕は覆土下層から押し潰された状態で出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から隣接する第14号住居跡と時期的に重なる部分がみられるが，建物構造上と出土遺物の前後関係から５世紀後半と考えられる。

第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第193図 1	坏 土師器	A［14.8］ B　5.5 C［4.0］	体部下位から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はやや内傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	P71　35% 中央部覆土下層
2	蓋 土師器	B（3.2） F　3.0 G（1.8）	天井部からつまみにかけての破片。天井部はわずかに内彎する。つまみ部は穏やかな宝珠状を呈する。	つまみ部ヘラナデ，側面ヘラナデ。天井部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・パミス にぶい橙色 普通	P72　5% 覆土中
3	椀 土師器	A　12.3 B　9.3 C　3.3	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は内削ぎ状に直立し，口唇部は尖る。内面に稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面磨き。底部ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石 明赤褐色 普通	P73　98% PL52 北寄り床面直上
4	椀 土師器	A　11.6 B　9.4 C　3.7	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。体部は潰れた球形状を呈する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面放射状のヘラ磨き。底部ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 赤橙色 普通	P74　98% PL52 北コーナー寄り床面直上 内・外面煤付着
5	椀 土師器	A　10.9 B　10.1 C　5.2	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部はやや内削ぎ状に直立し，口唇部はやや尖る。内面に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面丁寧なヘラナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・ 雲母・パミス 赤褐色 普通	P75　85% PL52 南寄り覆土下層 体部内・外面煤付着
6	小形甕 土師器	A［14.3］ B　11.9 C　4.5	体部下位から口縁部一部欠損。平底。体部は球形状を呈し，頸部はやや括れ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・雲母・パミス 黒褐色 普通	P77　60% 西コーナー付近壁際 二次焼成
7	甕 土師器	A　14.8 B　15.6	体部中位から口縁部の破片。体部は長胴を呈し，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面下位縦位のヘラナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 淡赤橙色 普通	P78　45% 覆土下層 二次焼成
8	甕 土師器	A［20.2］ B（22.8）	体部中位から口縁部の破片。体部は球形状を呈し，頸部は長頸状を呈し，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部及び体部内・外面ナデ。	砂粒・石英・長石 橙色 普通	P79　40% 覆土中

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径				
第193図9	土　玉	3.4	3.4	—	0.8	31.7	100	覆土中	DP15　PL55

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第193図10	砥　石	5.5	2.0	1.8	(0.4)	25.7	80	砂岩	覆土中	Q73
11	剝　片	2.6	1.5	0.6	—	15.5	100	黒曜石	覆土中	Q74

第16号住居跡（第194図）

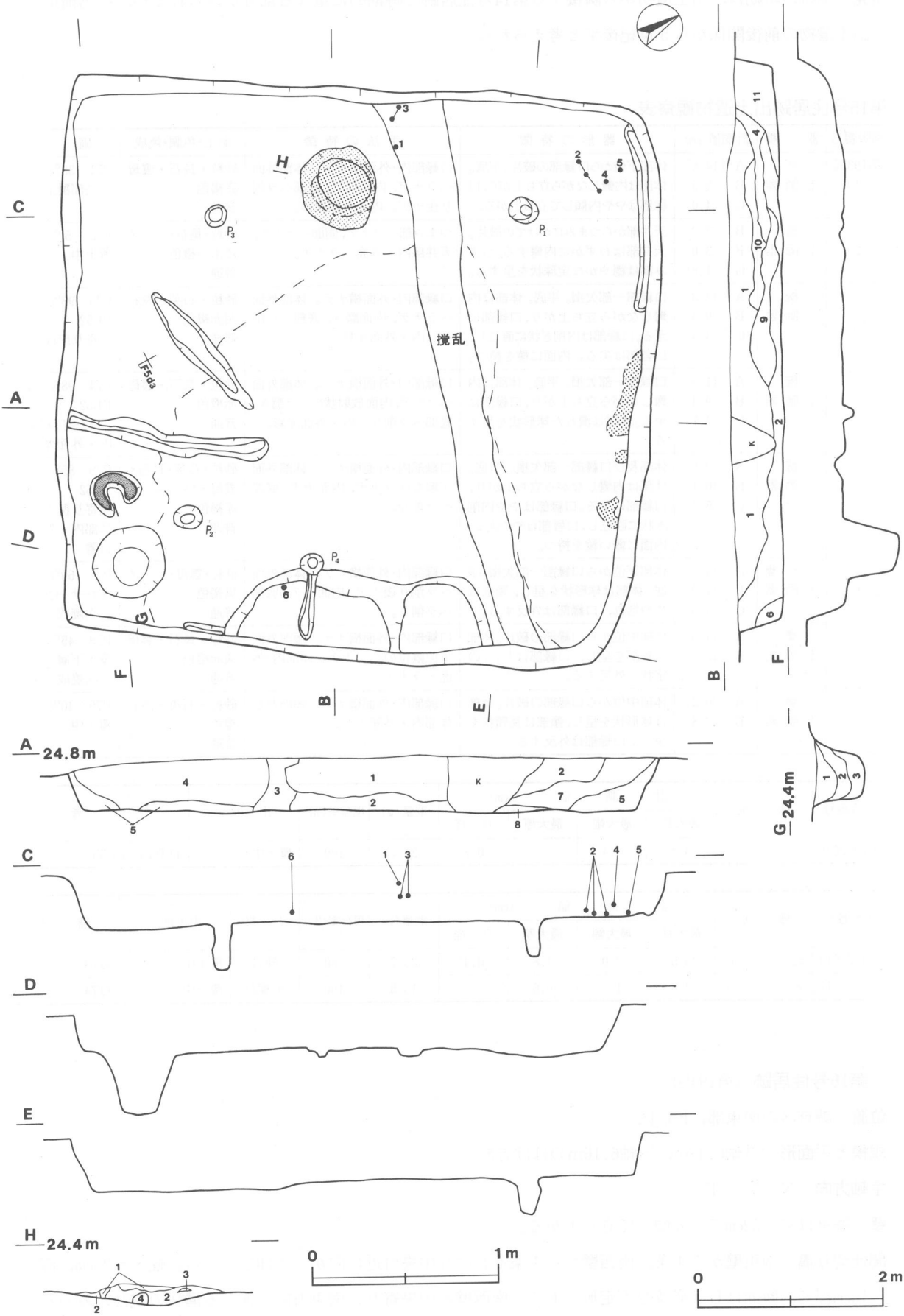
位置　調査区の南東部，F5c3区。

規模と平面形　長軸6.48m，短軸6.16mのほぼ方形。

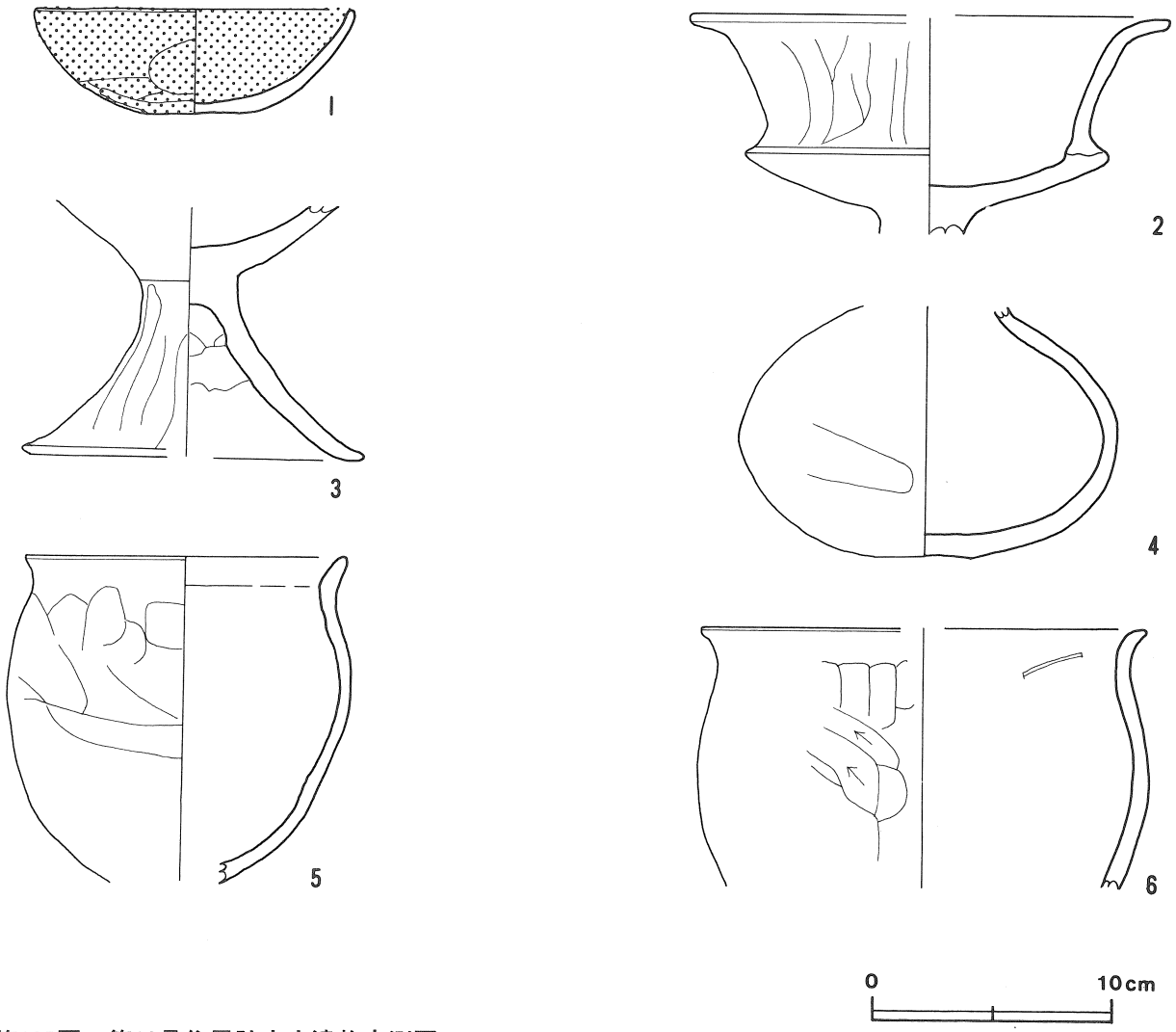
主軸方向　N—31°—E

壁　壁高は37～52cmで，外傾して立ち上がる。

間仕切り溝　南東壁から１条，南西壁から１条それぞれ中央付近に向かって伸びている。幅８～27cm，深さは10cm程で，断面はU字形及び不定形である。南西壁の中央寄りに南東方向に伸びる溝状の撹乱がみられる。床中央部はほぼ平坦であるが，南西部には部分的に凹凸がみられる。中央部から南東部を除いて踏み固めら



第194図　第16号住居跡実測図



第195図　第16号住居跡出土遺物実測図

れ，堅緻になっている。また，南東壁際には長さ290cm，幅80cm，高さ５～７cmの高まりと，南コーナーからやや西側に馬蹄形の粘土貼りがみられる。北西壁中央部付近から南東壁東部にかけて幅45cmの根切り溝による撹乱を受けている。

ピット　４か所（P_1～P_4）。P_1，P_3は径23～25cmの円形で，P_2は長径32cm，短径25cmの不整楕円形である。深さはそれぞれ35～40cmである。P_1～P_3はコーナーからやや中央寄りに付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_4は南東壁中央部から伸びる間仕切り溝の突端に付設され，径24cmの円形で，深さは10cmである。規模や位置から出入口に伴うピットと考えられる。

炉　北西壁からやや中央寄りに付設され，長径95cm，短径70cmの不定形で，床面を10cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土は焼土ブロックを含む暗赤褐色土が厚く堆積し，炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

1　暗赤褐色	焼土粒子・炭化物中量，焼土中ブロック・焼土小ブロック・ローム粒子少量	3　にぶい赤褐色	焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化物・ローム粒子極微量
2　暗赤褐色	焼土粒子中量，焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物少量，ローム粒子極微量	4　褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は径78cmの円形で，深さは50cmである。円筒状に掘り込まれ，底部は皿状である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

貯蔵穴土層解説

1　暗褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量
2　褐　　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，炭化物極微量
3　明褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

覆土　11層から成る。南西側に焼土粒子混じりの極暗褐色土が厚く堆積しているが，その他は黒褐色土及び暗褐色土が覆土の大部分を占めて厚く堆積している。特に，北西側の一部には他の部分と比べて堆積状況の乱れが顕著にみられることから，北西壁際から埋め戻しが人為的に行われていったものと考えられる。

土層解説

1　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量
2　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック極微量
3　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量
4　極暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子極微量
5　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子極微量
6　暗褐色　ローム粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック極微量
7　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子極微量
8　褐　　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック極微量
9　黒褐色　ローム粒子少量
10　暗赤褐色　ローム粒子少量，炭化粒子極微量
11　極暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック極微量

遺物　覆土上層から床面直上にかけ土師器片が中量出土している。第195図1の坏は北西壁際の覆土上層から正位の状態で，3の高坏は，ほぼ同位置の覆土中層から出土している土師器片が接合している。2の高坏は坏部が正位の状態で出土し，他の坏部片と接合したもので，4の坩は正位の状態で，5の小形甕は斜位の状態でそれぞれ北コーナーの覆土下層から集中して出土している。6の甕は南東付近の覆土下層から出土している。

所見　本跡の床面にみられた馬蹄形の粘土貼りは，その形状から柱等のものを補強する目的を持っていたのではないかとも考えられる。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第16号住居跡出土遺物観察表

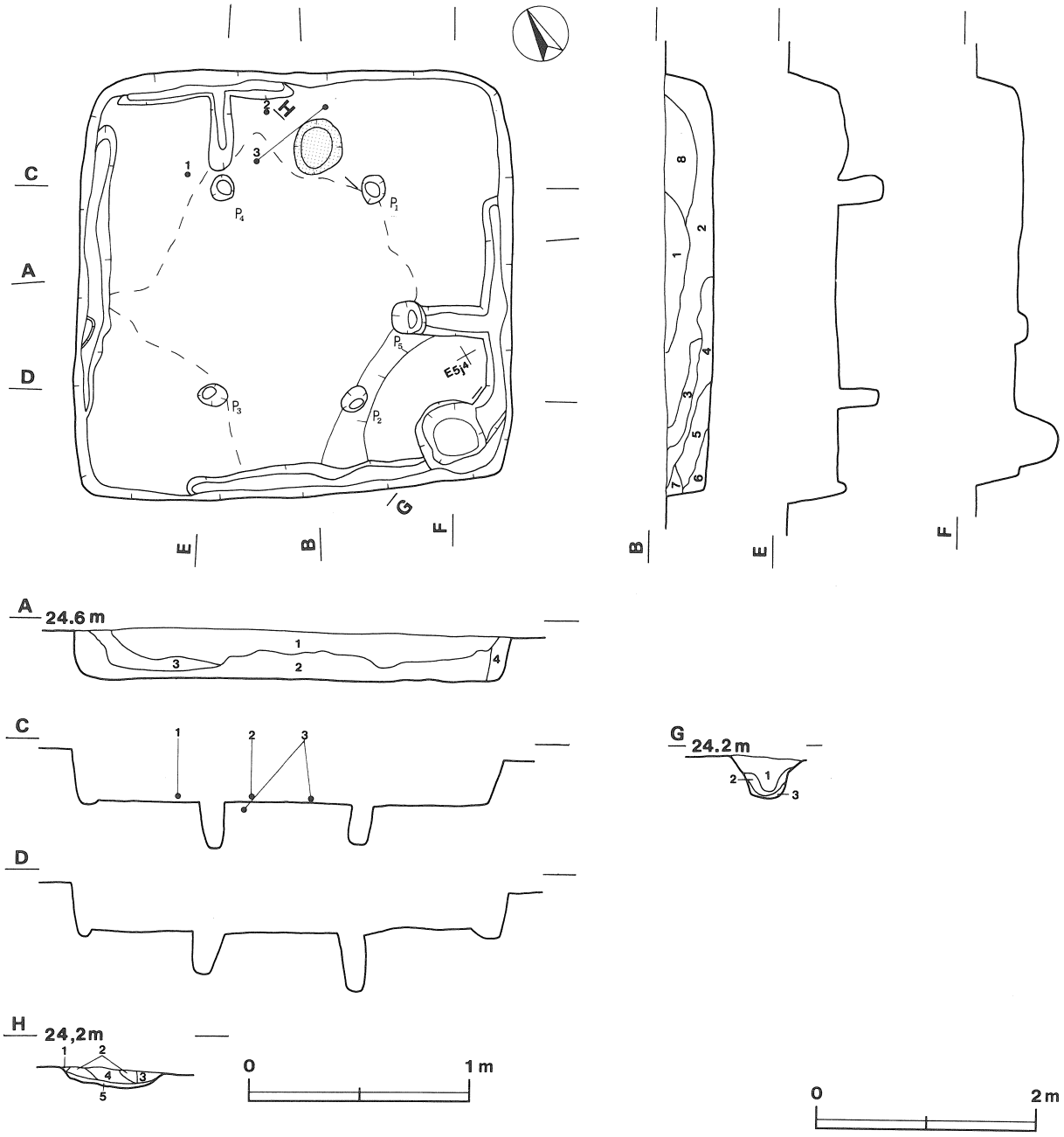
図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第195図 1	坏 土師器	A　13.3 B　4.3 C　3.4	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ナデ。底部ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石・スコリア・パミス にぶい橙色 普通	P80　90% 北西壁際覆土上層 二次焼成
2	高　坏 土師器	A　20.0 B（9.0）	坏部の破片。坏部下位に張り出しのある段を持ち，口縁部は外上方に立ち上がり，口唇部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面縦位のヘラ削り，内面ナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P81　40% 北コーナー覆土下層 二次焼成
3	高　坏 土師器	B（10.6） D［13.7］ E　7.3	坏部下位から裾部の破片。脚部から裾部にかけてラッパ状に大きく開く。坏部下位に弱い稜を持つ。	坏部下位外面ヘラ削り，内面ナデ。脚部外面縦位のヘラ削り後ナデ。裾部内・外面横ナデ。脚部内面輪積み痕。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P82　40% 北西壁際覆土中層
4	坩 土師器	B（10.4） C　3.8	口縁部欠損。平底。体部は潰れた球形状を呈する。	体部内・外面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・石英・スコリア にぶい黄橙色 普通	P83　80% PL52 北コーナー覆土下層 二次焼成
5	小形甕 土師器	A　13.3 B（13.6）	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり，頸部は括れ，口縁部はやや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P84　90% PL52 北コーナー覆土下層 二次焼成
6	甕 土師器	A［18.6］ B（10.7）	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面中位横ナデ，下位縦位のヘラナデ。体部外面ヘラ削り，内面ナデ。	砂粒・長石・スコリア 黒褐色 普通	P85　10% 南東付近覆土下層

第17号住居跡（第196図）

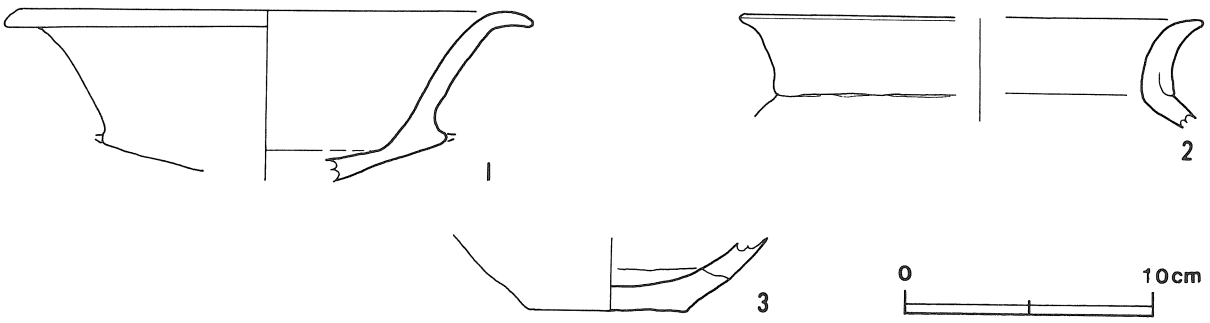
位置　調査区の南東部，E5i4区。

規模と平面形　長軸4.00m，短軸3.84mの方形。

主軸方向　N—63°—W



第196図　第17号住居跡実測図



第197図　第17号住居跡出土遺物実測図

壁　壁高は30～47cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝　東コーナー，西コーナー及び北コーナー付近の一部を除き，全周状態で巡っている。上幅10～25cm，深さ５～８cmで，断面形はほぼU字形である。

間仕切り溝　北東壁から１条，南東壁から１条それぞれ中央に向って伸びているが，南東壁の１条については梯子ピットに接しているところから，本来の間仕切り溝としての機能を持っていたかは不明である。

床　ほぼ平坦で，中央付近に踏み締まって硬化した部分がみられる。また，東コーナー付近には扇状に硬化した高まりがみられ，出入口として使用され踏み締まったものと考えられる。

ピット　５か所（P_1～P_5）。P_1～P_4は長径25～27cm，短径18～23cmの楕円形または不整楕円形で，深さは35～40cmである。各コーナーから，やや内側に入った所に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は長径30cm，短径25cmの楕円形で，東コーナーからやや北東付近に付設されている。規模や位置及び周辺の床面の高まりから梯子ピットと考えられる。

貯蔵穴　南コーナーに付設され，平面形は長・短径とも55cmの不整円形で，深さ38cmである。断面はほぼU字形を呈している。

貯蔵穴土層解説
1　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，焼土粒子極微量
2　明 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物微量，ローム中ブロック極微量
3　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

炉　中央から北東壁寄りに付設され，平面形は長径55cm，短径45cmの楕円形で，床面を19cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土は焼土ブロック，焼土粒子を含む褐色土及び暗褐色土が堆積しているが，長期間使用されたような焼土のブロックの固まりはあまりみられない。

炉土層解説
1　褐　　色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・炭化物極微量
2　褐　　色　焼土粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック・炭化物極微量
3　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物極微量
4　褐　　色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子中量，炭化物・ローム小ブロック極微量
5　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土中ブロック・焼土小ブロック中量

覆土　８層から成る。土層７を除く各層にはロームブロックが混入し，各層は南西壁から北東壁に向かって傾斜し，斜位の状態で堆積している。人為堆積と思われる。

土層解説
1　黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　褐　　色　ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　褐　　色　焼土粒子・ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
4　暗 褐 色　炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
5　黒 褐 色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子少量
6　暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量
7　褐　　色　ローム粒子少量，粘性強
8　黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物　覆土下層から床面直上にかけ土師器片が少量出土している。第197図１～３は共に北東付近の覆土下層から出土したもので，１の高坏は坏部を逆位の状態で，２の甕は正位の状態で上部から押し潰された状態で，３の甕は底部が他の土師器片と共に出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から５世紀後半と考えられる。

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第197図 1	高　坏 土師器	A　21.2 B（6.8）	坏部の破片。下位に張り出しのある段を持ち，外上方に立ち上がり，口縁部は大きく反る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ナデ。	砂粒・雲母・パミス にぶい橙色 普通	P86　50% 北東付近覆土下層
2	甕 土師器	A［18.5］ B（3.9）	口縁部の破片。折り返しのある複合口縁で，やや反る。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石・パミス 浅黄橙色 普通	P87　50% 北東付近覆土下層

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第197図 3	甕 土師器	B（3.1） C　6.4	底部の破片。やや突出した平底。	体部外面ヘラ削り，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・雲母・パミス にぶい褐色 普通	P88　10% 北東付近覆土下層

第18号住居跡（第198図）

位置　調査区の北西部，$E4_{i4}$区。

重複関係　本跡は，北西壁のほぼ中央で第1号陥し穴を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。

規模と平面形　長軸6.94m，短軸6.68mの方形。

主軸方向　N－50°－E

壁　壁高は17～34cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝　全周している。上幅14～20cm，深さ5～10cmで，断面形はほぼU字形である。

間仕切り溝　北東壁から3条，南東壁から1条，南西壁から3条それぞれ中央に向って伸びている。

床　平坦で，広い範囲に踏み締まって硬化した部分がみられる。南コーナー付近から中央に向かって方形の耕作による撹乱を受けている。

ピット　4か所（P_1～P_4）。P_1～P_3は長径25～40cm，短径23～37cmの楕円形または不整楕円形で，深さは60～65cmである。それぞれコーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_4は長径26cm，短径18cmの不定形で，中央から南東壁沿いに付設されている。規模や位置から出入口ピットと考えられる。

貯蔵穴　南コーナーに付設され，平面形は長軸95cm，短軸70cmの隅丸長方形で，深さは40cmである。断面は逆台形状を呈している。北東側半分が撹乱により残存しない。

貯蔵穴土層解説

1　暗褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物・粘土粒子極微量
2　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物極微量
3　明褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量
4　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
5　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量

炉　2か所。炉1は中央から北西壁寄りに付設され，長径110cm，短径73cmの楕円形で，床面を17cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土は各層に焼土ブロックを含み，土層4以外の覆土には少量の炭化物及び灰と併せて少量の土師器片が混入している。炉床は火熱を受け赤変硬化している。炉2は中央からやや北東方向に付設され，長径75cm，短径50cmの楕円形で，床面を5cm掘り窪めた地床炉である。土層4以外の各層は焼土ブロック及び炭化物を含み，炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉1土層解説

1　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量，炭化物微量，灰極微量
2　にぶい赤褐色　焼土大ブロック・焼土中ブロック・ローム小ブロック・炭化物・ローム粒子少量，粘土粒子極微量，灰少量
3　明赤褐色　焼土粒子中量，焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物・ローム粒子少量，灰中量
4　赤　褐　色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・ローム粒子少量

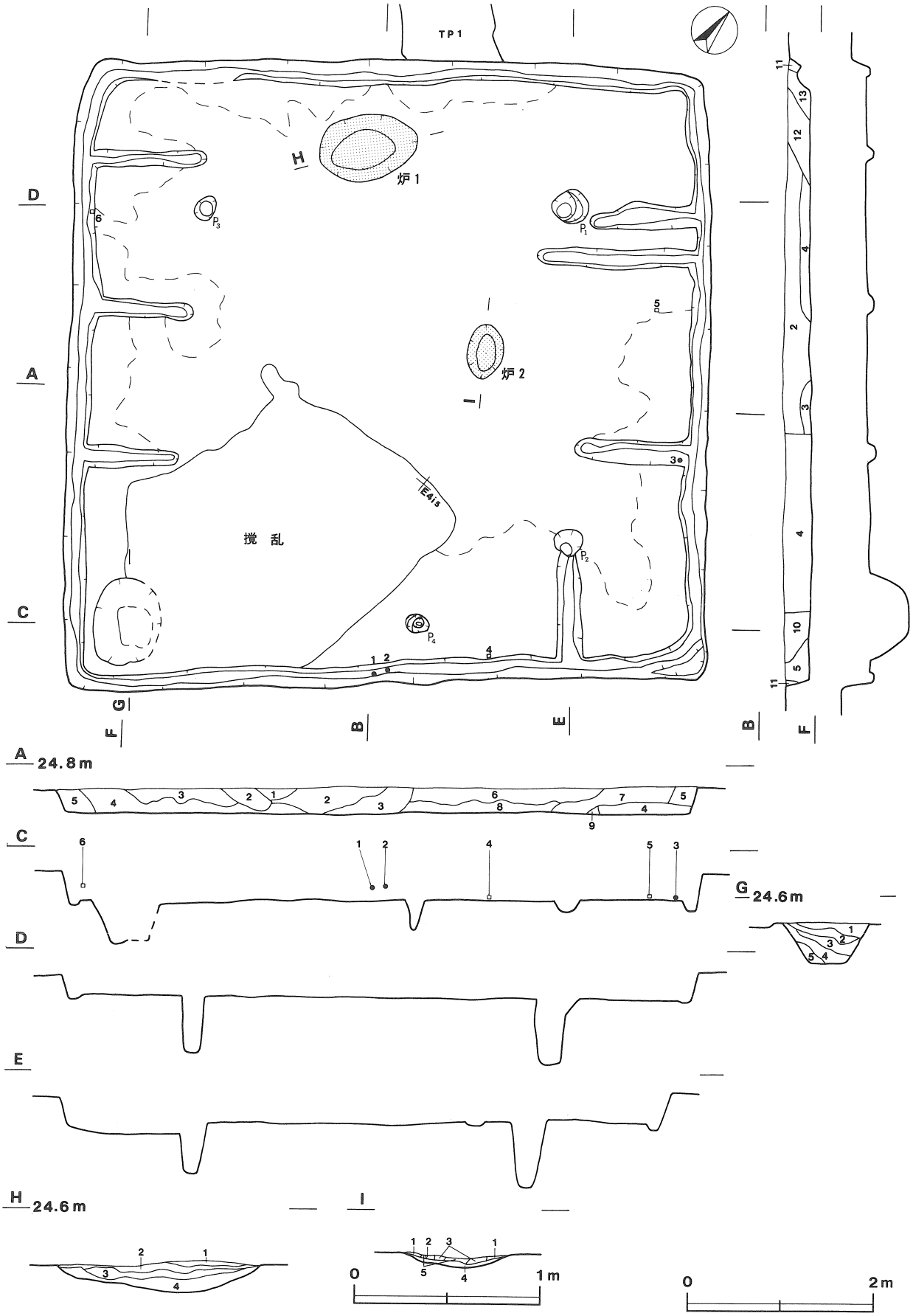
炉2土層解説

1　褐　色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物極微量
2　褐　色　焼土粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック・炭化物極微量
3　明赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・ローム粒子少量，炭化物極微量
4　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量
5　褐　色　ローム中ブロック中量，ローム小ブロック・粒子少量，焼土小ブロック・炭化物極微量

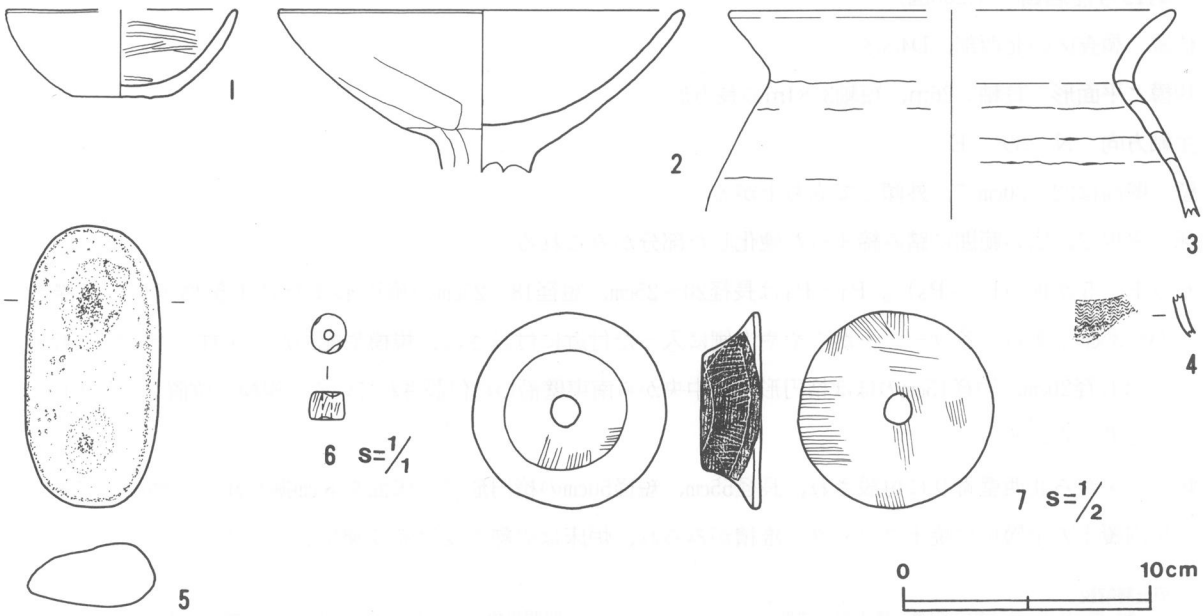
覆土　13層から成る。床面から上層にかけロームブロックを含む黒褐色土及び暗褐色土が複雑に堆積している。中央から南コーナーにかけて撹乱を受けている。人為堆積と思われる。

土層解説

1　黒褐色　ローム粒子少量
2　黒褐色　ローム粒子少量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック極微量



第198図　第18号住居跡実測図



第199図　第18号住居跡出土遺物実測図

3　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・ローム中ブロック微量
4　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量
5　黒 褐 色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子少量
6　極暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
7　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・ローム中ブロック極微量
8　暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，炭化物極微量
9　褐　　色　ローム粒子少量
10　暗 褐 色　ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・ローム粒子微量，焼土粒子極微量
11　褐　　色　ローム粒子少量
12　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量，ローム中ブロック極微量
13　極暗褐色　炭化粒子少量，ローム粒子微量

遺物　覆土下層から床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第199図1の坏は斜位の状態で，2の高坏は正位の状態で南東壁際の覆土中層から出土し，3の甕は北東壁際の床面直上から出土している。4の須恵器は瓶で，体部上位に波状文が施され，覆土中から出土している。5の凹石は南東壁際から，6の臼玉は北東寄りの床面直上からそれぞれ出土し，7の紡錘車は南西壁際の覆土中層から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第199図 1	坏 土師器	A [9.2] B 3.5 C 3.8	口縁部一部欠損。丸底気味の平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面及び底部雑なヘラ削り，内面ナデ。外面赤彩痕。	砂粒・石英・長石・パミス にぶい橙色 普通	P89 80% PL52 南東壁際覆土中層
2	高　坏 土師器	A 16.3 B (6.5)	坏部の破片。体部は外上方に開く。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・石英・長石・パミス 橙色 普通	P90 50% 南東壁際覆土中層
3	甕 土師器	A [18.0] B (8.1)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。体部内面輪積み痕。	砂粒・雲母・パミス 灰褐色 普通	P91 10% 北東壁際床面直上

図版番号	種　別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第199図 5	凹　石	11.2	5.1	2.6	—	240.7	100	蛇紋岩	南東壁際床面直上	Q75 PL55
6	臼　玉	0.5	0.5	0.4	0.1	0.1	100	片岩	北東寄り床面直上	Q76
7	紡錘車	5.2	5.2	1.6	0.7	61.1	100	片岩	南西壁際覆土中層	Q77体部側面線刻PL55

第19号住居跡（第200図）

位置　調査区の北西部，$D4_{c3}$区。

規模と平面形　長軸5.26m，短軸3.84mの長方形。

主軸方向　N－39°－E

壁　壁高は22～30cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦で，広い範囲に踏み締まった硬化した部分がみられる。

ピット　5か所（P_1～P_5）。P_1～P_4は長径20～25cm，短径18～25cmの楕円形または不整楕円形で，深さは28～35cmである。各コーナーからやや内側に入った付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は長径20cm，短径15cmのほぼ楕円形で，中央から南東壁沿いに付設されている。規模や位置から出入口ピットと考えられる。

炉　中央から北西壁寄りに付設され，長径55cm，短径50cmの楕円形で，床面を8cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土の中層位に焼土ブロックの堆積がみられ，炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

1　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　明赤褐色　焼土粒子・ローム小ブロック極微量
3　暗赤褐色　焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子極微量
4　赤褐色　ローム粒子少量，ローム中ブロック・小ブロック極微量
5　暗明褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
6　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子極微量
7　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

覆土　9層から成る。南西から北東方向にかけての層位はレンズ状を成し，各層は何れもロームブロックを含み，土層4，6，7以外の層からは焼土粒子が，土層5，7以外の各層からは炭化粒子が確認されている。また，南西壁から北西壁にかけての壁際は壁面に沿って褐色土及び暗褐色土が流れ込んでいる状況がみられるところから，一部人為的に埋め戻され，その後自然堆積したものではないかと考えられる。

土層解説

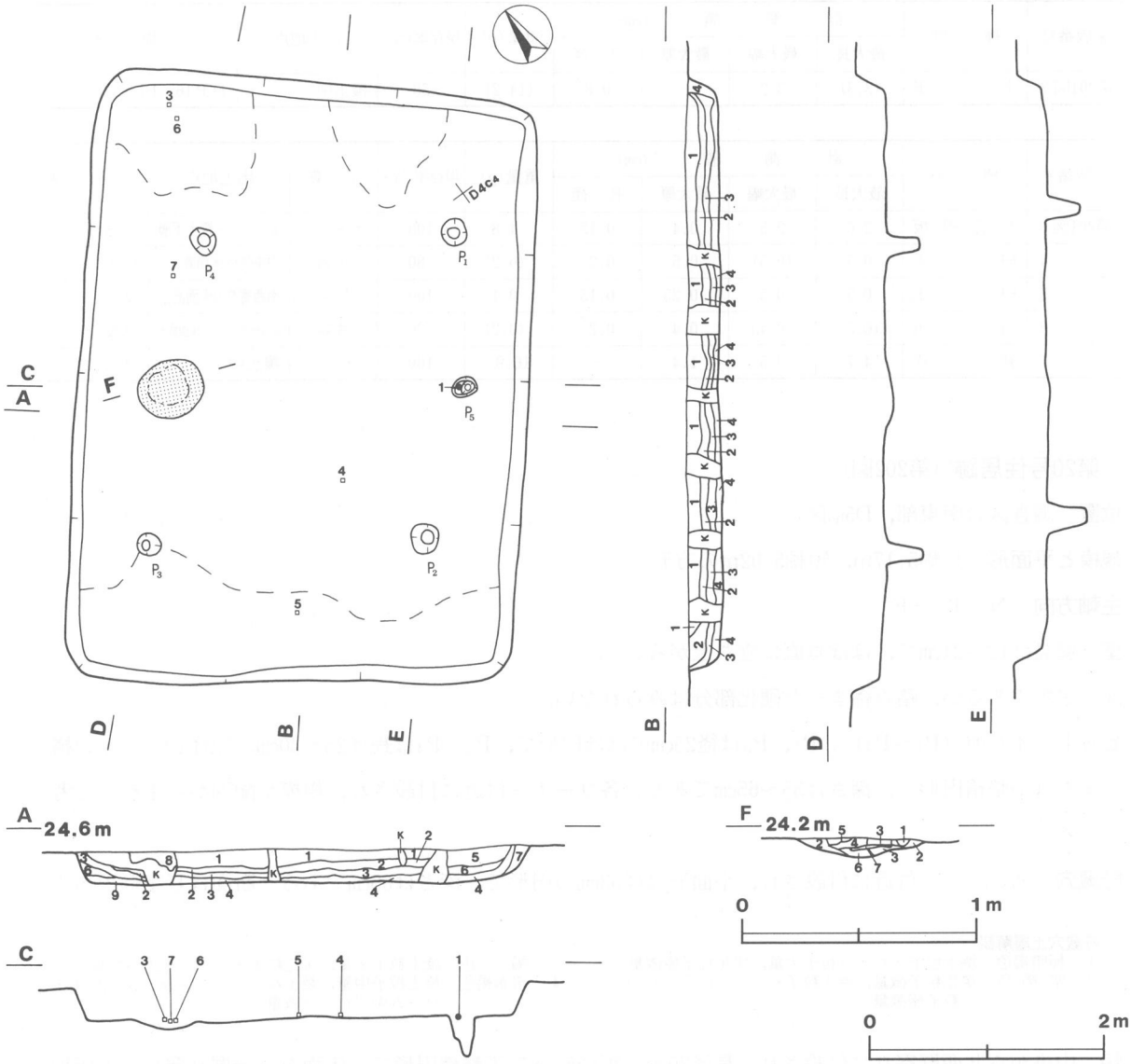
1　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロツク微量，焼土粒子・炭化粒子極微量
2　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，焼土粒子・炭化粒子極微量
3　極暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子極微量
4　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子微量，炭化粒子・ローム中ブロック極微量
5　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，炭化粒子・ローム中ブロック極微量
6　暗褐色　炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子極微量
7　褐色　ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
8　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，焼土粒子・炭化粒子極微量
9　褐色　焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム粒子極微量

遺物　土師器片の壺が床面直上から少量出土している。その他，双孔円板，臼玉が床面直上から出土している。第201図1の壺は南東寄りの床面直上から出土し，3の双孔円板は北コーナー付近の覆土下層から，4～6は臼玉で，それぞれ中央付近の床面直上，南西寄りの床面直上，北コーナー付近の床面直上から出土している。7の剝片は混入したものとも考えられる。

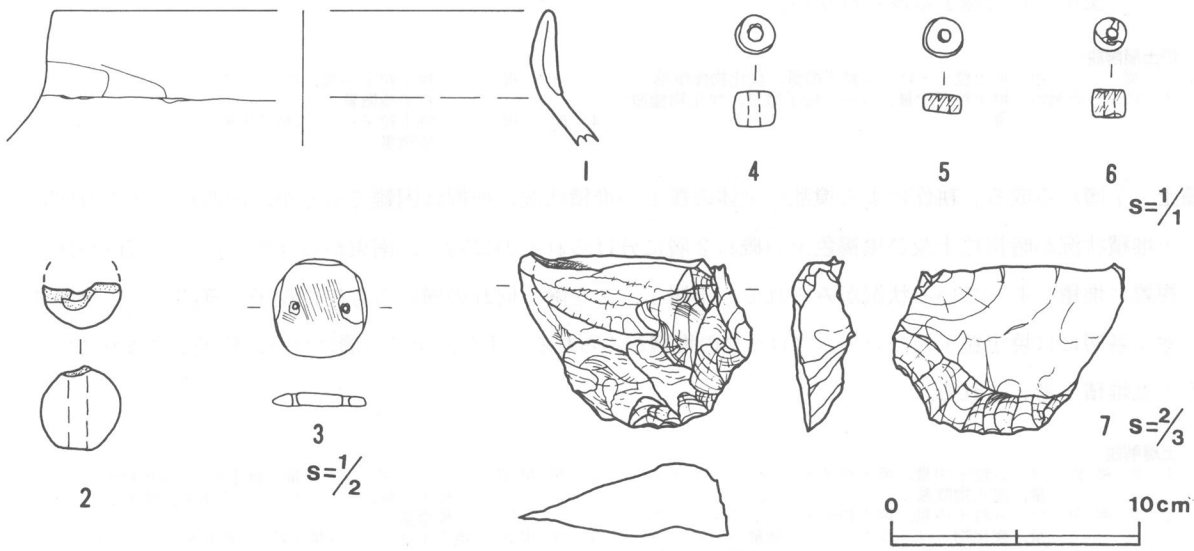
所見　本跡は，他の住居跡に付設されている貯蔵穴を持たないが，遺構の確認状況，炉及びピットの様子から住居跡とした。時期は，出土遺物から古墳時代中期（5世紀中頃）と考えられる。

第19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第201図 1	壺 土師器	A［20.1］ B（5.2）	体部上位から口縁部の破片。体部は緩やかな傾斜を持って頸部に至る。口縁部は折り返しのある複合口縁となり，ほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・長石・パミスにぶい黄褐色 普通	P92　5％ 南東寄り床面直上 外面煤付着



第200図　第19号住居跡実測図



第201図　第19号住居跡出土遺物実測図

図版番号	種　別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径				
第201図2	土　玉	(3.3)	3.2	—	0.8	(14.2)	50	覆土中	DP16　PL55

図版番号	種　別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第201図3	双孔円板	2.6	2.5	0.4	0.15	4.8	100	チャート	北コーナー覆土下層	Q78
4	臼　玉	0.5	(0.5)	0.5	0.2	(0.2)	80	片岩	中央付近床面直上	Q79
5	臼　玉	0.5	0.5	0.25	0.15	0.1	100	片岩	南西寄りの床面直上	Q80
6	臼　玉	(0.5)	0.45	0.4	0.2	(0.2)	90	片岩	北コーナー付近の床面直上	Q81
7	剝　片	4.7	3.5	1.4	—	16.9	100	メノウ	覆土中	Q82

第20号住居跡（第202図）

位置　調査区の南東部，$D5_{h6}$区。

規模と平面形　長軸5.17m，短軸5.02mの方形。

主軸方向　N－43°－E

壁　壁高は12～21cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床　平坦であるが，踏み締まった硬化部分はみられない。

ピット　4か所（P_1～P_4）。P_1，P_3は径25cmのほぼ円形で，P_2，P_4は長径25～30cm，短径20～27cmの楕円形または不整楕円形で，深さは35～65cmである。各コーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は径63cmの円形で，深さは65cmである。断面はU字形である。

貯蔵穴土層解説

1　極暗褐色　焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子極微量
2　暗褐色　炭化粒子微量，焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子極微量
3　褐　色　焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子極微量
4　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化粒子・ローム中ブロック微量

炉　中央から北西壁寄りに付設され，長径70cm，短径55cmの不整楕円形で，床面を13cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土の土層3には焼土ブロックの堆積がみられ，炉床は火熱を受け赤変硬化しているが，長期にわたって使用された様子はみられない。

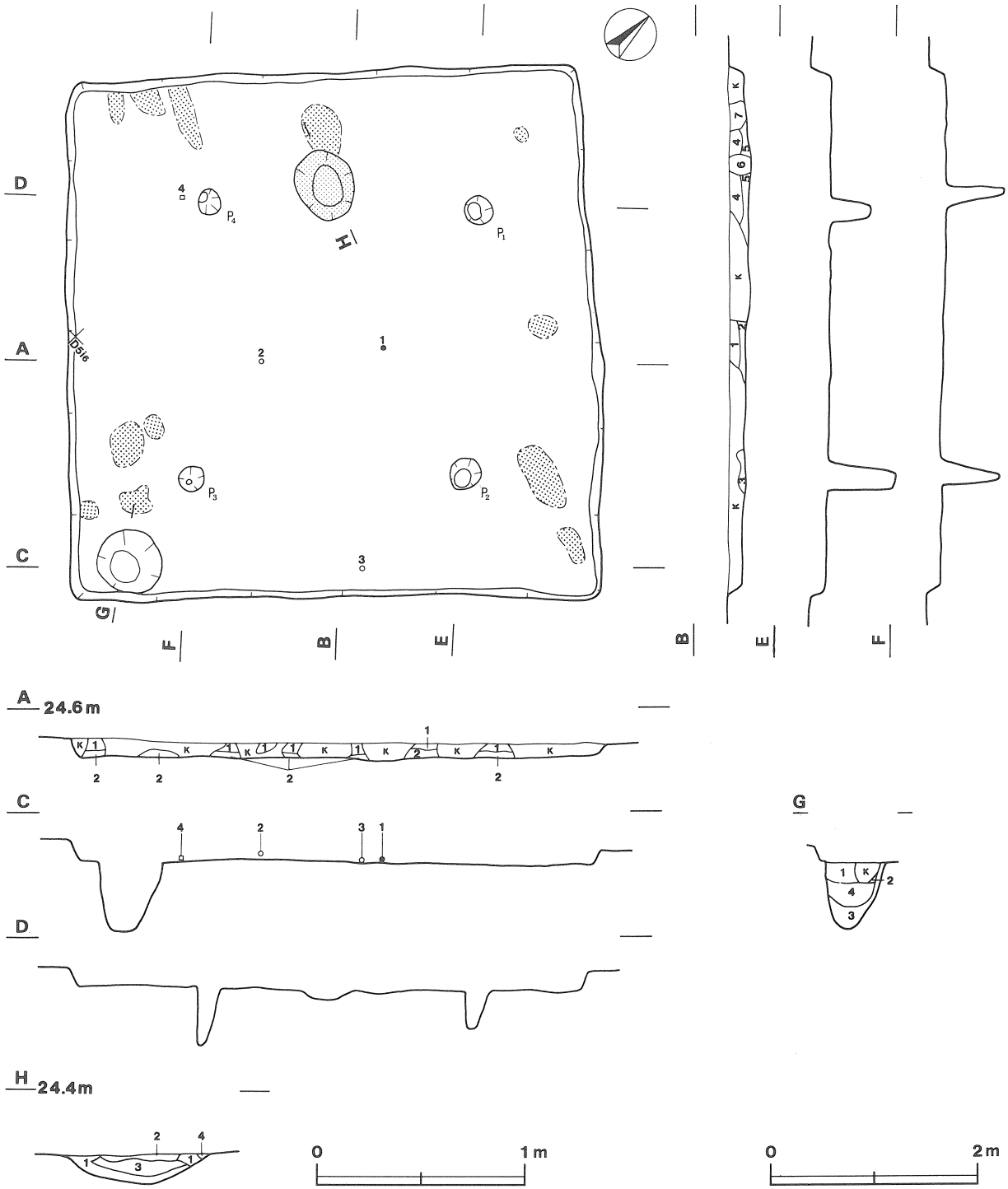
炉土層解説

1　褐　色　焼土粒子・ローム粒子微量，炭化物極微量
2　にぶい赤褐色　焼土粒子少量，ローム粒子微量，炭化物極微量
3　赤褐色　焼土粒子少量，焼土小ブロック微量，ローム粒子極微量
4　暗褐色　焼土粒子・ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量

覆土　7層から成る。耕作による撹乱で全体の覆土の堆積状況の把握は困難であるが，南西から北東方向の覆土堆積状況が暗褐色土及び黒褐色土の概ね2層に分けられるのに対し，南東から北西方向では層位が比較的複雑に堆積しあっている状況がみられる。土層1，2を除く何れの層からも炭化粒子が確認され，土層3を除く各層には焼土粒子及びロームブロックの堆積がみられる。また，全ての層にローム粒子が含まれている。人為堆積と考えられる。

土層解説

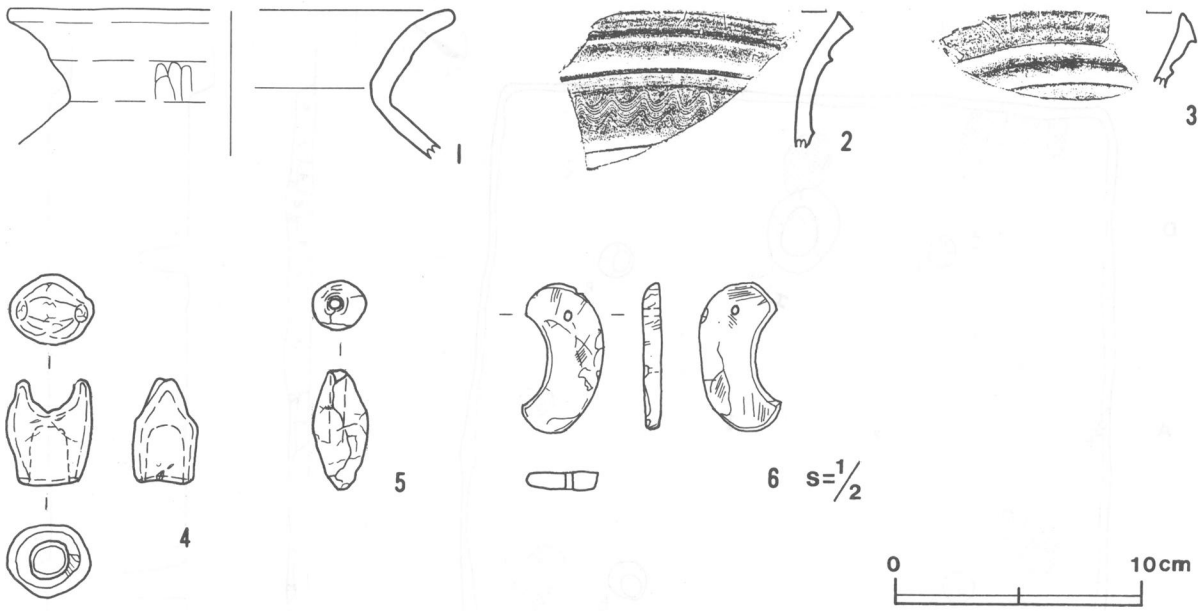
1　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック少量，炭化物微量
2　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック少量，炭化物・ローム大ブロック微量
3　褐　色　ローム粒子少量，ローム大ブロック微量，炭化粒子極微量
4　黒褐色　ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量，ローム大ブロック微量，焼土小ブロック極微量
5　黒褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム大ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量



第202図　第20号住居跡実測図

6　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子極微量　　7　黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極微量

遺物　南寄りの覆土下層から中央付近の床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第203図１の甕は中央付近の床面直上から出土したものである。２，３は須恵器の甕口縁部片で，２の口唇部近くには稜がみられ，稜の下位に波状文が施され，３の口唇部近くには稜がみられる。共に覆土中層から出土している。４，５は不明土製品で，中央付近と南東壁際の覆土下層から共に横位で出土し，６の勾玉は西寄りの覆土下層から出土している。



第203図　第20号住居跡出土遺物実測図

所見　本跡の時期は，出土遺物から５世紀後半と考えられる。

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第203図 1	甕 土師器	A［17.8］ B（5.5）	口縁部の破片。頸部中位に緩やかな段を有し，口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面中位横ナデ，下位縦位のヘラナデ。	砂粒・雲母・パミス 灰黄褐色 普通	P93　5％ 床面

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径				
第203図 4	不明土製品	2.75	2.1	1.7	1.0	7.7	100	中央付近覆土下層	DP17　一部穿孔あり　PL55
5	不明土製品	3.2	1.4	1.4	4.0	4.3	100	南東壁際覆土下層	DP18　一部穿孔あり

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第203図 6	勾　玉	3.9	2.1	0.45	0.2	6.0	100	滑石	西寄り覆土下層	Q83　PL55

第21号住居跡（第204図）

位置　調査区の南東部，$D5_{e5}$区。

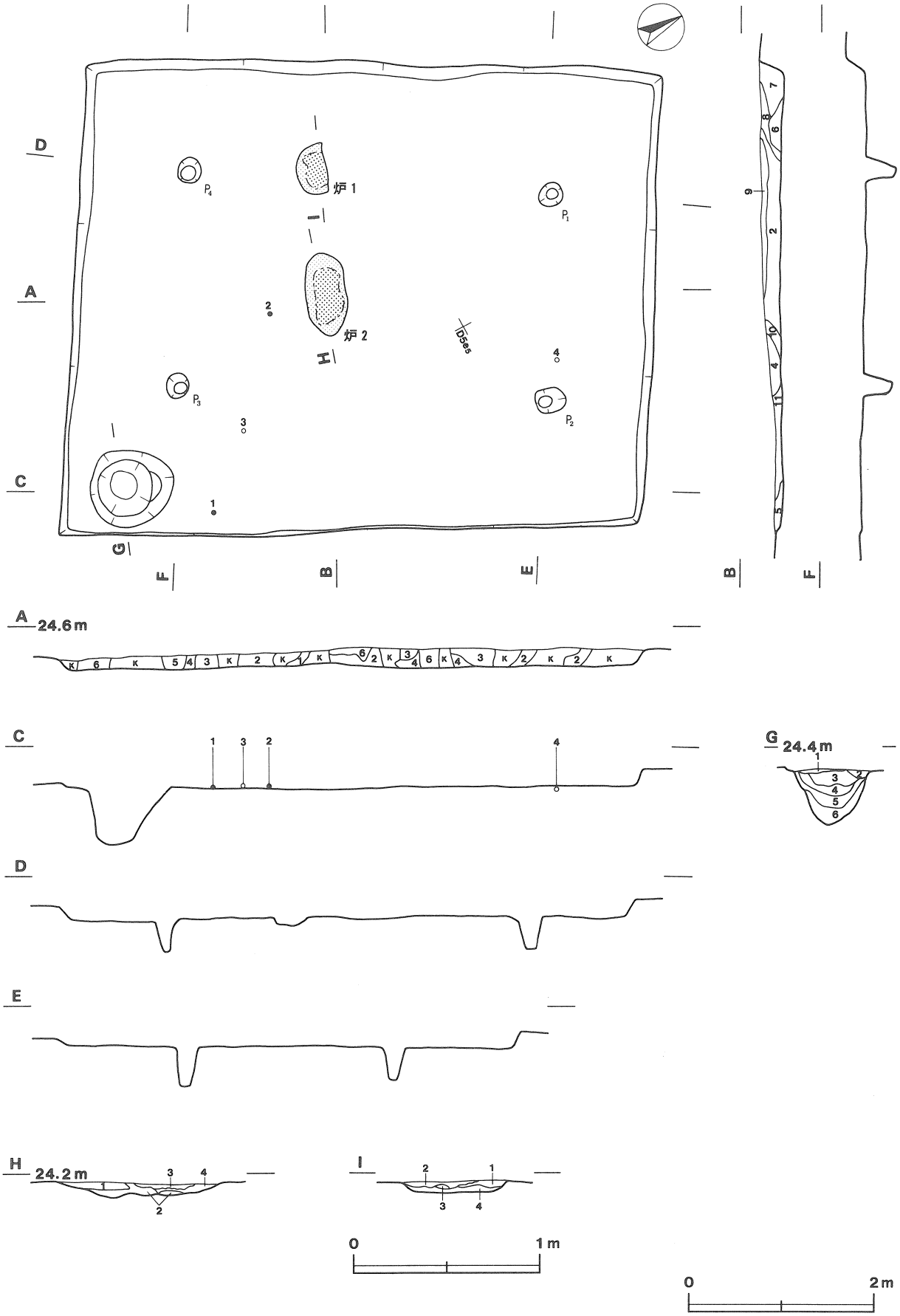
規模と平面形　長軸6.26m，短軸5.01mの長方形。

主軸方向　N－30°－E

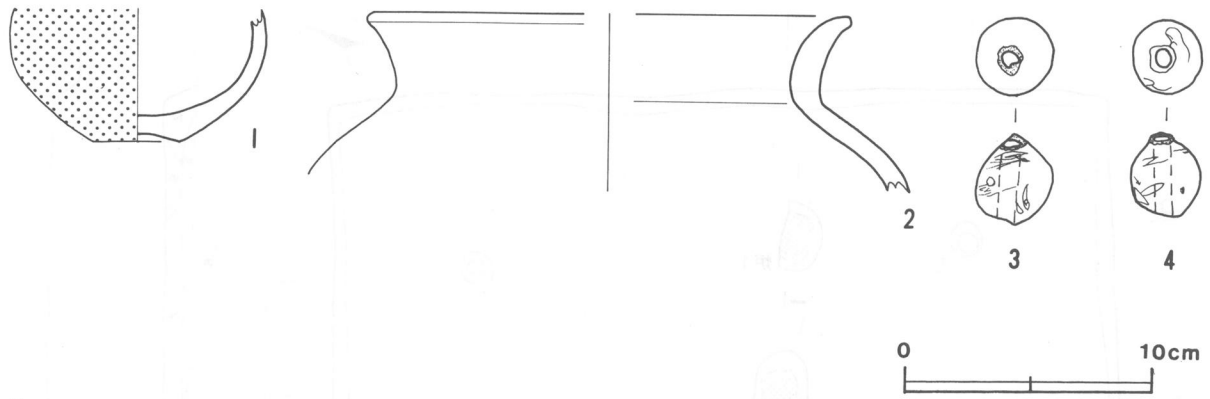
壁　壁高は３～24cmで，外傾して立ち上がる。南東壁の立ち上がりは，壁面が削平され全体の把握が困難である。

床　平坦であるが，踏み締まった硬化部分はみられない。

ピット　４か所（P_1～P_4）。P_1，P_3，P_4は径25cmのほぼ円形，P_2は長径35cm，短径25cmの不整楕円形で，深さは30～40cmである。各コーナー付近に付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。



第204図　第21号住居跡実測図



第205図　第21号住居跡出土遺物実測図

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は長径90cm，短径80cmの不整楕円形で，深さは60cmである。断面はU字形で，底部は皿状である。

貯蔵穴土層解説

1　暗褐色　ローム粒子少量，ローム中ブロック微量，ローム小ブロック極微量
2　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム大ブロック極微量
4　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック極微量
5　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量，ローム中ブロック極微量
6　褐　色　ローム小ブロック極微量

炉　2か所。炉1は中央から北西壁寄りに付設され，長径55cm，短径30cmの半円形で，床面を5cm掘り窪めた地床炉である。覆土には焼土ブロックが堆積し，炉床は火熱を受け赤変硬化している。規模の割りに使い込まれた様子が感じられる。中央から北側半分が耕作による撹乱を受け残存しない。炉2は中央付近に付設され，長径90cm，短径45cmの長楕円形で，床面を7～9cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土に焼土ブロックの堆積があまりみられず，使い込まれた様子が感じられない。炉を挟み南，北両側が撹乱により残存しない。

炉1土層解説

1　暗赤褐色　ローム小ブロック中量，焼土小ブロック少量，焼土中ブロック・ローム粒子微量
2　にぶい赤褐色　焼土粒子微量，ローム小ブロック・ローム粒子極微量
3　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土大ブロック・焼土小ブロック極微量
4　赤　褐　色　焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子中量，ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量

炉2土層解説

1　褐　色　焼土粒子・ローム粒子少量，炭化物極微量
2　赤褐色　焼土粒子少量，ローム粒子微量
3　褐　色　焼土粒子少量，ローム粒子微量，焼土小ブロック・炭化物極微量
4　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・ローム大ブロック微量，ローム中ブロック極微量

覆土　11層から成る。土層1，9，11を除く覆土は焼土粒子を含み，土層2の褐色土は覆土下層から上層に跨がり，その他の堆積状況も複雑である。また，その土層2以外の覆土にはロームブロックの混入もみられることから，人為的に埋め戻されたものではないかと考えられる。

土層解説

1　褐　色　ローム大ブロック中量，ローム小ブロック微量，ローム粒子極微量
2　褐　色　焼土粒子微量，炭化粒子・ローム中ブロック・小ブロック・ローム粒子極微量
3　暗褐色　焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子極微量
4　明褐色　焼土粒子・炭化粒子極微量
5　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・ローム中ブロック微量
6　暗褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量，ローム小ブロック極微量
7　暗褐色　ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・ローム粒子微量，焼土粒子極微量
8　暗褐色　焼土粒子・ローム粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量，炭化粒子極微量
9　褐　色　ローム小ブロック微量
10　褐　色　ローム粒子微量，焼土粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック極微量
11　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量

遺物　覆土下層から床面直上にかけ土師器片が少量出土している。第205図1の椀は南寄りの床面直上から，2の甕は中央付近の床面直上から出土し，3・4の土玉は南と北東寄りの床面直上から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から５世紀後半と考えられる。

第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第205図 1	椀 土師器	B（5.4） C　3.6	底部から体部中位の破片。やや上底気味の平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。体部外面赤彩，内面赤彩痕。	砂粒・石英・長石・パミス 赤褐色 普通	P94　15% 南寄り床面直上
2	甕 土師器	A［19.4］ B（7.0）	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	P95　10% 中央付近床面直上 口縁部外面煤付着

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径				
第205図3	土　玉	(3.5)	3.1	—	0.7	(25.5)	90	南寄り床面直上	DP20　PL55
4	土　玉	(3.1)	2.8	—	0.6	(22.6)	98	北東寄り床面直上	DP21　PL55

第24号住居跡（第206図）

位置　調査区の南東部，$D4_{c8}$区。

規模と平面形　長軸2.25m，短軸1.69mの長方形。

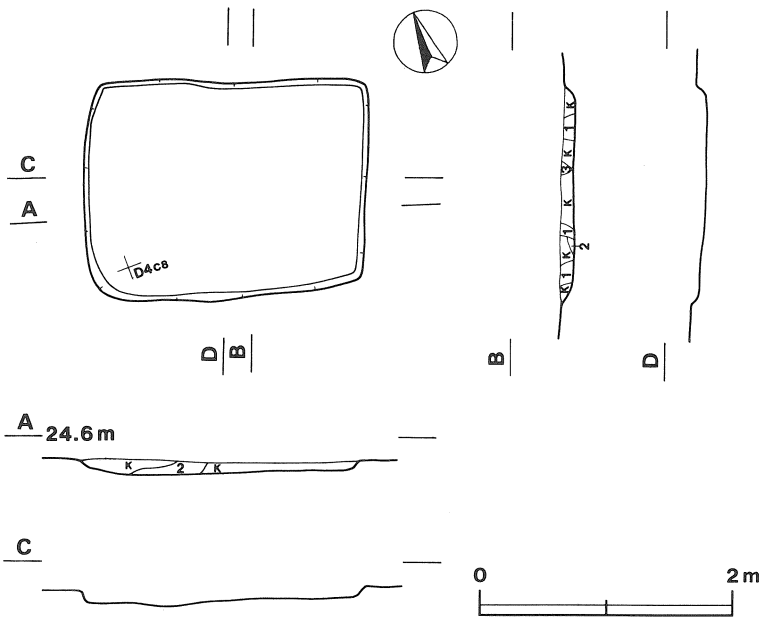
主軸方向　N－71°－W

壁　壁高は５～10cmで，外傾して立ち上がるが，南西壁はやや外傾気味の立ち上がりがみられる。

床　南東から南西方向に僅かな高まりを持ち，緩斜している。踏み締まった硬化部分はみられない。

覆土　２層から成る。それぞれの覆土は炭化物及びロームブロックを含み，床面から覆土上層にかけ縦長に堆積している。人為的に埋め戻されたものと考えられる。中央部は耕作による撹乱を受けている。

土層解説
1　暗褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量
2　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，炭化物極微量



第206図　第24号住居跡実測図

遺物　覆土中から土師器の坏，甕片が14点出土しているが，遺構の掘り込みが浅く，本跡に伴うものか確認できなかった。

所見　本跡は，炉，貯蔵穴及び柱穴等が確認されなかったが，遺構の確認状況などから住居跡もしくは倉庫的な建築物であったように考えられる。時期は，出土している土師器の様相から5世紀後半頃と思われる。

第25号住居跡（第207図）

位置　調査区の南東部，D4b9区。

重複関係　本跡は，第84号土坑によって掘り込まれている。本跡の方が古い。

規模と平面形　長軸4.40m，短軸4.32mの方形。

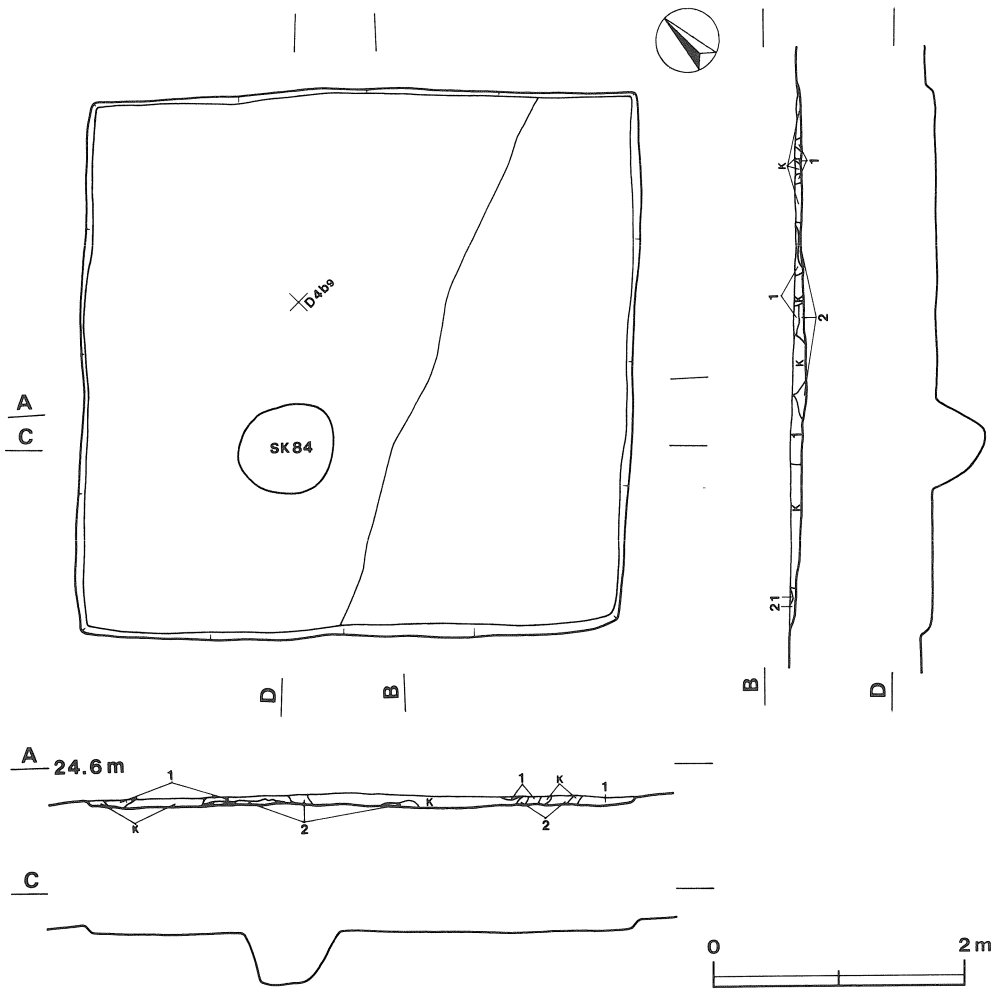
主軸方向　N－44°－E

壁　壁高は5～7cmで，やや外傾し，各壁際は耕作により撹乱されている。

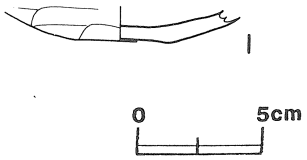
床　皿状に中央がやや窪む。踏み締まった硬化部分はみられない。

覆土　2層から成る。どちらの層もロームブロックを含み，床面から覆土上層にかけ縦長に堆積している。人為的に埋め戻されたものと考えられる。中央部は耕作による撹乱を受けている。

土層解説
1　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
2　暗 褐 色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量



第207図　第25号住居跡実測図



第208図　第25号住居跡出土遺物実測図

遺物　覆土中から土師器の坏，甕片が少量出土している。

所見　本跡は，炉，貯蔵穴及び柱穴等が確認されなかったが，遺構の確認状況及び規模などから住居跡として取り扱った。時期は，出土している土師器の様相から5世紀後半頃と考えられる。

第25号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第208図 1	坏 土師器	B (1.1) C 3.8	底部及び体部下位の破片。平底。体部は緩やかに外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・パミス にぶい橙色 普通	P96 10% 覆土中

第26号住居跡（第209図）

位置　調査区の北部，C4j7区。

規模と平面形　長軸4.90m，短軸4.83mの方形。

主軸方向　N—65°—W

壁　壁高は2～16cmで，外傾して立ち上がるが，北西側は耕作による削平により壁面が殆ど残存しない。

床　ほぼ平坦であるが，南コーナー付近に僅かに高まりがみられる。床面の踏み固まった硬化部分はみられない。東コーナー付近は耕作による攪乱を受けている。

ピット　3か所（P_1～P_3）。P_1～P_3は径25cmの円形で，深さはそれぞれ60～65cmである。コーナーから中央寄りに付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。

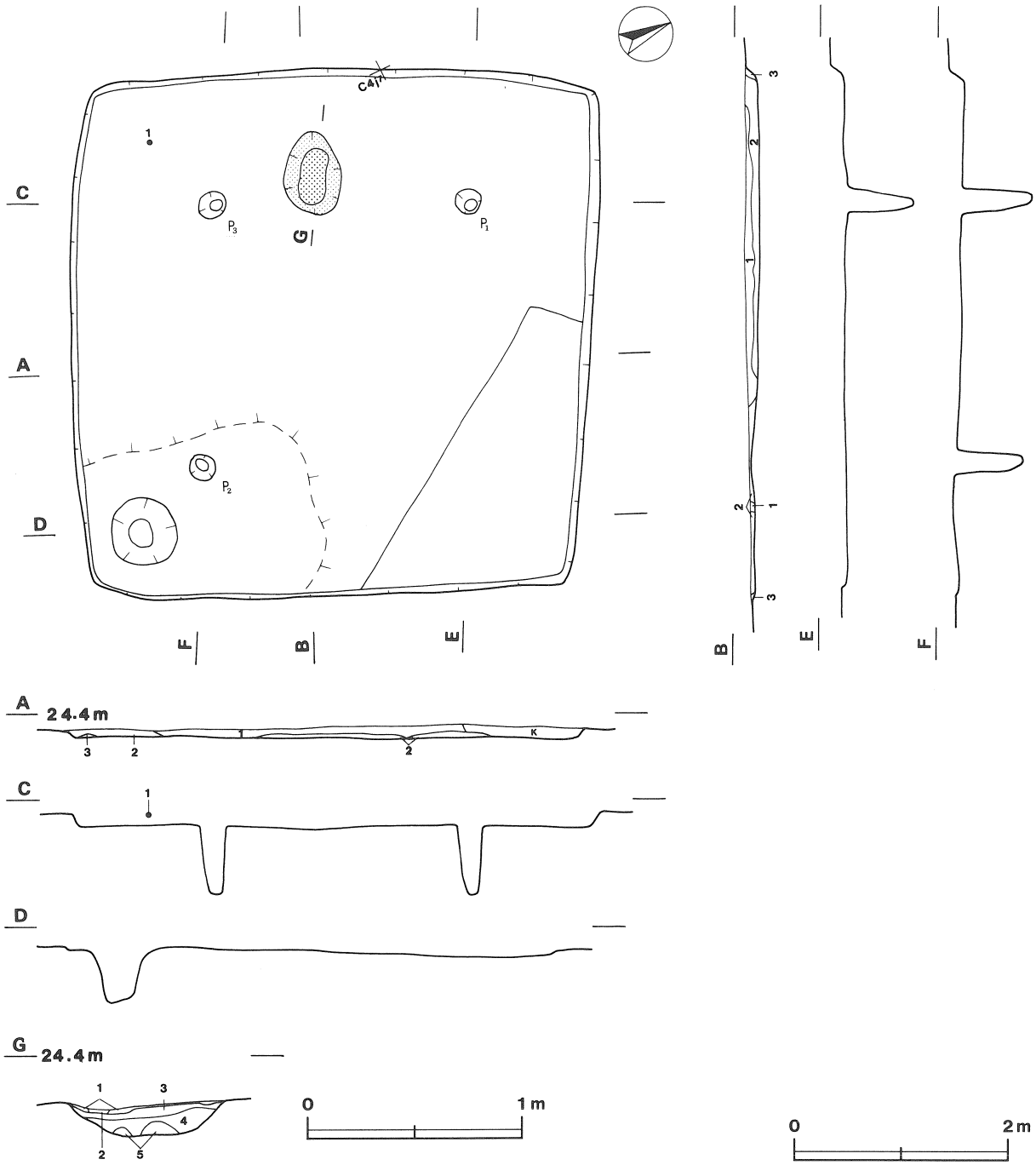
炉　中央から北西寄りに付設され，長径75cm，短径55cmの不定形で，床面を15cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土の中層から上層には焼土ブロックを含む赤褐色土及び焼土ブロックや炭化物を含む暗褐色土が堆積し，炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，炭化物少量，ローム粒子微量
2　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子微量
3　暗褐色　焼土粒子中量，焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量
4　赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，焼土中ブロック少量，炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
5　赤褐色　ローム中ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック少量，炭化粒子微量

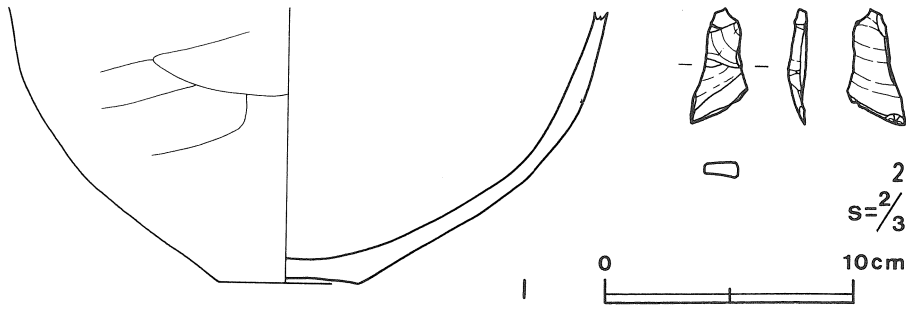
貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は径60cmの円形で，深さは45cmである。V字状に掘り込まれ，底部は皿状である。壁はほぼ外傾して立ち上がる。

貯蔵穴土層解説
1　暗褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量
2　褐　　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，炭化物極微量
3　明褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

覆土　3層から成る。覆土の大部分は焼土ブロック及び焼土粒子混じりの暗褐色土で，南東付近の覆土堆積状



第209図　第26号住居跡実測図



第210図　第26号住居跡出土遺物実測図

況の把握は殆どできない。人為堆積と考えられる。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物・ローム中ブロック微量
2　暗　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土中ブロック微量
3　にぶい褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

遺物　覆土中から土師器片が少量出土している。第210図1の甕は西寄りの覆土下層から逆位の状態で出土し，2のナイフ形石器片は炉内焼土中より出土したものである。

所見　本跡の時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第26号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第210図 1	甕 土師器	B (11.0) C 5.6	底部から体部中位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラナデ，内面ナデ。底部ヘラナデ。	砂粒・石英・長石 にぶい黄橙色 普通	P97 40% 西寄り覆土下層 二次焼成

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第210図 2	ナイフ形石器片	(2.3)	(1.1)	0.3	—	(0.6)	不明	頁岩	炉内焼土中	Q84 PL55

第27号住居跡（第211図）

位置　調査区の北部中央，$C5_{j4}$区。

規模と平面形　長軸5.19m，短軸5.14mの方形。

主軸方向　N－55°－E

壁　壁高は49～60cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

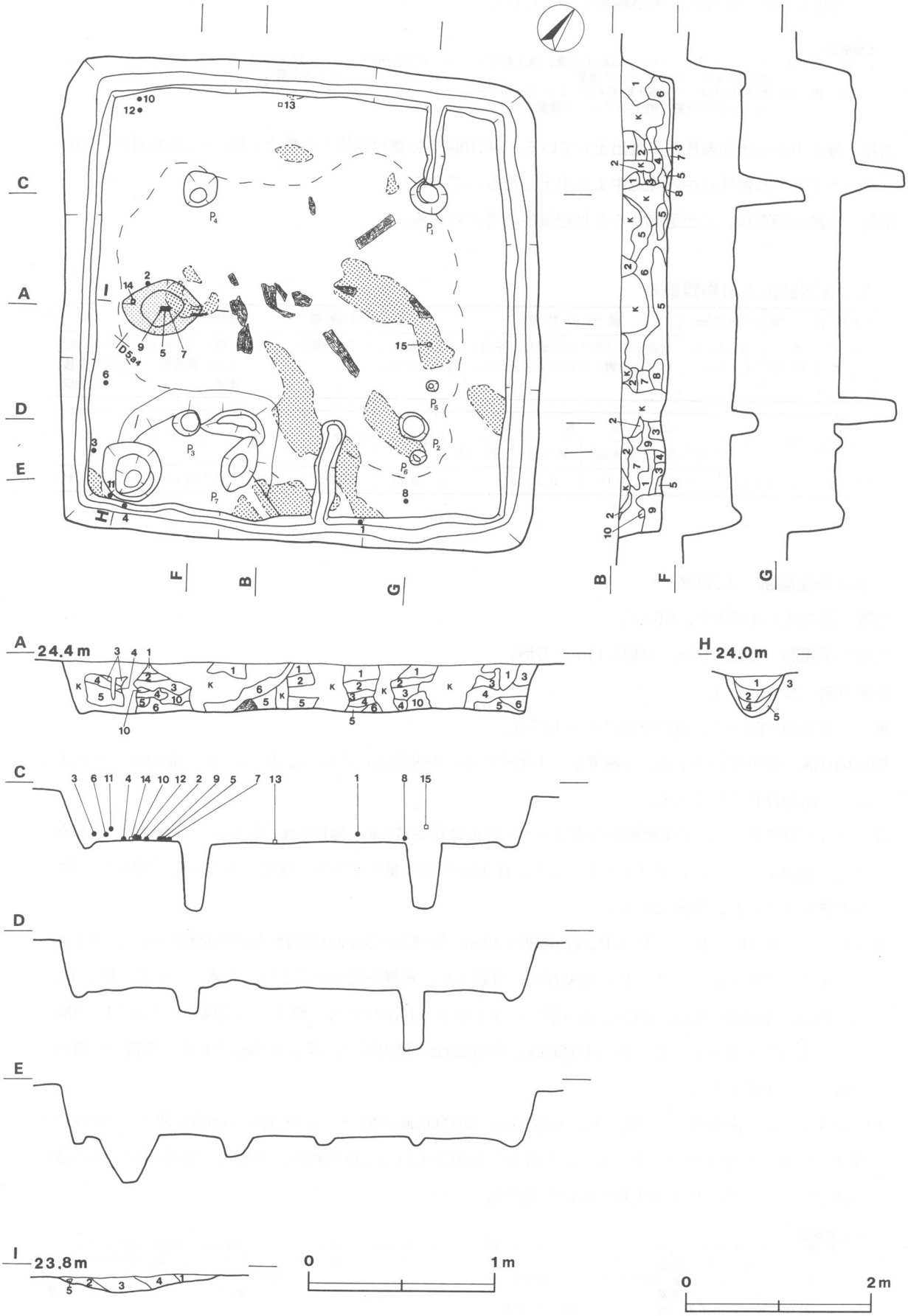
間仕切り溝　南東壁から1条，北西壁から1条それぞれ中央付近に向かって伸びている。幅20cm，深さは5～7cmで，断面はU字形である。

床　ほぼ平坦であるが，南東壁際から南コーナー付近に長さ175cm，幅125cm，高さ5～10cmの高まりがみられ，出入口施設に伴うものと考えられる。また，床面からは多量の炭化材が確認されている。壁沿いを除いて全体が踏み固められ，堅緻である。

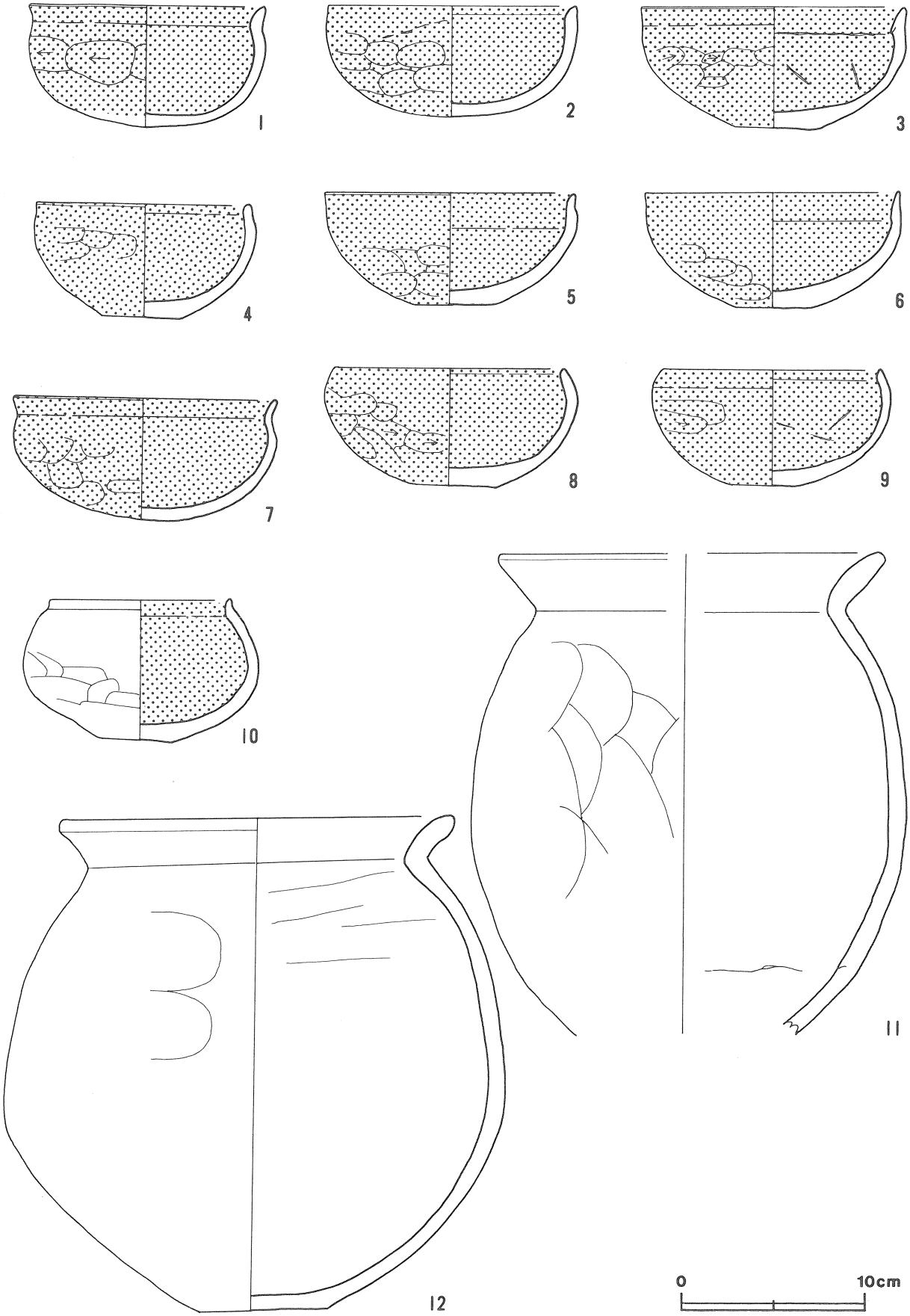
ピット　7か所（P_1～P_7）。P_1～P_4は長径30～40cm，短径25～30cmの楕円形及び不整楕円形で，深さは28～72cmである。何れも各コーナーから中央寄りに付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5，P_6は長径13～18cm，短径10～15cmの円形に近い形で，深さは9～10cmである。双方とも規模や位置からP_2の補助的な柱穴であったと考えられる。P_7は長径65cm，短径35cmの楕円形で，深さは20cmである。規模や位置から出入口ピットと考えられる。

炉　中央からやや南西寄りに付設され，長径85cm，短径60cmの楕円形で，床面を9cm掘り窪めた地床炉である。覆土はいずれも焼土ブロックを含み，土層3の赤褐色土からは炭化物が，土層4の暗赤褐色土からは炭化材が確認されている。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

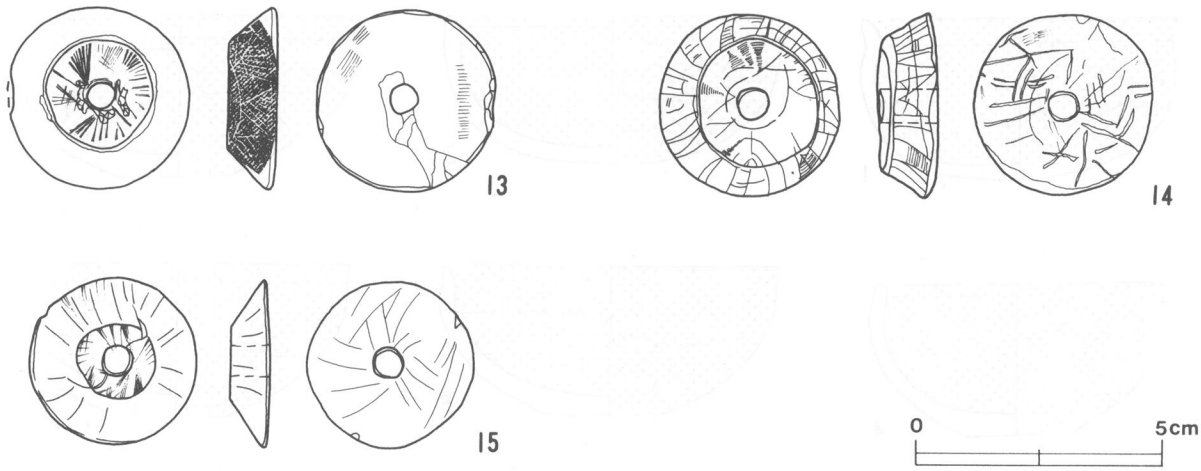
炉土層解説
1　暗　褐　色　焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土中ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック微量
3　赤　褐　色　焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化物中量，ローム粒子微量
4　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，焼土中ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量，炭化材・ローム中ブロック微量
5　暗　褐　色　焼土小ブロック少量，ローム小ブロック・ローム粒子微量



第211図　第27号住居跡実測図



第212図　第27号住居跡出土遺物実測図(1)



第213図　第27号住居跡出土遺物実測図(2)

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は径70cmの円形で，深さ45cmである。断面はU字形で，底部は皿状である。壁は外傾して立ち上がる。覆土には焼失時に混入したものと思われる炭化材と炭化物が確認されている。

貯蔵穴土層解説

1　暗褐色　焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック・炭化材微量
2　暗赤褐色　焼土粒子・炭化物中量，焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化材少量，ローム粒子微量
3　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土小ブロック・炭化物少量，焼土粒子微量
4　褐　色　炭化材中量，焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化物微量

覆土　9層から成る。南東壁付近及び北西方向に堆積の乱れがみられ，覆土下層から上層にかけては焼土粒子や炭化物及びロームブロックの混入がみられることから，南東壁際及び北西壁際は人為的に埋め戻しが行われたものと考えられる。耕作による撹乱を大きく受けている。

土層解説

1　暗褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量
2　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物極微量
3　暗褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量
4　極暗褐色　焼土中ブロック・焼土粒子・炭化物中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量
5　暗褐色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック少量，炭化物極微量
6　黒褐色　焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック極微量
7　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
8　暗褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，炭化粒子極微量
9　暗褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
10　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

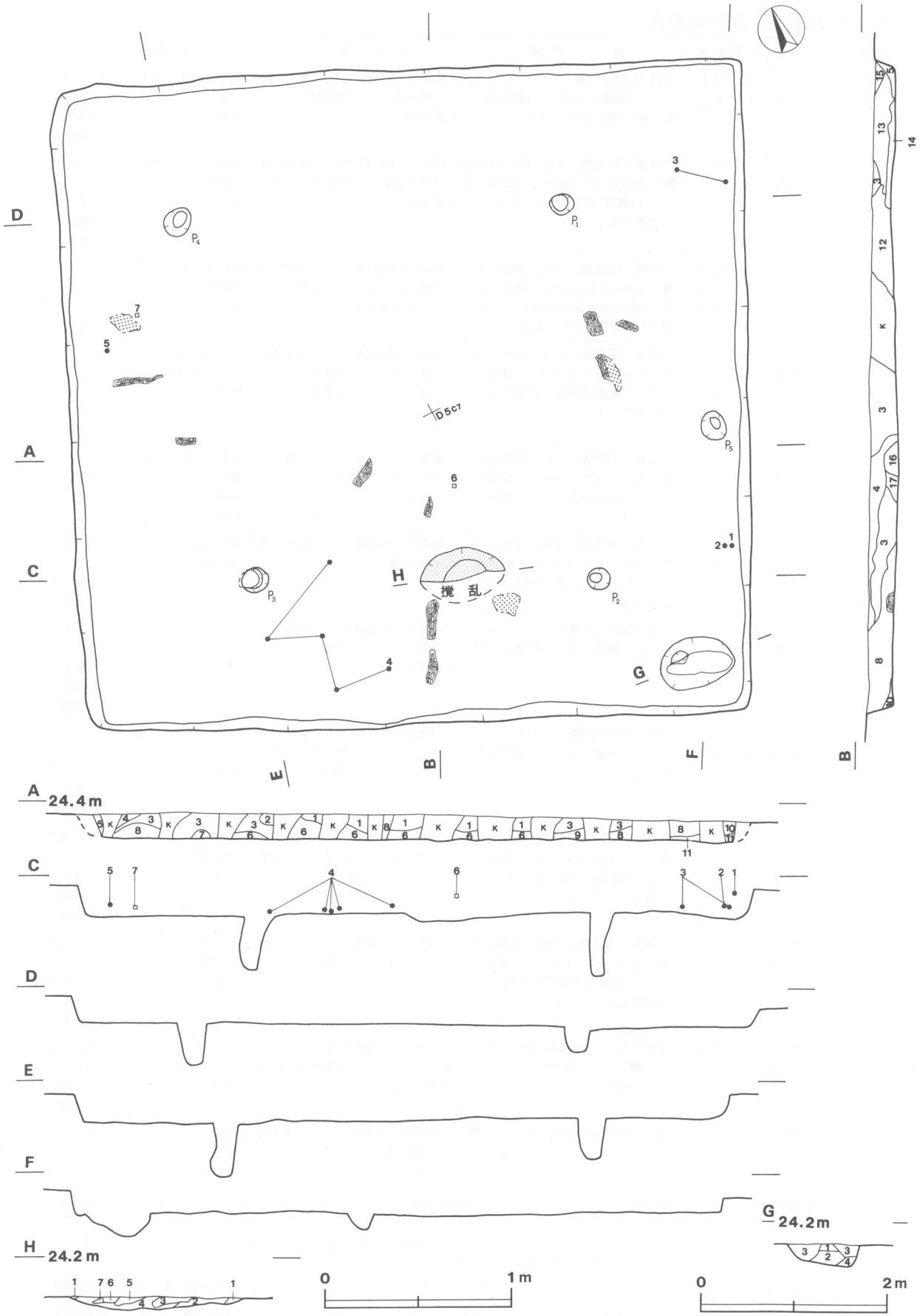
遺物　覆土下層から床面直上にかけて土師器の完形品が大量に出土し，石製品も3点出土している。第212図1～9は坏のほぼ完形品である。1は南東壁際の覆土下層から斜位の状態で，2は炉内覆土上面から正位の状態で，3と4は南コーナー付近の覆土下層から正位と斜位の状態で，5・7・9は炉内覆土上面から意図的行為と思われる正位の重なり合いの状態で，6は南西壁際付近の覆土下層から，8は東コーナー寄りの覆土下層から正位の状態で出土している。10の椀は西コーナー寄りの床面直上から，潰れた甕の体部の間から正位の状態で出土している。11・12の甕は，11が南コーナー付近の覆土下層から，12が西コーナー付近の床面直上から共に横位の状態で出土している。第213図13・14・15の紡錘車は，それぞれ北西壁寄りの覆土下層，炉内覆土上面，南東壁際覆土下層から出土している。

所見　本跡は，床面から住居の建築材と思われる炭化材が多量に確認され，炭化材樹脂同定の分析でも住居建築材とする結果が出ている焼失家屋で，その後，人為的に埋め戻しが行なわれている。出土遺物から祭祀行為との関係及び特別な建物跡であったように考えられる住居跡である。時期は，5世紀後半と考えられる。

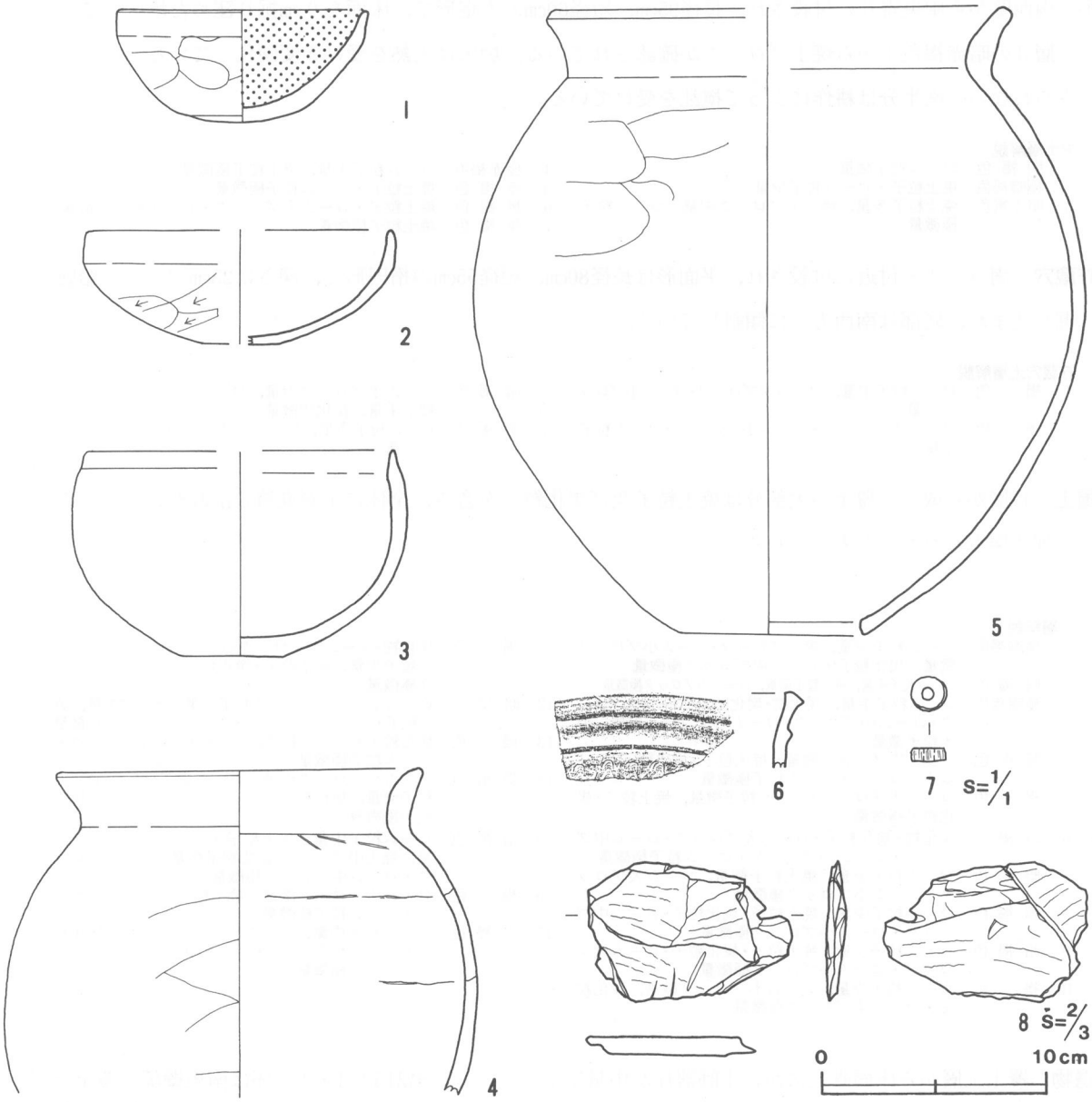
第27号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第212図 1	坏 土師器	A 12.7 B 6.5	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は内面に弱い稜を持ち，外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面磨き。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石 赤褐色 普通	P98 100% PL52 南東壁際覆土下層 二次焼成
2	坏 土師器	A 13.3 B 5.8	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は内削ぎ状に直立し，口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面磨き。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	P99 98% PL52 炉内覆土上面 二次焼成 内面剝離
3	坏 土師器	A 14.3 B 6.5 C 4.5	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は内面に稜を持ち，口唇部は内削ぎ状に尖り，直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ナデ。底部ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石 赤褐色 普通	P100 98% PL52 南コーナー付近覆土下層 二次焼成
4	坏 土師器	A 11.5 B 6.1 C 4.3	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は僅かに内傾し，その後直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・雲母・スコリア にぶい赤褐色 普通	P101 95% PL52 南コーナー付近覆土下層 二次焼成 内面剝離
5	坏 土師器	A 13.4 B 6.0 C 4.5	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は直立し，口唇部はやや反る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石・雲母・スコリア 赤褐色 普通	P102 95% 炉内覆土上面 二次焼成
6	坏 土師器	A 13.8 B 6.2 C 3.7	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は内削ぎ状に尖り，直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	P103 95% PL52 南西壁際付近覆土下層 二次焼成
7	坏 土師器	A 14.2 B 6.5	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石 赤褐色 普通	P104 100% PL53 炉内覆土上面 二次焼成 内面剝離
8	坏 土師器	A 12.4 B 6.4 C 4.4	平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	P105 100% PL52 東コーナー寄り覆土下層 二次焼成 内面剝離
9	坏 土師器	A 11.9 B 6.2 C 3.6	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は内削ぎ状に直立し，口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・石英・パミス 明赤褐色 普通	P107 95% PL53 炉内覆土上面 二次焼成 内面剝離
10	椀 土師器	A 9.7 B 7.6 C 3.6	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は内削ぎ状に直立し，口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。内面赤彩。	砂粒・長石・雲母 赤橙色 普通	P106 95% PL53 西コーナー寄り床面直上 二次焼成 内面剝離
11	甕 土師器	A [21.0] B (25.8)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら緩やかに立ち上がり，口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内・外面中位横ナデ，下位縦位のヘラナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・石英・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P109 40% PL53 南コーナー付近床面直上 二次焼成
12	甕 土師器	A 20.9 B 26.8 C 6.8	体部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石 橙色 普通	P108 60% PL53 西コーナー付近覆土下層 二次焼成

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第213図13	紡錘車	4.8	4.8	1.3	0.7	45.8	95	片岩	北西壁寄り覆土下層	Q85体部側面線刻PL55
14	紡錘車	4.8	4.8	1.4	0.8	49.8	100	片岩	炉内覆土上面	Q86体部外面線刻PL55
15	紡錘車	4.5	4.5	1.0	0.8	28.0	100	片岩	南東壁際覆土下層	Q87体部外面下位線刻PL55



第214図　第28号住居跡実測図



第215図　第28号住居跡出土遺物実測図

第28号住居跡（第214図）

位置　調査区の北東部，D5c7区。

規模と平面形　長軸7.46m，短軸6.94mの長方形。

主軸方向　N－63°－W

壁　壁高は14～33cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。床面の広い範囲から炭化材が少量ずつ確認されている。床面の踏み固まった硬化部分はみられない。耕作による撹乱を受けている。

ピット　5か所（P_1～P_5）。P_1，P_2，P_4は長径30cm，短径25cmの不整楕円形で，P_3は径25cmの円形である。深さはそれぞれ25～70cmである。各コーナーから中央寄りに付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は長径30cm，短径25cmの不整楕円形で，深さは15cmである。南東壁の中央部付近にあり，出入口ピットと考えられる。

炉　南西壁から中央寄りに付設され，長径95cm，短径60cmの不定形で，床面を9cm掘り窪めた地床炉である。土層3の暗赤褐色土から焼土ブロックが確認されている。炉床は火熱を受け赤変硬化している部分があまりみられない。南半分は耕作によって撹乱を受けている。

炉土層解説

1　明褐色　ローム粒子微量
2　極暗褐色　焼土粒子・ローム粒子少量
3　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，ローム粒子極微量
4　極赤褐色　ローム粒子少量，焼土粒子極微量
5　赤褐色　焼土粒子・ローム粒子極微量
6　黒褐色　焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子極微量
7　黒褐色　焼土粒子極微量

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は長径80cm，短径55cmの楕円形で，深さは25cmである。船底形に掘り込まれ，底部は南西方向に傾斜している。

貯蔵穴土層解説

1　褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
2　褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量
3　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量
4　明褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

覆土　17層から成る。覆土の大部分は焼土粒子及び炭化粒子を含み，全体に土層堆積の乱れがみられ，人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

1　極暗褐色　ローム粒子少量，焼土ブロック・ローム小ブロック微量，炭化粒子・ローム中ブロック極微量
2　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子微量，ローム小ブロック極微量
3　極暗褐色　ローム粒子中量，炭化物・炭化粒子・ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
4　暗褐色　ローム中ブロック微量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子極微量
5　褐色　ローム小ブロック・ローム粒子微量，焼土粒子・炭化粒子極微量
6　暗褐色　炭化物・炭化粒子・ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子極微量
7　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量，ローム大ブロック・ローム小ブロック極微量
8　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック極微量
9　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム大ブロック・ローム小ブロック極微量
10　褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，炭化粒子・ローム中ブロック極微量
11　褐色　炭化物・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム大ブロック極微量
12　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量，焼土粒子・ローム大ブロック・ローム中ブロック極微量
13　褐色　炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子極微量
14　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子・ローム大ブロック微量，炭化粒子極微量
15　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック少量，焼土中ブロック・炭化粒子微量，焼土小ブロック・ローム中ブロック極微量
16　褐色　ローム中ブロック微量，焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子極微量
17　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子・ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック極微量

遺物　覆土上層から床面直上にかけ土師器片が中量出土している。第215図1・2の坏は南東壁際の覆土上層及び覆土中層から出土している。3の椀は東コーナー付近の覆土下層から出土している土師器片が接合したものである。4の甕は南西寄りの覆土下層から出土し，5の甑は北西付近の覆土下層から出土している体部片と破片が接合したものである。6は須恵器の甕片で，口唇部付近に稜がみられ，稜の近くには波状文が施されている。7の臼玉は北寄りの覆土中層から，8の不明石製品は北西寄りの覆土下層から出土している。

所見　本跡は，当遺跡最大の住居跡である。床面の広範囲にわたって焼土と炭化材が確認されていることから焼失家屋と思われる。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第215図 1	坏 土師器	A　11.1 B　5.0	体部及び口縁部一部欠損。平底気味の丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部はほぼ直立するが，口唇部はやや反る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。内面赤彩，外面赤彩痕。	砂粒・パミス 橙色 普通	P110　55% 南東壁際覆土上層
2	坏 土師器	A［13.6］ B　5.0 C［3.4］	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部はやや内彎して，立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・石英・長石・パミス 浅黄橙色 普通	P111　30% 南東壁際覆土中層

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第215図 3	椀 土師器	A［13.6］ B　9.1 C　4.3	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内削ぎ状に立ち上がり直立する。口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ヘラ磨き，下位及び内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石 灰白色 普通	P112　35% 東コーナー付近 覆土下層
4	甕 土師器	A　16.3 B（14.4）	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・石英・長石・パミス にぶい赤褐色 普通	P114　25% 南西寄り覆土下層 二次焼成
5	甕形甑 土師器	A［21.0］ B　27.3 C　8.1	体部一部欠損。無底式で単孔が穿たれている。体部は内彎しながら立ち上がり，体部中位に最大径を持ち，口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P113　55% PL54 北西付近覆土下層

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第215図7	臼　玉	0.5	0.5	0.2	0.2	0.1	100	滑石	北寄り覆土中層	Q88
8	不明石製品	4.5	3.0	0.4	—	7.2	不明	粘板岩	北寄り覆土下層	Q89

第31号住居跡（第216図）

位置　調査区の北東部，C5i8区。

規模と平面形　長軸7.90m，短軸5.48mの長方形。

主軸方向　N－39°－E

壁　壁高は20～28cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　北東壁際の一部を除いて，ほぼ全周する。

床　平坦である。北西方向の広い範囲から少量の炭化材及び焼土粒子が確認されている。床面の踏み固まった硬化部分はみられない。耕作による撹乱を受けている。

ピット　4か所（P_1～P_4）。P_1～P_3は長径25～40cm，短径20～35cmの楕円形及び不整楕円形で，P_4は径25cmの円形である。深さ70～100cmで，各コーナーから中央寄りに付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。

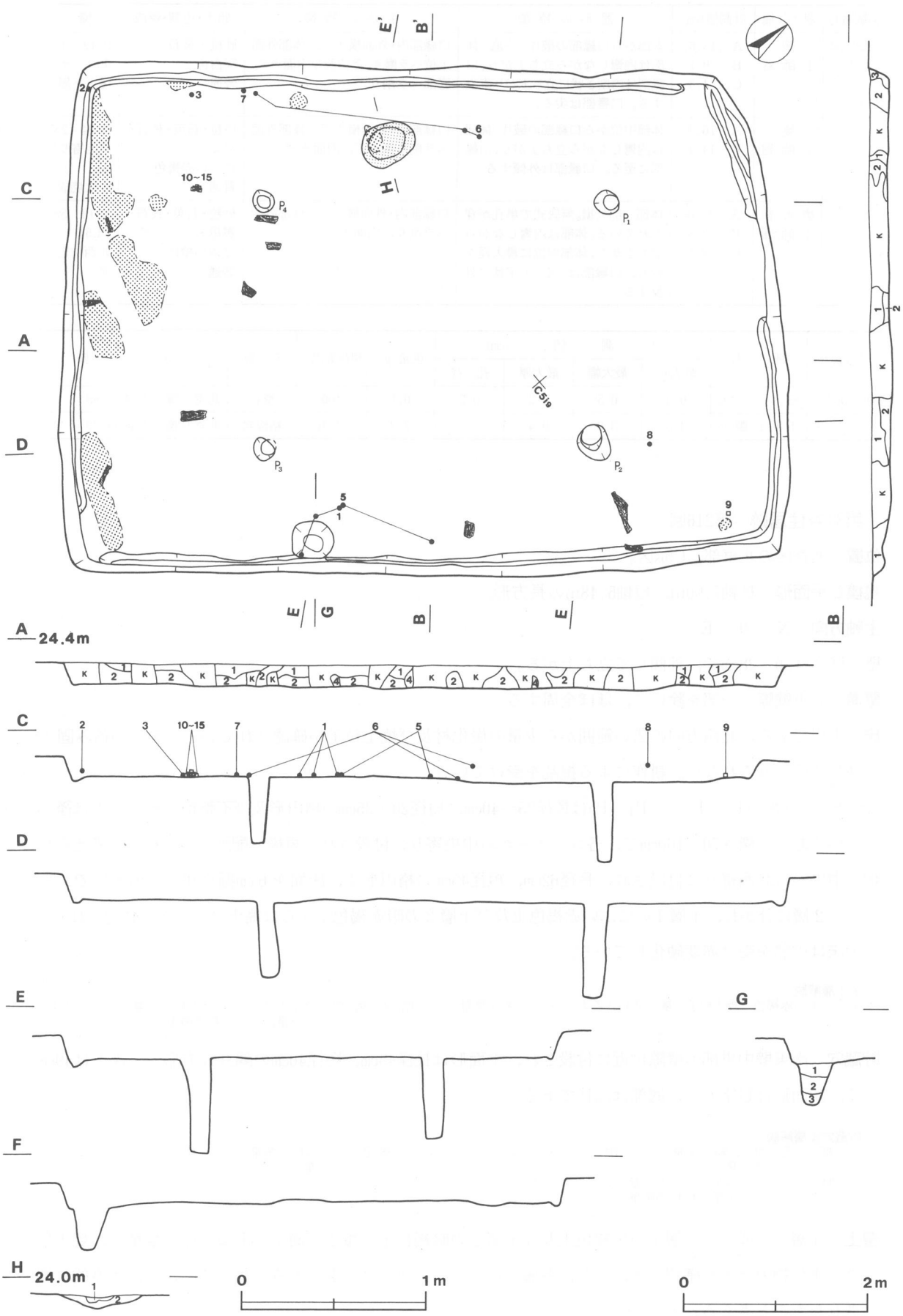
炉　中央から北西寄りに付設され，長径62cm，短径45cmの楕円形で，床面を6cm掘り窪めた地床炉である。覆土は2層に分かれ，土層1のにぶい赤褐色土及び土層2の暗赤褐色土からは焼土ブロックが確認されている。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説
1　にぶい赤褐色　焼土粒子少量，焼土小ブロック・ローム粒子微量
2　暗赤褐色　焼土中ブロック・焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，ローム粒子微量

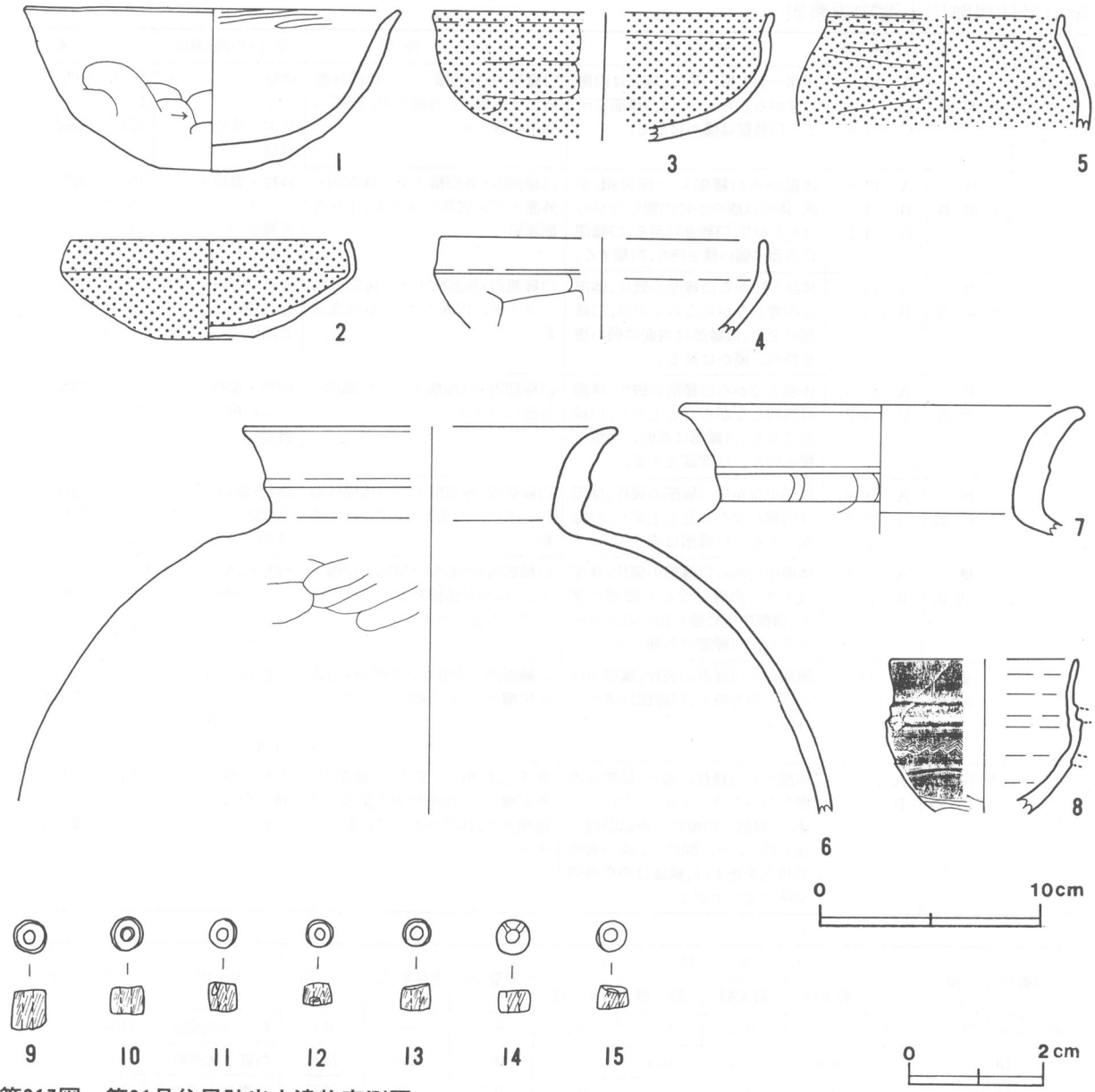
貯蔵穴　南東壁中央部の壁際付近に付設され，平面形は長径45cm，短径40cmの隅丸長方形で，深さは49cmである。断面形はU字形で，底部は皿状である。

貯蔵穴土層解説
1　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
2　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量
3　明褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

覆土　4層から成る。土層1の黒褐色土及び土層2の暗褐色土が覆土下層から上層に厚く堆積し，焼土ブロックと炭化物の混入が確認でき，また，各層にはロームブロックの混入もみられることから，人為的に埋め戻されたものと考えられる。



第216図　第31号住居跡実測図



第217図　第31号住居跡出土遺物実測図

覆土土層解説

1　黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物微量

2　暗 褐 色　ローム中ブロック・ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化材・炭化物微量

3　褐　　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック中量

4　褐　　色　ローム中ブロック多量，ローム粒子中量

遺物　覆土中層から床面直上にかけて土師器片が中量出土し，その他，須恵器片も出土している。第217図1の坏は，南東寄りの床面直上から逆位の状態で出土している坏に土師器片が接合したもので，2・3の坏は西コーナー付近の覆土下層と床面直上から出土している。5の椀は南東壁寄りの床面直上の土師器片が接合し，6の甕は北西寄りの床面直上から正位の状態で出土している口縁部に土師器片が接合したものである。7の甕は北西壁際の床面直上から，8の須恵器の把手付椀は東寄りの覆土中層から斜位の状態で出土している。9～15の臼玉は，9の臼玉が東コーナー付近の床面直上から出土している以外は，全て西寄りの床面直上から集中して出土している。

所見　本跡は，床面から確認された炭化材及び焼土から焼失家屋と考えられる。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第31号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第217図 1	坏 土師器	A 16.9 B 7.2 C 3.8	体部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口唇部は僅かに反る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面雑なヘラ削り，内面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・スコリア・パミス にぶい橙色 普通	P116 80% PL53 南東寄り床面直上 二次焼成
2	坏 土師器	A 12.6 B 4.4 C 4.2	体部から口縁部に一部欠損。平底。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は外面に弱い稜を持ち，内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。底部ヘラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・雲母・パミス 赤褐色 普通	P117 60% PL53 西コーナー付近 覆土下層
3	坏 土師器	A [15.3] B (5.7)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は内面に弱い稜を持ち，僅かに反る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・パミス 赤褐色 普通	P118 20% 西コーナー付近 床面直上
4	坏 土師器	A [14.8] B (4.2)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は外面に明瞭な稜を持ち，ほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P119 20% 覆土中
5	椀 土師器	A [10.6] B (5.0)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・雲母・パミス 赤褐色 普通	P120 10% 南東壁寄り床面 直上
6	甕 土師器	A [17.0] B 17.3	体部中位から口縁部の破片。体部は大きく内彎しながら頸部に至る。頸部中位に張り出しのある段を持ち，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面及び頸部上位横ナデ，下位及び体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・パミス にぶい褐色 普通	P121 15% 北西寄り床面直上
7	甕 土師器	A 18.3 B (5.3)	頸部から口縁部の破片。頸部中位に弱い稜を持ち，口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面及び頸部内・外面中位横ナデ，下位縦位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石・パミス にぶい黄橙色 普通	P122 5% 北西壁際床面直上
8	把手付椀 須恵器	A [8.5] B (6.9)	体部から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，中位に1条，口縁部との境に2条の凸線と段を持ち，その間に，7条の櫛描波状文を施す。口縁部はやや外傾気味に立ち上がる。	巻き上げ，横ナデ整形。口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位及び内面横ナデ，体部外面下位回転ヘラナデ。	砂粒・長石 黄灰色 良好	P123 15% PL53 東寄り覆土中層

図版番号	種　別	計測値(cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第217図9	臼　玉	0.5	0.5	(0.6)	0.2	(0.2)	80	滑石	東コーナー付近床面直上	Q90
10	臼　玉	0.5	0.5	0.4	0.2	0.2	100	滑石	西寄り床面直上	Q91
11	臼　玉	0.5	0.5	0.4	0.2	0.2	100	滑石	西寄り床面直上	Q92
12	臼　玉	0.4	0.4	0.3	0.2	0.1	100	滑石	西寄り床面直上	Q93
13	臼　玉	0.4	0.4	0.4	0.2	0.2	100	滑石	西寄り床面直上	Q94
14	臼　玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	西寄り床面直上	Q95
15	臼　玉	0.4	0.4	0.3	0.2	0.1	100	滑石	西寄り床面直上	Q96

第33号住居跡（第218図）

位置　調査区の北西部，C4f2区。

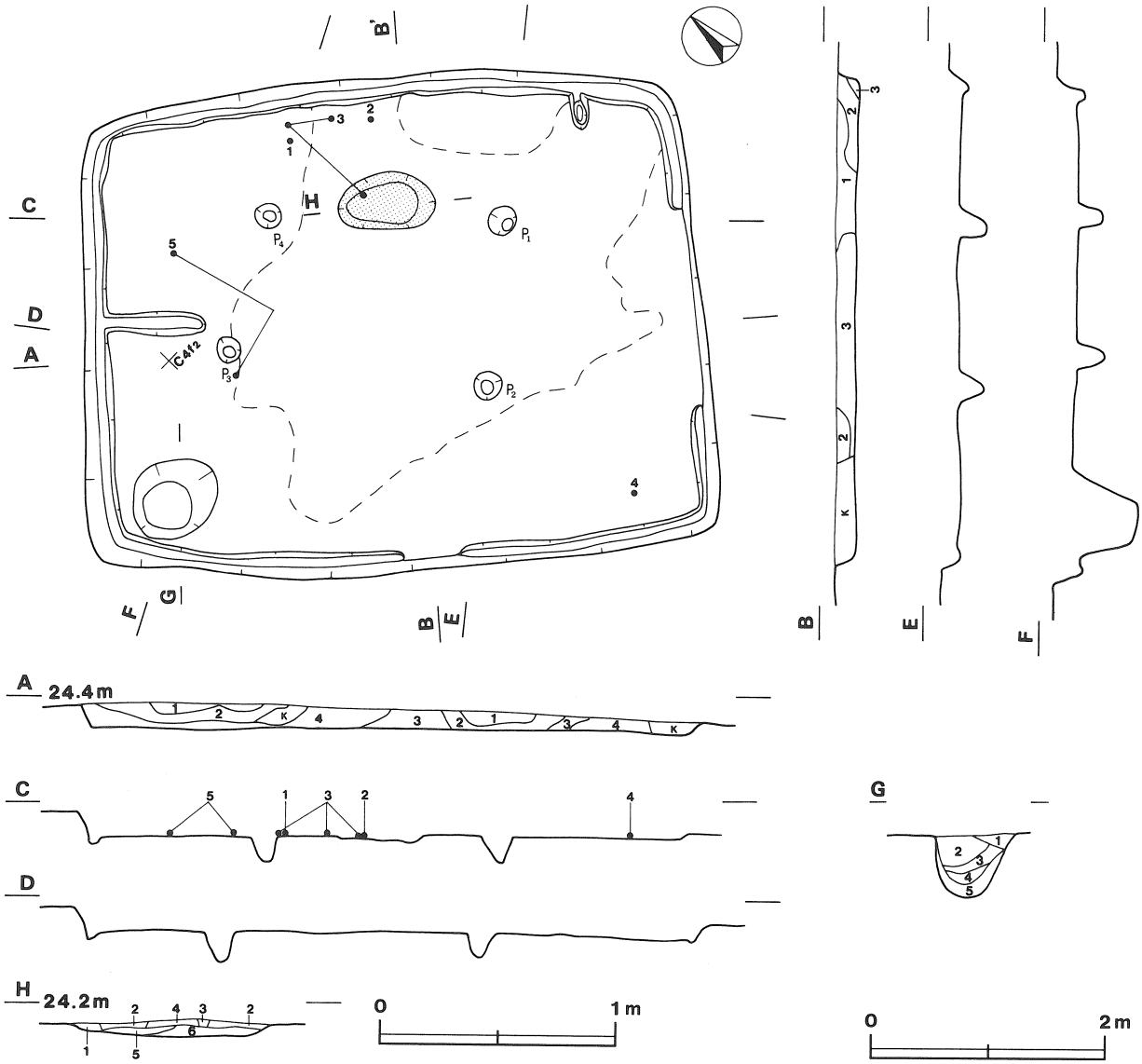
規模と平面形　長軸5.40m，短軸4.20mの長方形。

主軸方向　N－47°－W

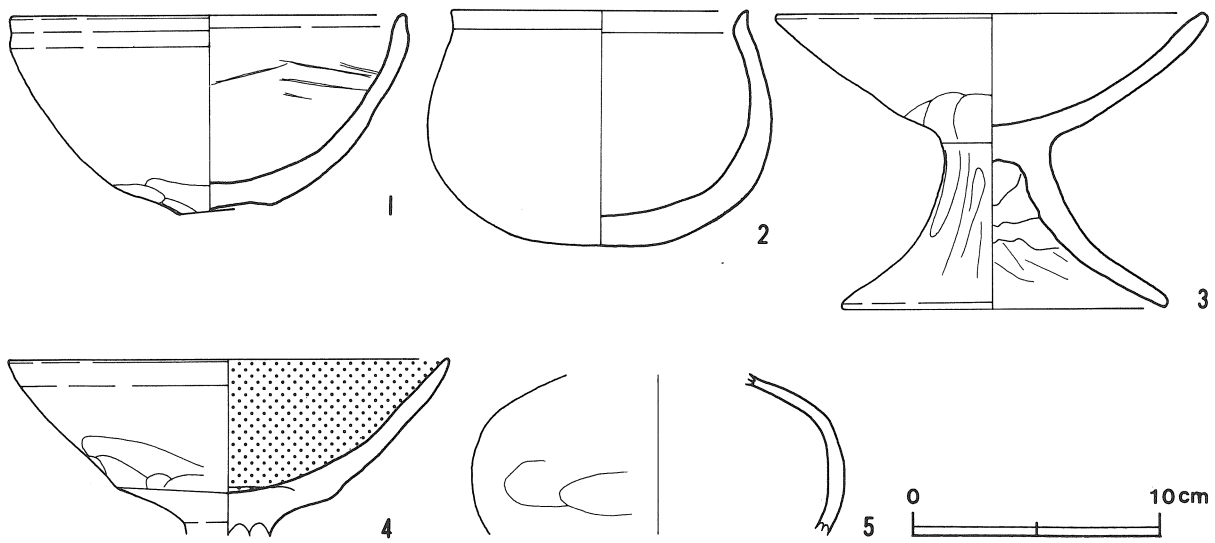
壁　壁高は9～23cmで，垂直に立ち上がる。

壁溝　南東壁際と南西壁際の一部を除いて，ほぼ全周する。

間仕切り溝　北東壁から1条，北西壁から1条それぞれ中央に向かって伸びている。幅15～20cm，深さ7～14cmで，断面はU字形である。北東壁から伸びる間仕切り溝はピット状に深い掘り込みを持っている。



第218図　第33号住居跡実測図



第219図　第33号住居跡出土遺物実測図

床　平坦である。中央付近の床面には踏み固まった硬化部分の広がりがみられる。

ピット　4か所（P_1～P_4）。P_2，P_4は長径23～25cm，短径20～23cmの楕円形で，P_1，P_3は径20～25cmの円形である。深さは20～25cmで，それぞれ中央寄りに付設され，配列的には他の住居で確認できたピットより接近し過ぎているが，主柱穴と考えられる。

炉　中央から北東寄りに付設され，長径85cm，短径50cmの楕円形で，床面を7cm掘り窪めた地床炉である。下層にあたる土層5，6のにぶい赤褐色土及び赤褐色土からは焼土ブロックが中量ないし多量確認されており，土層3の暗褐色土には粘土粒子の混入もみられる。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

1	暗赤褐色	焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック少量，炭化物・ローム粒子微量
2	褐色	焼土小ブロック中量，焼土粒子・炭化物少量，ローム粒子微量
3	暗褐色	焼土小ブロック・焼土粒子中量，炭化物・ローム粒子微量
4	にぶい赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子中量，炭化物・ローム粒子・粘土粒子少量
5	にぶい赤褐色	焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子中量，ローム粒子少量，ローム粒子極微量
6	赤褐色	焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子多量，炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子微量

貯蔵穴　西コーナー付近に付設され，平面形は長径80cm，短径65cmの楕円形で，深さは55cmである。断面はU字形で，底部は皿状である。

貯蔵穴土層解説

1	暗褐色	ローム粒子中量，炭化物・ローム小ブロック微量
2	暗褐色	ローム小ブロック中量，炭化物・ローム粒子少量，焼土粒子・ローム中ブロック微量
3	黒褐色	炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
4	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量
5	褐色	ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量

覆土　4層から成る。覆土は，全体的に堆積状況に乱れがみられ，各層にはロームブロックの混入が確認され，南東及び北西方向からの人為的な埋め戻しが行われたものと考えられる。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック微量
2	暗褐色	ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
3	褐色	ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
4	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物少量

遺物　北寄りの床面直上から土師器片が中量出土している。第219図1の坏は，北寄りの床面直上から正位の状態で出土している3の高坏の下から，重なり合うように正位の状態で出土している。2の椀は北東壁際付近の床面直上から，4の高坏は南コーナー付近の床面直上から正位の状態で出土している。5の坩は北寄りの床面直上から出土している土師器片が接合したものである。

所見　本跡の時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第33号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第219図 1	坏 土師器	A 15.6 B 8.0 C 3.8	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は偏平で，外傾して立ち上がる。口縁部外面に弱い稜を持ち，口唇部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ナデ，下位ヘラ削り，内面ヘラナデ。底部ヘラ削り。体部内面ヘラ描き痕。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P124 80% 北寄り床面直上 二次焼成
2	椀 土師器	A 11.9 B 9.4	体部から口縁部一部欠損。平底気味の丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は内削ぎ状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・長石 褐灰色 普通	P128 65% PL53 北東壁際付近床面直上 二次焼成
3	高坏 土師器	A 17.1 B 11.8 D [12.8] E 6.6	裾部及び坏部一部欠損。脚部はラッパ状に下方に開く。坏部下位に弱い稜を持ち，外上方に開く。	口縁部内面横ナデ。坏部外面ヘラナデ，内面ナデ。坏部下位から脚部縦位のヘラナデ。脚部内面輪積み痕。	砂粒・石英・長石 にぶい橙色 普通	P126 75% PL53 北寄り床面直上

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第219図 4	高　坏 土師器	A　18.6 B（7.1）	坏部の破片。下位に稜を持ち，外上方に開く。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラナデ，内面ナデ。内面赤彩。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P127　40% 南コーナー付近 床面直上 外面煤付着
5	坩 土師器	B（6.4）	体部中位の破片。中位は潰れた球形状を呈する。	体部内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P125　10% 北寄り床面直上 体部外面煤付着

第34号住居跡（第220図）

位置　調査区の北西部，C4d3区。

規模と平面形　長軸1.98m，短軸1.96mの方形。

主軸方向　N－23°－E

壁　壁高は5～10cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であるが，踏み固められた堅緻な部分はみられない。

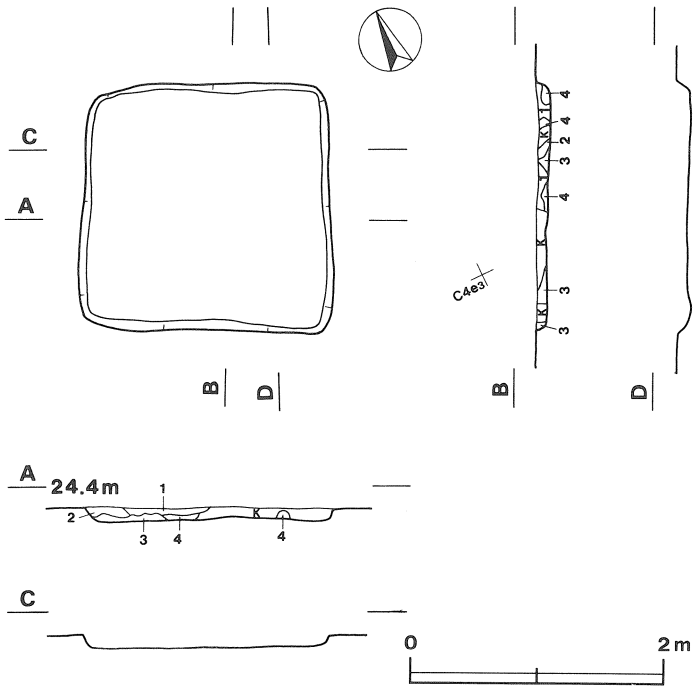
覆土　4層から成る。土層1，2の黒褐色土及び褐色土には炭化物及びロームブロックの混入が見られ，南東方向から埋め戻されたものと考えられる。人為堆積である。

土層解説

1　黒褐色　炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
2　褐　色　ローム粒子中量，炭化物・ローム小ブロック少量
3　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
4　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物　確認面に近い覆土上層から少量の土師器片が出土していたが，遺構に伴う出土遺物なのかは確認できなかった。

所見　本跡は，当遺跡の中で最も小型の建物跡で，炉，柱穴及び貯蔵穴の内部施設が確認されないことから，住居以外の目的をもった遺構と考えられる。特に，位置関係から隣接する住居跡との関係が推測できる。時期は，出土している土師器片の様相から5世紀後半頃と思われる。



第220図　第34号住居跡実測図

第36号住居跡（第221図）

位置　調査区の北西部，C4b3区。

規模と平面形　長軸6.00m，短軸5.80mの方形。

主軸方向　N－13°－E

壁　壁高は22～37cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　東壁及び南壁の一部を除いて周回する。幅25cm，深さは15～25cmで，断面はU字形である。

床　ほぼ平坦である。床面は壁沿いを除いて全体が踏み固められ，堅緻である。

ピット　4か所（P_1～P_4）。P_1～P_4は長径85～100cm，短径70～100cmの楕円形及び不定形で，深さは95～100cmである。何れも各コーナーから中央寄りに付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。各ピットとも柱穴の周囲を大きく擂鉢状に掘り込み，その後，深く掘り下げている。

ピット土層解説

1　黒褐色　炭化物・ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，ローム中ブロック極微量
2　暗褐色　炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子微量，焼土粒子極微量
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，炭化物微量
4　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック微量

炉　中央から西壁寄りに付設され，長径110cm，短径65cmの楕円形で，床面を6cm掘り窪めた地床炉である。覆土は2層に分かれ，いずれも暗赤褐色土で焼土ブロックを含み，炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，炭化物・ローム中ブロック少量，ローム粒子極微量
2　暗赤褐色　焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子中量，炭化物・ローム粒子微量

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は径70cmの円形で，深さ65cmである。南東壁は垂直に立ち上がり，西壁は傾斜して立ち上がっている。底部は平坦である。覆土中層から上層の堆積土には焼土粒子や炭化物の混入が確認されている。

貯蔵穴土層解説

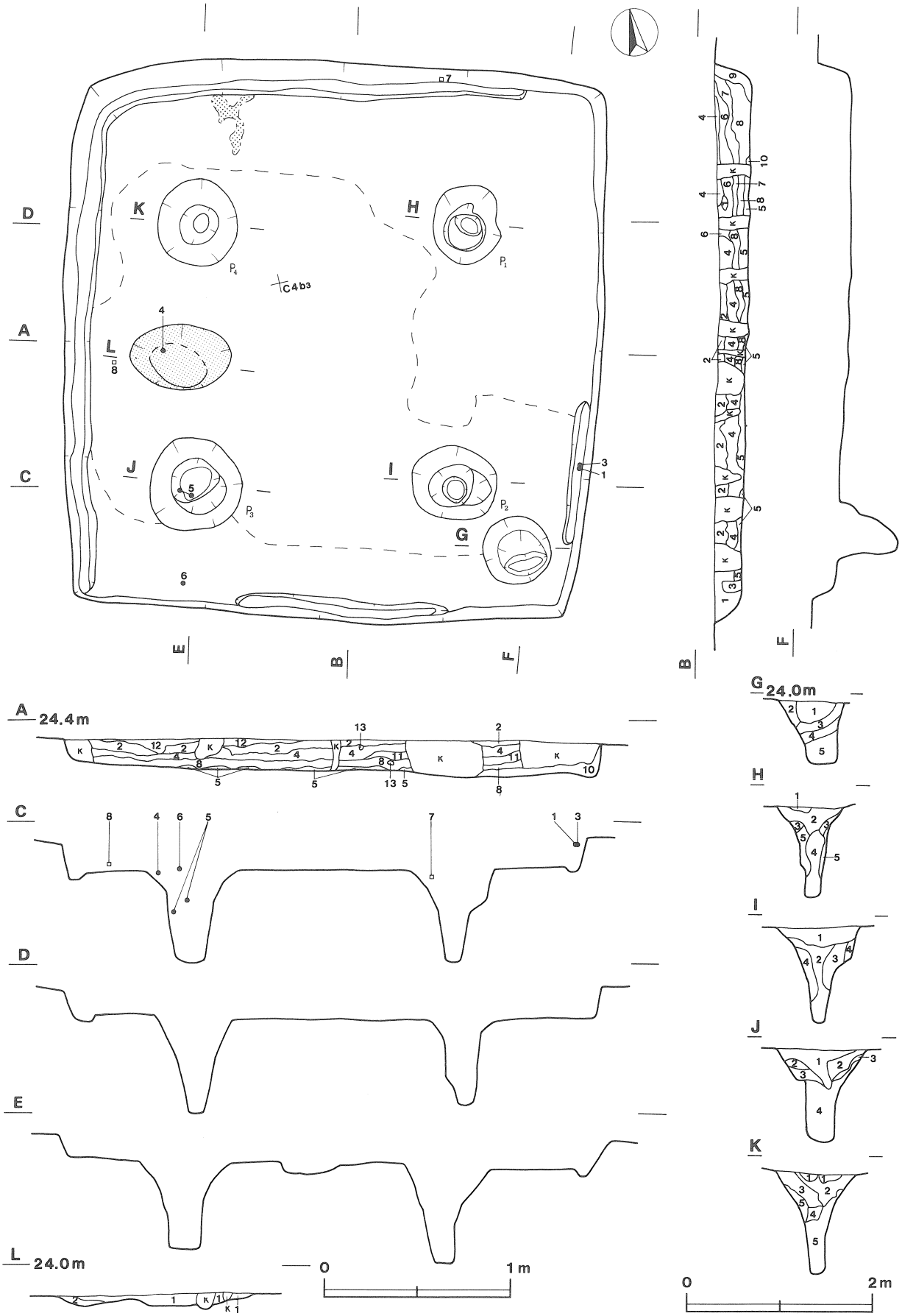
1　黒褐色　焼土粒子・炭化物・ローム中ブロック・ローム小ブロック微量，ローム粒子極微量
2　極暗褐色　ローム小ブロック微量，焼土粒子・炭化物・ローム粒子極微量
3　黒褐色　焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子極微量
4　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量
5　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量

覆土　13層から成る。土層10の褐色土を除く各層から焼土粒子が確認され，土層9，10，12以外の各層からは炭化粒子も確認されている。覆土の堆積状況に大きな乱れはみられないが，覆土中の混入物から人為的に埋め戻しが行われたものと考えられる。

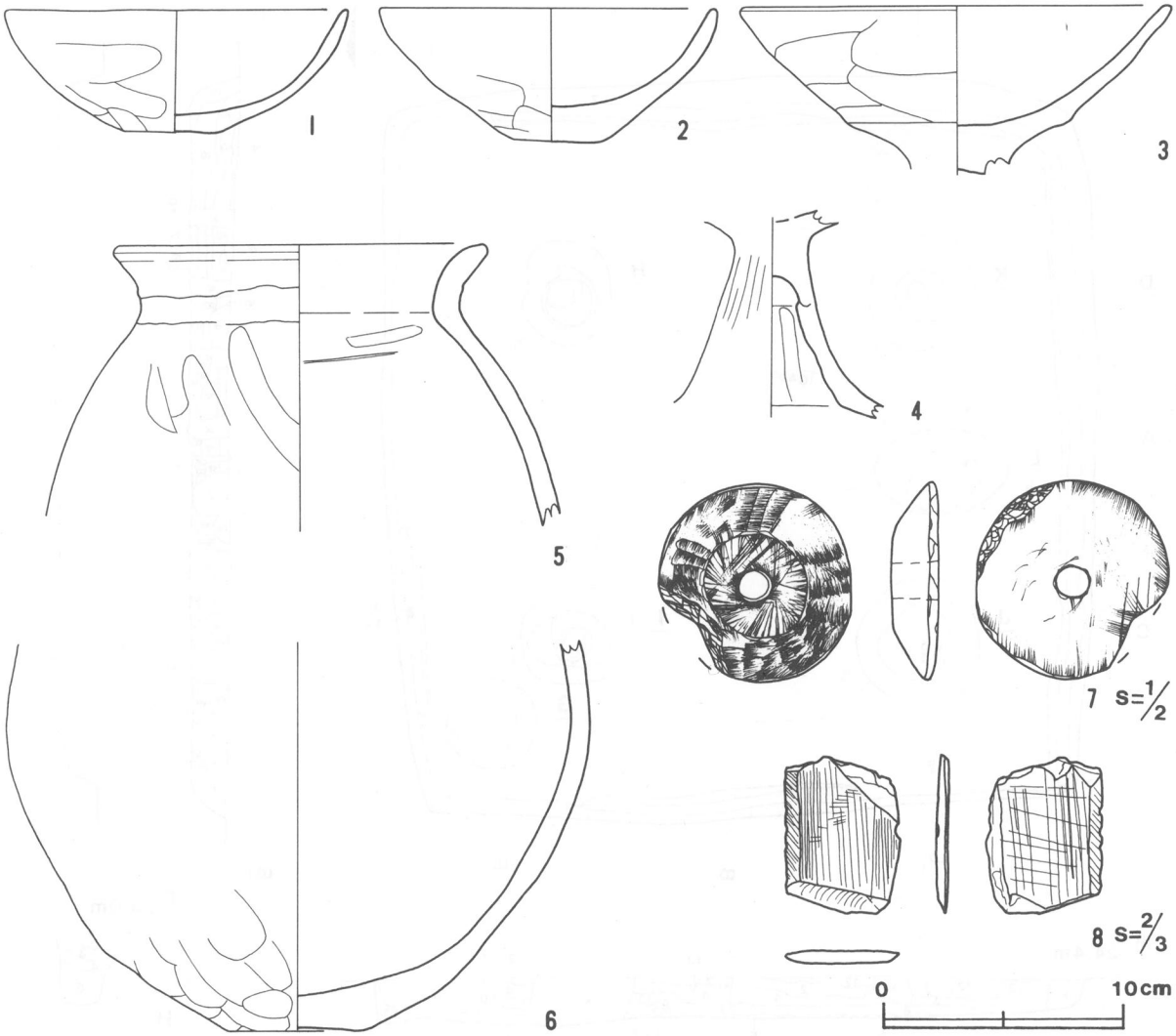
土層解説

1　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子微量，炭化粒子・ローム小ブロック極微量
2　極暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック極微量
3　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量
4　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子微量，炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック極微量
5　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
6　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック極微量
7　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子極微量
8　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック極微量
9　褐　色　焼土粒子微量，ローム粒子極微量
10　褐　色　ローム小ブロック微量，ローム中ブロック・ローム粒子極微量
11　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック極微量
12　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック極微量
13　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物　覆土上層から床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第222図1の坏と3の高坏は，正位の状態で出土している坏に高坏の坏部が逆位に伏せた状態で出土し，その内部からアカニシが1点出土している。4の高坏は北西寄りの床面直上から，6の甕は南寄りの床面直上から斜位の状態で出土している。5の甕はP_3の覆土中層位から出土している土師器片が接合したものである。その他，7の紡錘車が北壁際の壁溝の中



第221図　第36号住居跡実測図



第222図　第36号住居跡出土遺物実測図

から，８の不明石製品は西壁寄りの覆土下層から出土している。

所見　本跡は，当遺跡の住居跡の中でも取り分け大きな柱穴痕がみられ，出土遺物などから祭祀行為との関係が考えられる。時期は，５世紀後半と思われる。

第36号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第222図 1	坏 土師器	A 14.0 B 5.3 C 3.8	体部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ナデ。底部ヘラ削り。内・外面赤彩痕。	砂粒・長石・雲母 にぶい赤橙色 普通	P133　75% PL54 覆土上面 二次焼成
2	坏 土師器	A 13.9 B 5.5 C 3.8	体部から口縁部一部欠損。平底。体部は外上方に立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P134　65% 覆土中
3	高　坏 土師器	A 17.9 B (6.5)	坏部の破片。下位に明瞭な稜を持ち，外上方に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。	砂粒・石英・パミス にぶい褐色 普通	P135　40% PL54 覆土上面
4	高　坏 土師器	B (8.5) E (7.2)	脚部の破片。下方に，ラッパ状に開く。	脚部外面縦位のヘラナデ。内面輪積み痕。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	P136　20% 北西寄り床面直上

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第222図 5	甕 土師器	A 15.0 B (11.0)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラナデ，内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P137 20% 覆土中 二次焼成
6	甕 土師器	B (15.9) C 5.8	体部から体部中位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面雑なヘラ削り，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母・パミス にぶい黄橙色 やや不良	P138 45% 南寄り床面直上 内面煤付着

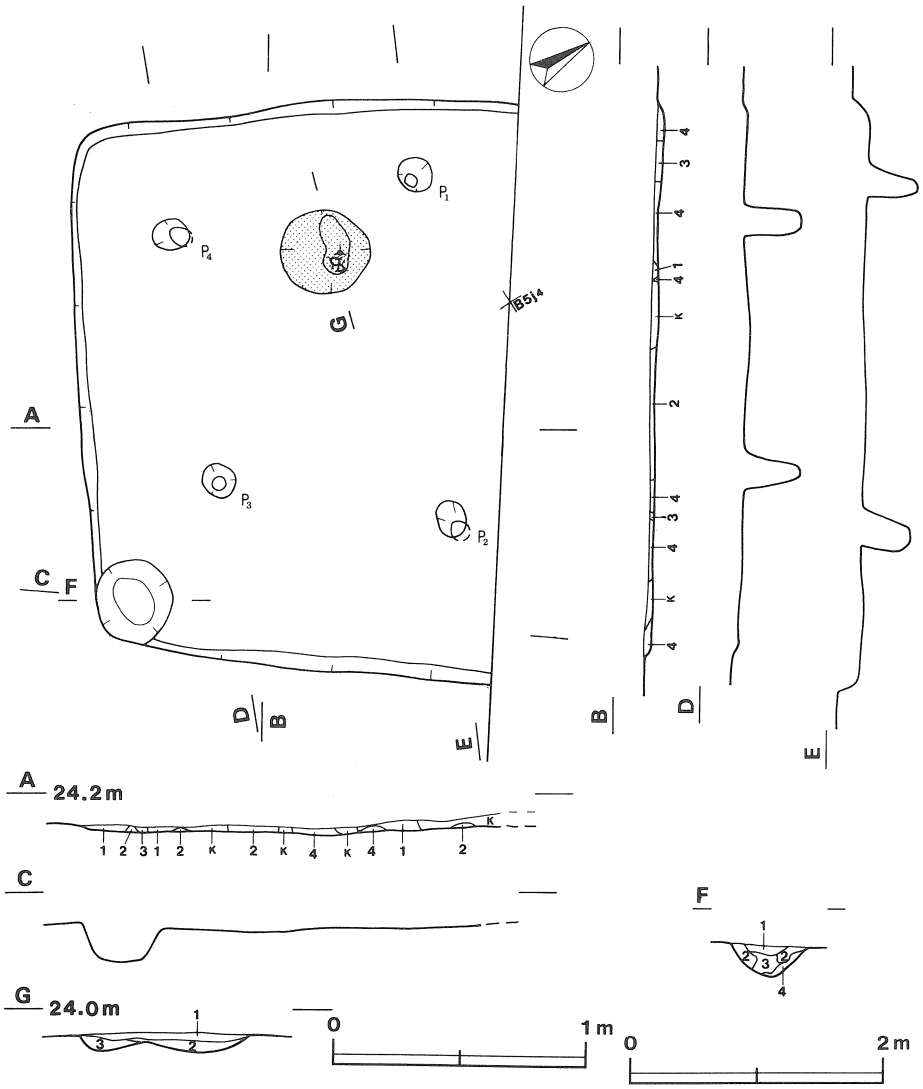
図版番号	種　別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第222図 7	紡錘車	(5.4)	5.3	1.3	0.9	50.4	80	片岩	北壁溝覆土中	Q99 PL55 体部外面線刻
8	不明石製品	3.2	2.3	0.2	—	2.9	不明	粘板岩	西壁寄り覆土下層	Q100

第43号住居跡（第223図）

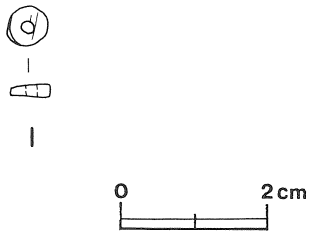
位置　調査区の北部中央，B5j3区。

規模と平面形　長軸4.62m，短軸（3.63）mで，本跡の北側は調査区外に延びているため，平面形は長方形と推定される。

主軸方向　N—60°—W



第223図　第43号住居跡実測図



第224図　第43号住居跡出土遺物実測図

壁　壁高は2～15cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦である。床面には踏み固められた堅緻な部分がみられない。

ピット　4か所（P_1～P_4）。P_1～P_4は長径27～30cm，短径25～27cmの楕円形及び不整楕円形で，深さは35～45cmである。何れも各コーナーから中央寄りに付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。

炉　中央からやや西壁寄りに付設され，径70cmの円形で，床面を8cm掘り窪めた地床炉である。土層1，2のにぶい赤褐色土及び赤褐色土には焼土ブロックの混入が確認された。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

1　にぶい赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，焼土中ブロック・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　赤　褐　色　焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子多量，ローム粒子微量
3　褐　色　ローム中ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量

貯蔵穴　南コーナー付近に付設され，平面形は径60cmの円形で，深さ25cmである。断面はU字状で，底部は皿状である。

貯蔵穴土層解説

1　極暗赤褐色　炭化物・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量，焼土小ブロック極微量
2　極暗赤褐色　ローム中ブロック中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　黒　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，ローム粒子少量
4　暗赤褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

覆土　4層から成る。覆土の堆積状況は浅く，全体の層位の把握は困難であるが，土層1，3の焼土粒子及び土層1～3の炭化物の混入をみると，人為的に埋め戻しが行われたものと考えられる。

土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物・ローム中ブロック微量
2　褐　色　ローム中ブロック・ローム粒子中量，炭化物微量
3　黒褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム粒子微量
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

遺物　覆土上層から土師器片が少量と，覆土中から臼玉が1点出土している。

所見　本跡の時期は，出土している土師器片から5世紀後半と考えられる。

第43号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種　別	計測値（cm）				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第224図1	臼　玉	0.5	0.5	0.2	0.1	0.1	100	片岩	覆土中	Q101

（2）竪穴遺構

竪穴住居跡として調査した第29号，31号及び32号住居跡は，内部施設を付設せず，遺構の確認状況が他の住居跡と明確に区別できるため，住居以外の目的をもつ建物跡と考えられる。そこで，これらの3軒を第1～3号竪穴遺構とし，遺構と遺物について記載する。

第１号竪穴遺構（第225図）

位置　調査区の北東部，$C5_{j6}$区。

規模と平面形　長軸4.36m，短軸3.87mの長方形。

長軸方向　N－57°－W

壁　壁高は７～14cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦で，踏み固まった部分はみられない。

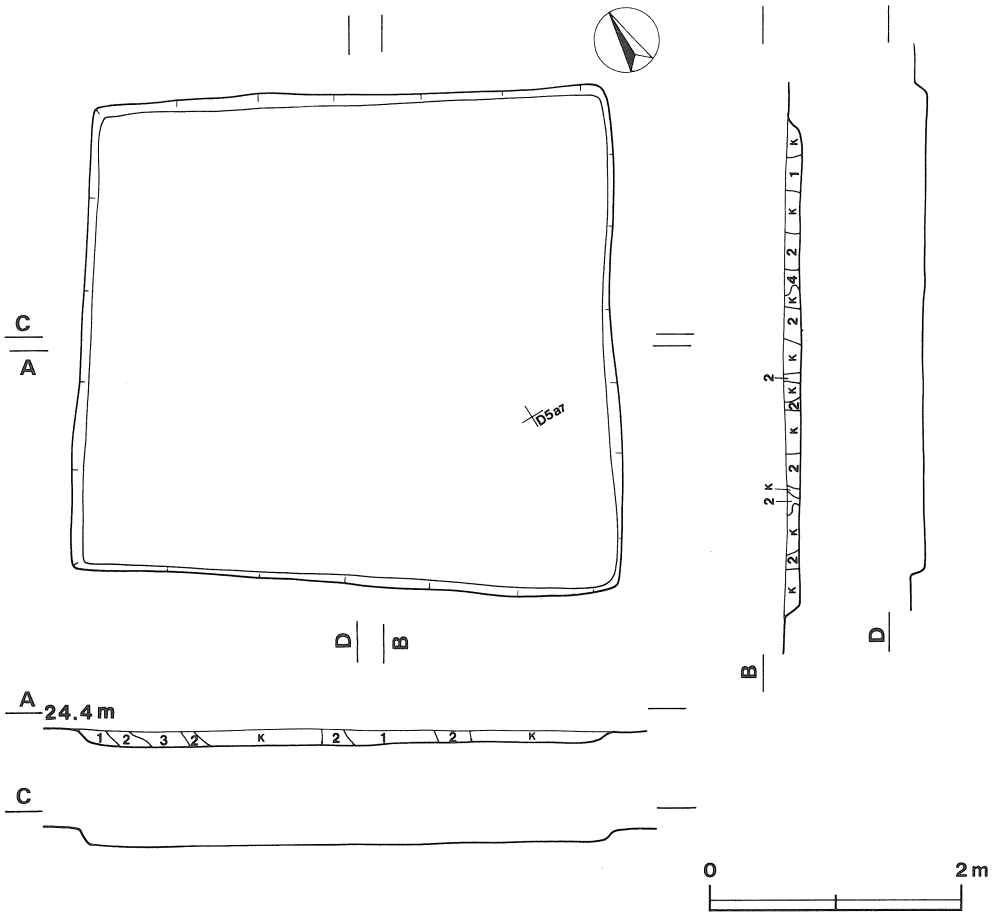
覆土　３層から成る。にぶい褐色土及び褐色土にはロームブロックの混入が確認され，層位の乱れもみられ，人為堆積の様相を呈している。

土層解説

1　にぶい褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
2　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
3　褐　　色　ローム中ブロック・ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

遺物　覆土中から土師器の坏，甕片が79点と，須恵器片が２点出土している。

所見　本跡は，住居跡にみられる内部施設を持たず，住居以外の目的をもった建造物であったように考えられる。時期は，出土している土師器片の様相から，５世紀後半頃と考えられる。

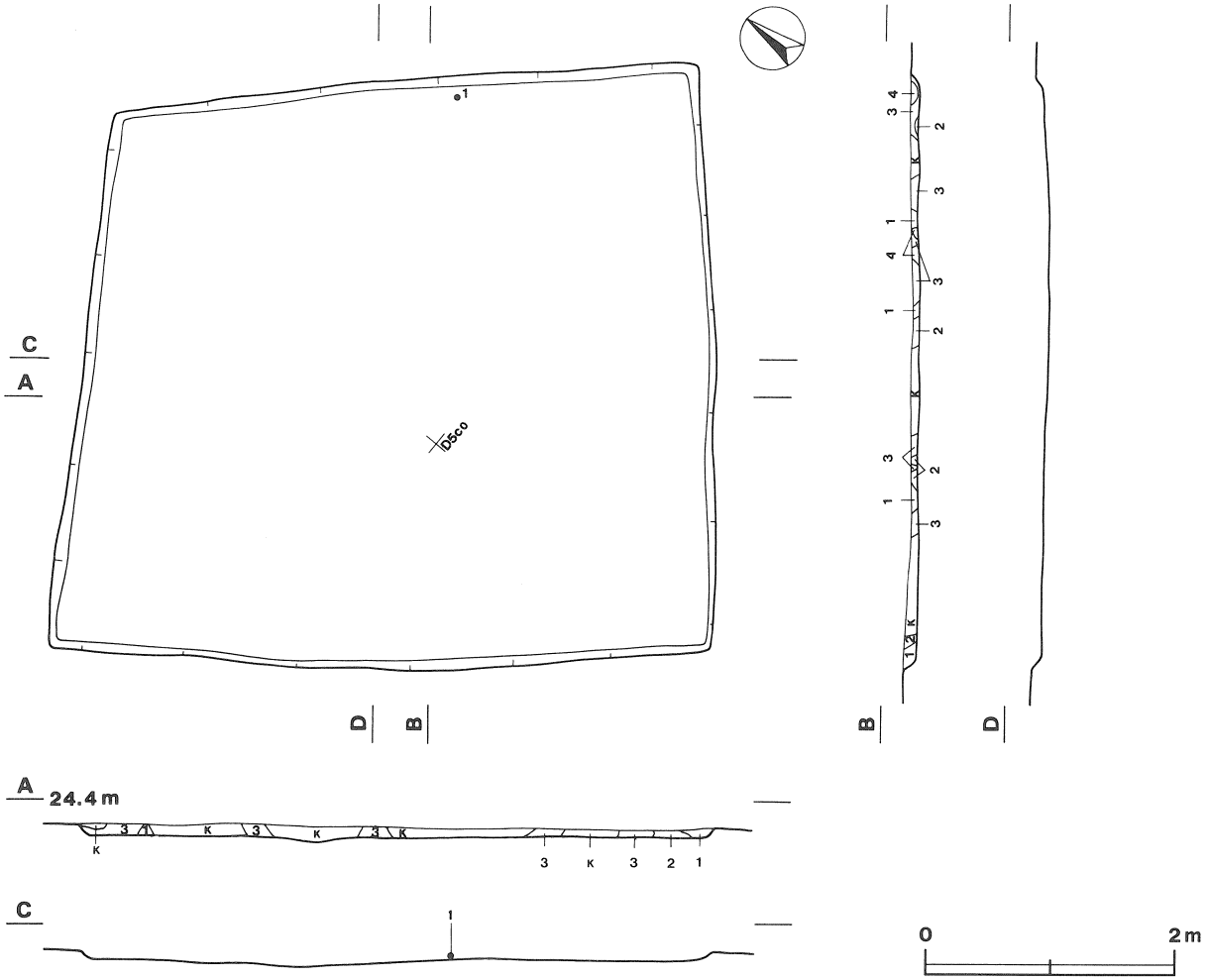


第225図　第１号竪穴遺構実測図

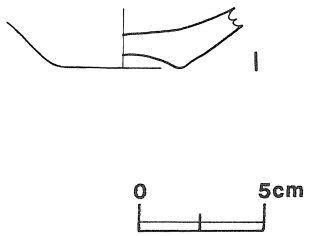
第２号竪穴遺構（第226図）

位置　調査区の北東部，$D5_{c0}$区。

規模と平面形　長軸5.29m，短軸4.69mの長方形。



第226図　第２号竪穴遺構実測図



第227図　第２号竪穴遺構出土遺物実測図

長軸方向　N－40°－W

壁　壁高は４～９cmで，外傾して立ち上がる。

床　やや凹凸がみられ，踏み固まった部分はみられない。

覆土　３層から成る。各層にはロームブロックの混入がみられ，中央部の一部には堆積状況のやや乱れも確認できることから，人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説
1　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
2　明 褐 色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック微量
3　暗 褐 色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子微量

遺物　覆土中から坏片２点，甕片22点が出土しているが，掘り込みが浅く，遺構に伴うものは甕片の中の１点

である。

所見　本跡は，住居跡にみられる内部施設を持たず，規模的には他の住居と変わらぬ様相を呈するが，遺構の確認状況が明確でないこともあり，ここでは竪穴遺構として扱った。時期は，覆土中から出土している土師器片から5世紀後半頃と考えられる。

第2号竪穴遺構遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第227図 1	甕 土師器	B (1.7) C 4.7	底部から体部下位の破片。上げ底気味の平底。	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・パミス にぶい赤褐色 普通	P115　5% 覆土中 体部外面煤付着

第3号竪穴遺構（第228図）

位置　調査区の北西部，C4c8区。

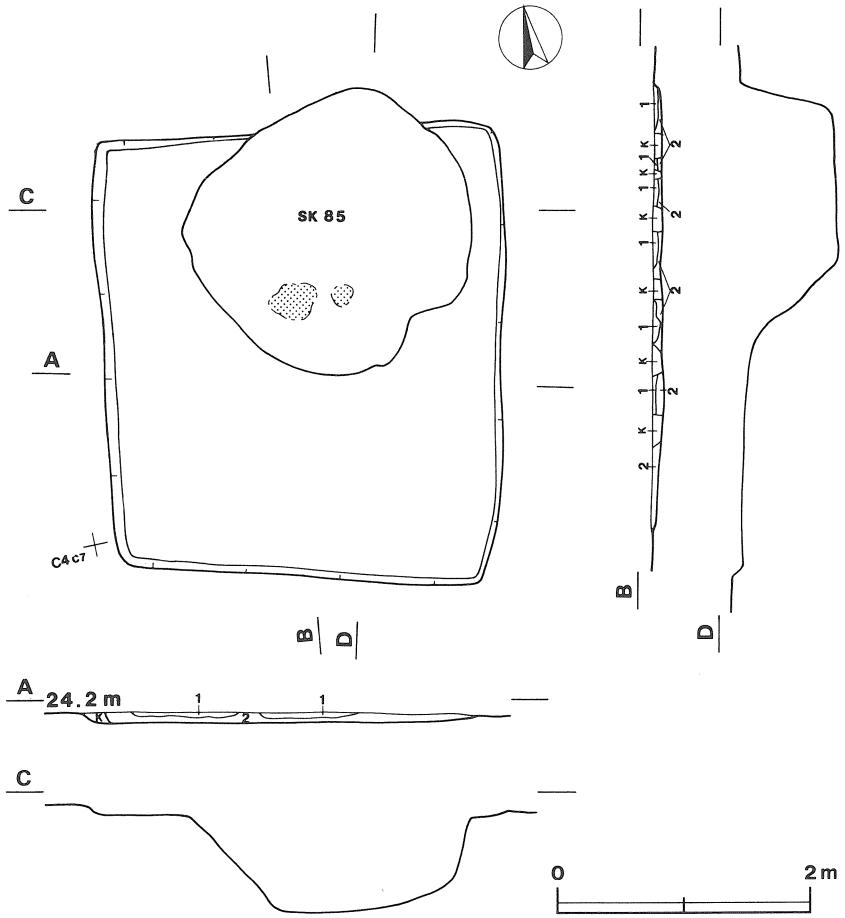
重複関係　本跡の中央部から北壁の一部にかけ，第85号土坑によって掘り込まれている。本跡の方が古い。

規模と平面形　長軸3.66m，短軸3.14mの長方形。

長軸方向　N－27°－E

壁　壁高は3～9cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床　土坑によって掘り込まれているため，全体の様子は把握できないが，おおよそ平坦な形状を呈しているものと思われる。踏み固まった部分はみられない。



第228図　第3号竪穴遺構実測図

覆土　2層から成る。いずれもロームブロックを含む褐色土である。

土層解説

1	褐　色	ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量	2	褐　色	ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

遺物　覆土中から極少量の土師器片が出土している。

所見　本跡は，住居跡にみられる内部施設を持たず，生活痕跡がみられないことから，住居以外の目的をもった建造物として建てられた可能性が考えられる。時期は，出土している土師器片の様相から5世紀後半頃と考えられる。

（3）土坑

今回の調査では，古墳時代の土坑を2基確認した。以下，確認した遺構と遺物について記載する。

第37号土坑（第229図）

位置　調査区の中央部，E5$_{b2}$区。

規模と平面形　長径2.12m，短径2.08mの不整円形で，深さは2.37mである。

長径方向　N－49°－W

壁面　底部から中位にかけ壁は垂直に立ち上がり，その後，外傾して立ち上がる。

底面　平坦。粘土層で堅い。

覆土　9層から成る。覆土中層位まで堆積する第1，2，4，5層は焼土粒子及び炭化物を含み，土層7以下は粘土粒子及び粘土ブロックを含み，砂の混入もみられる。覆土下層から中層は自然堆積と考えられるが，上層は人為的に埋め戻されたものと思われる。

土層解説

1	極暗褐色	焼土粒子中量，炭化物・ローム小ブロック少量，焼土粒子・ローム粒子微量	6	にぶい褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量
2	褐　色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物微量	7	橙　色	ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，粘土粒子・粘土ブロック少量
3	にぶい褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量	8	橙　色	ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，ローム小ブロック・粘土粒子微量
4	褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物・ローム中ブロック微量	9	にぶい橙色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，粘土粒子・粘土ブロック微量
5	褐　色	ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量			

遺物　覆土中層から上層にかけ土師器片が少量出土している。第230図1の坏，2の甕はいずれも覆土上層から中層位にかけて出土したものである。

所見　本跡は，底面から白色粘土が確認され，詳細な性格は不明であるが，遺構の形状から井戸状遺構の可能性もある。本跡の時期は，出土遺物から5世紀後半と思われる。

第81号土坑（第229図）

位置　調査区の南部，G4$_{h6}$区。

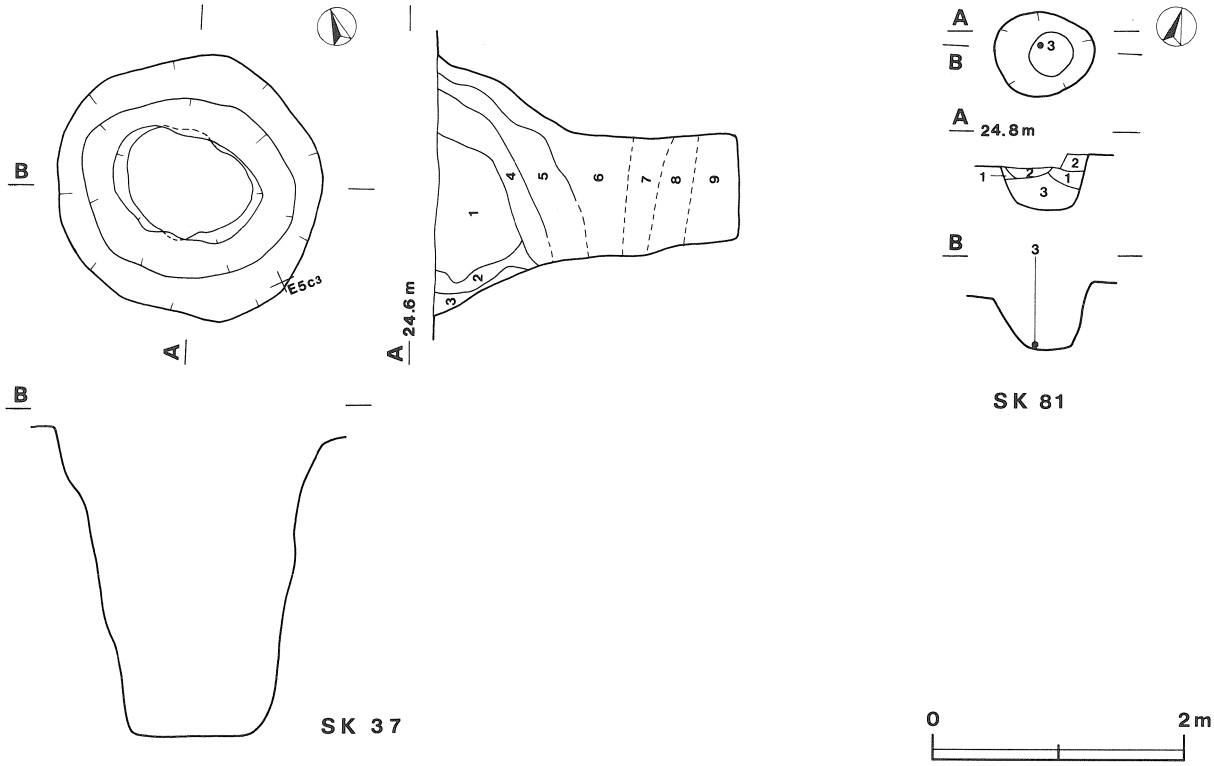
重複関係　本跡は，第3号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形　長径0.79m，短径0.65mの楕円形で，深さは0.48mである。

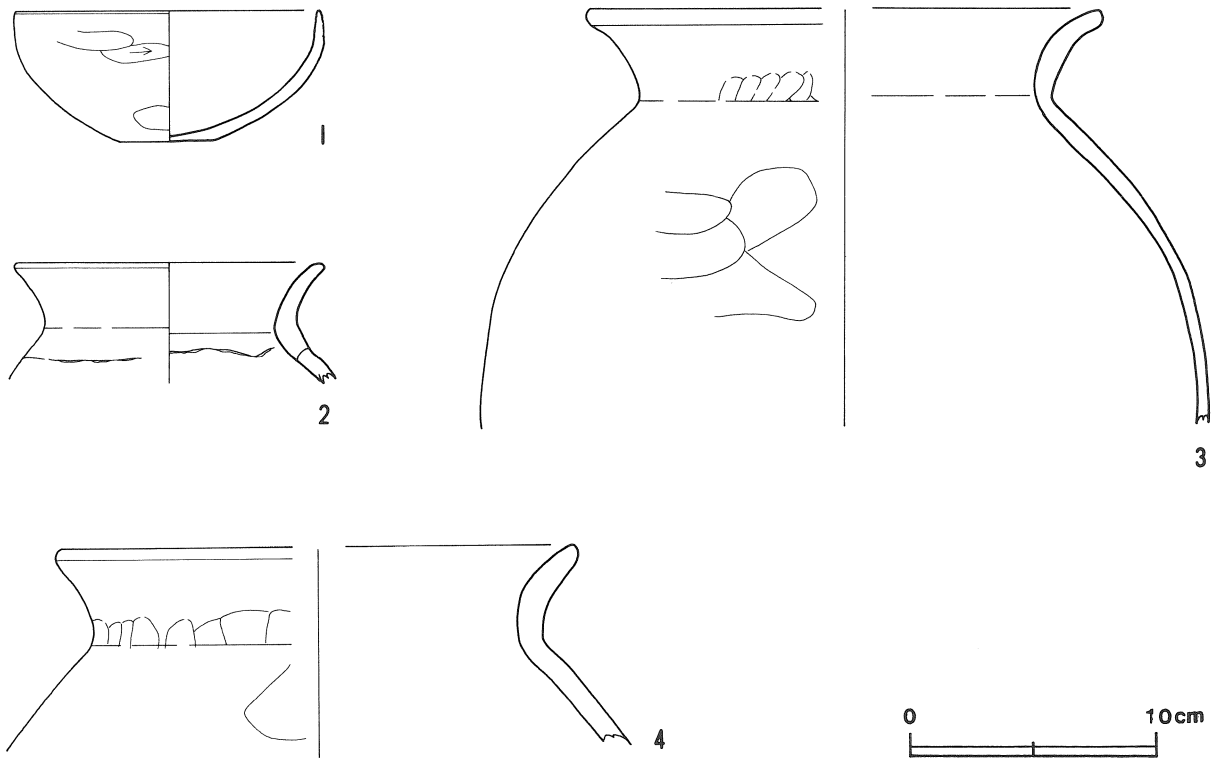
長径方向　N－74°－E

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　皿状で，堅い。



第229図　第37・81号土坑実測図



第230図　第37・81号土坑出土遺物実測図

覆土　3層から成る。いずれも暗褐色土で，ロームブロックを含んでいる。人為堆積と考えられる。

土層解説
1　暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量
2　暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量
3　暗 褐 色　ローム小ブロック少量，ローム粒子極微量

遺物　覆土中から土師器片131点が出土している。第230図３，４の甕が覆土下層から正位の状態で出土している。

所見　本跡は，第３号住居跡と重複し，その位置関係から貯蔵穴の可能性も考えられたが，土層の堆積状況から土坑として取り扱った。時期は，出土遺物から５世紀後半と考えられる。

第37号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第230図 1	坏 土師器	A　12.2 B　5.2 B　3.6	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は僅かに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・石英・長石・パミス にぶい赤褐色 普通	P139　60% 覆土上層及び中層
2	甕 土師器	A　12.4 B（4.7）	頸部から口縁部の破片。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石・パミス 赤褐色 普通	P140　10% PL54 覆土上層及び中層

第81号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第230図 3	甕 土師器	A［20.7］ B（16.5）	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部は丸味を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。頸部外面指圧痕。口縁部外面赤彩痕。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P141　15% 覆土下層
4	甕 土師器	A［20.6］ B（8.0）	体部上位から口縁部の破片。口縁部はやや緩やかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。頸部外面指圧痕。	砂粒・石英・長石・パミス にぶい黄橙色 普通	P142　15% 覆土下層

3　平安時代の遺構と遺物

（1）　竪穴住居跡

当遺跡からは，調査区の北西部で平安時代の竪穴住居跡を１軒確認した。以下，その特徴や主な出土遺物について記載する。

第35号住居跡（第231図）

位置　調査区の北西部，$C4_{d2}$区。

規模と平面形　長軸5.10m，短軸3.80mの長方形。

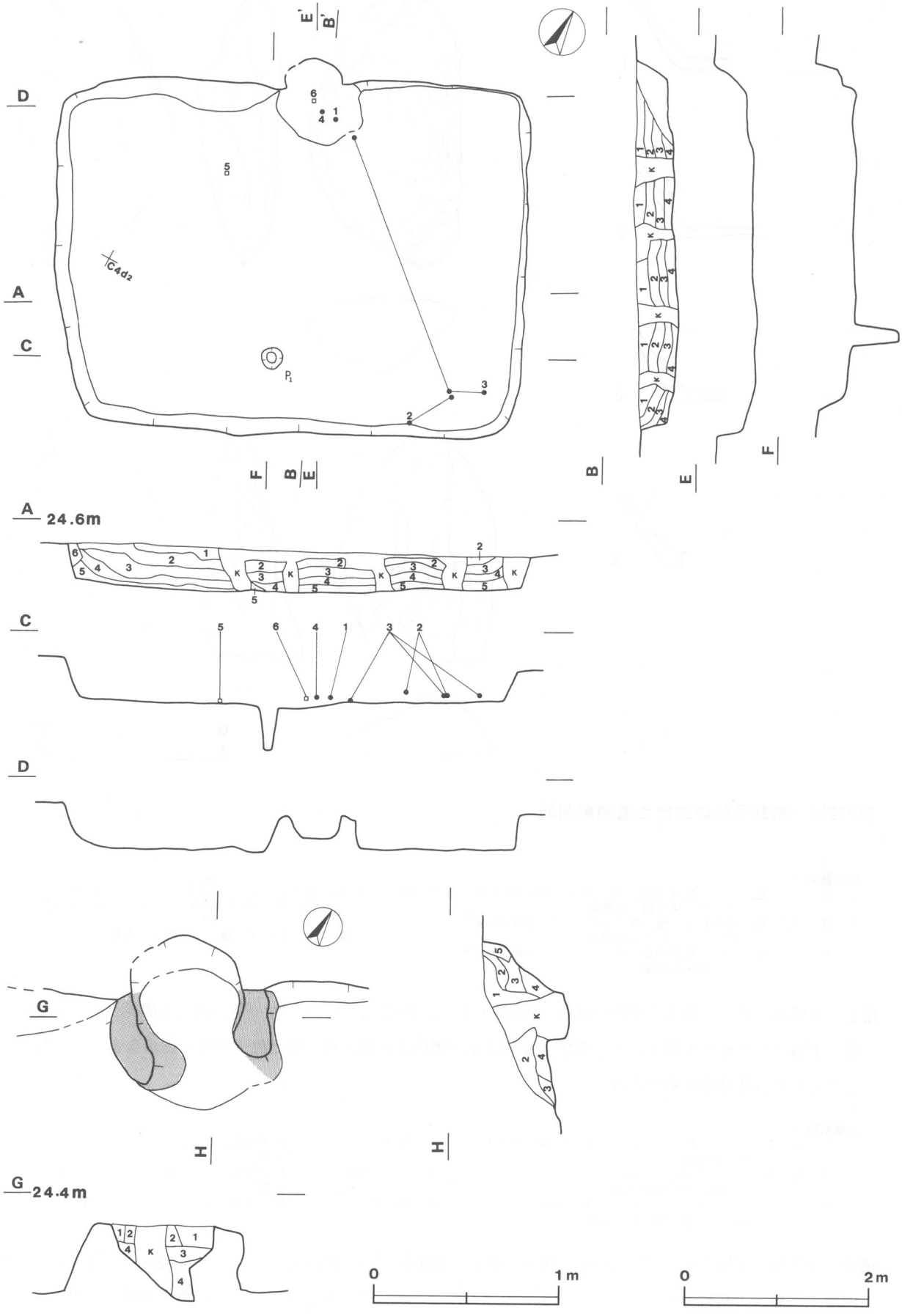
主軸方向　N－30°－W

壁　壁高は26～43cmで，垂直に立ち上がる。

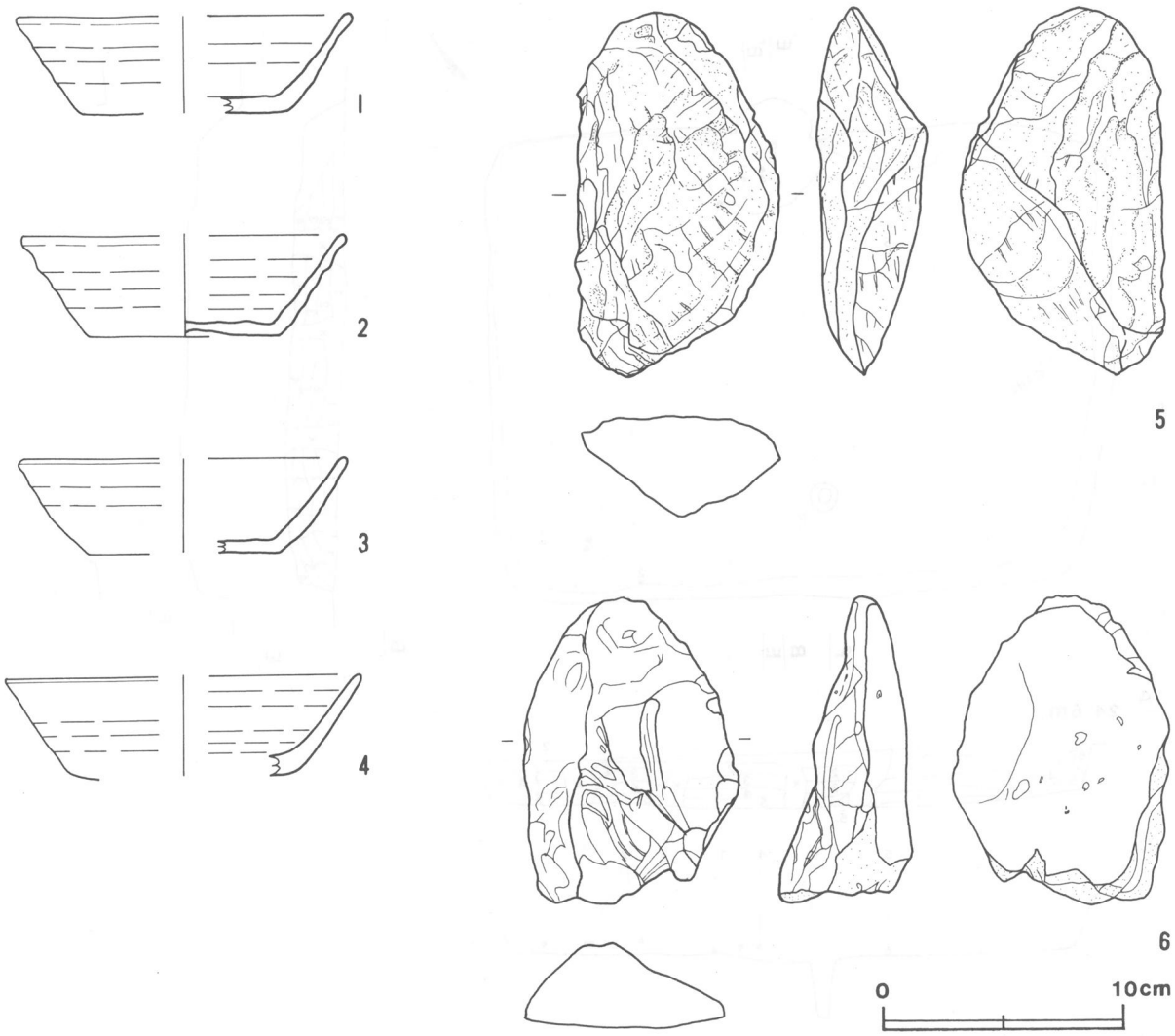
床　中央付近に僅かに窪みがある。床面には踏み固まった硬化部分はみられない。

ピット　１か所（P_1）。P_1は南東壁から中央寄りに付設され，径23cmの円形で，深さは45cmである。規模や位置から出入口に伴うピットと考えられる。

竈　北西壁中央からやや北寄りの壁面を約35cm壁外に掘り込み，砂混じりの粘土で構築されている。規模は，長さ90cm，幅90cmである。天井部は崩落し，両袖部の一部は削平されているが残存状態は良い。燃焼部には焼土ブロック，炭化物の堆積がみられる。火床部は５cm程掘り窪められ，熱を受けて赤変硬化し，内壁の一部も焼土化している。煙道の立ち上がりは確認できなかったが，火床部から奥壁の立ち上がりは約30度である。竈中央部は北西方向から南東方向に向かって撹乱を受けている。



第231図　第35号住居跡・竈実測図



第232図　第35号住居跡出土遺物実測図

竈土層解説

1	褐　　色	ローム粒子中量，焼土粒子少量，焼土中ブロック・炭化物・灰微量
2	暗　褐　色	焼土粒子少量，焼土小ブロック・炭化材・炭化物・ローム粒子・灰微量
3	褐　　色	ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・灰微量
4	暗 赤 褐 色	焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子中量，炭化材・炭化物・ローム粒子少量，粘土微量
5	にぶい赤褐色	ローム粒子中量，炭化物・灰微量

覆土　6層から成る。覆土の堆積状況に乱れがみられず，各層にはロームブロックの混入も確認されているが，覆土下層にみられる土層4，5の褐色土及びにぶい褐色土の混入物に焼土粒子や炭化物が含まれていないことなどから自然堆積と考えられる。

土層解説

1	暗　褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量
2	暗　褐　色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
3	褐　　色	ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，焼土粒子微量
4	褐　　色	ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
5	にぶい褐色	ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
6	明　褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量

遺物　竈内覆土下層と東コーナー付近の覆土下層から須恵器片が少量出土している。第232図1と4の坏片は竈内覆土下層から横位と斜位の状態で出土している。2の坏片は，東コーナー付近の覆土下層から出土している坏片が接合したものである。3の坏は竈付近と東コーナー付近の床面直上から出土している坏片と覆土下

層から出土している坏片が接合したものである。5の不明石製品は西寄りの床面直上から出土し，6の石製支脚は竈内覆土下層から出土している。

所見　本跡は，この住居跡の竈は，両袖部を耕作による撹乱で削平されているものの，全体の残存状態は比較的良好なものであった。住居内からは主柱穴が確認できず，遺構外に構築されていたものと思われる。時期は，出土遺物から9世紀前半と考えられる。

第35号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第232図 1	坏 須恵器	A [13.6] B 4.0 C [8.0]	底部から口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	体部内・外面横ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 明褐灰色 普通	P129 60% PL54 竈内覆土下層 二次焼成
2	坏 須恵器	A [13.4] B 4.2 C 7.9	体部から口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石 灰色 普通	P130 60% PL54 東コーナー付近 覆土下層
3	坏 須恵器	A [13.6] B 3.9 C [4.8]	底部から口縁部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 灰色 普通	P131 40% 竈付近及び東コーナー付近の覆土下層
4	坏 須恵器	A [14.4] B 4.2 C [8.4]	底部から口縁部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 褐灰色 普通	P132 15% 竈内覆土下層

図版番号	種　別	計測値 (cm)			重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚					
第232図 5	不明石製品	15.0	8.1	4.5	568.3	100	雲母片岩	西寄り床面直上	Q97
6	石製支脚	12.6	5.5	3.5	296.7	100	花崗岩	竈内覆土下層	Q98 支脚への転用

4　その他の遺構と遺物

(1)　土坑

調査区の全域から確認した土坑には，形状や規模に各々差異が認められ，伴出遺物も殆どなく，時期や性格が不明のものも多い。ここでは，特徴的な土坑について取り上げ，その他は一覧表（表22）に記載した。

第35号土坑（第233図）

位置　調査区の中央部，E4f9区。

規模と平面形　長軸2.35m，短軸1.52mの隅丸長方形で，深さは1.04mである。

長径方向　N—55°—E

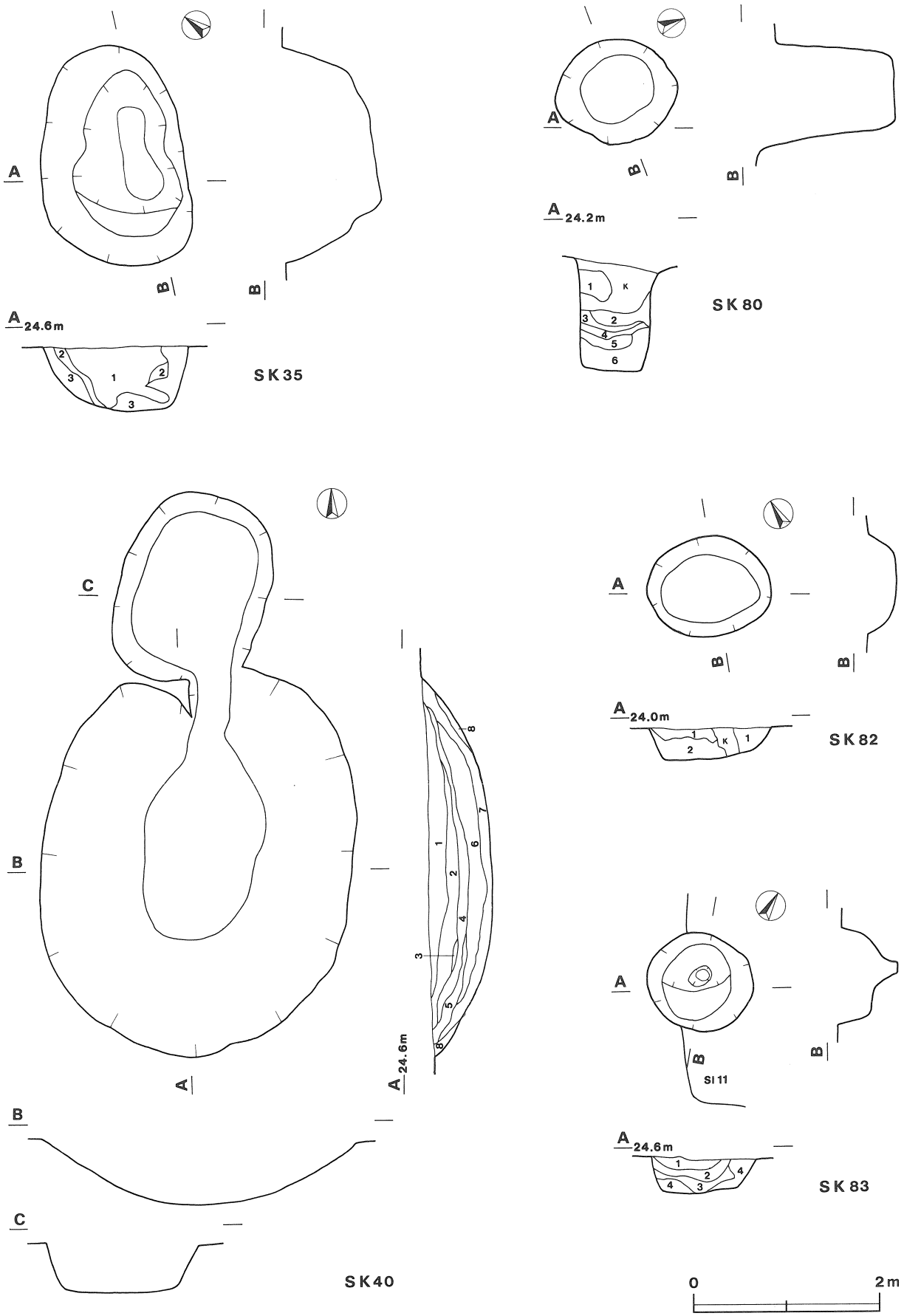
壁面　南西壁に段を持ち，外傾して立ち上がる。

底面　南西側に落ち込みがみられ，やや傾斜している。

覆土　3層から成る。土層1は焼土粒子，炭化材及び炭化物を含む暗褐色土で覆土下層から上層にかけ厚く堆積している。堆積状況の乱れから人為的に埋め戻しが行われたものと考えられる。

土層解説
1　褐　色　ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化物・ローム中ブロック・ローム粒子少量，炭化材微量
2　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
3　明褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック微量

遺物　出土していない。



第233図　第35・40・80・82・83号土坑実測図

所見　本跡は，出土遺物がないことから時期や性格は不明である。

第40号土坑（第233図）

位置　調査区の中央部，D4$_{i0}$区。

規模と平面形　長径6.00m，短径3.15mの不定形で，深さは0.70mである。

長径方向　N－8°－E

壁面　緩やかな外傾部分と，外傾して立ち上がる部分とに分けられる。

底面　皿状の部分と平坦な部分とに分けられ堅い。

覆土　8層から成る。覆土は暗褐色土，暗赤褐色土及び褐色土から成り，土層2，3，5，7には炭化材及び炭化物の混入がみられる。覆土中層の土層4には砂や灰の混入もみられる。人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

1	暗赤褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物微量
2	暗赤褐色	焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化材・炭化物微量
3	暗褐色	炭化物・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化材微量
4	暗褐色	焼土粒子少量，焼土小ブロック・砂・灰微量
5	暗赤褐色	炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
6	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量
7	暗赤褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化材・炭化物微量
8	褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，ローム粒子少量

遺物　覆土中や底面から土師器片27点及び瓦片1点が出土している。

所見　本跡は，擂鉢状の遺構を35cmの通路状の掘り込みで結び付けた隅丸長方形の小形遺構と結びつけた形状を呈し，その通路状にあたる部分の底部からは少量の炭化材が出土している。この付近では天井部を持たない，こうした炭焼窯が存在していたとの話が地元住民からあり，それから考えると，擂鉢状の遺構が窯体部にあたり，隅丸長方形の遺構が焚口部にあたるのではないかと考えられるが，窯体部にあたる部分からは焼土等も確認されず，底部も熱を受け赤変硬化していないことから，炭焼窯跡の可能性はあるが実態は不明である。時期は，遺構の形態及び地元住民の話から近世以降に構築された可能性が強い。

第80号土坑（第233図）

位置　調査区の北東部，D6$_{e2}$区。

規模と平面形　長径1.32m，短径1.11mの楕円形で，深さは1.25mである。

長径方向　N－13°－E

壁面　垂直に立ち上がる。

底面　ほぼ平坦で，堅い。

覆土　6層から成る。各層からロームブロックの混入が確認され，その内，覆土中層にあたる土層4の褐色土には炭化物及び灰の混入が確認されている。人為堆積と考えられる。

土層解説

1	褐色	ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
2	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量
3	褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
4	褐色	ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・灰中量，炭化物微量
5	褐色	ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
6	明褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量

遺物　土坑の中央部覆土上層から土師器片4点が出土している。

所見　本跡は，遺構の形態から井戸状遺構の可能性があるが，性格の実態は不明である。時期は，底面からの

出土遺物がなく，上層から出土している遺物は流れ込みと考えられることから不明である。

第82号土坑（第233図）

位置　調査区の南西部，$G4_{a5}$区。

重複関係　本跡は，第10号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形　長径0.65m，短径0.53mの楕円形で，深さは0.35mである。

長径方向　N—35°—E

壁面　僅かに内彎して立ち上がる。

底面　平坦で，柔らかい。

覆土　2層から成る。いずれも暗褐色土で，ロームブロックを含んでいる。人為堆積と考えられる。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量
2　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

遺物　出土していない。

所見　本跡は，第10号住居跡と重複し，その位置関係から貯蔵穴の可能性も考えられたが，土層の堆積状況から土坑として取り扱った。時期は，出土遺物がないので不明である。

第83号土坑（第233図）

位置　調査区の南東部，$G4_{b0}$区。

重複関係　本跡は，第11号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形　長径1.16m，短径1.03mの楕円形で，深さは0.63mである。

長径方向　N—75°—E

壁面　僅かに内彎して立ち上がる。

底面　皿状の様相を呈しているが，中央部に根によると思われる落ち込みがみられる。

覆土　4層から成る。覆土は暗褐色土及び褐色土で，各層からはロームブロックの混入がみられ，土層2からは焼土粒子と炭化物の混入もみられた。人為堆積と考えられる。

土層解説
1　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量
3　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
4　褐　色　ローム大ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

遺物　出土していない。

所見　本跡は，第11号住居跡と重複しており，貯蔵穴の可能性も考えられたが，北西壁を大きく掘り込んでいることから，土坑として取り扱った。時期は，出土遺物がないことから不明である。

表22　隼人山遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)				
2	$G4_{d0}$	N-64°-W	円形	1.24 × 1.15	56	緩斜	皿状	人為	土師器片20(甕)
3	$G5_{c1}$	N-71°-E	不整楕円形	1.13 × 0.84	26	緩斜	皿状	自然	
6	$G5_{a1}$	N-61°-W	不整長楕円形	(2.23)× 0.83	25	緩斜	皿状	自然	土師器片9(甕)
7	$G5_{a2}$	N-54°-W	不整楕円形	1.58 × 1.04	34	緩斜	皿状	自然	

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)				
8	$G5_{a1}$	N-45°-W	不整楕円形	1.62 × 1.39	30	緩斜	皿状	人為	
9	$G5_{a1}$	N-8°-W	楕円形	2.06 × 1.23	25	緩斜	皿状	自然	
10	$G4_{a9}$	N-68°-E	不整方形	1.29 × 1.20	39	緩斜	皿状	自然	
11	$F4_{j9}$	N-13°-E	円形	1.17 × 1.15	27	緩斜	皿状	自然	
12	$G4_{a8}$	N-10°-W	楕円形	0.95 × 0.82	21	緩斜	皿状	人為	土師器片3(甕)
13	$G4_{g7}$	N-48°-W	不整円形	0.66 × 0.64	26	緩斜	皿状	自然	
14	$F4_{h9}$	N-9°-W	楕円形	1.10 × 0.98	12	外傾	皿状	自然	土師器片2(甕)
15	$F4_{g0}$	N-44°-E	楕円形	1.11 × 0.93	30	外傾	皿状	人為	
16	$F5_{h1}$	N-69°-W	楕円形	1.96 × 1.24	32	緩斜	皿状	人為	
17	$F5_{g1}$	N-78°-W	楕円形	1.18 × 1.01	45	外傾	皿状	自然	
20	$F5_{e5}$	N-42°-W	円形	0.84 × 0.81	42	外傾	皿状	人為	
21	$F5_{d5}$	N-86°-W	長楕円形	2.20 × 0.89	26	緩斜	皿状	人為	
22	$F5_{b2}$	N-64°-E	楕円形	2.20 × 1.42	26	緩斜	皿状	自然	
23	$F5_{a4}$	N-78°-W	不整楕円形	0.88 × 0.67	14	外傾	皿状	自然	
26	$E4_{j6}$	N-31°-W	楕円形	0.99 × 0.76	18	外傾	皿状	人為	
27	$D4_{i8}$	N-70°-W	不整楕円形	0.88 × 0.69	20	緩斜	皿状	自然	
30	$E4_{i7}$	N-35°-E	不整方形	1.32 × 1.24	23	外傾	平坦	自然	
32	$E4_{e7}$	N-87°-E	楕円形	0.86 × 0.64	25	外傾	皿状	自然	
33	$E4_{e8}$	N-76°-E	楕円形	0.93 × 0.74	25	緩斜	皿状	自然	
34	$E4_{d8}$	N-65°-E	楕円形	1.31 × 0.84	27	緩斜	皿状	自然	
35	$E4_{f9}$	N-55°-E	隅丸長方形	2.35 × 1.52	104	外傾	皿状	人為	
37	$E5_{b2}$	N-49°-W	不整円形	2.12 × 2.08	237	垂直	平坦	人為	土師器3(坏2,甕1),井戸状遺構の可能性あり。
38	$E4_{a9}$	N-43°-E	楕円形	1.10 × 0.92	25	外傾	平坦	自然	
40	$D4_{i0}$	N-8°-E	不定形	6.00 × 3.15	70	外傾・緩斜	平坦・皿状	人為	土師器片27(坏2,甕25),瓦片1,近世炭窯遺構の可能性あり。
42	$D4_{f9}$	N-74°-W	楕円形	0.72 × 0.59	20	外傾	皿状	自然	
45	$D4_{c2}$	N-3°-E	楕円形	1.54 × 0.82	20	外傾	皿状	自然	
47	$C4_{j2}$	N-44°-W	不整楕円形	1.51 × 1.15	21	外傾	凹凸	人為	
48	$D4_{a5}$	N-50°-E	不整楕円形	1.16 × 0.99	21	外傾	皿状	人為	
51	$D4_{a3}$	N-31°-W	楕円形	1.03 × 0.69	26	緩斜	皿状	自然	
52	$D4_{a3}$	N-75°-E	楕円形	1.07 × 0.68	22	外傾	皿状	自然	
65	$C5_{g1}$	N-18°-W	円形	1.04 × 1.00	52	緩斜	平坦	人為	
69	$C4_{d8}$	N-65°-E	円形	0.85 × 0.82	24	外傾	平坦	自然	
70	$C4_{d8}$	N-10°-E	円形	0.70 × 0.68	39	外傾	平坦	自然	土師器片8(坏4,甕4)
71	$C4_{c0}$	N-36°-E	楕円形	1.24 × 1.12	15	緩斜	平坦	自然	土師器片4(甕)
72	$C5_{d1}$	N-64°-E	不整楕円形	1.48 × 1.12	50	緩斜	皿状	自然	
74	$C5_{c2}$	N-70°-E	円形	0.99 × 0.90	25	緩斜	皿状・凹凸	自然	
77	$F5_{d3}$	N-81°-W	楕円形	1.24 × 1.04	27	外傾	皿状	自然	土師器片12(坏1,甕11)
78	$F5_{e2}$	N-18°-E	長楕円形	1.87 × 0.84	28	外傾	平坦	自然	
80	$D6_{e2}$	N-13°-E	楕円形	1.32 × 1.11	125	垂直	平坦	人為	土師器片4(坏2,甕2),井戸状遺構の可能性あり。
81	$G4_{h6}$	N-74°-E	楕円形	0.79 × 0.65	48	垂直	皿状	人為	土師器片131(甕),SI3を掘り込んでいる。
82	$G4_{a5}$	N-35°-E	楕円形	0.65 × 0.53	35	やや内傾	平坦	人為	SI10を掘り込んでいる。
83	$G4_{b0}$	N-75°-E	楕円形	1.16 × 1.03	63	やや内傾	皿状	人為	SI11を掘り込んでいる
84	$D4_{b8}$	N-78°-W	楕円形	0.80 × 0.70	43	外傾	皿状	自然	土師器片15(甕),SI25を掘り込んでいる。
85	$C4_{c8}$	N-69°-E	不整方形	2.16 × 1.97	75	垂直	平坦	自然	土師器片3(坏1,甕2)
88	$E5_{a7}$	N-29°-W	不整方形	0.74 × 0.69	26	緩斜	平坦	自然	
89	$D4_{j5}$	N-75°-W	楕円形	1.45 × 0.92	21	緩斜	平坦	自然	

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)				
90	$D5_{l4}$	N-36°-E	楕円形	0.83 × 0.68	14	緩斜	皿状	自然	
96	$I4_{j2}$	N-85°-W	楕円形	1.58 × 1.31	42	外傾	平坦	自然	土師器片7(甕)
97	$I4_{j2}$	N-51°-E	楕円形	1.31 × 1.11	35	外傾	凹凸	人為	
98	$I4_{j1}$	N-4°-E	不整楕円形	1.77 × 1.14	32	緩斜	平坦	自然	土師器片2(坏)
99	$J4_{a2}$	N-54°-E	楕円形	1.33 × 1.03	34	外傾	平坦	人為	
100	$J4_{b3}$	N-68°-E	不整楕円形	1.22 × 1.03	25	外傾	平坦	自然	
101	$J4_{b1}$	N-38°-E	楕円形	1.45 × 0.73	28	外傾	皿状	自然	
102	$J4_{b2}$	N-13°-E	不整楕円形	1.13 × 0.88	32	緩斜	皿状	自然	土師器片1(甕)
104	$I3_{j9}$	N-8°-E	楕円形	1.29 × 0.86	27	外傾	皿状	自然	土師器片3(甕)
105	$I3_{j9}$	N-69°-W	不整楕円形	1.19 × 0.78	37	外傾	平坦	自然	
106	$I3_{j0}$	N-12°-E	不整楕円形	1.20 × 0.64	47	外傾	皿状	自然	
107	$I3_{j9}$	N-62°-E	楕円形	1.20 × 0.76	50	垂直	平坦	自然	
108	$J3_{a0}$	N-30°-E	楕円形	1.40 × 1.90	48	外傾	皿状	自然	
109	$J3_{a9}$	N-17°-E	不整円形	1.31 × 1.26	42	外傾	皿状	自然	
110	$J3_{a0}$	N-26°-E	楕円形	1.62 × 0.90	34	外傾	平坦	人為	
111	$J4_{d2}$	N-47°-E	楕円形	1.10 × 0.64	30	外傾	皿状	人為	土師器片1(甕)
112	$J4_{e2}$	N-47°-E	不整円形	0.90 × 0.84	37	外傾	皿状	自然	土師器片2(甕)
113	$J3_{d1}$	N-47°-W	不整円形	1.12 × 1.04	35	外傾	皿状	人為	
114	$J4_{e3}$	N-61°-E	不整楕円形	1.20 × 0.90	31	外傾	皿状	人為	土師器片3(甕)
115	$J4_{e3}$	N-90°-W	不整楕円形	1.59 × 1.16	18	外傾	皿状	人為	土師器片4(坏1,甕3)
116	$J4_{g3}$	N-80°-W	楕円形	0.95 × 0.75	28	緩斜	皿状	自然	
117	$J4_{h4}$	N-90°-W	不整楕円形	0.92 × 0.82	27	緩斜	皿状	自然	
118	$J4_{f3}$	N-64°-E	楕円形	1.09 × 0.96	24	外傾	皿状	自然	
119	$J4_{e2}$	N-78°-W	楕円形	1.06 × 0.78	26	緩斜	皿状	人為	
120	$J4_{l4}$	N-10°-E	楕円形	1.19 × 0.90	22	外傾	凹凸	自然	
121	$K4_{a4}$	N-15°-W	長楕円形	2.10 × 0.79	34	外傾	皿状	人為	
122	$J4_{g1}$	N-4°-E	楕円形	0.82 × 0.71	29	外傾	皿状	人為	
123	$J4_{h1}$	N-82°-W	楕円形	1.16 × 0.77	22	外傾	皿状	自然	
124	$I3_{h7}$	N-44°-W	楕円形	0.84 × 0.68	33	外傾	皿状	自然	
125	$I3_{g5}$	N-85°-W	不整楕円形	1.50 × 1.10	27	外傾	皿状	人為	土師器片2(甕)
126	$I3_{l7}$	N-26°-E	不整楕円形	1.70 × 1.49	40	外傾	平坦	自然	
127	$I3_{j5}$	N-36°-W	楕円形	1.20 × 0.87	37	外傾	皿状	自然	土師器片2(甕)
128	$I3_{l2}$	N-26°-E	不整楕円形	0.74 × 0.62	40	外傾	皿状	自然	土師器片2(甕)
129	$J3_{a3}$	N-9°-W	不整円形	0.84 × 0.76	32	外傾	皿状	人為	
130	$J3_{a4}$	N-65°-W	楕円形	0.85 × 0.72	38	外傾	平坦	自然	
131	$J3_{b7}$	N-23°-E	楕円形	0.83 × 0.59	37	外傾	皿状	自然	
132	$J3_{b7}$	N-43°-W	楕円形	1.06 × 0.83	33	外傾	平坦	自然	土師器片3(甕)
133	$J3_{b6}$	N-15°-W	楕円形	1.15 × 0.97	39	外傾	皿状	自然	
134	$J3_{c7}$	N-83°-W	楕円形	2.48 × 1.70	30	外傾	皿状	人為	
135	$J3_{d6}$	N-10°-W	長楕円形	2.24 × 1.07	40	外傾	皿状	自然	
136	$J3_{e6}$	N-66°-W	不整円形	1.21 × 1.09	52	外傾	皿状	自然	
137	$J3_{g7}$	N-57°-E	不整楕円形	2.14 × 1.21	25	外傾	平坦	人為	
138	$K3_{b9}$	N-29°-W	楕円形	1.82 × 1.39	26	緩斜	平坦	人為	

（2）　溝

当遺跡の調査では，調査II区から時期不明の溝１条を確認した。以下，確認した遺構について記載する。

第１号溝（付図３）

位置　調査II区の南部，K4a1区。

規模と形状　北西から東方向に直線的に延びており，全長47mで，端部はそれぞれ調査区外に延びている。最大幅は2.7mで，最小幅は1.2mである。断面は「U」字形をし，深さは最深0.75mで，東部ほど浅くなる。底部は概ね皿状に掘り込まれている。

方向　N－80°－W

壁面　中位付近には凹凸がある。

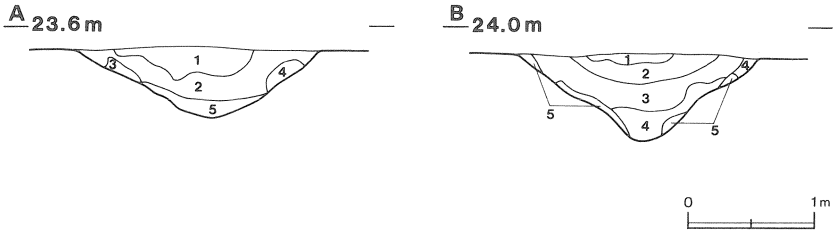
覆土　A，Bは５層から成る。土層３，４の堆積状況に乱れがみられるが，これは溝の土砂運搬作用のためで，その後の覆土堆積状況はほぼ安定している。自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒 褐 色　ローム粒子少量，ローム大ブロック微量
2　極暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子極微量
3　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，炭化物極微量
4　極暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
5　暗 褐 色　ローム中ブロック・ローム粒子少量

遺物　本跡に伴う遺物は出土していない。

所見　本跡は，調査II区の南部を北西から東方向に延び，西ノ原遺跡の１号溝と規模や形状が類似し，方角的にも一致することから両遺跡の溝は同一遺構になるものと考えられる。時期については，本跡に伴う遺物が出土してないことから不明である。



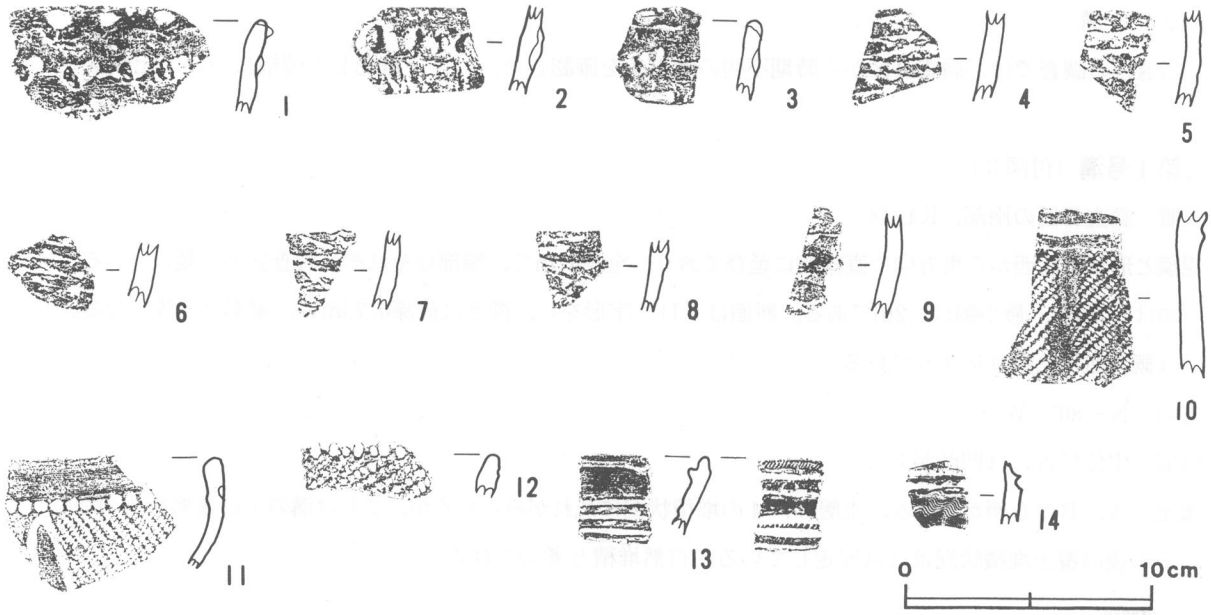
第234図　第１号溝断面図

5　遺構外出土遺物

当遺跡からは，表採及び遺構確認の際に出土したものも含めた遺構に伴わない旧石器時代から近世にかけての遺物が出土している。ここでは，これらの出土遺物のうち，縄文時代の土師器片及び古墳時代の特徴的な須恵器片について解説をし，石製品と石製模造品については一覧表で記載する。

縄文時代（第235図）

１から９は前期後半の土器である。１・３は深鉢の口縁部片，２は深鉢の胴部片で，輪積み痕を残し，貝殻腹縁による貝殻文が連続施文されている。４から９は深鉢の胴部片で，刺突文が不連続的に施文されている。浮島II式土器である。10と11は中期後葉の土器である。10は深鉢の頸部片で，胴部と頸部の間に沈線がめぐり口縁部と胴部文様帯を区画し，頸部以下にＬＲの縄文が施された後，縦方向に磨消しがはいる。加曽利ＥＩ式土器である。11は鉢の口縁部片で，胴部と口縁部の間に刺突文が連続的に施され，口縁部と胴部文様帯が区画されている。胴部はＬＲの縄文が施され，その後，縄文帯と無文帯を区画する逆U字状の磨消帯が施されてい



第235図　遺構外出土遺物拓影図

る。加曽利ＥⅢ式土器である。12は中期後半の土器である。鉢の口縁部片で，口唇部に棒状工具による押捺が施され，下方には縄文が施されている。加曽利Ｅ式に入る土器である。13は後期中葉の土器である。鉢形土器の口縁部片で，胴部に平行沈線による口縁部と胴部文様帯の区画がされ，口縁部内側には刻み目帯が設けられている。加曽利ＢⅠ式土器である。

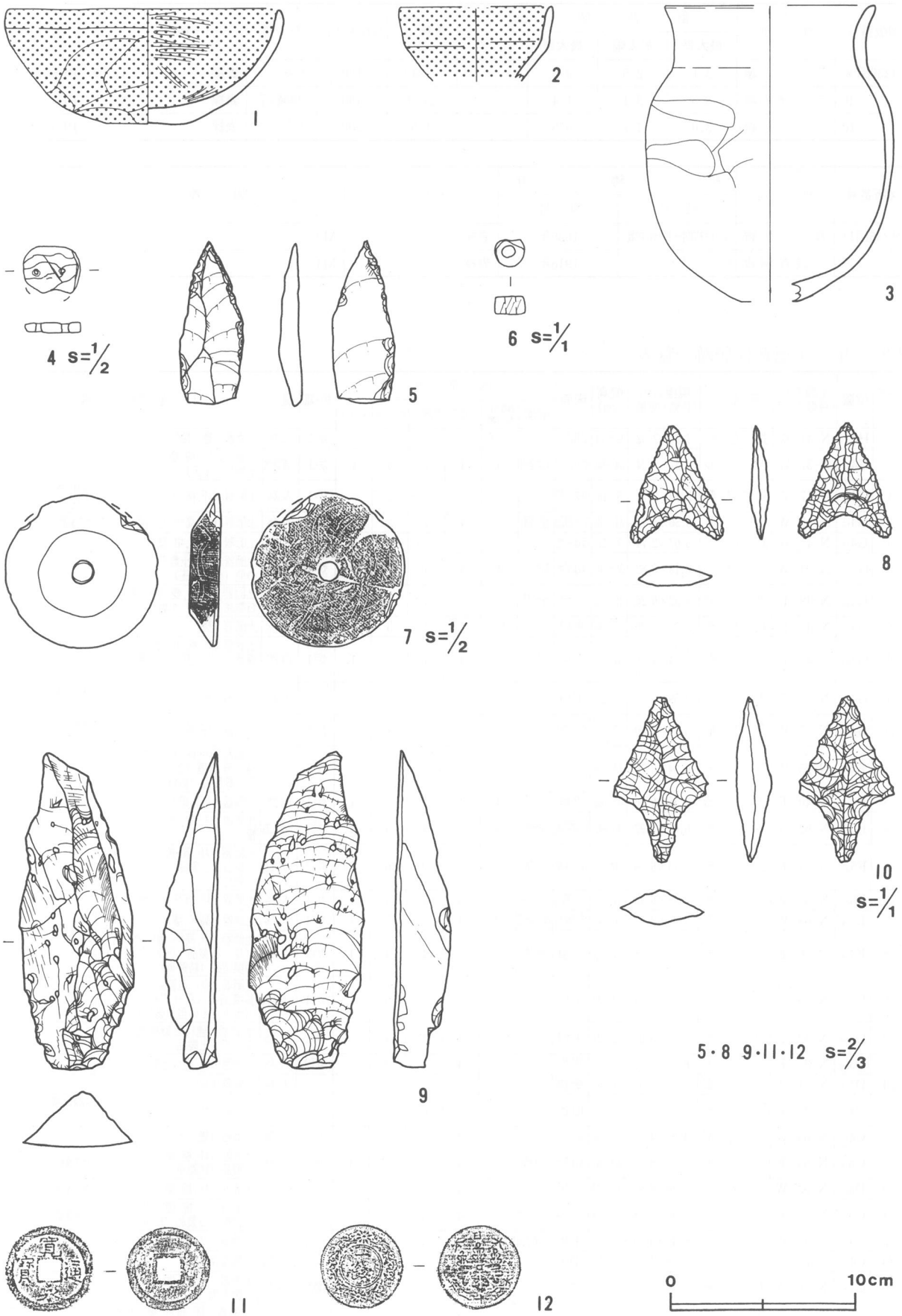
古墳時代（第235図）

14は古墳時代中期の須恵器である。把手付椀の体部から口縁部にかけての破片で，体部中位に２条の凸線を持ち，その下方に８条の櫛描波状文が施されている。

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第236図 1	坏 土師器	A 14.7 B 6.1 C 4.3	体部から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部はほぼ直立する。外面に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。底部ヘラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・パミス 赤褐色 普通	P143　60% 表土中
2	坩 土師器	A [8.2] B (4.0)	口縁部の破片。中位に弱い段を持ち，ほぼ直立する。	内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・雲母 赤褐色　普通	P144　10% 表土中
3	甕 土師器	A [11.2] B 15.8 C [3.0]	底部から口縁部の破片。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。頸部は括れ，口縁部は弓なり状に反る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ。底部ヘラナデ。	砂粒・石英・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P145　30% PL54 表土中 二次焼成

図版番号	種　別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	孔　径					
第236図 4	双孔円板	2.1	(1.7)	0.4	0.2	(2.1)	80	チャート	$C5_{j2}$区	Q103
5	削　器	(4.3)	1.7	0.6	—	(2.8)	80	頁岩	$E4_{i6}$区	Q104　PL55
6	臼　玉	(0.5)	0.5	0.3	0.2	(0.2)	80	片岩	$F4_{i2}$区	Q105
7	紡錘車	(5.4)	5.4	1.0	0.8	(42.8)	90	チャート	試掘	Q106体部外面線刻PL55



第236図　遺構外出土遺物実測図

図版番号	種　別	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔　径	重量(g)	現存率(%)	石　質	出土地点	備　考
第236図8	石　鏃	3.1	2.5	0.5	—	2.4	100	チャート	表採	Q107　PL55
9	ナイフ形石器	8.5	3.1	1.4	—	27.3	100	黒曜石	表採	Q108　PL55
10	石　鏃	3.0	1.7	0.6	—	1.6	100	チャート	表採	Q109　PL55

図版番号	種　別	初鋳年 時代	年号	出土地点	備　考
第236図11	寛永通寶	江戸初期～明治中頃	1636年	表採	M3
12	一銭青銅貨	大正	1916年	表採	M4

表23　隼人山遺跡住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向(長軸方向)	平面形	規模(m)(長軸×短軸)	壁高(cm)	床面	内部施設 壁溝	間仕切溝	主柱穴	貯蔵穴	ピット	入口	炉・竈	覆土	出土遺物	備　考
1	$H4_{d5}$	N-41°-W	長方形	2.74×2.02	12～14	凹凸	—	—	—	—	—	—	炉1	人為	土師器（甕，甑）	
2	$G4_{i6}$	N-37°-W	方形	5.37×5.24	34～55	やや凹凸	ほぼ全周	5	4	1	8	1	炉1	一部自然	土師器（坏,椀,甕），土製品（土玉）	
3	$G4_{h6}$	N-17°-W	隅丸方形	2.90×2.74	6～16	中央に凹	—	—	—	—	2	—	炉1	人為	土師器（坏,椀）	SK81に掘り込まれている。
4	$G4_{f5}$	N-43°-W	方形	5.36×5.12	31～55	やや凹凸	全周	—	4	1	5	1	炉1	人為	土師器（坏,高坏,短頸壺,甕）	焼失家屋
5	$G4_{i9}$	N-41°-W	長方形	3.07×2.74	7～17	ほぼ平坦	—	—	—	—	—	—	炉1	人為	土師器（高坏,坩,甕）	
6	$G5_{h1}$	N-24°-W	[方形]	6.18×5.82	30～40	ほぼ平坦	ほぼ全周	4	4	1	5	1	炉1	人為	土師器（甕),土製品（土玉),その他（ガラス玉）	
7	$G4_{f0}$	N-49°-E	方形	6.32×6.26	36～53	平坦	全周	2	4	1	7	1	炉1	人為	土師器（高坏,壺,小形甕,甑），石製品（砥石),土製品（土玉）	
8	$G4_{d5}$	N-42°-E	長方形	5.00×3.90	22～35	平坦	—	—	—	1	3	1	炉1	人為	土師器（甕）	
9	$G4_{a4}$	N-45°-E	方形	5.14×4.96	34～60	平坦	ほぼ全周	—	4	1	5	1	炉1	自然	土師器（坏,椀,坩,甕,甑),石製模造品（双孔円板),土製品（土玉）	
10	$G4_{a5}$	N-25°-W	方形	2.59×2.33	8～20	平坦	—	—	—	—	—	—	—	人為	土師器（甕）	SK82に掘り込まれている。
11	$G4_{b0}$	N-27°-W	長方形	3.84×2.40	2～7	やや凹凸	—	—	—	—	—	—	炉1	人為	土師器（坏,椀）	SK83に掘り込まれている。
12	$F4_{i6}$	N-25°-W	方形	6.94×6.76	18～29	ほぼ平坦	全周	3	4	1	5	1	炉3	人為	土師器（坏,椀,高坏,坩,壺,甕,甑),須恵器（蓋),石製品（臼玉),鉄製品（鉄鎌）	
13	$F4_{h4}$	N-40°-E	方形	6.38×6.16	35～64	平坦	—	4	4	1	7	1	炉1	自然	土師器（坏),砥石,土玉	
14	$F5_{h4}$	N-62°-W	方形	6.06×5.92	30～42	ほぼ平坦	全周	3	4	1	5	1	炉1	一部人為	土師器（坏,椀,高坏,坩,壺,甕,甑）	
15	$F5_{g3}$	N-54°-E	長方形	7.74×6.18	20～37	ほぼ平坦	全周	6	4	2	6	[2]	炉2	一部人為	土師器（坏,蓋,椀,甕),石製品（砥石),土製品（土玉),その他（剝片）	
16	$F5_{c3}$	N-31°-E	方形	6.48×6.16	37～52	一部凹凸	—	2	3	1	4	1	炉1	人為	土師器（坏,高坏,坩,甕）	
17	$E5_{i4}$	N-63°-W	方形	4.00×3.85	30～47	ほぼ平坦	ほぼ全周	2	4	1	5	1	炉1	人為	土師器（高坏,甕）	
18	$E4_{i4}$	N-50°-E	方形	6.94×6.68	17～34	平坦	全周	7	3	1	4	1	炉2	人為	土師器（坏,高坏,甕),須恵器片（甑),石製品（凹石,臼玉),石製模造品（紡錘車）	
19	$D4_{c3}$	N-39°-E	長方形	5.20×3.84	22～30	平坦	—	—	4	—	5	1	炉1	一部人為	土師器（壺),石製品（臼玉),石製模造品（双孔円板),土製品（土玉),その他（剝片）	
20	$D5_{h6}$	N-43°-E	方形	5.17×5.02	12～21	平坦	—	—	4	1	4	—	炉1	人為	土師器（甕),石製模造品（勾玉),不明土製品	
21	$D5_{e5}$	N-30°-E	長方形	6.26×5.01	3～24	平坦	—	—	4	1	4	—	炉2	人為	土師器（椀,甕),土製品（土玉）	
24	$D4_{c8}$	N-71°-W	長方形	2.25×1.69	5～10	緩斜	—	—	—	—	—	—	—	人為	土師器片14	
25	$D4_{b9}$	N-44°-E	方形	4.40×4.32	5～7	皿状	—	—	—	—	—	—	—	人為	土師器（坏）	SK84に掘り込まれている。
26	$C4_{j7}$	N-65°-W	方形	4.90×4.83	2～16	ほぼ平坦	—	—	3	1	3	—	炉1	人為	土師器（甕),ナイフ形石器片	
27	$C5_{j4}$	N-55°-E	方形	5.19×5.14	49～60	ほぼ平坦	全周	2	4	1	7	1	炉1	人為	土師器（坏,椀,甕),石製品（紡錘車）	焼失家屋
28	$D5_{c7}$	N-63°-W	長方形	7.46×6.94	14～33	平坦	—	—	4	1	5	1	炉1	人為	土師器（坏,椀,甕),須恵器片2	焼失家屋
31	$C5_{i8}$	N-39°-E	長方形	7.90×5.48	20～28	平坦	ほぼ全周	—	4	1	4	—	炉1	人為	土師器（坏,椀,甕),須恵器（把手付椀),石製品（臼玉）	焼失家屋
33	$C4_{f2}$	N-47°-W	長方形	5.40×4.20	9～23	平坦	ほぼ全周	2	4	1	4	—	炉1	人為	土師器（坏,椀,高坏,坩）	
34	$C4_{d3}$	N-23°-E	方形	1.98×1.96	5～10	平坦	—	—	—	—	—	—	—	人為	土師器片	
35	$C4_{d2}$	N-30°-W	長方形	5.10×3.80	26～43	中央部凹	—	—	—	—	1	1	竈1	自然	須恵器（坏),不明石製品,石製支脚	
36	$C4_{b3}$	N-13°-E	方形	6.00×5.80	22～37	ほぼ平坦	ほぼ全周	—	4	1	4	—	炉1	人為	土師器（坏,高坏,甕),石製品（紡錘車),不明石製品	
43	$B5_{j3}$	(N-60°-W)	[長方形]	4.62×[3.63]	2～15	ほぼ平坦	—	—	4	1	4	—	炉1	人為	石製品（臼玉）	

第4節　まとめ

当遺跡で確認した遺構は，竪穴住居跡32軒，竪穴遺構3基，土坑93基，陥し穴8基及び溝1条である。

ここでは，時期別に各時代の主な遺構と遺物についての概要を述べ，まとめとする。

旧石器時代

当遺跡からは，黒曜石を石材とし縦長剝片を素材とするナイフ形石器，頁岩を石材とし石刃素材のナイフ形石器が表面採集されている。その他，少数ながら剝片が表土中や後世の遺構の覆土中から出土している。確認されている石器の石材は，黒曜石，頁岩及びメノウで，いずれも本県の主要な石器石材で，この付近でみられる標準的な石材といえる。表面採集されている旧石器時代の遺物は，今回の調査区が平坦地でローム層の流失が考えられないことから，耕作等による旧石器時代生活面の撹乱によって表面採集されたものと考えられるが，生活面をもつ文化層は確認されていない。

縄文時代

前期後半の浮島Ⅰ式，中期後葉の加曽利ＥⅠ式，加曽利ＥⅢ式，後期中葉の加曽利ＢⅠ式に比定される縄文土器片が表面採集されている。遺構としては，詳細な時期は不明である8基の陥し穴が，調査区の中央部から北部を中心に散在して構築されている。これらは，乙戸川から深く入り込む谷津の低地及び湿地等に集まる動物の捕殺及び捕獲等を目的としたものと考えられる。

古墳時代

当遺跡の中心となる時期で，竪穴住居跡，竪穴遺構及び土坑を確認した。竪穴住居跡31軒が当該期に属する。当遺跡の集落は，遺構の分布図から2つの形態を持った集落群として捉えられる。一つは，中央の空間地域を住居跡群が取り囲むように配置され，一つの集落を形成しているとするみかたと，もう一つは，$E5_{i4}$区の第17号住居跡を含めた調査区南部に広がる集落と，$D5_{h6}$区の第20号住居跡を含む調査区北部に広がる集落群とに分けて捉えるみかたであり，その集落群からは，その集落の中でも特殊な立場に位置していると思われる住居跡（第2号，12号）を各1軒ずつ確認している。また，第36号住居跡は坏に高坏を伏せ，その中からアカニシが出土している祭祀行為との強い関係が考えられる遺構である。時期的に3期に分けることができる。

第1期（5世紀前半）

第1，2，12号住居跡の時期である。第1号住居跡は一辺が2m台の規模で，炉以外の内部施設を持たず，第2号住居跡は一辺が5m台の中規模住居跡で，付設する施設は壁溝，間仕切り溝，主柱穴，貯蔵穴及び出入口ピットを備えている。出土遺物は土師器の坏，椀，坩，甕及び甑である。坏は平底と丸底がみられ，体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に弱い稜を持つ。整形はヘラナデ，ヘラ磨きがみられる。すべて赤彩されている。椀は平底で，整形は体部外面に刷毛目擦り消痕を残している。坩は平底と丸底がみられ，体部は潰れた球形状やソロバン玉状を呈している。整形はヘラ削り後ナデが施されている。甕は平底とやや突出した平底がみられ，体部は内彎しながら立ち上がり，体部中位から上位に最大径を持つ。整形は外面に刷毛目整形が施されている。第1号住居跡から出土している甑は，体部外面に刷毛目擦り消痕がみられる。当遺跡では，第1号住

居跡のように小規模で内部施設をもたない建物跡が７軒確認されているが，これらは使用効率から倉庫的な利用がなされていたものと考えられる。第１号住居跡も第２号住居跡と関連した建物跡としてセットで考えることができる。

第２期（５世紀後半）

第３～14，16～18，19～21，23～34，36，43号住居跡，第37，81号土坑の時期である。規模と付設する施設に特定の企画性がみられない。出土遺物は土師器の坏，椀，高坏，坩，甕及び甑，須恵器の把手付き椀及び坏蓋である。坏は平底と丸底がみられ，体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部外面に弱い稜を持つ。整形はヘラナデ，内面ヘラ磨きもみられる。50％以上が赤彩されている。椀は平底で，体部内面に稜を持ち，折り返しのある複合口縁もみられる。整形はヘラナデ，内面ヘラ磨きが施され，約半数は赤彩されている。高坏は脚部が柱状を呈し，裾部は下方に「ハ」の字状に開き，坏部下位に張り出しのある段を有するものがみられる。整形はヘラナデ，ヘラ磨きが施されている。甕は平底とやや突出した平底で，体部は球形状をしている。口縁部に複合口縁もみられる。甑は平底気味のものと無定式のものがあり，単孔を穿つ。第31号住居跡出土の須恵器把手付き椀はＴＫ216からＴＫ206に併行する時期のものと考えられる。

第３期（５世紀後期後葉）

第15号住居跡の時期である。時期的には５世紀後半に入らない段階と考える。出土遺物は土師器の坏，椀，小形甕及び甕である。このうち，坏と椀は平底で，坏の体部外面及び内面にヘラナデあるいはヘラ削り後ヘラ磨きが施され，体部と口縁部の境に弱い稜がみられる。小形甕は，平底で体部は球形状を呈する。

平安時代（９世紀前半）

第35号住居跡の時期である。本跡の竈内から須恵器の坏が出土している。

参考文献

○樫村宣行「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート２号』茨城県教育財団　1993年７月

○浅井哲也「茨城県内における奈良・平安時代の土器（II）」『研究ノート２号』　茨城県教育財団　1993年７月

○茨城県教育財団「牛久市北部特定区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ｉ）ヤツノ上遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第81集』1993年３月

○茨城県教育財団「牛久市北部特定区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（II）中久喜遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第86集』1993年９月

○茨城県教育財団「（仮称）上高津団地建設事業地内埋蔵文化財調査報告書　寄居遺跡・うぐいす平遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第84集』1994年３月

付　章

西ノ原遺跡・隼人山遺跡自然科学分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

Ⅰ．はじめに

茨城県南部に広がる常陸台地は，霞ヶ浦や北浦を含むいくつかの谷によって開析され，東茨城・鹿島・行方・新治・稲敷などの台地にわかれている。

今回の自然科学分析調査は，常陸台地南部の稲敷台地上に立地する西ノ原遺跡・隼人山遺跡を対象として行う。西ノ原遺跡ではローム層序の対比を，隼人山遺跡では住居構築材の選択についての検討を行う。

Ⅱ．西ノ原遺跡のローム層序

茨城県南部に広がる常陸台地は，霞ヶ浦や北浦を含むいくつかの谷によって開析され，東茨城・鹿島・行方・新治・稲敷などの台地にわかれている。これらの台地の地形・地質は坂本（1986）により以下のように記載されている。常陸台地は下総台地に対比される段丘で，その構成層は後期更新世の海成層である見和層である。見和層は最終間氷期の下末吉海進に伴って堆積したものである。その上位に堆積する茨城粘土層は，下総台地をはじめとする関東平野中南部の台地に広く認められる常総粘土層に対比される。常総粘土層は，菊地（1981）によれば約4万9千年前に噴出した（町田・鈴木，1971）箱根―東京軽石の降灰直前まで堆積したとされる。さらに，その上位には褐色火山灰土層（いわゆるローム層）が認められる。

常陸台地の南部に位置する稲敷台地は，北を桜川に南と西を小貝川の低地に東を霞ヶ浦により限られている。南部では，台地は花室川や小野川とその支流の乙戸川や桂川などにより開析が進んでいる。

西ノ原遺跡は，この稲敷台地の中央部の乙戸川と小野川に挟まれた台地上に位置する。

今回の発掘調査により，旧石器時代，古墳時代の遺構・遺物が検出されている。とくに古墳時代中期から後期までは，集落が形成されていたと考えられている。

今回の自然科学分析調査では，本遺跡のローム層の層序対比を行うために火山ガラス比分析および重鉱物分析を行う。火山ガラス比分析では，ローム層中に混交する指標テフラ由来の細粒の火山ガラス産状を調べることにより，降灰層準を推定する。重鉱物分析では，ローム層中の重鉱物組織を調べ，その層位的変化を指標として対比に用いる。本分析法は，武蔵野台地の立川ローム層で対比資料が比較的多く蓄積されているためとくに有効な手段となっている。本遺跡周辺では分析例は少ないが，武蔵野台地や栃木県～茨城県北部のローム層との対比を行いたい。

1．試料

テストピットの土層断面は上位より1層～12層に分層されている。1層・2層は明褐色ローム層，3層～7層は褐色ローム層，8層はにぶい褐色ローム層，9層～12層はにぶい橙色ローム層とされている。ローム層の最上部に認められることが多いソフトローム層は，本地点で認められない。

試料は1層～12層まで上位より試料番号1～45が採取されている。この中から本地域のローム層上部の指標テフラである立川ローム層最上部ガラス質火山灰（UG：山崎，1978）や姶良Tn火山灰（AT：町田・新井，1976）が検出されると考えられる試料番号1～16の計16点の試料番号を選択する。同一試料を二分して，両分析に用いた。以上の1層～3層までの柱状図と試料の採取位置を図1に示す。

2．分析方法

（1）重鉱物分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散，250メッシュの分析篩を用いて水洗し，粒径1/16㎜以下の粒子を除去する。乾燥の後，篩別し，得られた粒径1/4㎜―1/8㎜の砂分をポリタングステート（比重約2.96に調整）により重液分離，重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際，不透明な粒については，斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は，「その他」とする。

（2）火山ガラス比分析

重鉱物分析の処理により得られた軽鉱物分を偏光顕微鏡下にて観察，火山ガラスとそれ以外の砕屑物を250粒を計数し，砕屑物中における火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは，便宜上軽鉱物にいれ，その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は，バブル型は薄手平板状，中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり，軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

3．結果

結果を表1・図1に示す。

（1）重鉱物分析

カンラン石は試料番号2・7に量比の極大層準が，試料番号3・12に極小層準が認められる。

斜方輝石と単斜輝石はカンラン石とほぼ逆の傾向を示す。試料番号3に量比の極大層準が認められるが，他の量比の極大および極小層準はやや不明瞭である。角閃石は下部の試料番号8～16で微量認められる。

（2）火山ガラス比分析

試料番号1～6ではバブル型火山ガラスが比較的多く認められる。下位より見て，試料番号7から6で急増，試料番号6から4で大きな増減はほとんどなく，試料番号4から3で増加，試料番号3と2でほぼ量比は変わらず，試料番号2から1で減少する。この火山ガラスは，その形態と色調および産出層準からATに由来すると考えられる。ATは，鹿児島県の姶良カルデラを給源とし，降灰年代は約2.1～2.5万年前と考えられている（町田・新井，1992）。一般に，土壌中に特定のテフラが混合して産出する場合，テフラ最濃集部の下限が降灰層準に一致する場合が多い（早津，1988）。これに従えば，本地点のATの降灰層準は試料番号6の2層最上部付近と考えられる。

表1　西ノ原遺跡重鉱物および火山ガラス比分析結果

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山灰ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
1	45	124	23	3	27	28	250	109	2	3	136	250
2	62	123	22	1	19	23	250	132	0	5	113	250
3	44	142	22	1	23	18	250	132	0	4	114	250
4	51	133	16	0	27	23	250	79	0	1	170	250
5	83	115	18	1	15	18	250	88	0	0	162	250
6	97	99	10	0	8	36	250	78	0	2	170	250
7	133	75	7	2	10	23	250	10	1	2	237	250
8	125	71	10	4	4	36	250	9	1	2	238	250
9	122	70	10	7	5	36	250	1	1	5	243	250
10	119	85	11	3	10	22	250	0	1	2	247	250
11	122	77	14	7	3	27	250	0	0	2	248	250
12	111	90	8	9	11	21	250	0	1	3	246	250
13	120	75	11	12	6	26	250	1	0	0	249	250
14	145	66	8	9	4	18	250	0	1	0	249	250
15	147	65	4	2	7	25	250	0	2	1	247	250
16	151	61	2	6	8	22	250	0	0	1	249	250

4．考察

本地域のローム層上部の指標テフラには，UGやATなどがある。UGは，浅間火山の軽石流期のテフラの細粒部であると考えられており，その降灰年代は約1.2万年前とされている（町田・新井，1992）。武蔵野台地の立

川ローム層の標準層序におけるIII層上部が降灰層準と考えられており，南関東地方に広く分布する。一方，当社によるこれまでの分析例により，UGによく類似するテフラが栃木県～茨城県北部に広く分布することが認められており，その降灰層準もローム層の最上部にある場合が多い。UGやUGに類似するテフラの由来と考えられている浅間軽石流期のテフラには，浅間板鼻黄色テフラ（As—YP）やAs—YPと同一噴火輪廻のテフラと考えられている浅間草津テフラ（As—K）などがある（町田•新井，1992）。As—YPの分布主軸は東南東で，主に群馬県南部に分布し，その降灰年代は約1.3～1.4万年前と考えられている（町田・新井，1992）。As—Kの分布主軸は北東で，主に群馬県北西部から新潟県南部に分布する（町田・新井，1992）。さらに，As—K（引用文献中ではAs—YPk）に対比されるテフラは，東北地方南部から中部でも認められている（小岩・早田，1994）。UGまたはUGに類似するテフラは，いずれにしてもこれらの浅間火山のテフラに由来すると考えられる。今回の分析結果ではUGの降灰層準が認められなかったために，その降灰層準は1層よりさらに上位である。したがって，本地点では，ローム層の最上部が削剝を受けていると考えられる。

ATの降灰層準は，武蔵野台地の立川ローム層の標準層序では第二暗色帯（BBII）のVII層上限付近にある場合が多い。また，栃木県～茨城県北部では，ATの降灰層準は田原ローム層と宝木ローム層の境界層の暗色帯の上部（町田・新井，1976）におかれている。今回の分析結果から，2層最上部付近武蔵野台地の立川ローム層の標準層序におけるVII層上限に対比される。また，栃木県～茨城県北部のローム層との対比では，2層最上部付近が宝木ローム層の最上部に対比される。

重鉱物組織上の指標には，武蔵野台地の立川ローム層の第一暗色帯（BBI）のV層上限付近の輝石の極大がある。（小林ほか，1971など）また，詳細な対比ではないが，V層で輝石の量比が高いことも認められている。今回の分析結果のATの産状を考慮すると，立川ローム層の第一暗色帯（BBI）のV層上限付近の輝石の極大は試料番号1以上の可能性が高い。また，下位では当社の分析例により，ATの降灰層準（VII層上限）のやや下位のカンラン石の極大層準が指標として認められている。今回の分析結果から，試料番号7の2層上部のカン

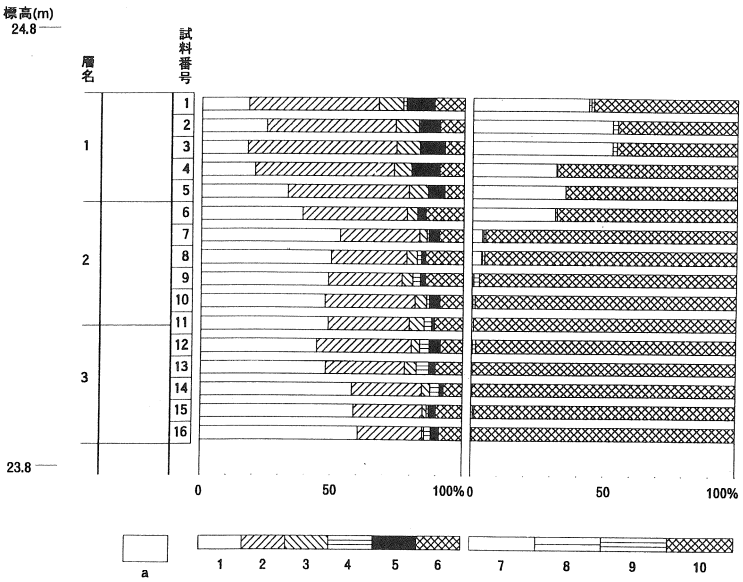


図1　西ノ原遺跡柱状図・試料採取位置および重鉱物組成・火山ガラス比

a：ローム。
1：カンラン石。2：斜方輝石。3：単斜輝石。
4：角閃石。5：不透明鉱物。6：その他。
7：バブル型火山ガラス。8：中間型火山ガラス。
9：軽石型火山ガラス。10：その他。

ラン石の極大層準がこれにあたる。

角閃石は栃木県～茨城県北部の分析例では，宝木ローム層の上部（暗色帯上部）付近すなわちATの降灰層準付近において下位に向かって増加することが認められている。この角閃石は，宝木ローム層の中部に降灰層準がある赤城鹿沼軽石（Ag—KP：新井，1962）に由来すると考えられる。Ag—KPは赤城火山を給源とし，降灰年代は約3.1～3.2万年前と考えられている（町田・新井，1992）。本遺跡の角閃石の産状は，栃木県～茨城県北部の宝木ローム層とやや類似する。

以上のように，本遺跡のローム層の重鉱物組成には，栃木県～茨城県北部のローム層の重鉱物組成と南関東のローム層の重鉱物組成の両方の特徴が認められている。

層序対比をまとめると，１層中部～下部が立川ローム層の標準層序におけるⅥ層，２層以下が同じくⅦ層以下に対比される。また，栃木県～茨城県北部のローム層との対比では１層以上が田原ローム層，２層以下が宝木ローム層に対比される。

ローム層（ここではいわゆる関東ローム層のような細粒の火山砕屑物を母材とする土壌をさすものとして用いる）の成因については，従来は小噴火による降下火山灰の累積したもの（たとえば町田（1964）など）とする説が主に支持されてきた。これに対して，いったん堆積した火山灰が風によって移動させられて累積したものとする説も主張されるようになっている。この説は，中村（1970）により提示され，早川（1986），早川・由井（1989），早川（1990），早川（1995）などにおいて，火山学および火山灰編年学上の種々の観察事実を根拠として述べられている。この説に従えば，ローム層も黒ボク土層も火山の噴火とは関係なく常に降りつもる風塵によって形成されたことになる。また，最近では鈴木（1995）により，過去５万年間に堆積した火山灰土が層厚１mを上回る地域では，ローム層は広域テフラや小規模な噴火によりテフラが一次的に累積したものといったん降灰したテフラが二次堆積したものが混在するが，地域によりその構成物の割合は変化すると述べられている。いずれにしても，風成の火山噴出物に由来する砕屑物が二次堆積を繰り返し，さらに土壌生成作用を受けながら少しずつ累積し，ローム層が形成されていると考えられる。本分析結果におけるATの産状はそのことをよく表している。

また，ローム層の鉱物組成にはおもに周辺の火山噴出物の鉱物組成が反映されており，それは同じ地域，同じ時期では類似すると考えられる。したがって，同じ地域において鉱物組成の層位的変化を調べることにより，対比の指標が導き出され，今回のように層序対比が可能となっている。

〈引用文献〉

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，４，p.１-79.

早川由起夫（1986）火山灰土の成因と堆積速度．1986年度春季大会日本火山学会講演予稿集，p.34.

早川由起夫（1990）堆積物から知る過去の火山噴火．火山第２集，34，火山学の基礎研究特集号，p.S121-S130.

早川由起夫（1995）日本に広く分布するローム層の特徴とその成因．火山，40，p.177-190.

早川由起夫・由井将雄（1989）草津白根火山の噴火史．第四紀研究，28，p.１-17.

早津賢治（1988）テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロノロジー—ATにまつわる議論に関係して—．考古学研究，34，p.18-32.

菊地隆男（1981）常総粘土総の堆積環境．地質学論集，20，p.129-145.

小林達夫・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男（1971）野川先土器時代遺跡の研究．第四紀研究，10，p.231-252.

小岩直人・早田　勉（1994）東北地方中南部に分布する更新世紀末期のガラス質テフラ．地学雑誌，103，p.68-76.

町田　洋（1964）Tephrochronologyによる富士火山とその周辺地域の発達史―第四紀末期について―（その1）（その2）．地学雑誌，73，p.293-308，337-350.

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰―姶良Tn火山灰の発見とその意義―．科学，46，p.339-347.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．276p.，東京大学出版会.

町田　洋・鈴木正男（1971）火山灰の絶対年代と第四紀後期の編年―フィッション・トラック法による試み―．科学，41，p.263-270.

中村一明（1970）ローム層の堆積と噴火活動．軽石学雑誌，3，p.1－7.

坂本　亨（1986）3.4関東平野北部の更新統（9）常陸台地．「日本の地質3　関東地方」．p.189-190，共立出版.

鈴木毅彦（1995）いわゆる火山灰土（ローム）の成因に関する一考察　―中部―関東に分布する火山灰土の層厚分布―．火山，40，p.167-176.

山崎晴雄（1978）立川断層とその第四紀後期の運動．第四紀研究，16，p.231-246.

III．隼人山遺跡の住居構築材

隼人山遺跡は，稲敷台地の中央部の乙戸川と小野川に挟まれた台地上に位置する。今回の発掘調査により，古墳時代中期および平安時代の遺構・遺物が検出されている。とくに古墳時代中期には，集落が形成されていたと考えられている。今回の自然科学分析調査では，古墳時代中期の住居構築材の選択について検討を行うために，住居跡から出土した炭化材の樹種同定を行う。

1．試料

試料は，古墳時代の竪穴住居跡（SI 4，8，27）から出土した炭化材3点（試料番号168,197,582）である。各試料の詳細については，樹種同定結果と共に表3に記した。

2．分析方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し，実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し，種類を同定する。

3．結果

結果を表2に示す。試料はいずれもコナラ属コナラ亜属クヌギ節に同定された。解剖学的特徴などを以下に記す。

表２　隼人山遺跡炭化材の樹種

番号	出土遺構・出土位置・試料名	時代・時期	用途など	樹　　種
168	SI８　壁ぎわ　炭化材	古墳時代中期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
197	SI４　貯蔵穴　炭化材No.11	古墳時代中期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
582	SI27　遺構内　炭化材	古墳時代中期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

●コナラ属コナラ亜属クヌギ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris sp.）　　ブナ科

環孔材で孔圏部は１～３列，孔圏外で急激に管径を減じたのち，漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

４．考察

住居跡から出土した炭化材は，いずれもクヌギ節であった。これらの炭化材のうち，SI８とSI27が住居構築材と考えられる。SI４から出土した炭化材は，構築材が周辺の土壌とともに貯蔵穴内に流入した可能性もあるが，出土状況や性格について詳細は不明である。

牛久市では，これまでにもヤツノ上遺跡や中久喜遺跡で古墳時代の構築材について樹種同定が行われており，クヌギ節・コナラ節が多数確認されている（未公表資料）。同様の例は，水海道市や岩井市でも確認されており（パリノ・サーヴェイ株式会社，1986a，1986b；未公表資料），本地域でクヌギ節・コナラ節の木材が構築材として広く利用されていることがうかがえる。

住居構築材は，これまでの調査結果から遺跡周辺で構築材としての条件（強度・長さ・径・形状などと考えられる）を満たす木材を選択・利用したと考えられている（高橋・植木，1994）。太平洋岸の日立市諏訪遺跡や水戸市白石遺跡でアカガシ亜属などが確認された結果（嶋倉，1980；未公表資料）は，太平洋岸と内陸部で植生が異なっていたことを反映したと考えられている。（高橋・植木，1994）。今回の結果から，本遺跡では古墳時代の住居構築材を遺跡周辺のクヌギ節・コナラ節を中心とする落葉広葉樹林から得ていたことが推定される。

SI４の炭化材は住居構築材に由来するのかは不明であった。樹種は他の住居跡と全く同じであり，貯蔵穴の埋設に伴い住居構築材が流入したとしても矛盾はない。

〈引用文献〉

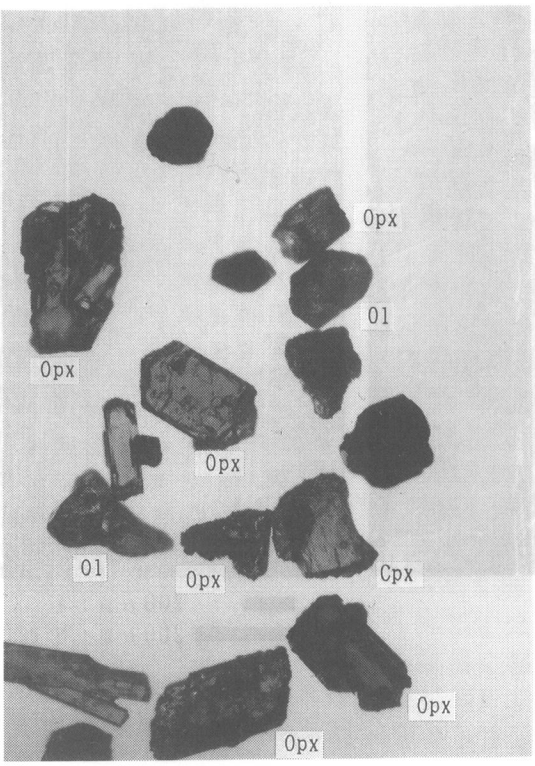
パリノ・サーヴェイ株式会社（1986a）奥山A遺跡出土試料　炭化材同定報告，茨城県教育財団文化財調査報告第31集「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告２　奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡」，p.239-240，財団法人茨城県教育財団．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1986b）西原遺跡出土試料種子及び材同定報告．茨城県教育財団文化財調査報告第31集「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告２　奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡」，p.241-243，財団法人茨城県教育財団．

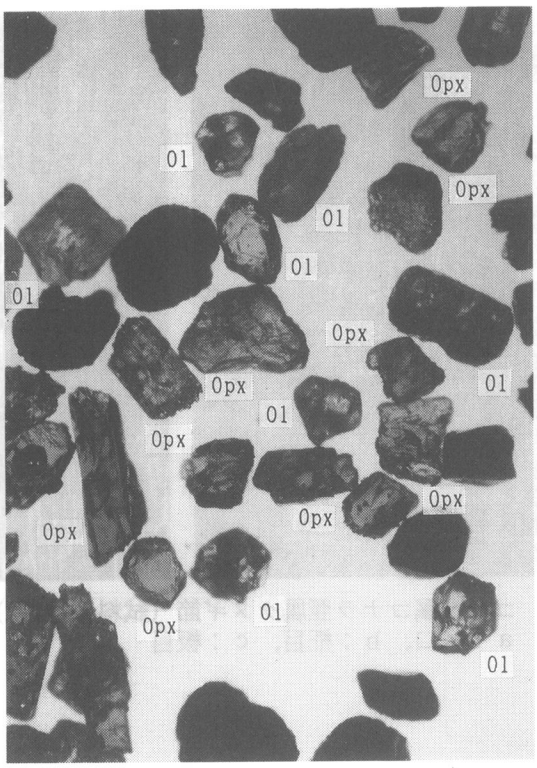
嶋倉巳三郎（1980）日立市諏訪遺跡出土木炭の樹種について．「諏訪遺跡発掘調査報告書」，P.188，日立市教育委員会．

高橋　敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択，PALYNO，２，P.５－18．

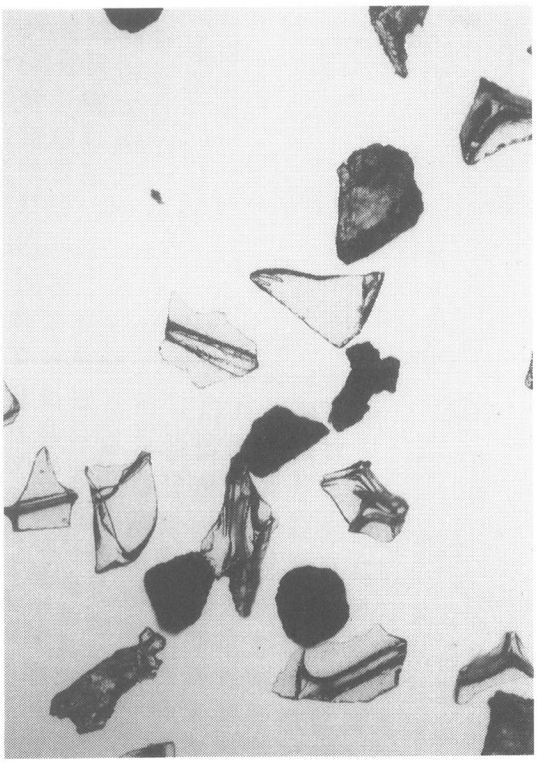
図版　西ノ原遺跡重鉱物および火山ガラス



1．重鉱物（試料番号３）



2．重鉱物（試料番号７）

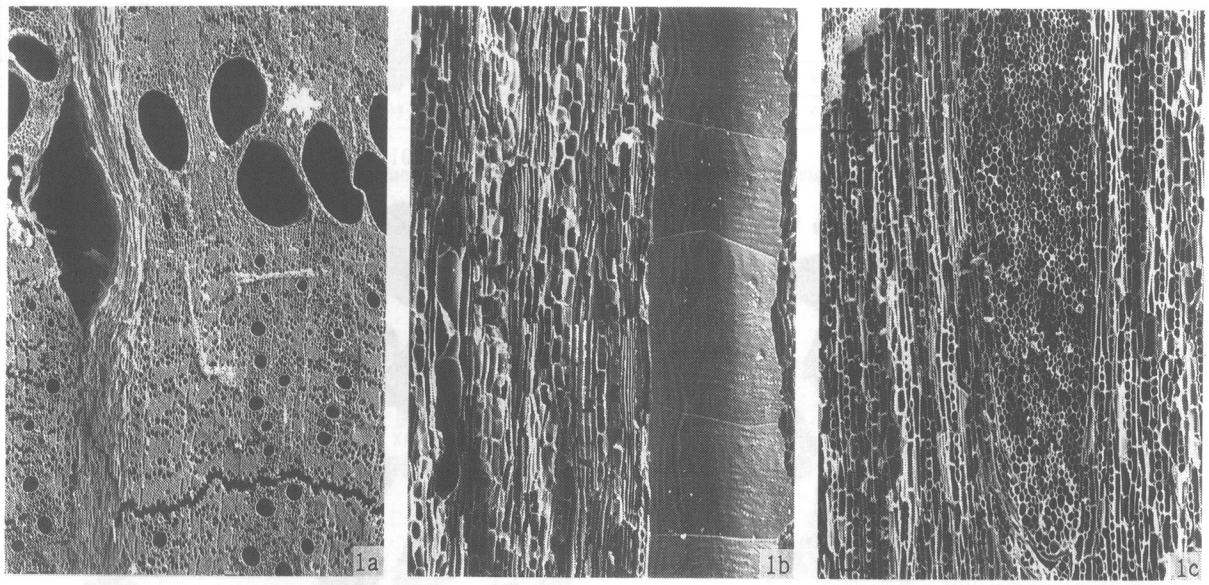


3．ＡＴ火山ガラス（試料番号２）

01：カンラン石　Opx：斜方輝石　Cpx：単斜輝石

0.5mm

図版　隼人山遺跡炭化材



1．コナラ属コナラ亜属クヌギ節（試料番号197）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c